九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

香田遺跡

1981年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第57集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

香　田　遺　跡

１９８１年３月

佐賀県教育委員会

香田遺跡

香田遺跡
獅々喰遺跡
白虎谷遺跡
寺ケ里遺跡
戦場遺跡
藤附A遺跡
藤附K遺跡
藤附E遺跡
三郎山遺跡
長尾遺跡

序

この報告書は,佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて,昭和51年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は,昭和52年度から昭和54年度までに発掘調査を実施した三養基郡中原町所在の香田遺跡・獅々喰遺跡・白虎谷遺跡,神埼郡東脊振村所在の寺ケ里遺跡・戦場遺跡,佐賀市所在の藤附遺跡群・三郎山遺跡・長尾遺跡のもので「九州横断高速自動車道関係埋蔵文化財調査報告1.」に続くものであります。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが,本報告書を通して埋蔵文化財保護の啓蒙,認識と理解の一助となれば幸いと思います。

なお,発刊にあたり,調査に対して御協力いただきました地元の方々をはじめ,関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和56年3月

佐賀県教育委員会

教育長 古藤　浩

例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設に伴う事前調査のうち，昭和52年度から昭和54年度にかけて発掘調査した三養基郡中原町所在の香田遺跡・獅々喰遺跡・白虎谷遺跡，神埼郡東脊振村所在の寺ケ里遺跡・戦場遺跡（神埼町にまたがる），佐賀市久保泉町所在の藤附A遺跡・藤附K遺跡・藤附E遺跡，佐賀市金立町所在の三郎山遺跡・長尾遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団の委託事業として佐賀県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたっては，佐賀市，東脊振村，中原町の各教育委員会，及び地元の方々の助力を得た。

4．本書の執筆者は次のとおりである。

Ⅰ　調査の概要 …… 杠　一義　各執筆者

Ⅱ　遺　跡

香田遺跡　1．遺跡の概要 …… 高瀬　哲郎

2．遺　構 (1) 縄文時代 …… 久保　伸洋

(2) 古墳時代 …… 高瀬　哲郎・久保　伸洋・堤　安信

(3) 歴史時代 …… 堤　安信

3．遺　物 (1) 縄文時代 …… 久保　伸洋

(2) 弥生時代 …… 久保　伸洋

(3) 古墳時代 …… 高瀬　哲郎・堤　安信

(4) 歴史時代 …… 堤　安信

4．小　結 …… 高瀬　哲郎

獅々喰遺跡　1．遺跡の概要 …… 久保　伸洋

2．遺　構 …… 高瀬　哲郎

3．遺　物 (1) 縄文時代 …… 久保　伸洋

(2) 古墳時代 …… 久保　伸洋

4．小　結 …… 久保　伸洋

白虎谷遺跡 …… 高瀬　哲郎

寺ケ里遺跡 …… 堤　安信

戦場遺跡 …… 堤　安信

藤附A遺跡 …… 杠　一義

藤附K遺跡 …… 杠　一義
藤附E遺跡 …… 杠　一義
三郎山遺跡 …… 1．遺跡の概要 …… 中牟田賢治・福田　義彦
2．遺　構 (1) 古墳時代 …… 福田　義彦・中牟田賢治
(2) 歴史時代 …… 福田　義彦・中牟田賢治
3．遺　物 (1) 縄文時代 …… 中牟田賢治・蒲原　宏行
(2) 古墳時代 …… 中牟田賢治・蒲原　宏行
4．小　結 …… 中牟田賢治・福田　義彦
長尾遺跡 …… 立石　泰久

5．遺構の実測は調査員が行い，遺物の実測は三郎山遺跡を中牟田賢治，その他を文化財資料室の古賀啓子・西村信子・馬場悦子・友清淑子・野口百合子・松崎恭子・山本タカ子・島孝子藤原倫子・野口悦子・池田覚子・中島成子・中村真由美・大島もと子などが行った。製図は各執筆者・本田京子・山本タカ子・野口悦子・山崎美紀子・徳永千代美・藤原倫子が行った。なお，一部実測，製図には松尾吉高・種浦修，その他多くの方々の協力を得た。

復元作業は，文化財資料室の広滝敏子・古川万鶴代・高畠澄子・宮崎礼子・新井久美・山崎美紀子・平野澄子・熊本富美子・緒方泰子及び金立発掘調査事務所の土井マサ子・平井智子・大家リウ子・室岡勝代・内山テル子，東脊振発掘調査事務所の村瀬邦子・森木千恵子・藤野和子・田中ハルミ・野田美恵子・嬉野みつ代が行った。

遺構写真撮影は各調査員が，遺物写真撮影は三郎山遺跡を中牟田賢治，その他を杠一義が行った。また一部遺物は西田和己・川崎吉剛の撮影による。なお写真の現像，焼付は原口定・古賀栄子が行ったものである。

6．本書の作成，編集は杠一義が行った。なお，本文割付けを高瀬久美子，図版割付けを古賀啓子の協力を得た。

凡　例

1．遺構については各遺跡ごとに一連番号を付し，その前にSB：建物・住居跡，SC：石棺墓，SD：溝，SJ：甕棺墓，SK：土壙・穴，SP：土壙墓，ST：古墳，SX：その他の遺構の分類記号を標記する。

2．遺構の寸法数字はm単位，遺物の寸法数字はcm単位を原則とした。

3．実測図基準は国土座標にする。

目　　次

Ⅰ 調 査 の 概 要 …… 1
1．調査に至る経過 …… 3
2．調査組織 …… 4
3．調査日誌 …… 5
Ⅱ 遺　跡 …… 13
香 田 遺 跡 …… 15
1．遺跡の概要 …… 16
2．遺　構 …… 22
(1) 縄 文 時 代 …… 22
(2) 古 墳 時 代 …… 29
(3) 歴 史 時 代 …… 37
3．遺　物 …… 41
(1) 縄 文 時 代 …… 41
(2) 弥 生 時 代 …… 65
(3) 古 墳 時 代 …… 67
(4) 歴 史 時 代 …… 86
4．小　結 …… 90
獅々喰遺跡 …… 93
1．遺跡の概要 …… 94
2．遺　構 …… 95
3．遺　物 …… 97
(1) 縄 文 時 代 …… 97
(2) 古 墳 時 代 …… 97
4．小　結 …… 104
白虎谷遺跡 …… 105
1．遺跡の概要 …… 106
2．遺　構 …… 107
3．遺　物 …… 109
4．小　結 …… 110
寺ケ里遺跡 …… 111
1．遺跡の概要 …… 112
2．遺　構 …… 114
3．遺　物 …… 119
(1) 縄 文 時 代 …… 120
(2) 弥 生 時 代 …… 121
(3) 古 墳 時 代 …… 122
4．小　結 …… 123
戦 場 遺 跡 …… 125
1．遺跡の概要 …… 126

2．遺　　構 …… 127
3．遺　　物 …… 128
(1) 縄文時代 …… 128
(2) 歴史時代 …… 130
4．小　　結 …… 130
藤附A遺跡 …… 131
1．遺跡の概要 …… 132
2．遺　　構 …… 140
(1) 縄文時代 …… 140
(2) 古墳時代 …… 140
(3) 歴史時代 …… 151
3．遺　　物 …… 162
(1) 縄文時代 …… 162
(2) 弥生時代 …… 168
(3) 古墳時代 …… 169
(4) 歴史時代 …… 190
4．小　　結 …… 196
藤附K遺跡 …… 199
1．遺跡の概要 …… 200
2．遺　　構 …… 201
3．遺　　物 …… 203
(1) 縄文時代 …… 203
(2) 弥生時代 …… 203
(3) 古墳時代 …… 205
(4) 歴史時代 …… 212
4．小　　結 …… 215
藤附E遺跡 …… 217
1．遺跡の概要 …… 218
2．遺　　構 …… 220
3．小　　結 …… 223
三郎山遺跡 …… 225
1．遺跡の概要 …… 226
2．遺　　構 …… 230
(1) 古墳時代 …… 230
(2) 歴史時代 …… 241
3．遺　　物 …… 242
(1) 縄文時代 …… 242
(2) 古墳時代 …… 244
4．小　　結 …… 250
長尾遺跡 …… 257
1．遺跡の概要 …… 258
2．遺　　構 …… 260
3．遺　　物 …… 260
4．小　　結 …… 270

挿 図 目 次

Fig. 1 中原町地区遺跡分布図 …… 17
〃 2 香田遺跡A地区2区遺構配置図 …… 18
〃 3 香田遺跡A地区3区A地区4区遺構配置図 …… 19
〃 4 香田遺跡B地区1区遺構配置図 …… 20
〃 5 香田遺跡S X010支石墓実測図 (1) …… 26
〃 6 香田遺跡S X010支石墓実測図 (2) …… 27
〃 7 香田遺跡S X010支石墓上石出土状況実測図 …… 28
〃 8 香田遺跡S J011壺棺墓実測図 …… 28
〃 9 香田遺跡S C013石棺墓実測図 …… 29
〃 10 香田遺跡S P014土壙墓実測図 …… 30
〃 11 香田遺跡S T015古墳墳丘実測図 …… 31
〃 12 香田遺跡S T016古墳石室実測図 …… 32
〃 13 香田遺跡S T017古墳墳丘実測図 …… 33
〃 14 香田遺跡S T018古墳墳丘実測図 …… 34
〃 15 香田遺跡S T018古墳周溝土層図 …… 34
〃 16 香田遺跡S T019古墳石室実測図 …… 35
〃 17 香田遺跡S B020住居跡実測図 …… 37
〃 18 香田遺跡S B021・S B022住居跡実測図 …… 38
〃 19 香田遺跡S B023掘立柱建物跡実測図 …… 39
〃 20 香田遺跡S K024土壙実測図 …… 39
〃 21 香田遺跡S K025土壙実測図 …… 40
〃 22 香田遺跡S X026集石遺構実測図 …… 40
〃 23 香田遺跡出土縄文土器実測図 (1) …… 42
〃 24 香田遺跡出土縄文土器実測図 (2) …… 43
〃 25 香田遺跡出土縄文土器実測図 (3) …… 45
〃 26 香田遺跡出土縄文土器実測図 (4) …… 46
〃 27 香田遺跡出土縄文土器実測図 (5) …… 47
〃 28 香田遺跡出土縄文土器実測図 (6) …… 48
〃 29 香田遺跡出土石器実測図 (1) …… 49
〃 30 香田遺跡出土石器実測図 (2) …… 50
〃 31 香田遺跡出土石器実測図 (3) …… 51
〃 32 香田遺跡出土石器実測図 (4) …… 53
〃 33 香田遺跡出土土製品実測図 …… 55
〃 34 香田遺跡出土弥生土器実測図 …… 65
〃 35 香田遺跡出土土師器実測図 (1) …… 68

Fig. 36 香田遺跡出土土師器実測図 (2) …… 69
〃 37 香田遺跡出土土師器実測図 (3) …… 70
〃 38 香田遺跡出土須恵器実測図 (1) …… 73
〃 39 香田遺跡出土須恵器実測図 (2) …… 75
〃 40 香田遺跡出土須恵器実測図 (3) …… 77
〃 41 香田遺跡出土須恵器ヘラ記号拓影 …… 79
〃 42 香田遺跡出土鉄器実測図 …… 81
〃 43 香田遺跡出土装身具実測図 …… 82
〃 44 香田遺跡出土歴史時代土器実測図 (1) …… 86
〃 45 香田遺跡出土歴史時代土器実測図 (2) …… 87
〃 46 鄒々喰遺跡遺構配置図 …… 94
〃 47 鄒々喰遺跡ＳＴ001古墳周溝土層図 …… 95
〃 48 鄒々喰遺跡ＳＴ001古墳石室実測図 …… 96
〃 49 鄒々喰遺跡出土石器実測図 …… 97
〃 50 鄒々喰遺跡出土縄文土器実測図 …… 98
〃 51 鄒々喰遺跡出土須恵器実測図 …… 100
〃 52 鄒々喰遺跡出土土師器実測図 …… 101
〃 53 白虎谷遺跡遺構配置図 …… 106
〃 54 白虎谷遺跡ＳＴ001古墳石室実測図 …… 108
〃 55 白虎谷遺跡出土遺物実測図 …… 109
〃 56 東脊振村地区遺跡分布図 …… 113
〃 57 寺ケ里遺跡遺構配置図 …… 114
〃 58 寺ケ里遺跡ＳＴ001古墳実測図 …… 115
〃 59 寺ケ里遺跡ＳＴ001古墳石室実測図 …… 116
〃 60 寺ケ里遺跡ＳＴ001古墳両袖外石積実測図 …… 117
〃 61 寺ケ里遺跡ＳＴ001古墳墳丘土層図 …… 118
〃 62 寺ケ里遺跡出土縄文土器実測図 …… 119
〃 63 寺ケ里遺跡出土石器実測図 …… 120
〃 64 寺ケ里遺跡出土須恵器・土師器実測図 …… 121
〃 65 戦場遺跡遺構配置図 …… 126
〃 66 戦場遺跡ＳＫ001土壙土層図 …… 127
〃 67 戦場遺跡出土縄文土器実測図 …… 128
〃 68 戦場遺跡出土石器実測図 …… 129
〃 69 戦場遺跡ＳＤ004溝出土土器実測図 …… 130
〃 70 佐賀市地区遺跡分布図 …… 133
〃 71 藤附Ａ遺跡Ａ地区遺構配置図 …… 134
〃 72 藤附Ａ遺跡Ｇ地区遺構配置図 …… 135
〃 73 藤附Ａ遺跡Ｄ地区遺構配置図 …… 136
〃 74 藤附Ａ遺跡Ｉ地区遺構配置図 …… 137
〃 75 藤附Ａ遺跡ＳＫ001土壙実測図 …… 140

Fig. 76 藤附A遺跡J地区遺構配置図 …… 141
〃 77 藤附A遺跡S T002古墳石室実測図 …… 142
〃 78 藤附A遺跡H地区遺構配置図 …… 143
〃 79 藤附A遺跡S T005古墳墳丘実測図 …… 144
〃 80 藤附A遺跡S T005古墳石室実測図 …… 145
〃 81 藤附A遺跡S T006古墳墳丘実測図 …… 146
〃 82 藤附A遺跡S T007古墳遺物実測図 …… 146
〃 83 藤附A遺跡S T008古墳墳丘実測図 …… 148
〃 84 藤附A遺跡S T008古墳墳丘土層図 …… 148
〃 85 藤附A遺跡S T008古墳石室実測図 …… 150
〃 86 藤附A遺跡S B009掘立柱建物跡実測図 …… 151
〃 87 藤附A遺跡S B010掘立柱建物跡実測図 …… 152
〃 88 藤附A遺跡S B011掘立柱建物跡実測図 …… 153
〃 89 藤附A遺跡S B012掘立柱建物跡実測図 …… 153
〃 90 藤附A遺跡S B013掘立柱建物跡実測図 …… 154
〃 91 藤附A遺跡S B014掘立柱建物跡実測図 …… 154
〃 92 藤附A遺跡土壙A類実測図 …… 155
〃 93 藤附A遺跡土壙B・C・E類実測図 …… 157
〃 94 藤附A遺跡S D015・020・023溝土層図 …… 159
〃 95 藤附A遺跡S J069・S J070甕棺墓実測図 …… 161
〃 96 藤附A遺跡S K001土壙出土土器実測図 …… 163
〃 97 藤附A遺跡出土縄文土器実測図 (1) …… 164
〃 98 藤附A遺跡出土縄文土器実測図 (2) …… 165
〃 99 藤附A遺跡出土石器実測図 (1) …… 166
〃 100 藤附A遺跡出土石器実測図 (2) …… 167
〃 101 藤附A遺跡出土弥生土器実測図 …… 169
〃 102 藤附A遺跡出土須恵器実測図 (1) …… 171
〃 103 藤附A遺跡出土須恵器実測図 (2) …… 175
〃 104 藤附A遺跡出土須恵器実測図 (3) …… 177
〃 105 藤附A遺跡出土須恵器実測図 (4) …… 179
〃 106 藤附A遺跡出土須恵器ヘラ記号・調整拓影 …… 180
〃 107 藤附A遺跡出土土師器実測図 …… 181
〃 108 藤附A遺跡出土鉄器実測図 …… 184
〃 109 藤附A遺跡出土耳環実測図 …… 185
〃 110 藤附A遺跡出土歴史時代土器実測図 (1) …… 192
〃 111 藤附A遺跡出土歴史時代土器実測図 (2) …… 194
〃 112 藤附K遺跡遺構配置図 …… 200
〃 113 藤附K遺跡S T001古墳石室実測図 …… 201
〃 114 藤附K遺跡出土縄文・弥生土器実測図 …… 204
〃 115 藤附K遺跡出土須恵器実測図 (1) …… 207

Fig. 116 藤附K遺跡出土須恵器実測図 (2) …… 208
〃 117 藤附K遺跡出土土師器実測図 …… 209
〃 118 藤附K遺跡出土鉄刀実測図 …… 210
〃 119 藤附K遺跡出土鉄鏃・耳環実測図 …… 211
〃 120 藤附K遺跡出土歴史時代遺物実測図 …… 213
〃 121 藤附E遺跡遺構配置図 …… 219
〃 122 藤附E遺跡ST006・007古墳墳丘実測図 …… 220
〃 123 藤附E遺跡ST006古墳石室実測図 …… 221
〃 124 藤附E遺跡ST006・007古墳周溝土層図 …… 222
〃 125 三郎山遺跡付近地形図 …… 226
〃 126 三郎山遺跡発掘調査前地形測量図 …… 227
〃 127 三郎山遺跡遺構配置図 …… 228
〃 128 三郎山遺跡ST001古墳墳丘実測図 …… 230
〃 129 三郎山遺跡ST001古墳石室実測図 …… 231
〃 130 三郎山遺跡ST002古墳墳丘実測図 …… 232
〃 131 三郎山遺跡ST002古墳墳丘土層断面図 …… 233
〃 132 三郎山遺跡ST002古墳石室実測図 …… 234
〃 133 三郎山遺跡ST003古墳墳丘実測図 …… 235
〃 134 三郎山遺跡ST003古墳石室実測図 …… 236
〃 135 三郎山遺跡ST004古墳墳丘実測図 …… 236
〃 136 三郎山遺跡ST001古墳墳丘土層断面図 …… 237
〃 137 三郎山遺跡ST003古墳墳丘土層断面図 …… 237
〃 138 三郎山遺跡ST004古墳墳丘土層断面図 …… 237
〃 139 三郎山遺跡ST004古墳石室実測図 …… 239
〃 140 三郎山遺跡ST005古墳墳丘実測図 …… 240
〃 141 三郎山遺跡ST005古墳石蓋土壙墓実測図 …… 240
〃 142 三郎山遺跡SX006集石遺構実測図 …… 241
〃 143 三郎山遺跡出土石器実測図 …… 243
〃 144 三郎山遺跡ST001古墳出土須恵器実測図 (1) …… 245
〃 145 三郎山遺跡ST001古墳出土須恵器実測図 (2) …… 247
〃 146 三郎山遺跡ST001古墳・SX006集石遺構出土土師器実測図 …… 248
〃 147 三郎山遺跡ST001古墳出土鉄器・装身具実測図 …… 251
〃 148 長尾遺跡遺構配置図 …… 258
〃 149 長尾遺跡SB001掘立柱建物跡実測図 …… 259
〃 150 長尾遺跡出土石器実測図 …… 261
〃 151 長尾遺跡出土弥生土器実測図 …… 262
〃 152 長尾遺跡出土陶器実測図 …… 263
〃 153 長尾遺跡出土磁器実測図 (1) …… 265
〃 154 長尾遺跡出土磁器実測図 (2) …… 267
〃 155 長尾遺跡出土土師器，その他遺物実測図 …… 269

表　目　次

Tab. 1　香田遺跡出土縄文土器一覧表 …… 56
〃　2　香田遺跡出土石器一覧表 …… 63
〃　3　香田遺跡出土弥生土器一覧表 …… 66
〃　4　香田遺跡出土土師器一覧表 …… 83
〃　5　香田遺跡出土須恵器一覧表 …… 84
〃　6　香田遺跡出土歴史時代土器一覧表 …… 89
〃　7　獅々喰遺跡出土縄文土器一覧表 …… 102
〃　8　獅々喰遺跡出土須恵器一覧表 …… 103
〃　9　獅々喰遺跡出土土師器一覧表 …… 103
〃　10　藤附A遺跡古墳一覧表 …… 149
〃　11　藤附A遺跡土壙一覧表 …… 158
〃　12　藤附A遺跡溝一覧表 …… 160
〃　13　藤附A遺跡出土石器一覧表 …… 168
〃　14　藤附A遺跡出土鉄器一覧表 …… 185
〃　15　藤附A遺跡出土耳環一覧表 …… 186
〃　16　藤附A遺跡出土須恵器一覧表 …… 188
〃　17　藤附A遺跡出土土師器一覧表 …… 190
〃　18　藤附A遺跡出土歴史時代土器一覧表 …… 195
〃　19　藤附K遺跡出土土師器一覧表 …… 211
〃　20　藤附K遺跡出土須恵器一覧表 …… 212
〃　21　藤附K遺跡出土歴史時代遺物一覧表 …… 215
〃　22　佐賀市北部山麓所在古墳一覧表（九州横断道に伴う発掘調査関係） …… 256

図　面　目　次

PLAN. 1　香田・獅々喰・白虎谷遺跡周辺地形図 (1)
〃　2　香田・獅々喰・白虎谷遺跡周辺地形図 (2)
〃　3　寺ケ里・戦場遺跡周辺地形図
〃　4　藤附遺跡周辺地形図
〃　5　藤附A遺跡遺構配置図

図 版 目 次

PL. 1　香田・獅々喰（航空写真）
〃　2　香田遠景（航空写真）
〃　3　香田A地区2区・同A地区3区
〃　4　香田B地区1区
〃　5　香田A地区4区
〃　6　香田SX001～005・008・009集石，同SX005～009集石
〃　7　香田SX001・002・003集石
〃　8　香田SX004・005・006集石
〃　9　香田SX007・008・009集石
〃　10　香田SX010支石墓
〃　11　香田SX010支石墓支石除去後，同土壙
〃　12　香田SX010支石墓・SJ011壺棺墓全景，同SJ011壺棺墓，同供献土器
〃　13　香田SC013石棺墓
〃　14　香田SP014土壙墓，同遺物取り上げ後
〃　15　香田ST015古墳全景，同ST017古墳全景，同ST018古墳全景
〃　16　香田ST016古墳横穴式石室
〃　17　香田ST016古墳遺物出土状況
〃　18　香田ST019古墳横穴式石室
〃　19　香田SB020住居跡
〃　20　香田SB021・022住居跡
〃　21　香田SB023掘立柱建物跡，同SB020住居跡遺物出土状況
〃　22　香田SK024土壙，同SK025土壙
〃　23　獅々喰ST001古墳全景
〃　24　獅々喰ST001古墳横穴式石室，同閉塞石除去後
〃　25　獅々喰ST001古墳
〃　26　白虎谷（航空写真）
〃　27　白虎谷（航空写真），同遠景
〃　28　白虎谷ST001古墳横穴式石室
〃　29　寺ケ里ST001古墳全景
〃　30　寺ケ里ST001古墳伐採後
〃　31　寺ケ里ST001古墳
〃　32　寺ケ里ST001古墳墳丘除去後
〃　33　寺ケ里ST001古墳墳丘土層
〃　34　寺ケ里ST001古墳奥壁，同石室入口
〃　35　寺ケ里ST001古墳東側壁，同西側壁，同石室床面

PL. 36　戦場・寺ケ里（航空写真）
〃 37　戦場全景
〃 38　戦場ＳＫ001土壙，同ＳＤ004溝，同三津地区全景
〃 39　藤附　（航空写真）
〃 40　藤附Ａ（航空写真）
〃 41　藤附Ａ（航空写真）
〃 42　藤附Ａ　Ａ地区，同Ｉ地区
〃 43　藤附Ａ　ＳＫ001土壙，同遺物出土状況
〃 44　藤附Ａ　ＳＴ006古墳検出状況，同ＳＴ002古墳横穴式石室
〃 45　藤附Ａ　ＳＴ005古墳検出状況，同全景
〃 46　藤附Ａ　ＳＴ005古墳箱式石棺
〃 47　藤附Ａ　ＳＴ007古墳遺物出土状況
〃 48　藤附Ａ　ＳＴ008古墳全景，同横穴式石室
〃 49　藤附Ａ　ＳＴ008古墳石室内遺物出土状況
〃 50　藤附Ａ　ＳＢ009・010掘立柱建物跡
〃 51　藤附Ａ　ＳＢ011・013・014掘立柱建物跡，ＳＤ025溝
〃 52　藤附Ａ　ＳＫ038・039・043・045・047土壙
〃 53　藤附Ａ　ＳＫ030・047・048土壙
〃 54　藤附Ａ　ＳＫ049・052・053土壙
〃 55　藤附Ａ　ＳＫ058・064土壙，同ＳＪ070甕棺墓
〃 56　藤附Ｋ・Ｅ（航空写真）
〃 57　藤附Ｋ（航空写真）
〃 58　藤附Ｋ（航空写真）
〃 59　藤附Ｋ　ＳＴ001古墳竪穴式石室，同石室内遺物出土状況
〃 60　藤附Ｅ伐採後，同調査後
〃 61　藤附Ｅ全景，同ＳＴ006古墳全景
〃 62　藤附Ｅ　ＳＴ006古墳石蓋，同箱式石棺
〃 63　藤附Ｅ（52年度調査），ＳＴ002古墳周溝遺物出土状況
〃 64　三郎山・長尾（航空写真）
〃 65　三郎山遠景，同全景
〃 66　三郎山全景（航空写真）
〃 67　三郎山ＳＴ001古墳調査前，同全景
〃 68　三郎山ＳＴ001古墳墳丘除去後の地山整形状態
〃 69　三郎山ＳＴ001古墳閉塞石，同閉塞石除去後，同玄門部
〃 70　三郎山ＳＴ001古墳奥壁，同東側壁，同遺物出土状況
〃 71　三郎山ＳＴ002古墳全景
〃 72　三郎山ＳＴ002古墳石蓋，同石棺系石室
〃 73　三郎山ＳＴ002古墳東小口，同西小口
〃 74　三郎山ＳＴ003古墳調査前，同全景
〃 75　三郎山ＳＴ003古墳全景，同石棺系石室

PL. 76　三郎山ＳＴ003古墳北側壁，同南側壁
〃 77　三郎山ＳＴ004古墳全景
〃 78　三郎山ＳＴ004古墳石蓋，同竪穴式石室
〃 79　三郎山ＳＴ004古墳北側壁，同南側壁，同西小口
〃 80　三郎山ＳＴ005古墳全景
〃 81　三郎山ＳＴ005古墳石蓋，同土壙
〃 82　三郎山ＳＴ002・003・004古墳全景，同ＳＸ006集石遺構
〃 83　長尾遠景（航空写真）
〃 84　長尾ＳＢ001掘立柱建物跡
〃 85　長尾全景，同ＳＤ003溝状遺構
〃 86　香田出土縄文土器
〃 87　香田ＳＸ010支石墓・その他出土土製品，同出土縄文土器
〃 88　香田ＳＸ010支石墓・ＳＪ011壺棺墓・その他出土縄文土器
〃 89　香田ＳＢ020住居跡・ＳＰ014土壙墓出土土師器
〃 90　香田ＳＢ020・022住居跡・ＳＫ024土壙出土土師器，同出土黒色土器
〃 91　香田ＳＴ016・018・019古墳・その他出土須恵器
〃 92　香田ＳＴ016・019古墳出土須恵器
〃 93　香田出土石器
〃 94　香田ＳＴ016・019古墳・ＳＰ014土壙墓・ＳＢ020住居跡出土鉄器・装身具
〃 95　獅々喰ＳＴ001古墳出土須恵器・土師器，同出土須恵器
〃 96　戦場・寺ケ里・白虎谷出土石器・縄文土器・須恵器・その他土器
〃 97　藤附Ａ　ＳＫ001土壙出土・その他縄文土器
〃 98　藤附Ａ　ＳＴ002・007古墳出土・その他須恵器
〃 99　藤附Ａ　ＳＴ002・007古墳出土須恵器
〃 100　藤附Ａ　ＳＴ002・007古墳出土須恵器
〃 101　藤附Ａ　ＳＴ002・007古墳出土土師器
〃 102　藤附Ａ　ＳＴ008古墳出土鉄器，ＳＴ002・008耳環，同出土石器
〃 103　藤附Ｋ　ＳＴ001・002・003古墳出土須恵器・土師器，その他出土須恵器・土師器
〃 104　藤附Ｋ　ＳＴ001古墳出土鉄器，同出土耳環，同出土縄文土器・土師器
〃 105　三郎山ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 106　三郎山ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 107　三郎山ＳＴ001古墳出土須恵器・土師器
〃 108　三郎山ＳＴ001古墳出土鉄器，同出土石器
〃 109　長尾出土土器・陶器
〃 110　長尾出土磁器
〃 111　長尾出土磁器

Ⅰ　調 査 の 概 要

調　査　の　概　要

1．調査に至る経過

九州横断高速自動車道の建設計画に伴う文化財調査は，九州地方建設局の委託を受けた佐賀県教育委員会社会教育課が，昭和44年６～７月及び昭和45年６月の２回にわたり，遺跡分布調査を実施したことから始まる。

その後，社会教育課に所属していた文化室が文化課として独立（昭和47年８月）したり，日本道路公団の路線発表（昭和48年９月）などの経緯をたどりながら，その間，数回の分布調査を実施した。

発掘調査を開始したのは，昭和51年度末の昭和52年１月18日からであった。２班編成で佐賀市久保泉町の丸山・藤附Ｅ・藤附Ｆ遺跡，佐賀郡大和町の惣座遺跡を調査した。

昭和52年度頭初に佐賀市～鳥栖市間26kmについて路線内の再分布調査を実施した。その結果97箇所563,300㎡の遺跡が確認された。調査は２班編成で実施し，丸山・藤附Ｅ・藤附Ｆ・惣座遺跡に加えて，金立町の十本杉，六本黒木，大門西，久保泉町の藤附Ｂ・藤附Ａ・藤附Ｃ・藤附Ｄ遺跡の調査を実施した。

昭和53年度は５班編成で，前年度からの大門西・六本黒木遺跡，加えて金立町の長尾・金立開拓遺跡，久保泉町の藤附Ｇ・藤附Ｈ・西原遺跡，それに中原町の綾部城跡・綾部八本松・一本杉遺跡の調査を実施した。

昭和54年度も前年度と同じく５班編成での調査であった。前年度からの金立開拓・西原遺跡に加えて金立町の三郎山・六本黒木Ｂ遺跡，久保泉町の藤附Ｊ・藤附Ｉ・藤附Ｋ・藤附Ｅ（残欠），鈴熊・元大日遺跡，東脊振村の戦場・寺ケ里・浦田・山古賀・西一本杉・下石動遺跡，中原町の白虎谷・獅々喰・香田遺跡などの調査を実施した。

昭和55年度も５班編成で，前年度からの継続分である鈴熊・浦田・山古賀・下石動遺跡の他に，多久市の大工田・池の平遺跡，東脊振村の西石動遺跡，神埼町の猿嶽Ａ遺跡なども調査を実施している。

これら遺跡の大半は脊振山系南麓から派生する舌状丘陵地上に位置する。検出される遺構は縄文時代から近世までの多岐に亘っている。特に注目に値するのは縄文時代晩期から弥生時代初めにかけての支石墓群及び多様な特質をもつ古墳群を出土した丸山遺跡である。現在，遺跡全体を移築する方向で計画が進行中である。

2．調査組織

昭和51年度より開始した九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査の関係者は次のとおりである。

佐賀県教育委員会

総括	教育長	池田武生（昭和51・52年度）				
	教育長	古藤浩				
	教育次長	古藤浩（昭和51・52年度）				
	同	小西亘（昭和52～54年度）				
	同	大坪実（昭和53・54年度）				
	同	川副道夫（昭和54年度）				
	同	野村綱明（昭和55年度）				
	同	宇田川勝之				
	文化課課長	田中寿義雄（昭和51～55年度）				
	同	藤山巖				
	文化課参事	藤山巖（昭和55年度）				
	同	古賀礼三（昭和53・54年度）				
	文化課課長補佐	武富雅道（昭和51・52年度）				
	同	川久保松広				
	同	高島忠平				
庶務	文化課専門員	廣川昇				
	文化課庶務係長	百武定弘（昭和51年度）				
	同	片渕正美（昭和52～54年度）				
	文化課主事	大塚博昭（昭和51・52年度）				
	同	伊崎憲二（昭和54年度）				
	同	北島和男				
	同	野口茂実				
	同	森由紀子				
発掘調査総括	文化課専門員	高島忠平（昭和55年度）				
	文化課調査第1係長	高島忠平（昭和51～55年度）				
発掘調査	指導主事	樋渡敏暲	杠一義	岩永政博	久保和彦	
		高瀬哲郎	蒲原宏行			
	文化財保護主事	中牟田賢治	松尾吉高	立石泰久		
	嘱託	立石泰久	中島直幸	盛峰雄	高瀬哲郎	
		原田保則	西田和己	川崎吉剛	森田孝志	
		福田義彦	山田正	堤安信	久保伸洋	
		後仲筋正徳	東中川新子	高瀬久美子	本田京子	
	多久市	西村隆司				
	調査補助員	岸本義彦	田中康教	松尾直子	山口弘	
		釘本堅太				
	調査準補助員	蒲原正幸	矢野養	川谷昭彦	江里口克己	
		野田隆文	城野一郎	武広正純	深町佐千子	
		鶴田和仁				

3．調査日誌

香　田　遺　跡

調査担当者　久保　和彦・高瀬　哲郎・蒲原　宏行

昭和54年

6月4日　調査開始。A地区1区に4×15mのトレンチ設定。土師器・須恵器等が出土。

6月8日　A地区2区を掘り下げる。0.5mほど下から，完形の土師器（壺）が出土。

6月9日　調査区にユンボーを入れて，調査区全域の表土剝ぎを開始。

7月9日　B地区に5m区画の杭を打つ。

7月13日　B地区2区の表土剝ぎを行う。遺構はないが，押型文土器が十数点出土。

7月19日　A地区に5m区画の杭を打つ。午後より表土剝ぎ。

7月20日　A地区4区の表土剝ぎ続行。石組みが露出していたが，箱式石棺と思われる。

7月25日　前出の石棺の南に，石棺らしきものを確認。石蓋上より丹塗りの土器片出土。

7月30日　A地区3区のピットを掘る。遺物はまったくない。

7月31日　A地区3区の清掃を行い，午後より撮影。

8月1日　A地区3区に実測のための遣り方を組む。

8月8日　A地区4区の2基の石棺の調査を再び始める。南側の石蓋上より，もう一個体分の壺が出土（夜臼式土器と思われる）。石棺ではなく支石墓か？

8月22日　A地区4区の古墳の周溝を掘り下げる。

8月23日　A地区4区の東南隅に，土壙あり，土師器片と共に木質の付着した鉄釘が出土。

8月28日　支石墓の東南方から，夜臼式土器（甕・壺）が出土。

8月30日　支石墓と周囲の壺を清掃したのち，撮影。壺を実測。

9月3日　支石墓の写真撮影。

9月6日　A地区4区の北西隅で，石室らしき石組みを検出（ST016古墳とする）。

9月10日　支石墓，箱式石棺の実測開始。A地区4区の古墳埋土を取り除く。

9月17日　ST016古墳の羨室より多数の須恵器や土師器が出土。

9月28日　ST016古墳の写真撮影作業を行う。

10月1日　A地区2区の遺構検出作業を行う。平面形は明確でないが，住居跡1基確認。

10月9日　SX010支石墓の支石を取り除き，内部主体を掘り下げる（土壙である）。

10月16日　SB020住居跡の写真撮影。

10月17日　A地区4区の全景写真撮影。

10月22日　A地区4区の遣り方作業開始。

10月27日　A地区4区の遺構実測開始。

10月29日　B地区1区の表土剝ぎ開始。西北隅に古墳らしき石組み確認（ST019古墳とする）。

10月30日　A地区4区の実測終了。

11月6日　A地区4区のST016古墳の遺物除去後の写真撮影。

11月8日　A地区2区のSB020住居跡出土土器の写真撮影，実測。
A地区4区のSX010支石墓の実測終了。

11月14日　B地区1区の中央付近で，小石が集中している（集石遺構）。

11月20日　A地区2区の遣り方作業終了。

11月22日　A地区2区の実測終了。

12月3日　B地区1区の集石遺構6基の内，3基の写真撮影。

12月7日　前出の集石遺構の全体写真撮影の後，実測。

12月12日　B地区1区のST019古墳の撮影準備。新たに確認した集石遺構2基の撮影。また最南端に住居跡を2基確認したが，広がりを調べるため，さらに南を拡張。

12月26日　今年の現場作業終了。

昭和55年

1月8日　B地区1区の作業開始。

1月10日　B地区1区のST019古墳及び8基の集石遺構の実測終了。南端の住居跡（SB021，022住居跡）は方形である。

1月16日　2基の大型土壙（SK024，025土壙）の写真撮影。

1月18日　SK024土壙実測。

1月23日　航空撮影のための清掃。B地区1区の住居跡掘り下げ。

1月26日　B地区1区の遣り方作業開始。

1月29日　B地区1区の全景写真撮影。

2月4日　B地区1区の実測を終え，香田遺跡の全調査を終了。

獅子喰遺跡

調査担当者　久保　和彦・高瀬　哲郎

昭和54年

5月17日～6月1日　試掘溝を掘り確認調査を行う。その結果，古墳1基，縄文・弥生土器，土師器，須恵器などを検出。

6月4日～6月9日　調査区の表土をユンボーで剝ぐ。

6月12日　周溝の確認と石室内撹乱土の除去を行う。

6月13日　周溝の確認を終えた後，掘り下げ始める。

6月14日　羨道を確認し掘り下げる。周溝東側の落ち込みより縄文土器が出土。

6月15日～7月2日　梅雨で作業中断。

7月3日～7月6日　周溝の掘り下げを続行するとともに周溝の土層断面図を作成する。

7月9日　墳丘を0.1～0.3m削り，石室掘り形を確認した後に掘り下げる。

7月11日　遺構検出を終了する。

7月12日～7月29日　石室実測と地形測量を行う。

7月31日　清掃を行い，全景，石室，細部の写真撮影を行う。調査終了。

白虎谷遺跡

調査担当者　久保　和彦・高瀬　哲郎

昭和54年

4月23日　調査開始。北側にすでに古墳の石材が露出する。北側から表土剝ぎを始める。古墳内の埋土を除き始める。埋土中から人骨片と土師器片出土。

4月24日　石室内を床面まで下げる。

4月25日　石室の掘り形を確認する。羨道部の南端は撹乱がひどく，明瞭でない。

4月27日　石室の掘り形の検出終了。

5月2日　写真撮影のため，石室を清掃する。

5月8日　羨道部の南側の表土をさらに下げる。

5月15日　石室の南西方で，須恵器杯蓋1個出土。遺構全体を清掃ののち，撮影。

5月26日～6月6日　古墳石室実測。

6月8日　石室実測基準点の座標測量を行う。

昭和55年

2月5日　平板による地形測量を行う。調査終了。

寺ケ里遺跡

調査担当者　杠　　一義・森田　孝志

昭和54年

12月18日　調査開始。墳丘の表土剝ぎを行う。

12月19日　古墳石室内の清掃を行う。

12月20日　墳丘にトレンチを入れる。

12月22日～12月25日　古墳西方平坦部に1～4トレを設定しトレンチを入れる。

12月26日　古墳石室内の掘り方。

12月27日～12月28日　2トレ，4トレを拡張する。

昭和55年

1月7日～1月8日　2トレ，4トレを掘り下げる。

1月10日　古墳石室内の写真撮影。墓道部分の掘り方。

1月11日　石室内の割りつけ，古墳の周囲を掘り下げる。

1月12日　古墳南側を掘り下げるが遺構見あたらず。

1月14日　古墳北方部分を掘り下げる。古墳，2トレ，4トレの遺構検出。

1月16日　古墳全景写真撮影。遺跡東側斜面にトレンチ入れる。実測の為の測量杭を打つ。

1月17日～1月19日　2トレ，4トレを褐色土まで掘り下げる。

1月21日～3月5日　浦田遺跡と併行して調査を進める。遺跡全体(古墳等)の実測。

3月7日　古墳の墳丘平板測量。

3月10日～3月12日　墳丘の盛り土の取り除き，石室掘り形の検出。

3月13日　調査終了。

戦　場　遺　跡

調査担当者　杠　一義・森田孝志

昭和54年

11月26日　鍬入れを行う。テント設置，器材搬入。

11月27日～12月12日　三津地区遺構検出。

11月29日～12月11日　志波屋地区遺構検出。

12月12日～12月14日　志波屋地区土壙・溝，写真撮影。

12月15日～12月16日　埋め戻し，図面取り。

12月17日　調査終了，器材撤去。

藤附A遺跡

A地区

調査担当者　松尾吉高・盛　峰雄・中島直幸

昭和52年

12月21日　遺構検出を実施する。

12月23日　調査区ほぼ中央西よりに数個の柱穴を検出する。（SB009，SB010，SB011掘立柱建物跡)。

昭和53年

1月11日　測量のための遣り方を組む。

1月19日　柱穴の間に縄文土壙（SK001）を確認する。

3月13日　調査終了。

D 地 区

調査担当者　松尾吉高・盛　峰雄・中島直幸

昭和52年

6月10日　取り付け道路部分の表土剥ぎを行う。

6月21日　南半分に小溝を挟んで掘立柱建物跡を検出。ともに2間で，桁行か梁行か不明。

6月22日　遣り方測量のためのグリッド設定をする。

7月16日　取り付け道路部分の実測終了。

8月19日　取り付け道路東側の表土剥ぎを行う。

9月2日　調査区北端部分に須恵器の密集地を検出する。（ST007古墳）。

9月16日　中央北よりにSB012掘立柱建物跡を検出する。他に土壙及び溝なども存在する。

10月2日　遣り方測量によりグリッドを設定し，測量を開始する。

12月28日　調査すべて完了。

G・H地区

調査担当者　松尾吉高・盛　峰雄・中島直幸

昭和53年

5月9日　遺構検出を実施する。両地区とも2基の古墳を確認するが，H地区は削平が激しく明確な遺構はない。G地区は周溝が存在する。

5月16日　G地区周溝掘り下げ。またST005古墳は石室に箱式石棺をもつ。

5月23日　平板にて地形測量を行い，両地区とも調査終了。

I 地 区

調査担当者　中牟田賢治・福田義彦

昭和54年

7月12日　発掘調査開始。北より伐採を始める。

7月22日　表土剥ぎ開始。試掘溝を設定する。遺構は確認できない。

7月25日　機械による表土剥ぎ開始。

8月2日　調査区南よりに古墳を確認する（ST008古墳）。

8月4日　古墳周辺の遺構検出。内部主体に横穴式石室をもち，周溝も確認できる。

8月10日　古墳東方に多数の土壙が確認できる。遺構検出後，すぐ掘り方を開始する。中世土器片多数検出。

8月17日　古墳石室床面より鉄刀・鉄鏃・鉄矛・耳環などが出土する。

8月18日　実測のための基本木杭打ち。

8月20日　地形測量と併行して，土壙の実測を始める。土壙の写真も撮影。

8月21日　古墳の石室実測を始める。

9月6日　古墳石室を清掃のあと写真撮影をする。遺物の取り上げ。

9月7日　古墳周溝の発掘を始める。

9月11日　古墳全景の写真撮影。

9月17日　SJ069，SJ070甕棺墓の実測を終え，I地区の調査を完了する。

J 地 区

調査担当者　中牟田賢治・福 田 義 彦

昭和54年

7月24日　発掘調査開始。伐採より始める。

7月31日　調査区南に試掘溝を設定し，掘り方始める。
耕作土より石器・須恵器出土。

8月2日　ST001古墳の発掘開始。内部主体に横穴式石室をもつ。(発掘前は袖石が露出する)。

8月3日　石室内より須恵器出土。腰石6個を残すのみで他は持ち去られている。

8月9日　古墳周辺に試掘溝設定。周溝は検出できず。表土より縄文土器が出土する。

8月22日　古墳石室の写真撮影を実施する。

8月24日　古墳石室の実測を始める。

9月18日　J地区調査完了。

藤 附 K 遺 跡

調査担当者　中牟田賢治・福 田 義 彦

昭和54年

12月4日　発掘調査開始。伐採より始める。

12月17日　表土剝ぎ開始。須恵器が出土する。
地形測量も実施する。

昭和55年

1月25日　中央部掘り下げ。耳環が出土し，竪穴式石室の腰石を検出する。(ST001古墳)。

1月26日　東端より耳環と須恵器が出土するが，石材は検出できない。(ST003古墳)。

1月29日　ST001古墳掘り方完了。棺底に朱と鉄刀，鉄鏃を認める。写真撮影。

1月30日　ST001古墳実測。

1月31日　ST002古墳周辺掘り下げ。遺構はない。西方（ST002古墳）掘り下げ。墓道状の溝を検出したが，他に遺構はない。

2月1日　遺跡西に隣接する水田に試掘溝を設定。
耕作土下より須恵器・土師器が出土。

2月8日　地形測量が終り，調査完了。

藤附E遺跡

調査担当者　中牟田賢治・福田義彦

昭和55年

1月8日　伐採を実施する。

1月16日　地形測量を始める。

1月24日　掘り方開始。

1月25日　ST006古墳石蓋を検出する。主軸に沿って試掘溝を設定し，掘り方。南のST007古墳も掘り方を実施する。

1月29日　ST006古墳の内部主体は箱式石棺である。

1月30日　ST006古墳の墓壙掘り方と墳丘土層及び石室実測。

2月7日　両古墳の周溝掘り方。

2月14日　全体測量を終え，調査すべて完了。

三郎山遺跡

調査担当者　中牟田賢治・福田義彦

昭和54年

10月3日～10月9日　テントと発掘用具を運搬し，遺跡周辺の伐採を実施。

10月9日～10月16日　古墳周辺の伐採，清掃を行い，写真撮影。地形測量をする。

10月17日～10月23日　ST001・ST002・ST003・ST004・ST005の古墳の内部主体にグリッドを設定し掘る。各古墳の割付けをし，表土剝ぎを実施する。

10月24日～10月31日　5基の墳丘に十文字のトレンチを入れる。その後，墳丘の実測を行う。各古墳内部主体の検出とその撮影を完了する。

11月1日～11月30日　各古墳の周溝やST001古墳の墓道を掘る。SX006集石遺構を完掘。全ての古墳の掘り方完了。5基の古墳の細部写真撮影完了，石室の実測を行う。全体写真撮影実施。アドバルーン空中撮影もする。

12月1日～12月13日　遺構調査後，古墳と周辺の地形測量を行う。また遺構の見落しがないように，古墳周辺に2×2mのグリッドを4つ設定したが何も検出できなかった。テント，発掘用具を片付けて調査を完了する。

長尾遺跡

調査担当者　岩永政博・立石泰久・盛　峰雄・西田和己

昭和53年

5月16日　発掘調査開始。調査区内に2×2mの区を設定。東南の隅で区の表示をする。表土

剝ぎ。

5月17日～5月30日　表土剝ぎ。SB001掘立柱建物跡，大溝等の遺構を確認する。

5月31日～6月10日　SB001掘立柱建物跡，大溝の検出。

6月12日～6月16日　10日～11日にかけての集中豪雨で，排土した土が流出したためその災害復旧にあたる。

6月17日～7月3日　各遺構の検出終了。

7月4日　全景撮影。

7月5日～7月29日　トラバース測量。

7月31日～8月9日　平板測量。SB001掘立柱建物跡の実測。

8月10日～8月19日　石垣列の裏込の排土。陶磁器類多量に出土。

8月21日～9月12日　全体実測，補足調査等を行い，調査終了。

Ⅱ　遺　　跡

香田（こうだ）遺跡

遺　跡　名：香田（略号ＫＯＤ）
遺跡所在地：三養基郡中原町大字簑原字香田

香　田　遺　跡

1．遺跡の概要

有明海周辺には，それにそそぐ河川を中心として南岸部には肥後平野（白川），東岸部には筑後平野（筑後川），北岸部には佐賀平野（嘉瀬川）など，土壌豊かな平野が点々と広がっている。その佐賀平野の北方に，長く東西に延びて，西北九州を南北に分断するように連々とそびえたっているのが脊振山地である。

脊振山地は，東から九千部山，蛤岳，雷山，脊振山，金山，天山，黒髪山などの1,000m前後の山々を主たる峰々とし，南北にさらに500m前後の山々を点々と従がえている。そして，それらの低山から平野部へ，あるいは谷へ向けて，山裾がゆるやかに延び，いわゆる舌状台地として低く突き出ている。

この地形及び地理条件を一因として，脊振山地北側の福岡，糸島，唐津地域では中国大陸，朝鮮半島との活発な文化交流が目立つのに対して，その南側の各平野部では，有明海を中心とした相互交流が強く行われたようである。

今回調査した香田遺跡は，この有明海の北東方（佐賀県東部），佐賀県三養基郡中原町大字簑原字香田に所在している。中原町は，東からは石谷山（標高754m），西からは蛤岳（標高862m）の急傾斜面がせまり，北部地域はほとんど山に囲まれている。その間を脊振山系に源を発する寒水川が，縫うように走って，南部地域の微高地を通り，やがて筑後平野から本流筑後川へ至り，有明海へそそいでいる。現在の集落は，この寒水川流域の平坦部と，北部山麓から南部へ広がる微高地上に多くみられる（PLAN. 2）。

中原町付近の遺跡分布もこの状況とほぼ同様の広がりをみせており，南部の微高地上に集中している。北部では寒水川上流域に，縄文時代の上古田原遺跡・古田原遺跡，それに鷹取山山麓遺跡などの遺物散布地と，鷹取山一号古墳などの古墳がいくつか存在しているにすぎない。

さて，この中原地域の時代毎の遺跡分布をみると先土器時代の遺跡はただ1カ所（姫方遺跡）だけである。周辺地域でも，きわめて確認例が少なく，今後の調査を待つしかない。

縄文時代の遺跡は21カ所で，分布をみると寒水川流域にのぞむ微高地に多い。先の北部の3遺跡のほか，流れを下って獅々喰遺跡・香田遺跡・木の本遺跡・綾部八本松遺跡・拾徳遺跡・姫方遺跡，それに姫方原遺跡などであるが，遺物散分地が多い。

しかし，次の弥生時代になると，遺跡の分布が南部の微高地を中心として急に大きく広がってきて，遺跡数は47カ所にふえる。そして，遺跡の様子も各調査例から，縄文時代より明確にとらえられるようになってきた。特に，姫方遺跡・上地西方丘陵遺跡・町南遺跡・姫方原遺跡

(注. 太線は九州横断道路線)

Fig. 1　中原町地区遺跡分布図

1	養父遺跡	8	二ノ原遺跡	15	綾部八本松遺跡	22	姫方遺跡
2	山浦西北方古墳群	9	笛吹山遺跡	16	綾部城跡	23	姫方原前方後円古墳
3	山浦古墳群	10	立石古墳群	**17**	**白虎谷遺跡**	24	姫方原遺跡
4	薄尾古墳群	11	鷹取山山麓遺跡	18	一本桜古墳群	25	町南遺跡
5	朝日山古墳群	12	山田古墳群	19	大塚古墳群	26	ドンドン落遺跡
6	村田古墳群	**13**	**香田遺跡**	20	塚原古墳群	27	上地遺跡
7	狂言谷遺跡	**14**	**獅々喰遺跡**	21	八幡神社古墳群	28	舟石遺跡

が広く知られている。姫方遺跡・上地西方丘陵遺跡は共に甕棺墓を中心とした大規模な埋葬遺跡で，上地西方丘陵遺跡の甕棺からは以前銅剣が出土したといわれている。また，町南遺跡・姫方原遺跡は数十基を数える集落跡であるが，ベッド状遺構の初現時期の問題（姫方原の例では，中期後半におかれている）や大規模な溝（近年調査した町南例は，深さ３m以上もある）の必要性の問題など，注目すべき資料を提出している。このような弥生時代の集落や埋葬の遺跡は，佐賀平野では他に鳥栖市周辺，神埼郡神埼町，佐賀郡大和町などで多く確認されているが，本地域はその中の一中心地として重要である。

しかし，これほど弥生時代に発展してきたこの地域も，古墳時代になると中心地域ではなくなってくる。遺跡数は46であるが，佐賀市北部地域（銚子塚・丸山古墳群・藤附古墳群・熊本山古墳・西隈古墳・西原古墳…），三養基郡上峰村（目達原古墳群），そして鳥栖市（一連の前方後円墳…剣塚・庚申堂塚・岡寺前方後円墳）にみられる古墳ほどの代表的なものは少ない。古墳からみた地域の勢力の展開は，佐賀平野では上記の三地域を中心として行われていたようで，中原地域はそれに組み込まれた中での展開に制約されていったとみなければならない。その様相は後期に至るまで強い。北部山麓部一帯には，山田古墳群・冠石古墳群・少弐山古墳群・白虎谷古墳群・一本桜古墳群・大塚古墳群などの群集墳が多く残っているだけである。ただ，姫方遺跡（方墳１基，雌塚・雄塚・姫方前方後円墳が存在）周辺の古墳の変遷には注目したい。

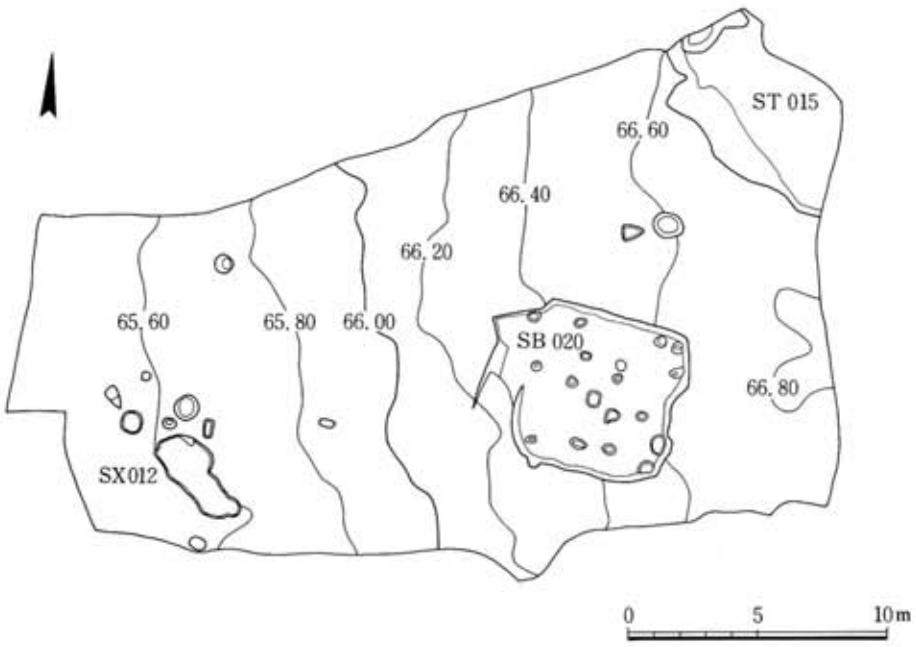


Fig. 2　香田遺跡Ａ地区２区遺構配置図

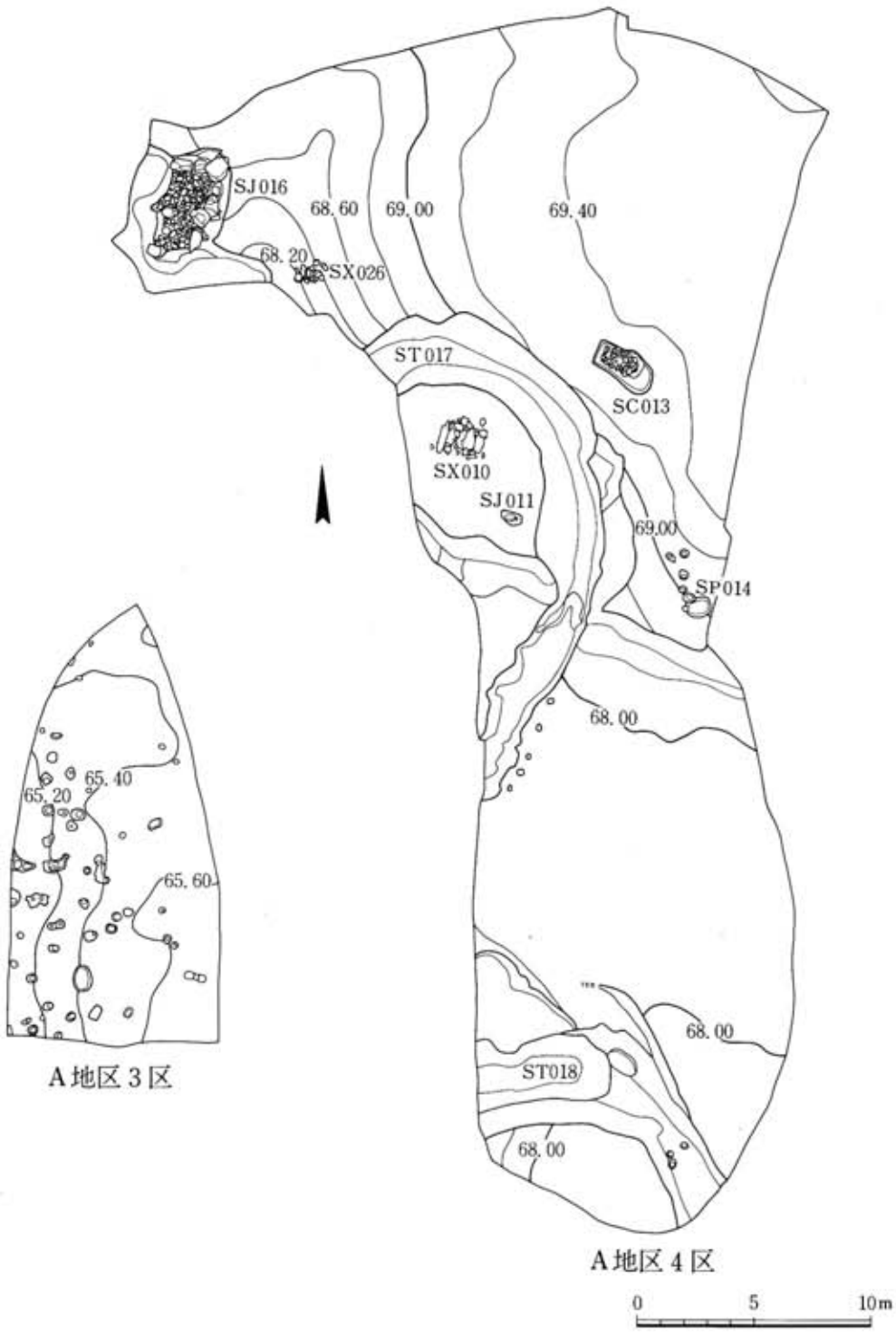


Fig. 3　香田遺跡A地区3区A地区4区遺構配置図

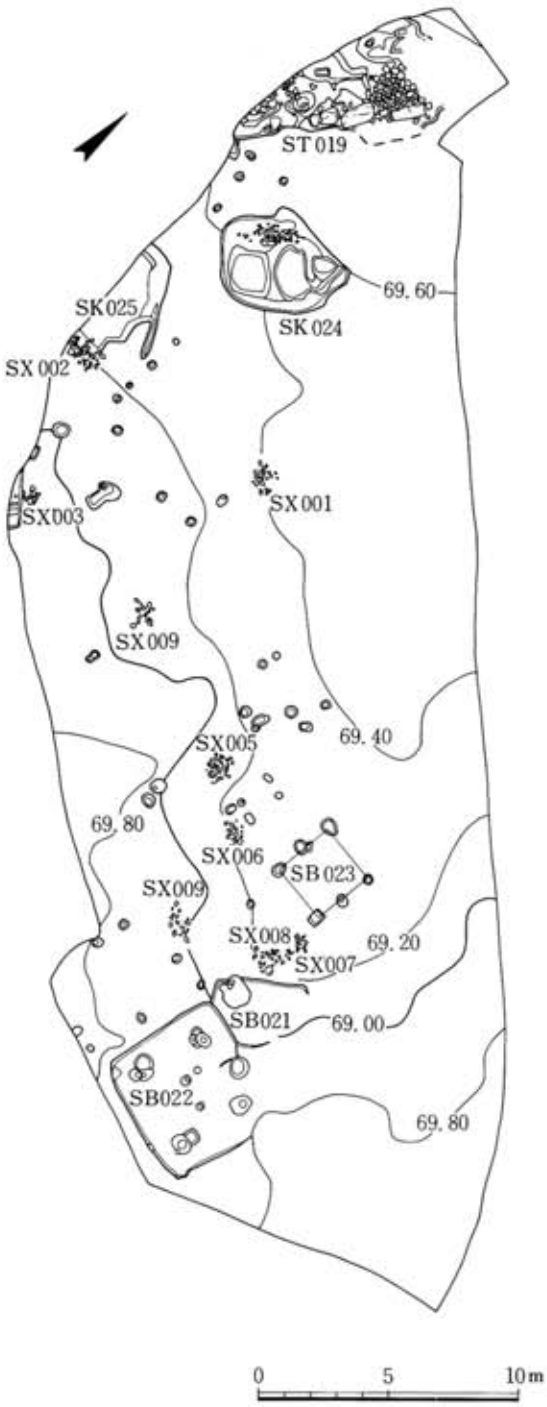


Fig. 4　香田遺跡B地区1区遺構配置図

古墳時代以降は，館跡・城跡を中心とした遺跡が多くみられる。その遺跡の性格上，北部山麓からさらに山頂一帯をも含んだ分布が新たにみられる。それらは，船隈城跡，鷹取山城跡，白虎城跡，臥牛城跡，綾部城跡などの中世山城や，目明谷・冠石の館跡，それに白虎谷井戸であるが，いずれも平安末期以降のものである。ゆえに，中原地域では古墳時代末から奈良，平安時代にかけての様子を伺い知れる遺跡が少なく，そこに一つの空白期間がある（Fig. 1）。

さて，香田遺跡は以上に述べたような中原地域の中で，石谷山の最も南の山麓部（標高60～70m）に位置し，一帯は寒水川に面したなだらかな舌状台地となっている。また台地南には，微高地が大きく広がっている。その台地中央平坦部及び西側斜面の一部の調査を，昭和54年6月4日～昭和55年2月4日に行った。調査対象面積は約7,600㎡であった。

確認した遺構は計26で，縄文時代早期の集石遺構9，晩期の支石墓1，壺棺墓1，弥生時代中期の土器溜1，古墳時代の竪穴住居跡3，石棺墓1，土壙墓1，古墳5，中世の掘立柱建物跡1，土壙2，集石遺構1である（Fig. 2～4, PL. 1～5）。

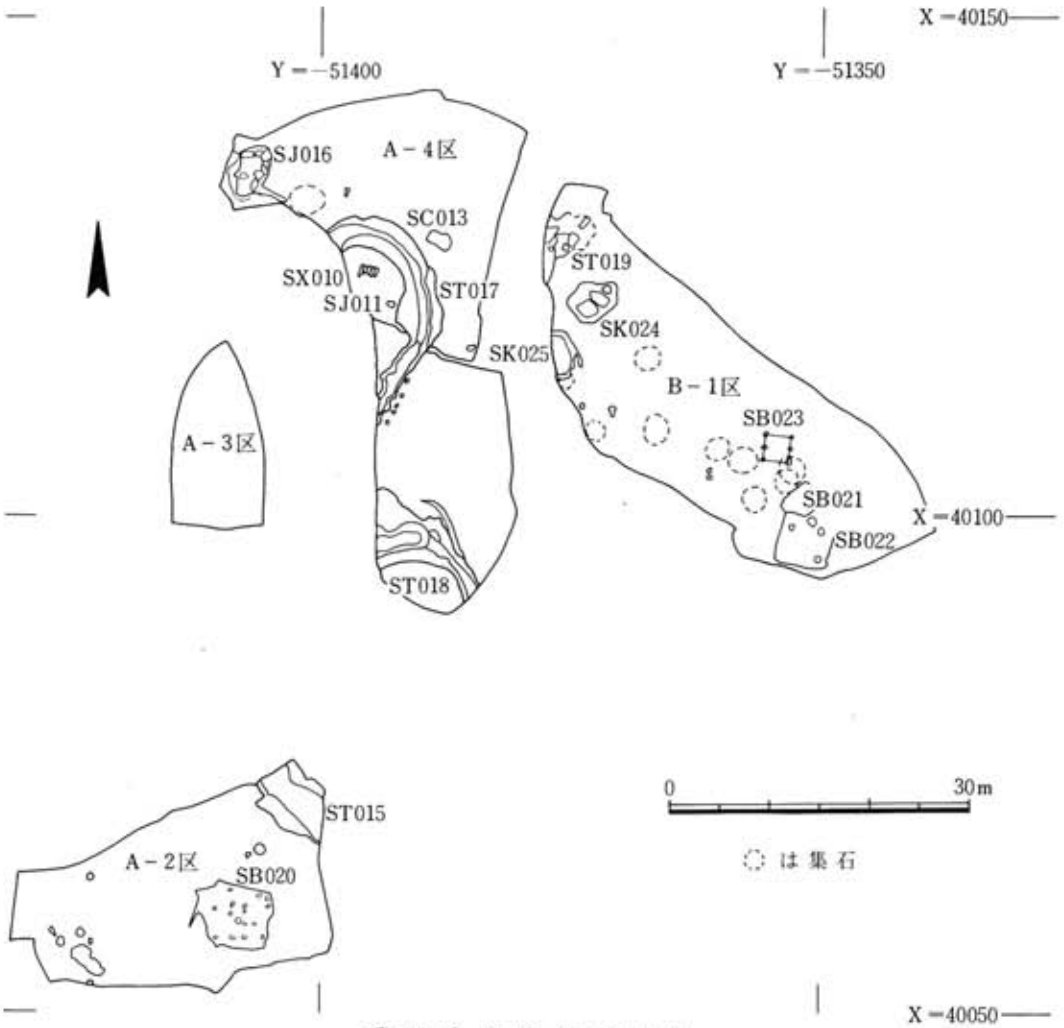
縄文時代の集石遺構が，これほどまとまって確認されたのは県下で初めてである。しかし，その構造は一様でなく，集められた石にも大小差がある。特に異なるのは下部構造で，小穴をもつものとそうでないものがある。いくつかの集石の間から，押型文土器が出土している（PL. 6～9）。

支石墓・壺棺墓は，有明海周辺で確認された諸例の中でも，古い時期に属するものであるが，ほぼ同時期の佐賀市久保泉丸山遺跡例のように群集してはいない（Fig. 5～8，PL. 10～12）。

古墳時代の竪穴住居跡の1基は，出土土器から前期のものと考える。遺構自体に，さほど特徴的なことはみられないが，土師器の高杯・壺・器台や鉄製品（鎌・斧）などが一括して出土しており，佐賀平野部における稀少例として注目される。

古墳は5基とも破壊がひどく，残存状態は良好でない。ただ，その中で比較的共伴遺物を多く確認できた古墳が1基ある。複室の石室をもつ古墳で，前室より須恵器・土師器を50点あまり，鉄鏃数点，玄室より耳環・ガラス小玉・切子玉・勾玉・管玉などの装身具類が出土した（Fig. 9～18，PL. 13～20）。

香田遺跡における各時代ごとの遺構の概略は以上のとおりである。次に，香田遺跡の発掘調査の記録を記し，報告する。



香田遺跡遺構配置図

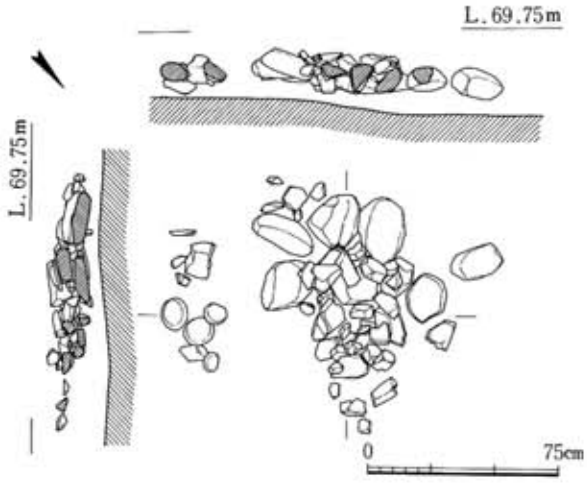
2．遺　　構

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は，B地区1区の集石9基とA地区4区の埋葬跡2基である。時期は，集石が押型文土器の出土や類似遺構の検出例などから縄文時代早期（後半）に，埋葬跡は供献土器や壺棺から縄文時代晩期末から弥生時代初頭に位置づけられる。

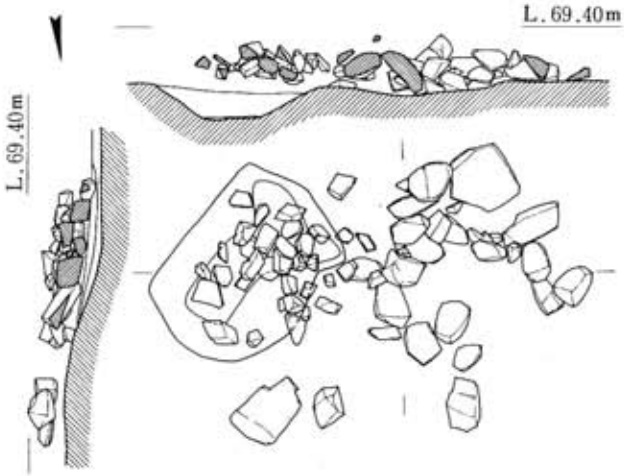
集石はB地区1区で9基検出され，配置状況から北西群と南東群の2つに分けられる。北西群はSX001集石からSX004集石まで各々の間隙が5m前後あるのに対し，南東群はSX005集石からSX009集石で，こちらは隣の集石との距離が0.5mから3mしかなく密度が高い。標高で集石の配置を見ると68.1mから69.7mの間に入る。縄文時代の集石遺構の発見は県下では初めてであり，近年増えつつあるこの種の遺構を考える上でも重要である。

埋葬跡は支石墓と壺棺墓が各1基ずつ，A地区4区から検出された。支石墓は上石が南に2mほど動いており，支石墓を最も特徴づける上石を欠く形になるが，配石状況と供献土器から支石墓だとの判断をした。壺棺墓は上部を少し破壊されているが，棺の埋置状況は十分に知ることができ，支石墓と合わせてこの時期の埋葬遺構の新しい知見を得た。



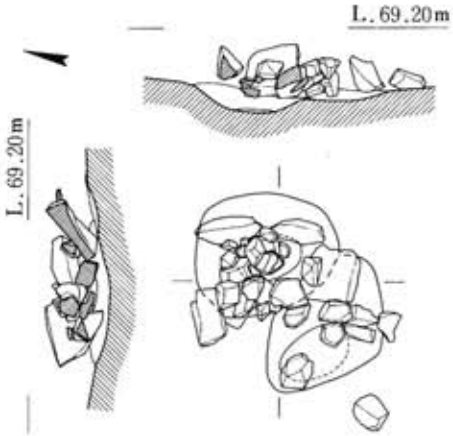
SX001集石（PL.6－1，7－1）

B地区1区中央部で，集石群の中では最も高い位置にある。石は1mほどの範囲に配置されているが不揃いで，集石は明確な形状ではない。集石は他に比して大型で角の丸い石を配し，その上に一回り小さく，やや角のある石を用いている。集石は地山から5cmほど上にあり，集石下に土壙はない。また集石から南西にやや離れた位置から磨石が集中して4個出土した。集石上面からは晩期粗製土器の底部が出土した。



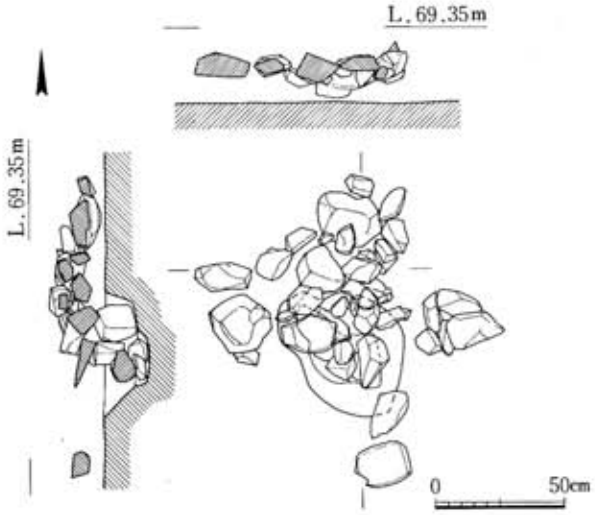
SX 002集石(PL.6−2, 7−3)

B地区1区中央部の西側発掘区壁際で，確認できた集石群の中では最も西に位置する。集石は0.05～0.1mの石を用い，また中央には磨石も混じり0.6mほどの範囲に集まっているが，明確な形状ではない。この西側にあり0.2m大の石を用いた集石はSK 025土壙に関連があるもので縄文時代のものではない。集石下には，長さ0.77m，幅0.55m，深さ0.14mの土壙が認められたが，土壙内に石はなく遺物は集石の中から磨石が検出されている。



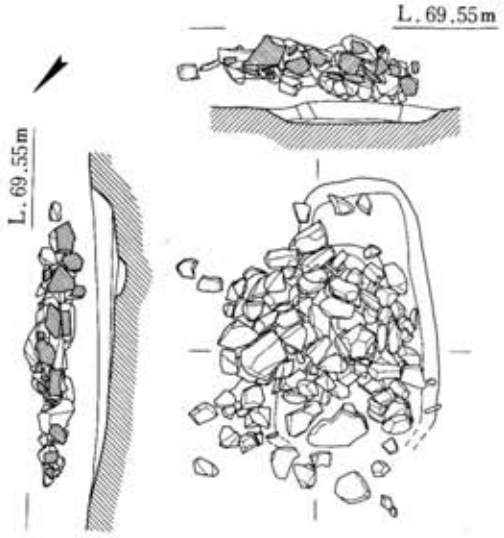
SX 003集石(PL.6−1, 7−2)

B地区1区中央部の西側発掘区壁際で，西側グループの中では最も低い位置にある。この集石は他のものと比して形状において異なっている。集石は径0.6mほどで南側がやや破壊をうけているが全体としては旧状を知ることができる。0.2m大のやや大きい石を土壙内周囲に配し，その間及び底面には0.1m大の小振りの石を置いて築いている。土壙は大きさが0.55×0.47×0.10mで平面は楕円形断面皿状である。出土遺物はない。



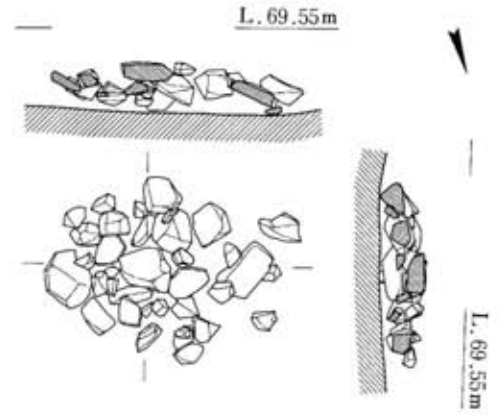
SX 004集石(PL.6−1, 8−1)

B地区1区中央部で西側グループの中では最も東寄りである。集石は1.2mほどの範囲に配置されているが，明確な形状を示していない。集石下には0.58×0.42×0.17mの土壙があり，中まで集石がつまっている。出土遺物としては押型文の破片が出土している。



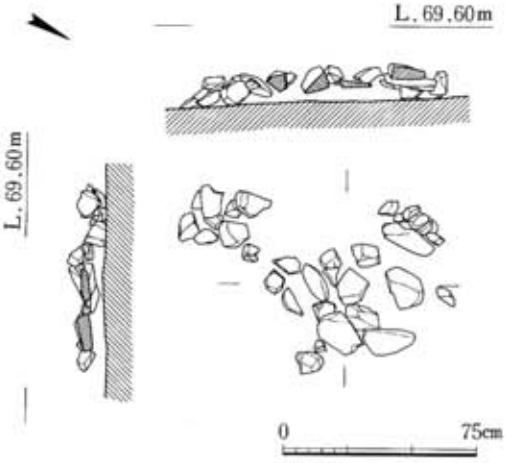
SX005集石（PL.6, 8－3）

B地区1区の東南部に位置し，東南2mのところにSX006集石がある。本遺構は，集石，土壙ともに他のものと著しく異なる。石はその数，密度ともに大きく，集石と言うより積石と言えるほどである。土壙は平面長方形で北側は削られ不明瞭であるが，広がっており長さ1.0＋αm,幅0.7m,深さ0.1mある。底面はほぼ水平で，南寄りに直径0.32m,深さ0.13mの穴がある。この性格は不明である。集石下より押型文土器片が検出された。



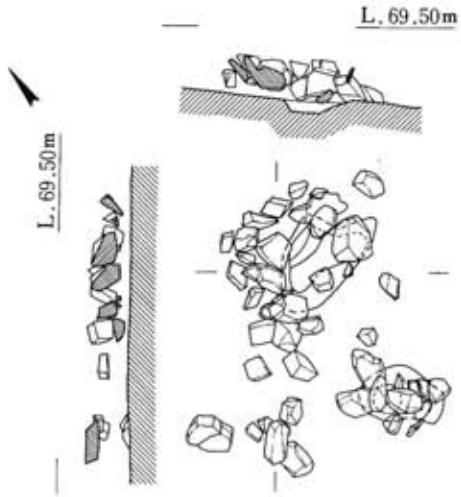
SX006集石（PL.6-2, 8－2）

B地区1区東南部に位置し，SX005の南東2mほどにあたる。集石は平面楕円形で，長さ1.0m，幅0.7mある。0.2m大の石が並び，その隙間にそれより小さい石を用いている。集石下には土壙が検出されていないが，ただ，集石の存在する範囲内がややくぼんでいる。遺物としては楕円押型文が1点出土している。



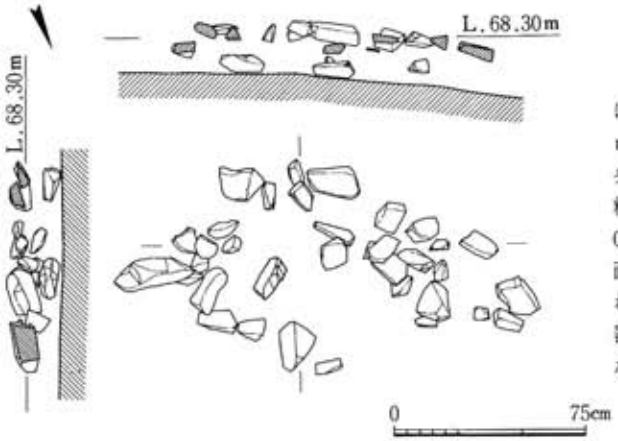
SX007集石（PL.6-2, 9－1）

B地区1区東南部に位置し，南に隣接しているSX008集石とともに集石群の中では最も東に存在する。集石はSX008集石と一見連続しているが，途中で集石が途切れており別の集石である。石は0.7×0.5mの範囲に配置されているが不揃いで南側にやや離れて小さな集石がある。集石下に土壙はなく，集石は地山から0.05mほど上にある。集石直上から楕円押型文土器が出土した。



SX008集石(PL.6, 9-2)

B地区1区東南部に位置し，SX007集石北側に隣接している。石は1mほどの範囲で配置されているが不揃いで集石は明確な形状ではない。集石は北側・南側それぞれに大小のまとまりをもち，集石下に各々小穴をもつ。北側の穴は0.49×0.28×0.24m，南側の穴はやや小さく0.33×0.22×0.30mある。集石は地山から0.05～0.10m上にある。楕円押型文土器が集石間より出土した。



SX009集石(PL.6, 9-3)

B地区1区東南部に位置し，集石群の中ではもっとも低い場所である。石は1.6×0.8mの範囲に菱形に散在している。集石の中央部は隙間が大きくあき，また全体として石は粗く配置されている。集石の多くは地山から0.1mほど上にあるが，10個ほどの石は地山直上にあり，集石は上位と下位の石に分けられる。上位と下位の集石の間からは押型文土器が，集石の東寄りからは磨石が1個出土した。集石下に土壙はない。

検出された集石の配置状態を見ると，一定の高さに沿っていることがわかる。集石は標高69m前後の高さで配置されており，配置に一定の規則性があったことをうかがわせる。

検出された9基の集石は残存状態が良いとはいえない。このため十分な検討を加えることはできないが，その中には若干の形態の差異がありそれを整理分類すると次のようになる。

Ⅰ類　石の大部分を地山から0.05～0.10m上にほぼ平坦に配した，掘り込みがほとんどない集石で，平面は0.7～1.5m前後の不整形である。この中には集石下に土壙をもつもの（a）ともたないもの(b)とに分けることができる。本遺跡の集石の大部分がこの類である。

Ⅱ類　集石が花弁状に土壙内に配されたもの(SX003)。

Ⅲ類　0.10～0.15m前後の石を積石状にして集石をつくったもので，集石下には長方形の土壙がある(SX005)。

この2つは他の集石遺構とはあきらかに異なり，特にSX005は埋葬跡の可能性がある。

集石の石の中には焼けていると考えられるものが少なからずある。焼土，炭化物の検出はない。

SX 010支石墓（Fig. 5～7，PL. 10，11，12－1）

A地区4区中央部に位置する支石墓である。この支石墓は下部構造が石蓋土壙墓で，棺部の土壙は平面不整長方形をなし，長さ1.45m，幅1.21m，深さは西側で0.45m，東側の最深部で0.64mある。棺底の南寄りには0.2mほどの角礫1個と，小穴があるが性格は不明である。棺部の両側辺の上位には0.2m大の石が数個ずつあり，蓋石を固定するためのものと考えられる。蓋石は4枚の板石と隙間を埋める塊石とからなり，その周囲に0.4m前後の塊石5個と1.5mほどの棒状の石1個とが支石として配置されている。上石は取り去られているが，この遺構の南4mのところに地中に¼ほど立てて埋められた大石があり，これは支石墓の上石と考えられる。この石は長さ2.5＋αm，幅1.8m，厚さ0.7mで板状をなす。表裏を比較すると，一方の面に

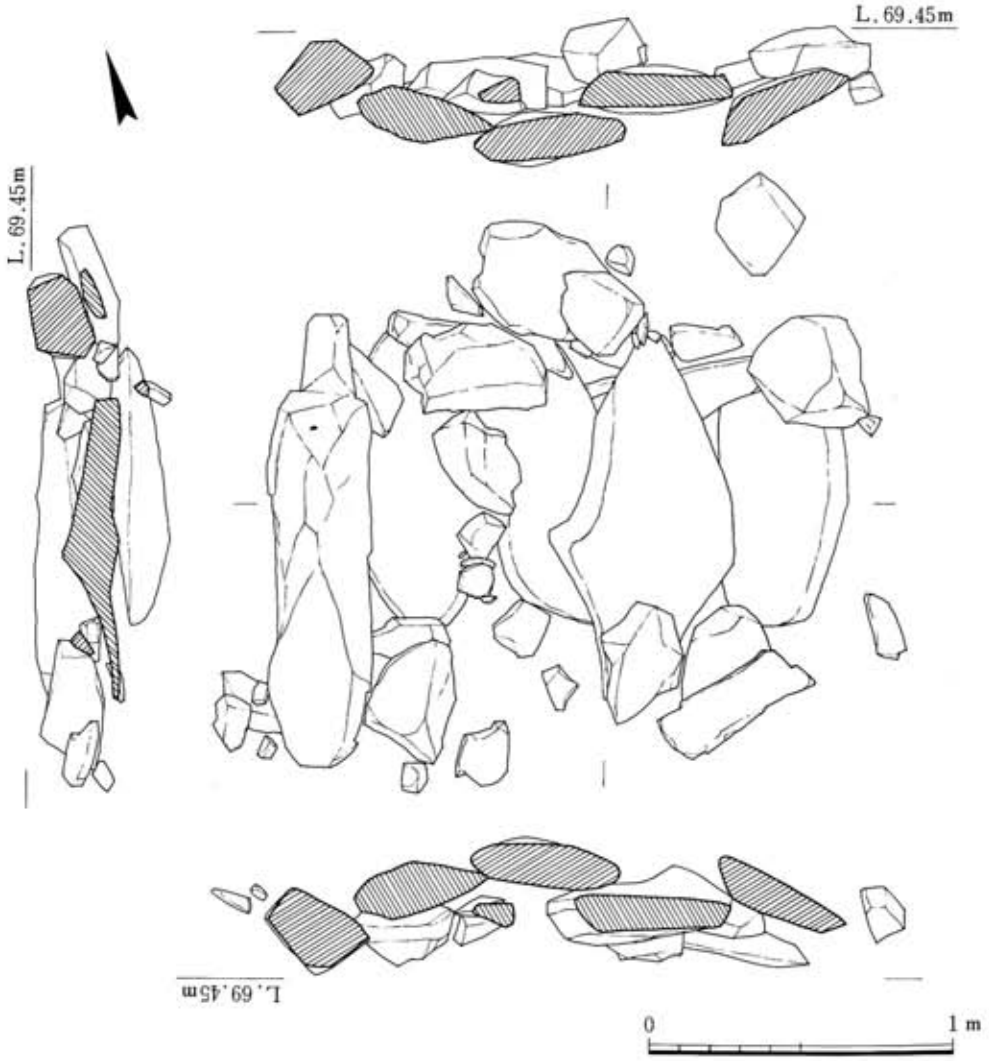


Fig. 5　香田遺跡SX010支石墓実測図　(1)

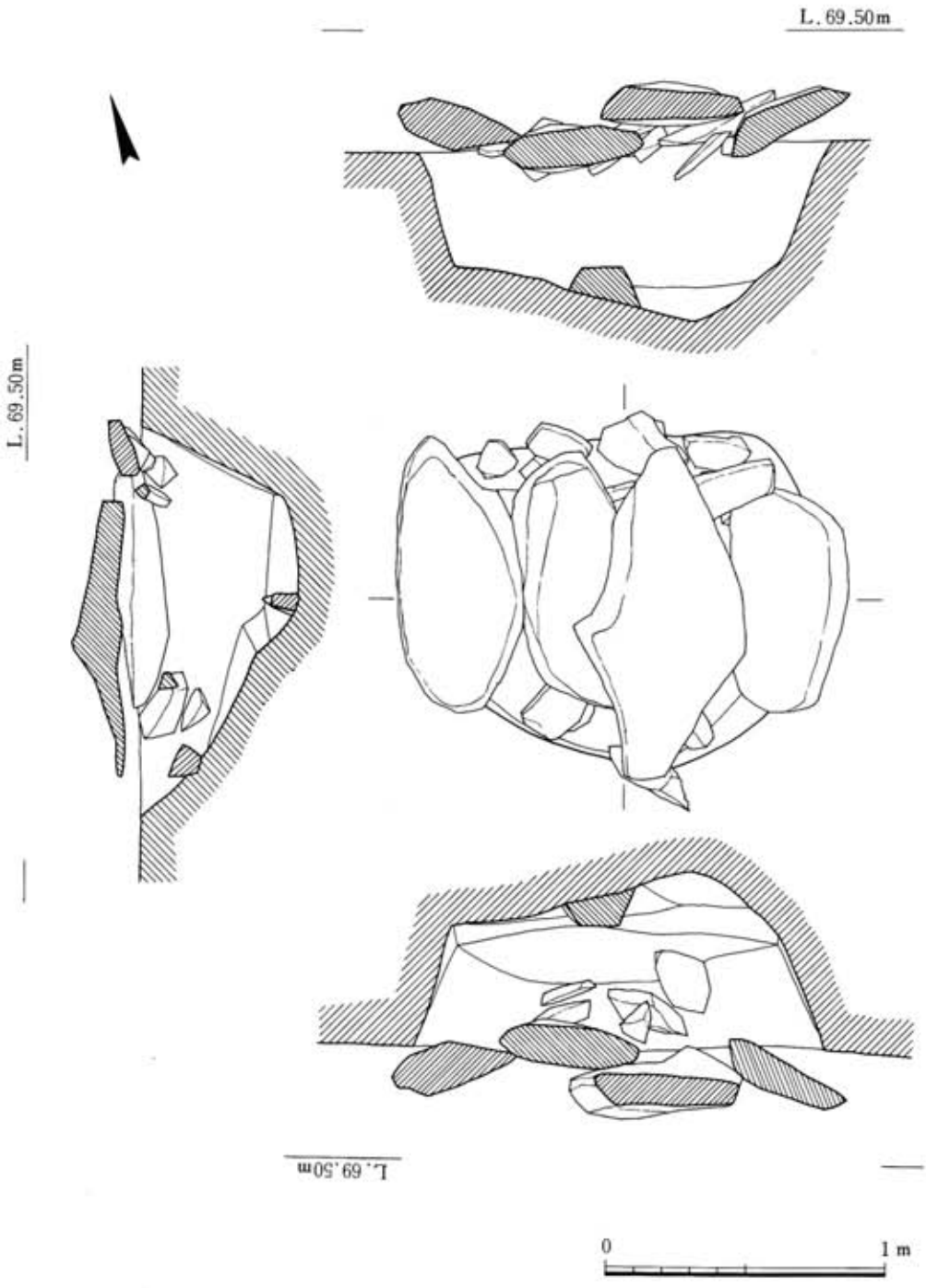


Fig. 6　香田遺跡SX010支石墓実測図　(2)

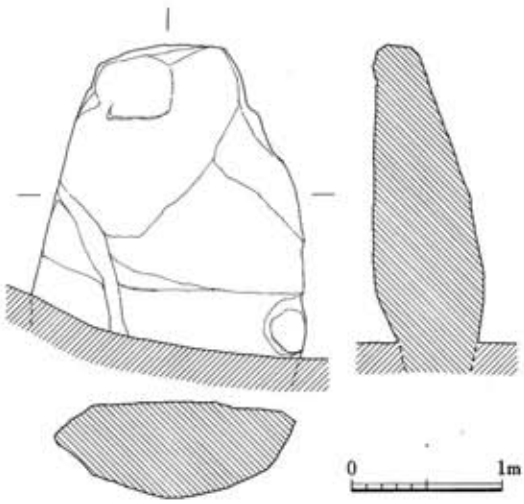


Fig. 7　香田遺跡SX010支石墓上石出土状況実測図

対して他の面は丸味がある。主軸方位は棺底の高低から埋葬頭位を西側と考えN−W74°とする。

出土遺物としては，蓋石上より壺2個体が，また棺部埋土より不明土製品2点が出土している。

この支石墓の棺部土壙の大きさでは，成人の伸展葬には無理がある。もし成人の埋葬を考えるなら屈葬を考えざるを得ない。

SJ011壺棺墓（Fig. 8，PL. 12−2・3）

A地区4区中央部に位置する小型の壺棺墓である。墓壙は平面がやや変形した楕円形で，底面が舟底状をなしている。長さ0.87m，幅0.55m，深さ0.26mで上部は削平されている。

棺の埋置状態は，棺の閉塞にやや特異な方法を用いており注目される。棺の主体は口頸部を打ち欠いた壺で，蓋には肩部から上だけの壺を口縁部を上にして棺と組み合わせている。そして，その上に高杯を，これは口縁部を下に向けて組み合わせている。組み合わせの固定には粘土を用いていない。傾斜角＋27°，主軸方位S−E68°。他の遺構とは切り合っていない。

副葬品等の出土遺物はないが，SX010支石墓と本遺構との中間位置から赤色顔料を塗布した壺が出土しており供献土器の可能性がある。

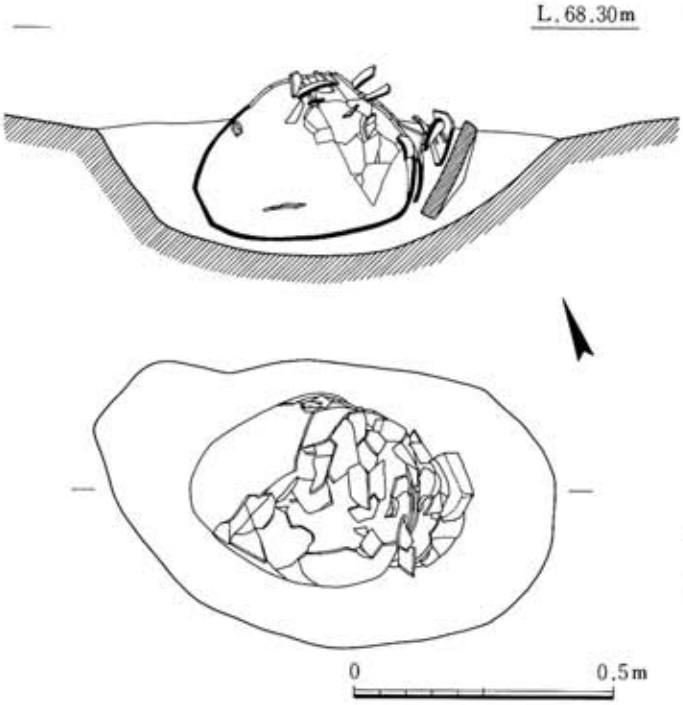


Fig. 8　香田遺跡SJ011壺棺墓実測図

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構としては，石棺墓1基，土壙墓1基，古墳5基，住居跡3基であった。いずれも上部が削平を受け破壊が著しい。遺物は遺構に伴うものはST016古墳を除き少なく，表土からの出土が多かった。種類は土師器・須恵器・鉄製品・装身具である。

SC013石棺墓 (Fig. 9，PL. 13)

A地区4区北東部に位置し，この区の最高所である。石棺は長軸をS−E68°30′方向にとり，棺長1.34m，棺幅0.52m，棺深0.35mで東側はやや狭くなっている。石棺を埋置した墓壙は，長さ2.65m，幅1.68m，深さ0.12mあり，平面は不整形である。まず南北両側壁に5枚ずつ，北小口に2枚，南小口に4枚の板石を立てて腰石としている。西小口は角ばっているのに対して，東小口はやや小さい板石で隅を丸く作っている。腰石を立てるのに必要最小限の穴を掘り込んでいるようだが明確ではない。東小口と両側壁の一部には，腰石の上にさらに1～2段持ち送り気味に平積みしている。棺底には厚さ0.05m程の板石がほぼ全面に敷かれていた。蓋石はまったく見られず，破壊が著しい。石棺内には，副葬品はまったく見られなかった。石棺の墓壙埋土中からは須恵器小片が1点出土した。

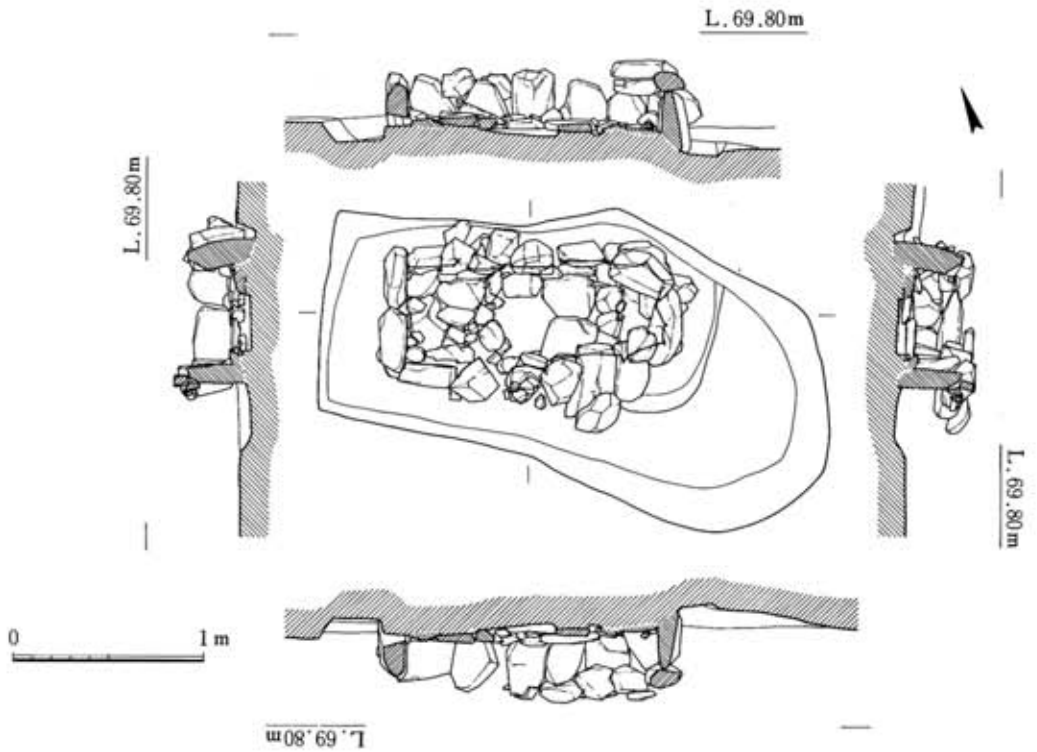


Fig. 9　香田遺跡SC013石棺墓実測図

SP 014土壙墓（Fig. 10, PL. 14）

A地区4区中央部に位置し，西側1.5mのところをST017古墳の周溝がめぐっている。土壙の平面は不整楕円形で，断面は皿状をなしている。長さ1.16m，幅0.80m，深さ0.06＋α mあり，底面は北東側が高く南西方向に傾斜している。遺物は底面上から破砕された甕2個体と，

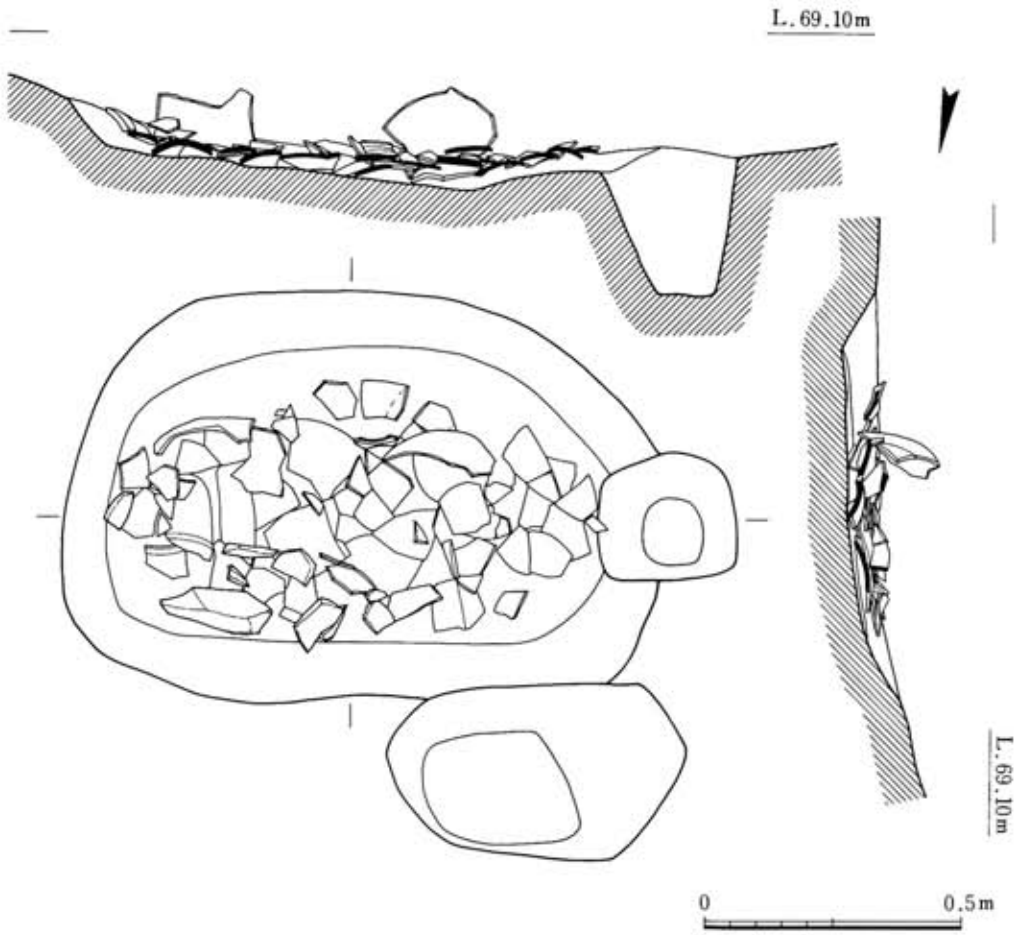


Fig. 10　香田遺跡SP014土壙墓実測図

その上から鉄釘20点以上が検出された。西側の穴2つは本遺跡との関連は不詳である。

ST 015古墳（Fig. 11, PL. 15－1）

A地区2区の北東隅に，周溝の一部がわずかに残っているだけで，内部主体その他はまったく不明である。残存する周溝の幅4.60m，深さ0.30mで，非常に浅い。埋土中より，須恵器の大甕片が出土しているが，古墳の周溝とする決め手に欠けており，単なる溝の可能性もある。

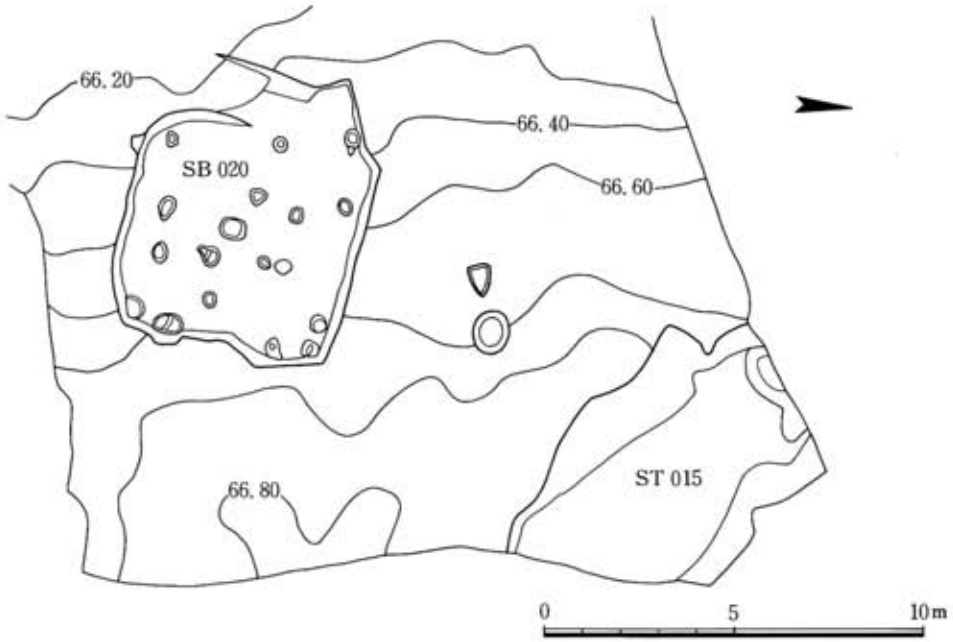


Fig. 11　香田遺跡ＳＴ015古墳墳丘実測図

ＳＴ016古墳（Fig. 12, PL. 16, 17）

Ａ地区４区の北東隅，丘陵の西側傾斜面上に位置する。複室の横穴式石室をもつ古墳である。すぐ西側は，急な崖となって，落ちている。

墳丘　ほとんど削られているので，墳形は不明である。現在残っているのは，内部主体部だけで，羨道部も削られてしまっている。また，周構はない。

内部主体　玄室は主軸をＳ－Ｗ9°30′方向にとり，南方向に開口している。残存長（羨室部も含む）4.04ｍ，残存幅2.52ｍ，推定深さ0.6ｍの長方形の掘り形に，長さ1.74ｍ，推定幅1.8ｍの正方形に近い石室を造っている。各壁の腰石は，奥壁３，東側壁２であるが，使われた石材の大きさは一様でなくかなり異なる。特に，東側壁部は，奥壁側に長さ1.40ｍの安定感のある大石を据えた後，袖石との間を埋めるため，袖石側に長さ0.42ｍ，幅0.16ｍの平たい石を用いており，差が大きい。しかし，それらの上の積石の様子をみると，袖石側の積石は２個の腰石の形状を考慮した石の面の使い方をしており，石室構築の一手順を示すものとして注目できる。また床面には羨室と同様の石を敷いているが，玄室の敷石の方がやや小さい。玄門は両袖式で，長さ0.4ｍ，幅0.64ｍである。東側袖石の高さは0.70ｍで，その上に石材を１個平積みにしている。羨室は玄室の南側に造っているが，西側壁は破壊されてしまっている。推定長1.40ｍ，推定幅1.40ｍの，平面が正方形の石室である。東側壁には，長さ1.26ｍ，高さ0.50ｍの腰石が１個あり，その上（玄室側）に２段の壁が残っている。床面には，幅0.3ｍ前後の丸み

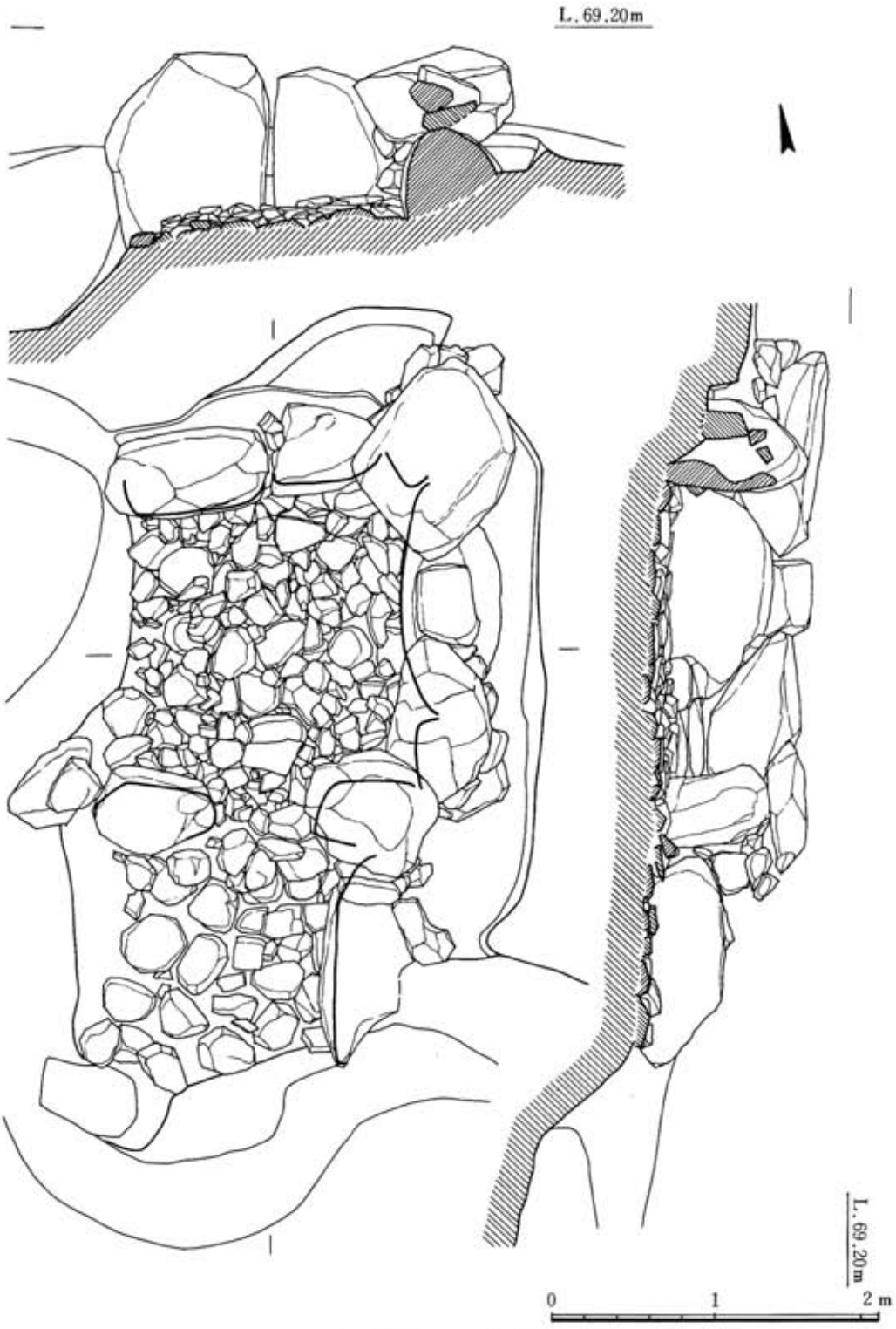


Fig. 12　香田遺跡ST016古墳石室実測図

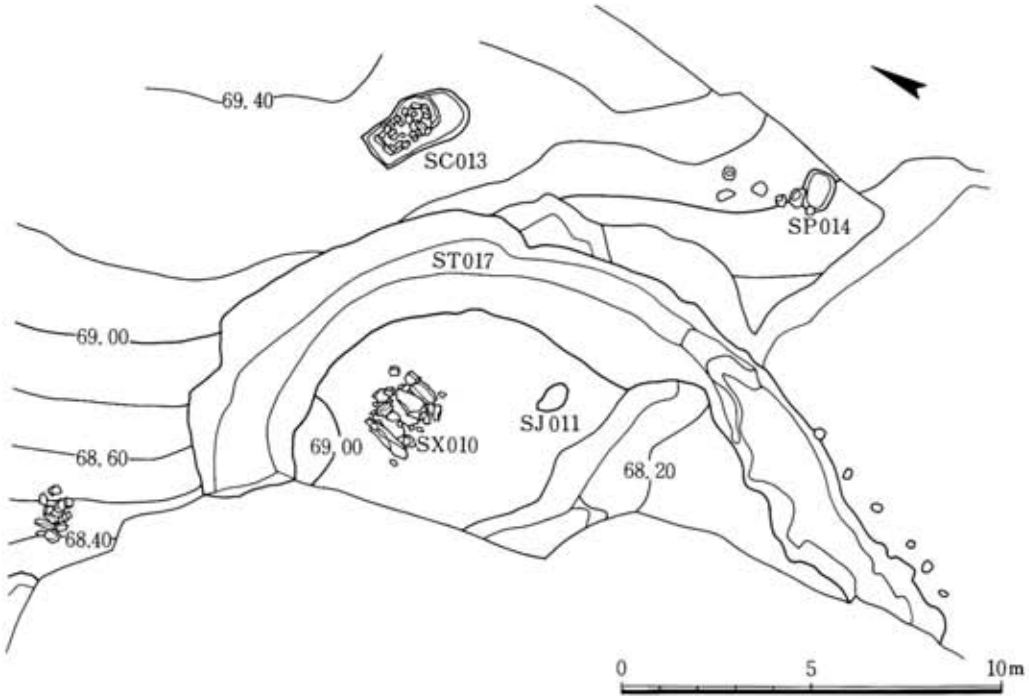


Fig. 13　香田遺跡ST017古墳墳丘実測図

のある石を敷いている。

遺物は，羨室から多数の土師器・須恵器の他に鉄鏃が，玄室から勾玉・管玉・ガラス小玉・耳環が出土している。また玄室内から小量の人骨片も出土している。この両室の遺物をみると，羨室には50数点も土器類があるのに対し，玄室には一点の土器もなく，両室及び遺物に何らかの性格の差があったものと考える。

ST017古墳（Fig. 13，PL. 15－2）

A地区4区のほぼ中央，丘陵の西側急傾斜面上に位置しているが，周溝部分だけ，それも東側半分位しか残っていない。内部主体その他はまったく不明である。

周溝の南半の平面形が，北半のそれの円弧と比べるとやや南へ流れ，不整形であるが，北半の形状からみて，ST017古墳は円墳と考える。復元径は10.60mである。

また削平がひどい周溝南半は深さ0.2～0.3m程しかないが，北半は幅2.50m，深さ0.6mの断面がV字形で，残存状態が良い。

遺物は，周溝埋土から，須恵器・土師器片が出土している。

また墳丘部にはSX010支石墓とSJ011壺棺墓が残っているが，墳丘構築による破壊はほとんど受けていない。

ST 018 古墳（Fig. 14, 15, PL. 15－3）

A地区4区の南端，丘陵上平坦面に位置しているが，周溝の北東部分（全周の約¼）しか残っていない。内部主体その他はまったく不明である。

残存している周溝の東側と西側では，断面形がかなり異なっており，東側が幅2.2m，深さ0.36mで角ばったU字形であるのに対し，西側は幅5.76m，深さ0.56mで，ゆるやかに傾斜するU字形である。周溝埋土の状況は，この西側部分で良く観察でき，須恵器（杯・壺）土師器（杯）等の遺物もここから出土している。

またこの残存周溝部分から，墳形を明示するのは困難であるが，墳丘部と周溝部の境界（周溝南側の上端の線）から，一応円墳と考える。復元径は12mである。

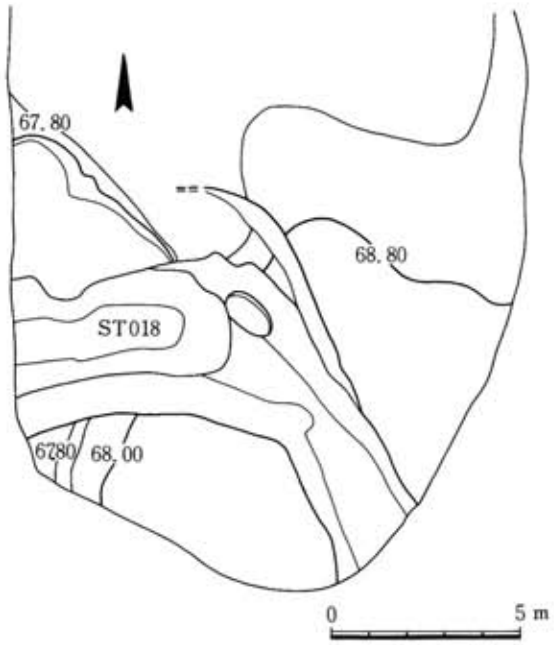
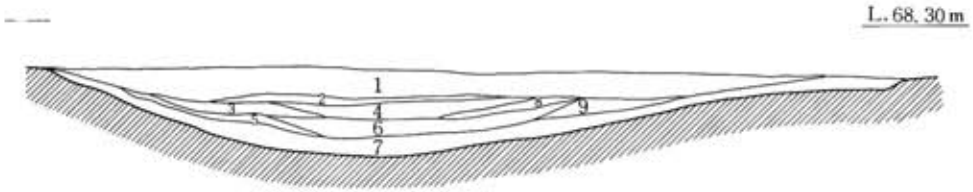


Fig. 14　香田遺跡ST018古墳墳丘実測図



1．灰褐色土　2．灰白色土　3．灰黒色土
4．黄色土　5．灰黒色土　6．黒褐色土
7．青灰色土　8．褐色土　9．灰黒色土

Fig. 15　香田遺跡ST018古墳周溝土層図

ST 019 古墳（Fig. 16, PL. 18）

B地区1区の北端，丘陵上平坦面に位置する。単室の横穴式石室を持つ古墳である。

破壊がひどく，現在残っているのは，玄室の東側壁腰石と敷石，羨道部東側壁の一部だけで，墳丘の様子などはまったく不明である。また周溝は持っていない。

内部主体　玄室は主軸をS－W32°方向にとり，南方向に開口している。PL. 18にみられるように，奥壁，西側壁の各腰石が後方に倒されてしまっているが，それらと敷石，仕切り石

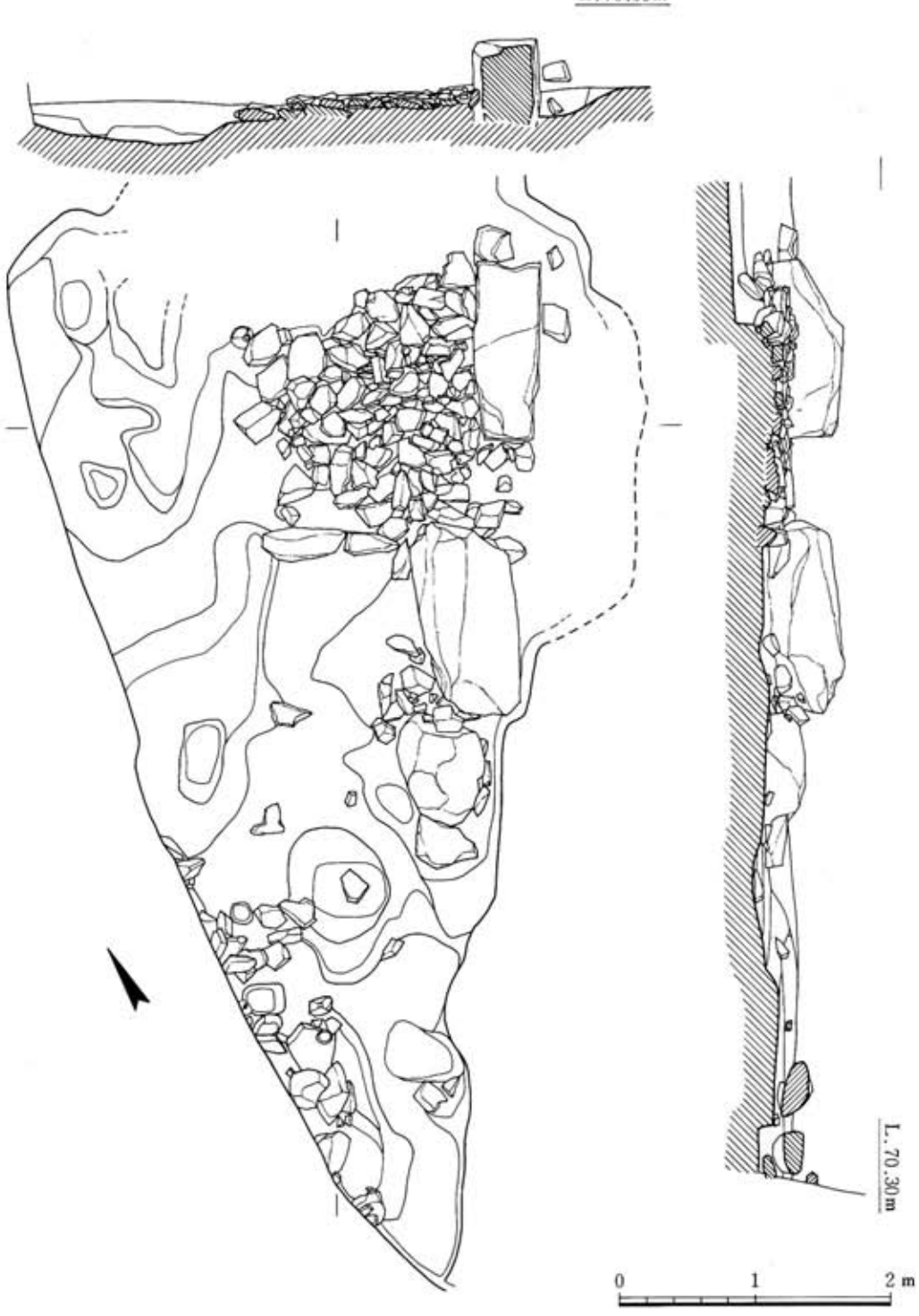


Fig. 16　香田遺跡ST019古墳石室実測図

の状況から玄室の大きさを推定すると，幅約1.9m，長さ約2.0mの，平面が正方形に近い石室だったようである。玄室床面には，幅0.2～0.3mの角ばった石を多く使って，敷いている。東側壁部にただ1個残っている腰石は，厚さ0.5m程で安定感のある石材を用いている。

また玄室と羨道の各床面の高低差はほとんどない。

羨道　玄室南側に造っているが，入口部を最近の農道建設により破壊されているため，規模や構造などはまったく不明である。

遺物は，玄室から須恵器（平瓶），耳環・管玉・小玉が，羨道から須恵器（杯・蓋・甕）が出土している。

SB 020住居跡（Fig. 17, PL. 19, 21－2）

SB020住居跡は2区中央よりやや東南部に位置する長方形の住居跡である。本遺跡の住居跡の中では一番大きいもので，南北6.2m，東西5.95mを測り，壁の高さは0.2～0.4m程である。住居跡内には大小18個の穴があるが，柱穴は不明である。炉跡，焼土は検出されなかった。住居跡内より布留式土器に類似した土器（壺・高杯・器台等）が出土し，古墳時代前期の好資料である。

SB 021住居跡（Fig. 18, PL. 20）

SB021住居跡は1区南側に位置する長方形の住居跡でSB022住居跡に切られ，また北東部分に削平を受けその全容を知ることができなかった。一辺3.52mを測り壁高約0.1m程を残す。住居跡西隅には大きい穴があるが性格は不明で，また柱穴の関係も不明である。

SB 022住居跡（Fig. 18, PL. 20）

SB022住居跡は1区南隅に位置する長方形の住居跡である。南北5.45m，東西4.85mを測り，壁高0.1～0.2m程である。住居跡内には大小18個の穴があるが，その内柱穴と考えられるものはA～D（A　0.64×0.41m，深さ0.6m），（B　0.78×0.66m，深さ0.75m），（C　0.78×0.64m，深さ0.63m），（D　0.48×0.46m，深さ0.33m）の4個である。北壁部には0.72×0.89mを測る穴があり，カマド跡である。北東部分は削平のため壁をこわされている。SB021住居跡を切る。

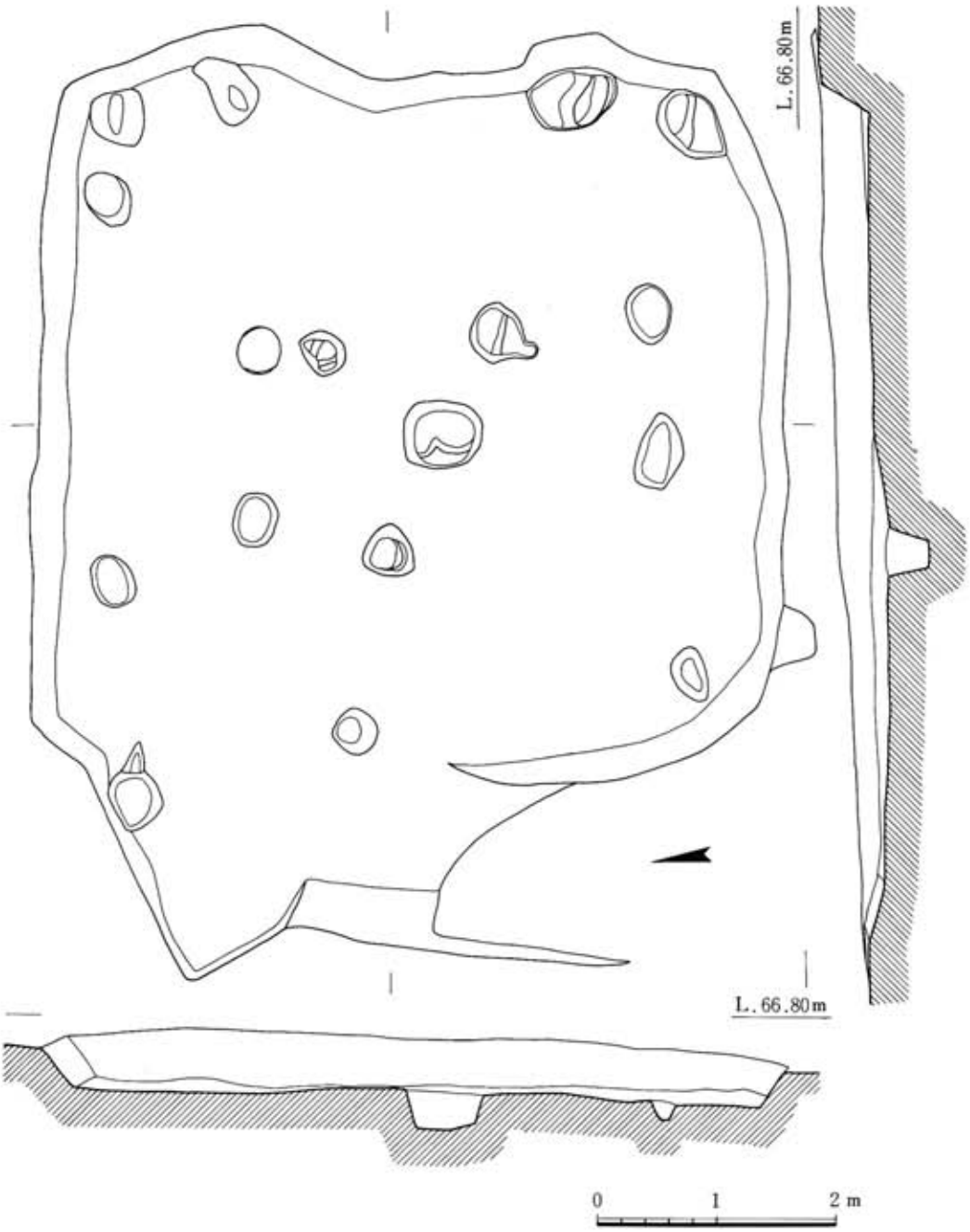


Fig. 17　香田遺跡ＳＢ020住居跡実測図

(3) 歴史時代

歴史時代の遺構としては，掘立柱建物跡１棟，土壙２基，集石遺構１基を確認した。掘立柱建物跡は２×１間である。土壙は大型で，集石遺構とともに性格については不明である。

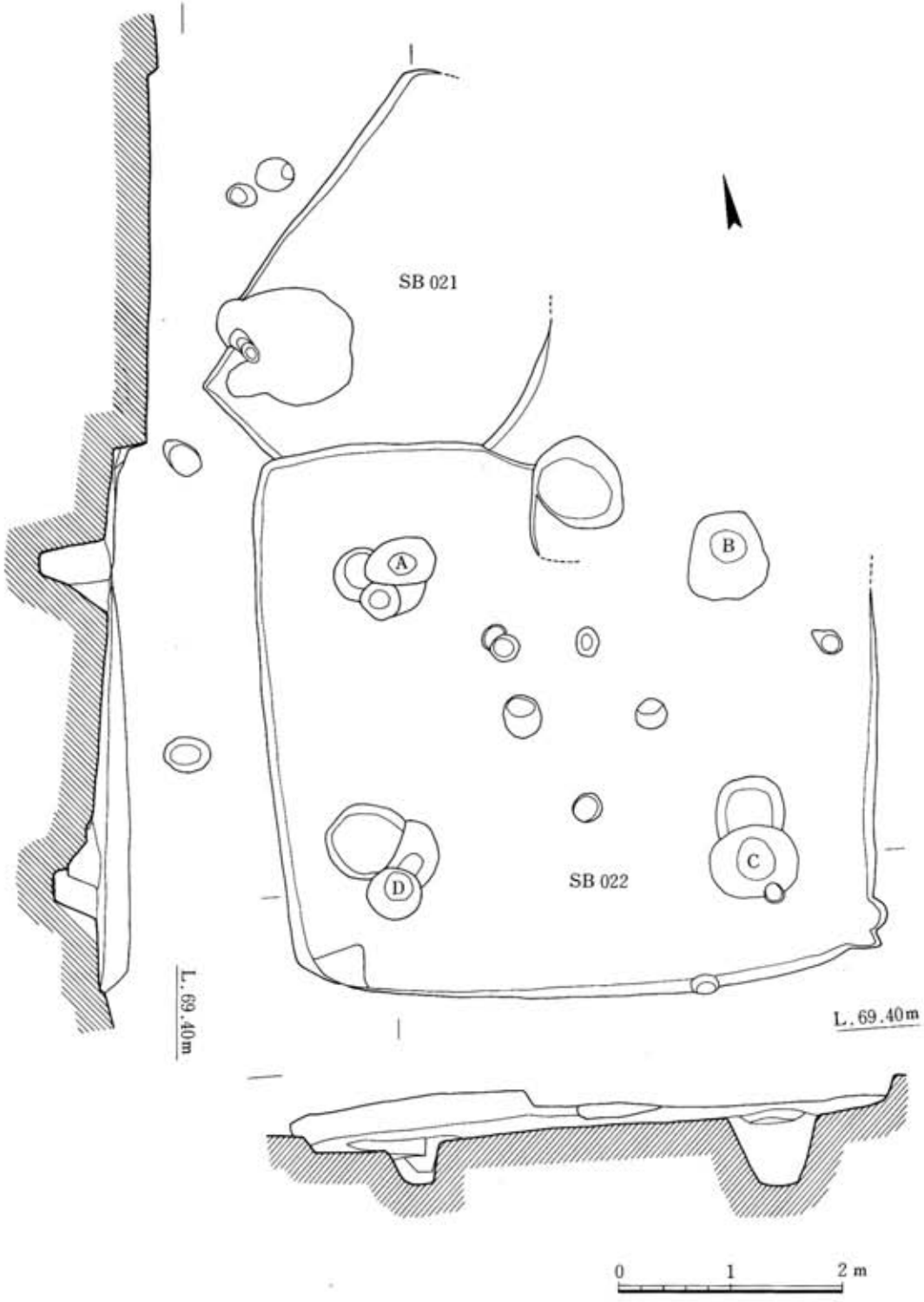


Fig. 18　香田遺跡SB021・SB022住居跡実測図

SB023掘立柱建物跡

(Fig. 19, PL. 21－1)

SB023掘立柱建物跡は1区南側，SB021・022掘立柱建物跡のすぐ北側に位置する。2×1間の東西棟の建物跡である。梁行2.5m，桁行2.4mを測る。西桁行の柱間は等間，東桁行は南から1.0m，1.4mと長短がある。6個の柱穴の深さは約0.15～0.30m程，径0.24～0.65mとバラバラである。棟方向はS－W2°である。

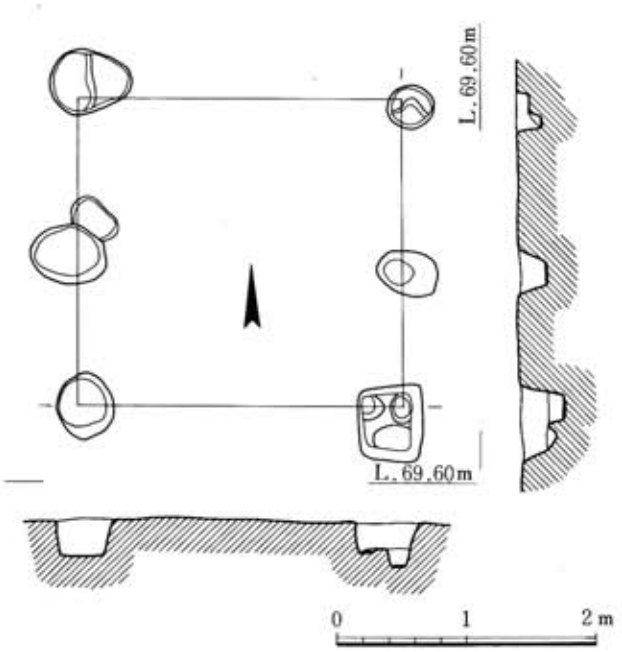


Fig. 19　香田遺跡SB023掘立柱建物跡実測図

SK024土壙(Fig. 20, PL. 22－1)

SK024土壙は1区北西部に位置する。不整楕円形の土壙で，長さ5.1m，幅4.6m，深さ0.73mで土壙底部に3カ所の浅いくぼみを持つ。北側部分には大小の石が底面より0.26～0.5mの幅に埋積しており，その石の間に土器片が混入する。

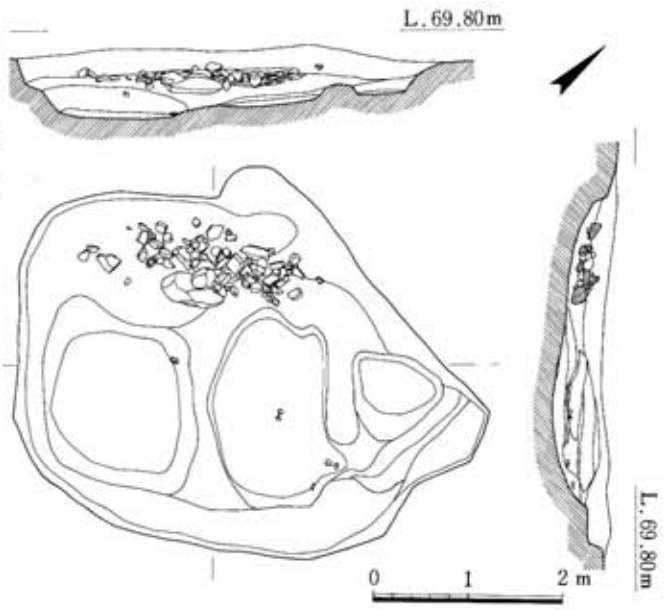


Fig. 20　香田遺跡SK024土壙実測図

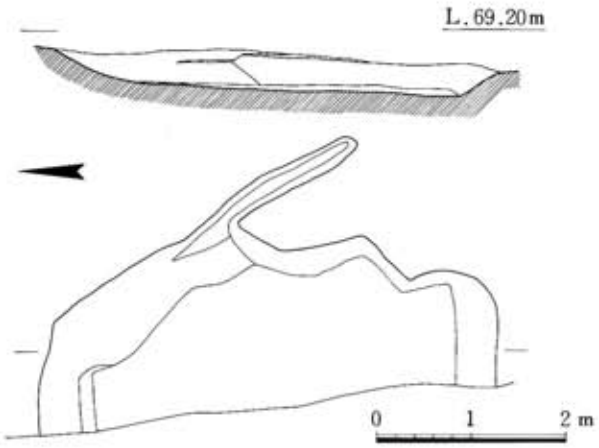


Fig.21　香田遺跡SK025土壙実測図

SK025土壙
（Fig.21, PL.22－2）

SK025土壙は1区西側SK024土壙の南西に位置する不整楕円形の土壙で，長さ4.9m，幅1.9m，深さ0.45m。東側部分より長さ1.76m，幅0.27m，深さ0.1mの溝状の張り出しを持つ。

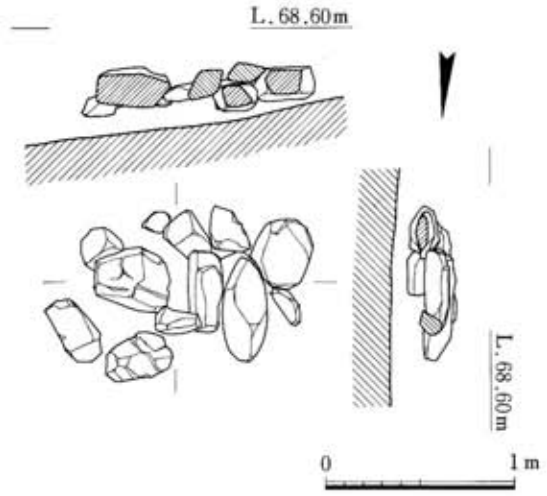


Fig.22　香田遺跡SX026集石遺構実測図

SX026集石（Fig.22）

A地区4区北西部で，ST016古墳とST017古墳の間に位置する。集石は0.2～0.5mの石を用い，平面楕円形（1.5×0.9m）に配置されているが不揃いで，明確な形状ではない。地山から0.05mほど上にあり，集石下に土壙はない。石の間からは糸切り底の土師器が出土した。

3．遺　　物

(1) 縄文時代

縄文時代の遺物は土器・石器で，集石埋葬跡及び遺構検出中の表土・包含層から検出されている。遺構から検出された遺物は少なく，大部分は包含層から出土した。

土器（Fig.23～28，PL.86，87－1～3，88）

土器は時期的には縄文時代早期から晩期までの各期の出土があるが，その中でも後期末から晩期にかけてのものが多く過半数を占める。次に多いのが早期後半の押型文土器とそれに伴う土器群である。その他少量の前期・中期の土器がある。土器は大きくⅠからⅩ類の10種に分けられる。

Ⅰ類（1～23）

いわゆる押型文を施している土器群である。口縁部はゆるく外反し甕形をなす。底部は出土数が少なく明確ではないが，おそらく砲弾形をした体部に小さな平底がつくと考えられる。施文の種類としては，楕円文・山形文・連続楕円文・沈線文・格子目文（図示していない）等があげられ，中でも圧倒的に楕円文が多い。施文は楕円文と山形文，沈線文と楕円文など組み合わせて使われているものが多く，様相を複雑にしている。押型文土器は，その基本的な編年観として繊細な文様から粗大な文様へという流れが考えられている。これは豊後地域の調査研究(註①)によって形作られたものであるが，他地域においても基本的流れとしてはとらえうるものである。しかし，佐賀を初めとする北部九州地域では十分な編年は確立しておらず，したがって香田遺跡の押型文土器群の位置づけはまだ困難な領域にある。集石はこの土器群が関連すると考える。

Ⅱ類（24）

口縁部の外面に，平行沈線文と刺突文の構成によって文様を施すもので，口縁部を肥厚させるなどの特徴はないが，平栫Ⅱ式の範中に入れて考えたい。1点出土。

Ⅲ類（25）

口縁部の外面の条痕文のうえにミミズバレ状の突帯を張り付けてた土器で轟B式と考える。1点出土。

Ⅳ類（26～28）

沈線で幾何学文を構成し，胎土に滑石粉末を混入する土器で，いわゆる曽畑式である。

Ⅴ類（29）

沈線で口縁帯を作り，その部分に凹点文を施した滑石粉末混入の土器で，阿高系土器と考える。田中良之氏の分類(註②)によれば，氏の言う坂の下Ⅰ式（中期末）にあたる。

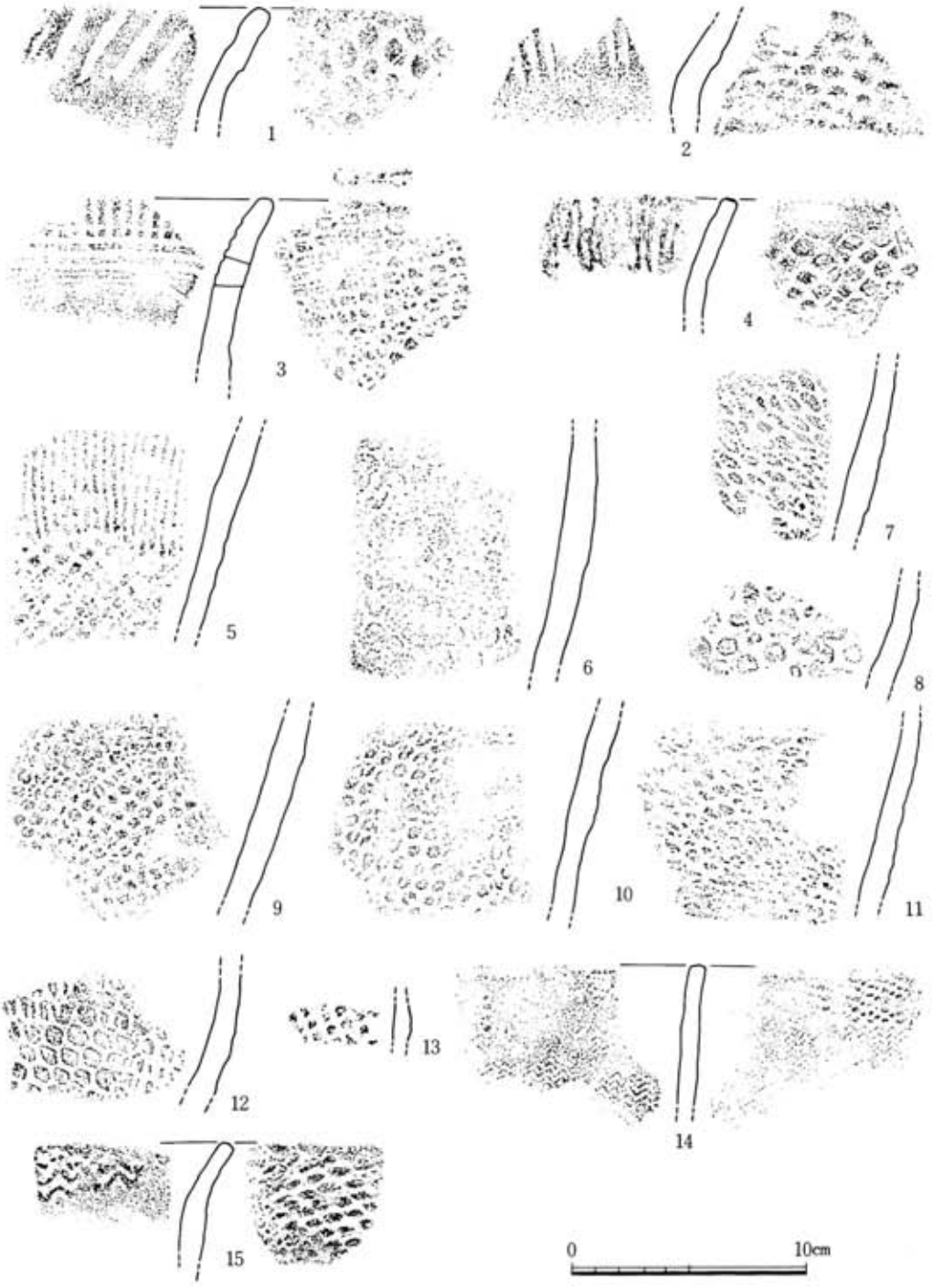


Fig. 23　香田遺跡出土縄文土器実測図　(1)

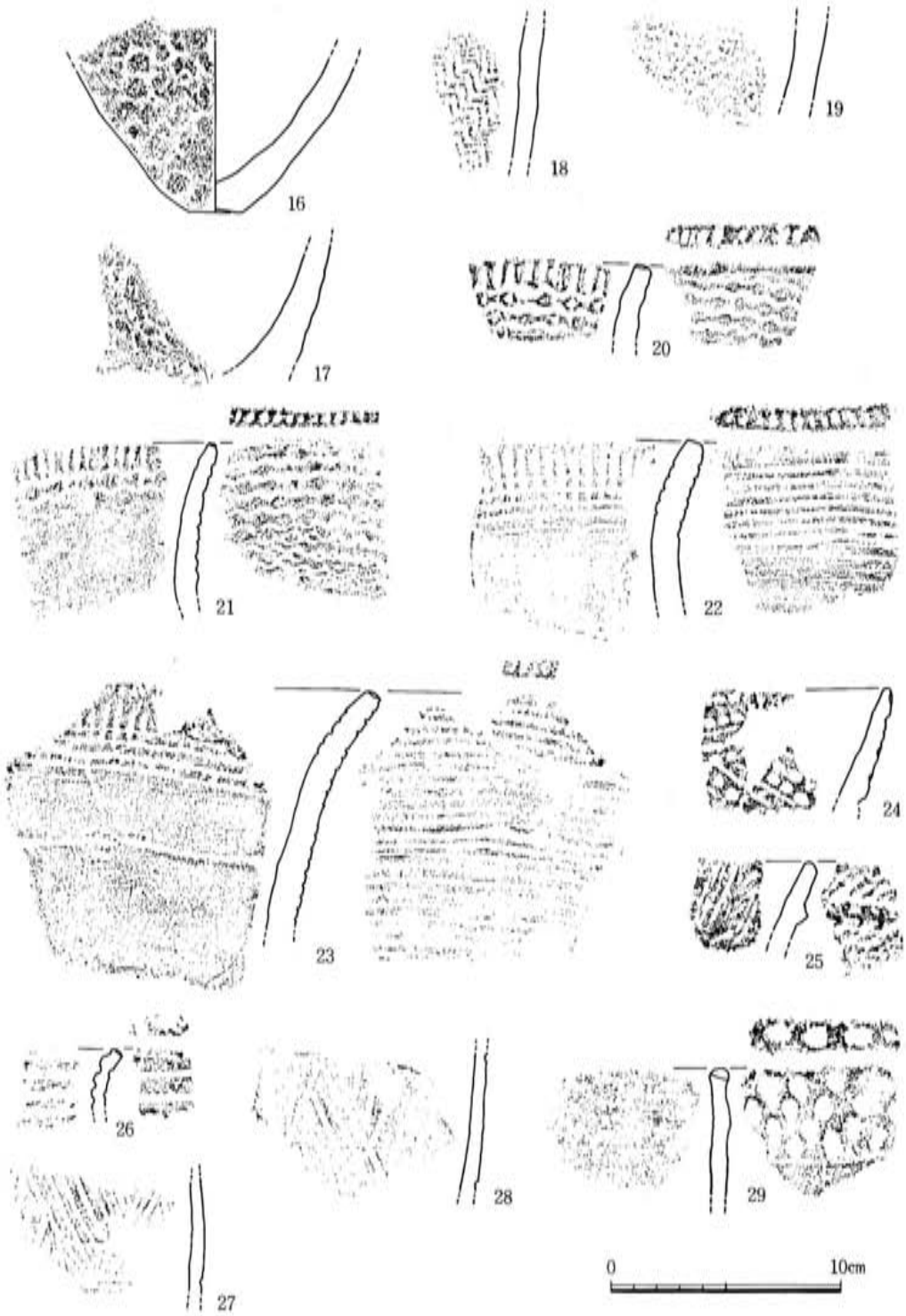


Fig. 24　香田遺跡出土縄文土器実測図　(2)

Ⅵ類（30～39）

磨研土器で，後期的色彩のある土器群である。口縁部外面や体部の屈曲のすぐ上に沈線文をもつものや，凹点文をもつものがある。底部は38のようにあまり突出せずシャープな作りのものがつくと考える。

Ⅶ類（40～49）

磨研土器で，突帯文系土器群のものを除いた晩期的色彩が明瞭な土器群である。浅鉢形のもので，頸部が長いものや短いもの，またその中間のものなど色々ある。これらの土器群は，熊本県古閑遺跡出土の中でも新しい部類の時期から黒川式併行期前後までが考えられる。

Ⅷ類（50～59）

Ⅵ類とⅧ類の土器に伴う条痕文土器である。本来は分離すべきなのだが，明確な分類がしがたくやむをえず，後晩期の条痕文土器として取り扱う。

Ⅸ類（60～65）

いわゆる突帯文系土器群である。口縁部外面や体部の屈曲部外面に刻み目突帯をもつ。体部で屈曲しており，くの字形に曲がるものもあれば，ほとんど屈曲しないものまである。

Ⅹ類（66～74）

壺（67～73）　埋葬に用いられた大型のものと供献土器としての小型のものとがある。(埋葬用といっても専用と考えるには無理がある。生活跡からの資料が不足している。) 大型のものは小型のものに比して最大胴径の位置が著しく上方にかたよっている。これに対して小型のものは中位かやや上方にある。

高杯（66・74）　高杯は，壺棺の蓋として用いていたもの(66)と包含層より検出されたもの(74)の２個体がある。66は杯部で，口縁部外面に沈線をめぐらす。74は脚部のみの破片である。

(註)

1．賀川光夫　「九州東南部－縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房新社　1965
2．田中良之　「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢第６集』九州古文化研究会　1979

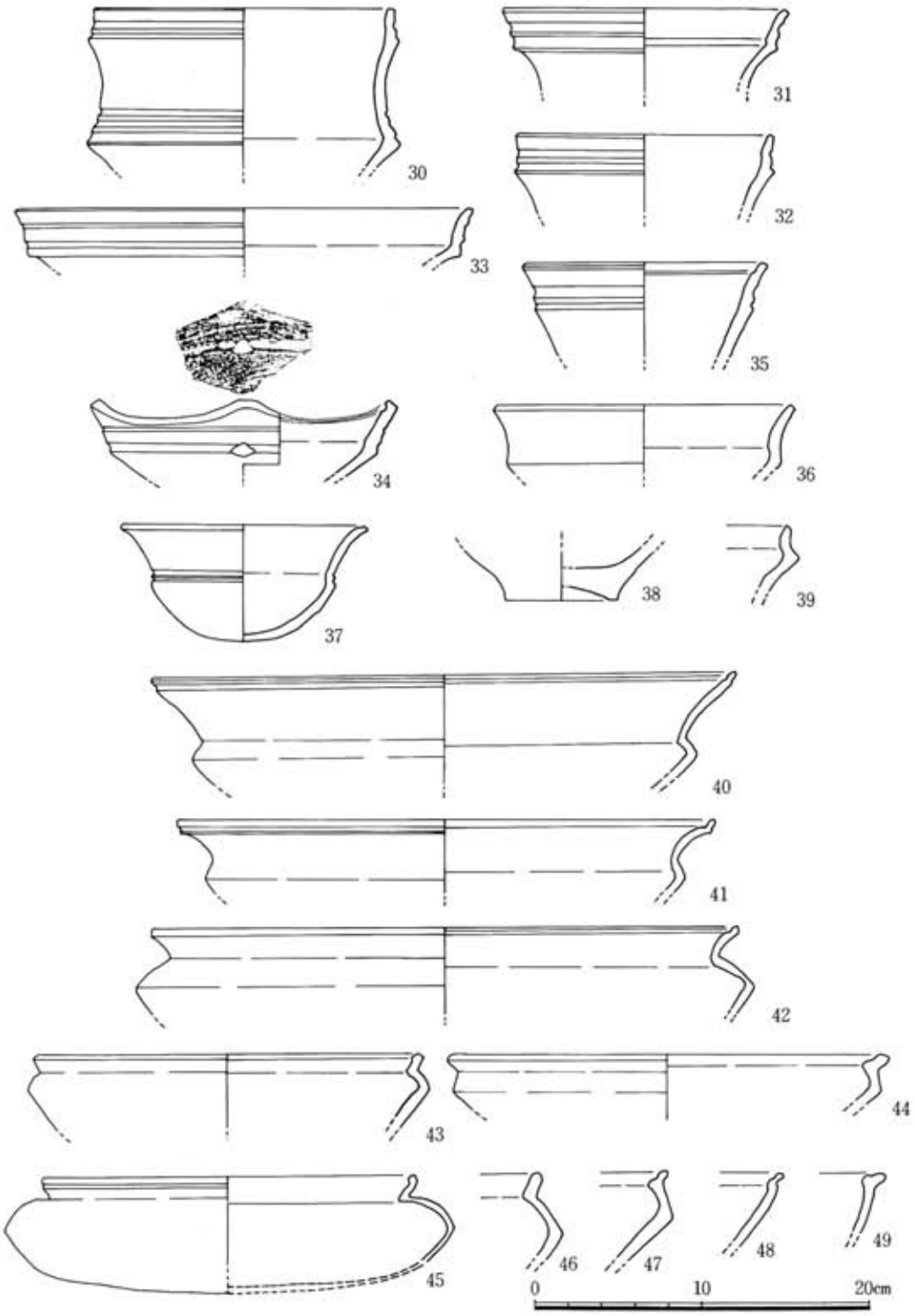


Fig. 25　香田遺跡出土縄文土器実測図　(3)

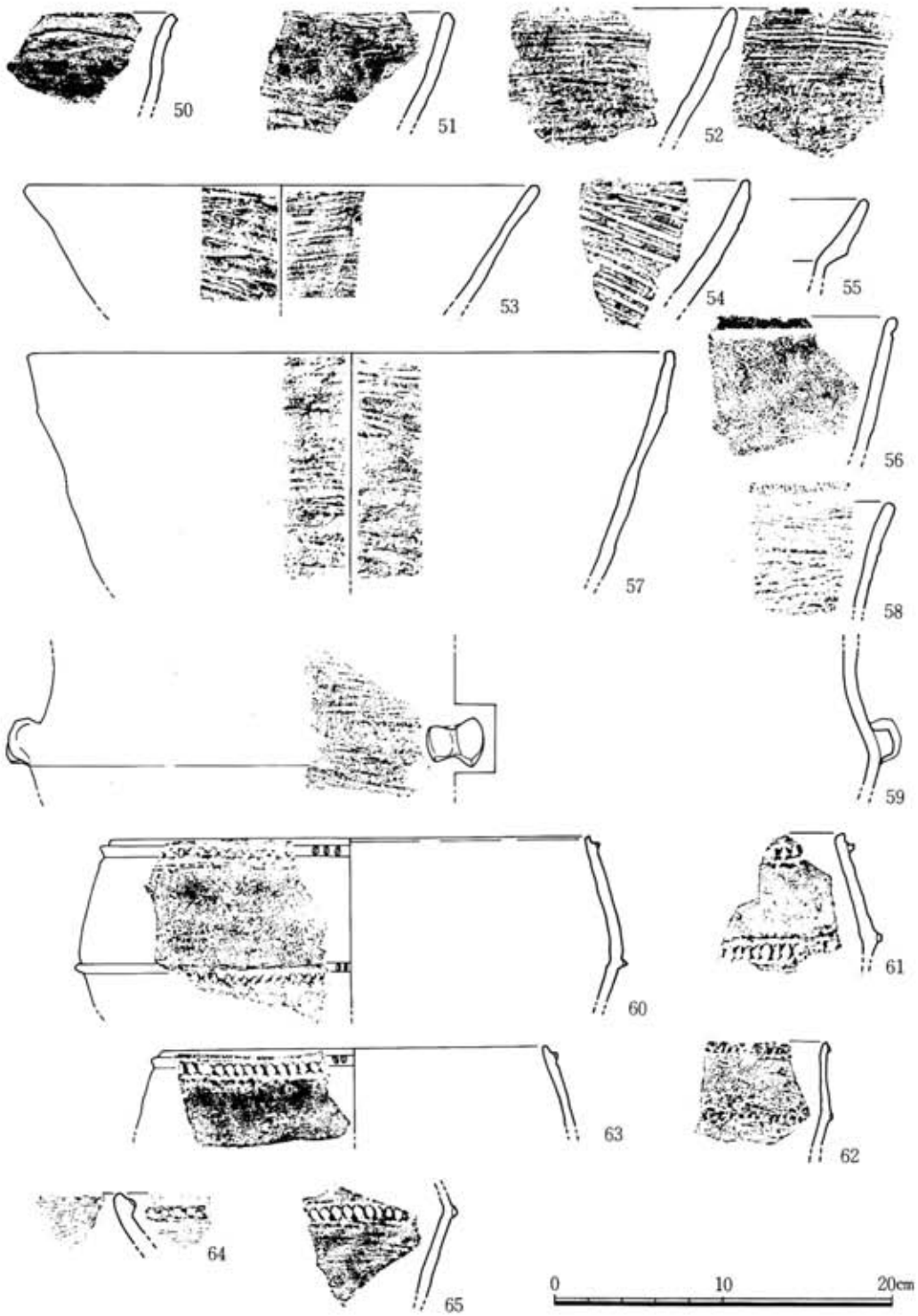


Fig. 26　香田遺跡出土縄文土器実測図　(4)

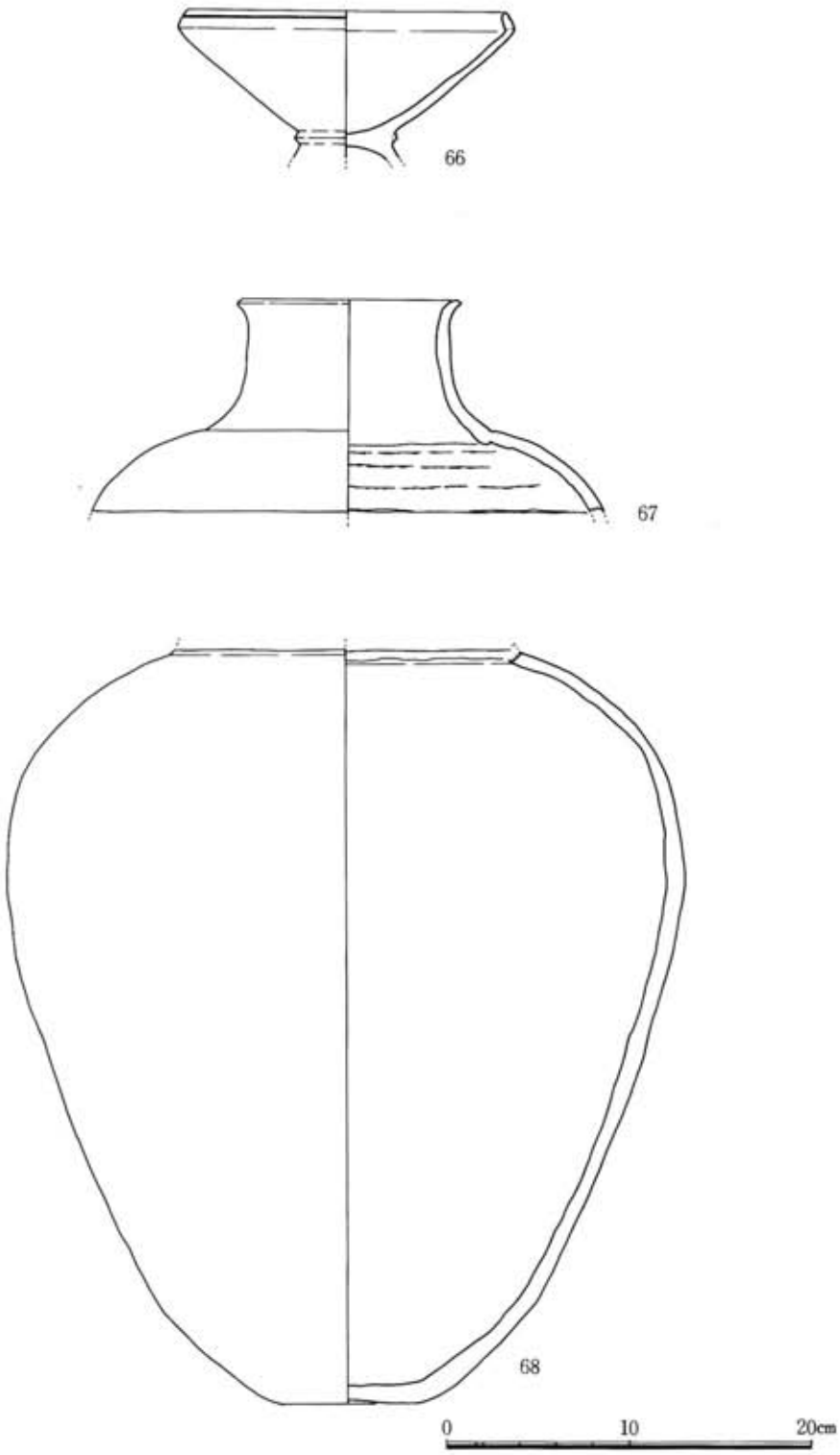


Fig. 27　香田遺跡出土縄文土器実測図　(5)

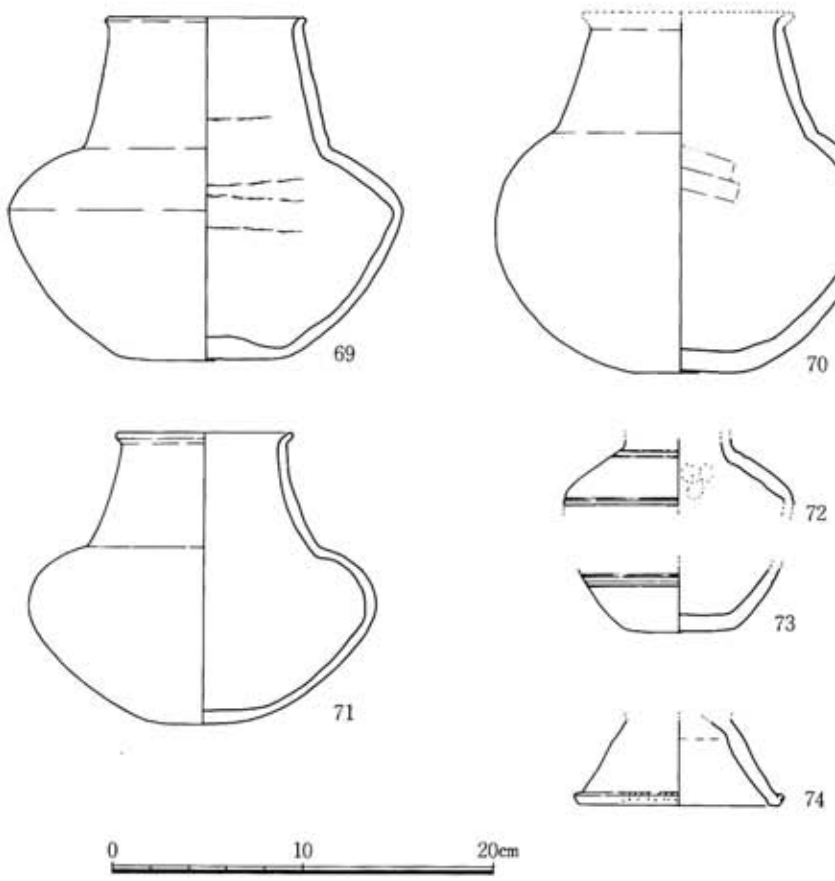


Fig.28　香田遺跡出土縄文土器実測図　(6)

石器（Fig.29～32，PL.93）

石器は，遺構に伴うものが極端に小なく，また土器が縄文時代の全時期にまたがっており，石器がどの時期に属するものか判別が困難である。しかし，後晩期の土器が圧倒的に多いことを考えると，石器の多くはこの時期のものであろう。

石鏃（Fig.29，PL.93－1）

石鏃は100点以上出土したが，その形態は多種多様である。平基A，凹基B，剝片鏃C，局部磨製鏃Dの4つに大別できる。さらにAⅠa，AⅠb，AⅡ，AⅢ，BⅠ，BⅡa，BⅡb，BⅢ，BⅣ，BⅤa，BⅤb，BⅥ，C，Dに細分できる。

AⅠa　基部の抉りがなく，二等辺三角形あるいは正三角形である（**1**～**4**）。全体的に二次加工が丁寧だが，**4**は一部に主剝離面を残す。

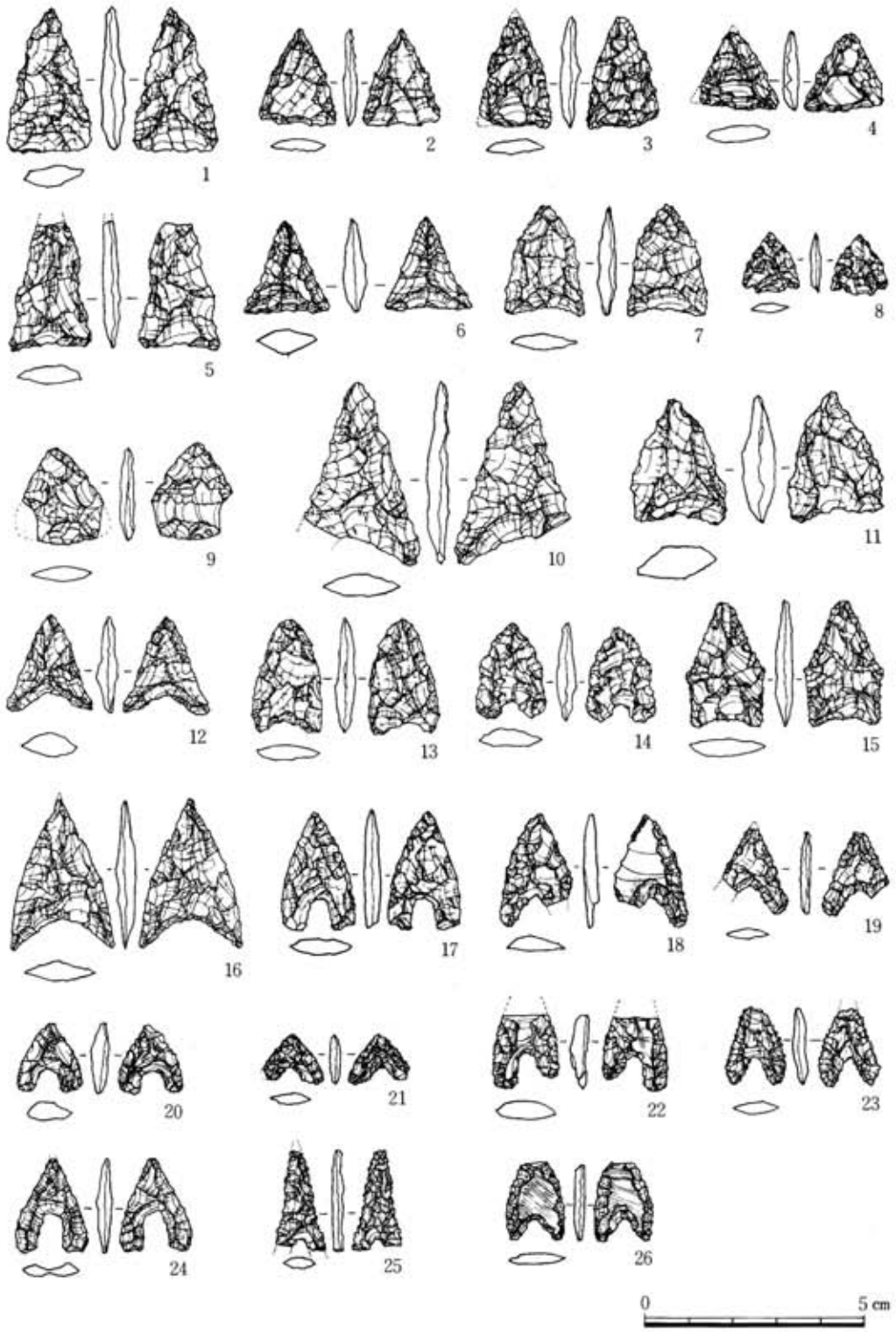


Fig. 29　香田遺跡出土石器実測図　(1)

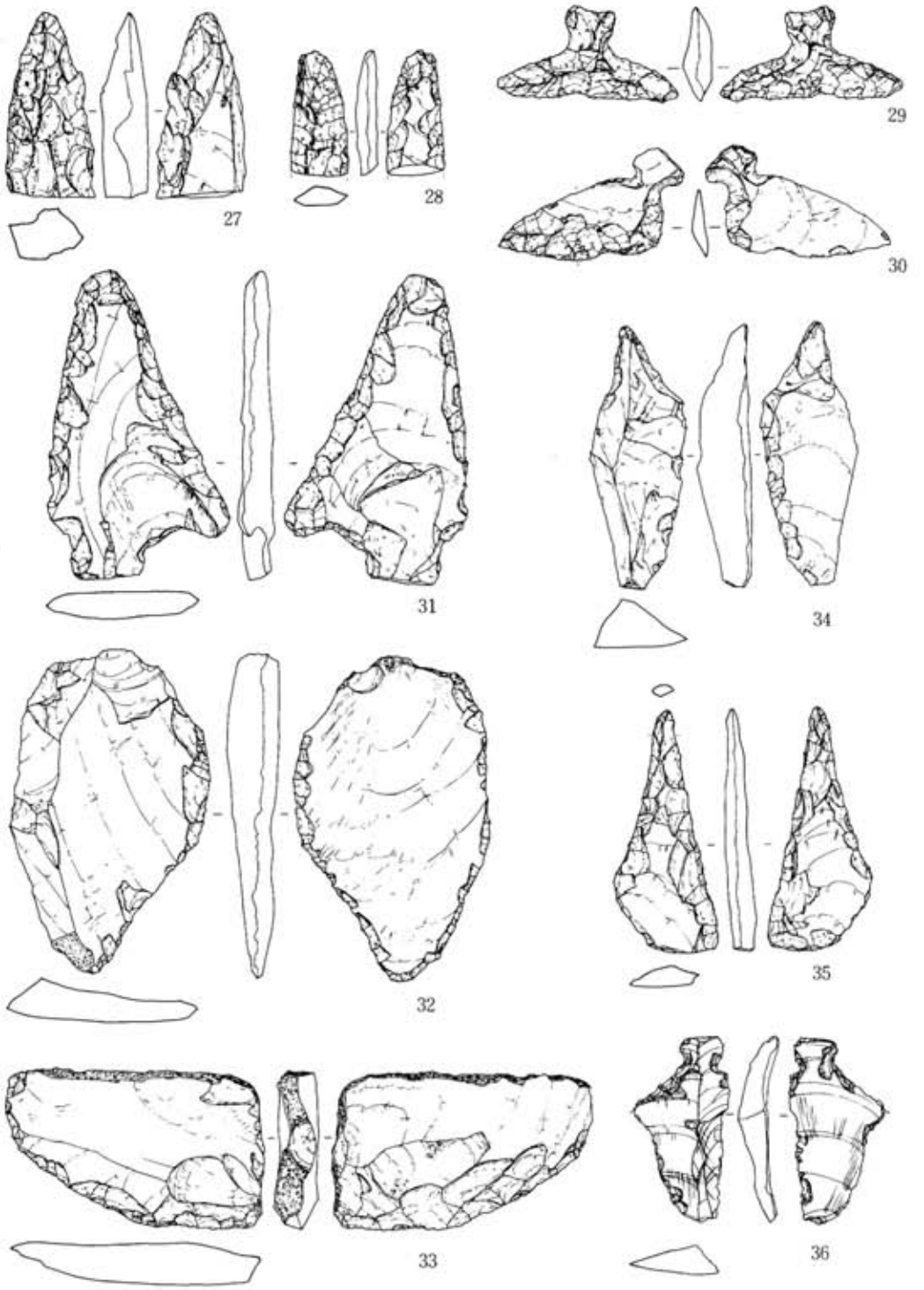


Fig. 30　香田遺跡出土石器実測図　(2)

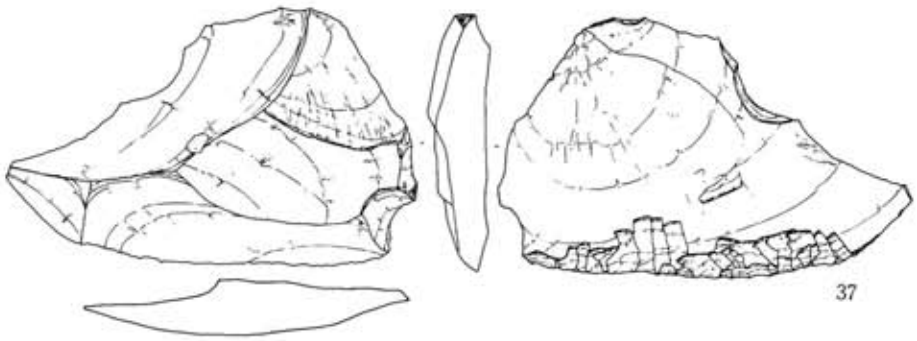
AⅠb　形態的にAⅠaに類似するが基部に弓なり状の抉りがわずかに入るもので，二等辺三角形になるもの（5･7）と正角形になるもの（6）とがある。6は両側辺も弓なり状に若干の抉りが見られ，二次加工が特に丁寧である。

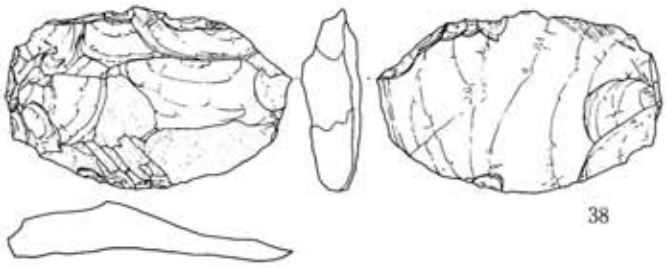
AⅡ　8は形態がAⅠaに類似するが基部の両端部に凹状の抉りをもち，若干の舌部を作り出す正三角形の石鏃である。

AⅢ　9は基部の両端が欠損しているため，形態は明確でないが，基部が丸くなるものと考えられる。

BⅠ　形態はAⅠbに類似するが，抉りがさらに深く脚部が明瞭である。脚部の先端が尖るものが多く（10～13），二等辺三角形をなす。全体的に薄いが，12だけ厚味がある。

BⅡa　体部から脚部に移るところで曲折するもので，基部がAⅠbに類似する。14は曲折





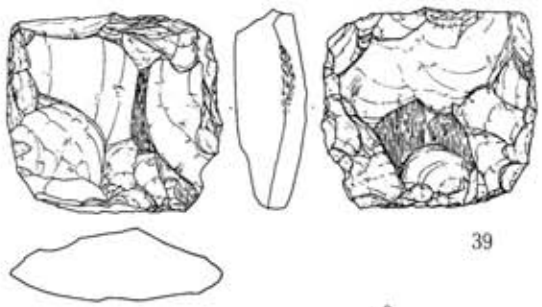


Fig.31　香田遺跡出土石器実測図　(3)

部が中位にあり，15は上位にある。

BⅡb　16は形態がBⅡaに類似し，基部の抉りが深いもので，曲折部が中位にある。

BⅢ　基部の抉りが体長の⅓近くまで入り，脚部がはっきりする。19は両側辺が直線状になり，先端部と一方の脚部が欠損している。17は両側辺が丸味をもつ。

BⅣa　抉りはBⅢより深く，体長の⅓以上ある。両側辺が鋸歯状になる。25は先端部と両脚部が欠損し，23は先端部が欠損しており，剝離は細く丁寧である。

BⅣb　形態はBⅣaに類似し，側辺が鋸歯状にならないものである。24はいわゆる鋤形鏃で，22は17に類似する。

BⅤ　基部の抉りが体長の⅓近くまで及んでいる。剝離が非常に細く丁寧である。20は厚みがあり，21は薄い。

C　18は剝片の全周に剝離を施し，基部に体長⅓以下の抉りをもつ剝片鏃であるいわゆる鈴桶技法による剝片鏃ではない。一方の脚部が欠損している。

D　26は全面に剝離をした後に体部を両面とも研磨した局部磨製石鏃である。基部に体長⅓以下の抉りが見られ，先端が欠損している。

早期の押型文土器に伴うのはBⅣbとBⅤとが考えられる。他の多くのものは後晩期のものであろう。

尖頭状石器（Fig.30－27・28，PL.93－2）

27は厚みのある縦長剝片を素材とした尖頭状石器の未製品である。表面の二次加工をした後背面の二次加工中に欠損したものと考えられる。二次加工は粗い。28は横長剝片を素材とし，両面に押圧剝離による二次加工が見られる。裏面の一部に主剝離面を残す。先端は丸く，柳葉形の尖頭状石器と考えられる。横断面は凸レンズ状をなし，一部欠損する。

削器（Fig.30－29～33・36，31－37，PL.93－2・3）

削器は，つまみをもつ，いわゆる石匙Aと，つまみをもたないものBとに大別できる。Aはさらにつまみの位置によりAⅠ，AⅡに細分できる。

AⅠ　つまみの位置が刃部に対して直角につくもので，29は全面に二次加工が見られ，刃部は両刃である。剝離は丁寧で，つまみが大きく両端が尖る。二次加工が表面にだけ見られ，主剝離面を大きく残す。刃部は片刃である。つまみは打瘤を除去するかたちで作られ，大きい。先端部は，一方が尖り，もう一方は丸くなっている。

AⅡ　つまみの位置が，刃部に対して平行につくもので，31は縦長剝片を素材とし，打瘤を大きく残す。二次加工は両面の両側辺のみに見られ，刃部は両刃である。つまみは打点の両側に凹状に抉ることで作られており，あまり明確ではない。先端は細かな二次加工により丸くなっている。36は縦長剝片を素材とし，剝片の先端に凹状の抉りを入れてつまみを作る。刃部の二次加工はほとんど見られず，両側辺に使用痕が見られる。打点を切断により除去する。

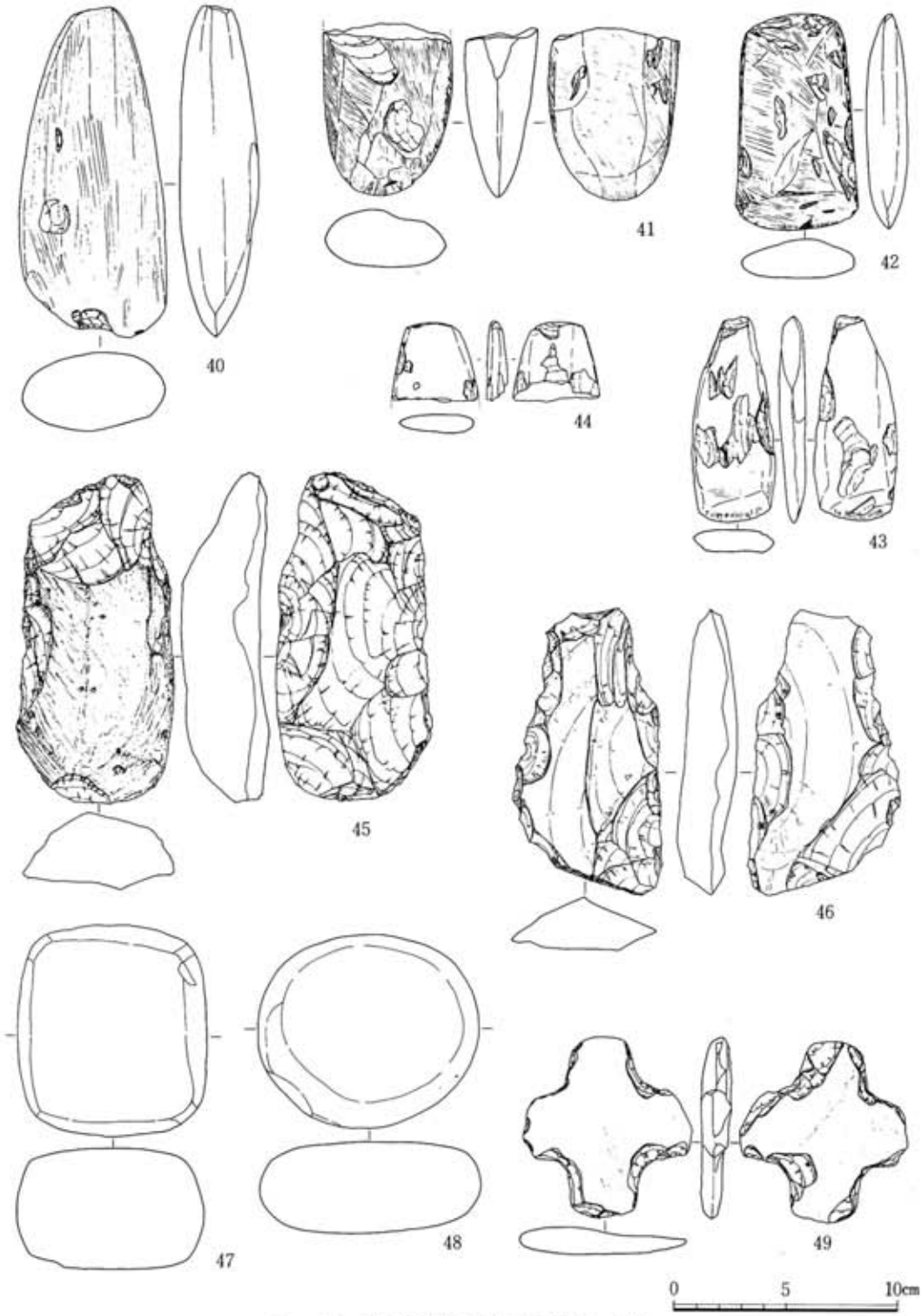


Fig. 32　香田遺跡出土石器実測図　(4)

B　つまみをもたないもので，**32**は縦長剝片を素材とし細かな二次加工により刃部を作る。右側辺が片刃で，左側辺は両刃である。二次加工は少ない。**33**は縦長剝片を素材とし，打面と側辺の一部に自然面を多く残す。刃部は細かな二次加工により作られ，両刃である。**37**は横長剝片を素材とし，自然面の打面を残す。二次加工は背面の側辺のみに見られ，刃部は片刃である。

石錐（Fig.30－34・35，PL.93－2）

34は縦長剝片を素材とし，剝片の先端に細かな二次加工を行い断面三角形に尖らせている。背面の左側辺に二次加工が見られ，削器としての機能を考えられる。**35**は縦長剝片を素材とし両面の細かな二次加工により先端をするどく尖らせている。先端の横断面は凸レンズ状をなす。

楔形石器（Fig.31－39，PL.93－3）

形態的には旧石器時代の砕断面のある石器に類似するが厚みがある。全面に二次加工があり素材の形をほとんど残さない。刃部は両刃が著しくつぶれている。両面に研磨が見られる。

剝片（Fig.31－38，32－45，PL.93－3）

縦長と横長のものがあり，石材もサヌカイトと黒曜石がある。サヌカイトは大型の剝片が多く，黒曜石は小型のものが多い。技術的には一定の技術はなく，一つの石核から縦長や横長の剝片が剝離されている。**38**は縦長の剝片で打面は複数の打面調整により形成される。表面上部に打面縁調整が見られる。表面の一部に自然面を残す。**45**は横長の剝片で全周に大きな二次加工が見られるところから，削器か打製石斧の未製品の可能性がある。一部に自然面を残す。

石核（Fig.32－46，PL.93－4）

石核は剝片に見られるように，目的剝片を想定した上での系統的技術は見られない。そのためこれらの石核から剝離された剝片の形態は不定形が多い。**46**はサヌカイトの円礫を素材とした石核で，大まかな石核調整面を打面とし剝離の際細かな調整を行う。剝離作業面は石の節理の方向に平行で，多方向からの剝離が行われている。

磨製石斧（Fig.32－40～43，PL.93－4）

40・43は乳棒状をなし，**40**は楕円形，**43**は扁平な断面をもつ。**40・41・43**は刃部が両刃で蛤刃である。**42・43**は短冊形をなし，扁平な断面をもつ。

磨石（Fig.32－47・48，PL.93－4）

47は平面隅丸方形をなし，断面に厚みをもつ。**48**は円形に近く，断面はやや扁平である。

十字形石器（Fig.32－49，PL.93－4）

49はほぼ完形で板状節理の扁平な結晶片岩を素材とする。縁辺の4カ所に凹状の抉りを入れ十字形に成形する。片面は研磨し，片面は節理面を残す。抉りと先端部にも研磨を行っている。

土製品（Fig.33，PL.87－4・5）

香田遺跡出土の土製品には，紡錘車・土錘・不明土製品などがある。縄文時代後晩期のものであろう。

紡錘車（Fig.33－1・2，PL.87－5）

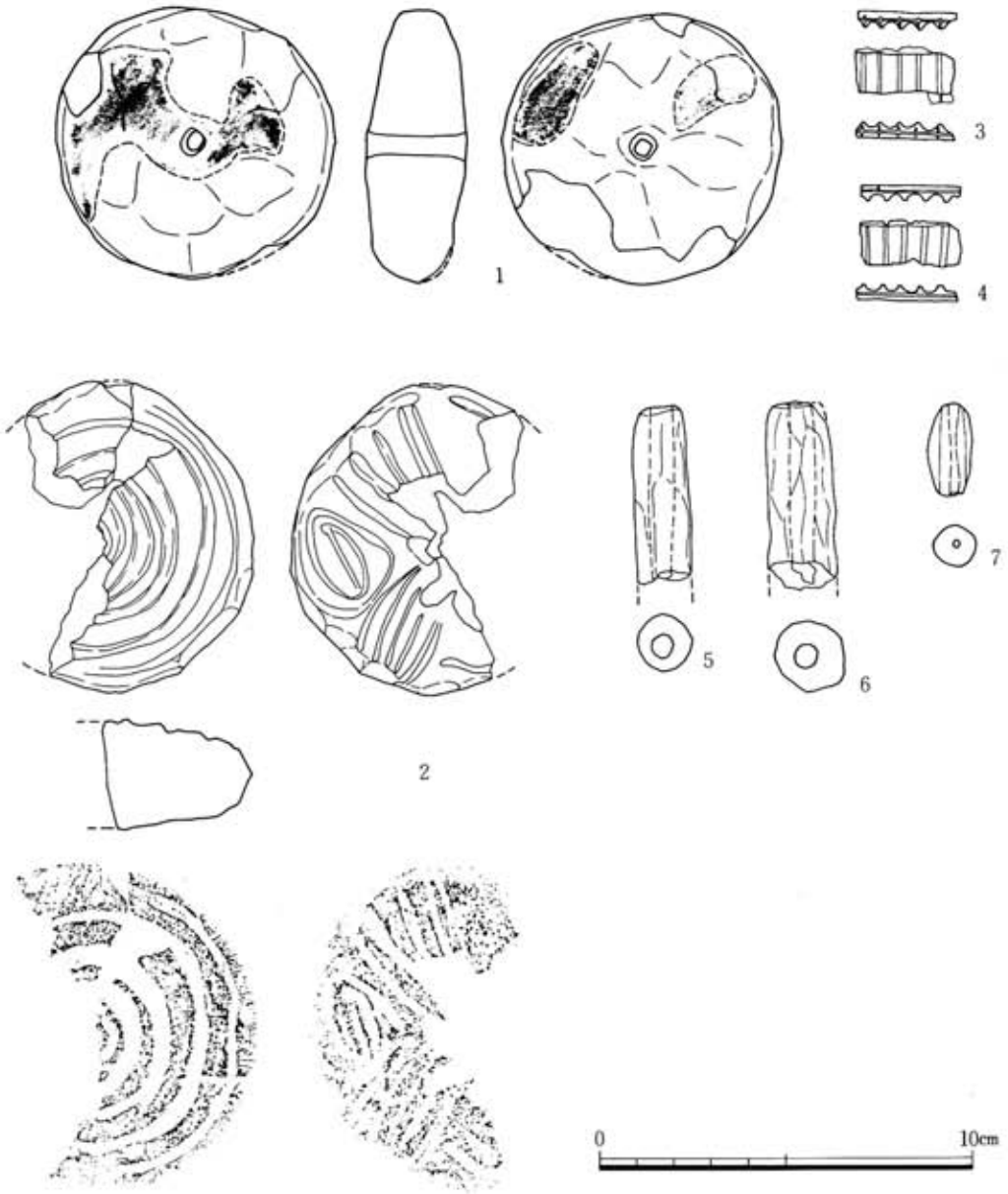


Fig.33　香田遺跡出土土製品実測図

本遺跡からは２点の紡錘車が検出された。いずれも円板形のほぼ中央に１孔を穿つものであるが，２の孔は大部分を欠失しており，やや不明確である。文様の有無の他は１・２とも類似している。本遺跡出土の紡錘車の類例としては福岡県広田遺跡Ｏ区で検出されており，縄文時代後晩期のものと考えて大差ない。

土錘（Fig.33－５～７，PL.87－５）

本遺跡出土の土錘は３点を数える。**５・６**は円筒形をなし，いずれも一部に欠損が見られる。この２つは表面の状態等を観察するかぎり，孔は成形後貫通したと言うよりも，むしろ丸棒状のものに粘土を巻きつけて成形したと考える。**７**は紡錘形で完形品である。この種の遺物の時期幅を考えると，時期決定にはやや難がある。

不明土製品（Fig.33－３・４，PL.87－４）

３・４ともにSX011支石墓の棺部土壙の下位より出土した。階段状とでも言うような特異な形状をしており，類例がないためその性格は不明である。

Tab.1　香田遺跡出土縄文土器一覧表

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
1	B地区 1　区	I	口縁部の一部 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸みのある面をもつ。	口縁端部は，ヨコナデ。 内面は，右上りの沈線文。 外面は，楕円押型文。	内面，黄褐色 外面，暗紫灰色 0.5mm前後の砂粒を含む。
2	A地区 2　区	I	口縁端部を欠いた口縁部の一部。	内面は，縦沈線文のちナデ。 外面は，楕円押型文。	黄褐色 0.2～0.5mmの砂粒を多く含む。
3	B地区 2　区	I	口縁部と体部の一部。 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸い。 口縁部に補修孔。	口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。 口縁部内面は，縦と横の沈線文。 体部内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，灰黄色。 外面は，黄褐色。 １mm前後の砂粒を含む。
4	B地区 1　区	I	口縁部の一部。 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸みのある面をもつ。	口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。 内面は，縦沈線文。 外面は，楕円押型文。	内面は，暗灰色～黄褐色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を少し含む。
5	B地区 1　区	I	口縁部と体部の一部。 口縁端部を欠く。 口縁部はまっすぐ外方に伸びる。	内面は，ナデ。 外面は，上方が縦沈線文で下方が楕円押型文。	内面は，暗黄褐色。 外面は，黄褐色。 （炭化物粒が付着） 0.5mm前後の砂粒を多く含む。
6	B地区 2　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，淡黄褐色。 外面は，暗黄褐色。 0.5mm前後の砂粒を多く含む。
7	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，灰褐色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
8	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，淡褐色。 外面は，暗褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
9	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，褐色。 外面は，赤褐色。 1mm前後の砂粒を少し含む。
10	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，指頭圧のちナデ。 外面は，楕円押型文で一部をナデている。	内面は，黄褐色。 外面は，暗褐色。 1mm前後の砂粒を多く含む。
11	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，暗灰色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
12	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデているが，一部条痕らしきものも見られる。 外面は，楕円押型文で一部をナデている。	内面は，褐色。 外面は，暗褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
13	A地区 2　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内外面とも黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
14	B地区 2　区	I	口縁部と体部の一部。 口縁部はほぼまっすぐ外方に伸び，口縁端部は丸い。	口縁部内面は，器壁が荒れていて不明。 体部は内外両面とも，山形押型文。 口縁部外面は，楕円押型文。 口縁端部は，ヨコナデ。	内面は，黒褐色。 外面は，暗褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
15	不　明	I	口縁部と体部の一部。 口縁部はゆるく外反し，口縁端部は丸い。	口縁部内面は，山形押型文。 体部内面は，ナデ。 口縁端部は，ヨコナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，暗灰褐色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
16	A地区 1　区	I	底部と体部の一部。 やや上げ底気味の小さな平底。体部は砲弾形をしている。	内面は，指頭圧のちナデ。 外面は，楕円押型文。底部外面は，ナデ。	内面は，明黄褐色。 外面は，黒褐色。 2～3mmの小石を少し含む。
17	B地区 2　区	I	底部近くの体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，楕円押型文。	内面は，暗黄色。 外面は，黄褐色。 1～2mmの砂粒を少し含む。
18	B地区 1　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，山形押型文。	内外面とも，黄褐色。 砂粒が目立たない。
19	A地区 4　区	I	体部の一部。	内面は，ナデ。 外面は，山形押型文。	内外面とも，赤褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
20	B地区 1　区	I	口縁部の一部。 口縁部はゆるく外反し口縁端部は丸い。	口縁部内面上端は縦方向の沈線で，それより下は連続楕円文。 口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。	内外面とも，淡黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
21	B地区 1　区	Ⅰ	口縁部と体部の一部。 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸い。	外面は，連続楕円文。 口縁部内面は，縦方向の沈線文。 体部内面は，連続楕円文のちナデ。 口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。	内面は，黄褐色。 外面は，暗褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を多く含む。
22	B地区 1　区	Ⅰ	口縁部と体部の一部。 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸い。	口縁部内面は，縦と横方向の沈線文。 体部内面は，ナデ。 外面は，横方向の沈線文。 口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。	内外面とも黄褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を含む。
23	B地区 1　区	Ⅰ	口縁部と体部の一部。 口縁部はゆるく外反し， 口縁端部は丸い。	口縁部内面は，縦と横方向の沈線文。 体部内面はナデ。 外面は，横方向の沈線文。 口縁端部は，ヨコナデのち刻み目。	内外面は，淡黄褐色。 0.5～2㎜の砂粒を多く含む。
24	B地区	Ⅱ	口縁部の一部。 口縁部は外方にまっすぐ伸びる。 口縁端部は尖り気味で丸い。	内面は，ナデ。 外面は，ナデのち沈線で区画した中に刺突文。	内外面は，黒褐色。 砂粒は目立たない。
25	A地区 3　区	Ⅲ	口縁部の一部。 まっすぐ外方に伸び， 外面に一条の突帯。 口縁端部は丸い。	内面は，縦方向の条痕。 外面は，右上りの条痕のち突帯を貼付け，指頭圧を施す。 口縁端部は，ヨコナデ。	内面は，黄褐色。 外面は，褐色。 砂粒は目立たない。
26	A地区 2　区	Ⅳ	口縁部の一部。 口縁部はゆるく外反し 口縁端部は丸い。	内外面は，ナデのち沈線文。 口縁端部は，ナデのち沈線文。	内外面とも，明褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を含む。
27	A地区 2　区	Ⅳ	体部の一部。	内面は，器壁が荒れていて不明。 外面は，ナデのち幾何学沈線文。	内面は，褐色。 外面は，黒褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を含む。
28	A地区 2　区	Ⅳ	体部の一部。	内面は，ヨコナデ。 外面は，ナデのち幾何学沈線文。	内外面とも，褐色。 砂粒があまり目立たない。
29	A地区 2　区	Ⅴ	口縁部と体部の一部。	内面は，ヨコヘラケズリのちナデ。 外面は，凹点文。	内外面とも暗赤褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を多く含む。 滑石粒を含む。
30	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部から体部にかけての一部。 外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。 体部は大きく曲折する。 口　径 18.7cm	内外面とも，横方向のヘラミガキ。 口縁部外面に2条と胴部に2条の沈線をもつ。	内面は，暗褐色。 外面は，褐色。 0.2～0.5㎜の砂粒を含む。
31	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部と頸部の一部。 外開きの頸部に曲折して外方に立ち上がる口縁部。 口　径 18.4cm	内外面とも，横方向のヘラミガキ。 口縁部外面に2条の沈線をもつ。	内外面とも，暗褐色。 0.2～0.3㎜の砂粒を多く含む。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
32	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部と頸部の一部。 外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。 口　径 15.2cm	内外面とも，横方向のヘラミガキ。 口縁部外面に2条の沈線をもつ。	内外面とも暗褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
33	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部と頸部の一部。 外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。 口　径 27.2cm	内外面とも，横方向のヘラミガキ。 口縁部外面に2条の沈線をもつ。	内面は，黒褐色。 外面は，暗褐色。 0．5mm前後の砂粒を多く含む。
34	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部の一部。 口縁部は外方に伸び，口縁端部は面をなす。 口　径 18.4cm	内外面とも丁寧なヘラミガキ。 口縁部外面には2条の沈線と凹点文が一つある。 口縁部内面には1条の沈線。	内外面ともに暗褐色。 0．2mm前後の砂粒を多く含む。
35	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部と体部の一部。 口縁部も体部もほぼ直ぐ外方に伸びる。 口　径 14.4cm	内外面ともヘラミガキ。 口縁部外面には2条の沈線。	内面は，淡褐色。 外面は，褐色。 0．2mm前後の砂粒を多く含む。
36	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部と体部の一部。 肩部で曲折して外反する口縁部。口縁端部は面をなす。 口　径 18.0cm	内外面ともヘラミガキ。	内面は，暗褐色。 外面は，褐色。 0．2mm前後の砂粒を多く含む。
37	B地区 1　区	Ⅵ	口縁部から体部にかけて大きく欠損。 頸部で曲折して，口縁部は外反する。 底部は丸底。	内外面とも横方向のヘラミガキ（外面にわずかに縦方向もある）。 口縁部内面に1条，頸部外面に2条の沈線がある。	内外面とも暗褐色。 0.2mm前後の砂粒を含む。
38	B地区 1　区	Ⅵ	底部と胴部下半の一部。 上げ底。	胴部下半外面は，ヘラミガキ。 内面は，条痕のちナデ。 底部外面はヘラミガキ。	内面は，暗褐色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を多く含む。
39	A地区 4　区	Ⅵ	口縁部と頸部の一部。	内外面ともヘラミガキ。	内外面とも，褐色。 0.5mm前後の砂粒を含む。
40	B地区 1　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 口縁部は外方に広がり，口縁端部は丸い。頸部と肩部で曲折して稜をなす。	内外面ともヘラミガキ。 口縁部外面に1条の沈線。	内面は，褐色。 外面は，暗褐色。 砂粒がほとんど目立たない。
41	B地区 1　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 口縁部は大きく外反し，口縁端部は丸い。頸部ではゆるく曲折し，肩部では大きく曲折して稜をなす。	内外面ともヘラミガキ。 口縁部外面に1条の沈線。	内外面とも，暗褐色。 砂粒がほとんど目立たない。
42	B地区 1　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 口縁部は外反し，口縁端部は丸い。 頸部と胴部で曲折して稜をなす。	内外面ともヘラミガキ。 口縁部内面に1条の沈線。	内外面とも，暗褐色。 0．2mm前後の砂粒を少し含む。
43	B地区 1　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部と胴部で曲折して稜をなす。口縁部は外反し，口縁端部は肥厚する。	内外面ともヘラミガキ。	内面は，黒褐色。 外面は，暗褐色。 砂粒はほとんど目立たない。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
44	A地区 2　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部と胴部で曲折して稜をなす。 口縁部は外反し，口縁端部は肥厚する。	内外面ともヘラミガキ。 口縁部内面に1条の沈線。	内外面とも，暗褐色。 0.2㎜前後の砂粒を含む。
45		Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部で曲折して稜をなし，体部は丸く張る。 口縁端部は丸い。	内外面ともヘラミガキ。 口縁部外面に1条の沈線。	
46	A地区 4　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部と胴部で曲折する。 口縁端部は丸い。	内面と口頸部外面は，ヨコナデ。 胴部外面は，ナデ。	内外面とも褐色。 1㎜前後の砂粒を多く含む。
47	A地区 2　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部と胴部で曲折して稜をもつ。	内外面とも，横方向のヘラミガキ。 口縁部内面に1条の沈線。	内外面とも褐色。 砂粒がほとんど目立たない。
48	A地区 4　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 頸部で小さく曲折して稜をもつ。	内外面とも，横方向のナデ。 口縁部内面に1条の沈線。	内外面とも褐色。 0.2㎜前後の砂粒を含む。
49	A地区 2　区	Ⅶ	口縁部と体部の一部。 口縁部は逆L字形に外反する。	口縁部内外面は，ヨコナデ。 体部内外面は，ナデ。	内面は，暗褐色。 外面は，黄褐色。 0.2㎜前後の砂粒を含む。
50	A地区 1　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部はゆるく外反し，口縁端部は面をもつ。	口縁端部はヨコナデ。 口縁部下方内面は，ヘラケズリ。 口縁部上方内面と外面は強くヨコナデ。	内外面とも褐色。 0.2㎜前後の砂粒を少し含む。
51	A地区 4　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部は外方に広がりながら伸びる。 口縁端部は丸い。	口縁端部はヨコナデ。 内面は条痕のちナデ。 外面は横方向の条痕。	内面は，暗褐色。 外面は，暗褐色。 0.5㎜前後の砂粒を多く含む。
52	A地区 4　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部は外方に広がりながら伸びる。 口縁端部は丸い。	口縁端部は，ヨコナデ。 口縁部内外面は，横方向の条痕。	内外面とも褐色。 1㎜前後の砂粒を含む。
53	A地区 2　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部はほぼまっすぐ外方に伸びる。 口縁端部は丸い。 口　径 30.4cm	口縁端部は，ヨコナデ。 口縁部内外面は，横方向の条痕。	内外面とも黄褐色。 外面に炭化物粒付着。 0.5㎜前後の砂粒を多く含む。
54	A地区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部は外方に広がりながら伸びる。 口縁端部は丸い。	口縁端部は，ヨコナデ。 内面はナデ。外面は左上りの条痕。	内面は，淡褐色。 外面は，褐色。 3㎜前後の小石と，0.5～2㎜の砂粒を含む。
55		Ⅷ	口頸部の一部。 外開きの頸部に曲折して立ち上る口縁部。 口縁端部は丸い。	内外面ともにナデ。	内面は，黄褐色。 外面は，暗褐色。 0.2㎜前後の砂粒を含む。
56	A地区 2　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部はやや外方にまっすぐ伸びる。 口縁端部は丸い。	口縁端部はヨコナデ。 内外面はナデ。 口縁部上方外面に沈線。	内外面とも暗褐色。 0.2㎜前後の砂粒を多く含む。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
57		Ⅷ	口縁部と体部の一部。 口縁部はやや外方にまっすぐ伸びる。 口縁端部は丸く，内側にやや肥厚する。	口縁端部は，ナデ。 内外面は，横方向の条痕。	
58	A地区 2　区	Ⅷ	口縁部の一部。 口縁部はやや外反して伸びる。	内面はナデ。 外面は横方向の条痕。 口縁端部に刻み目。	内外面とも黄褐色。 0．5mm前後の砂粒を多く含む。
59	A地区	Ⅷ	胴部の一部。 胴部はゆるく張り，最大径の位置にリボン状把手がつく。	内面は条痕のちナデ。 外面は横方向の条痕。把手は指頭圧で仕上げ。	内外面とも明褐色。 0.5～2mmの砂粒を含む。
60	A地区 4　区	Ⅸ (甕)	口縁部と体部の一部。 口縁部は内方にまっすぐ伸び，胴部はゆるく曲がる。 口縁端部はやや角ばって丸い。	内外面ともにヨコナデ。 口縁部外面と胴部に刻み目突帯が1条ずつ入る。	口縁部は褐色。 体部は暗褐色。 0．5mm大の砂粒を多く含む。
61	A地区 4　区 Q－88	Ⅸ (甕)	口縁部と体部の一部。 口縁部は内方にまっすぐ伸び，胴部は曲折する。 口縁端部は面をもつ。	口縁端部付近と突帯部外面はヨコナデ。その他はナデ。 口縁部外面と胴部に刻み目突帯。	内外面とも褐色。 0.5～1mm大の砂粒を含含む。
62	A地区 4　区	Ⅸ (甕)	口縁部と体部の一部。 口縁部はほぼまっすぐ上に伸び，胴部でゆるく曲折する。	内面はヨコナデ。	内面は淡褐色。 外面は炭化物粒付着。 0.2～0.5mmの砂粒をわずかに含む。
63	A地区 2　区	Ⅸ (甕)	口縁部の一部。 口縁部は内方に伸び，端部は面をもつ。	口縁端部付近はヨコナデ。 内外面はナデ。 口縁部内面には指頭圧痕が見られる。	内外面とも黄褐色。 0．2mm前後の砂粒を多く含む。
64	A地区 2　区	Ⅸ (甕)	口縁部の一部。 口縁部は内方に伸び，端部は丸い。	突帯部はヨコナデ。 その他は横方向の条痕。 口縁部外面に刻み目突帯。	内面は，暗褐色。 外面は，黄褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
65	A地区 2　区	Ⅸ (甕)	胴部の一部。 胴部で曲折する。	曲折部分に刻み目突帯。 内面は，ナデ。突帯部はヨコナデ。 胴部下半は横方向の条痕。	内両は，褐色。 外面は，暗褐色。 0.2～0.5mmの砂粒を含む。
66	A地区 4　区 SJ011	Ⅹ (高杯)	脚裾部と体部の大部分を欠損。 杯部は大きく外に広がり，曲折して内に小さく伸びる。	脚部外面は，縦方向のヘラミガキ。 他は横方向のヘラミガキ。	内面は，暗褐色。 外面は，明赤褐色。 （一部黒褐色）
67	A地区 4　区 SJ011	Ⅹ (壺)	口頸部と肩部にかけて残存。 口縁端部は丸味のある面をもつ。 口縁部はゆるく外反し，肩部が張る。 胴部より下は意図的に打ち欠かれている。	口縁部内面と外面は，横方向のヘラミガキ。 頸部内面は，ヨコナデ。 肩部内面は，ナデツケ。 外面と口縁部内面に，赤色顔料。	内外面とも，褐色。 砂粒がほとんど目立たない。

番号	出土地点	分類	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
68	A地区 4　区 SJ011	X (壺)	胴径が体部の上位にあり，肩部が張る。 底部の上でゆるく曲折する。 底部は，やや上げ底気味で丸味のある平底。 残存器高40.7cm 胴　　径36.9cm 底　　径 7.5cm	体部内面は，横方向の板ナデのちナデ。 肩部外面は，横方向のヘラミガキ。 底部はナデ。 胴部外面は，縦方向のヘラミガキ。 胴部下半部の曲折部分で横方向のヘラミガキ。 底部外面は，縦方向のヘラミガキ。	内外面とも，褐色。 1㎜前後の砂粒を少し含む。
69	A地区 4　区 SX010 蓋石上	X (壺)	欠損している部分が多い。口縁端部は丸味のある面をもつ。 頸部が内傾しながらまっすぐ長く伸び，口縁部はわずかに外反する。 肩部は張り，胴部は丸味をもって曲折する。 口　　径10.6cm 器　　高18.2cm 胴　　径20.7cm	頸部から胴部の内面に粘土のつぎ目が残る。 外面と口頸部内面は，ヨコヘラミガキ。 体部内面は指頭圧のちナデ。	内外面とも，黄褐色。 0.5～1.5㎜の砂粒を含む。
70	A地区 4　区 SX010 蓋石上	X (壺)	口縁端部と部分的に欠損。 頸部が内傾しながら長く伸び，口縁部が外反する。 体部は球形状である。 底部はやや上底気味の平底。 残存器高18.6cm 胴　　径19.4cm	体部内面は，板ナデ？のちナデ。 口頸部内面と外面は，ヨコヘラミガキ。 外面と口頸部内面に赤色顔料。	内外面とも，黄褐色。 1～1.5㎜大の砂粒を多く含む。
71	A地区 4　区 SX010 と SJ011 の中間	X (壺)	所々が欠損している。 頸部が内傾しながら長く伸び，口縁部がわずかに外反する。 口縁端部は丸い。 体部は肩部が張り，最大胴径がやや上位にある。底部は丸底。 口　　径 9.2cm 残存器高 5.3cm	頸部と体部の内面はナデ。 口縁部内面と外面は，ヨコヘラミガキ。 口頸部内面と外面に赤色顔料。	内外面とも，黄褐色。 1～2㎜の砂粒を含む。
72	A地区 4　区	X (壺)	肩部の一部。 肩部は張り，胴部で曲折する。 復元胴径12.0cm	内面は，指頭圧のちヨコナデ。 外面は，横方向のヘラミガキ。 肩部上方と胴部に2条ずつの沈線。	内面は，暗灰褐色。 外面は，暗褐色。 1㎜前後の砂粒を少し含む。
73	A地区 4　区	X (壺)	底部と体部の一部。 やや丸味をもった平底。 復元底径 5.6cm	内面は，ナデ。 外面は，横方向のヘラミガキ。	内面は，暗褐色。 外面は，暗灰褐色。 1㎜前後の砂粒を少し含む。
74	A地区 4　区	X (高杯)	脚部の一部。 脚部はまっすぐ外方に伸びながら広がり，端部は肥厚する。 復元脚裾部径11.0cm	端部肥厚部分は，ナデ。 その他内外面は，横方向のヘラミガキ。	内外面とも，暗褐色。 0.5～1.5㎜の砂粒を含む。

Tab. 2　香田遺跡出土石器一覧表　　（　）は残存法量を示す

番号	器種	分類	出土地点	長さ・幅・重さ (cm)　(g)	石質	備考
1	石鏃	AIa	A地区　1区	3.3 － 1.9 －2.8	サヌカイト	完形。
2	〃	〃	〃　2区	2.2 － 1.7 －1.0	〃	〃
3	〃	〃	〃　〃	(2.5) － (1.6) －1.4	黒曜石	先端と基部の一部を欠く。
4	〃	〃	〃　〃	1.8 － 1.8 －1.0	〃	完形。
5	〃	AIb	〃　〃	(2.8) － 1.9 －1.9	サヌカイト	先端を欠く。
6	〃	〃	B地区　1区 SB022	2.1 － 2.0 －1.2	〃	完形。
7	〃	〃	A地区　4区	3.4 － 2.3 －1.1	サヌカイト	完形。
8	〃	AII	A地区　2区	1.4 － 1.4 －0.4	黒曜石	〃
9	〃	AIII	B地区　1区	2.2 － (1.8) －1.2	〃	脚部欠損。
10	〃	〃	B地区　1区	4.3 － (2.7) －3.9	〃	脚部欠損。
11	〃	〃	A地区　2区	2.9 － 2.1 －4.2	〃	完形。
12	〃	〃	B地区　1区 SX001	2.2 － 1.9 －1.3	〃	〃
13	〃	〃	B地区　1区 表採	2.6 － 1.6 －1.6	〃	〃
14	〃	BIIa	A地区　4区	2.9 － 1.8 －1.9	黒曜石	〃
15	〃	〃	A地区　2区	2.6 － 1.8 －1.4	サヌカイト	〃
16	〃	BIIb	B地区　1区 表採	2.2 － 2.0 －1.1	黒曜石	〃
17	〃	〃	A地区　3区	2.8 － 1.6 －1.4	〃	完形。
18	〃	C	B地区　1区	2.8 － (1.7) －1.0	〃	〃
19	〃	BIII	A地区　2区	(2.0) － (1.5) －0.4	サヌカイト	脚部と先端が欠損。
20	〃	BV	A地区　2区	1.7 － 1.4 －0.7	〃	完形。使用痕あり。
21	〃	〃	B地区　1区 地山直上	1.2 － (1.4) －0.3	〃	脚部欠損。
22	〃	BIVb	A地区　2区	(1.7) － (1.5) －0.9	黒曜石	先端と脚部の一部を欠く。
23	〃	〃	A地区　2区	(1.8) － 1.4 －0.9	〃	先端欠損。使用痕あり。
24	〃	BIVb	B地区　1区 表採	2.2 － 1.7 －0.7	安山岩	完形。
25	〃	BIVa	A地区　4区	(2.3) － (1.1) －0.5	黒曜石	先端と基部の一部を欠く。
26	〃	D	B地区　2区	(1.9) － 1.4 －0.7	サヌカイト	先端欠損。局部磨製。

番号	器種	分類	出土地点	長さ・幅・重さ (cm) (g)	石質	備考
27	尖頭状石器		B地区 1区	(5.6) − 2.7 − 22.0	サヌカイト	基部を欠く。
28	〃		A地区 4区	(3.8) − 1.7 − 4.9	〃	先端と基部を欠く。
29	削器	AⅠ	A地区 3区	2.8 − 5.4 −	〃	完形。
30	〃	〃	B地区 1区	5.9 − 2.4 − 6.6	〃	〃
31	〃	AⅡ	A地区 4区	9.2 − 5.5 − 42.6	〃	〃
32	〃	B	A地区 1区	9.7 − 5.9 − 70.6	〃	〃
33	〃	〃	A地区 3区	8.0 − 4.8 − 62.5	〃	〃
34	石錐		A地区 4区	7.9 − 2.8 − 27.0	〃	〃
35	〃		A地区 2区	7.3 − 2.9 − 12.5	〃	〃
36	削器	AⅡ	B地区 1区	5.5 − 2.8 − 8.0	黒曜石	〃
37	〃	B	A地区 2区	9.9 − 7.7 − 81.9	サヌカイト	〃
38	剥片		B地区 1区	7.5 − 4.8 − 42.7	〃	〃
39	楔形石器		A地区 1区	5.2 − 5.6 − 69.0	〃	円盤状。局部磨製。
40	磨製石斧		B地区 1区	(14.8) − 6.5 − 44.9	砂岩	破損したものを再調整。
41	〃		B地区 1区	(7.7) − 5.7 − 215	蛇紋岩	基部を欠損。
42	〃		A地区 4区	9.7 − 5.5 − 147	粘板岩	完形。
43	〃		A地区 2区	9.2 − 3.7 − 59	蛇紋岩	〃
44	〃		B地区 1区	(3.5) − (3.9) − 19.6	〃	基部のみ残存。
45	剥片		A地区 2区	6.6 − 12.8 − 458	サヌカイト	
46	石核		B地区 1区	14.6 − 7.0 − 192	〃	円礫を加工。
47	磨石		A地区 4区	9.3 − 8.4 − 74.2	砂岩	
48	〃		B地区 1区 SX001	8.6 − 9.8 − 532	〃	
49	十字形石器		B地区 1区	8.0 − 7.4 − 74.3	結晶片岩	

(2) 弥生時代

弥生時代の遺物は，土器が土器溜及び包含層から出土している。器種は甕のみである。

1は本遺跡出土の中では古い特徴をもち，中期中葉に比定されよう。2・3は形態的に近似しており，ともに1より後出的であり，中期後葉が考えられる。4・5は土器溜出土のもので形態，大きさ及び調整においても類似している。時期は中期後葉から中期末か。(Fig.34)

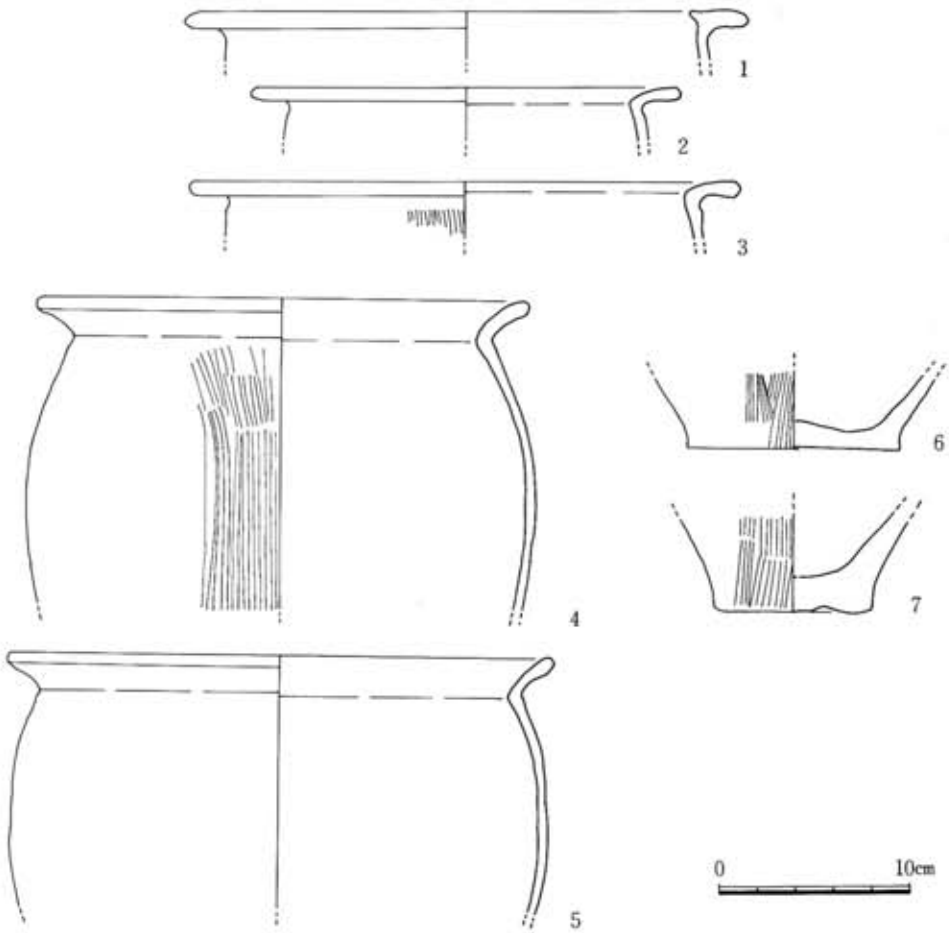


Fig.34　香田遺跡出土弥生土器実測図

Tab. 3　香田遺跡出土弥生土器一覧表

番号	出土地点	器種	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
1	A地区 2　区	甕	口縁部の一部。 口縁部は逆「L」字形で上面はほぼ平ら。 口縁部内側にわずかな突出がある。 口　径　29.7cm	全面，ヨコナデ。	内外面，明黄褐色。 0.5mm大の砂粒を含む。
2	B地区 1　区	甕	口縁部と体部の一部。 口縁部は逆「L」字形で，内側に低く傾斜する。 口　径　22.7cm	体部外面，ハケ目のちヨコナデ。 口縁部全面，ヨコナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。 内外面，褐色。
3	B地区 1　区	甕	口縁部と体部の一部。 口縁部は逆「L」字形で，内側に低く傾斜する。 口　径　29.0cm	体部外面，ハケ目のちヨコナデ。 口縁部全面，ヨコナデ。	内外面，褐色。 0.2mm大の砂粒を含む。
4	A地区 2　区 土器溜	甕	口縁部と体部の一部。 口縁部は「く」字形で内側に傾斜し，内面に稜をもつ。 口　径　25.8cm	口縁部全面，ヨコナデ。 肩部内面，指頭圧後ハケ目のちヨコナデ。 胴部内面，ナデ。 胴部外面，ハケ目。	内外面，黄褐色。 （一部黒色） 1～2mmの砂粒を多く含む。
5	A地区 2　区 土器溜	甕	口縁部と体部の一部。 口縁部は「く」字形で内側に傾斜し，内面に稜をもつ。 口　径　28.8cm	口縁部全面，ヨコナデ。 胴部内外面，ナデ？。	内外面，褐色。 （一部黒色） 0.5～1mmの砂粒を多く含む。
6	A地区 2　区	甕	底部の一部。 上底気味のやや突出した平底。 底　径　11.2cm	内面，指頭圧。 外底面，ナデ。 胴部下半外面，ハケ目。	内外面，黄褐色。 （一部黒色） 1～2mmの砂粒を多く含む。
7	A地区 2　区	甕	底部の一部。 やや突出した平底。 底　径　8.2cm	内面，ナデ。 胴部下半外面，ハケ目。 外底面，ナデ。	内面，淡黄褐色。 外面，明褐色。 1～2mmの砂粒を含む。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は古墳5基，石棺墓・土壙墓各1基であるが，破壊がひどく遺構の残存状態は良くなかった。遺物も同様で，ST016古墳を除いては，遺構からの出土は少なく，各地区各区に散布していたものが逆に多々あった。なお，ST016古墳からは，遺物が須恵器・土師器・鉄製品合せて60点余りも出土しており，遺物の副葬量としては大変多い。

ここでは，各遺構及び各区から出土したこれらの遺物を一括して示している。各出土遺物の個々については，Tab. 4・5の一覧表を参照していただきたい。

以下，土師器・須恵器・鉄製品・装身具の順に各々の特徴を述べたい。

土師器（Fig.35～37，PL.89，90）

本遺跡より古墳時代の土師器として，SB020住居跡より布留式土器に非常に類示した古式土師器を出土した。器形は壺・高杯・器台等で，その他の遺構より甕・杯等を出土した。

壺（Fig.35，PL.89－1～6，90－12）

11個体＋α出土した。形態によりA・B・C・D・E・Fに大別する。

壺A（1～3・5）

小型丸底壺と称されるもので，頸部の特徴より，さらにa・bに細分される。

壺Aa（1・2） 体部は球状で頸部がいったんしまり，口縁部が内湾しながら外反するもので長い。口縁部径が胴部最大径より大きいもので，調整はヘラミガキとナデによる。

壺Ab（3） 体部はやや扁平な球状で頸部がいったんしまり，口縁部が内湾しながら外反するもので，Aaに比べ短く，口縁部径が胴部最大径よりわずかに大きい。調整はヘラミガキとハケ目調整による。

壺B（4・5）

小型短頸壺で法量によりⅠ・Ⅱに分ける。

壺BⅠ（4） 球状の体部にくの字状に外反する短い口縁をもつもので，口径13.2cm，器高9.5cmである。

壺BⅡ（5） 体部はやや扁平な球状にくの字状に外反する短い口縁をもつもので，BⅠに比べ頸部のしまりがあまい。口径11.7cmである。

壺C（6・7・8）

体部が球状でくの字に外反する口縁をもつもので，法量によりⅠ・Ⅱに大別し，さらに胴部の形態により細分する。

壺CⅠ（6） 体部は胴長の球状でくの字状に外反する口縁をもつ。口縁端部はつまみ上げている。口径17cm，器高約24cmである。

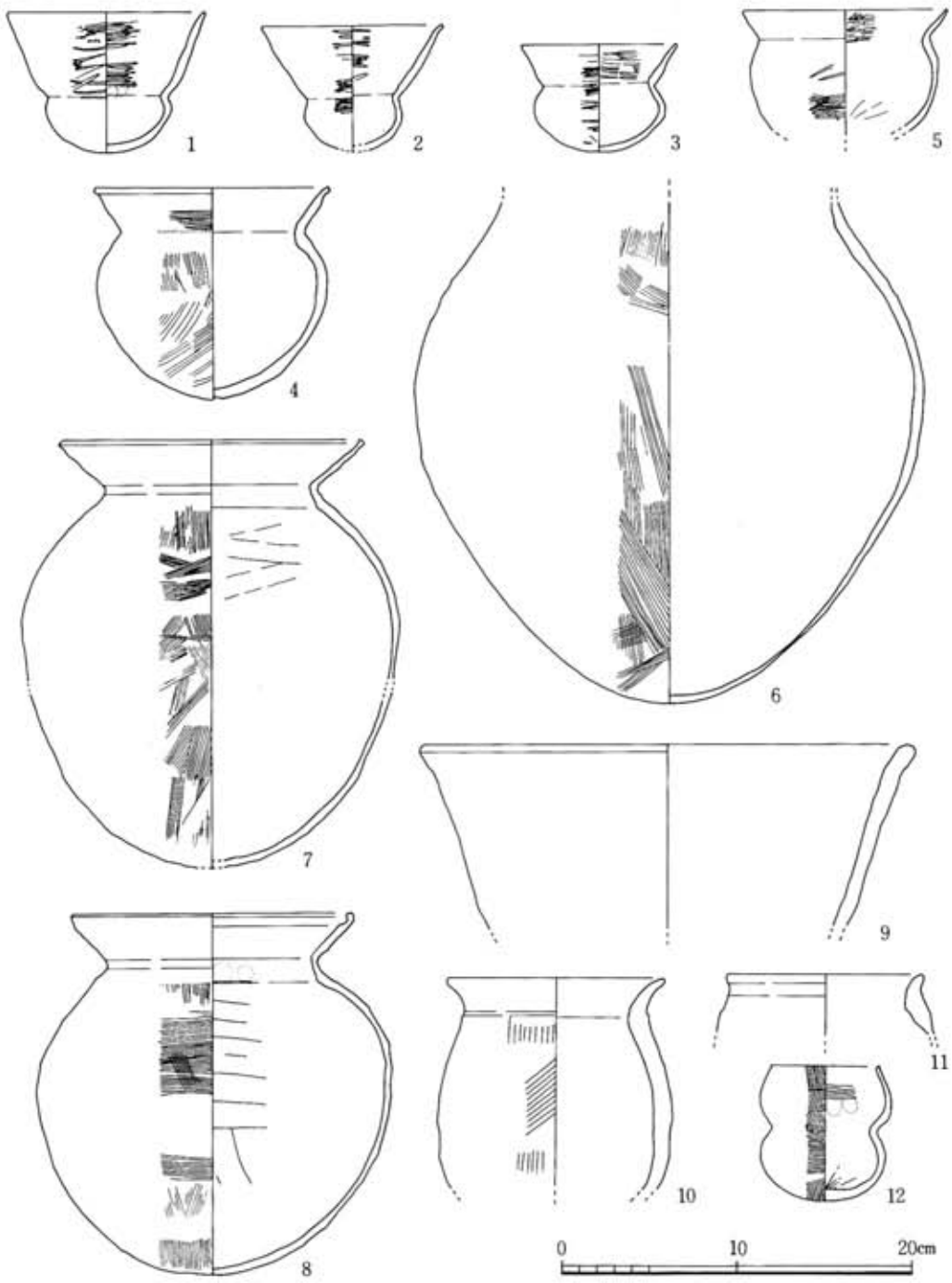


Fig. 35　香田遺跡出土土師器実測図　(1)

壺CⅡ（7・8）　7は最大胴径29cmである。口縁部欠損。8の体部は球状でくの字状に外反する口縁をもつ。口縁端部はつまみ上げている。口径15.8cm，器高20.3cmである。

壺D（9）

体部より口縁部にかけてやや内湾しながら外反する。口縁端部はさらにやや広がり丸味をもつ。口径27.4cmを測る。

壺E（10・11）

器壁が厚く頸部より短く外反する口縁部をもち，口縁径が胴部最大径よりも小さい。10は

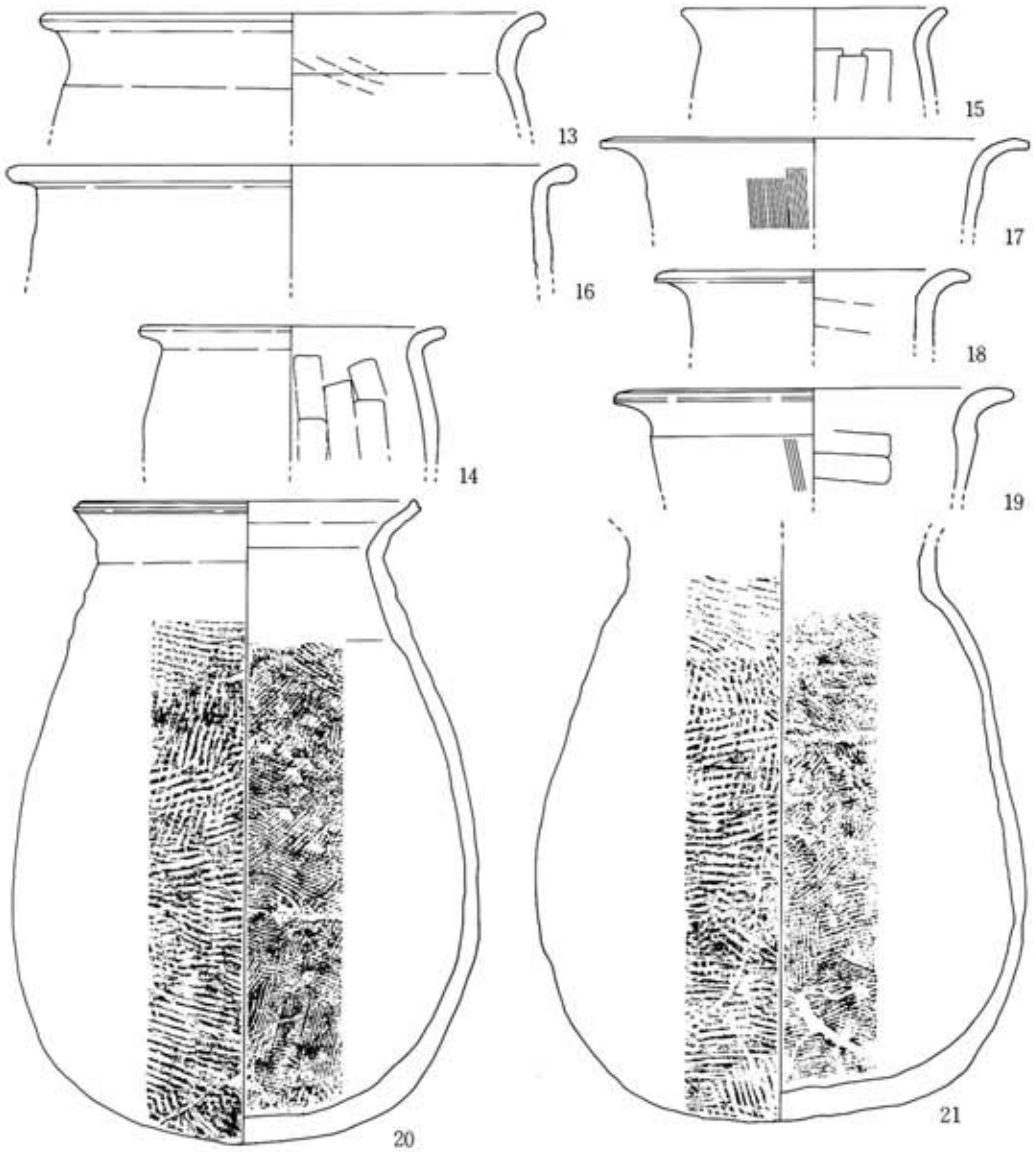


Fig.36　香田遺跡出土土師器実測図　(2)

口径12cm，11は11cmである。

壺F（12）

特殊な器形を持つもので，体部はひょうたん形をなし，口縁端部が若干外反する。口径6.2cm 器高7.7cmである。

甕（Fig.36，PL.89－7・8）

9個体＋α出土した。口縁部の形態によりA・B・Cに大別する。

甕A（13～15）

口縁部が外反し，胴部がややふくらむもので法量によりさらにⅠ・Ⅱに大別する。

甕AⅠ（13）　やや内傾する体部に丸く大きく屈曲する短い口縁がつく。体部は丸みをもつ。口径26cmで胴部内面はヘラケズリを行う。

甕AⅡ（14・15）　やや丸味を持つ体部に丸く曲る短い口縁がつく。体部は丸みをもつ。14は口径16.1cmで胴部内面はヘラケズリを行う。15は口径13.9cmで胴部内面はヘラケズリを行う。

甕B（16～19）

口縁部が短く外反するが，胴部が下方へまっすぐのびるか内傾するもので，法量によりⅠ・Ⅱに大別する。

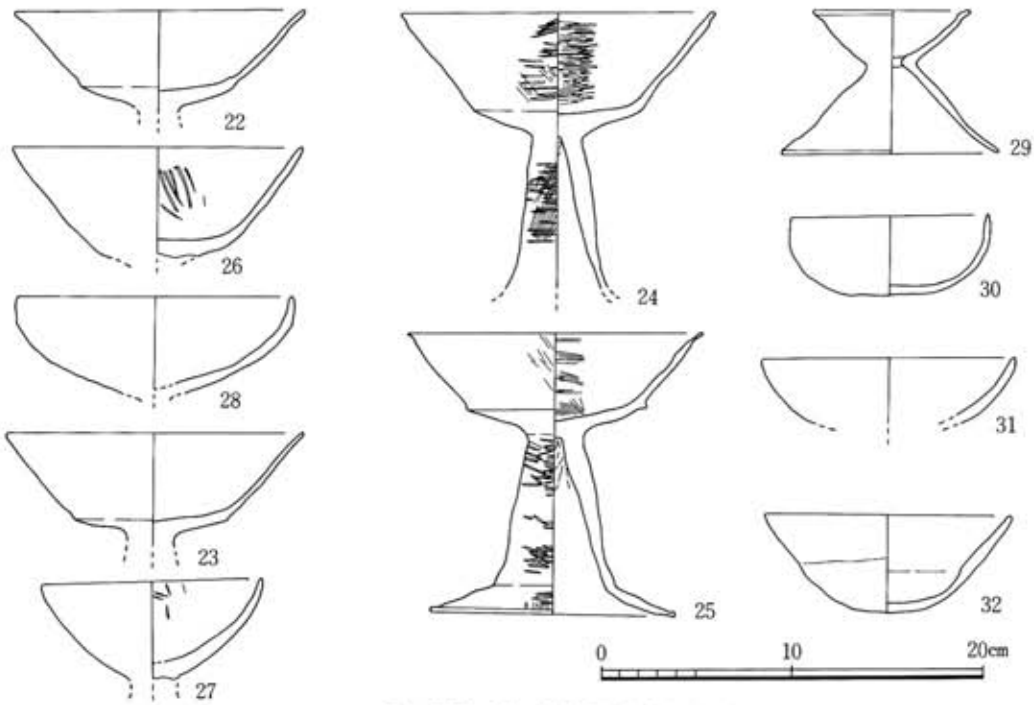


Fig.37　香田遺跡出土土師器実測図　(3)

甕BⅠ（16）　丸く大きく屈曲する短めの口縁がつき，体部はあまり張らない。口径30cmを測る。

甕BⅡ（17～19）　丸く大きく屈曲する短めの口縁がつき，体部はあまり張らない。**17**は口径20.9cm，**18**は22.5cm，**19**は16.5cmである。

甕C（20・21）

口縁部はやや長く外反しており頸部はしまり，胴は大きく下位が張る。器壁は口縁部と肩部の接合部が厚く，底部はさらに厚い。**20**は口径17.2cm，器高33.3cmである。

高杯（Fig.37－22～28，PL.90－2～6）

7個体＋α出土した。杯部の形態によりA・Bに大別する。

高杯A（22～25）

杯底部と体部の接合部が，段または稜を成すものである。体部の器壁は薄く，上外方へ伸びて大きく開く。脚部は下外方に開き，裾部で屈曲して水平な接地面を作る。**22**は接合部に三角突帯を有する。**23～25**は接合部に稜を有する。口径15.2～16.3cmである。

高杯B（26～28）

杯部に丸味を持ったいわゆる椀形，あるいはそれに近い形を成すもので，この特徴よりさらにa・b・cに細分する。

高杯Ba（26）　杯底部と体部の接合部に明瞭な変化を示さないもので，器壁は薄く，上外方へ開く。口径15.1cmを測り，杯内面にヘラケズリを施す。脚部欠損。

高杯Bb（27）　杯の部分は丸みを帯び，いわゆる椀形を成すもので，器壁はやや厚い。口径11.4cmで，杯内面はナデを残す。脚部欠損。

高杯Bc（28）　杯の部分は丸みを帯び，いわゆる椀形を成すが，Bbに比べ体部は横に開き，口縁部は上方へ曲る。器壁はやや厚く，口径14cmである。杯内面はヨコナデを施す。脚部欠損。

器台（Fig.37－29，PL.90－7）

杯部はわずかに中ぶくらみで，裾端部は丸い。脚部はくびれ部から内湾ぎみに張りをもち，裾部は外反し，裾部端は丸い。くびれ部には焼成前の穿孔がある。

杯（Fig.37－30・31）

丸底の杯で，杯部の器高によりさらにa・bに細分される。

杯Aa（30）　丸味のある底部に，内湾する体部がつくもので，口径に対して器高が高く碗形をなす。口径15.2cm，器高4.15cmで内外面ともにヨコナデを施す。

杯Ab（31）　丸味のある底部に，丸味をもちながら内湾するもので，口径に対して器高が低

く碗形を成す。口径13cmで丹塗り磨研を施す。

鉢（Fig.37－32，PL.90－8）

丸底に大きく直線的に開く体部を持つ。口縁端部は丸味をもち，器壁は体部と底部の境が薄くなる。

須恵器（Fig.38～41，PL.91，92）

蓋（Fig.38－1～15，PL.91－1～6）

15＋α個体出土した。かえりの有無によりA・Bに大別し，口縁部の形態によりさらにa・b・cに細分する。

蓋A（1～9）

口縁部内面にかえりがなく，天井部中央につまみがつかないものである。蓋Aはさらに口縁部の開き具合・形状によりa・b・cに細分する。

蓋Aa（1） 天井部が平坦で，口縁部がやや開く程度のもの。口径10.7cm，器高4.0cm。天井部と体部の境は不明瞭だが，認められ，稜をもつ。体部は内湾しつつ，下外方に開く。端部はやや角ばる。天井部¾ほどはヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。

蓋Ab（2～7） 天井部がやや平坦気味で，口縁部が蓋Aaよりもさらに少し開くもの。口径10.1～12.4cm，器高3.1～3.3cm。天井部から体部にかけて丸みをもつ。口縁部は端部近くでやや角ばるものもある。天井部ヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。**2・4・5**の天井部外面にヘラ記号がある。

蓋Ac（7～9） 口縁部が最も開くもの。天井部は平坦なものと丸みをもつものとがある。口径10.1～11.4cm，器高3.2～3.4cm。天井部から体部にかけて丸みをもち，端部までゆるやかにのびる。端部はやや尖る。天井部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。全て，天井部外面にヘラ記号がある。

蓋B（10～15）

口縁部内面にかえりがあるものである。蓋Bはさらに口縁部のかえりの傾き具合により，a・b・cに細分する。

蓋Ba（10・11） かえりが口縁端部より下方に出ているもの。かえりは，やや内傾している。口径10.3～11.4cm，器高2.8～3.9cm。天井部から体部にかけて丸みをもつ。**10**はつまみ部を欠失しているが，両個体とも宝珠様つまみをもつと考える。かえりの端部はやや尖る。天井部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。

蓋Bb（12～14） かえりが口縁端部とほぼ同じか，上方にあるもの。蓋A・B類の中で小形の部類にはいる。口径9.2～10.0cm，器高3.0～3.1cm。天井部から体部にかけて，やや角ばる。

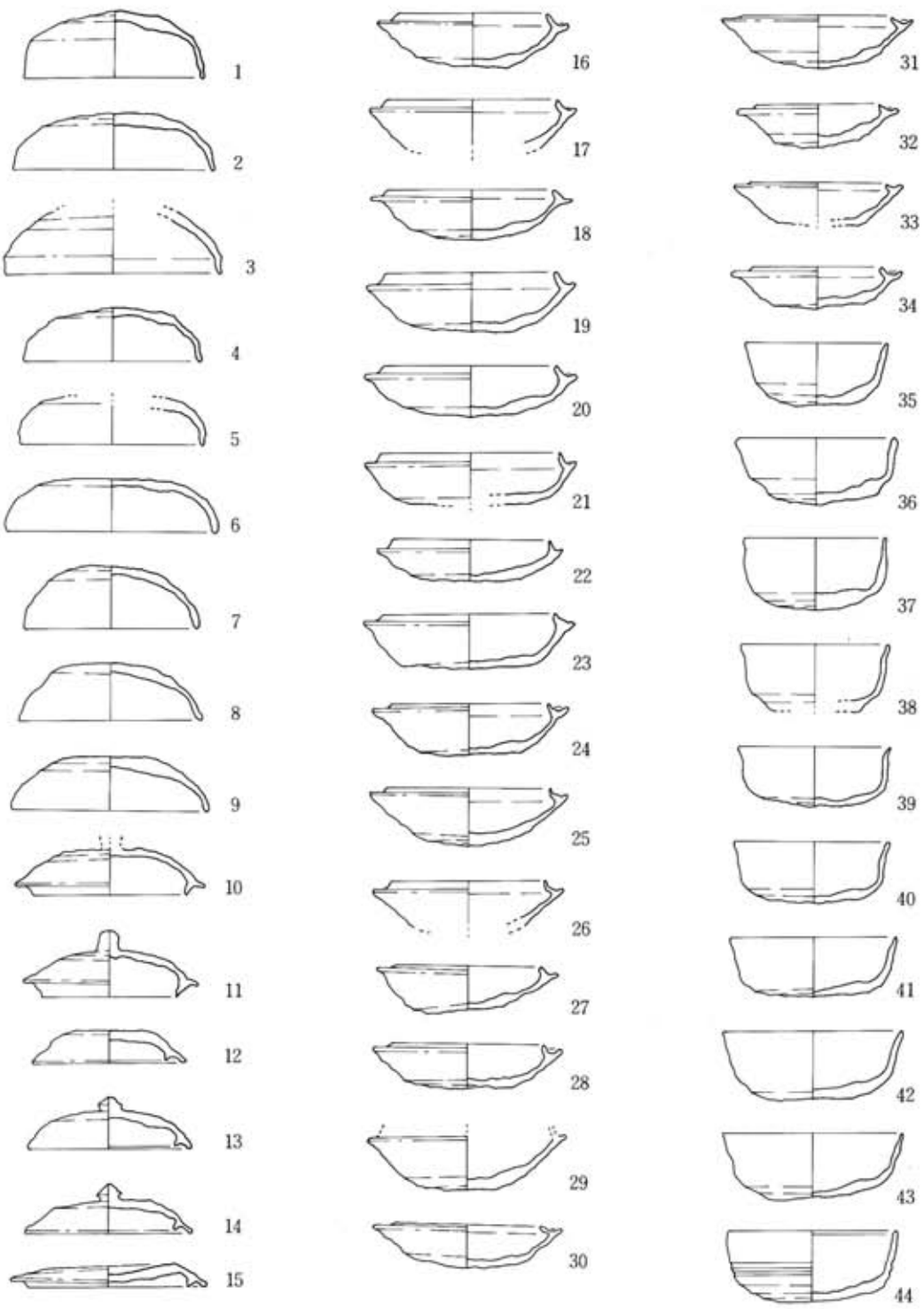


Fig. 38　香田遺跡出土須恵器実測図　(1)

つまみは，蓋Ba類よりも稜の強い宝珠様つまみである。しかし，かえりは逆に短く，断面三角形に突出している。かえりの端部はやや丸い。天井部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。14の天井部外面にヘラ記号がある。

蓋Bc (15)　かえりは口縁端部とほぼ同じ高さであるが，つまみがないもの。蓋A・B類の中で，最も扁平である。口径11.6cm，器高1.4cm。天井部から体部にかけて，角ばる。かえりは断面三角形で尖る。天井部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。天井部外面にヘラ記号がある。

杯（Fig.38－16～44，39－45～53，PL.91－7～14）

38＋α個体出土した。立ち上がりの有無，高台の有無によりA・B・Cに大別，法量の大小によりⅠ・Ⅱに区分し，口縁部の形態によりさらにa・b・c・dに細分する。

杯A (16～34)

立ち上がりをもつものである。杯Aはさらに法量の大小によりそれぞれⅠ・Ⅱ，立ち上がりの傾き具合によりa・b・c・d に細分する。

杯AⅠa (16～18)　立ち上がりが，やや立ち気味で，杯が深めのもの。口径11.3～12.5cm，器高3.1cm。底部から体部にかけて丸みをもつ。受部は水平または上外方に短くのび，端部は丸い。立ち上がりは，反り気味に内傾しているが，さほど傾いていない。端部は丸いかやや尖る。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。16と18の底部外面にヘラ記号がある。

杯AⅠb (19～23)　立ち上がりは，やや立ち気味で杯Aa類と差はないが，底部が平底で杯が浅めのもの。口径11.0～12.7cm，器高2.4～3.5cm。底部から体部にかけて，やや角ばるものと丸みをもつものがある。受部はほとんど上外方に短くのび，端部で尖るものと丸みをもつものとがある。立ち上がりは反り気味で，端部は尖る。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。19・20・22・23の底部外面にヘラ記号がある。

杯AⅠc (24～29)　立ち上がりの内傾度が増し，受部より少し高いぐらいのもの。口径10.8～11.9cm，器高2.6～3.4cm。底部は平底気味で，体部にかけてやや角ばる。受部は上外方に短くのび，端部は丸い。立ち上がりは，反り気味に内傾しているが，一旦大きく内傾した後，端部で直立するものもある。端部はほとんど尖る。底部はヘラケズリ，またはその後ナデ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。24・25・27・28・29の底部外面にヘラ記号がある。

杯AⅠd (30・31)　立ち上がりの内傾度が最も大きく，受部よりわずかしか高くないもの。口径2.6～3.1cm，器高11.3～11.4cm。底部から体部にかけて，角ばる。受部は上外方へまっすぐのびる。端部は丸い。立ち上がりは反り気味に，大きく内傾する。端部は丸いものと尖るものとがある。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。31の底部外面にヘラ記号がある。

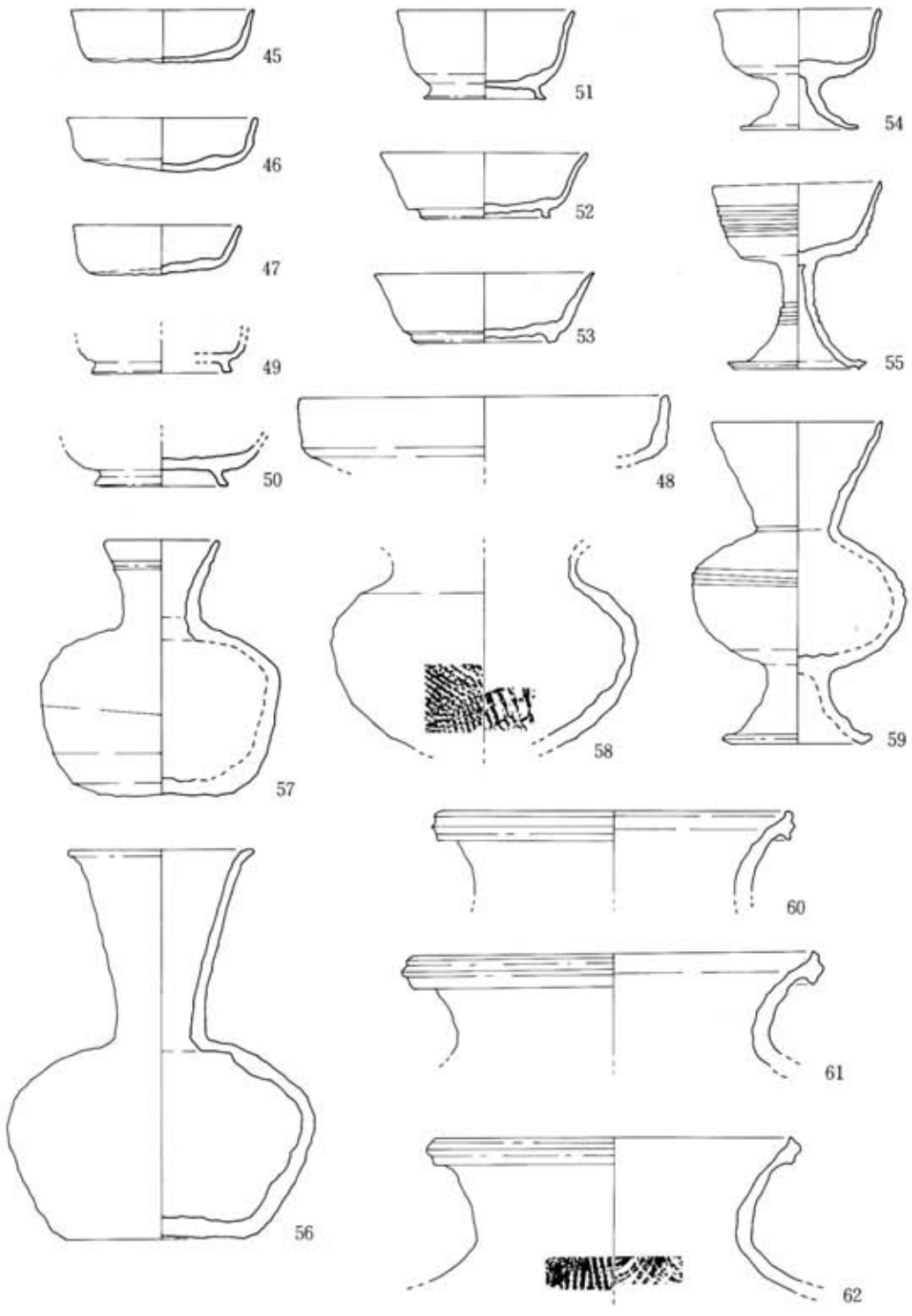


Fig. 39　香田遺跡出土須恵器実測図　(2)

杯AⅡ (32～34)　杯A類の中で，最も小型のものである。口径9.6～10.1cm，器高2.4～2.7cm。底部から体部にかけて角ばり，体部はあまり反らず，直線的に上外方へのびる。受部は内湾気味に上方へのび，端部は丸い。立ち上がりは，反り気味に大きく内傾し，受部よりわずかしか高くない。端部は丸いものと尖るものとがある。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。32の底部外面にヘラ記号がある。

杯B (35～48)

立ち上がりも高台ももたないものである。杯Bはさらに法量の大小によりそれぞれⅠ・Ⅱ，体部の傾き具合・杯の深さによりa・bに細分する。

杯BⅠa (45～47)　体部が上外方に開き，杯が浅く平底のもの。口径10.3～11.0cm，器高2.9～3.2cm。底部から体部にかけて角ばり，体部は上外方にのび，端部で短かく反る。端部は丸い。底部は平坦である。口径の大きさに対し，杯は浅い。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。47の底部外面にヘラ記号がある。

杯BⅠb (48)　体部が直立気味で，杯が浅いもの。口径21.8cm。底部から体部にかけて角ばり，体部は内湾しつつ，やや上外方にのびる。端部は尖る。器壁はかなり厚い。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ。

杯BⅡa (35～38)　杯B類の中で小型で，体部が直立気味の，杯が深いもの。口径8.4～9.1cm，器高3.8～4.3cm。底部から体部にかけて丸みをもち，体部は内湾しつつ直立し，端部で短く内湾及び外反する。端部は丸い。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。35の底部外面にヘラ記号がある。

杯BⅡb (39～44)　杯BⅡaよりやや大きめで，体部が上外方に少し開き，底部にあまり丸みがないもの。口径9.1～10.7cm，器高3.5～4.2cm。底部から体部にかけて，不明瞭だがやや角ばる。体部は杯BⅡaより開き気味に内湾しつつ，端部にいたる。端部は短く外反するものもあるが，ほとんどは体部の線がそのままのびる。底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。全て，底部外面にヘラ記号がある。

杯C (49～53)

高台をもつものである。杯Cはさらに体部の傾き具合，杯の深さ，高台の形状により，a・bに細分する。

杯Ca (49～51)　体部が直立気味で，杯が深く，高台も長いもの。口径が計測できるのは51のみで，10.4cm。底部から体部にかけて丸みをもち，体部はやや開く程度で，杯は深くなる。高台は下外方に張り出し，端部は水平方向にのびる。底部はヘラケズリ後ナデ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。

杯Cb (52・53)　体部の外傾度が大きく，杯が浅いもの。また高台も短い。口径12.4～13.0cm，器高3.9～4.1cm。底部から体部にかけて，角ばる。体部は内湾しつつ上外方へのび，

端部でゆるやかに外反する。高台は短く，直立する。底部はヘラケズリ，またはその後ナデ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。

高杯（Fig.39－54・55，PL.92－1・2）

2＋α個体出土した。図示した2個とも無蓋高杯である。両方とも杯部の大きさに比べ，脚部が小さく弱い感じがある。**54**は杯部が深く，体部に丸みをもち，脚部が短く大きく開く。底部はヘラケズリ後ナデ，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。脚部にシボリ痕。**55**は杯部が深いが，体部は角ばる。脚部は長く，裾部で大きく開く。底部はカキ目調整で，他は内外面ともヨコナデ，ナデ。脚部にシボリ痕。

壺（Fig.39－56～59，PL.92－3・9・10）

4＋α個体出土した。頸部の形状，脚の有無によりA・B・Cに大別し，さらに頸部の大小

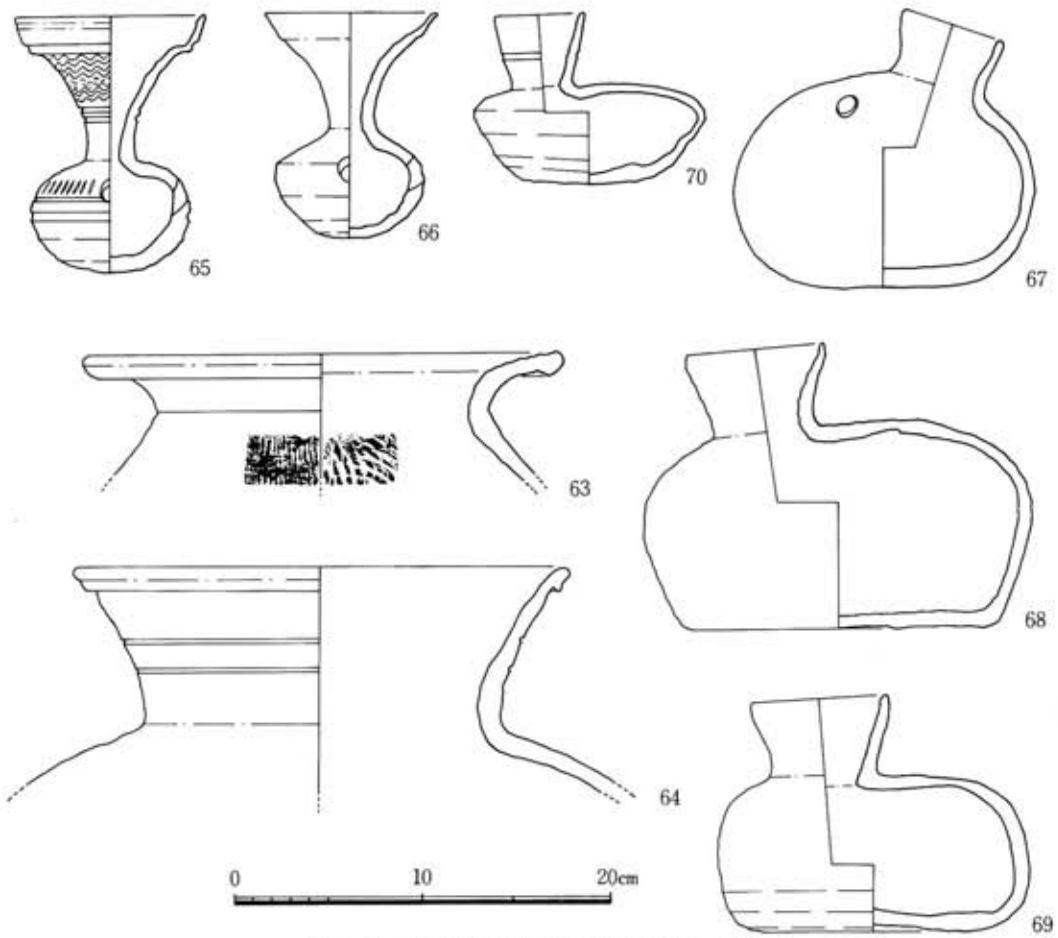


Fig.40　香田遺跡出土須恵器実測図（3）

によりa・bに細分する。

壺A (56・57)

長い頸部をもち，平底のもの。

壺Aa (56)　胴部は内湾し，肩部がやや張る。頸部は長く，上外方へゆるやかにのび，端部で大きく反る。底部は平底である。胴部はヘラケズリ，肩部はカキ目調整後ヨコナデ，頸部内面はヘラケズリ後ナデ，他はヨコナデ，ナデ。

壺Ab (57)　胴部は内湾するが，肩部はあまり張らず，体部に丸みをもつ。頸部は上外方に反り，そのまま端部までのびる。底部は平底である。底部から胴下半部までヘラケズリ，他はヨコナデ。肩部外面にヘラ記号がある。

壺B (58)

頸部が長くなく，丸底のもの。胴部から肩部にかけて丸みをもち，明瞭な境をつくらずに頸部へのびる。頸部は大きく外反する。外面胴下半部はタタキ，胴上半部から肩部にかけてヘラケズリ後ナデ，他はヨコナデ。頸部にシボリ痕。

壺C (59)

脚付のもの。体部は扁平な球形で，頸部は次第に大きく開く。脚部は細く，裾部で大きく開き，端部ははね上がる。胴下半部はヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ。

甕 (Fig.39－60～64)

5＋α個体出土した。体部までつづく個体がなく，口頸部のみ図示した。甕は，口径20.4～26.0cmで，中型の部類に入るものである。各個体は，口縁端部に大きな特徴をもつ。**60・61**は口縁端部が上下に突出し，稜をもつ。**62**はその口縁端部の突出部が鋭くなく，丸みをもつ。**63・64**は口縁端部が下端部にのみ突出する。頸部の外傾度は**63**が最も強く，他はほぼ同じ程度である。**60・61**は内外面ともヨコナデ，**62～64**は肩部にタタキ，他は内外面ともヨコナデ。**64**の肩部にはタタキ後，カキ目調整が入る。

鉢 (Fig.40－65・66，PL.92－4)

2個体がほぼ完形で出土した。両方とも体部は扁平気味の球形であるが，**66**の肩部がやや張る。頸部は細く長く外反し口縁部で大きく開く。**65**の頸部には段が明瞭にあるが，**64**は不明瞭である。また，**65**には頸部に櫛描波状文，胴部上半に刺突文があるが，**64**には何もない。**64・65**とも胴部はヘラケズリ，他はヨコナデ。**65**の肩部はカキ目調整の後，ナデ。

平瓶 (Fig.40－67～70，PL.92－5～8)

4個体出土した。各個体の口頸部の形状にさほどの差はないが，体部に違いがある。**67**は全

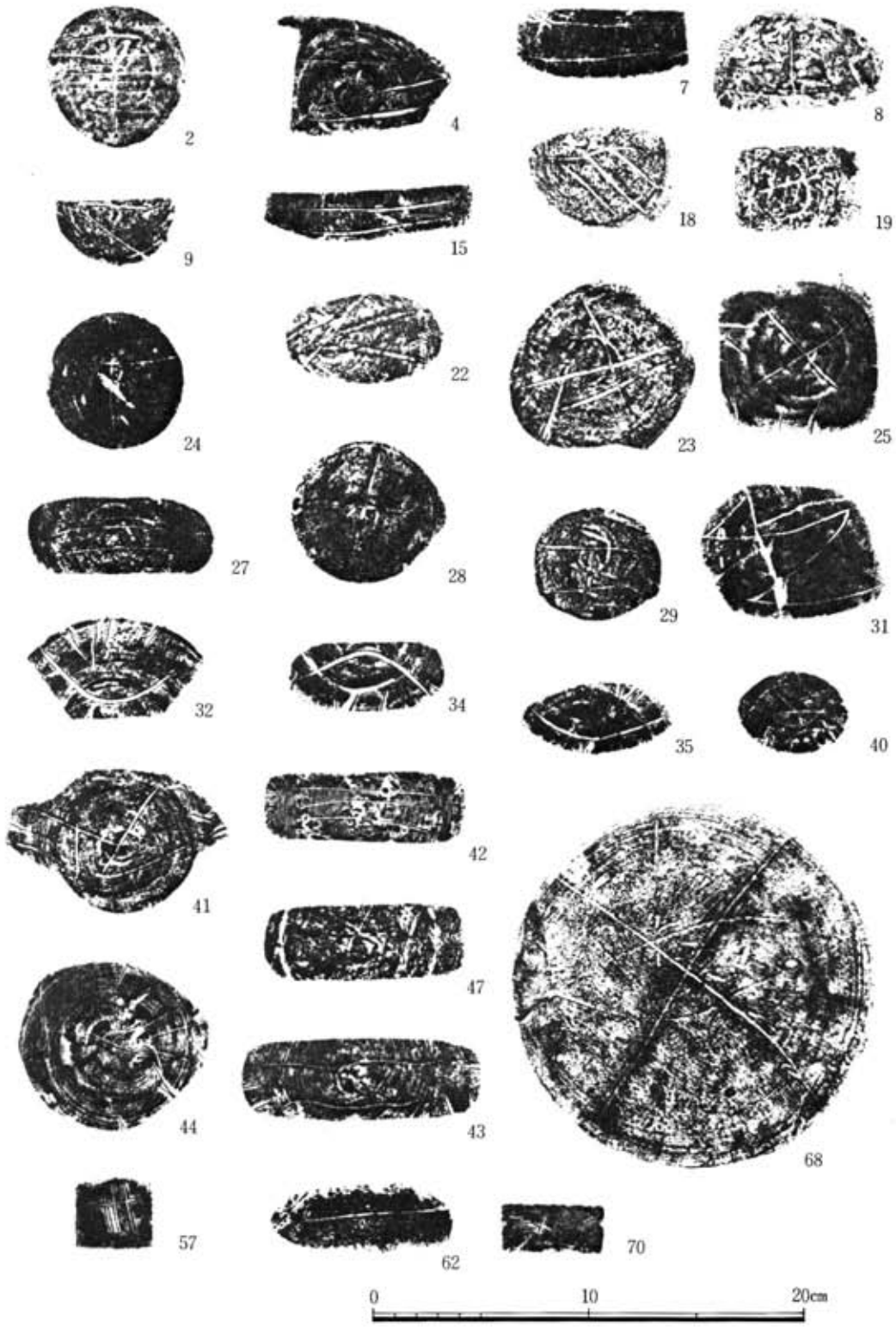


Fig. 41　香田遺跡出土須恵器ヘラ記号拓影

体的に丸みをもち，肩部に１対の粘土粒を貼付する。体部から肩部にかけてカキ目調整，他は内外面ともヨコナデ。**68・69**は丸みがなく扁平気味で，肩部がやや張る。胴下半部はヘラケズリ，底部はヘラケズリ,またはその後ナデ，他は内外面ともヨコナデ。また**69**の肩部にカキ目調整。**68**は底部外面，**69**は肩部外面にヘラ記号がある。**70**は**68・69**よりさらに肩部の張りが強くなる。小型である。体部はヘラケズリ後ナデ，底部はヘラケズリ，他は内外面ともヨコナデ。胴下半部外面にヘラ記号がある。

鉄器（Fig.42，PL.94－１・２）

本遺跡から出土した鉄器は，鎌・斧・刀子・鏃・釘である。釘を除けば，各種とも点数は少ない。

鉄鎌（１）　SB020住居跡から１点出土した。全長14.9cm，刃部中央幅2.8cm，刃部厚0.2cmで，基部は刃部先端部に向かって左側に短く折り曲げている。刃部は基部から少しずつ細身になるが，刃部先端近くまで，大差ない。やや湾曲する。

鉄斧（２）　B地区１区埋土中から１点出土した。全長7.0cm，刃部幅2.6cmで，袋部は内径2.3×1.6cmの楕円形をしている。袋部の折り返し部分は密着している。

刀子（３～５）　ST016・019古墳石室から各１点，B地区１区埋土中から１点，計３点出土した。**3**はST019古墳出土で，全長10.6cm，刃部長5.6cm，刃部幅1.2cm，棟幅0.35cmである。茎部に木質が残存している。**4**はST016古墳出土で，鋒先を欠失しているが，現存長10.7cm刃部長5.8cm，刃部幅1.1cm，棟幅0.35cmである。茎部に木質が残存している。**5**はB地区１区出土で，刃部先端及び茎部端を欠失しているが，現存長5.9cm，刃部幅1.1cm，棟幅0.3cmである。茎部に樹皮が残存している。

鉄鏃（６～８）　ST016古墳前室から，３点出土した。全て平根式である。**6**は両丸造柳葉式で，全長12.0cm，中央幅2.6cm，厚0.2cmである。腸抉部が二段になっている。**7**も両丸造柳葉式で，**6**に類似する。茎部先端を欠失しているが，現存長11.0cm，中央幅2.3cm，厚0.3cmである。腸抉部も二段になっている。茎部に木質が残存する。**8**は平造斧箭式で，茎部先端を欠失しているが，現存長11.0cm，最大幅3.2cm，厚0.2cmである。

鉄釘（９～20）　全てSK014土壙墓から出土し，20本以上である。頭部に形状の違いがあり大きく折り曲げているもの（**12・15**）と平たくＬ字状のもの（**９～11・13・14・16～20**）に大別できる。断面は方形・長方形である。また木質は全てのものに残存しているが，釘の使用箇所の違いから，各釘に残る木目の走る方向が異なる。３種類ある。

A類（９～14）　上半部は横方向であるが，下半部は縦方向である。全長5.3～6.6cm，最大幅0.5～0.7cm。

B類（15・17～19）　上半部・下半部とも横方向で，全長4.2～5.2cm，最大幅0.35～0.5cm。

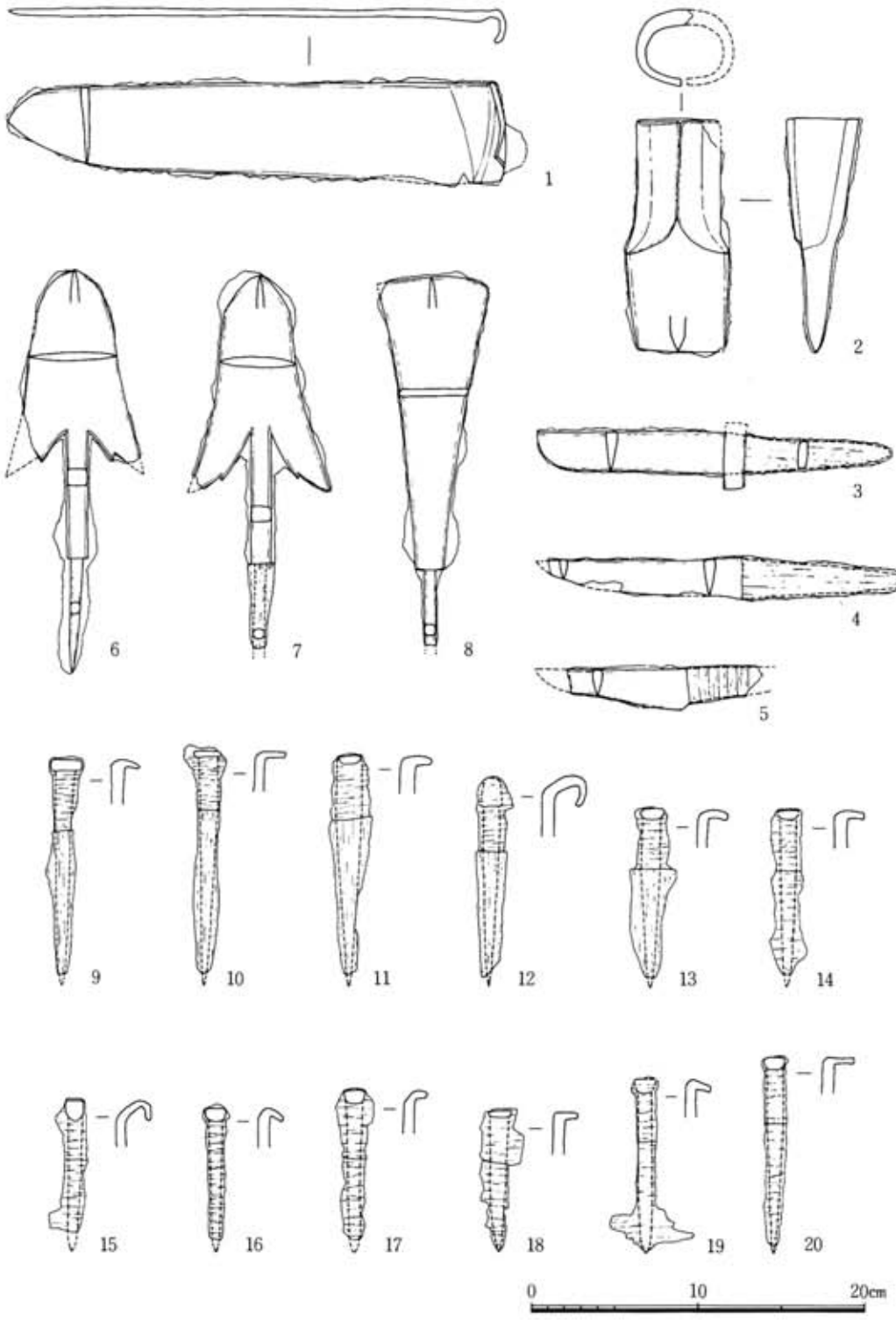


Fig. 42　香田遺跡出土鉄器実測図

C類（16・20）　上半部・下半部とも横方向であるが，上半部と下半部の木目方向は直交している。全長4.4～5.8cm，最大幅0.4～0.5cm。

以上から，木目方向の異なる鉄釘は，同じ方向のものよりも長く，太い傾向をもっている。

装身具（Fig.43，PL.94－3・4）

本遺跡から出土した装身具は，耳環・勾玉・管玉・丸玉・小玉である。ほとんどが，ST016・019古墳の石室内から出土している。

耳環（1～14）　ST016古墳石室から6個体（**4・8～10・13・14**），ST019古墳石室から8個体（**1～3・5～7・11・12**），計14個体出土した。いずれも銅地に金箔を張った耳環だが，剝落が激しく金箔がほとんど残っていないものもある。**1～6**は大型で直径2.7～3.1cm，断面厚0.7～0.85cm。**7～14**は**1～6**よりもやや小型で，直径2.1～2.6cm，断面厚0.45～0.8cm。

勾玉（15）　ST016古墳石室から1個体出土した。淡褐色の瑪瑙製で，全長3.7cm，幅1.5cm，厚1.1cm。

管玉（16～18）　ST016古墳から2個体（**16・17**），ST019古墳から1個体（**18**），計3個体出土した。いずれも青緑色の碧玉製である。孔は一方から穿っている。

丸玉（19～21）　ST019古墳から1個体（**19**），ST016古墳から2個体（**20・21**），計3個体出土している。いずれもガラス製で，直径1.2cm，厚1.1～1.2cm。

小玉（22～27）　22のみB地区1区埋土中からで，他5個体（**23～27**）はST016古墳から出土している。いずれもガラス製である。ST016古墳の小玉は，直径0.3～0.4cm，厚0.2～0.3cmしかないもの（**25～27**）もあり小型である。

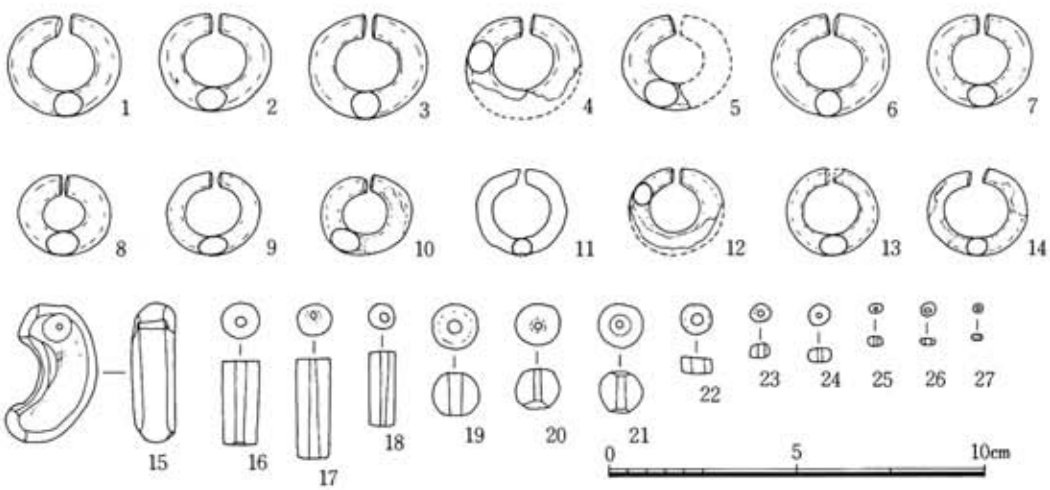


Fig.43　香田遺跡出土装身具実測図

Tab. 4　香田遺跡出土土師器一覧表

法量 ①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底部径

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	色調
1	小型丸底壺	Fig 35 PL 89	Aa	SB020	①11.3 ②8.0	褐色
2	小型丸底壺	Fig 35	Aa	SB020	①9.3	内面黄褐色，外面褐色
3	小型丸底壺	Fig 35 PL 89	Ab	SB020	①8.8 ②6.1	濃褐色
4	小型短頸壺	Fig 35 PL 89	BⅠ	SB020 床面	①13.26 ②9.5	褐色
5	小型短頸壺	Fig 35 PL 89	BⅡ	SB020	①11.7	内面褐色，外面褐色及び体部から底部にかけて黒色
6	壺	Fig 35	CⅠ	SB020		黄褐色
7	壺	Fig 35 PL 89	CⅡ	SB020	①17.0	褐　色
8	壺	Fig 35 PL 89	CⅡ	SB020	①15.8 ②20.3	黄褐色
9	壺	Fig 35	D	SB021	①27.4	赤褐色
10	壺	Fig 35	E	1区L－95	①12.0	暗褐色
11	壺	Fig 35	E	SB021	①11.0	内面褐色，外面褐色
12	特殊壺	Fig 35 PL 90	F	SB020	①6.2 ②7.7	内面暗褐色，外面褐色
13	甕	Fig 36	AⅠ	SB022	①26.0	赤褐色
14	甕	Fig 36	AⅡ	Ⅰ区K－95	①16.1	内面淡黒褐色，外面褐色
15	甕	Fig 36	AⅡ	Ⅰ区M－52	①13.9	褐　色
16	甕	Fig 36	BⅠ	4区P－88	①30.0	褐　色
17	甕	Fig 36	BⅡ	Ⅰ区M－98	①22.5	淡褐色
18	甕	Fig 36	BⅡ	1区－55	①16.5	内面褐色，外面黒褐色
19	甕	Fig 36	BⅡ	1区L－95	①20.9	赤褐色
20	甕	Fig 36 PL 89	C	SP014	①17.2 ②33.3	濃褐色
21	甕	Fig 36 PL 89	C	SP014		濃褐色
22	高杯	Fig 37 PL 90	A	SB020	①15.2	黄褐色
23	高杯	Fig 37	A	SB020	①15.4	褐色
24	高杯	Fig 37 PL 90	A	SB020	①16.3	濃褐色
25	高杯	Fig 37 PL 90	A	SB020	①15.2 ②14.6	黄褐色，丹塗り？
26	高杯	Fig 37 PL 90	Ba	SB020	①15.1	褐色
27	高杯	Fig 37	Bb	SB020	①11.4	黄褐色
28	高杯	Fig 37 PL 90	Bc	SB022	①14.0	赤褐色
29	器台	Fig 37 PL 90		SB020	①8.21 ②7.4	褐色
30	杯	Fig 37	Aa	Ⅰ区K－95	①10.5 ②4.15	赤褐色
31	杯	Fig 37	Ab	SB021	①13.0	赤褐色
32	鉢	Fig 37 PL 90		表　採	①12.7 ②5.1	黄褐色

Tab. 5　香田遺跡出土須恵器一覧表

法量{①口　径 ②器　高 ③かえり径 ④つまみ径 ⑤受部最大径 ⑥立ち上がり高 ⑦高台径 ⑧脚裾部径 ⑨体部最大径}

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	ロクロ回転	ヘラ記号	色調
1	蓋	Fig 38 PL 91	Aa	ST016 前室	①10.7 ②4.0			外面黒灰色，内面青灰色
2	蓋	Fig 38	Ab	ST016 前室	①11.9 ②3.3	左	有	外面黒灰色，内面灰色
3	蓋	Fig 38	Ab	B地区1区	①12.4			外面褐色，内面青灰色
4	蓋	Fig 38	Ab	ST016 前室	①10.3 ②3.1		有	暗灰色
5	蓋	Fig 38	Ab	B地区1区	①10.7		有	外面黒灰色，内面青灰色
6	蓋	Fig 38 PL 91	Ab	ST019 羨道	①12.2			外面黒灰色，内面灰白色
7	蓋	Fig 38	Ac	ST016 前室	①10.1 ②3.2		有	外面褐色，内面淡褐色
8	蓋	Fig 38 PL 91	Ac	ST016 前室	①10.8 ②3.4	左	有	褐　色
9	蓋	Fig 38	Ac	B地区1区	①11.4 ②3.2		有	淡灰白色
10	蓋	Fig 38	Ba	ST016 前室	①11.4 ②2.8 ③9.0			外面褐色，内面紫灰色
11	蓋	Fig 38 PL 91	Ba	ST016 前室	①10.3 ②3.9 ③8.1 ④1.2			外面灰褐色，内面暗灰色
12	蓋	Fig 38	Bb	B地区1区	①9.2 ②2.0 ③7.0			淡褐色
13	蓋	Fig 38 PL 91	Bb	ST016 前室	①9.8 ②3.1 ③7.8 ④1.4			暗灰色
14	蓋	Fig 38	Bb	ST016 前室	①10.0 ②3.0 ③8.0 ④1.4	右	有	紫灰色
15	蓋	Fig 38 PL 91	Bc	ST016 前室	①11.6 ②1.4 ③9.6	右	有	紫灰色
16	杯	Fig 38	AIa	ST016 前室	①11.3 ②3.1 ⑤9.0 ⑥0.6		有	外面紫褐色，内面紫灰色
17	杯	Fig 38	AIa	B地区1区	①12.5 ⑤10.3 ⑥0.6			灰　色
18	杯	Fig 38 PL 91	AIa	ST016 前室	①12.0 ②3.1 ⑤9.9 ⑥0.6		有	外面暗褐色，内面灰白色
19	杯	Fig 38	AIb	ST016 前室	①12.5 ②3.5 ⑤10.2 ⑥0.7		有	黒灰色
20	杯	Fig 38	AIb	B地区1区	①12.7 ②3.1 ⑤10.4 ⑥0.6		有	淡紫灰色
21	杯	Fig 38	AIb	B地区1区	①12.7 ②3.2 ⑤10.8 ⑥0.7			暗紫灰色
22	杯	Fig 38	AIb	ST016 前室	①11.0 ②2.4 ⑤9.4 ⑥0.6		有	灰　色
23	杯	Fig 38 PL 91	AIb	ST019 羨道	①12.6 ②3.3 ⑤10.3 ⑥0.5		有	灰　色
24	杯	Fig 38	AIc	ST016 前室	①11.9 ②3.0 ⑤9.5 ⑥0.5		有	赤褐色
25	杯	Fig 38	AIc	ST016 前室	①11.9 ②3.4 ⑤10.0 ⑥0.4		有	外面褐色，内面褐色
26	杯	Fig 38	AIc	ST016 前室	①11.4 ⑤9.5 ⑥0.6			暗褐色
27	杯	Fig 38	AIc	ST016 前室	①10.8 ②2.6 ⑤8.8 ⑥0.5		有	灰褐色
28	杯	Fig 38	AIc	ST016 前室	①11.3 ②2.7 ⑤9.1 ⑥0.5		有	外面灰白色，内面暗灰色
29	杯	Fig 38	AIc	B地区1区	①11.8		有	灰白色
30	杯	Fig 38 PL 91	AId	A地区1区	①11.3 ②2.6 ⑤8.7 ⑥0.3			黒灰色
31	杯	Fig 38	AId	ST016 前室	①11.4 ②3.1 ⑤9.0 ⑥0.4		有	褐　色
32	杯	Fig 38	AII	ST016 前室	①9.6 ②2.5 ⑤7.4 ⑥0.3		有	灰白色
33	杯	Fig 38	AII	ST016 前室	①10.1 ②2.7 ⑤8.1 ⑥0.3			灰褐色
34	杯	Fig 38	AII	ST016 前室	①10.2 ②2.4 ⑤7.8 ⑥0.3			黄褐色

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	ロクロ回転	ヘラ記号	色調
35	杯	Fig 38	BⅡa	ST016 前室	①8.4 ②3.8		有	灰白色
36	杯	Fig 38	BⅡa	ST016 前室	①9.1 ②3.9			暗灰色
37	杯	Fig 38	BⅡa	ST016 前室	①8.4 ②4.3			灰　色
38	杯	Fig 38 PL 91	BⅡa	A地区	①8.6 ②3.9			暗灰色
39	杯	Fig 38	BⅡb	ST016 前室	①9.1 ②3.5		有	暗灰色
40	杯	Fig 38	BⅡb	ST016 前室	①9.4 ②3.6		有	青灰色
41	杯	Fig 38 PL 91	BⅡb	ST016 前室	①9.6 ②3.5		有	灰　色
42	杯	Fig 38	BⅡb	ST016 前室	①10.7 ②3.5		有	紫灰色
43	杯	Fig 38	BⅡb	ST016 前室	①10.5 ②3.7		有	暗灰色
44	杯	Fig 38	BⅡb	ST016 前室	①10.0 ②4.2		有	外面紫褐色，内面紫灰色
45	杯	Fig 39	BⅠa	ST016 前室	①10.8 ②3.1			暗灰色
46	杯	Fig 39 PL 91	BⅠa	ST016 前室	①11.0 ②3.2			紫灰色
47	杯	Fig 39	BⅠa	ST016 前室	①10.3 ②2.9		有	紫灰色
48	杯	Fig 39	BⅠb	B地区1区	①21.8			外面灰白色，内面黒灰色
49	杯	Fig 39	Ca	A地区1区	⑦8.4			灰白色
50	杯	Fig 39	Ca	B地区1区	⑦8.0			灰　色
51	杯	Fig 39 PL 91	Ca	A地区2区	①10.4 ②5.2 ⑦7.2			青灰色
52	杯	Fig 39 PL 91	Cb	ST018 周溝	①12.4 ②3.9 ⑦7.8			外面暗灰色，内面灰色
53	杯	Fig 39	Cb	B地区1区	①13.0 ②4.1 ⑦8.7			灰白色
54	高杯(無蓋)	Fig 39 PL 92		ST016 前室	①9.7 ⑦7.1 ⑧6.9			暗灰色
55	高杯(無蓋)	Fig 39 PL 92		ST016 前室	①10.0 ②11.0 ⑧7.6			灰白色
56	壺(長頸)	Fig 39 PL 92	Aa	ST016 前室	①11.0 ②23.0 ⑨18.4			灰白色
57	壺	Fig 39 PL 92	Ab	ST016 前室	①6.6 ②15.0 ⑨14.4		有	灰褐色
58	壺	Fig 39	B	ST018 周溝	⑨18.4			外面灰白色，内面黒灰色
59	壺(脚付)	Fig 39 PL 92	C	ST016 前室	①10.2 ②19.2 ⑧7.8 ⑨12.8			黒灰色
60	甕	Fig 39		SK 025埋土中	①20.4			黄褐色
61	甕	Fig 39		B地区1区	①23.6			褐　色
62	甕	Fig 39		ST018 周溝	①21.0		有	灰　色
63	甕	Fig 39		B地区1区	①24.4			灰白色
64	甕	Fig 39		A地区2区	①26.4			青灰色
65	甑	Fig 40 PL 92		ST019 羨道	①10.1 ②13.6			灰褐色
66	甑	Fig 40		ST019 羨道	①9.0 ②11.8			灰褐色
67	平瓶	Fig 40 PL 92		ST019 石室	①5.5 ②14.4			外面暗灰色，内面灰色
68	平瓶	Fig 40 PL 92		ST016 前室	①7.1 ②15.0		有	灰　色
69	平瓶	Fig 40 PL 92		ST016 前室	①7.2 ②12.3		有	黒灰色
70	平瓶	Fig 40 PL 92		ST016 前室	①4.8 ②9.0		有	灰白色

(4) 歴史時代

本遺跡より歴史時代の遺物として土師器杯・鉢・黒色土器・瓦質土器の鉢・土師質土器の羽釜等が出土した。

土師器（Fig. 44－33～36・43～61, PL. 90－10）

杯（Fig. 44－33～36・43～56, PL. 90－10）

土師器の杯で形態によりA・B・C・Dに大別する。

杯A（33～36）

高台のつく椀形の杯で高台がやや内湾しながら外側に開くもので，**36**は高台端部がさらに外側に開く。底部に板目を残すものと，ナデ・ヘラケズリを施すものがある。高台径は7.4～8.9cmを測る。

杯B（43～46）

平底で器高の低いもので法量によりさらにⅠ・Ⅱに分ける。

杯BⅠ（43）　平底にやや内湾しながら外反する体部をもつもので，底部と体部の境は段がつく。口径13cm，器高約2.4cmで内外面ともにヨコナデにより調整を施す。

杯BⅡ（44～46）　平底で杯AⅠに比べ口径が小さいもので，**45**は内湾しながら外反する体部をもつもので，丸底ぎみになる。口径7cm，器高1.35cm。**44**・**46**は平底に短く直線的に外反する口縁部をもつ。**44**は口径7.8cm，**46**は口径6.6cmである。

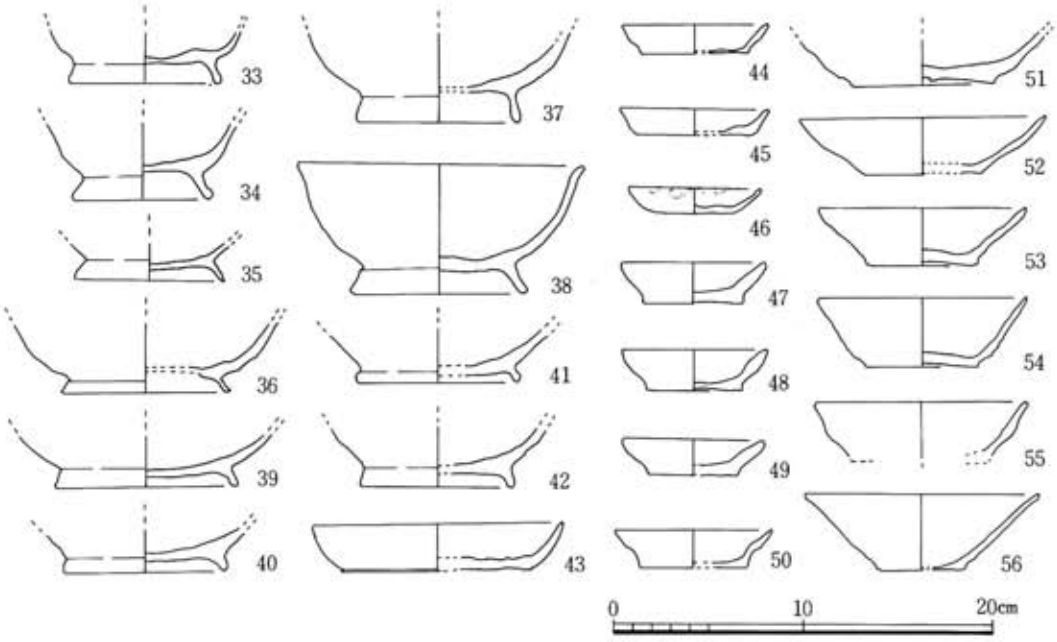


Fig. 44　香田遺跡出土歴史時代土器実測図（1）

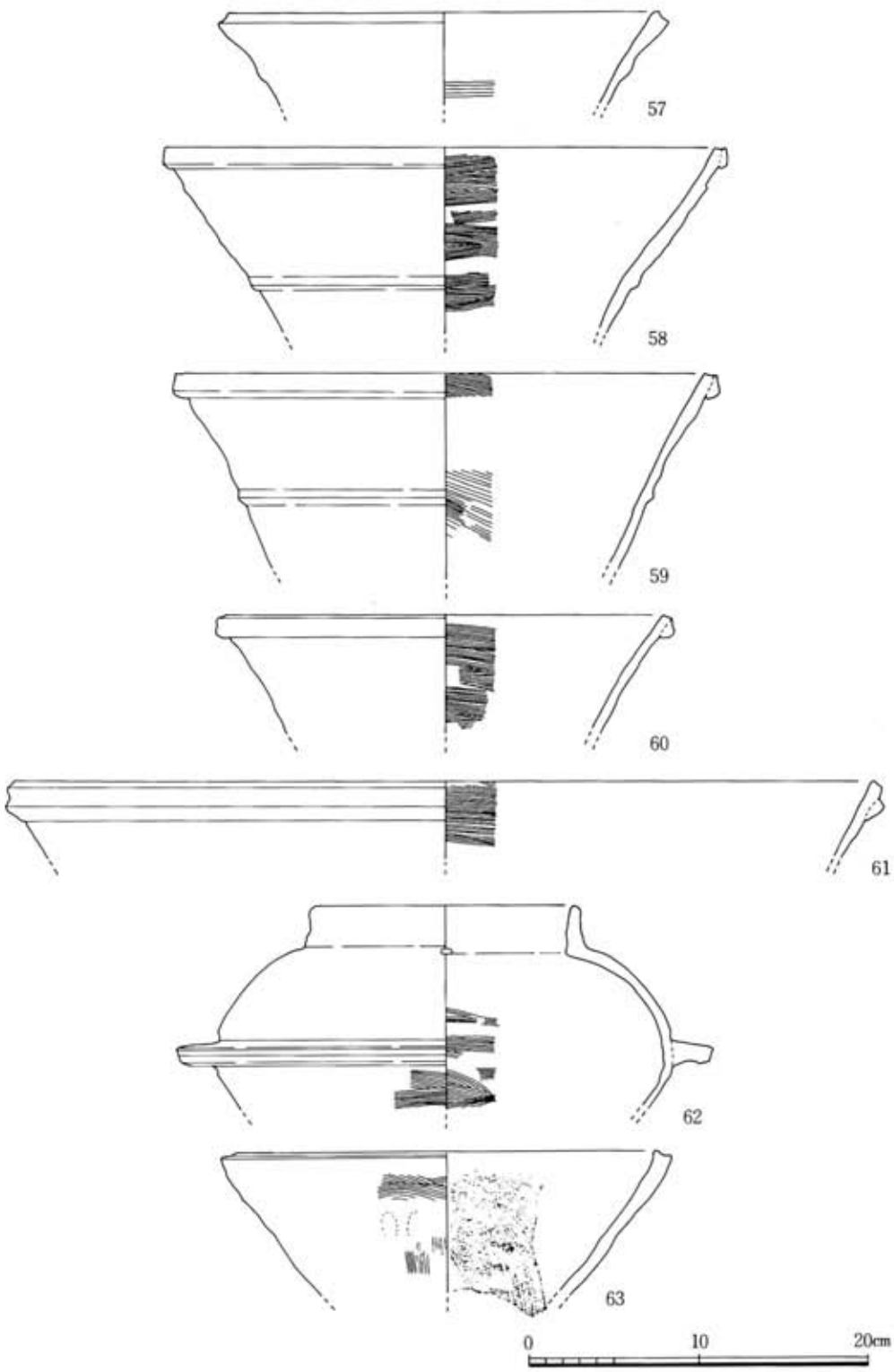


Fig. 45　香田遺跡出土歴史時代土器実測図　(2)

杯C (47～50)

平底，あるいはややあげ底になるもので，器壁が厚い。口径6.6～8.2cmである。

杯D (51～56)

平底，あるいはややあげ底になるもので，直線的に大きく外反する体部をもつもの。器高はやや高くなる。口径10.8～15.9cmである。

鉢 (Fig.45－57～61)

土師器の鉢で，口縁部の形態によりA・Bに大別する。

鉢A (57)

体部より口縁部にかけて直線的に外反するもので，口縁端部は中央部分がへこみ角をもつ。口径25cmで外面はヨコナデによる。

鉢B (58～61)

体部は直線的に外反するもので，法量によりⅠ・Ⅱに分け，口縁部の形態によりさらにa・bに細分する。

鉢BⅠa (61)　体部は直線的に外反するもので，口縁部は一段下げて貼りつけ，外側に突出させ体部の開きを補強したものである。口径50cmで，内面をハケで調整する。

鉢BⅡb (58～60)　体部は直線的に外反するもので，口縁部には貼りつけて外側に突出させ体部の開きを補強したものである。口径25～32.7cmで，内面はハケで調整を施している。

黒色土器 (Fig.44－37～42，PL.90－9)

6個体＋α出土した。すべて高台を有するもので，高台部分の変化によりa・bに細分した。

黒色土器Aa (37・38)　高台の高さが1.2cm程のものでやや高い様相を示すものである。**38**は完形品で，内湾しながら外反する体部にさらにやや外反する口縁端部をもつ。高台は大きく外側に開く。口径15cm，器高6.8cm，器高9.4cm。内黒の土器である。**50**はやや外側に開く高台で高台径8.7cmである。

黒色土器Ab (39～42)　高台の高さが0.5cm内外のもので低い様相を示すものである。高台はすべてやや外側に開き，端部は丸味をもつ。高台径8.2～9.7cm。

土師質土器 (Fig.45－62)

土師質土器の羽釜で底部を欠き，体部は球状に丸くなり体部中位に鍔がめぐる。口縁部は直立し肉厚となる。肩部には穿孔がみられ，左右対象に2個あったものと考えられる。口径14.9cm。

瓦質土器 (Fig.45－63)

瓦質土器の鉢で体部はややそりぎみに外反する。口縁端部は角ばっており中央がややへこむ。口縁部はやや厚くなっており体部の開きを補強する。口径24.2cm。

Tab. 6　香田遺跡歴史時代遺物一覧表　　法量{①口径 ③胴部最大径 ②器高 ④底部径}

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	色調
34	杯	Fig 44	A	1区L－93		赤褐色
34	杯	Fig 44	A	1区M－93		内面暗褐色，外面淡褐色
35	杯	Fig 44	A	4区Q－87		内面褐色，外面淡褐色
36	杯	Fig 44	A	4区Q－89		暗褐色
37	椀	Fig 44	Aa	4区P－88		内面黒色，外面淡褐色
38	椀	Fig 44 PL 90	Aa	1区	①15.0 ②6.8 ④9.4	外面淡褐色，内面黒色
39	椀	Fig 44	Ab	4区P－88		内外面黒色
40	椀	Fig 44	Ab	1区M－91		内面黒色，外面黒色
41	椀	Fig 44	Ab	4区Q－87		内面黒色，外面淡褐色
42	椀	Fig 44	Ab	4区Q－88		内面黒色，外面褐色
43	杯	Fig 44	BⅠ	SK 024	①13.0 ②2.5 ④10.0	赤褐色
44	杯	Fig 44	BⅡ	1区Q－91	①7.8 ②1.45 ④6.2	淡褐色
45	杯	Fig 44	BⅡ	2区R－99	①7.0 ②1.35 ④6.1	淡褐色
46	杯	Fig 44	BⅡ	1区Q－98	①6.6 ②2.2 ④5.1	暗褐色，外面煤付着
47	杯	Fig 44	C	2区Q－96	①7.7 ④5.6	黄褐色
48	杯	Fig 44 PL 90	C	SK 024	①7.4 ②2.15 ④5.3	褐　色
49	杯	Fig 44	C	SK 024	①7.3 ④4.6	褐　色
50	杯	Fig 44	C	2区Q－96	①8.2 ④5.6	褐　色
51	杯	Fig 44	D	4区P－87		褐　色
52	杯	Fig 44	D	ST 016	①12.8 ④6.1	淡褐色
53	杯	Fig 44	D	SX 026	①10.8 ②6.2 ④5.9	内面褐色，外面暗褐色
54	杯	Fig 44	D		①15.9 ②3.6 ④5.9	褐　色
55	杯	Fig 44	D	2区Q－96	①11	褐　色
56	杯	Fig 44	D	SK 024	①12.2 ④4.7	淡黄褐色
57	鉢	Fig 45	A	SK 024	①25.4	褐色，外面煤付着
58	鉢	Fig 45	BⅡb	SK 024	①32.7	赤褐色，外面煤付着
59	鉢	Fig 45	BⅡb	SK 024	①30.0	内面黄褐色，外面黒色～黄褐色 外面煤付着
60	鉢	Fig 45	BⅡb	SK 025	①25.0	内面褐色，外面暗褐色 外面煤付着
61	鉢	Fig 45	BⅠa	SK 024	①50.0	褐　色
62	羽釜	Fig 45		SK 025	①14.9	内面暗褐色，外面褐色 外面煤付着
63	鉢	Fig 45		SK 025	①24.2	内面暗灰色，外面灰褐色 外面煤付着

4．小　　結

今回調査した香田遺跡では，以上の報告のように集石遺構10基，支石墓・壺棺墓・石棺墓・土壙墓各１基，古墳５基，住居跡３基，掘立柱建物跡１棟，土壙２基の各遺構を検出した。時期は縄文時代早期から中世（鎌倉，室町時代）にまで及んでおり，断続的とはいえかなり長期間である。しかし，遺構数からみて時期的に中心になるのは縄文時代早期と古墳時代後期であり，他の時期に属する遺構は少ない。特に弥生時代は，遺物は数点出土しているものの遺構はなく，空白の期間である。

また出土した主な遺物は，押型文土器，縄文晩期の土器，弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，瓦質土器，磨石，石鏃，鉄器，装身具など，多種多様である。

さて，それらの遺構・遺物の中で，香田遺跡として特に留意しなければならないことは次の諸点であろう。

(1) 縄文時代早期の集石遺構と押型文土器

(2) 縄文時代晩期の支石墓・壺棺墓

(3) 古墳時代前期の住居跡とその一括遺物

(1)について

九州地方では，縄文時代早期の遺構は大分県早水台遺跡（住居跡），長崎県岩下洞穴（炉跡)・西輪久道遺跡（炉跡），福岡県原遺跡（炉跡)・深原遺跡（炉跡，円形竪穴遺構），熊本県中後迫遺跡（集石遺構）などで確認されているぐらいで，その同時期の膨大な遺物量と比較してかなり少ない。その数少ない遺構にしても，大部分が炉跡を検出した例であり，他の性格を持つ遺構は希少である。そして，それらの炉跡のほとんどは，炉内から炭化物や焼土が認められず，炉跡とはいうものの「石蒸し」という性格のものに推測されており，その域を出ていない。故に当時の生活環境についてはなおかなり不明な部分が多く，その検討には資料が不十分であり，従って遺物（押型文土器）を中心とした研究を行わざるを得ないというのが現状である。

これは佐賀県下においても例外ではなく，過去東脊振村戦場ケ谷遺跡，神埼町朝日，菅生，城原，日隈山，三田川町目達原，大和町春日，大願寺等々の各地で押型文土器が多々採集されているが，その検討は現在に至るまでまったくなされておらず，また遺構の確認も皆無であった。その意味において，本遺跡で確認した集石遺構は貴重例といえるかもしれない。そして，本例が他県下の諸例同様，遺構内の石がところどころ熱をうけたようになっているにもかかわらず炭化物や焼土を伴っていないという状況を持っていることは，それらと類似した性格のものと推測されるかもしれない。しかし，本遺跡の集石遺構の状況からは，即「石蒸し」を考えるだけの確信は持ち得なかった。これらの集石遺構の性格はわからない。（石蒸し料理法は，広くミクロネシアやポリネシアなどで行われている南方的要素の強い習俗である。わが南西諸島

でも，西表島仲間第１貝塚や宝島大池遺跡で発見されているが，それらの調査では焚火のあと累累たる焼け石，散乱する焼けた獣・魚骨や火焼による炭素の付着した小礫を確認している。その遺構の状況はまったく本遺跡とは異なる。）

(2)について

佐賀県下において，過去確認された支石墓は，唐津市五反田遺跡・葉山尻遺跡・岸高遺跡・瀬戸口遺跡・迫頭遺跡・森田遺跡・割石遺跡，北波多村徳須恵遺跡，佐賀市丸山遺跡，大和町尼寺南小路遺跡，神埼町四本黒木遺跡，東脊振村松ノ森遺跡・西石動遺跡そして中原町香田遺跡などで，日本海側の唐津平野周辺に８例，有明海側の佐賀平野周辺に６例である。

唐津平野周辺の支石墓は，（徳須恵を除いて）いずれも縄文晩期末～弥生時代初頭のもので内部主体は土壙，箱式石棺，甕棺である。数基～十数基で群をなす。

佐賀平野周辺の支石墓は，大和町尼寺南小路遺跡だけであったが，最近になって佐賀平野東部地域で次々と発見され６例を数える。時期は唐津平野周辺とほぼ同じ頃であり，内部主体も同じである。しかし，（丸山遺跡を除いて）各遺跡では現在までのところ群としてではなく，いずれも１基ずつしか確認されていない。本遺跡の支石墓はそれらの中でも最も古い時期に属するものの一つである。出土遺物からみて，丸山遺跡例（26号支石墓）と同時期位かやや古いかもしれないが丸山遺跡の詳細な調査及び報告を待ちたい。

また奇妙な土製品が出土しているが，何であろうか。類例を他にみない。

(3)について

佐賀県下の古墳時代前期の遺跡は，平野部を中心に確認されており，鳥栖市本川原遺跡，中原町姫方遺跡，三日月町戊遺跡・下久米遺跡，東脊振村西一本杉遺跡などがある。しかし，埋葬遺構の遺跡が多く，本遺跡のような住居跡の遺構を発見できたものはほとんどない。その意味では，住居跡とその一連の一括出土遺物は注目すべき資料であり，共伴関係などから今後出土する同時期の遺物に対して，一指標となるものである。土器形式から言えば，遠く近畿地方でみられる布留式土器の中でも古い方に属する土器群に類似している。しかし，その確認した住居跡が１基だけであるので，それから文化内容にまで深く言及することはできない。

以上のようなことが，本遺跡の留意点・問題点であるが，このように縄文時代早期・晩期，古墳時代前期と，県下で発掘調査・研究が意外に空白である時期の遺構を確認し得たこと，またその共伴遺物も明らかであることは今後に重要な一資料を提供するものと考えられる。

参考文献

国分直一「環シナ海民族文化考」慶友社　1976

岩崎二郎『北部九州における支石墓の出現と展開』「鏡山猛先生古稀記念古文化論攷」 1980

「丸山遺跡発掘調査概報」佐賀県教育委員会　1979

獅々喰遺跡

遺　跡　名：獅々喰（略号ＳＳＧ）
遺跡所在地：三養基郡中原町大字簀原字獅々喰

獅々喰遺跡

1．遺跡の概要

獅々喰遺跡は，三養基郡中原町大字簀原字獅々喰に所在する。

本遺跡は，佐賀平野の北方を東西に延びる脊振山地の南麓に位置し，遺跡の西を流れる寒水川が形成する河岸段丘上に位置する。遺跡の標高は61ｍあり，川面との比高は約４ｍである。確認された遺構は，複室の横穴式石室を有する古墳１基のみであるが，本遺跡の東側に所在する香田遺跡の古墳とともに，本古墳は寒水川東岸山麓の後期古墳群の一つとしてとらえられる。また寒水川西岸の河岸段丘上に本遺跡と相対するように綾部八本松遺跡（古墳群）が立地しており，周辺地域での後期古墳群を形成している（PLAN. 1，Fig. 1）。

遺物としては，表土や遺構から遊離した形で縄文時代の土器・石器を検出しているが，これらのものを伴う遺構は検出できていない。これらの遺物は隣接する香田遺跡のものとの関連性があると考えられる。

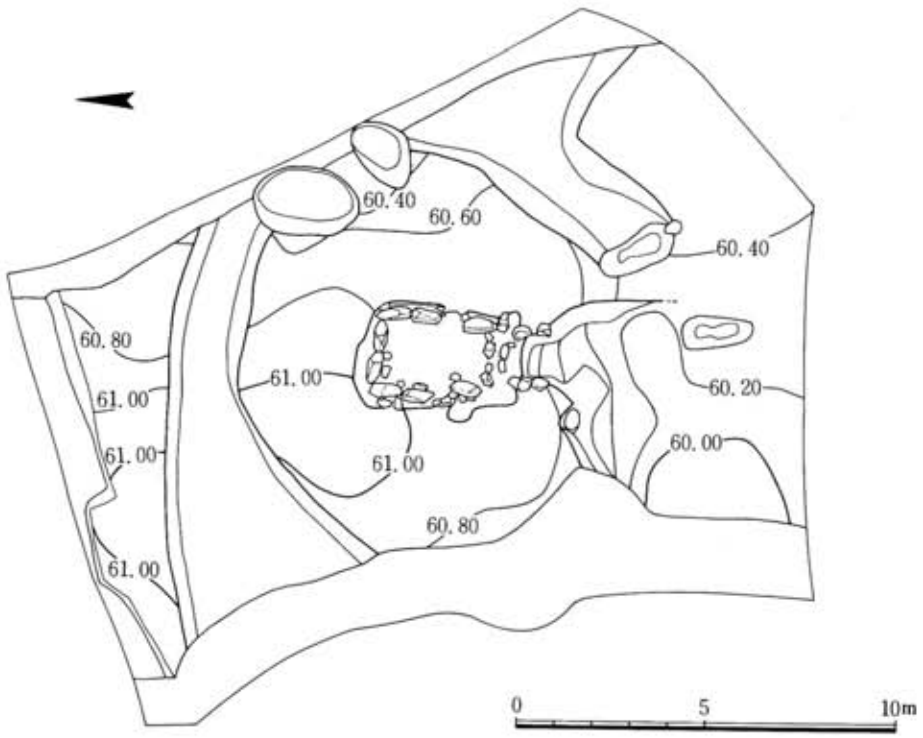


Fig. 46　獅々喰遺跡遺構配置図

2．遺　　構

本遺跡では，遺構として横穴式石室を持つ古墳一基を確認したにすぎない。しかし，遺物はこの古墳に伴って出土した須恵器や耳環などの他に，調査区域全域から縄文時代晩期の土器片が数10点出土している。区域外に何らかの遺構があると考えられる。（Fig.46）

ST001古墳（Fig.47・48，PL.23～25）

ST001古墳は，複室の横穴式石室を有する直径10mの円墳であるが，東西両側は削平されて周溝部がまったくなくなっている。低丘陵の西側緩傾斜面上に位置している。この地点からさらに西には，寒水川の左岸段丘がせまっている。

墳丘　南北の周溝しか残っていない。幅1.80～5.30m，残存する深さ0.32mで，幅に対してかなり浅い。墳丘は削平され，まったく不明である。

羨道　石室南側に造っている。長さ3.30m，周溝側幅3.20m，内部主体側幅1.30m，周溝側残存高0.40m，内部主体側残存高0.44mで中に入っていくに従って狭く，そして床面が高くなっている。床面の高低差は0.46mである。羨門近くの両壁には，石材が2～3個残っている。

内部主体　主軸をS－W5°方向にとり，南方向に開口している。長さ（羨室部も含む）4.34m，幅2.80m，深さ0.26mの長方形の掘り形に，長さ1.50m，幅1.68mの，平面が正方形に近い石室を造っている。各壁の腰石は，奥壁，両側壁とも2個で，高さが0.60m内外であるのに対し厚みが0.40m程もあり，安定感・重量感のある石材を用いている。玄室床面の敷石はほとんどなくなっているが，東北隅に数個残っている。また床面はほとんど水平で，高低差はない。玄門は両袖式であるが，両袖石とも石室内に倒れてしまっていた。長さ0.4m，推定幅1.30mである。玄室南側に横長の羨室がある。平面が長さ0.80m，幅1.36m，残存高0.58mの長方形である。東西両壁とも，重量感のある石材を各1個使って，腰石としている。羨門の東側袖石は残っているが，西側袖石は抜かれており，抜き跡しか残っていない。長さ0.30m，幅1.44mで羨室との間に仕切り石が4個並ぶ。

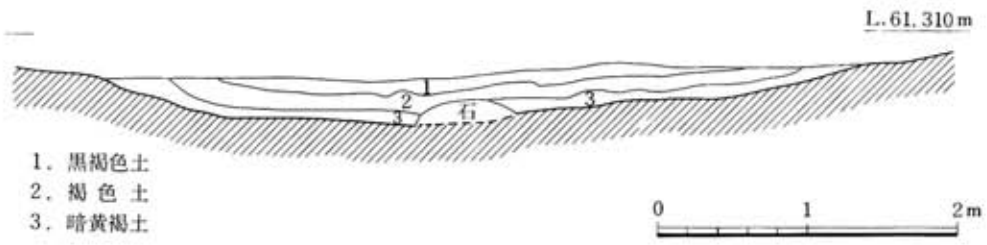


Fig.47　獅々喰遺跡ST001古墳周溝土層図

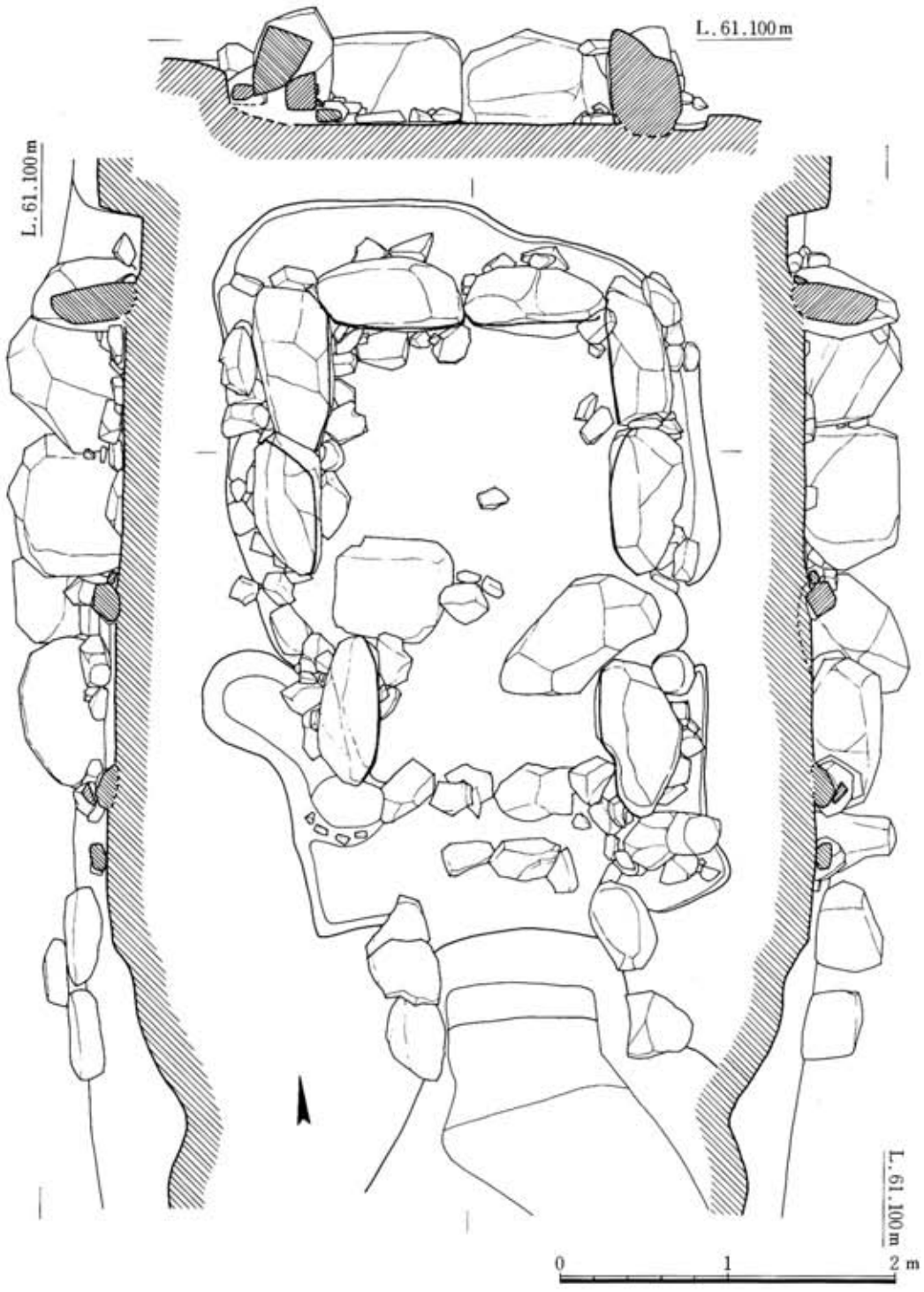


Fig.48　獅々喰遺跡ＳＴ001古墳石室実測図

3. 遺　　物

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されておらず，遺物は古墳の周辺から包含層の状態で発見された。時期は晩期後半であろう。

土器 (Fig.50)

器種としては，甕・鉢がある。甕には，いわゆる突帯文土器と条痕文土器とがあり，底部まで含めて8点図示した。鉢は黒色研磨土器で作りは非常に丁寧である。黒川式併行期以後の土器と見ることができよう。

石器 (Fig.49)

1は磨製石斧で平面は長方形，断面は扁平な長方形で基部はやや丸味をもつ。刃部は欠損している。砂岩質で，幅4.6cm，厚さ1.4cm，重量52gを測る。**2**は凹基無茎式の打製石鏃である。両面とも調整剝離は全体に及んでいる。長さ2.25cm，幅1.8cm，厚さ0.5cm，重量0.9gを測る。石材はサヌカイト。

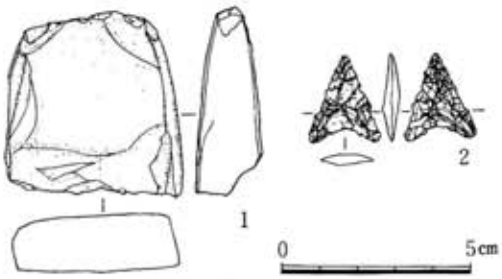


Fig.49　獅々喰遺跡出土石器実測図

(2) 古墳時代

調査したのは破壊墳1基であったが，石室前面を中心に周溝や石室内より比較的多数の遺物が検出された。

須恵器 (Fig.51，PL.95)

総出土個体数は明確ではないが，約40個体で，そのうち30個体を図示した。器種としては，蓋，杯，無蓋高杯，甕，平瓶，無頸壺等である。

蓋 (Fig.51－1～9，PL.95－1～4)

蓋A（1・2）

口縁部内面にかえりや，つまみを付さないものである。天井部はやや浅くて丸く，口縁部が

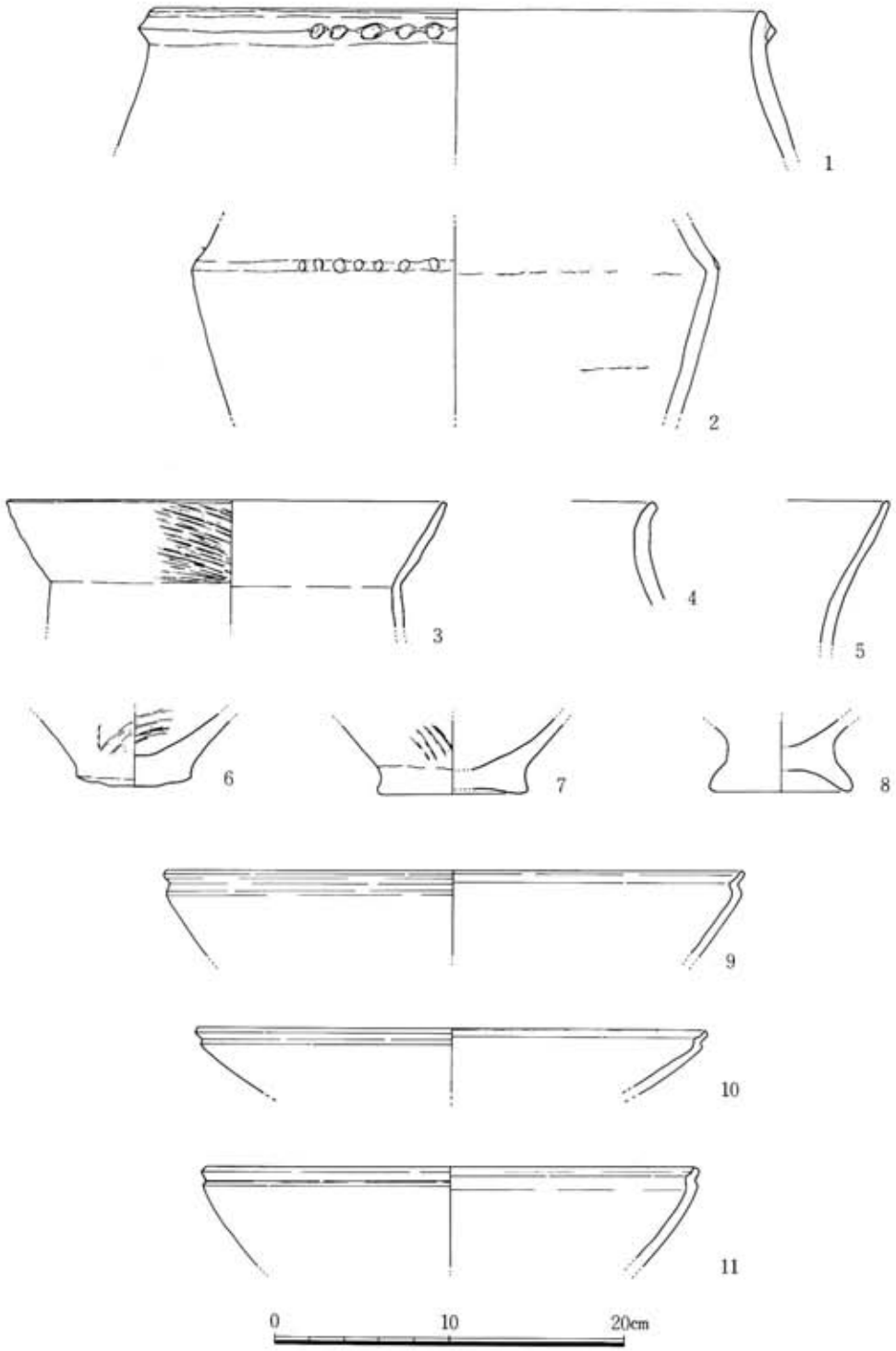


Fig. 50　獅々喰遺跡出土縄文土器実測図

やや内湾気味になる。天井部と体部の境は不明瞭で，口縁端部は丸い。天井部外面½～⅔は回転ヘラケズリ調整を行い，天井部内面を不定方向にナデた他はヨコナデ調整を施す。

蓋B（3～9）

口縁部内面にかえりをもつものである。つまみを有するものａ，持たないものｂに細分する。

蓋Ba（3・4） 口径9.1～9.3cm，器高3.1～3.4cm。小型の部類に属する。天井部は丸みがあり浅く，中央部に宝珠形のつまみを付す。口縁部は短く内湾して下がる。口縁端部は丸く内傾するかえりを付す。かえりは端部より外にでない。端部は尖る。天井部外面は回転ヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整でつまみは貼り付けのちヨコナデである。

蓋Bb（5～9） 口径11.3～14.1cm，器高1.5～2.5cm。天井部は浅く平坦で，つまみを付さない。天井部と口縁部の境でやや曲折して外下方に伸びるものと曲折しないものがある。口縁端部は丸く，内傾するかえりを付す。かえりは口縁端部より外に出ず，先は尖っている。天井部外面はヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整で，つまみは貼り付けのちヨコナデである。

杯（Fig.51－10～23，PL.95－5～9）

杯A（10～23）

立ち上がりを有するものである。法量によりⅠ・Ⅱに大別される。

杯AⅠ（10） 口径８cmの小型のものである。底部と体部の境で曲折して丸い稜をもつ。

杯AⅡ（11～18） 口径9.1～11.4cm，器高3.0～3.4cm，立ち上り高0.6～0.8cmのやや大きい部類のものである。立ち上りは高くなく，内傾する。底部は浅く丸い。底部外面を回転ヘラケズリで調整し，他はヨコナデ，ナデ調整である。

杯B（19・20）

立ち上がりも高台も有さないものである。19は底部が丸く，やや小型品なのに対し，20は底部がやや上げ底気味の平底でやや大きい部類に入るものである。底部外面は回転ヘラケズリ調整他はヨコナデ，ナデ調整である。

杯C（21～23）

高台を付すものである。法量によりⅠ・Ⅱに大別できる。

杯CⅠ（21） 器高に対して口径が非常に大きく，高台は外方に小さく屈曲する。底部外面を回転ヘラケズリ調整し，他はヨコナデ，ナデ調整である。

杯CⅡ（22・23） CⅠに比して器高が高く，底部が深いものである。口縁部は直線的で，高台は低く，屈曲することなく，断面長方形となる。調整はCⅠと同様である。

無蓋高杯（Fig.51－24～26）

すべて完形品ではないために，不明瞭な点が多い。特に脚部は残っているのが24の一部だけ

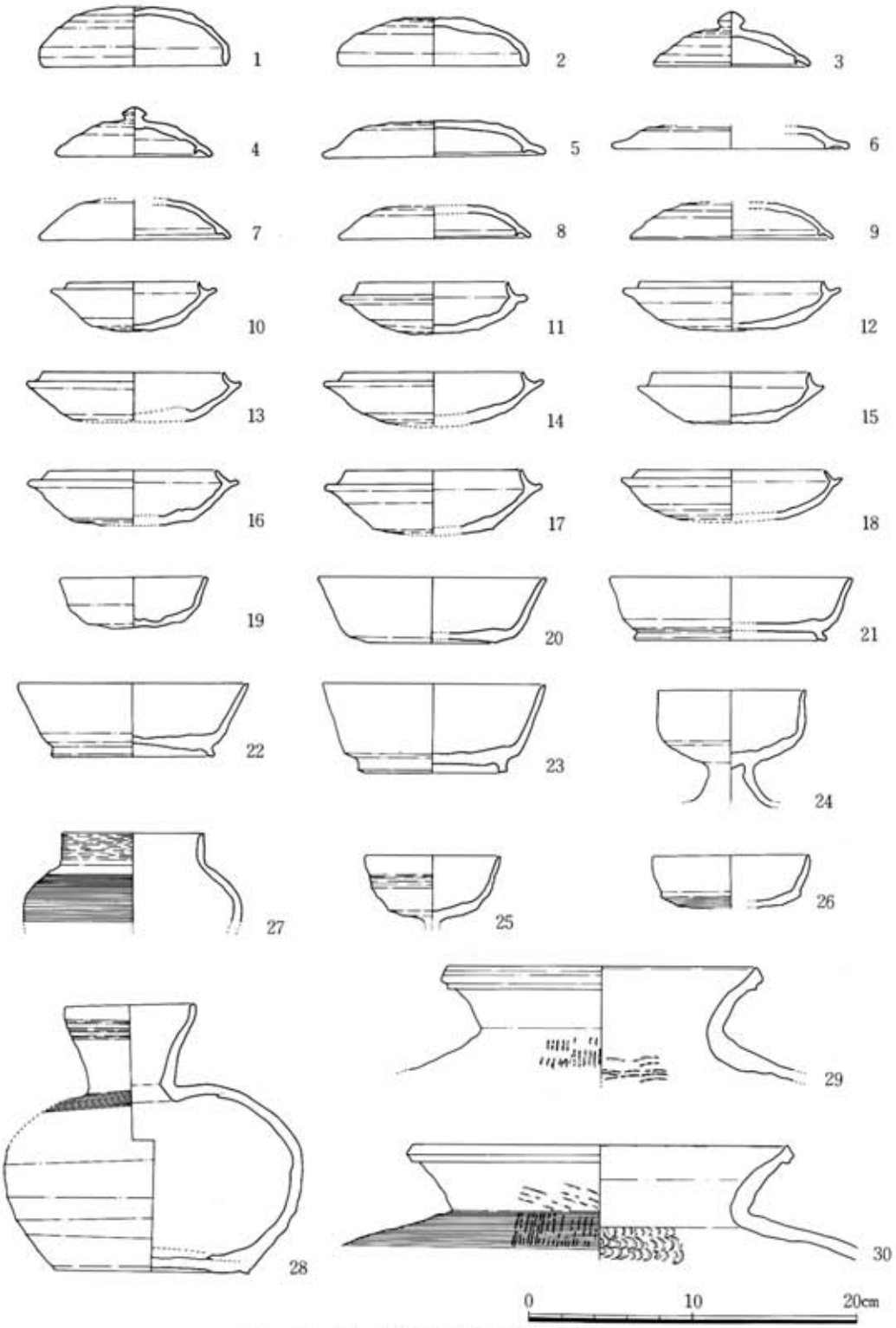


Fig. 51　獅々喰遺跡出土須恵器実測図

である。**24**は杯部が深く，体部は丸みがある。脚部は外方に大きく広がり，あまり長くないようである。**25**は体部外面に浅い沈線を２条もち，**24**より底部は浅い。**26**は底部と体部の境に段をもち，底部外面にカキ目を施す。

短頸壺（Fig.51－27）

口径8.5cmの小型品で，外面のほぼ全部にカキ目を施す。

平瓶（Fig.51－28，PL.95－11）

口頸部は体部の中心軸からあまり離れておらず，傾きもあまりない。

甕（Fig.51－29・30）

29は叩きの後，内外面ともにヨコナデしているのに対して，**30**は体部内面の同心円叩き痕をそのままに，外面の平行叩きの上にカキ目を施している。

土師器（Fig.52，PL.95）

土師器も須恵器同様に古墳とその周縁より出土したが，須恵器よりは格段に少ない。

蓋（Fig.52－31）

天井部が浅く平らで，体部との境でゆるく曲折し，下方に小さく伸びる口縁端部に至る。

杯（Fig.52－32・33，PL.95－10）

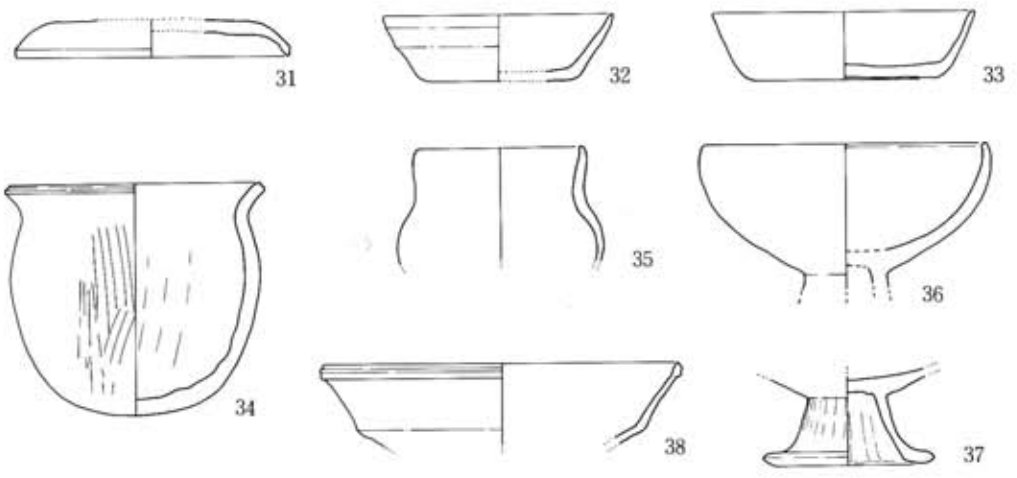


Fig.52　獅々喰遺跡出土土師器実測図

口径が器高に比して大きく，口縁部はまっすぐ伸びる。底部外面は回転ヘラケズリ，他はヨコナデ，ナデ調整である。

鉢（Fig.52－34，PL.95－12）

内面はヘラケズリでかき上げ，外面はハケ目によって整えている。

壺（Fig.52－35）

器壁を薄く丁寧に作り上げている。胎土も砂粒が細かい。

高杯（Fig.52－36～38）

36と**37**は同一個体の可能性が強い。両方とも器面に赤色顔料を塗布し，ヘラミガキを行っている。**38**も高杯であろう。

その他

玄室内より耳環，鉄鏃，刀子各1個と人骨片が出土している。

Tab. 7　獅々喰遺跡出土縄文土器一覧表

番号	器種	挿図番号	出土地点	色調
1	甕	Fig 50	表土	内面黒褐色，外面褐色
2	甕	Fig 50	ST001 石室前面褐色土	内外面褐色
3	甕	Fig 50	ST001 石室前面褐色土	内外面暗褐色
4	壺？	Fig 50	ST001 石室前面褐色土	内面暗褐色，外面褐色
5	甕	Fig 50	ST001 墳丘上	内面褐色，外面黒褐色
6	甕	Fig 50	ST001 周溝淡黄褐色土	内外面褐色
7	甕	Fig 50	ST001 周溝北側	内面暗褐色，外面褐色
8	甕？	Fig 50	ST001 石室内	内面暗褐色，外面赤褐色
9	鉢	Fig 50	ST001 東側墳丘土	内外面暗褐色
10	鉢	Fig 50	ST001 石室前面褐色土	内外面暗褐色
11	鉢	Fig 50	ST001 石室前面褐色土	内外面暗褐色

Tab. 8　獅々喰遺跡出土須恵器一覧表

法量 { ①口　径　②器　高　③かえり径 / ④つまみ径　⑤受部最大径　⑥立ちあがり高 / ⑦高 台 径　⑧脚裾部径　⑨体部最大径 }

番号	器　種	挿図・図版番号	分類	出 土 地 点	法　　量（cm）	ヘラ記号	色　　調
1	蓋	Fig 51 PL 95	A	A地区6区	①11.6 ②3.6		灰褐色
2	蓋	Fig 51	A	A地区6区	①11.6 ②3.0	有	灰褐色
3	蓋	Fig 51 PL 95	Ba	ST 001 石室前面	①9.6 ②3.4	有	灰褐色
4	蓋	Fig 51	Ba	ST 001 石室前面	①9.1 ②3.1		褐　色
5	蓋	Fig 51	Bb	ST 001 石室前面	①13.6 ②2.2	有	内面灰色，外面灰褐色
6	蓋	Fig 51	Bb	ST 001 南側周溝	①14.1		淡灰色
7	蓋	Fig 51	Bb	ST 001 羨道	①11.3		暗灰色
8	蓋	Fig 51 PL 95	Bb	ST 001 羨道	①11.5		黒灰色
9	蓋	Fig 51 PL 95	Bb	ST 001 羨道	①12.3		黒灰色
10	杯	Fig 51	AⅠ	ST 001 羨道	①8.0 ②2.9 ⑤10.2 ⑥0.4		外面淡灰色，内面黒色
11	杯	Fig 51 PL 95	AⅡ	ST 001 周溝	①9.1 ②3.2 ⑤11.5 ⑥0.8		黒灰色
12	杯	Fig 51	AⅡ	A地区6区	①11.3 ②3.0 ⑤13.3 ⑥0.4	有	内面灰色，外面灰褐色
13	杯	Fig 51	AⅡ	A地区6区	①11.0 ⑤13.1 ⑥0.6		灰褐色
14	杯	Fig 51	AⅡ	A地区2区	①10.9 ⑤13.5 ⑥0.5		灰褐色
15	杯	Fig 51	AⅡ	ST 001 石室前面	①9.6 ②3.2 ⑤11.4 ⑥0.8		灰褐色
16	杯	Fig 51	AⅡ	ST 001 西側閉塞部	①10.1 ②3.4 ⑤12.8 ⑥0.5		褐　色
17	杯	Fig 51 PL 95	AⅡ	A地区6区	①10.7 ⑤13.2 ⑥0.8		青灰色
18	杯	Fig 51	AⅡ	A地区6区	①11.4 ⑤13.5 ⑥0.5	有	紫灰色
19	杯	Fig 51	B	ST 001 羨道	①8.8 ②3.1	有	暗灰色
20	杯	Fig 51 PL 95	B	ST 001 羨道	①13.6 ②4.2		黒灰色
21	杯	Fig 51 PL 95	CⅠ	ST 001 玄室	①14.7 ②3.8 ⑦11.7		灰　色
22	杯	Fig 51	CⅡ	A地区5区	①13.8 ②4.5 ⑦9.9		内面灰褐色，外面褐色
23	杯	Fig 51 PL 95	CⅡ	ST 001 玄室	①13.5 ②5.6 ⑦9.1		内面淡灰色，外面黒灰色
24	無蓋高杯	Fig 51		ST 001 北周溝	①8.8		内面暗褐色，外面紫褐色
25	無蓋高杯	Fig 51		ST 001 石室前面	①8.1		灰褐色
26	無蓋高杯	Fig 51		ST 001 石室前面	①9.4		外面淡灰色，内面紫灰色
27	有蓋短頸壺	Fig 51		A地区6区	①8.5 ⑨13.3		灰褐色
28	平　瓶	Fig 51 PL 95		ST 001 北周溝	①7.8 ②16.4 ⑨18.3	有	灰褐色
29	甕	Fig 51		A地区6区	①18.8	有	暗灰色
30	甕	Fig 51		A地区6区	①22.8		暗灰色

Tab. 9　獅々喰遺跡出土土師器一覧表

法量 { ①口　径　③体部最大径 / ②器　高　④脚裾部径 }

番号	器　種	挿図・図版番号	出 土 地 点	法　　量（cm）	色　　調
31	蓋	Fig 52	ST 001 玄室	①14.2	赤褐色
32	杯	Fig 52	ST 001 墳丘	①12.0 ②3.5	外面暗褐色，内面褐色
33	杯	Fig 52 PL 95	ST 001 周溝	①13.7 ②3.6	褐　色
34	鉢	Fig 52 PL 95	ST 001 西側閉塞部	①13.1 ②12.3	褐　色
35	壺	Fig 52	ST 001 石室前面黒色土	①8.3 ③10.8	褐色，口縁部内面赤色顔料
36	高　杯	Fig 52	A地区6区	①14.7	褐色，内外面赤色顔料
37	高　杯	Fig 52	A地区6区	④9.0	赤褐色，内外面赤色顔料
38	高杯？	Fig 52	A地区6区	①18.6	褐　色

4．小　　結

獅々喰遺跡は河岸段丘上に位置する後期古墳を中心とする遺跡である。

縄文時代の遺構は検出されていないが，出土遺物から生活跡の遺構が存在することは確かである。出土土器は縄文時代晩期でも後半に位置づけることができるが，古い要素をもつものと新しい要素をもつものがあり，単一時期とは考えられない。

検出できた遺構としては横穴式石室を有する小円墳１基（ST011）である。古墳は大きな破壊を受け，盛土はなく石室は腰石を残すのみとなっていた。石室構造の特徴としては，小さいながら副室を持っていることと，羨道が周溝側に次第に広がる形をとることなどが上げられる。築造時期を推定できる遺物は石室前面と周溝，それに石室内より出土した須恵器がある。出土した須恵器の中でも蓋杯を分類したが，蓋Ａと杯Ａを６世紀後半に，蓋Baと杯Bを７世紀前半でも古い段階に，杯Ｃを８世紀前半に位置づけたい。これによりST001古墳の築造年代をこの中では最も古い須恵器の年代，６世紀後半と考える。須恵器の年代に幅がある以上追葬を考えねばならないが，人骨や装身具の出土が少なく検証は十分にできない。

獅々喰遺跡のST001古墳は周辺の香田遺跡ST015～019古墳や山田古墳群とともに脊振山麓に存在する後期古墳群の一大墓域の一つとして，今後考慮されなければならないだろう。

白虎谷（びゃっこだに）遺跡

遺　跡　名：白虎谷（略号ＢＫＤ）
遺跡所在地：三養基郡中原町大字原古賀字白虎谷

白 虎 谷 遺 跡

1．遺跡の概要

白虎谷遺跡は，三養基郡中原町大字原古賀字白虎谷に所在する。

脊振山地は，佐賀平野の北方に東西に長く延びた山地で，標高1,000m前後の山々を主にして形成されている。その山地の東側にある九千部山から，南西方向に派生した山の一つに鷹取山（標高403.5m）がある。

今回調査した白虎谷遺跡は，この鷹取山の南側斜面からさらに南に突き出た低い舌状台地（標高70m前後）の，先端傾斜面に位置している（PLAN. 1，PL.26・27）。

確認された遺構は，古墳1基のみであるが，周辺には他にも，古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳が数基あり，それらは一般に「白虎谷古墳群」として知られている（Fig.53）。

またその西方の台地には，一本桜古墳群が，東方には少弐山古墳群が存在しており，一帯が，後期古墳の集中している環境にあることを示している。

しかし，立地をみるに，平野部からかなり離れたところで，現在でもかなり山をわけ入っていかねばならないほどの山地部であり，後期古墳の選地を考える上で，興味ある一面をみせていよう。

またこの古墳群とは全く関係ないが，「白虎谷の井戸」といわれる戦国時代の遺構が，同じ丘陵上にある。

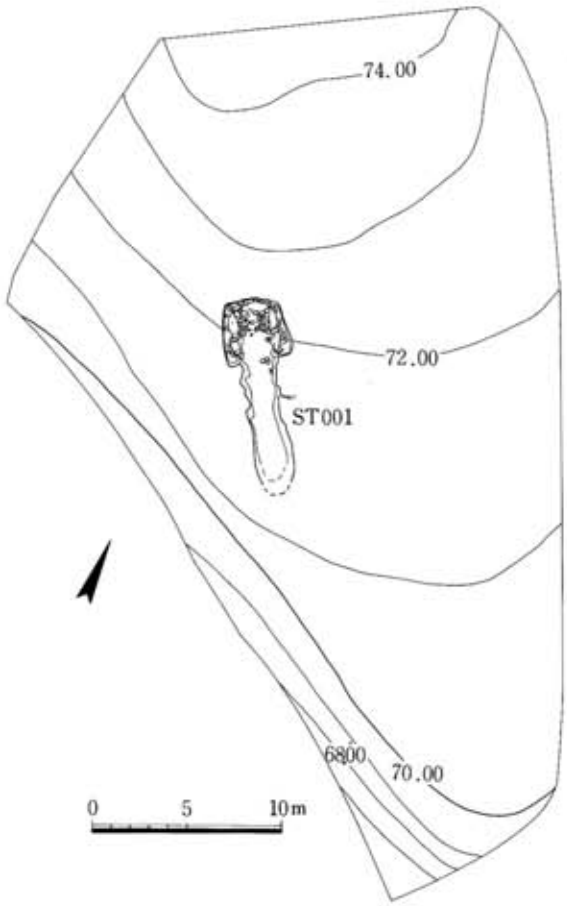


Fig.53　白虎谷遺跡遺構配置図

2．遺　　構

本遺跡では，遺構として横穴式石室を持つ古墳１基（それもほとんど破壊されている古墳）を確認しただけである。また遺物にしても須恵器（甕・蓋），瓦質土器（椀），弥生土器（甕）各１点が出土し，他に，内部主体から人骨片（大腿骨）数点を確認したにすぎない。

ST001古墳（Fig.54，PL.28）

ST001古墳は，横穴式石室を有する古墳であるが，後世の破壊がひどく，墳丘はまったく消滅している。舌状台地の先端近く，やや急な西側傾斜面に位置している。

墳丘　石室部の東側は，削平されてまったく平坦であるが，石室北側はすぐ切り立った崖面が残っており，これが築造当時は墳丘の一部を形成していたと考える。しかし，それでも墳丘の形は不明である。

羨道　内部主体部中央から，南東方向へ浅い羨道が走る。長さ約7.1m，幅2.0m，残存高0.03～0.37ｍで，南端部はほとんど消滅している。

内部主体　単室の横穴式石室で，主軸をＳ－Ｗ29°方向にとり，南東方向に開口している。長さ3.40ｍ，奥壁側の幅2.80ｍ，羨道部側の幅3.40ｍ，深さ0.40ｍの台形の掘り形に，長さ2.30ｍ，幅1.75ｍの，平面が長方形の石室を造っている。玄室の幅は，奥壁側，羨道部側とも，ほぼ同じである。各壁の腰石は，奥壁の西側１個を除いて，大きめで重量感のある石材を用いており，奥壁２，西側壁２，東側壁２個である。この上に積まれていた石は全くなくなっているが，各腰石の上端部が尖り気味であり，石室構築は容易ではなかったと考える。玄室床面には角ばった，大きめの石を敷いているが，石室南半の敷石はほとんどなくなっている。床面の高低差はほとんどない。

袖石部の構造がどうであったのか，石材がまったくないため不明であるが，ただ両側壁南側には抜き跡らしき円形のくぼみを確認している。

遺物は，玄室の埋土中から瓦質土器（椀）が，羨道から須恵器（甕）が出土した他，玄室埋土中から人骨（大腿骨）片を確認している。

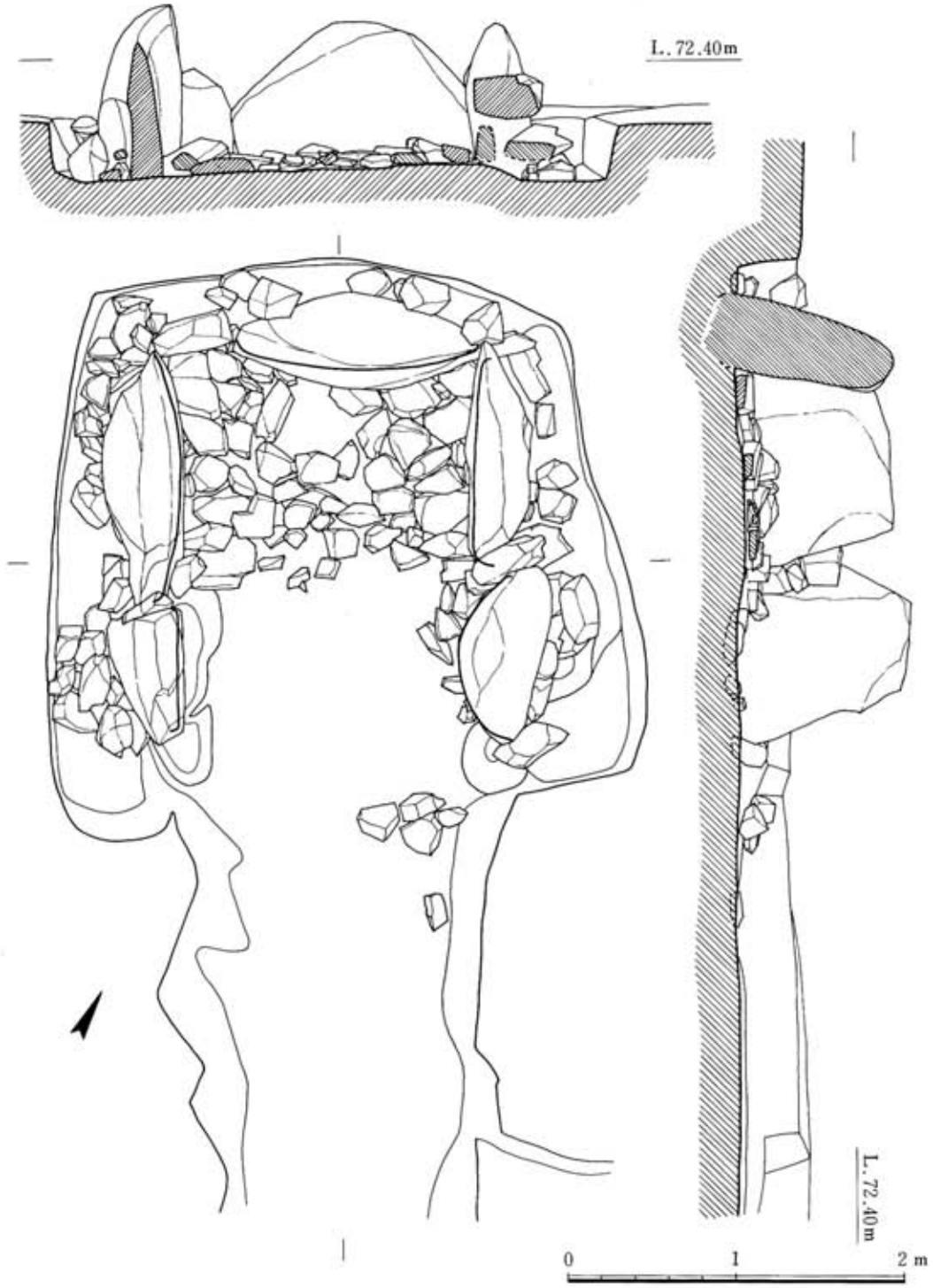


Fig.54　白虎谷遺跡ST001古墳石室実測図

3．遺　　物

出土した遺物は計4点である。それらは，ST001古墳からの遺物（須恵器）が2点，それに追葬を行った際の遺物（瓦質土器）が1点，その他（弥生土器）が1点である。

弥生土器（Fig.55-1）

表土からただ1点甕の底部片が出土しているが，遺構は本調査区では確認できていない。

甕（Fig.55－1）

平底の底部片である。径は8.6cmである。体部外面は，幅1.2cm程のハケによる調整で，体部内面はナデである。胎土に小砂粒を多く含む。

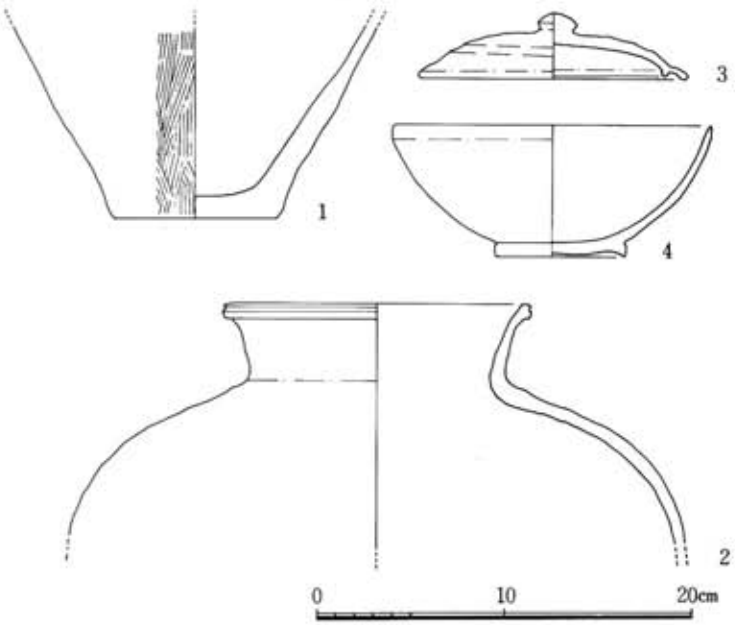


Fig.55　白虎谷遺跡出土遺物実測図

須恵器（Fig.55－2・3，PL.96－7～9）

ST001古墳羨道部から甕が，同羨道部東の攪乱土から蓋が各1点ずつ出土している。

甕（Fig.55－2，PL.96－7）

口径16.4cm，口頸高4.0cmの甕である。口頸部は薄くなりながら，ゆるやかに外反する。口縁部はやや肥厚し，段をなす。段には，一条の凹線をめぐらす。体部は上半しか残っていないが，肩部が張っている。体部外面には平行タタキ目文，内面には同心円文が残る。

蓋（Fig.55－3，PL.96－8）

口径14.3cmの蓋である。天井頂部にやや扁平な宝珠様つまみがつく。天井部は口縁部より一段高くふくらむ。口縁部内面にかえりをもつが，かえりの先端は口縁端部より上方にある。かえりは丸くおさまる。

瓦質土器（Fig.55－4，PL.96－9）

ST001古墳玄室の床面から0.2m上の，埋土中から椀が1点出土している。

椀（Fig.55－4，PL.96－9）

口径16.7cm, 器高7.0cmの椀で，底部に低い高台をもつ。体部は口径に比して深く，外上方へゆるく内湾しながらたつ。口縁端部は尖りぎみに丸くおさまる。内外面とも器面が荒れているため，調整は不明である。体部内面が黒色である。

4．小　　結

三養基郡中原町には，今回調査した白虎谷古墳群の他に山田古墳群，冠石古墳群，鳥巣古墳群，少弐山古墳群，一本桜古墳群，それに大塚古墳群等の古墳群がある。そのほとんどは，未調査で詳細は不明である。しかし，踏査で確認された事例からみると，内部主体が横穴式石室で，径が10m前後の小円墳が多い。時期的にも，一般に後期に属するものが多いと考えているが，この地域のこれらの古墳の一つの特徴は，古墳の立地が広い広がりをみせていることである。つまり，本調査例のように深い山奥の丘陵や谷間の奥にまで古墳が造られており，またそれが規模的にも同じ位であるということは，ただ選地の点からだけではなく，群の中の相互関係を考える上においても興味深い。

また本調査例にみられる古墳の再利用は，特に稀れなことではなく，過去大門西遺跡・金立開拓遺跡等でも確認されているものである。それは例えば埋葬の場として，あるいは祭祀の場として，再利用されており，古墳築造当初の葬制の概念がなくなってしまっていたにしても，やはり「古墳」は特異な場として存在していたようである。

寺ケ里（てらがり）遺跡

遺　跡　名：寺ケ里（略号ＴＧＲ）
遺跡所在地：神埼郡東脊振村大字三津

寺ケ里遺跡

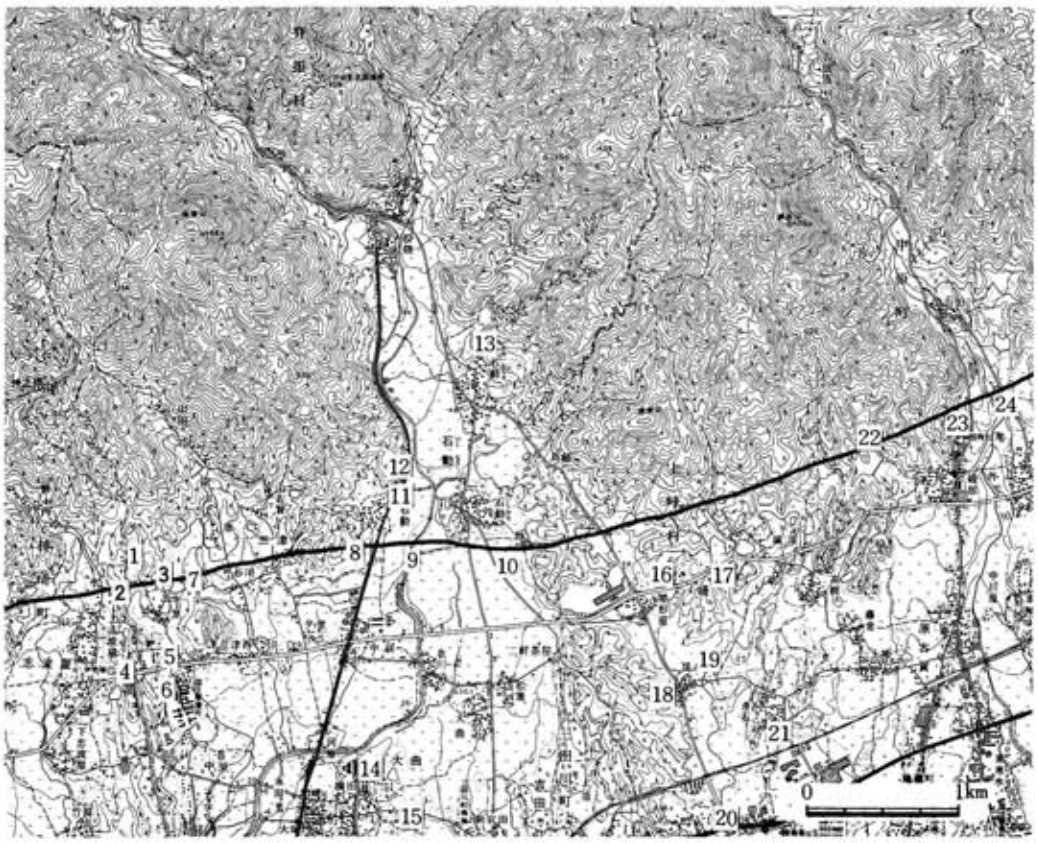
1．遺跡の概要

寺ケ里遺跡は，神埼郡東脊振村大字三津に所在している。

遺跡周辺には脊振山系南麓より佐賀平野に向かってなだらかに派生し南にのびる志波屋吉野ケ里丘陵・萩原丘陵・二塚山丘陵・横田丘陵等の多くの丘陵が存在する。この地域は県下でも特に遺跡の密なところで，丘陵上には縄文時代から弥生・古墳時代にかけての墓地群，また丘陵斜面・扇状地・平野の微高地には弥生時代から古代・中世にかけての集落跡が数多く点在する。旧石器・縄文時代の遺跡は，ナイフ形石器を出土した三田川町二塚山（東部工業団地内の旧小池周辺）・中原町姫方遺跡など数ケ所にすぎないが，縄文時代になると昭和７・８年頃発見された九州の代表的縄文遺跡として有名な戦場ケ谷縄文遺跡，その他屋形原・堤北方・切通し北方・井手口などの遺跡が点在する。弥生時代では，特にこの地域の弥生墓地は豊富な副葬品を持つことから注目されている。流雲文縁五獣鏡・素環頭太刀・内行花文明光鏡を出土した三津永田遺跡，漢式鏡４面・小型仿製鏡２面・鉄剣１・鉄矛１・鉄斧２・青銅製鋤先１・多数のガラス小玉・貝釧などの豊富な副葬品を出土した二塚山遺跡その他上志波屋石棺･吉野ケ里,1966年に鉄製素環頭太刀・鉄剣・舶載の方格規矩四神鏡を出土した横田，萩原・五本谷・切通・一本谷などの遺跡が分布している。集落遺跡としても，西石動・下石動・西前田・松ノ森・屋形原などの遺跡が存在する。また銅戈鋳型を出土した西石動，４本の中広形銅矛を単独出土した三田川町桜馬場などを含めて数多くの青銅器・鉄器・装飾品が発見されており，その豊富さと分布・在り方などは弥生時代における有力な集団がこの地域に存在していたことを物語っている。古墳時代になっても脊振南麓の地域社会の発展は継続されるようで，中原町姫方・姫方原，上峰村五本谷などでは方形周溝墓が出現する。前期古墳としては，最近調査が行われた西一本杉遺跡は，内部主体に箱式石棺･割竹形木棺の直葬を持つ４世紀代のもので県下でも貴重な遺跡である。中期になると目達原古墳群・姫方前方後円墳・米多原古墳群が形成される。後期になると，山麓部・丘陵上に群集墳が形成され，巨石墳の伊勢塚前方後円墳も築造される。歴史時代になると，吉野ケ里丘陵に辛上廃寺，二塚山段丘南端近くに塔の塚廃寺・東脊振村霊仙寺など古代から中世にかけての寺院跡が知られているが，集落跡としては，三田川町笹野・下中杖，東脊振村浦田遺跡など数カ所が知られているにすぎない。また中世山城として飯盛城跡がある（Fig.56）。

さて遺跡は，舌状丘陵基部の標高44～50ｍの所に位置する。調査は東側中央部尾根部分と西側下の平坦部に分けて実施した。

その結果，尾根部分より古墳１基，平坦部より土壙３基を検出した。調査区はミカン畑のため削平を受けていたが，古墳は比較的残りはよく旧状を留めている。石室は南に開口し天井石の一部を露出していた。周溝は大きくミカン畑で撹乱されており検出することはできなかった（PLAN. 3，Fig.57，PL.36）。



（注．太線は九州横断道路線）

Fig.56　東脊振村地区遺跡分布図

1	戦ケ谷遺跡	7	浦田遺跡	13	山田谷古墳群	19	堤土塁跡
2	**戦場遺跡**	8	西一本杉遺跡	14	松原遺跡	20	切通遺跡
3	**寺ケ里遺跡**	9	西石動遺跡	15	横田遺跡	21	舟石遺跡
4	伊勢塚	10	下石動遺跡	16	屋形原遺跡	22	白虎谷遺跡
5	三津永田遺跡	11	西石動銅戈溶範出土地	17	谷渡古墳群	23	綾部城跡
6	下三津前方後円墳	12	西石動古墳群	18	二塚山遺跡	24	綾部八本松遺跡

2．遺　　構

寺ケ里遺跡は丘陵基部の標高44～50ｍに位置し，遺構として古墳１基，土壙３基が出土した。調査は２地区に分け実施した。一つは遺跡中央の尾根上に位置するST001古墳とその周辺，他は古墳西方の一段低い平坦地である。ST001古墳の石室は床面を除き，現状を留めているが，墳丘は，一部蓋石が露出していることから，幾分削平を受けていると思われる。古墳周辺からは周溝を含めて遺構を確認することができなかった。また古墳西方の平坦地は黒色土が0.3～1.0ｍ堆積している。ここからは土壙３基が出土した。SK002土壙は調査区，南端標高45ｍの位置にあり，径2.30ｍ，深さ１ｍを測る。土壙内より縄文土器（Fig.62－６，PL.96－４）が出土した。SK003土壙とSK004土壙は調査区北端標高48ｍの位置にあり，約1.5ｍの間隔で隣接している。両土壙ともに径0.4m，深さ0.18mで，土壙内より土師器小片，炭化物，及び骨片（粉状

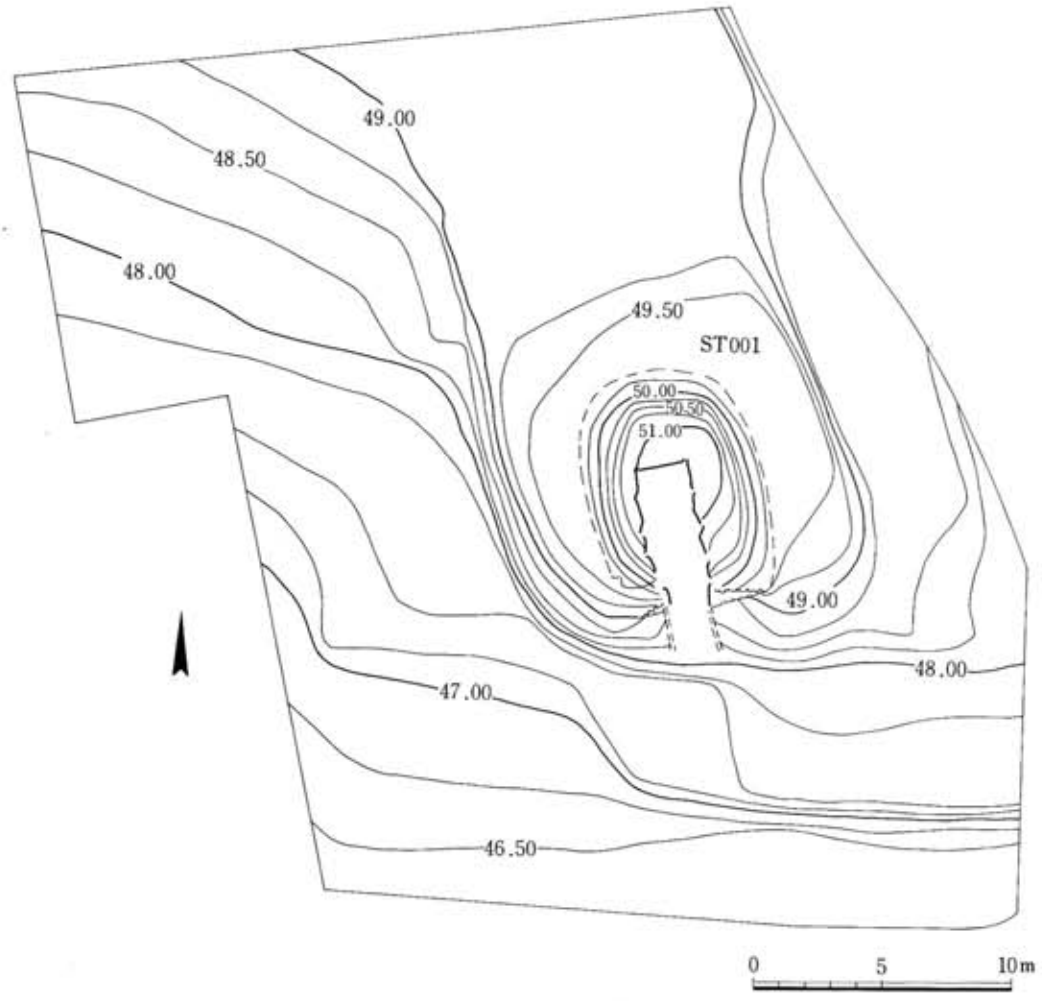


Fig.57　寺ケ里遺跡遺構配置図

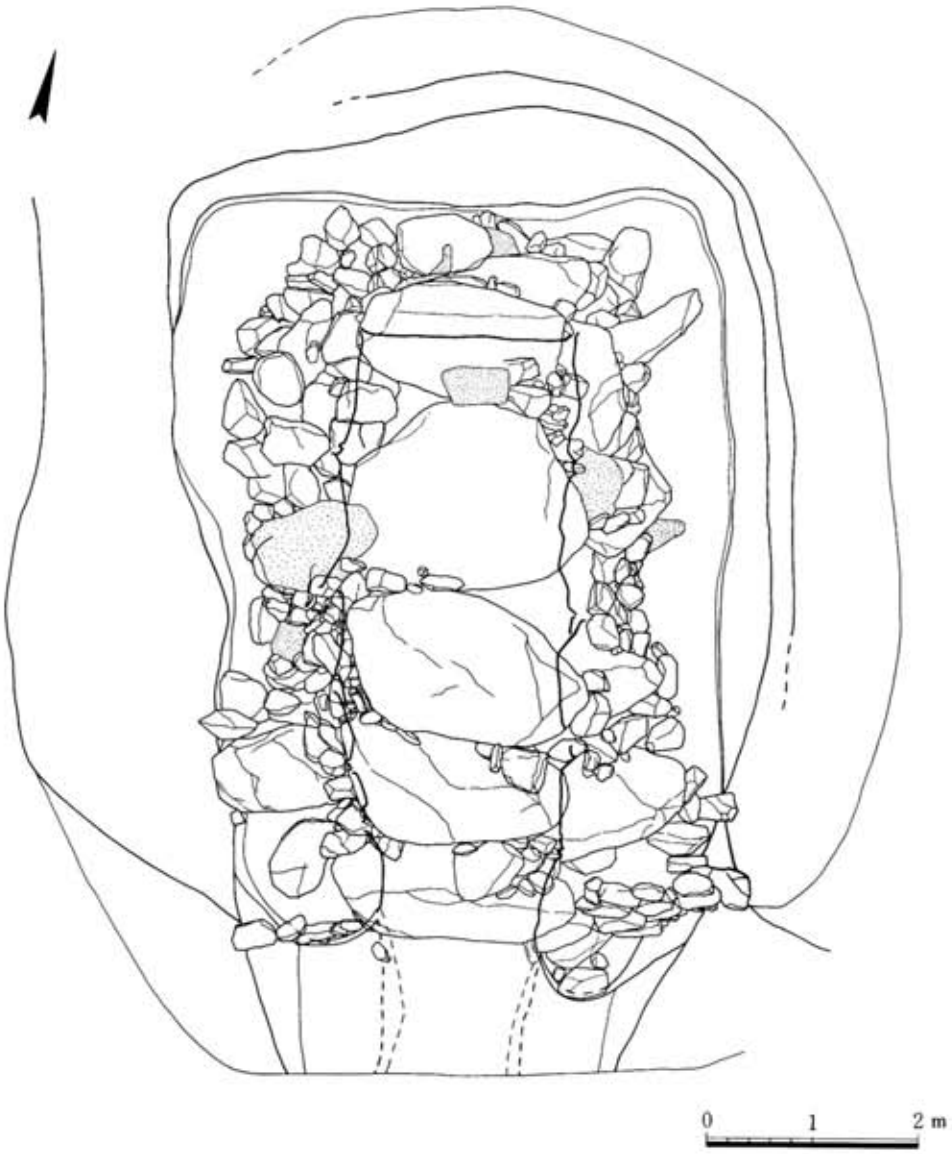


Fig.58　寺ケ里遺跡ST001古墳実測図

で人骨か動物骨か不明）を出土した。SK002土壙は性格不明である。SK003土壙，SK004土壙については，北西約5mの所に現在も地元の人が祭祀を行っている小さな自然石があり，何らかの関係も予想され，火葬墓とも考えられる。なお西方平坦地の実測図は省略した。

ST001古墳（Fig.58～61，PL.29～35）

ST001古墳は，横穴式石室を有する円墳である。丘陵の中央尾根部分に位置する。調査区はミカン畑のため削平を受けていたが，比較的遺存状態はよかった。古墳は旧状を比較的留めて

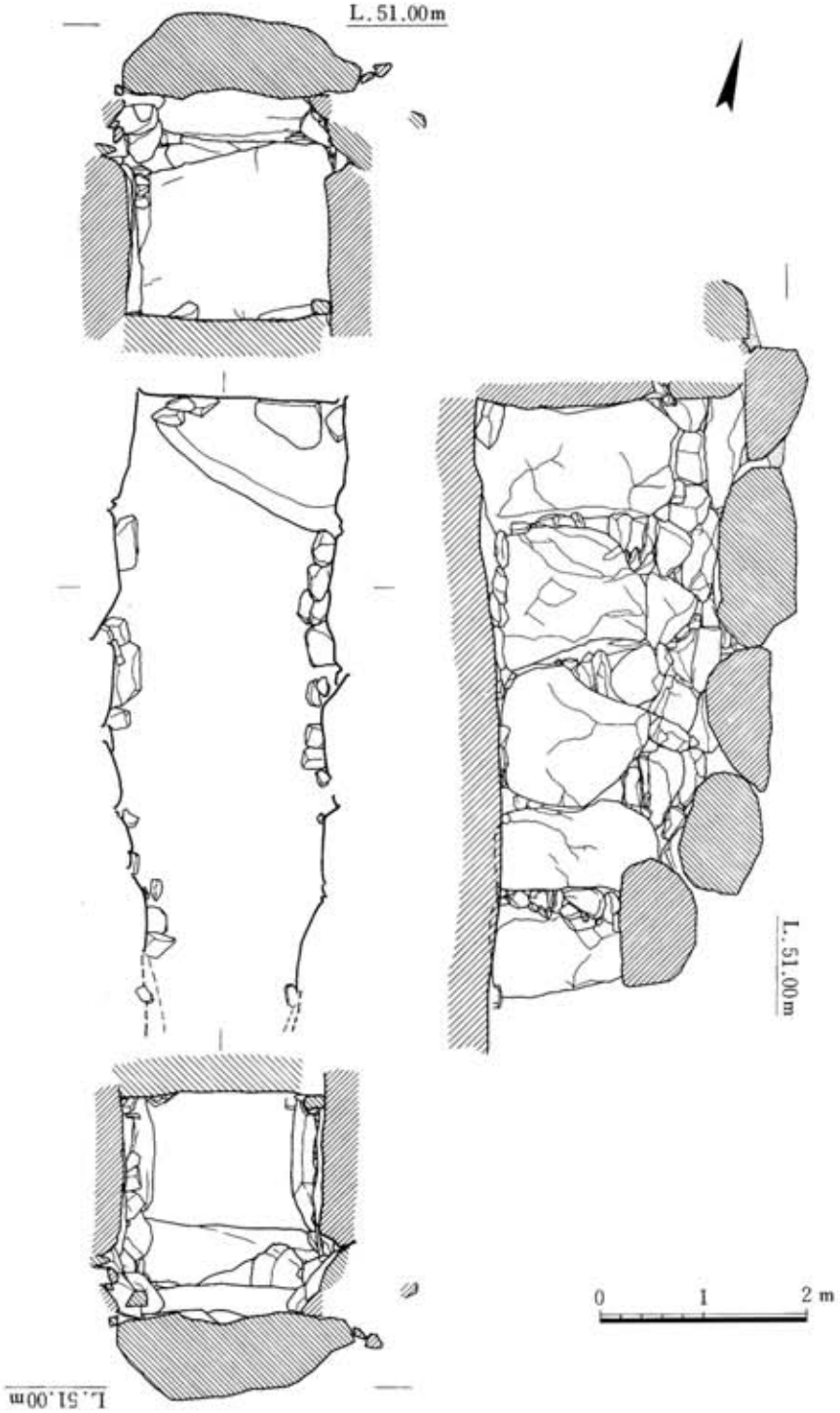


Fig.59　寺ケ里遺跡ＳＴ001古墳石室実測図

おり石室は南に開口し，削平のため天井石の一部が露出していた。周溝は大きく攪乱されており検出することはできなかった。また石室内部もかなりの攪乱を受け旧状を留めていない。遺物は墓道より須恵器杯(蓋)を出土しただけである。

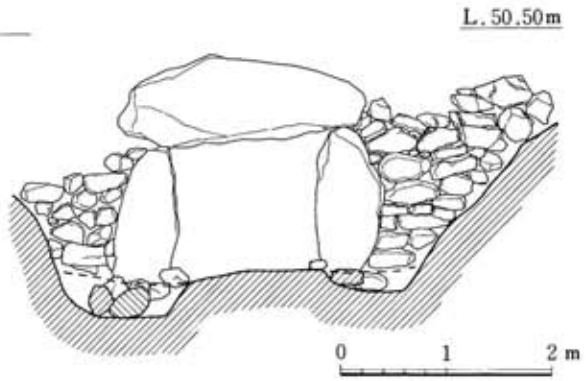


Fig.60　寺ケ里遺跡ST001古墳両袖外石積実測図

墳丘　墳丘は削平を受けているが残存墳丘から判断して円墳である。墳丘は調査後の東西径6.8m，南北径9.6m，古墳北の平坦地からの高さ1.5mである。石室は地上に掘り込みを行い，石室の掘り形内に腰石を配置したあと，石組みと平行させながら盛土を実施している。墳丘盛土は地上掘り込みの際の排土を利用しており，従って褐色土系統のものが主になっている。断面土層線はほぼ水平である。周溝については，削平も激しく確認できなかった。

内部主体　内部主体は，長さ5.6m，幅2m，高さ2mの長方形の玄室を持つ横穴式石室で主軸をS－E13°の方向にとり南に開口する。各壁の腰石には大きくて重量感のある石材を用いており，右側壁に4個，左側壁に4個，奥壁に1個を置き，やや小ぶりの石を2～3段積んでいる。天井石には，2～2.5mの大きな厚みのある石を乗せており，すき間には小さな石をつめ粘土でかためている。玄室床面は攪乱のため不明である。羨道部は幅1.5mで玄室の幅よりわずか0.5m狭くなっており羨道部と言うよりは袖石として石を配置したもので，羨道部として，また袖石としての二つの機能的役割を持つものと考えられる。袖石部分の左側は袖石の大きさに合わせ0.3m程掘り込んでおり，また右側は掘り込むと言うより一段ひくく掘り下げ袖石の前に0.4m大の石を2個おきささえている。石室入口の両袖外側面には，右側8段，左側5段の石垣状の積石を持つ。墳丘の土留め，あるいはその他の役割を持つものと考えられ，特異な構造，性格を示しているものと言えよう。墓道はミカン畑造成のため削平されており不明であるが，幅1.9m，長さ1.6mの墓道形跡を認めることができる。しかし，墓道両壁は強く固められた盛土で，墓道の存在を確信するところまでいかなかった。遺物は石室前面より須恵器蓋が1点出土しているだけである。

時期については出土遺物が極少なく重要な決め手に欠くが，古墳の形態からいって後期古墳に属するものである。後背地の山頂部に副室を持つ古墳が1基存在する。この古墳も形態からいって後期古墳に属するものであるが，ST001古墳より一段階古い時期に比定されるものである。また地元の人の話では，ミカン園造成前には，この山頂の古墳を中心にST001古墳をはじめとして，数基の古墳が存在したといわれるが，今はその形跡すら認めることができない。

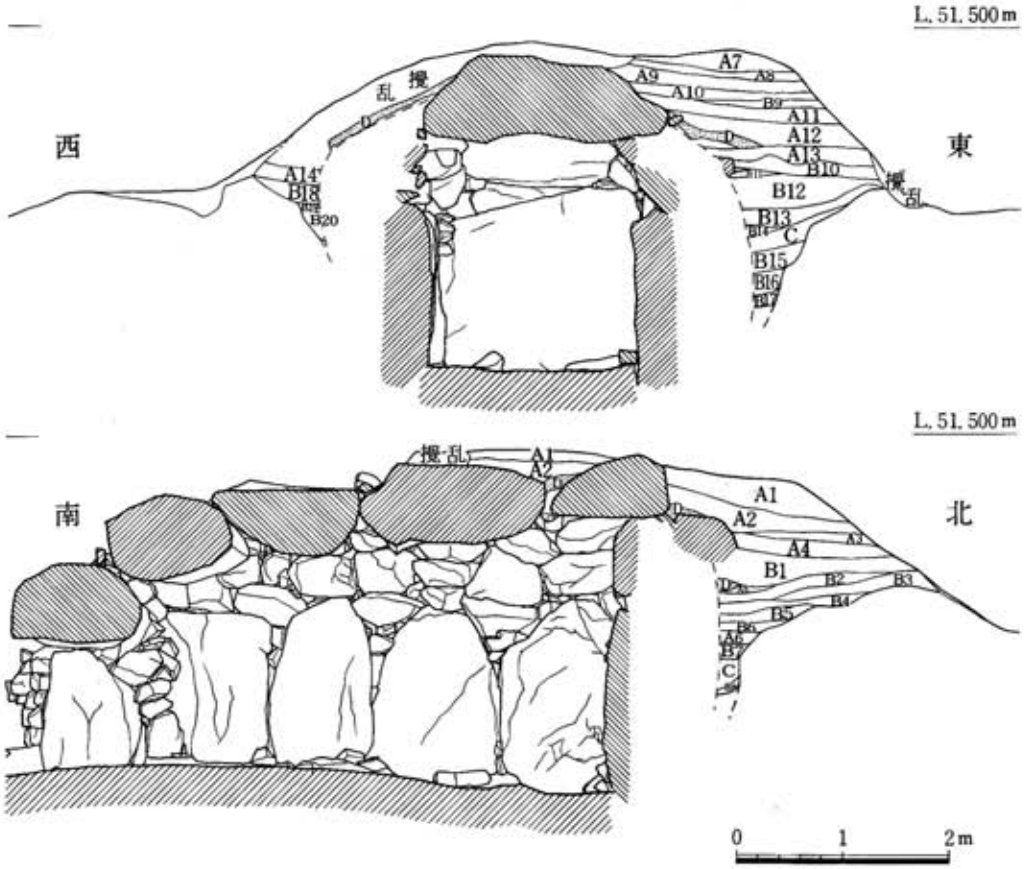


Fig.61　寺ケ里遺跡ST001古墳墳丘土層図

I　地山（灰褐色土）
A　黄褐色土
B　褐色土
C　灰褐色土
D　青色土
} 色調による分類を行い，各土層について説明する。

A1…砂粒を含む。径1cmの粘土粒混入。しまり良し。
A2…砂粒を含む。A1より粒土粒を多く混入。径2cmの乳白色粒も混入。
A3…砂粒を含む。粘土粒を多く混入。径1cmの乳白色土粒，黄色土粒混入。
A4…砂粒，粘土粒，乳白色土粒を多量に混入。
A5…砂粒を含む。粘質土でしまり良し。
A6…砂粒を多く含む。しまり良し。
A7…砂粒を含む。
A8…細砂粒を多く含む。
A9…砂粒を含む。径1cmの砂岩粒をわずかに含む。
A10…細砂粒を含み，もろい。
A11…砂粒を含む。
A12…砂粒を含む。炭化物少量混入。
A13…砂粒を多く含む。
A14…砂粒を含む。粘土質である。
B1…砂粒を含む。
B2…砂粒をわずかに含む。乳白色土粒がわずかに混入。
B3…砂粒をわずかに含む。黒褐色土のブロック混入。しまり悪し。
B4…砂粒をわずかに含む。
B5…砂粒を多量に含む。乳白色土及び灰白色土が多く混入。しまり良し。
B6…粘質性が強い。木炭混入。
B7…細砂粒をわずかに含む。粘質性が強い。
B8…砂粒を多く含む。しまり悪し。
B9…粘質土の黒色土が多く混入。
B10…砂粒を多く含む。
B11…細砂粒を多く含む。
B12…砂粒を含む。径1cmの乳白色の砂粒を含む。
B13…砂粒を含む。
B14…砂粒を含む。
B15…砂粒をわずかに含む。炭化物混入。しまり悪し。
B16…砂粒をわずかに含む。しまり悪し。
B17…しまり悪し。
B18…細砂粒を含む。粘質性が強い。
B19…砂粒をわずかに含む。粘質性が悪い。
B20…砂粒をわずかに含む。しまり悪し。
C　…砂質性に富む。しまり悪し。
D　…粘土。しまり良く堅い。

3．遺　　物

寺ケ里遺跡からは，古墳墓道攪乱層より須恵器蓋，SK002土壙より磨消し縄文土器，SK003・SK004土壙より土師器及び骨片等が出土した。他に流れ込みと思われる遺物として土師器・須恵器・石斧等を採集した。

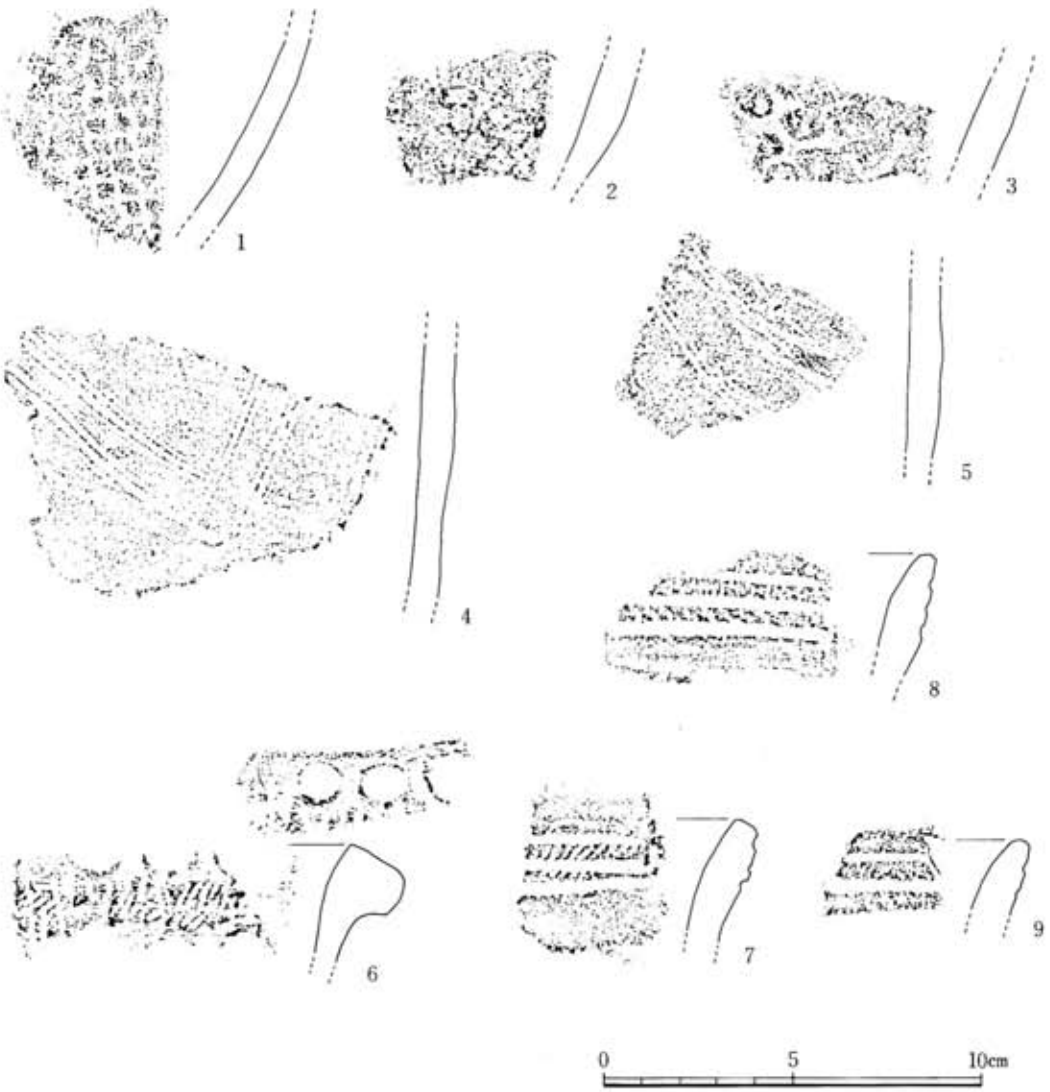


Fig.62　寺ケ里遺跡出土縄文土器実測図

(1) 縄文時代

土器（Fig.62, PL.96－4）

寺ケ里遺跡からは縄文時代早期・後期の土器を採集した。

1～5は早期の土器で，1～3は鉢形土器で外面に楕円押型を施している。1は胴部で色調は明褐色，細砂粒を含み内面をナデにより整形する。2は胴部で色調は明褐色，比較的大粒の砂粒を含む。内面はナデにより整形する。3は胴部で暗褐色，細砂粒を含み内面をナデにより整形する。4・5は鉢形土器で塞ノ神式系の土器である。4は胴部で色調淡褐色で細砂粒を含む。内外面とも条痕を施し，その後ナデにより器面を調整。5は胴部で色調外面褐色，内面淡褐色で細砂粒を含む。内外ともに条痕を施しその後ナデにより器面を調整する。6～9は後期の土器で，すべて口縁部である。6は北久根山式土器で口縁端部に斜行沈線を施す。また上下に通じる三つの穿孔を持つ。内外面共にナデにより調整，色調褐色，胎土に細砂粒を含む。7は口縁部外面に縄文を施行し，その上を3本の平行沈線が走る。内面はナデ，色調明褐色，胎土に細砂粒を含む。8・9は2・3条の平行沈線文に斜行沈線を施し，内面はナデにより調整，色調黒褐色，胎土に細砂粒を含む。

石器（Fig.63, PL.96－3）

寺ケ里遺跡からの石器は遺構に伴わず時期の詳細について不明であるが，一応縄文時代の項で述べる。

石鏃（Fig.63－1～3，PL.96－3）

石鏃は3点出土したが形態分類を行った結果2種類に大別できた。

石鏃A（1）　基部の抉りが弓なり状にわずかに入るもので，二等辺三角形を示し基部の両先端が鋭くとがる。石材はサヌカイトで長さ3cm，幅1.8cm，厚さ0.45cmを測る。

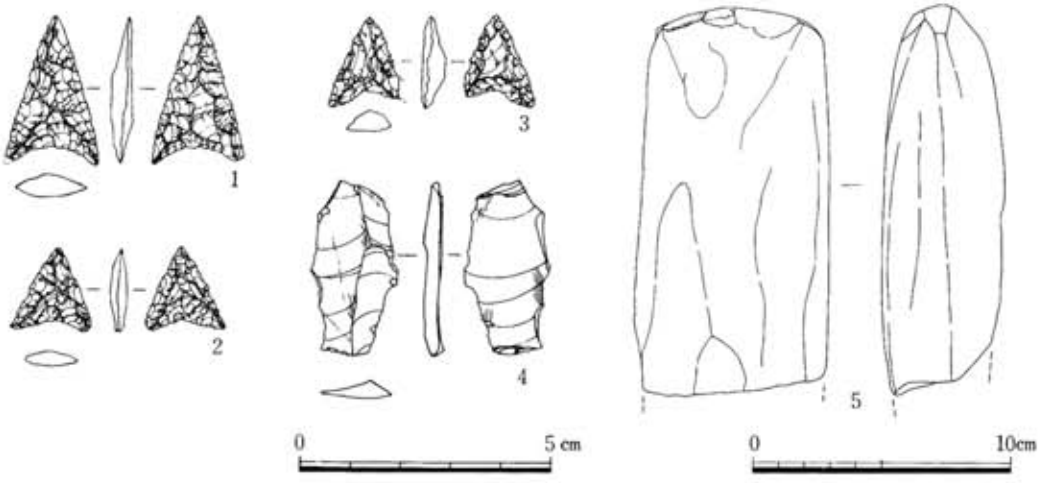


Fig.63　寺ケ里遺跡出土石器実測図

石鏃B（2・3）　基部の抉りが弓なり状にやや深く入り脚部がはっきりしてくるもので正三角形に近い形を示し，基部の両先端がやや丸くなる。2はサヌカイト製で長さ1.8cm，幅1.3cm，厚さ0.5cmを測る。3はサヌカイト製で長さ1.65cm，幅1.6cm，厚さ0.38cmを測る。

剝片（Fig.63－4，PL.96－3）

使用痕を残す黒曜石の縦剝片で交互剝離が認められる。長さ3.5cm，幅1.7cm，厚さ0.35cmである。

石斧（Fig.63－5）

磨製の石斧で平面長方形をなす。断面楕円形を呈し，残存長15cm，幅7.5cm，厚さ4.8cmを測る。石材は安山岩系である。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺物として甕形土器3点を採集した（Fig.64－10～12）。

10～12は甕形土器の口縁部である。口縁部はくの字状に外反する。10は口径26.1cm，色調褐色，胎土に細砂粒を含み，外面ナナメ方向のハケ目，内面ナデ，口縁端部ヨコナデにより調整する。11は口径30.8cm，色調褐色，胎土に1㎜大の砂粒を含む。外面タテ方向のハケ目，内面ナデ，口縁端部ヨコナデにより調整する。12は口径27.9cm，色調褐色，胎土に1㎜大の砂粒を含む。外面タテ方向のハケ目，内面指ナデ，口縁端部ヨコナデにより調整する。

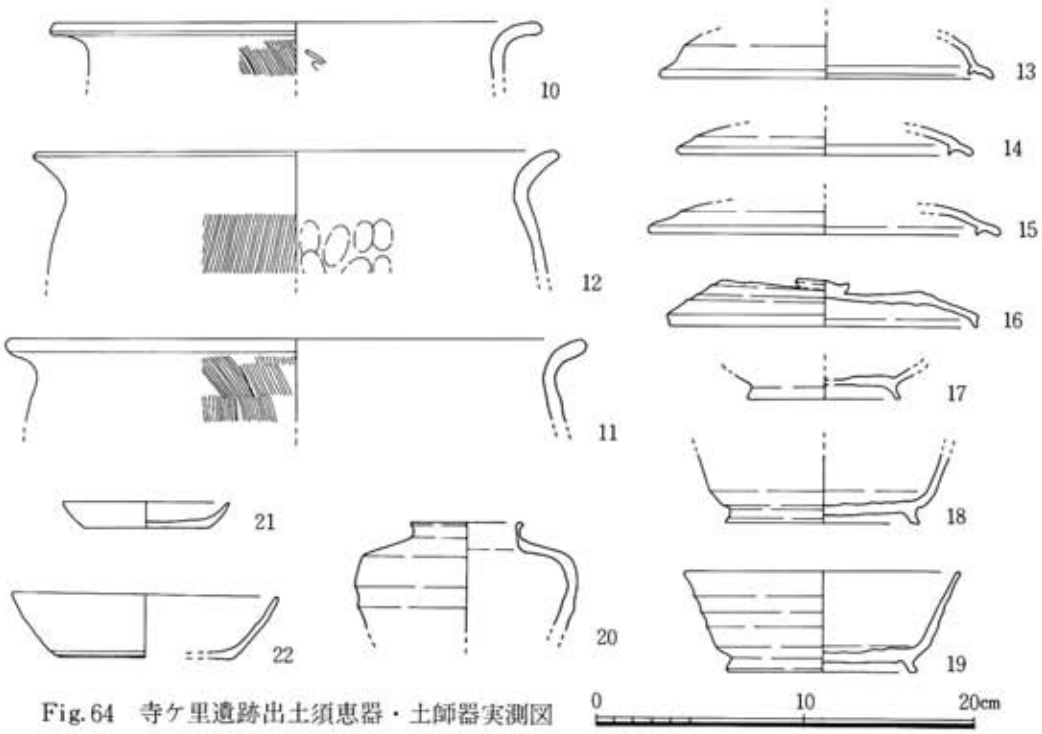


Fig.64　寺ケ里遺跡出土須恵器・土師器実測図

(3) 古墳時代

須恵器 (Fig.64－13～20, PL.96－5・6)

古墳時代の遺物として須恵器杯・蓋・壺が出土した。これらは形態・法量によっていくつかに細分できる。

蓋 (Fig.64－13～16, PL.96－5)

蓋は形態によりA・Bに大別し，Aは口縁部の形態の違いによりさらにa・bに細分する。

蓋Aa (13)　胴部に屈曲する段を持ち稜が入る。口縁部は丸く内傾するかえりをもち，かえりは小さく口縁端部より内に入る。口径17.8cm，内外面ともにヨコナデ調整を施す。

蓋Ab (14・15)　胴部より口縁部へ移る部分に段を有さず全体的に器厚がうすくなる。口縁端部は丸味を持ち内傾するかえりをもつ。**14**は口径15.8cm，内外面ともにヨコナデ調整を施す。**15**は口径18.2cm，内外面ともにヨコナデ調整を施す。

蓋B (16)　口径は大きく天井部中央に極めて扁平な宝珠様つまみを付す。天井部は上よりやや下外方に開きつつ垂直に下って端部にいたる。口縁部は丸く，かえりは有さない。口径18.0cm，器高2.5cm，外面宝珠ヨコナデ，天井部ヘラケズリ，他はヨコナデ，内面不定方向のナデ調整を施す。

杯 (Fig.64－17～19, PL.96－6)

杯は法量の違いによりⅠ・Ⅱに細分する。

杯Ⅰ (17)　底部と体部との境は丸味を持ち，底部は少し外方へ張る高台を有する。高台径7.9cm，内外面ともにナデ調整を施す。

杯Ⅱ (18・19)　底部と体部との境は丸味を持ち，体部はやや内湾してて上外方へ伸びて口縁部で更に外反する。底部は少し外方へ張る高台を持つ。**18**は高台径10.8cm，外面底部はヘラケズリ，他はヨコナデ，内面ヨコナデ調整を施す。**19**は高台径10.0cm，口径14.4cm，器高5.35cm，外面底部はヘラ切り，その他はヨコナデ，内面は不定方向のナデ調整を施す。

壺 (Fig.64－20)

短頸の壺で体部は肩がなだらかに下り，口縁部は垂直ぎみに立ち丸味をおびる。口径5.9cm，内外面ともにヨコナデで，黄色味をおびた灰色で，1～3㎜前後の砂粒をわずかに含む。

土師器 (Fig.64－21・22)

小皿 (21) 平底の底部にやや内湾しながら外反する体部で，口径8.8cm，底部径6.9cm，器高1.45cm。色調淡橙色で，1㎜前後の砂粒を含む。内外面ともにナデ調整を施す。

杯 (22)　平底の底部にやや内湾しながら外反する体部で口径14.0cm，底部径9.6cm，器高3.45cm，色調淡橙色で内外ともヨコナデ，底部にヘラ切りの跡を残す。

4．小　　結

寺ケ里遺跡のST001古墳は，石室の形状及び出土遺物より７世紀後半に比定されよう。またこの古墳の特色として石室入口両袖外側面，石垣状の積石をあげることができる。この形態の出土はこの地域において初めてであり，古墳築造の上から，今後検討の必要がある。また本古墳丘陵北方約200m程の所に副室を持った古墳があり，時期的に一段階古い形状を示しており，この丘陵における古墳の一側面がうかがわれるとともに群集墳としての性格を持つものと思われる。土壙についてはSK002は性格は不明であるが，SK003･004は骨片等の出土より判断すれば古墳時代以降の火葬墓とも考えられる。また最近寺ケ里遺跡より東方約200mのところより６世紀から10世紀頃にかけての集落跡が調査されている。また本遺跡の南々西約600mに伊勢塚前方後円墳，南約700mに下三津前方後円墳などが存在し，この地域に於ける古代社会を考える上で非常に興味深いものである。

今回の調査で表土層より縄文土器を採集した。本遺跡の西北西約200mには県内でも古くから知られた戦場ケ谷縄文遺跡が存在し，また近年の発掘調査によっても浦田・下石動などの遺跡から縄文時代早期～晩期にわたる土器が出土している。しかし遺跡の性格については不明な点が多く，今後の検討が必要になってきている。

戦場（せんば）遺跡

遺　跡　名：戦場（略号ＳＮＶ）
遺跡所在地：神埼郡東脊振村大字三津字戦場
　　神埼郡神埼町大字志波屋

戦　場　遺　跡

1．遺跡の概要

戦場遺跡は，神埼郡東脊振村大字三津字戦場に所在する。

脊振山系南麓より佐賀平野に向かってなだらかに派生し南にのびる多くの丘陵の一つ志波屋吉野ケ里丘陵の基部で，丘陵を小さく区分する谷間に位置する。標高は41～45ｍで，現状はミカン畑である。周辺には数多くの遺跡が点在しており，北東500mの所に戦場ケ谷縄文遺跡，南東約200ｍには三津永田遺跡等古くから有名な遺跡が存在する（PLAN. 3，Fig.56，PL.36）。

調査は，三津地区・志波屋地区と二つに分けて行ったが，三津地区では削平のために遺構を確認することができなかった。志波屋地区では調査の結果，土壙３，溝２条を検出した(Fig.65，PL.37)。

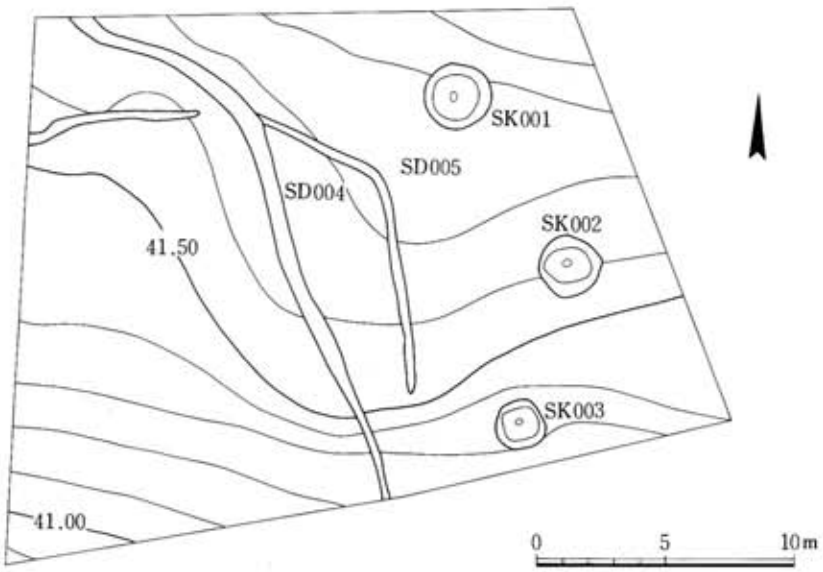


Fig.65　戦場遺跡遺構配置図

2．遺　　構

SK001土壙（Fig.65・66，PL.38－1）

調査区北東部に位置し，直径2.6m，深さ1.01ｍを測る。平面は円形をなし，埋土中より縄文時代早期の押型文土器片を出土した。

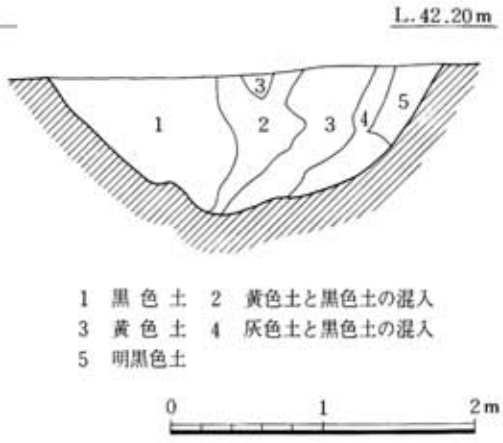


Fig.66　戦場遺跡ＳＫ001土壙土層図

SK002土壙（Fig.65）

調査区の東側に位置し，直径2.5m，深さ0.92ｍを測る。平面は円形をなしており遺物の出土はなかった。

SK003土壙（Fig.65）

調査区の南東部に位置し，直径1.9m，深さ0.95mを測る。平面は円形をなしており遺物の出土はなかった。

SD004溝（Fig.65，PL.38－2）

調査区のほぼ中央を北西から南に向かってのびる。断面Ｕ字形を示し，埋土は黒色土で南に行くにしたがい幅が狭く浅くなっていく。遺物は埋土中より土師器片，サヌカイト製の石鏃１点を出土したが，遺構との関係はない。

SD005溝（Fig.65）

調査区の北側より南にのびる溝で，断面Ｕ字形を示す。埋土は黒色土でSD004溝に切られる。遺物の出土はない。

3．遺　　物

(1) 縄文時代

遺物は，縄文時代早・中・後晩期の土器と，削器・石鏃などが出土した。

土器（Fig.67，PL.96－2）

1・**2**は早期の押型文土器である。**1**はSK001土壙，**2**は戦場ケ谷縄文遺跡表採である。**1**は鉢形土器の胴部で，外面に楕円押型文を施文し，内面ナデにより整形する。色調淡橙色，胎土に1～2㎜前後の砂粒を含む。**2**は鉢形土器の胴部で外面に楕円押型文を施文し，内面ナデにより整形する。色調褐色，胎土2㎜大の砂粒を含む。**3**は阿高系の土器の口縁部である。磨耗の為調整は不明であるが，色調灰褐色，胎土に1㎜大の砂粒を含みかなり滑石を含んでいる。**4**・**5**は後期の土器の口縁部である。ともに口縁に2条の平行沈線が走りその後ナデにより調整する。**4**は色調明褐色で胎土に細砂粒を含む。**5**は色調黒褐色で胎土に細砂粒を含む。**6**・**7**は晩期の土器の肩部と底部である。**6**は浅鉢で内外共に磨耗の為不明であるが精製土器で磨研のあとがうかがわれる。色調明褐色，胎土に細砂粒を多く含む。**7**は深鉢の底部で粗製土器

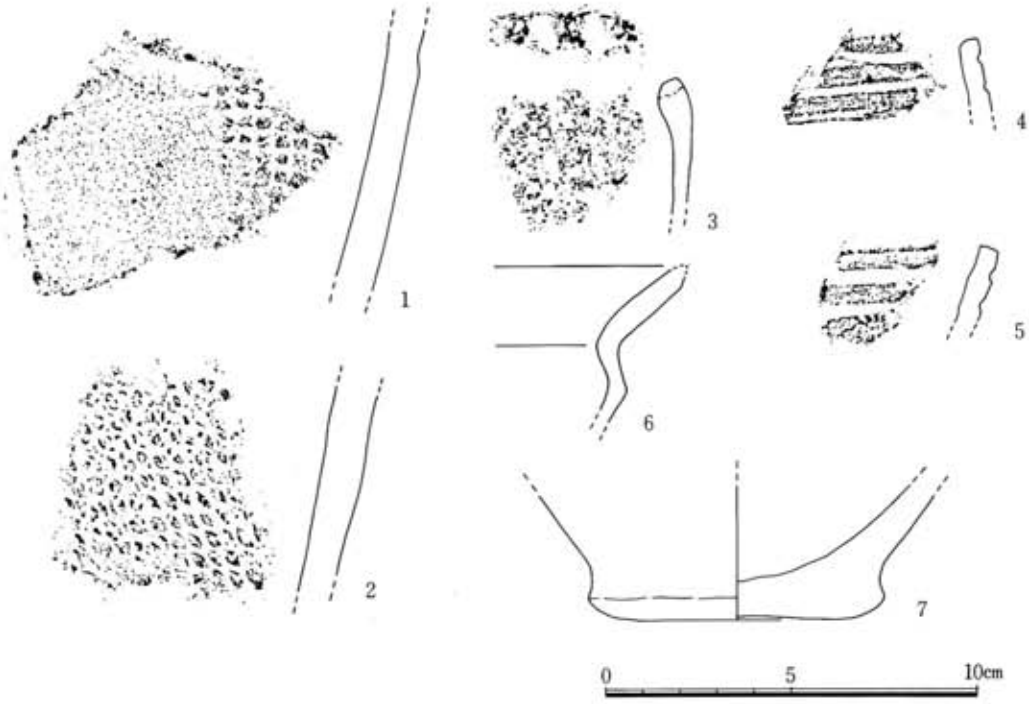


Fig.67　戦場遺跡出土縄文土器実測図

である。外面は条痕のあとナデ，指オサエ，底面，ナデ，内面はナデにより調整する。底径8.0cm，胎土に0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。

石器（Fig.68，PL.96－1）

石器は石鏃3，石斧1，剥片1が出土している。時期の詳細については不明であるが，一応縄文時代で説明する。

9は黒曜石の石鏃で二等辺三角形で側縁が丸味を帯びており基部の抉りが弓なり状に入り先端が鋭く尖る。両面とも丁寧な加工を行っており長さ3cm，幅2cmである。SD001土壙出土。

10はサヌカイトの石鏃で体部から脚部へ移るところで「く」の字に段がつき，全体として五角形を示す。残存長2.4cm，幅1.3cmで先端部を欠く。

11は黒曜石の石鏃で縦長剥片を素材としたもので先端部に加工を加え，基部に抉りを入れて形を整えたものである。長さ2.3cm，幅1.3cm。

12は使用痕が認められる黒曜石の剥片で，縦長剥片を素材とし交互剥離を行い，左右側片に使用痕を残す。長さ4.2cm，幅2.6cm。

13は安山岩製の磨製石斧である。先端部を欠き，断面楕円形を呈す。存在する長さ8.2cm，最大幅5.3cm，厚さ3.3cmを測る。

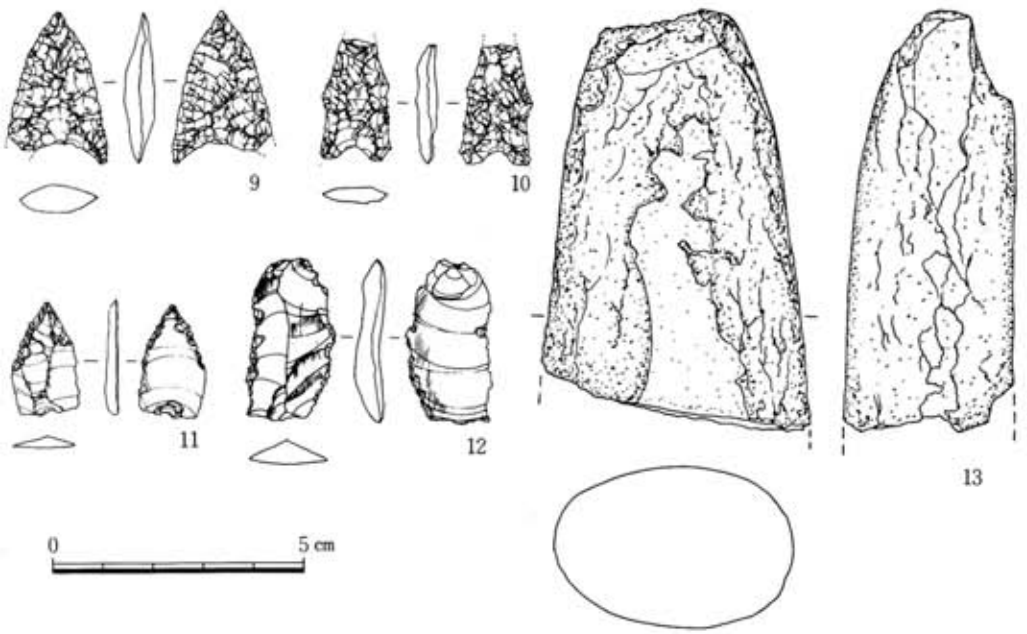


Fig.68　戦場遺跡出土石器実測図

(2) 歴史時代

歴史時代の遺物として土師器甕がSD004溝より1点出土している。

甕 (Fig.69)

「く」の字状に外反する口縁部をもち，頸部がしまった器形で，口縁端部は丸味をもつ。外面タテ方向のハケ目，内面ヨコ方向のヘラケズリ，口縁端部はヨコナデを施す。口径18.8cm，色調褐色，胎土に0.5～2mm大の砂粒を含む。

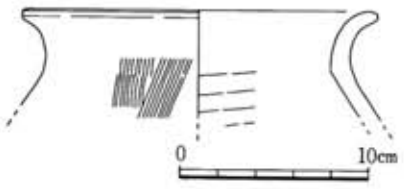


Fig.69　戦場遺跡SB004溝出土土器実測図

4．小　　結

今回の調査で，調査区域の削平が著しく，また谷間ということもあり確たる遺構を検出することができず，遺跡の全容を知ることができなかった。また遺物についても遺構に直接間連のあるものの出土はなく，表土層あるいは埋土中よりの出土で縄文土器片，石器等を採集したがこの地域ではかなりの散布がみられ，今後この付近一帯における縄文文化を考える上での参考資料として貴重な部分を示していると言える。これらのことを踏まえ，戦場遺跡の解明は今後周辺地域の発掘等によりなされるものと確信する。

藤附（とうつけ）A 遺跡

遺　跡　名：藤附A（略号ＴＴＫ・A）
遺跡所在地：佐賀市久保泉町大字川久保字藤附

藤附A遺跡

1．遺跡の概要

(1) 佐賀市北部の地理的，歴史的環境

佐賀市は佐賀平野の中心部に位置する。北は屏風を立てたような脊振山地が連なる。平野部は標高約5mの線を境に，北（北部平野）は丘陵及び微高地，南（南部平野）は平坦地を形成する。前者は原始から古代にいたる人々の生活の場として，後者は中世以後の政治・文化の中心として発展し，現在，豊富な文化遺産が残存する。

県下第1の河川で，水源を脊振山地に発する嘉瀬川は，佐賀市の東を南北に貫流して有明海に注いでいる（渓口周辺は佐賀郡大和町となる）。また脊振山地の南に連なる小山群である腰巻山（514m）や金立山（501.8m）より源を発する小河川は，北部平野の南端付近で合流して巨勢川となる。この巨勢川は南部平野のクリーク地帯を南流して，佐賀市街東方を通り有明海へと注ぎ込む。北部平野を流れる小河川に沿って，脊振山地南麓より派生した舌状の丘陵が南にのび，かつ土砂の堆積による微高地が広がる。これらの丘陵及び微高地は，各時代の遺跡が特に密集しており，北部平野全域があたかも遺跡の観を呈している。次いでこれまで明らかになっている北部平野に於ける遺跡を概観してみることにする。

佐賀市周辺における先土器時代の遺跡については明確でない。藤附E遺跡から先土器時代の所産と思われる黒曜石製の台形石器が採集されているがその性格は不明で(註⑤)，今後の調査によるところが大きい。

縄文時代の遺跡としては，脊振山地南麓及び丘陵から，多くの石器や土器が採集されている。これまで知られている遺物散布地としては金立町西隈・大門・権現原・黒土原，久保泉町川久保西原・上分・谷内がある。しかし，これまで発掘調査が実施されたのは大門遺跡のみにすぎない。この大門遺跡からは土壙が検出され，前期～晩期の土器（甕・注口土器(註⑥)など），円盤状紡錘車形土製品，石器（十字形石製品・石錘・石鏃・石匙・石斧など）が出土している。現在進行中の九州横断高速自動車建設に伴う発掘調査では，多くの縄文時代の遺構を検出している。大門西・六本黒木・金立開拓・丸山・西原(註⑥⑦⑧⑨)の各遺跡からは甕棺墓，大門西・六本黒木・金立開拓・藤附Aの各遺跡からは土壙，丸山遺跡からは支石墓及び壺棺墓が出土している。中でも注目すべきは丸山遺跡の19基からなる晩期の支石墓群であり，現在まだ未調査だがその重要性が問われている。

弥生時代の遺構としては，住居跡が確認できたものとして，金立町大門西・十本杉，久保泉町白石原の各遺跡がある。しかし本格的な発掘調査が実施されたのは大門西遺跡(註⑩)のみで，円形

(注. 太線は九州横断道路線)

Fig.70　佐賀市地区遺跡分布図

1	帯隈山神籠石	10	藤附F遺跡	19	乱闘山古墳群	28	肥前国分寺跡
2	熊本山古墳	**11**	**藤附E遺跡**	20	大門古墳群	29	築山古墳
3	神籠池窯跡	12	山王山古墳	21	六本黒木遺跡	30	肥前国分尼寺跡
4	清兵衛山古墳	13	藤附K遺跡	22	大門西遺跡	31	礫石古墳群
5	関行丸古墳	14	藤附B・C遺跡	**23**	**長尾遺跡**	32	前隈山古墳
6	花納丸古墳	**15**	**藤附A遺跡**	**24**	**三郎山遺跡**	33	河上神社
7	鈴熊遺跡	16	金立開拓遺跡	25	西隈古墳	34	惣座遺跡
8	西原遺跡	17	三本黒木窯跡	26	権現原遺跡	35	肥前国府跡
9	丸山遺跡	18	黒土原古墳群	27	銚子塚	36	高木城跡

の竪穴式住居跡の他，貯蔵穴も出土している。大型甕棺をもつものとして，久保泉町西原・帯隈山周辺・樫の木・篠木野，金立町大門・黒土原・六本黒木開拓の各遺跡がある。その中で発掘調査を実施したのは，大門・六本黒木・金立開拓の各遺跡である。大門遺跡は縄文と弥生の2時期にわたる複合遺跡であり，中期の甕棺墓16基が出土している。六本黒木遺跡は中期前半から終末期にわたる甕棺墓17基と箱式石棺墓1基が出土している。金立開拓遺跡は前期末から中期初頭にわたる甕棺墓32基・箱式石棺墓1基が出土している。支石墓の出土地としては，久保泉町徳永に1基，また大和町尼寺南小路に1基知られているが詳細は不明である。久保泉町樫の木では銅戈溶范，高木瀬町上高木では広鋒銅鉾，それに大和町尼寺の支石墓周辺より銅戈が出土している。兵庫町牟田寄には貝塚も存在する。このように数多くの弥生時代の遺跡があるが，本格的な発掘調査が実施されたのは極わずかで，今後の調査に期待される。

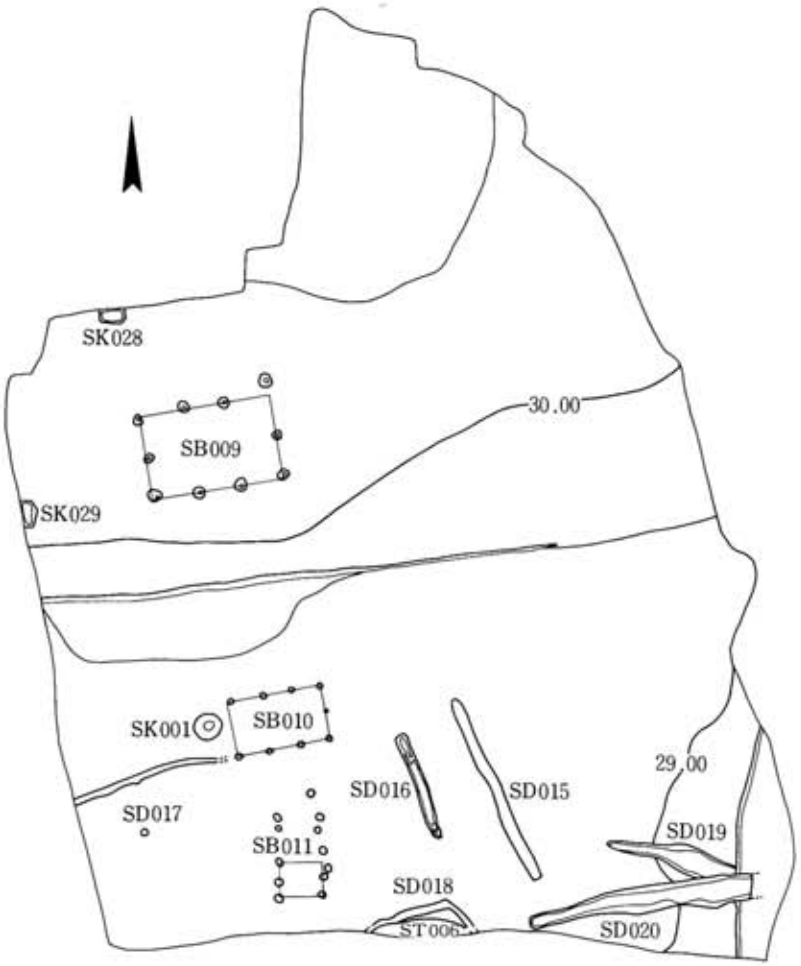


Fig.71　藤附A遺跡A地区遺構配置図

古墳時代の遺構としては，数多くの古墳とわずかな住居跡がある。まず古墳から概観してみると，５世紀前半のものとして久保泉町熊本山，金立町銚子塚がある。熊本山古墳(註⑬)は，阿蘇凝灰岩を加工した舟形石棺をもち，長さ4.3mを測る。内部は３室にわかれ，中央室に２遺体を安置している。副葬品は棺内より，鉄剣・鉄刀・鉇・短甲・鉄針・紡錘車・勾玉・管玉・小玉・銅鏡（四獣鏡）が出土している。外部施設については明らかでない。銚子塚は，主軸の長さ98mの周溝をもつ前方後円墳である。墳丘は２段築成で，前方部が低くて細い(註④)柄鏡式の形態をとる。後円部墳丘より丹塗りの底部穿孔壺形土器が出土している。内部主体は不明である。上記の２古墳はいずれも畿内的要素が強く，大和政権との関連，及び有明海沿岸の政治圏，文化圏を考える上でも重要である。

５世紀後半のものとして，久保泉町山王山古墳，大和町船塚・森の上古墳・高畠古墳・小隈古墳がある。船塚は主軸の長さ114mの周溝をもつ(註⑮)佐賀県第１の大きさをもつ前方後円墳である。(註④)墳丘は３段築成で，内部主体は盗掘で破壊を受け不明である。また周囲には７基の陪塚が残る。他の古墳はいずれも小円墳であるが，森の上古墳の琴柱形石製品・竹櫛，高畠古墳の(註④)厭手刀・銅鈴，小隈古墳の４基の箱式石棺など，副葬品及び内部主体に各々特色をもつ(註④)ものである。

６世紀前半のものとしては，久保泉町関行丸古墳・西原古墳，金立町西隈古墳・丸山古墳がある。関行丸古墳は主軸の長さ55mの前方後円墳である。銅鏡４面・金銅製半筒形装飾具・金銅製冠・三環鈴(註⑯)など多くの副葬品をもっている。西隈古墳は円墳で，玄室内に線刻文様をもつ横口式家形石棺を内蔵する。西原古墳は湮滅しているが，(註④)前方後円墳であったといわれ，線刻文様をもつ石棺の破片が(註⑰)出土している。内部主体はいずれも横穴式石室である。

６世紀後半～７世紀前半は古墳築造の全盛期で，山麓を中心に数多くの古墳が形成された。

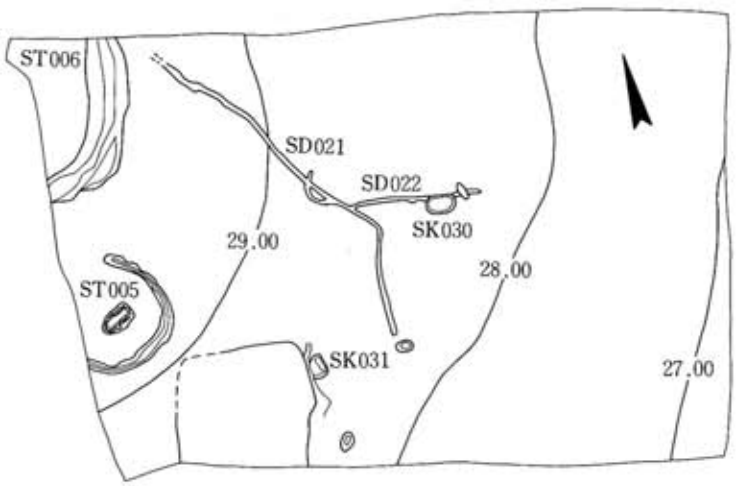


Fig.72　藤附Ａ遺跡Ｇ地区遺構配置図

金立町黒土原・乱闘山・大門，久保泉町天神山・川久保・姥所などの古墳群が存在する。これらはほとんどが横穴式石室をもつ小円墳である。湮滅して現存しないが，江戸末期に草場佩川によって記録が残された久保泉町花納丸古墳がある。その他久保泉町梅ケ谷で須恵器質の陶棺の破片が発見されている。(註②)

古墳終末期の7世紀後半～8世紀初頭に築造されたものとして，佐賀市と接する場所に天神尾古墳群（神埼町）が存在する。いずれも横穴式石室をもつが羨道が認められない小円墳である。

横断道に係わる発掘調査でも，そのほとんどに古墳を認めることができた。時期は5世紀中頃～8世紀初頭にわたるものである。

古墳時代の住居跡が存在する遺跡としては，金立町友貞遺跡があり，炉をもつ方形の竪穴式住居跡が10数基確認されている。また久保泉町西原遺跡より方形の竪穴式住居跡5基が出土している。(註⑧) 古墳時代後期の築造とされる帯隈山神籠石が久保泉町に存在する。これは帯隈山（117m）をめぐる列石群で，木柵孔・土塁・門跡等の遺構が確認されている。(註⑭)

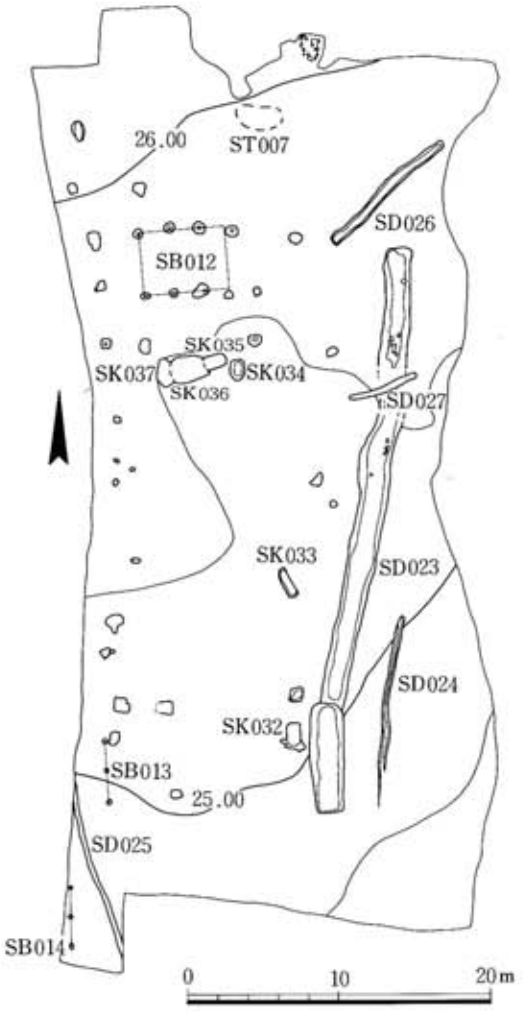


Fig. 73　藤附A遺跡D地区遺構配置図

歴史時代の遺構としては，大門西遺跡からかまどをもつ竪穴式住居跡1基が出土している。(註⑤) その他の遺跡として嘉瀬川渓口周辺（大和町）には国分寺跡・国分尼寺跡・肥前国府跡・河上神社・大願寺廃寺跡が存在し，古代における肥前国の中心を形成していた。国分寺跡は嘉瀬川東岸にあり，方2町の寺域をもち七重塔も存在したといわれるが，現在は基壇の一部と礎石を残すのみである。(註⑰) 国分寺跡の西に近接して国分尼寺跡が存在するが，今は町名にその名をとどめるのみである。(註⑱) 肥前国府跡は嘉瀬川東岸に接して位置する。現在，数回の発掘調査によって，その全貌が明らかにされようとしている。(註⑲) 河上神社は嘉瀬川西岸の渓口部にあり，肥前国一の宮として崇敬された。大願寺廃寺跡は嘉瀬川西岸の少し距離をおいた場所に存在する。その創建や廃絶の詳細な年代は不明であるが，礎石や遺瓦の様式からみて奈良時代の創建である。

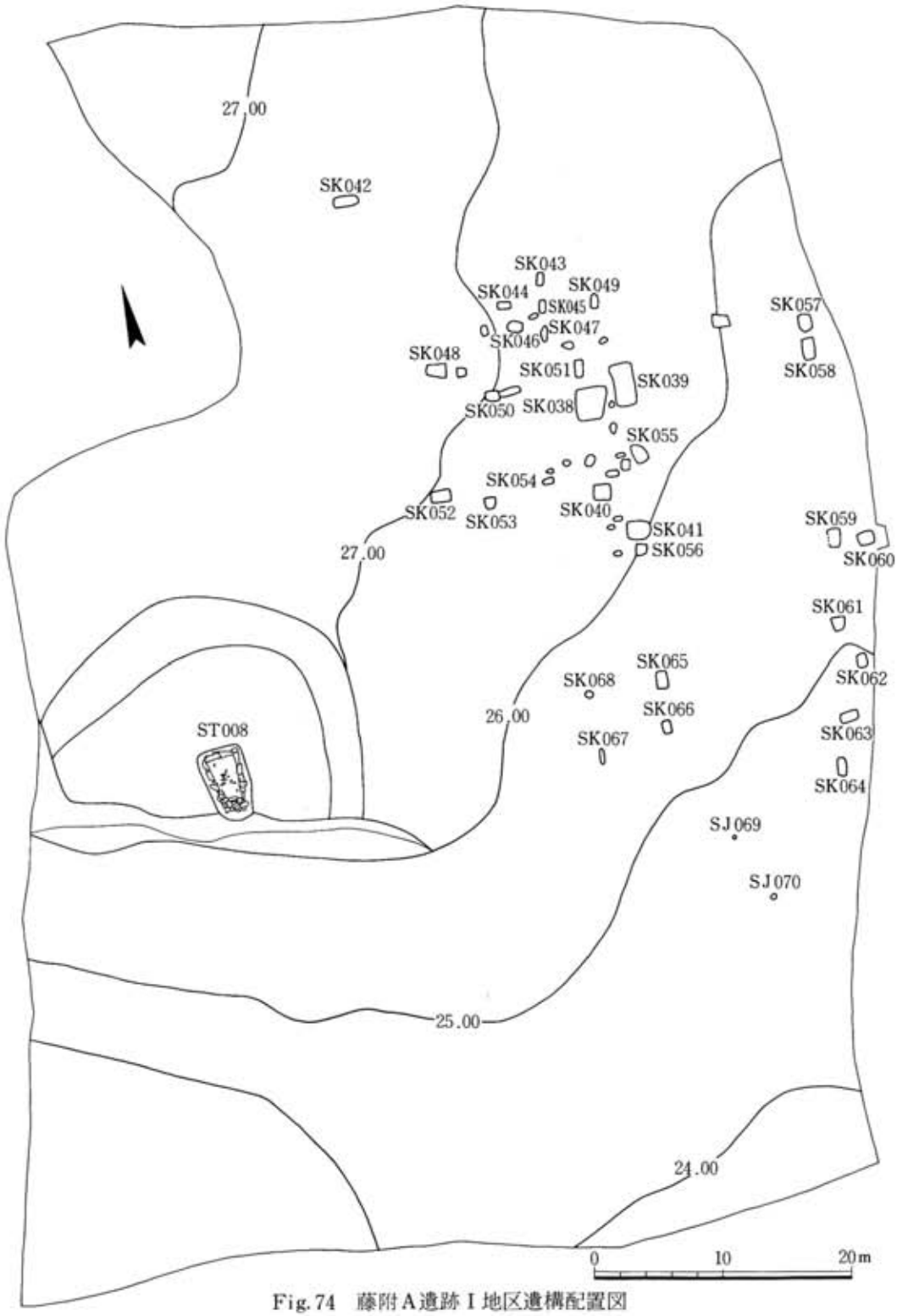


Fig. 74　藤附A遺跡Ⅰ地区遺構配置図

このように佐賀市北部山麓及びその南の丘陵，微高地には，縄文時代以降多くの遺跡が存在する。古墳時代までの遺跡が全体的に分散の傾向にあったものが，歴史時代以後，嘉瀬川流域に集中しているところからみて，その政治の中心が次第に嘉瀬川流域に移ったと考えて良いだろう（Fig. 70）。

(2) 藤附A遺跡の環境及び概要

藤附A遺跡は佐賀県佐賀市久保泉町大字川久保字藤附に所在する。遺跡は長さ約250m，幅約100mの南にのびる舌状の丘陵上に位置する。

藤附A遺跡の東及び西には九州横断高速自動車道建設に伴う発掘調査で発見された遺跡が帯状に連続する。東方には，縄文時代土壙・箱式石棺墓・石蓋土壙墓・古墳（方墳も含まれる）を出土した藤附C遺跡，古墳を出土した藤附B遺跡・藤附K遺跡・藤附E遺跡（方墳も含まれる），地下式横穴を出土した藤附F遺跡，縄文時代末～弥生時代初めにかけての甕棺墓・壺棺墓・支石墓，及び古墳などを出土した丸山遺跡，縄文時代甕棺墓，及び古墳時代住居跡・石棺墓・古墳を出土した西原遺跡，古墳・石棺墓を出土した鈴熊遺跡が存在する。西方には，調査途中であるが縄文時代甕棺墓及び土壙・古墳（前方後円墳も含まれる）などを出土した金立開拓遺跡，縄文時代土壙・弥生時代甕棺墓・石蓋土壙及び箱式石棺墓・古墳を出土した六本黒木遺跡，縄文時代甕棺墓及び土壙・弥生時代住居跡及び貯蔵穴・古墳を出土した大門西遺跡，中世の掘立柱建物跡を出土した長尾遺跡，古墳を出土した三郎山遺跡が存在する。これらの遺跡はすべて脊振山地の南に連なる小山群から派生した丘陵の基部から先端部，標高24～48mのところに位置する。発掘調査前は密柑園・宅地・水田・畑等に利用されて削平を受けていたため，その大半は湮滅に等しいものであった。

藤附A遺跡は，標高24～48mの丘陵に位置する。当遺跡は調査の関係からJ地区・H地区・A地区・G地区・D地区・I地区に分けて調査を実施した（PLAN. 3・4，PL. 39）。

当遺跡では縄文時代から歴史時代の遺構を確認できた。縄文時代のものとしては，A地区に土壙1基が出土した。古墳時代のものとしては，J・H・G・D・I地区に合計7基の古墳が存在するが，いずれも削平を受け破壊が大きい。内部主体は横穴式石室3基と箱式石棺1基で，残り3基の古墳については不明である。歴史時代のものとしては，中世（室町時代）の掘立柱建物跡6棟・土壙41基・溝13条と，近世（江戸時代）の甕棺墓2基が出土している。掘立柱建物跡はA地区3棟・D地区3棟が存在し，主軸はほぼ南北か東西にとる。土壙は，31基がI地区より出土し，他はA地区・G地区・D地区に存在する。土壙平面は長方形で大型，正方形，不整方形，長方形，円形，不整形のものがある。溝はA地区6条・G地区2条・D地区5条が出土している。土壙及び溝ともに性格不明である。近世の甕棺墓はI地区の最南端に近接して

存在するが，上部が大きく削平を受け，底部を残すのみである（Fig. 71～76·78, PL. 40～42）

遺物は各遺構及び表土からの出土である。縄文時代の遺物としては，土壙からのもので後期の浅鉢と甕がある。その他表土から早期の鉢，後期から晩期にかけての鉢・椀・浅鉢・甕の細片が採集された。また中期以後の所産と思われる石鏃・スクレイパー・磨石なども出土している。弥生時代のものとして甕・壺などの細片があるが，これらはいずれも表土からの出土である。古墳時代のものとしては，古墳及び表土からで須恵器・土師器・鉄器・装身具がある。時期は須恵器などの形態からみて6世紀後半から7世紀後半である。歴史時代のものとしては，土壙・溝・掘立柱建物跡や表土から杯・鉢・擂鉢・土鍋・羽釜・壺などが出土しており，時期は室町時代である。

（註）

(1) 「佐賀県史」上巻　佐賀県　1957
(2) 「佐賀市史」第一巻　佐賀市　1977
(3) 「佐賀県の遺跡」　1964
(4) 松尾禎作「佐賀県考古大観」祐徳博物館　1957
(5) 「大門西遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　佐賀県文化財発掘調査報告書第51集　佐賀県教育委員会　1980
(6) 「大門遺跡」佐賀市教育委員会　1973
(7) 「九州横断自動車道関係文化財発掘調査概報1」佐賀県教育委員会　1979
(8) 「九州横断自動車道関係文化財発掘調査概報2」佐賀県教育委員会　1980
(9) 「丸山遺跡」発掘調査概報　佐賀県教育委員会　1979
(10) 松尾禎作「附近より石鏃を出土せる金立村堅穴遺跡」『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第6揖　佐賀県教育委員会　1938
(11) 「金立開拓遺跡」佐賀市教育委員会　1974
(12) 松尾禎作「高木瀬村上高木の銅鉾出土地について」『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5集　佐賀県教育委員会　1936
(13) 松尾禎作「春日村尼寺のクリス型銅剣出土地について」『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5集　佐賀県教育委員会　1936
(14) 「帯隈山神籠石とその周辺」佐賀県文化財調査報告書第16集　佐賀県教育委員会　1967
(15) 「山王山古墳」佐賀大学考古学研究会　1968
(16) 「関行丸古墳」佐賀県文化財調査報告書第7集　佐賀県教育委員会　1958
(17) 松尾禎作「埴輪円筒を繞らせる西原古墳」『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第5集　佐賀県教育委員会　1936
(18) 松尾禎作「肥前国分寺及び尼寺」『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第6集　1938
(19) 「肥前国府Ⅰ」佐賀県文化財調査報告書第39集　佐賀県教育委員会　1978

2．遺　　構

(1) 縄文時代

藤附A遺跡からは，A地区より土壙1基を検出した。遺物は土壙より後期の浅鉢と甕，その他後世の遺構及び表土から早期～晩期にかけての鉢・浅鉢・甕・石器が出土している。

SK001土壙（Fig.75，PL.43）

SK001土壙は平面楕円形の土壙である。A地区中央西寄りに位置する。土壙は上端径2.0～1.8m，深さ0.3mを測り，断面はレンズ状となる。埋土は砂質土で，土壙中央部が黒褐色，縁辺及び底部に行くに従い黄褐色を帯びる。遺物は5～20cmの礫とともに縄文時代後期の浅鉢と甕(Fig.96，PL.97－3・4）が出土している。

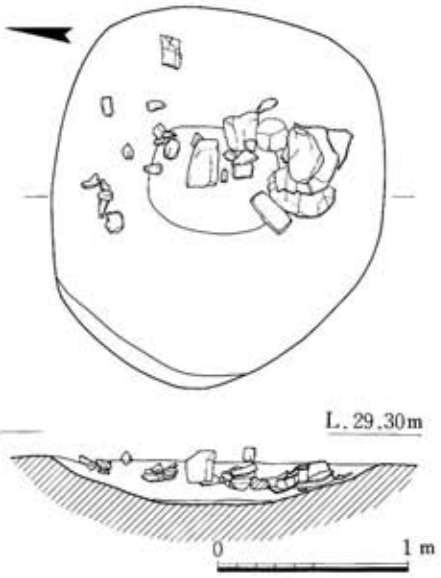


Fig.75　藤附A遺跡SK001土壙実測図

(2) 古墳時代

藤附A遺跡からは，J地区1基，H地区2基，G地区2基，D地区1基，I地区1基の合計7基の古墳を確認することができた。古墳は標高26～38mに位置する。調査前は密柑園や住宅地に利用されていたため，大きく破壊を受けたものが多かった。内部主体，周溝ともに確認できたのは2基（ST005・ST008）のみで，他は遺物とわずかな痕跡を残す古墳3基（ST003・ST004・ST007），周溝しか確認できない古墳1基（ST006），周溝の存在も不明で石室の側壁及び奥壁がすべて抜き去られた古墳1基（ST002）で湮滅に等しいものであった。

遺物は古墳により種類及び量に差があった。須恵器や土師器についてはST007古墳が群を抜いて豊富で，次いでST002古墳が多かった。ST003古墳，ST004古墳，ST005古墳，ST008古墳にいたっては1ないし2点を数えるのみであった。鉄器はST008古墳，装身具（耳環）はST002古墳及びST008古墳から出土した。ST006古墳からの遺物出土は皆無である。

ST002古墳（Fig.77，PL.44－2）

ST002古墳は，横穴式石室をもつ古墳である。削平が激しく内部主体のみ残存する。J地区

の中央やや東寄り，丘陵基部から山地に移った南西斜面の標高38mのところに位置する。南約48mのH地区にST003古墳が存在する。また北約25mの調査区外に袖石状のものが露出しており，古墳が予想される。遺物は玄室より，土師器・須恵器・耳環が出土している。

墳丘　墳丘の形態は削平を受け不明である。また周溝の存在も確認することができなかった。

内部主体　内部主体は単室の横穴式石室で，主軸をS－W4°方向にとり，ほぼ南に開口する。現存長5.9m，幅4.4m，深さ0.5mの隅丸長方形の掘り形に，長さ3.8m，幅1.8mの平面長方

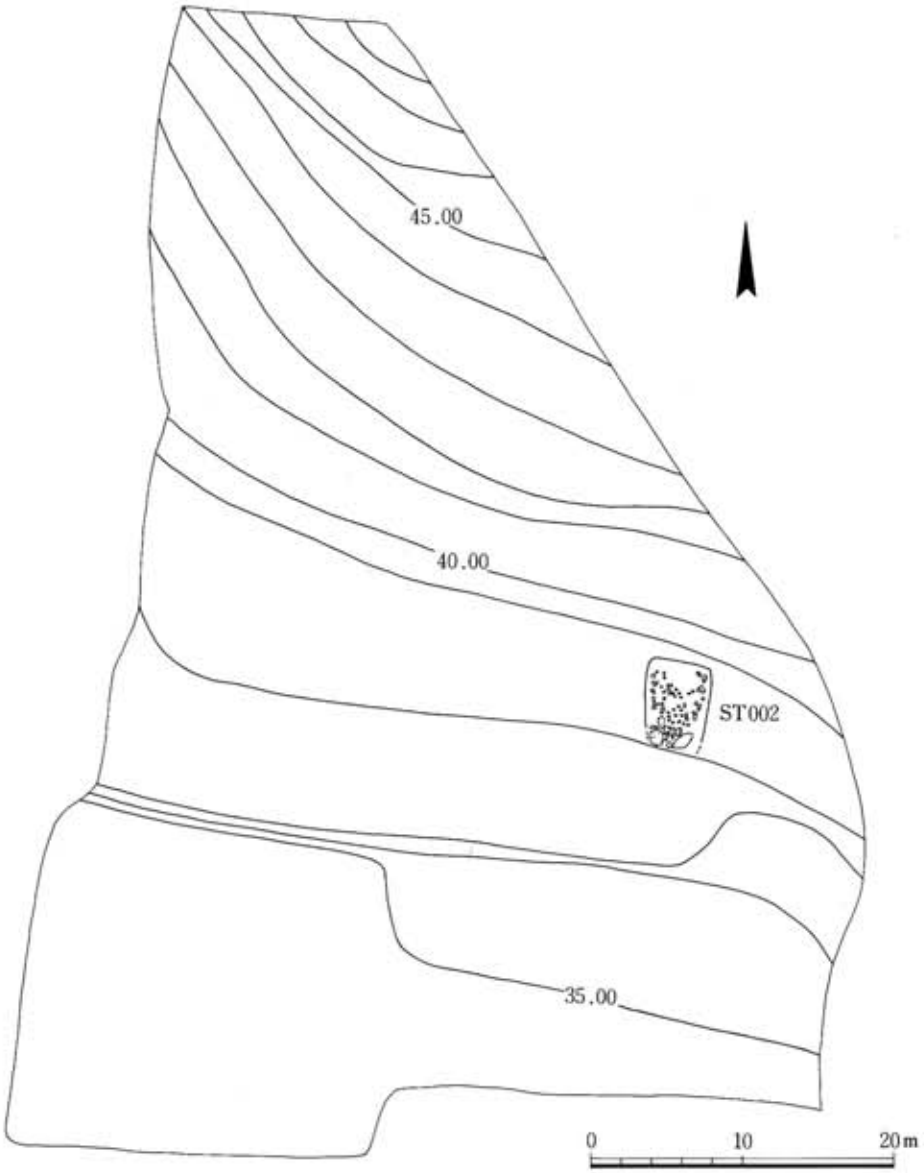


Fig.76　藤附A遺跡J地区遺構配置図

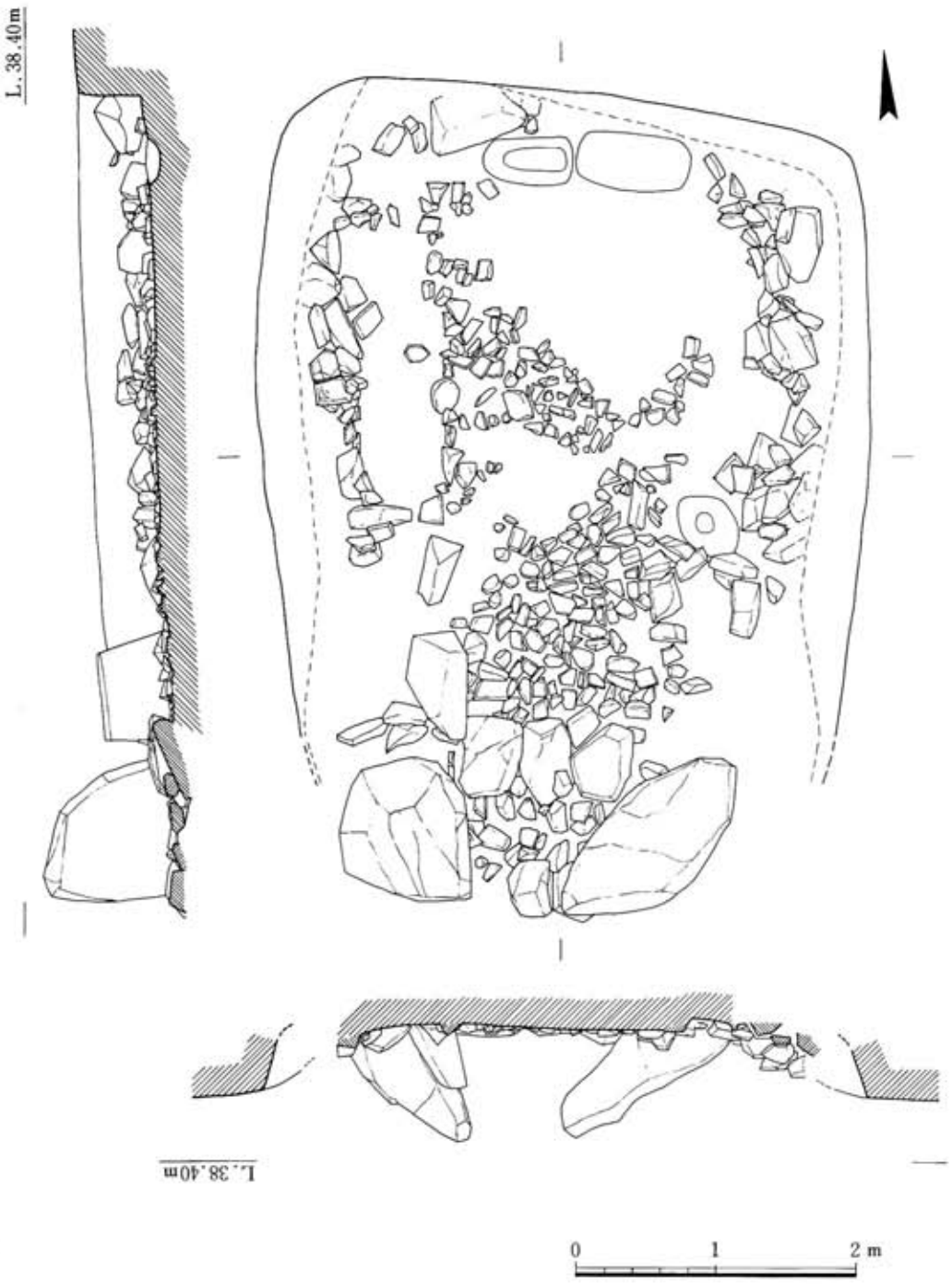


Fig. 77　藤附A遺跡ST002古墳石室実測図

形の玄室をつくる。西側壁及び奥壁の腰石はすべて取り去られ，わずかに抜き跡を認めるのみである。玄室の床面約２分の１に敷石が残る。羨道は現存長0.8mを残し，南が大きく削平を受け消滅している。また羨道の両側壁に各１個の重量感ある袖石が残る。しかし東側壁の石材は不安定で，幾分移動している可能性もある。玄室と羨道との境に敷石よりやや大き目の石で仕切りをつくる。羨道底にも敷石が認められる。遺物は，玄室より須恵器の蓋・杯・高杯，土師器の皿，及び耳環が出土している。

ST003古墳（Fig. 78）

ST003古墳は削平により湮滅をきたした古墳で，墳丘及び内部主体の形態は不明である。遺物とわずかに残る内部主体の痕跡で，古墳と判断できる。本古墳は丘陵基部のゆるやかな傾斜面標高約32mのH地区に位置する。北約48mにJ地区のST002古墳，南東約33mにH地区のST004古墳，同じく南東約68mにG地区のST006古墳が存在する。遺物は，須恵器の杯・甑が出土している。

ST004古墳（Fig. 78）

ST004古墳はST003古墳と同じく，墳丘及び内部主体も不明で，わずかな遺物と内部主体の痕跡から古墳と確認できるものである。本古墳はH地区の南西端でゆるやかな傾斜面の標高約30mのところに位置する。北西約33mにH地区のST003古墳，南東約33mにG地区のST006古墳，また南東約15mにA地区の縄文時代の遺構であるSK001土壙が存在する。遺物は，須恵器の杯・甑，土師器の高杯など数点を出土している。

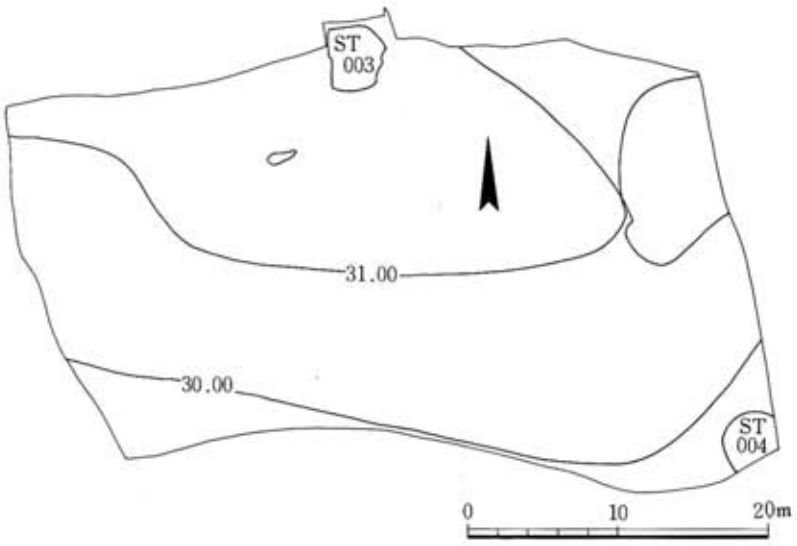


Fig. 78　藤附A遺跡H地区遺構配置図

ST005古墳（Fig. 79・80, PL. 45・46）

ST005古墳は箱式石棺を有する円墳である。本古墳は丘陵中央部のゆるやかな傾斜面標高約29mのG地区西端に位置する。すぐ北約4.5mの近接地にST006古墳，また西方約10～20mのところに中世のSD021溝，SD022溝，SK030土壙，SK031土壙が存在する。本古墳の墳丘は削平を受け盛土はなく，蓋石も取り去られていた。また浅い周溝がめぐるが，約2分の1は消滅している。遺物は棺内埋土より須恵器が出土している。

墳丘　周溝は幅0.5～0.9m，深さ0.4～0.5mで断面浅いU字形である。東側が深く，西側に行くに従い漸次浅くなりついに消滅する。溝外壁の傾斜は内壁の傾斜よりも大きい。埋土は砂質土で，溝中央が黒色，側壁及び底部に行くに従い暗黄褐色を帯びる。

墳丘は直径6.4mで，墳丘のほぼ中心に箱式石棺をもつ。盛土は全く見られない。

内部主体　内部主体は箱式石棺で，墳丘のほぼ中心に長軸をN－E64°方向にとって造られている。墓壙は，浅い墓壙をまず掘り，続いて棺の部分だけを深く掘り下げるという2段掘りを施している。墓壙平面は東辺が隅丸長方形，西辺が楕円形で長さ2.37m，幅1.3m，深さ0.35～0.43mを測る。棺長1.54m，棺幅中央0.6m，東小口0.52m，西小口0.46mを測り，中央が膨らみ，西がやや狭まる長方形である。棺は南側壁に3枚，北側壁に2枚，東西両小口に1枚ずつの板石を小溝を掘って立て腰石としている。板石の厚さは，小口0.15m，側壁0.07mほどのものである。両側壁は内側，両小口は東側にわずかに傾く。南側壁の小型板石の裏には大型の板石を添えて側壁を補強している。また裏込めに大小の石を利用している。蓋石は全く見られない。石材は，側壁及び小口がすべて花崗岩，裏込めが緑泥変岩及び花崗岩である。遺物は棺内埋土より須恵器杯1点が出土している。

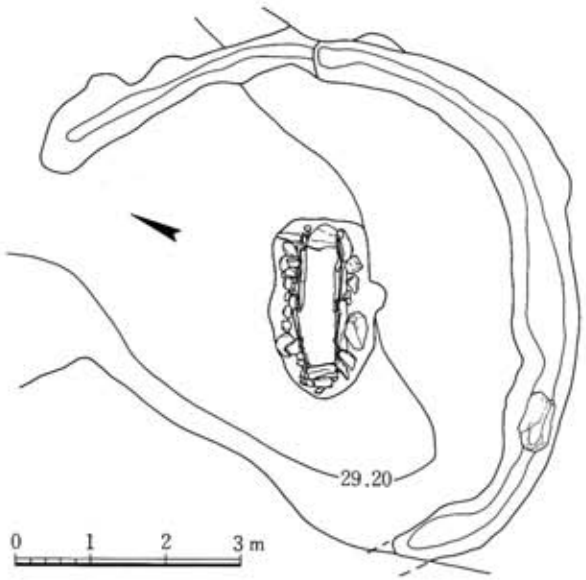


Fig. 79　藤附A遺跡ST005古墳墳丘実測図

ST006古墳（Fig. 81, PL. 44－1）

ST006古墳は内部主体が全く不明の円墳である。丘陵中央部のゆるやかな傾斜面標高約29.30mのG地区北西端（周溝が一部A地区にかかる）

に位置する。南約4.5mにST005古墳が存在する。遺物は皆無である。

墳丘　周溝は幅1.6～2.6m，深さ0.3～0.6mで断面U字形となる。埋土はやや粘質土で，溝中央が黒色，側壁及び底部に行くに従い褐色を帯びる。道路により削平を受けて全体の3分の1しか残存しない。またA地区にかかる周溝は中世のSD013溝によって切られる。

墳丘は復元直径13.5mを測る。盛土は全く見られない。

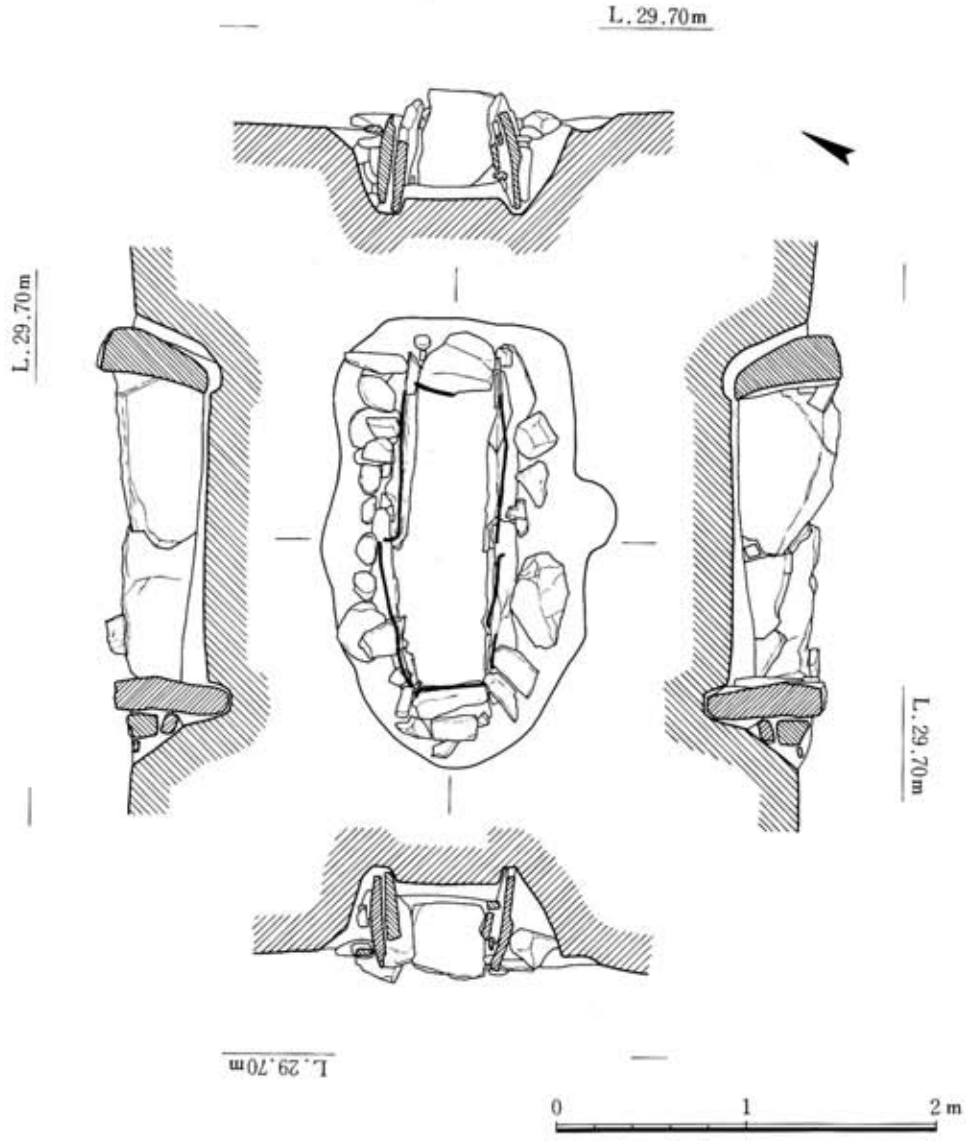


Fig.80　藤附A遺跡ST005古墳石室実測図

ST007古墳（Fig. 82, PL. 47）

ST007古墳は湮滅をきたした古墳である。しかし石室前面と思われるところから東西3.5m，南北1.3mの範囲で遺物及び礫が出土した。また東に集中する礫は閉塞石と思われるところから，西に開口した横穴式石室をもつ古墳であることが予想できる。遺物はその大半が打ち壊された状態であった。器種としては須恵器の蓋・杯・高杯・甕・壺・瓶，土師器の台付壺・台付鉢・高杯・杯・蓋・皿・壺・瓶・提瓶などがあり，多種多様である。

本古墳は，丘陵中央部東寄りのD地区北端でなだらかな傾斜面標高約26mに位置する。本古墳の西北西約68mにST005古墳（G地区），南西約68mにST008古墳（1地区），南約7mに中世のSB012

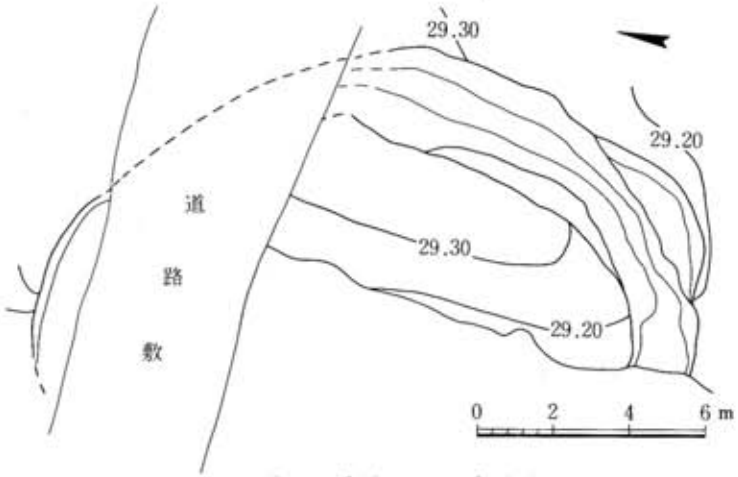


Fig. 81　藤附A遺跡ST006古墳墳丘実測図

Fig. 82　藤附A遺跡ST007古墳遺物実測図

掘立柱建物跡，南東約８ｍに中世のＳＤ026溝などが存在する。

ＳＴ008古墳（Fig. 83～85, PL. 48・49）

ＳＴ008古墳は横穴式石室を有する円墳である。古墳の南及び南西部は削平により湮滅している。丘陵先端のやや高みをもつ，Ｉ地区中央西より標高約27ｍのところに位置する。本古墳の北約53ｍのところにＳＴ005古墳（Ｇ地区），北東約68ｍのところにＳＴ007古墳（Ｄ地区），その他，東には間隔を置いて多くの中世の土壙が存在する。しかし本古墳周囲の近接地には遺構はみられず，他と立地を異にしている。遺物は須恵器・土師器・鉄器・耳環が出土している。

墳丘　周溝は幅2.5～4.6ｍ，深さ0.3～0.6ｍを測り，幅が広いのに比し浅い。断面レンズ状をしめす。墳丘は直径19ｍ，現存盛土の厚さは0.4ｍである。旧地表面から石室の掘り込みを行い，石室の構築作業と併行して盛土を実施している。

内部主体　内部主体は単室の横穴式石室で主軸をＳ－Ｅ6°方向にとり，ほぼ南に開口する。現存長5.8ｍ，幅2.8～3.5ｍ，深さ0.9ｍのやや南に狭まる隅丸長方形の掘り形に，長さ3.3ｍ，幅1.9～2.3ｍの平面が羽子板状の玄室を造る。各壁は腰石しか残らず，奥壁に２個，右側壁に４個，左側壁に５個の大き目の石を据える。各壁の石幅は奥壁が１ｍ，両側壁が0.6～1.0ｍである。裏込めの石は少ない。玄室床面は0.1ｍの厚さで貼り床を施しており，また敷石は数個を残すのみである。

羨道は長さ1.5ｍを残して消滅している。羨道と玄室の間に敷居石を置き区切りをつける。敷居石の両壁には大き目の袖石が付く。敷居石の内側，即ち玄室内に板状の閉塞石が立ち，また羨道内に閉塞に利用した石が山積した状態で検出できた。

遺物は玄室内より多くの鉄器・耳環を出土した。広根式及び尖根式鉄鏃19本，刀子３本，鉄刀１本，それに耳環８個を数え，他の古墳に比し種類，量的にも多い。また逆に土器類は極めて少なく，玄室埋土より須恵器杯，羨道より土師器杯と壺の３点が出土したにすぎない。

藤附Ａ遺跡の７基の古墳は，出土遺物から判断しＳＴ003古墳・ＳＴ004古墳・ＳＴ005古墳・ＳＴ008古墳が６世紀後半，ＳＴ002古墳が６世紀末から７世紀後半，ＳＴ007古墳が６世紀後半から７世紀中頃に比定できる。ＳＴ006古墳については出土遺物はなく，また内部主体も不明なため時期設定が不可能である。いずれにせよ本遺跡の古墳は，金立開拓及び藤附古墳群の一角を形成し，６世紀後半から７世紀後半にわたって営まれた古墳群といえる。

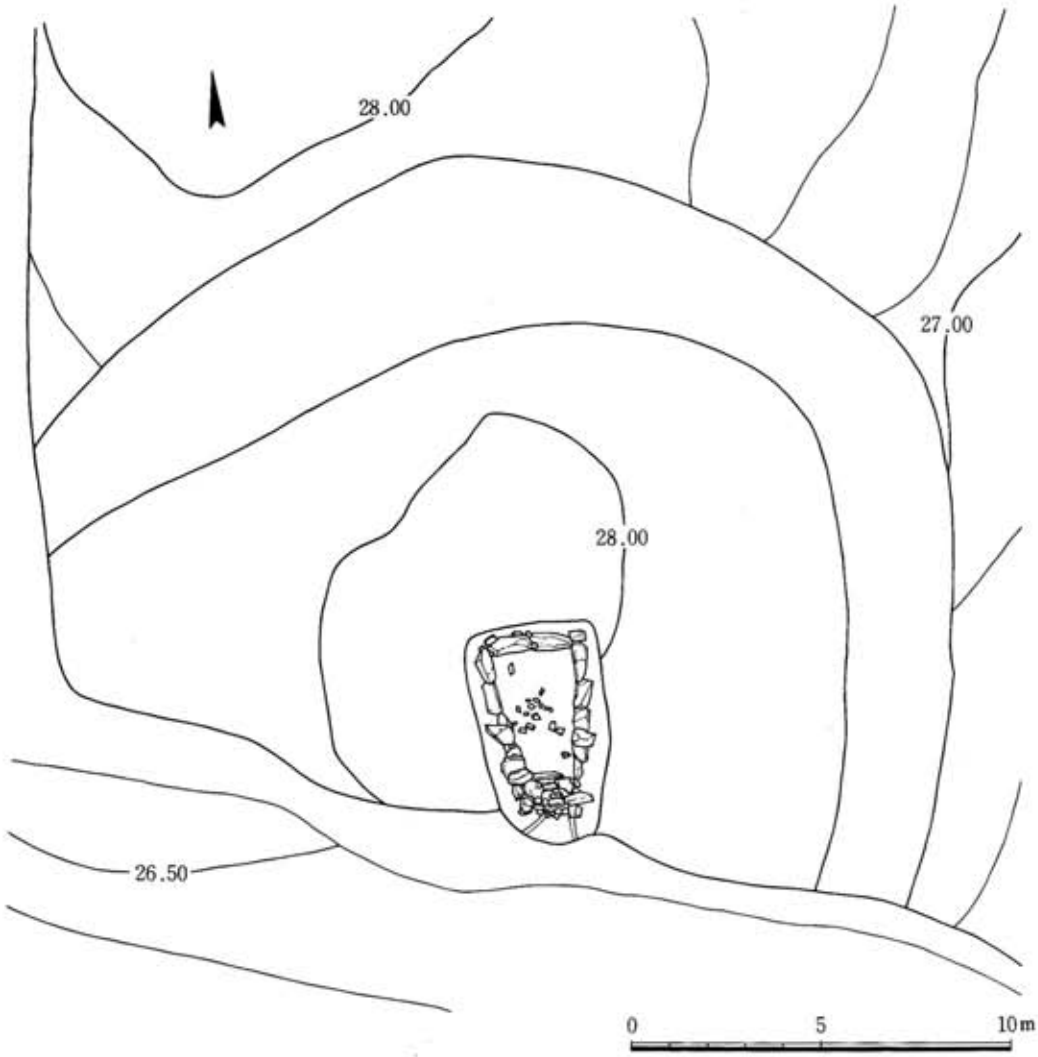


Fig. 83　藤附A遺跡ST008古墳墳丘実測図

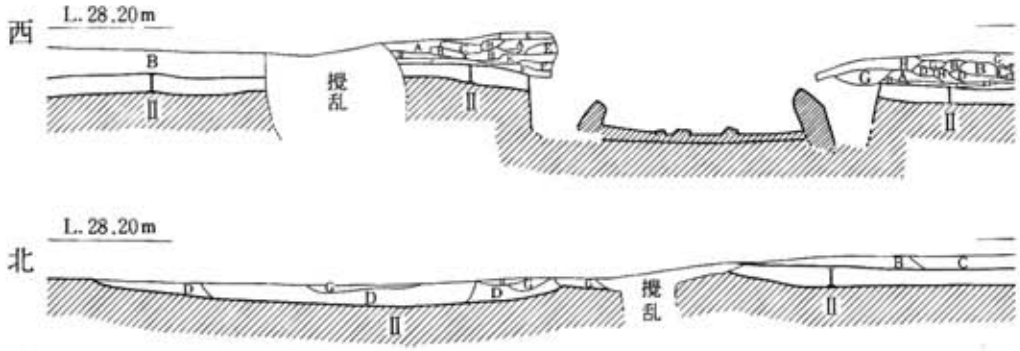
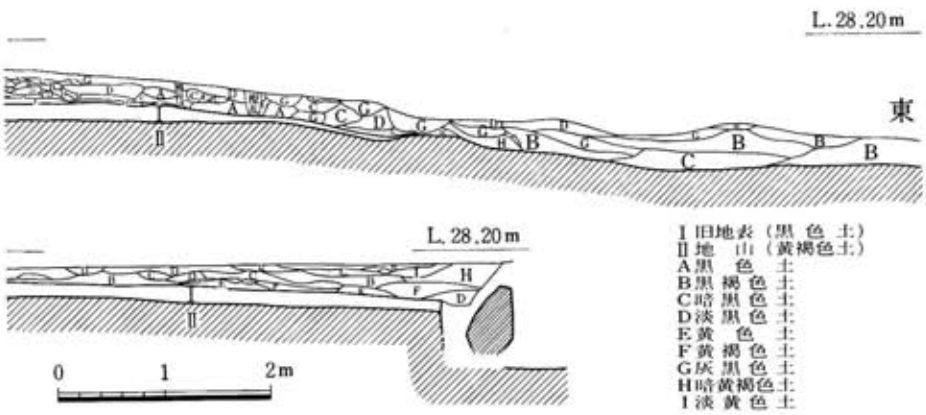


Fig. 84　藤附A遺跡ST008古墳墳丘土層図

Tad. 10　藤附A遺跡古墳一覧表

遺跡番号	地区	方位	墳形	墳径	周溝		内部主体	内部主体の法量		出土遺物	備考
					幅	深さ		長さ	幅		
				(m)	(m)	(m)		(m)	(m)		
ST002	J	S-W4°	不明	不明	不明	不明	横穴式石室	3.8	1.8	須恵器の蓋・杯・高杯・土師器の皿・耳環	石室のみ遺存，腰石も取り去られる
ST003	H	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	須恵器の杯・甕	遺物のみ
ST004	H	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	須恵器の杯・甕，土師器の高杯	遺物のみ
ST005	GA	S-E64°	円墳	6.4	0.5~0.9	0.4~0.5	箱式石棺	1.54	0.46~0.6	須恵器杯	内部主体・周溝とも遺存するが上部削平
ST006	G	不明	円墳	復元径 13.5	1.6~2.6	0.3~0.6	不明	不明	不明	なし	周溝の¼遺存
ST007	D	不明	不明	不明	不明	不明	横穴式石室	不明	不明	須恵器の蓋・杯・高杯・甕・壺・甕，土師器の台付壺・台付鉢・高杯・杯・蓋皿・壺・甕・提瓶	石室前面に遺物のみ遺存
ST008	I	S-E6°	円墳		2.5~4.6	0.3~0.6	不明	3.3	1.9~2.3	広根式及び尖根式鉄鏃19本・刀子3本・鉄刀1本・耳環8個	内部主体・周溝とも遺存するが上部削平



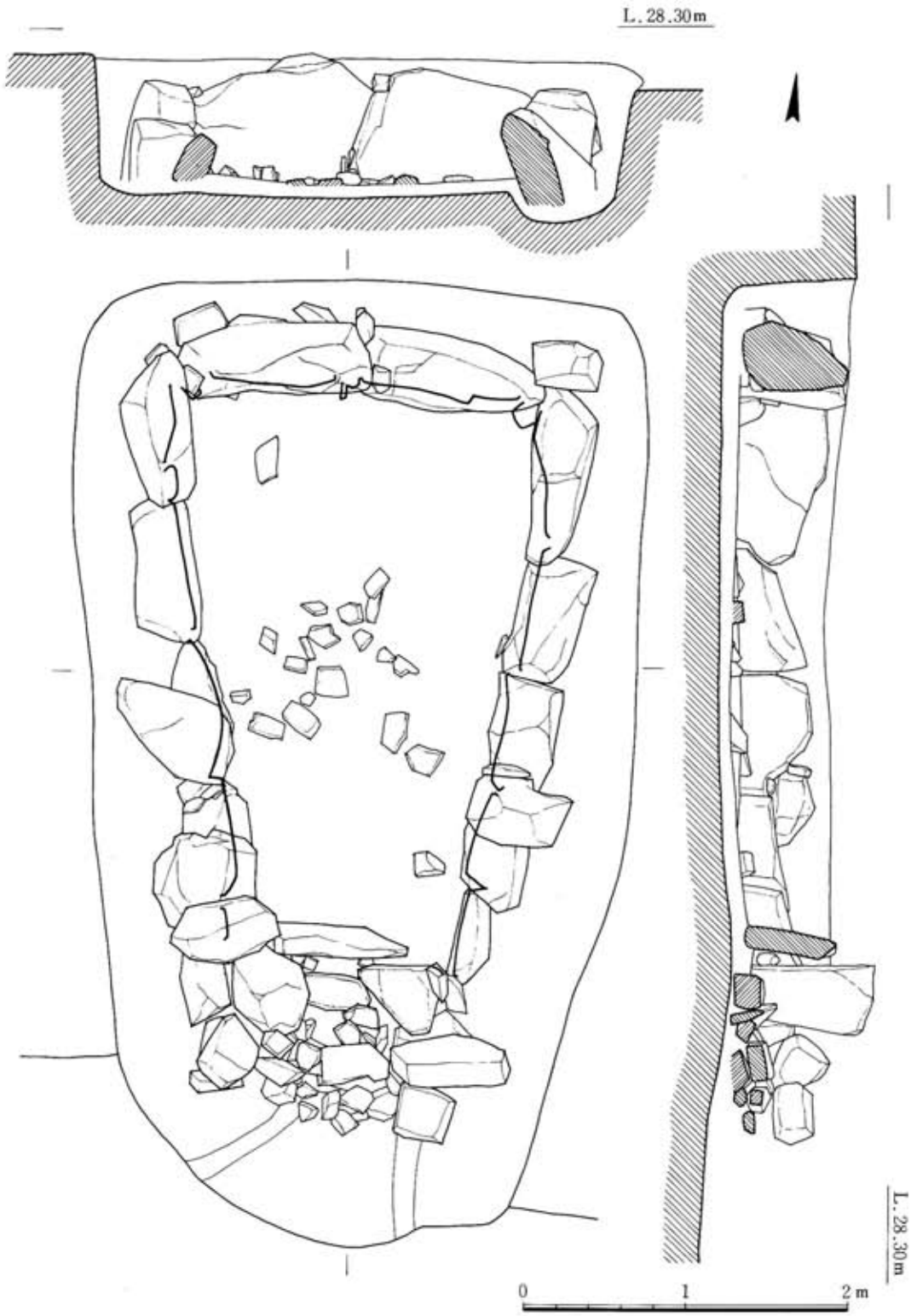


Fig. 85　藤附A遺跡ST008古墳石室実測図

(3) 歴史時代

歴史時代の遺構としては中世の掘立柱建物跡６棟・土壙41基・溝13条，近世の甕棺墓２基がある。掘立柱建物跡はＡ地区に３棟(SB009･SB010･SB011)，Ｄ地区に３棟(SB012･SB013･SB014）あり，主軸をほぼ東西か南北にとる。土壙はＡ地区に２基，Ｇ地区に２基，Ｄ地区に６基，他はすべてⅠ地区に存在するが，性格については不明である。溝はＡ地区に６条，Ｇ地区に２条，Ｄ地区に５条が走る。甕棺墓２基は丘陵の先端，Ⅰ地区の南端に位置する。

掘立柱建物跡　藤附Ａ遺跡からは，Ａ地区３棟（SB009・SB010・SB011)，Ｄ地区３棟（SB012・SB013・SB014）の計６棟が出土した。

SB009掘立柱建物跡（Fig.86，PL.50－１）

Ａ地区北西に位置し，主軸をＮ－Ｅ79°30′方向にとる２×３間の建物である。梁行5.68ｍ，桁行8.8ｍを測り，本遺跡の中で最も規模が大きい。柱間は，梁行の場合東が南から2.7ｍ･3.7ｍ，西が南から2.6ｍ･2.8ｍで，東の第２間が極端に広くなる。桁行の場合南が西から2.8ｍ･2.8ｍ・2.9ｍでほぼ等間に対し，北は東から3.2ｍ・2.6ｍ・3.2ｍと不揃いで，かつ直線上にのらない。従って桁方向・梁方向ともに相対する柱位置は通りの悪いものが多い。柱穴の掘り形は平面円形で，上端径0.55～0.8ｍ，深さ0.55～1.1ｍを測る。柱痕を確認でき，その径は0.2～0.3ｍと大きい。遺物は完形のものはないが，土師器杯片が柱穴より出土している。

当掘立柱建物跡の南約13ｍにSB010掘立柱建物跡，同じく南約20ｍにSB011掘立柱建物跡，北約６ｍにSK028土壙，西約７ｍにSK029土壙などいずれも中世の遺構が存在する。

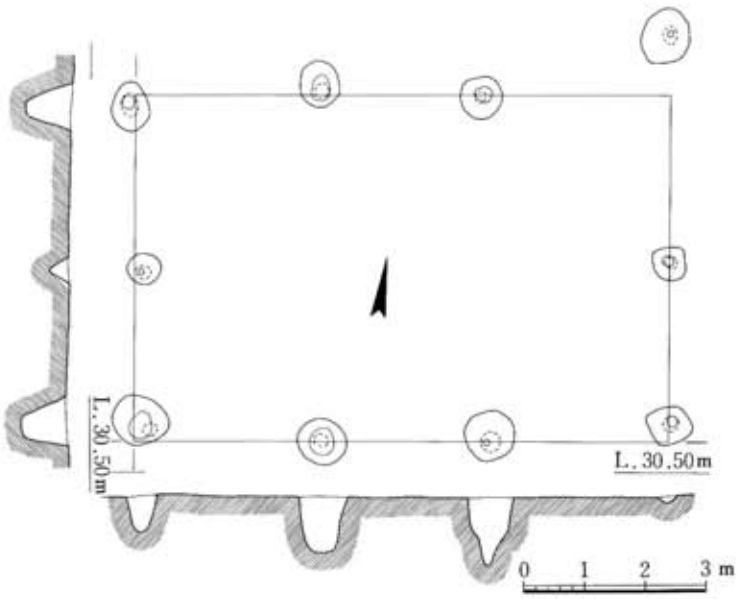


Fig.86　藤附Ａ遺跡ＳＢ009掘立柱建物跡実測図

SB010掘立柱建物跡（Fig.87，PL.50－2）

A地区中央の西よりに位置し，主軸をN－E78°方向にとる2×3間の建物である。主軸方向は北約13mに存在するSB009掘立柱建物跡とほぼ同じである。梁行3.63m，桁行6.15mを測る。梁行の西中間柱は欠除する。柱間は，梁行の場合東が南から1.85m・1.78mである。桁行の場合南が2.05mの等間であるのに対し，北が西から2.15m・1.9m・2.0mと幾分差が見られる。従って桁行方向相対する柱位置は多少通りが悪くなる。柱穴の掘り形は平面円形で，梁行の東中間柱が上端径0.2m，深さ0.14mと極端に小さいのに対し，他の柱穴は上端径0.35～0.5m，深さ0.4～0.6mである。柱痕を確認でき，その径は0.17～0.28mである。遺物は土師器杯の細片が柱穴より出土している。

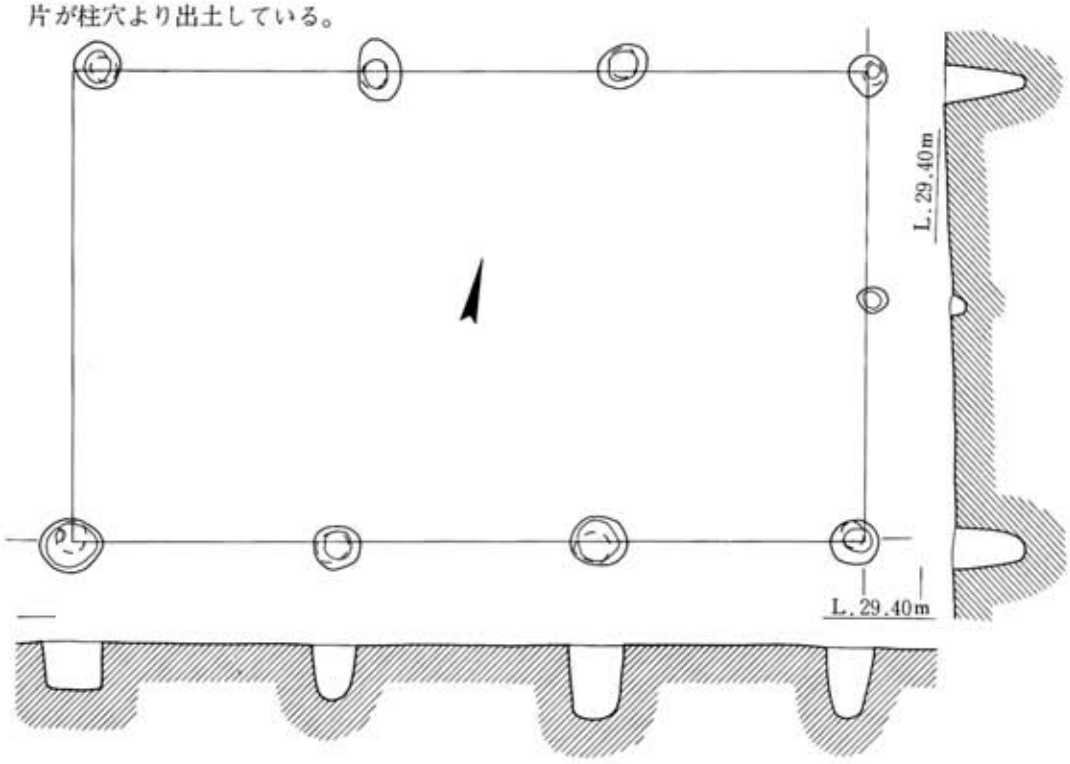


Fig.87　藤附A遺跡SB010掘立柱建物跡実測図　　0　1　2m

当掘立柱建物跡の北約13mには主軸をほぼ同一方向にとるSB010掘立柱建物跡，また主軸は異にするが南約7mにSB011掘立柱建物跡が存在する。その他西約1mにSD017溝，南東約10mにSD015溝などいずれも中世の遺構が位置する。また東の梁行に接するように縄文時代のSK001土壙が存在する。

SB011掘立柱建物跡（Fig.88，PL.51－1）

A地区南端中央に位置し，主軸をN－W2°30′方向にとる1×2間の建物である。北のSB

009及びSB010掘立柱建物跡とは方向を異にする。梁行2.9m，桁行2.45mを測る。柱間は，桁行の場合西が南から1.05m・1.4mである。しかし東の場合南からの第1間が1.05mと西の桁行方向相対する柱位置は通るが，その北の西と相対する柱穴が存在しない。北及び北東方向に柱穴が存在するが，当掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えるにはあまりにも不揃いである。数回の建てかえはあったものと考えられる。柱穴の掘り形は平面円形で，上端径0.45～0.5m，深さ0.07～0.13mである。柱痕は径0.2～0.25mである。遺物は皆無であった。

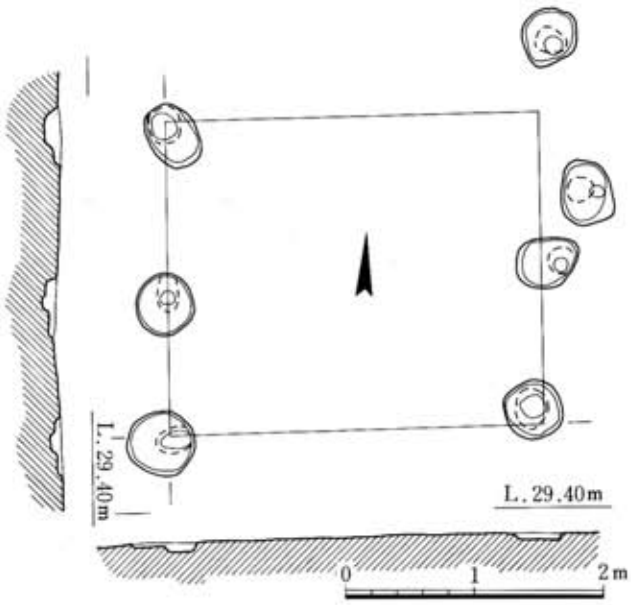


Fig.88　藤附A遺跡SB011掘立柱建物跡実測図

当掘立柱建物跡の北約7mにSB010掘立柱建物跡，東約7mにSD016溝があり，また南東約5mにはST006古墳と切り合うSD018溝が存在する。

SB012掘立柱建物跡 (Fig.89)

D地区中央北寄りに位置し，主軸をN－E88°方向にとる1×3間の建物である。梁行4.25m，桁行5.63mを測る。柱間は，桁行の場合南が西から1.9m・2.0m・1.5m，北が西から2.1m・2.0m・2.1mで，南の第3間が多少狭まる以外は，ほぼ等間である。柱穴の掘り形は不定形のものもあるが，大半は円形である。柱穴上端径0.6～0.8m，深さ0.23～0.47mを測る。柱痕も確認することができ，その径は0.15～0.23mである。遺物は土師器杯の細片を出土している。

当掘立柱建物跡の南約4mにSK034・SK035・SK036・SK037土壙，北東約6mにSD026溝，東約

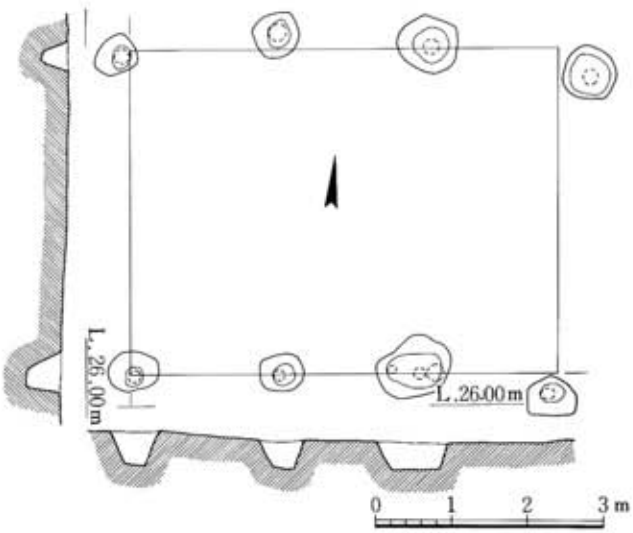


Fig.89　藤附A遺跡SB012掘立柱建物跡実測図

10mにSD023溝などの中世遺構が存在する。また北約7mにST007古墳が位置する。

SB013掘立柱建物跡（Fig.90，PL.51－2）

D地区南西に位置し，3個の柱穴がN－W4°方向に並ぶ建物である。この2間の建物が，梁行か桁行かは不明である。柱間は南から2.15m・2.0mで，わずかに第1間が広い。柱穴の掘り形は円形で，上端径0.25m，深さ0.06～0.08mを測り，規模は小さい。また柱痕も確認でき，その径は0.1mである。遺物は皆無である。

当掘立柱建物跡の南南西約6mにSD025溝をはさんでSB014掘立柱建物跡が位置する。その他東約12mにSK032土壙，同じく東約13mにSD023溝，西約11mのⅠ地区にSK059・SK060・SK061・SK062土壙などの中世遺構が存在する。

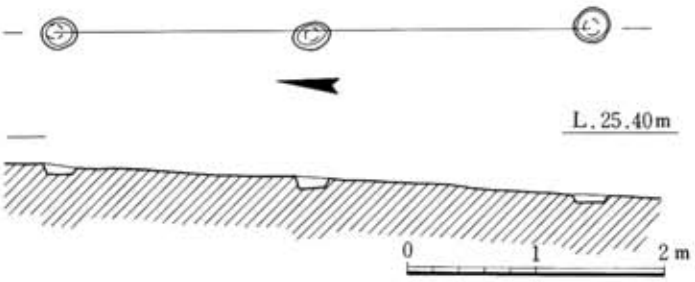


Fig.90　藤附A遺跡SB013掘立柱建物跡実測図

SB014掘立柱建物跡

（Fig.91，PL.51－2）

D地区南西端に位置し，3個の柱穴がN－W2°方向に並ぶ建物である。この2間の建物が梁行か桁行かは不明である。柱間は南から1.95m・1.90mでほぼ等間に近い。柱穴の掘り形は円形で，上端径0.3m，深さ0.04～0.1mを測り，規模は小さい。また柱痕も存在し，その径は0.13～0.15mである。遺物は伴わない。

当掘立柱建物跡の北北東約6mに，SD025溝をはさんでSB013掘立柱建物跡が位置する。その他西約11mにはA地区のSK063・SK064土壙が存在する。

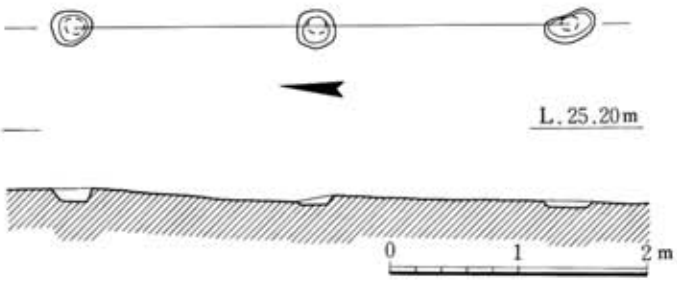


Fig.91　藤附A遺跡SB014掘立柱建物跡実測図

藤附A遺跡の掘立柱建物跡は，SB009・SB010・SB012掘立柱建物跡がほぼ東西，またSB011・SB013・SB014掘立柱建物跡（SB013・SB014については，検出柱列を主軸と考えるならば）がほぼ南北にとる建物である。時期については，決め手となる遺物はないが，SB009・SB010・SB012掘立柱建物跡から土師器杯の細片が出土している。この杯は，土壙及び溝出土のものと形態・時期を同じくするものと考えられ，室町時代後半に比定できよう。(註①)

(註)

(1) 「小路遺跡」芦刈町教育委員会　1980

土壙　藤附A遺跡からは，A地区２基，G地区２基，Ⅰ地区31基，D地区６基の計41基が出土した。土壙は平面の形態によりA・B・C・D・Eの５類に区分することができる。個々の特徴については，Tab.11藤附A遺跡土壙一覧表を参照されたい。

A類（Fig.92，PL.52－１）

平面が正方形または長方形で大型の部類に属すものである。法量によりⅠ・Ⅱに細分できる。

AⅠ　SK038土壙である。平面がやや変形の正方形で南北2.65m，東西2.4m，深さ0.2mを測る。底部には楕円形または不整形の小土壙が存在する。遺物は土壙内埋土より土師器杯，土師質鉢が出土している。

AⅡ　SK039土壙である。平面が長方形で東西3.4m，南北1.6m，深さ0.2mを測る。遺物は土壙内埋土より土師器杯が出土した。

B類（Fig.93，PL.54－３）

平面が不整方形のものである。法量によりⅠ・Ⅱに細分できる。

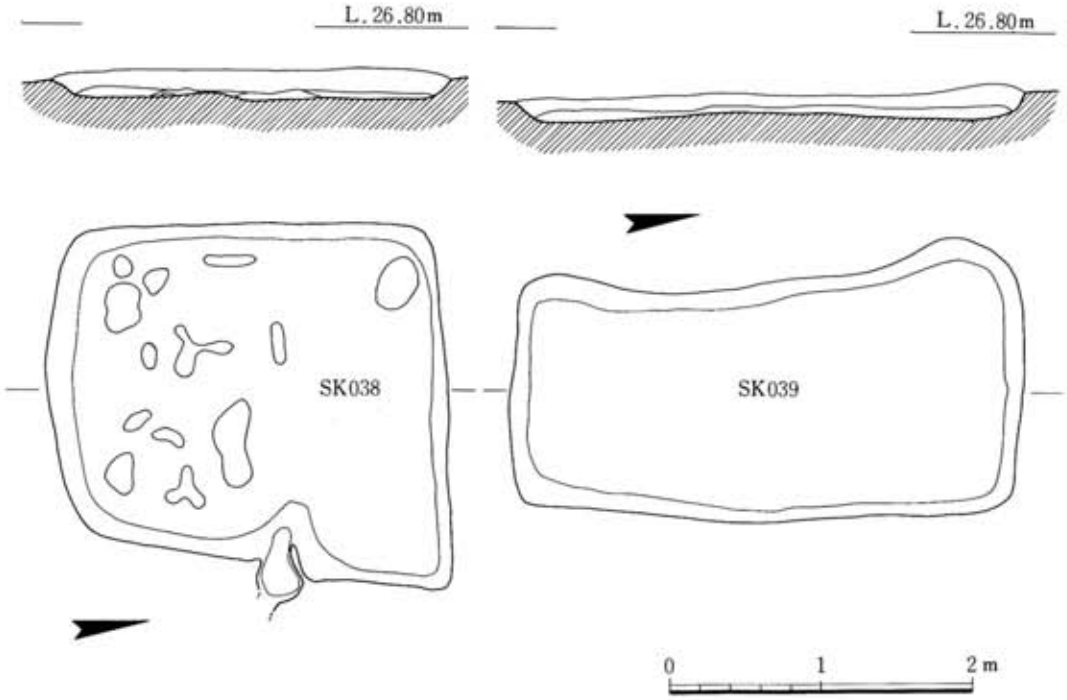


Fig.92　藤附A遺跡土壙A類実測図

BⅠ　SK031・SK040・SK041土壙である。長径1.35～1.7m，短径1.25～1.7m，深さ0.1～0.6mを測る。SK031土壙は土壙内東寄りに南北1.13m，東西0.51mの平面長方形の土壙をもち2段掘りの形態をとる。

BⅡ　SK046・SK053・SK056・SK062・SK066土壙である。長径1.02～1.21m，短径0.76～0.92m，深さ0.15～0.34mを測る。SK046土壙より土師質土器の土鍋が出土している。

C類（Fig.93，PL.55－2，53－1・3，54－2，55－1・2）

平面が長方形をなすもので全土壙41基の内，27基がこの形態に属す。長径0.91～2.55m，短径0.43～1.7m，深さ0.1～0.77mを測る。SK043・SK048土壙は土壙内南に長径0.88m，短径0.58mの平面長方形の土壙をもち，2段掘りの形態をとる。またSK054・SK064土壙は底部中央に小穴を有す。SK035・SK036・SK048・SK050・SK058・SK060・SK065土壙より土師器杯，土師質鉢及び擂鉢，瓦質擂鉢及び羽釜が出土している。

D類

平面が円形をなすものである。SK068土壙で長径0.63m，短径0.61m，深さ0.3mを測る。

E類（Fig.93，PL.53－2，54－1）

平面が不整形なものである。SK047・SK049・SK055土壙がこれに属す。ともに底部中央の側辺に平面が三角形の小穴を有す。SK047土壙は小穴に蓋をするかのように小石がはいる。SK055土壙より土師質鉢が出土している。

藤附A遺跡出土の土壙は北北西から南南東方向にかけ帯状に位置する。また南南東方向に行くに従いその分布は密になる。土壙の性格は不明であるが，A地区SB009掘立柱建物跡の北約6mのSK028土壙及び西約7mのSK029土壙，D地区SB012掘立柱建物跡の南約4mのSK034・SK035・SK036・SK037土壙などについては，掘立柱建物跡と近接し，かつ時期を同じくするところから，相互に何らかの関係があったことが予想できる。遺物については，室町時代後半に比定できる。

溝　藤附A遺跡からは，13条が出土した。各溝についてはTab.12藤附A遺跡溝一覧表を参照されたい。ここでは各地区毎にその特徴を述べるにとどめる（Fig.94）。

A地区

丘陵中央のゆるやかな傾斜面にSD015・SD016・SD017・SD018・SD019・SD020溝の6条がみられる。SD015溝とSD016溝はともに北西から南東に走り，溝の両端は切れている。SD

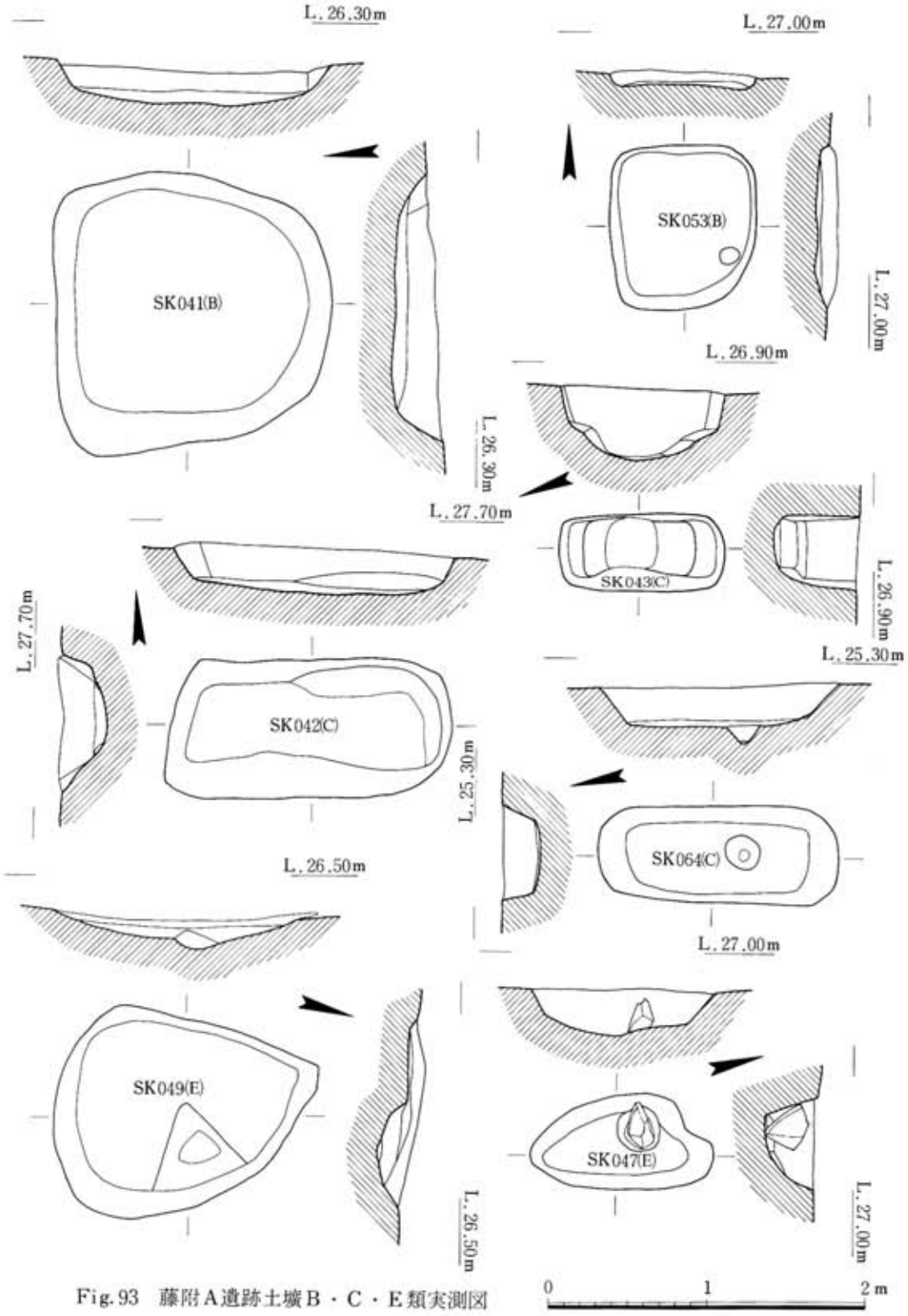


Fig. 93　藤附A遺跡土壙B・C・E類実測図

Tab. 11　藤附A遺跡土壙一覧表

（　）内　長さ・幅・深さ

土壙番号	形態分類	平面形	法量 (m) 長さ	幅	深さ	備考 (m)	地区
SK001土壙		楕円形	2.0	1.8	0.3	縄文後期浅鉢・甕	A
〃 028 〃	C	長方形	1.7	1.0	0.3		A
〃 029 〃	C	長方形	1.8	0.9	0.7		A
〃 030 〃	C	長方形	1.95	1.35	0.7		G
〃 031 〃	B	不整方形	1.5	1.25	0.6		G
〃 032 〃	C	長方形	1.5	0.9	0.1		D
〃 033 〃	C	長方形	1.3	0.7	0.08		D
〃 034 〃	C	長方形	1.4	0.8			D
〃 035 〃	C	長方形	1.5	0.85	0.26	鉢	D
〃 036 〃	C	長方形	2.55	1.7	0.12	鉢	D
〃 037 〃	C	長方形	1.85	1.1	0.24		D
〃 038 〃	A	正方形	2.65	2.4	0.2	杯・鉢	I
〃 039 〃	A	長方形	3.4	1.6	0.2	杯	I
〃 040 〃	B	不整方形	1.35	1.3	0.1		I
〃 041 〃	B	不整方形	1.7	1.7	0.3		I
〃 042 〃	C	長方形	1.77	0.86	0.28		I
〃 043 〃	C	長方形	1.05	0.48	0.45	土壙内に段をもつ	I
〃 044 〃	C	長方形	1.15	0.65	0.12		I
〃 045 〃	C	長方形	1.15	0.45	0.41	土壙内に段をもつ	I
〃 046 〃	B	不整方形	1.21	0.9	0.15	土　鍋	I
〃 047 〃	E	不整形	1.15	0.6	0.28	小石，小穴（0.26・0.27・0.25）	I
〃 048 〃	C	長方形	1.63	1.4	0.77	土壙内に段をもつ，杯・鉢・擂鉢	I
〃 049 〃	E	不整形	1.23	0.59	0.49	小穴（0.28・0.28・0.04）	I
〃 050 〃	C	長方形	1.15	0.77	0.29	鉢・擂鉢・羽釜	I
〃 051 〃	C	長方形	1.52	0.58	0.26	土壙内に長方形の土壙	I
〃 052 〃	C	長方形	1.57	1.07	0.28		I
〃 053 〃	B	不整方形	1.02	0.92	0.15		I
〃 054 〃	C	長方形	0.91	0.43	0.66	小穴（0.35・0.28・0.25）	I
〃 055 〃	E	不整形	1.7	1.3	0.23	鉢，小穴（0.6・0.5・0.16）	I
〃 056 〃	B	不整方形	1.03	0.8	0.34		I
〃 057 〃	C	長方形	1.6	1.0	0.28		I
〃 058 〃	C	長方形	1.83	1.1	0.12	杯・鉢	I
〃 059 〃	C	長方形	1.49	0.95	0.20		I
〃 060 〃	C	長方形	1.42	0.99	0.42	鉢	I
〃 061 〃	C	長方形	1.27	1.02	0.1		I
〃 062 〃	B	不整方形	1.15	0.86	0.18		I
〃 063 〃	C	長方形	1.42	0.82	0.27		I
〃 064 〃	C	長方形	1.52	0.6	0.23	小穴（0.21・0.21・0.11）	I
〃 065 〃	C	長方形	1.43	0.87	0.24	杯・鉢	I
〃 066 〃	B	不整方形	1.02	0.76	0.21		I
〃 067 〃	C	長方形	1.21	0.42	0.1		I
〃 068 〃	D	小円形	0.63	0.61	0.3		I

017溝は東西方向に走ったあと南南西に向きをかえる。西端は道路で削平を受けて消滅し，東端は切れている。SD018溝は北北東方向に走ったあとほぼ直角に屈曲し，南東へのびるが道路によって削平を受け消滅する。しかしG地区SD021溝と方向を同じくするところから，同一溝と考えられる。またSD018溝はST006古墳の周溝を切る形をとる。SD019溝はSD020溝に切られる。ともに西端は切れ，また東端は大きく削平を受け消滅している。

G地区

丘陵中央のゆるやかな傾斜面にSD021・SD022溝の2条がみられる。両溝は切り合うが，時期の前後関係は不明である。SD021溝はA地区SD018溝からの連続と思われ，北西から南東へ走ったあと屈曲し南流する。南端は切れている。SD022溝は東西方向に走り，西端はSD021溝と合流したあと半月状に切り合う。東端は切れている。また東端近くでSK030土壙に切られる。

D地区

丘陵中央から南にかけてSD023・SD024・SD025・SD026・SD027溝の5条がみられる。SD023溝は南北に走り，本遺跡最大の溝である。溝内に多くの礫を含む。SD027溝に切られ，また南部でやや大き目の別の溝が連続する形をとる。両端とも切れる。SD024溝は南北に走り，北端は切れ，南は自然消滅の形をとる。SD025溝は北西から南東に走り，両端は調査区外とな

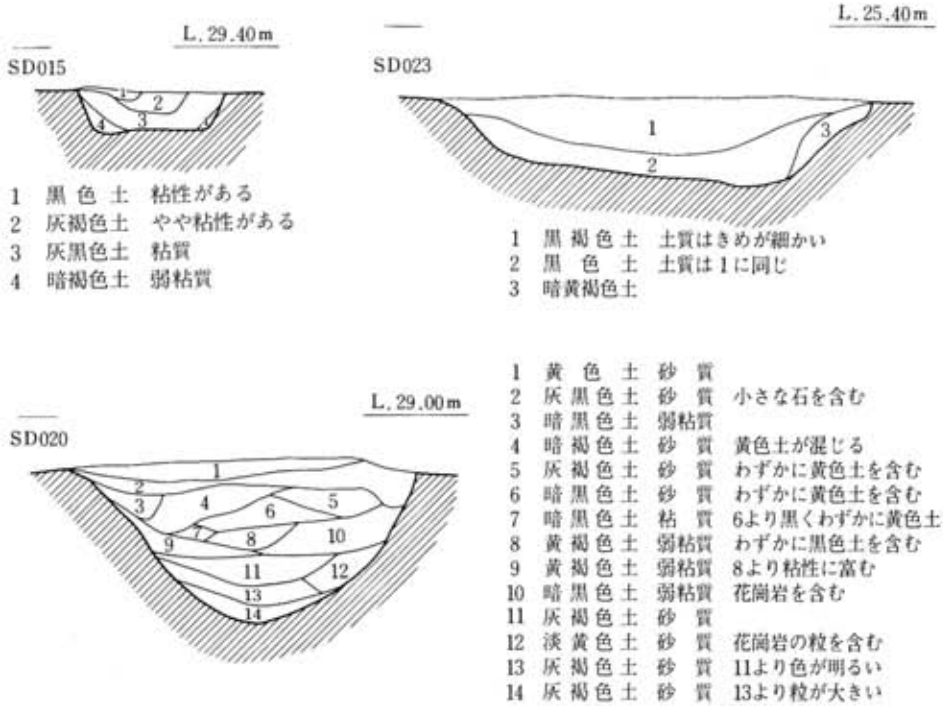


Fig.94 藤附A遺跡SD015・020・023溝土層図

る。この溝はSB013及びSB014掘立柱建物跡の中間にあり，両建物を画する形をとる。SD026溝は北東から南西へ走り，両端は切れる。SD027溝は北北東から南南西へ走り，SD023溝を切る。両端は切れる。

藤附A遺跡出土の溝の性格については不明である。SD023溝は環濠的な性格も考えられるが調査区のみでは判断できない。時期については溝出土の遺物が，掘立柱建物跡及び土壙出土のものと同じことから，ほぼ同時期で室町時代後半に比定できる。

Tab. 12　藤附A遺跡溝一覧表

溝番号	平面形態	方位	法量 (m)			地区
			長さ	幅	深さ	
SD015溝	直線	SE	13.0	0.7～0.8	0.25	A
〃016〃	直線	SE	8.0	0.7～0.8	0.1～0.15	A
〃017〃	直線	SSW	10.0	0.3～0.4	0.1～0.2	A
〃018〃	直角に屈曲	NNE－SE	9.0	0.3～0.6	0.15～0.2	A
〃019〃	直線	SSE	9.0	0.8～2.0	0.1～0.2	A
〃020〃	直線	NNE	15.0	0.8～1.9	0.3～0.9	A
〃021〃	鈍角に屈曲	SE－S	25.0	0.2～0.3		G
〃022〃	直線	E	9.0	0.2～0.3		G
〃023〃	直線（わずかに屈曲）	S	38.0	1.8～2.3	0.4～0.5	D
〃024〃	直線（わずかに屈曲）	S	13.0	0.3～0.4	0.1	D
〃025〃	直線	SE	12.0	0.3	0.1	D
〃026〃	直線（やや蛇行）	SW	10.0	0.5～0.6	0.1	D
〃027〃	直線	SSW	5.0	0.4～0.5	0.2～0.4	D

近世甕棺墓　丘陵の南端標高24.50～24.75mのゆるやかな傾斜地に2基存在する。藤附A遺跡の遺構で，最も南に位置する。

SJ069甕棺墓（Fig.95）

I地区の東南端に位置する。残存土壙は長径0.36m，短径0.33m，深さ0.04mで，中に甕の底部のみ存在する。東南約5mにSJ070甕棺墓，北東及び北西約9mにSK064・SK066土壙が位置する。

SJ070甕棺墓（Fig.95，PL.55－3）

Ⅰ地区の東南端に位置する。上部の削平が著しいが，SJ069甕棺墓よりやや残りが良い。残存土壙は平面円形で径0.55m，深さ0.15mを測り，その中に甕底部と胴部下半が存在する。土壙底部すなわち甕底部に約3cmの厚みで粘質土を敷いてかためた痕跡が認められる。北西約5mにSJ069甕棺墓が位置する。

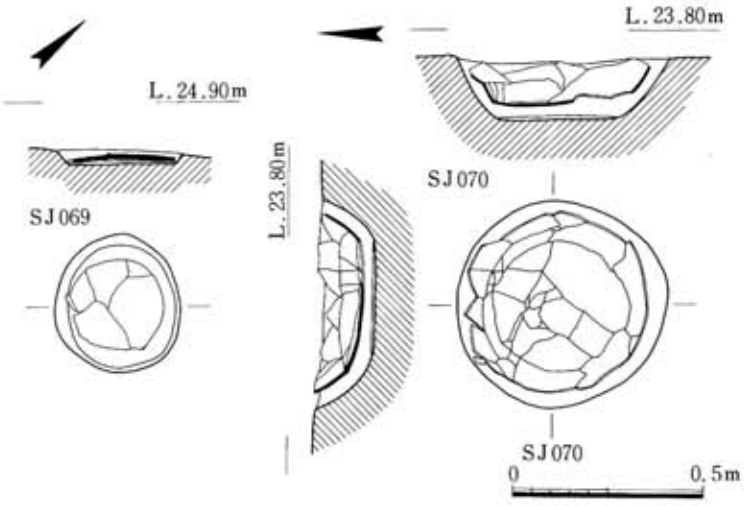


Fig.95　藤附A遺跡SJ069・SJ070甕棺墓実測図

3．遺　　物

(1) 縄文時代

土器（Fig.96～98，PL.97）

藤附A遺跡出土の縄文土器で，遺構に伴うものはSK001土壙出土の浅鉢及び甕のみで，他は表土や古墳墳丘，中世の溝などから出土したものである。器種は鉢・甕・浅鉢・椀・壺があり，早朝・後期・晩期の各時期にわたる。

SK001土壙出土土器（Fig.96，PL.97－3・4）

1は浅鉢である。口径31.6cm，器高13.5cmを測る。胴部最大径の屈曲部から外反する口縁部がつく。口縁部外面に5条の沈線がめぐる。内外面とも入念な磨研が施されている。色調は外面が暗褐色で，底部にいくに従い黄褐色を帯びる。内面は灰褐色である。胎土は微砂粒を含む。

2は甕である。口径44.7cm，復元器高42.8cmを測る。胴がやや張り，わずかに内湾する頸部から外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸い。平底である。外面に貝殻条痕が認められる。色調は暗黄褐色で，胎土に砂粒を多く含む。

その他（Fig.97・98，PL.97－1・2・5～8）

1は早期の鉢で，外面に楕円押型文，内面に縦方向の平行沈線を施している。口縁端部はやや丸味をもち，ナデ調整を施す。色調は赤褐色で，胎土に砂粒を含む。

2～5は後期の鉢である。2は橋状把手をもつ，鐘ケ崎系の土器で，肩部に2条の沈線をもつ。内外面ナデ調整で，内面肩部にわずかに指圧痕が残る。色調は黄褐色で，外面はやや黒褐色を帯びる。胎土に微砂粒を含む。3は大きく内湾する頸部から屈曲して立ちあがる口縁部をもつ鉢である。口縁部は波状口縁となり，外面に2条の沈線をもつ。上段の沈線は波頂部で分かれ，その空白部に押圧痕を付す。また沈線の上下にはそれぞれ連続押圧の疑似縄文が施され全面ヘラ磨きで仕上げている。色調は淡褐色で，胎土に細砂粒と雲母を含む。4は3と同型の鉢である。5は南福寺系の鉢である。口縁部がわずかに内湾し，端部は丸味をもつ。また端部は小波状口縁となる。口縁部外面には等間隔に押圧痕を付す。全面ナデ調整で，色調は淡褐色，胎土には雲母を多量に含む。

6は後期末から晩期初頭の椀である。胴部で膨みをもち，やや内湾しながら口縁部にいたるという球形に近い形態となる。口縁部下と胴部にそれぞれ2条の沈線，その間に3条の重弧文がめぐる。口縁端部は平坦である。色調は明褐色で，胎土には微砂粒を少量含み良く精選されている。全面ヘラ磨きで丹念に仕上げている。

7～9は後期から晩期の浅鉢である。7は胴部最大径の屈曲部から外反する口縁部がつく。胴部は外反気味に底部にいたるものである。口縁部外面に2条の凹線がめぐる。色調は褐色で，胎土に細砂粒を多く含む。8は直立気味に口縁部がつくが，外面は強く内湾する。全面ヨコナデ調整を施す。色調は褐色で，外面一部黒色となる。胎土に砂粒を含む。9は強く屈曲する胴部に外反する口縁部がつく。短い口縁部は肥厚する。口縁部はヨコナデ調整を施し，他は丹念なヘラ磨きで仕上げる。色調は褐色で，胎土に細砂粒を含む。

10～19は後期から晩期の甕である。10は復元口径32.8cm，残存高19.2cmを測る。ゆるやかに

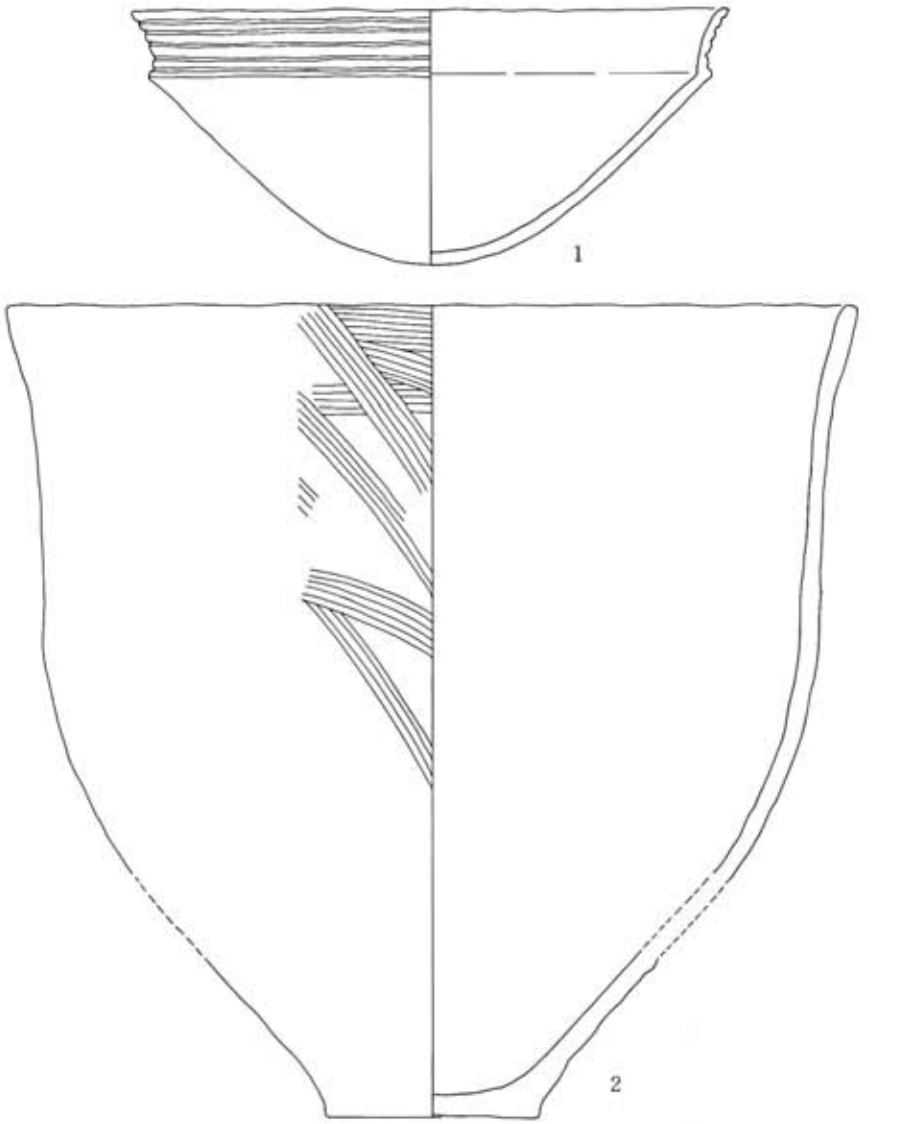


Fig.96　藤附A遺跡SK001土壙出土土器実測図

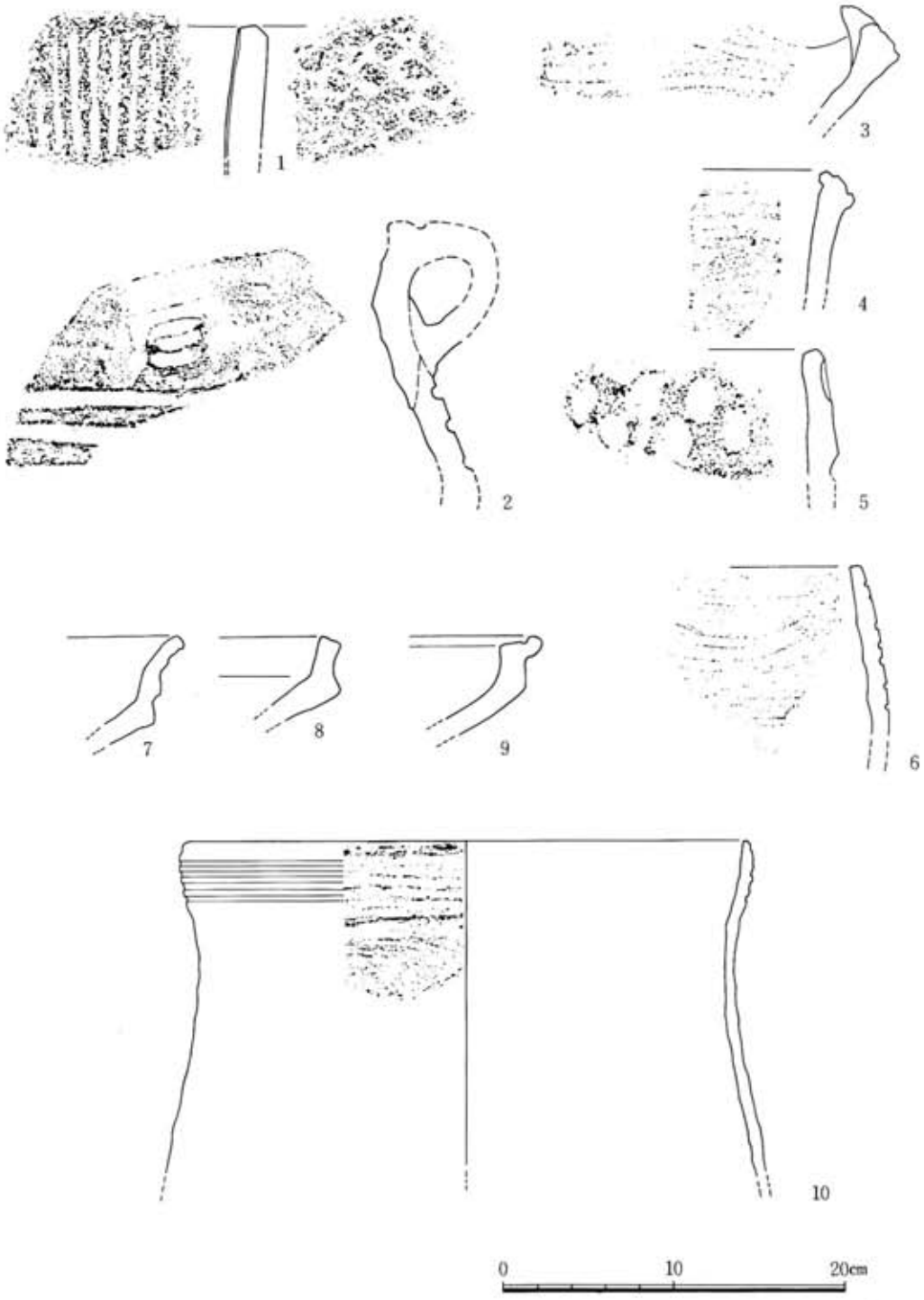


Fig. 97　藤附A遺跡出土縄文土器実測図　(1)

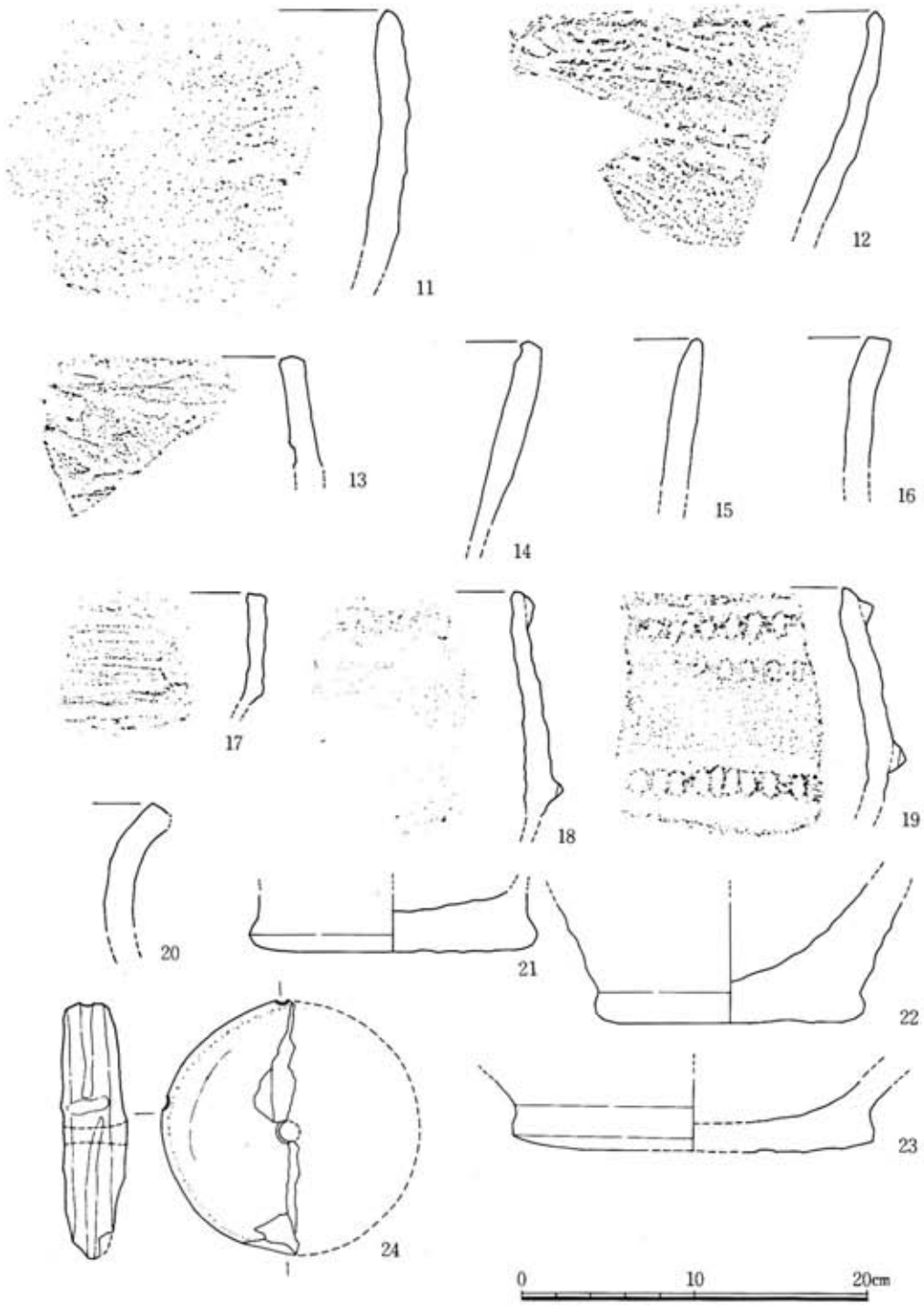


Fig. 98　藤附A遺跡出土縄文土器実測図　(2)

内湾する頸部から，口縁部で外反しながら立ちあがる。胴部はわずかに屈曲する。口縁部外面に条痕調整，他は条痕調整のあとナデ調整を施している。色調は赤褐色，胎土は細砂粒を多量に含む。**11**～**13**は口縁部が内傾または内湾するもので，内外面ともに条痕調整を施す。色調は**11**が灰褐色，他は褐色で，胎土に砂粒を含む。**14**～**16**は口縁部が外反するものである。**14**は条痕調整，**15**は外面ケズリ，他はナデ，ヨコナデ調整，**16**はヨコナデ調整を施す。いずれも色調は茶褐色，胎土に砂粒を含む。**17**は内湾する頸部から屈曲して立ちあがる「タガ」状口縁部である。外面は横方向の条痕調整，他はナデ調整を施す。色調は褐色，胎土は微砂粒を含む。**18**・**19**は膨みをもつ胴部から内湾する口縁部をもつ。口縁上端部外周及び胴部外周に断面三角形の刻み目突帯がめぐる。**18**は内外とも横方向ヘラ磨き，**19**は外面ヘラ磨き，内面ナデ調整を施す。色調は茶色で，胎土に多量の砂粒と，少量の雲母を含む。

20は晩期の壺である。口縁部は大きく外反する。内外ともヘラ磨き仕上げ，丹塗りを施す。胎土に細砂粒を多く含む。

21～**23**は甕の底部である。**22**の体部外面に条痕調整が見られる他は，ナデ調整を施す。色調は褐色で，胎土に砂粒を多く含む。

24は紡錘車形土製品である。半分を欠損する。中央に穿孔し，側面に刻み目を入れる。全面ナデ調整を施す。色調は褐色で，胎土に微砂粒を多く含む。

石器（Fig.99・100，PL.102－**7**・**8**）

藤附A遺跡出土の石器は遺構に伴うものは存在せず，すべて表土や古墳墳丘，中世の溝などから出土したものである。時期については明確でないが，石鏃の形態からみて縄文時代中期から弥生時代にわたるものである。なお挿図の番号は，Tab.13藤附A遺跡出土石器一覧表の番号と一致する。

石鏃（Fig.99，PL.102－7）

石鏃は7点出土した。平基A，凹基B，剝片鏃Cに大別できる。

石鏃A　**1**・**2**である。**1**は基部が丸

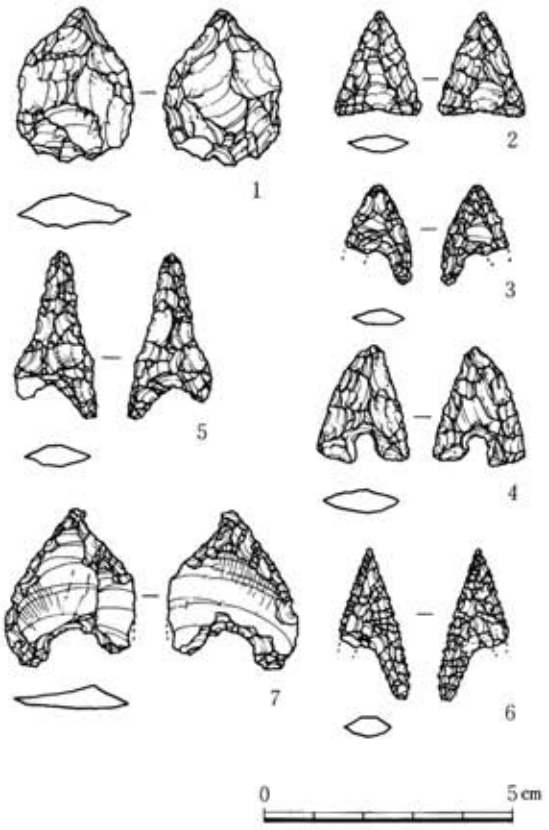


Fig.99　藤附A遺跡出土石器実測図（1）

く，体部と基部の境が不明瞭である。体部最大幅が中央になる。2は基部の抉りが弓なり状にわずかにつく。基部の両先端は尖がる。

石鏃B　3～6である。3は基部の抉りが体長の3分の1近くあり，脚部が明確で尖がり気味である。側縁は丸味をもつ。5の体部は極端に長く，最大幅が体部下位にあり「く」の字に段をもつ。6は抉りの深さが体長の半分近くあり，長脚で先端が尖がる。また全体に剝離が丁寧に施され，側縁が鋸歯状にギザギザしている。

石鏃C　7である。不定形の剝片を素材とし，全縁に剝離を施すが，表裏とも縁部のみにとどめる。

スクレイパー（Fig.100－8～11，PL.102－8）

8は不定形の剝片を素材とし，打面と反対側の縁辺部を刃部としている。一部刃こぼれが認められる。9は横長剝片を素材とし，打面側を調整して握り易くしている。刃部の片面に調整加工を施す。10は縦長剝片を素材とし，側縁に細かい剝離を施す。11は不定形剝片を素材とし

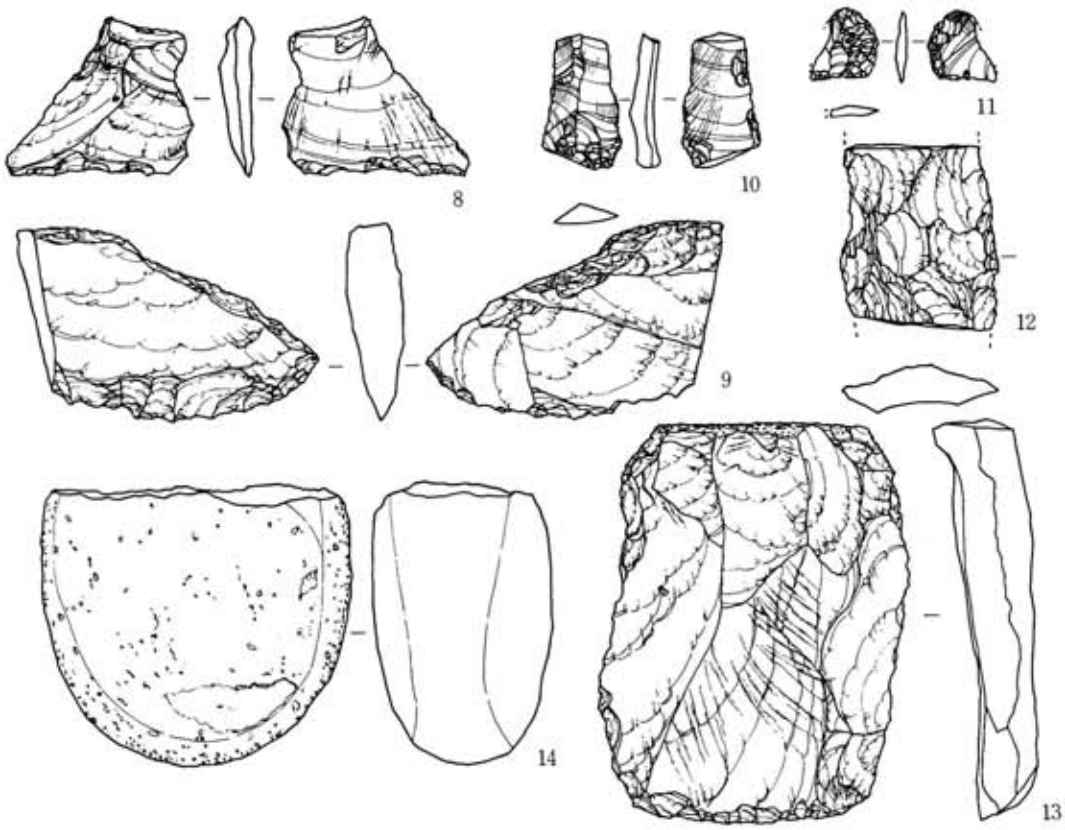


Fig. 100　藤附A遺跡出土石器実測図　(2)

周縁に剝離を施す。

磨石（Fig.100－14，PL.102－8）

14は半分欠損する。楕円形をなし，両面及び周縁とも丸味をもつ。

不明石器（Fig.100－12・13，PL.102－8）

1 12は側縁剝離，13は全縁剝離を施す。

Tab. 13　藤附A遺跡出土石器一覧表　　（　）は残存

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	石質	法量 (cm)			遺存状況
						長さ	幅	厚さ	
1	石鏃	Fig 99 PL101	A	G地区表土	サヌカイト	3.1	2.3	0.65	完形
2	〃	Fig 99 PL101	A	G地区 SD 022溝内	サヌカイト	1.05	1.75	0.3	完形
3	〃	Fig 99 PL101	B	A地区表土	黒曜石	2.0	(1.35)	0.35	片脚欠損
4	〃	Fig 99 PL101	B	A地区表土	サヌカイト	2.3	1.8	0.5	完形
5	〃	Fig 99 PL101	B	A地区 SD 020溝内	黒曜石	3.35	(1.6)	0.45	片脚先端欠損
6	〃	Fig 99 PL101	B	D地区表土	黒曜石	3.05	(1.2)	0.4	片脚欠損
7	〃	Fig 99 PL101	C	G地区表土	黒曜石	3.2	2.65	0.45	完形
8	スクレイパー	Fig 99 PL101		A地区表土	サヌカイト	4.2	5.0	0.8	完形
9	〃	Fig 99 PL101		D地区表土	サヌカイト	4.5	7.0	1.5	完形
10	〃	Fig 99 PL101		A地区表土	黒曜石	3.6	2.0	0.6	完形
11	〃	Fig 99 PL101		A地区表土	黒曜石	1.9	1.4	0.3	側縁欠損
12	不明石器	Fig 99 PL101		D地区表土	サヌカイト	4.8	4.1	1.0	
13	〃	Fig 99 PL101		A地区表土	サヌカイト	10.7	7.5	2.0	
14	磨石	Fig 99 PL101		A地区表土	安山岩	(7.5)	8.1	4.7	半分欠損

(2) 弥生時代

藤附A遺跡では弥生時代の遺構を確認することができなかった。従ってこの時代の遺物はすべて古墳の墳丘や表土などから出土したものである。器種としては甕・壺であるが，完形のものはなかった（Fig.101）。

1～5　逆L字口縁をもつ甕である。1の口縁上端は平坦で，外周に刻み目を有す。ナデ調整を施す。多量の砂粒を含み，色調は淡褐色である。2の口縁上端は山形となる。調整，胎土，

色調は1と同じである。3の口縁上端はやや丸味をもつ。磨耗が激しい。他は2と同じである。4の口縁上端は平坦で，外端が上がる。内面ヘラケズリ調整，外面ナデ調整を施す。細砂粒を多量に含み，色調は淡褐色である。5の口縁上端は平坦，他は2と同じである。

6　外反する口縁をもつ甕である。胴部はあまり張らず，口縁部は短く外反する。口縁上端は平坦となり，外端は丸い。口縁上面及び外面はヨコナデ調整，他はナデ調整を施す。細砂粒を多量に含み，色調は淡橙色である。

7・10　甕の底部である。7は脚台状の厚い平底をもつ。胴部外面ヨコナデ調整，他はナデ調整を施す。細砂粒を多量に含み，色調は内面淡褐色，外面淡橙色である。10はやや上げ底気味の平底をもつ。胴部外面ハケ目調整，他は剝落が激しく調整不明である。砂粒を多量に含み色調は褐色である。

8　壺の底部で，やや上げ底となる。ナデ調整を施す。砂粒を多量に含み，色調は淡褐色である。

(3) 古墳時代

藤附A遺跡における古墳時代の遺構は，古墳7基であった。その大半は削平が激しく大きな破壊を受けていた。しかしST002古墳石室，ST007古墳石室前面，ST008古墳石室から比較的多くの遺物を出土した。ここでは各古墳より出土した遺物を一括して，須恵器・土師器・鉄器・装身具に分け各々の特徴を述べることにする。

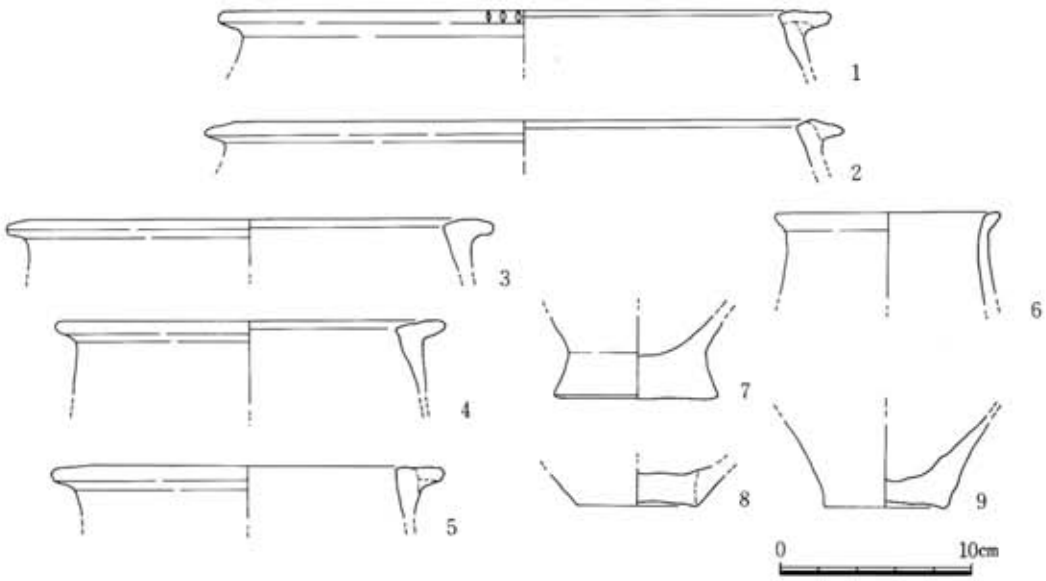


Fig. 101　藤附A遺跡出土弥生土器実測図

須恵器 (Fig.102～106, PL.98～100)

須恵器はST002古墳・ST003古墳・ST004古墳・ST005古墳・ST007古墳・ST008古墳から出土した。総出土数は明確でないが，図示可能なものが81個体であった。その内，52個体がST007古墳石室前面出土のものである。器種としては蓋・杯・高杯・甕・壺・𤭯・平瓶・横瓶があり，特に蓋・杯がその大半を占める。時期は6世紀後半から7世紀後半のものである。個々の土器の出土地などについては，Tab.16藤附A遺跡出土須恵器一覧表を参照されたい。ここでは各器種ごとの分類を行い，その特徴を簡単に述べる。

蓋 (Fig.102－1～22・53・54, PL.98)

24個体出土している。形態によりA・B・C・Dに大別できる。

蓋A (Fig.102－1～14, PL.98－1～6)

口縁部内面にかえりがなく，天井部中央につまみを付さないものである。蓋Aは法量によりⅠ (口径12.4～14.6cm, 器高2.9～4.3cm),Ⅱ(口径10.8～11.8cm, 器高3.1～4.2cm), Ⅲ (口径9.4～10.0cm, 器高2.9～3.3cm) に区分する。更にⅠを，a)天井部はやや丸味をもち器高が高いもの，b)天井部は平坦で器高が低いものに，Ⅱを，a)口縁部が屈曲し垂直なもの，b)口縁端部がわずかに屈曲するもの，c)口縁部が外下方へ開くもの，Ⅲを，a)口縁部が内湾しながら垂直に下がるもの，b)口縁部が外下方へ開くもの，c)口縁部が外反しながら垂直に下がるものに細分できる。

蓋AⅠa (1) 天井部がやや丸味をもち，大型の部類に属するものである。口径14.6cm, 器高4.3cmを測る。天井部から体部にかけて不明瞭な浅い凹線がめぐる。体部と口縁部の境は屈曲し，口縁部は直線的に外下方へ開く。端部は丸い。天井部外面はヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋AⅠb (2) 天井部が平坦で器高が低いものである。口径12.4cm, 器高2.9cmを測る。天井部から体部にかけにぶい凹線が走り，短い口縁部は屈曲して外下方へのびる。調整はAⅠaと同じである。

蓋AⅡa (3・4) 口縁部が屈曲し垂直に下がるものである。口径11.8cm, 器高3.5～4.2cmを測る。天井部は丸く，体部はゆるやかに内湾する。口縁端部は丸い。天井部外面はヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。**3**の天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋AⅡb (5・6) 口縁端部が短く屈曲するものである。口径11.0～11.6cm, 器高2.45～3.3cmを測る。天井部は**5**が丸く，**6**が平坦となる。口縁端部は丸い。調整はAⅡaと同じで，ともに天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋AⅡc (7～11) 天井中央部が平坦で，体部はゆるやかに内湾し，口縁部は外下方へ開くものである。口径10.8～11.45cm, 器高3.1～3.9cmを測る。口縁端部は丸く，**10・11**は端部が肥

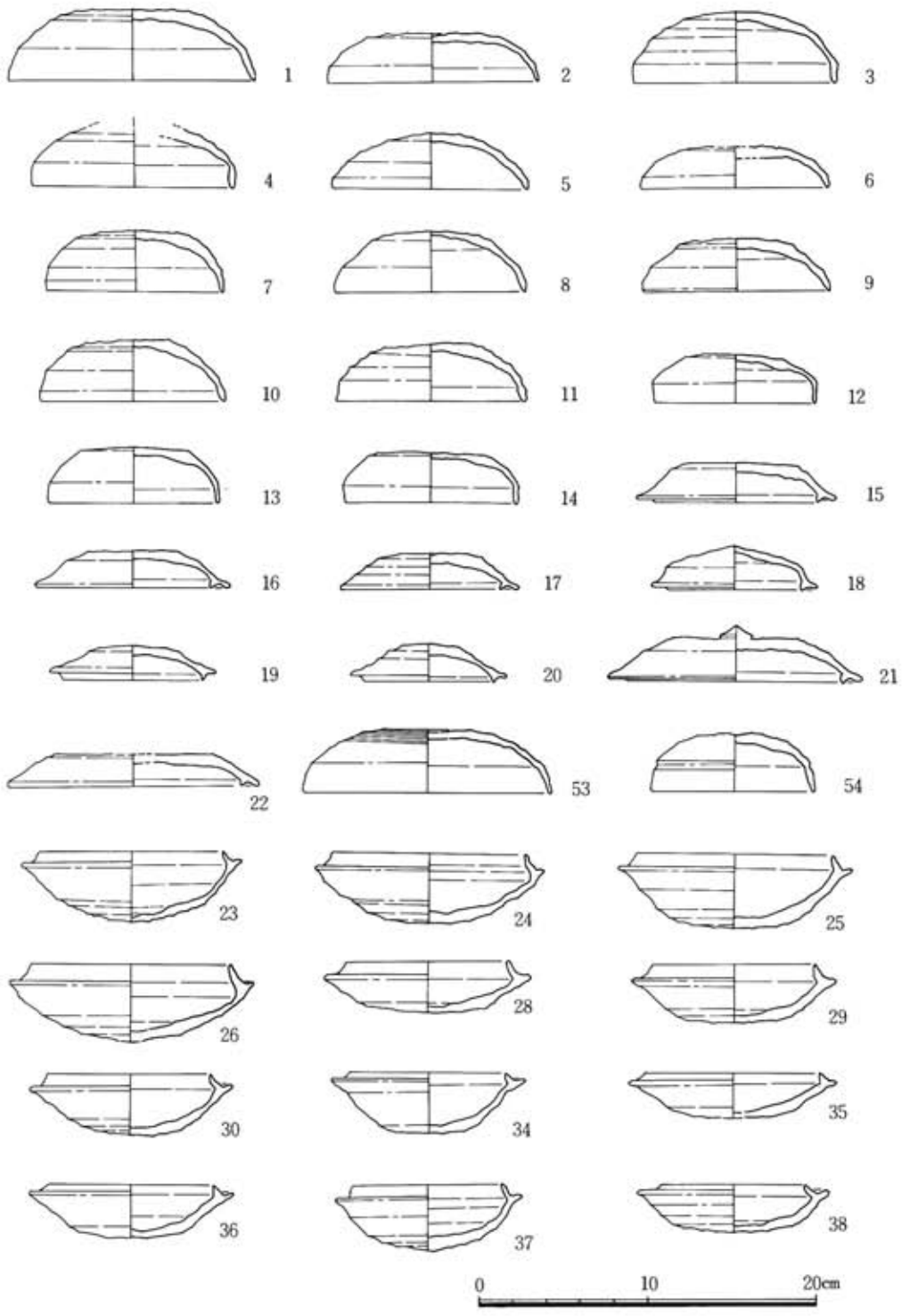


Fig. 102　藤附A遺跡出土須恵器実測図　(1)

厚する。天井部外面は，**7・11**がヘラケズリ調整，**8～10**が直線的なヘラ切り離しのあとナデ調整を施す。他はヨコナデ，ナデ調整を施す。**9～11**の天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋AⅢa (12)　屈曲した口縁部がやや内湾しながら垂直に下がるものである。口径9.4cm，器高2.9cmを測る。天井部は平坦で口縁端部は丸い。天井部外面は直線的なヘラ切り離しのあとナデ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋AⅢb (13)　屈曲した口縁部が外下方へ開くものである。口径10.0cm，器高3.3cmを測る。他の特徴はすべてAⅢaと同じである。

蓋AⅢc (14)　屈曲した口縁部がやや外反しながら垂直に下がるものである。口径10.0cm，器高3.0cmを測る。他の特徴はすべてAⅢaと同じである。

蓋B（Fig.102－15～20，PL.98－7～9）

口縁部内面にかえりを有し，つまみを付さないものである。蓋Bは法量により，Ⅰ(口径11.2～11.7cm，器高2.2cm)，Ⅱ（口径10.4cm，器高2.1cm)，Ⅲ（口径9.1～9.7cm，器高2.0～2.6cm)に区分する。更にⅠを，a)天井部外面静止ヘラケズリ調整を施すもの，b)天井部外面櫛目調整を施すもの，Ⅲを，a)天井部外面ヘラ切り離しのあとナデ調整を施すもの，b)天井部外面ヘラケズリ調整を施すものに細分できる。

蓋BⅠa (15)　天井部外面直線的なヘラ切り離しのあと静止ヘラケズリを施すものである。口径11.7cm，器高2.2cmを測る。天井部の平坦面が広い。体部は直線的で，やや外反する口縁部へと続く。口縁端部は丸い。内傾するかえりは短く，口縁端部より幾分下がる。かえり端部は細くて鋭い。天井部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋BⅠb (16)　天井部外面直線的なヘラ切り離しのあと櫛目調整を施すものである。口径11.2cm，器高2.2cmを測る。天井部の平坦面が広い。体部はやや内湾して，口縁部で外反して外下方へのびる。口縁端部は肥厚し丸い。内傾するかえりは口縁端部より内に入る。かえり端部は鋭い。天井部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋BⅡ (17)　天井部外面直線的なヘラ切り離しのあとていねいなナデ調整を施すもので，口径10.4cm，器高2.1cmを測る。天井部は平坦である。体部はわずかに内湾し，内湾気味に外反する口縁部と続く。口縁端部は丸い。内傾するかえりは短く，口縁端部と同じ高さとなる。かえり端部は鋭い。ヨコナデ，ナデ調整を施す。天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋BⅢa (18)　天井部外面ヘラ切り離しのあとナデ調整を施すもので，口径9.6cm，器高2.6cmを測る。天井部外面はヘラ切り離しが雑でいびつになる。体部は屈曲したあと直線的に短くのび外反する口縁部となる。口縁端部は丸い。内傾するかえりは口縁端部よりわずかに突出する。かえり端部は鋭い。ヨコナデ，ナデ調整を施す。天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋BⅢb (19・20)　天井部外面ヘラケズリ調整を施すもので，口径9.1～9.7cm，器高2.0～2.25cmを測る。天井部は平坦で狭く，全体的に山形となる。体部から口縁部までわずかに外反

しながら外下方へのびる。口縁端部は丸い。かえりは基部が口縁端部と同じ高さとなり，下方に突出する。かえり端部は鋭い。天井部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋C (Fig.102－21・22, PL.98－10)

口縁部内面にかえりを有し，天井部外面につまみを付すものである。蓋Cは天井部の形態によりa・bに細分する。

蓋Ca (21) 天井部が丸味をもつもので，口径14.9cm，器高3.3cmを測る。天井中央部に扁平な宝珠つまみを付す。体部はわずかに内湾しながら，口縁部で外反する。口縁部は外下方へのび，端部は丸い。かえりは内湾し，口縁端部よりわずかに下がる。かえり端部は丸い。天井部外面ヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋Cb (22) 天井部が扁平なもので，復元口径14.95cm，残存高1.95cmを測る。天井中央部を欠損するが，形態からみて宝珠つまみを付すものである。体部から口縁部まで直線的に外下方へのびる。口縁端部は丸い。かえりは短く内傾し，口縁端部より内にはいる。かえり端部は丸い。天井部外面直線的なヘラ切り離しのあとヘラ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

蓋D (Fig.102－53・54, PL.98－11・12)

杯以外のものに利用されたと思われるもので，法量によりⅠ・Ⅱに分ける。

蓋DⅠ (53) 復元口径14.7cm，器高3.75cmを測る。天井部は丸味をもち，体部から口縁部にかけわずかに内湾しながら外下方へのびる。端部は丸い。天井部外面カキ目調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。全体的に器壁は薄い。

蓋DⅡ (54) 口径9.5cm，器高3.4cmを測る。天井部は丸味をもつ。体部に凹線がめぐり，それより口縁部まで直線的に外下方へのびる。端部は丸い。天井部外面ヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

杯 (Fig.102－23～26・28～30・34～38, 103－39～52, PL.99)

30個体出土している。形態によりA・Bに大別できる。

杯A (Fig.102－23～26・28～30・34～38, 103－39～45, PL.99－1～8)

立ちあがりを有するものである。杯Aは法量によりⅠ（口径11.0～12.0cm，器高4.1～4.5cm），Ⅱ（口径9.3～10.3cm，器高2.6～3.9cm），Ⅲ（口径8.9cm，器高3.9cm），Ⅳ（口径8.9～9.1cm，器高2.3～2.9cm），Ⅴ（口径8.0～8.6cm，器高2.8～3.2cm）に区分する。更に天井部外面の調整により，a)ヘラケズリ調整，b)直線的ヘラ切り離しのあとナデ調整に細分できる。

杯AⅠa (23～26) 底部外面ヘラケズリ調整を施すもので，口径11.0～12.0cm，器高4.1～4.5cmを測る。底部は丸く，体部はゆるやかに内湾したあと外反する受部へ続く。受部端部は丸い。立ちあがりは内湾気味に内傾する。**24・26**が長く，**23・25**が短い。立ちあがり端部は丸い。底部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。**23・24**の底部外面にヘラ記号を有す。

杯AⅡa (30)　底部外面ヘラケズリ調整を施すもので，口径9.7cm，器高3.55cmを測る。底部は丸く，体部はゆるやかに内湾したあと外反する受部へ続く。受部端部は丸い。立ちあがりは細くて長く，内湾気味に内傾する。立ちあがりは細くて丸い。底部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。底部外面にヘラ記号を有す。

杯AⅡb (28・29・34～36)　底部外面直線的ヘラ切り離しのあとナデ調整を施すもので，口径9.3～10.3cm，器高2.6～3.9cmを測る。底部は平坦である。体部から受部まで直線的にのびるものと，内湾気味の体部から外反する受部をもつものがある。受部端部は丸い。立ちあがりは内湾気味に内傾するものと，短く内傾するものがある。立ちあがり端部は丸い。調整はヨコナデ，ナデ調整である。28・29・35・36の底部外面にヘラ記号を有す。

杯AⅢa (37)　底部外面ヘラケズリ調整を施すもので，口径8.9cm，器高3.9cmを測る。体部は大きく内湾し，受部で外反する。受部は水平にのび端部は丸い。立ちあがりは長く，わずかに内湾しながら内傾する。立ちあがり端部は丸い。底部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

杯AⅣb (39～42)　底部外面直線的ヘラ切り離しのあとナデ調整を施すもので，口径8.9～9.1cm，器高2.3～2.9cmを測る。底部は平坦で広い。体部は直線的で，受部は外上方へまっすぐのびるもの，外反するもの，内湾気味に外反するものがある。受部端部は丸い。立ちあがりは短く，受部端部と同じ高さか，わずかに突出するものである。立ちあがり端部は鋭い。調整はヨコナデ，ナデ調整を施す。39～42の底部外面にヘラ記号を有す。

杯AⅤa (38)　底部外面ヘラケズリ調整を施すもので，口径8.4cm，器高2.8cmを測る。底部は丸味をもつ。体部は内湾し，受部で外反する。受部は外上方へのび，端部は丸い。立ちあがりは内傾し，受部端部よりわずかに突出する。立ちあがり端部は丸い。底部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

杯AⅤb (43～45)　底部外面直線的ヘラ切り離しのあとナデ調整を施すもので，口径8.0～8.6cm，器高2.9～3.2cmを測る。底部は平坦である。体部は内湾し，受部で外反する。受部端部は丸い。立ちあがりはやや長く内傾する。立ちあがり端部は，44が細く鋭い他は丸い。底部外面の他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

杯B　(Fig.103－46～52，PL.99－9～12)

立ちあがりを有さないものである。法量により，Ⅰ（口径9.4～10.6cm，器高4.0～4.2cm），Ⅱ（口径10.8cm，器高3.35～3.4cm），Ⅲ（口径12.4cm，器高3.0cm）に区分する。

杯BⅠ (46～49)　口径に比し器高が高い。底部は平坦である。底部と体部の境が明確で，体部から口縁部にかけ内湾もしくは直線的に外上方へのびる。端部は丸い。47～49の体部外面には２条の沈線が走る。底部外面はていねいなヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

杯BⅡ (50・51)　底部は広く平坦である。口縁部は外上方へのび，50は外反気味に，51は内湾気味におさまる。端部は丸い。底部外面はヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

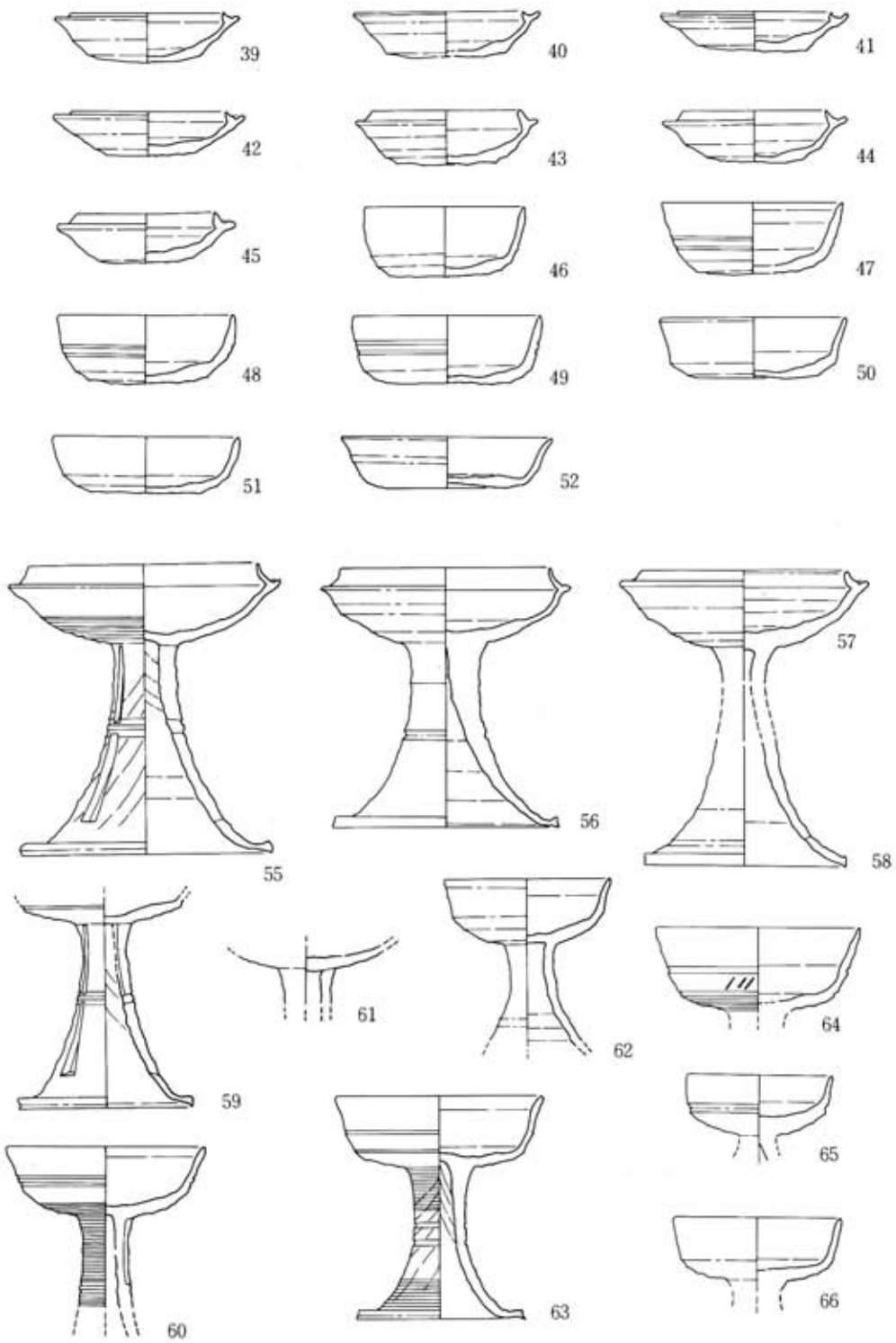


Fig. 103　藤附A遺跡出土須恵器実測図　(2)

杯BⅢ（52）　底部は広く平坦である。底部と体部の境は比較的明瞭で，口縁部は外反気味に外上方へのびる。端部は丸い。底部外面ヘラ切り離しのあとナデ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

高杯（Fig.103－55～66，PL.100－1～6）

11個体出土した。完形品が少なく不明瞭な点が多いが，形態によりA（有蓋），B（無蓋），C（有蓋か無蓋か不明）に大別する。更にa)透しの入るもの，b)透しが入らないもの，c)不明のものに細分する。

高杯Aa（55）　3方2段方形透しの有蓋高杯である。脚部は細い基部からラッパ状に開く。脚部中央に2条の沈線が走り，その上下に透しをつくる。杯底部外面にカキ目調整，他はヨコナデ調整を施す。脚部基部内面にシボリ痕を確認できる。

高杯Ab（56）　透しをもたない有蓋高杯である。脚部基部が太く脚部中央に凹線状の沈線が一条走る。杯部は底部内面ナデ調整，外面ヘラケズリ調整，他はヨコナデ調整を施す。脚部は内外面回転ナデ調整を施し，内面上半にシボリ痕が確認できる。

高杯Ac（57）　有蓋高杯で，脚部が欠損しているため透しの有無は不明である。56に比し杯部立ちあがりは低くまた脚基部は細いが，手法的には大差ない。

高杯Ba（60）　2方2段方形透しの無蓋高杯で，脚部下半を欠損する。杯体部でわずかに内湾し口縁部で外上方へ開く。体部には2条の沈線が走る。また脚部中央にも2条の沈線が走りその上下に透しを入れる。杯底部外面及び脚部にカキ目調整，杯底部内面ナデ，他はヨコナデ調整を施す。脚部上半の内面にシボリ痕が確認できる。

高杯Bb（62・63）　透しをもたない無蓋高杯である。62は脚裾部を欠損する。細い脚基部から裾部が大きく開く。杯底部外面ヘラケズリ調整，脚部外面カキ目調整のあとナデ消し，脚部内面回転ナデ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。63は杯底部が広く，体部外面に明瞭な2条の段をもつ。脚部中央に2条の沈線が走る。杯底部外面ヘラケズリ調整，脚基部及び裾部にカキ目調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。脚部内外面にシボリ痕を確認できる。

高杯Bc（64～66）　無蓋高杯の杯部である。いずれも脚部が欠損しているため透しの有無は不明である。64の杯底部と体部との境及び体部に2条の沈線が走り，その間に櫛描列点文を付す。底部外面はカキ目調整を施す。65の杯底部と体部との境に1条の沈線が走る。底部外面はヘラケズリ調整を施す。66の杯部は平底である。底部外面はヘラケズリ調整を施す。

高杯Ca（58・59・61）　透しのあるものである。杯部が欠損するため有蓋・無蓋の判断は困難である。59は3方2段方形透しの高杯で，杯底部と体部の境に1条の沈線が走る。また脚部中央にも2条の沈線が走り，その上下に透しを入れる。杯底部外面はヘラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。脚部内面上半にシボリ痕を確認できる。裾部外面にヘラ記号を有す。

58は２方方形透し，61は３方方形透しの高杯である。

甕（Fig.104－67～69，PL.100－9）

３個体出土した。67は短い頸部からそり気味に外反し，口縁部で外方に肥厚し段を成す。胴部は大きく張り球形となる。体部外面は格子目タタキのあとカキ目調整，内面は同心円タタキ調整を施す。68は大きく球形に張る胴部をもつ。体部外面は格子目タタキのあとカキ目調整を施す。内面肩部から胴部にかけ平行タタキ調整，底部はそのあとナデ調整を施す。69は短い頸部からそり気味に外反する口縁部へと続く。口縁部は肥厚し断面長方形となり，外面に１条の沈線が走る。頸部と肩部の境に小突帯がめぐる。口縁部外面肥厚部下より頸部にかけ櫛目調整のあとヨコナデ，他はヨコナデ調整を施す。

壺（Fig.104－70・71，PL.100－7）

３個体出土した。70の肩部はあまり張り出さず，２条の沈線間にやや長めの刻みを施す。底部は平底である。底部

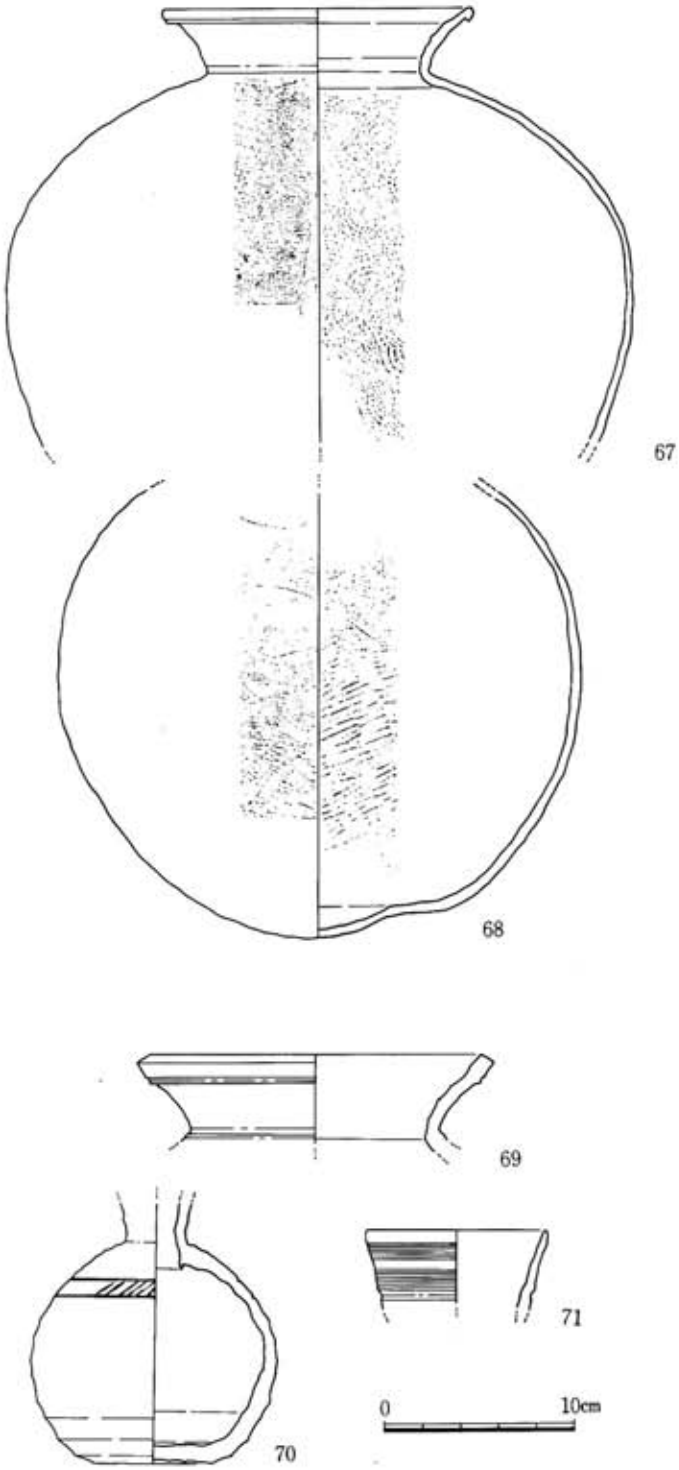


Fig. 104　藤附A遺跡出土須恵器実測図（3）

外面へラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。71は壺口頸部の上半で，外面に2区分したカキ目調整，その下ににぶい凹線を境として波状の刺突文，他はヨコナデ調整を施す。

甑（Fig.105－73～75・77）

5個体出土した。73～75は体部がやや扁平な球状となる。74・75の胴部と肩部との境には2条の沈線が走り，また75では沈線間に櫛描文を施す。ともに底部外面へラケズリ調整，他はヨコナデ調整を施す。77の口頸部はラッパ状に開き，口縁部と頸部の境ににぶい沈線を有す。頸部上端はカキ目調整，他はヨコナデ調整を施す。

平瓶（Fig.105－78～80，PL.100－8・10）

3個体出土した。形態によりA・Bに大別する。

平瓶A（78）　胴部と肩部の境が大きく屈曲し，体部上面中央に口頸部を付すものである。胴部外面カキ目調整，底部外面へラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

平瓶B（79・80）　体部はやや丸味をもち，体部上面の一方向に漏斗状の口頸部を付すものである。79は肩部に鍵状の小粘土粒を2個付す。口縁端部は丸い。口縁部と頸部の境に2条の沈線が走る。外面頸部から胴部にかけカキ目調整，底部外面へラケズリ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。80の口縁端部はやや凹面をなし平坦で，端部外面は面取りし稜をつくる。頸部と口縁部の境に2条，肩部に6条の沈線が走る。外面胴部下半から底部にかけへラケズリ調整，そのあと底部のみナデ調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

横瓶（Fig.106－81）

1個体出土した。俵型の体部をもつものである。口頸部は体部上面中央に付す。外面体部格子目タタキのあとカキ目調整，内面肩部に指頭押圧，体部同心円タタキのあとヨコナデ調整，他はヨコナデ調整を施す。

土師器（Fig.107，PL.101）

土師器はST002・ST004・ST007・ST008古墳から出土した。細片も多く総出土個体数は明確でないが，図示できたのが20個体であった。その内15個体がST007古墳石室前面出土である。器種としては台付壺・台付鉢・高杯・杯・蓋・皿・壺・甑・提瓶等である。個々の土器の出土地などは，Tab.17藤附A遺跡出土土師器一覧表を参照されたい。

台付壺（Fig.107－1，PL.101－1）

高台をもつ壺で内外面とも丹塗りを施す。胴部は膨みをもち，内湾する口縁部へと続く。口

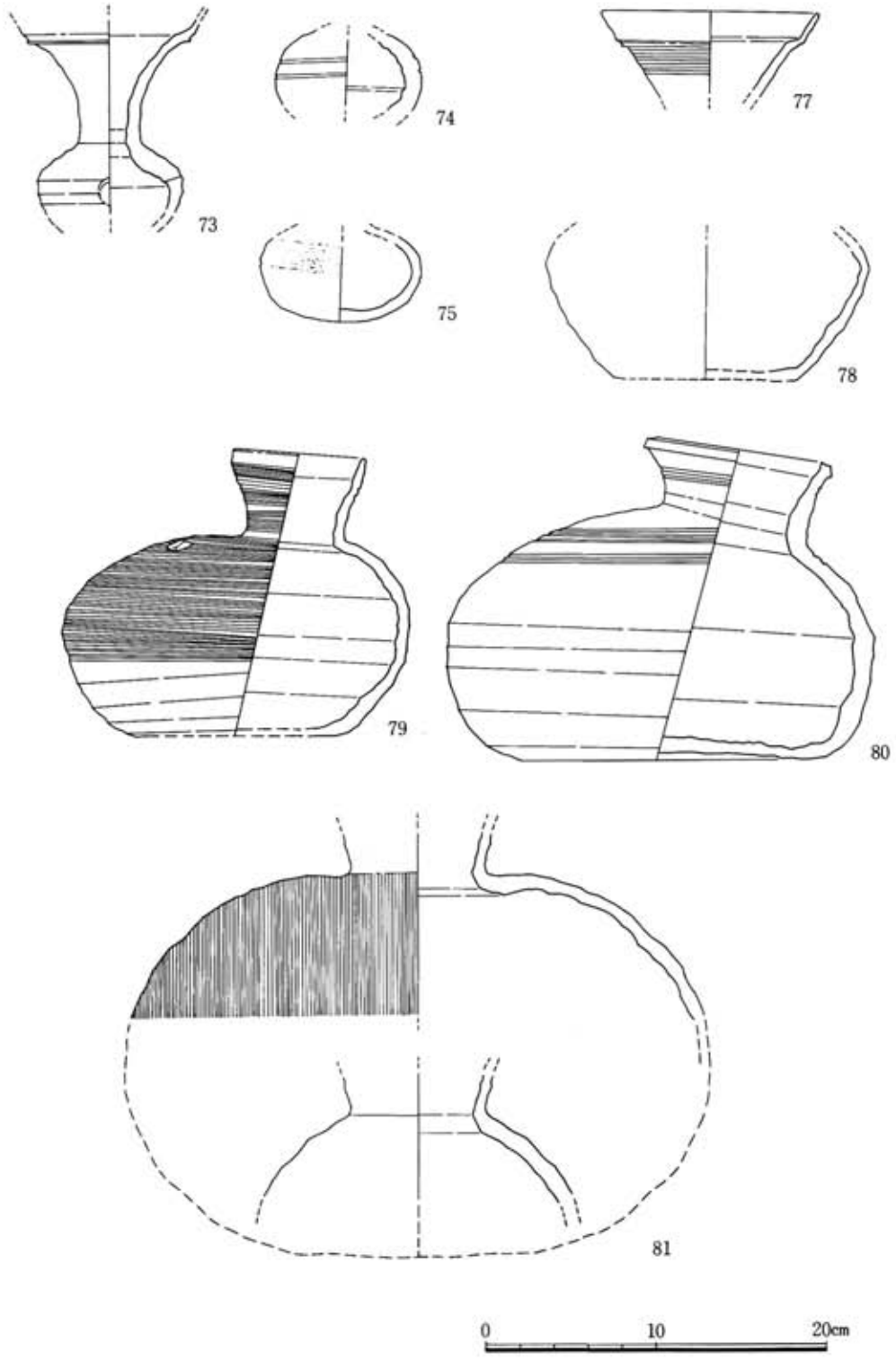


Fig. 105　藤附A遺跡出土須恵器実測図　(4)

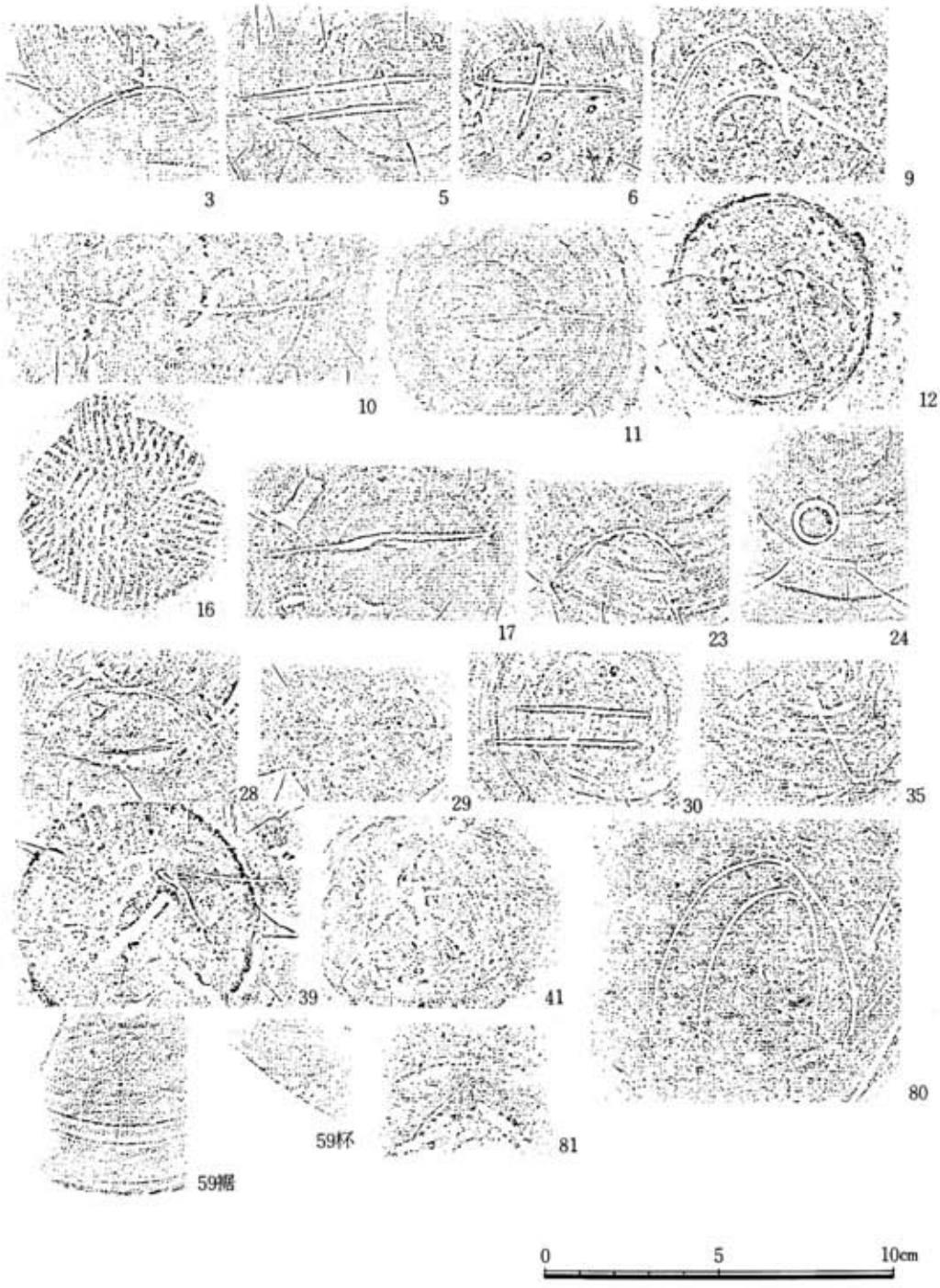


Fig. 106　藤附A遺跡出土須恵器ヘラ記号・調整拓影

縁部は須恵器杯の立ちあがりと類似する。台部はわずかに外反しながら外下方へのびる。外面胴部最大径部分より台部にかけ横方向のヘラミガキ調整，内面台裾部はハケ目調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

台付鉢（Fig.107－2～5，PL.101－2）

高台をもつ鉢で4個体出土した。口縁部が外上方へまっすぐのびるものと，わずかに外反するものがある。台部は外下方へ長くのびる。外面体部下半から台部にかけハケ目調整，他はヨコナデ，ナデ調整を施す。

高杯（Fig.107－6・7，PL.101－3・4）

3個体出土した。脚裾部の形態によりA・Bに大別する。

高杯A（6）　脚部は基部が細く，かつ短い。そして大きく外下方へ開き，裾部で外反して段をなす。内外面とも脚部へラミガキ調整，裾部ナデ調整を施す。

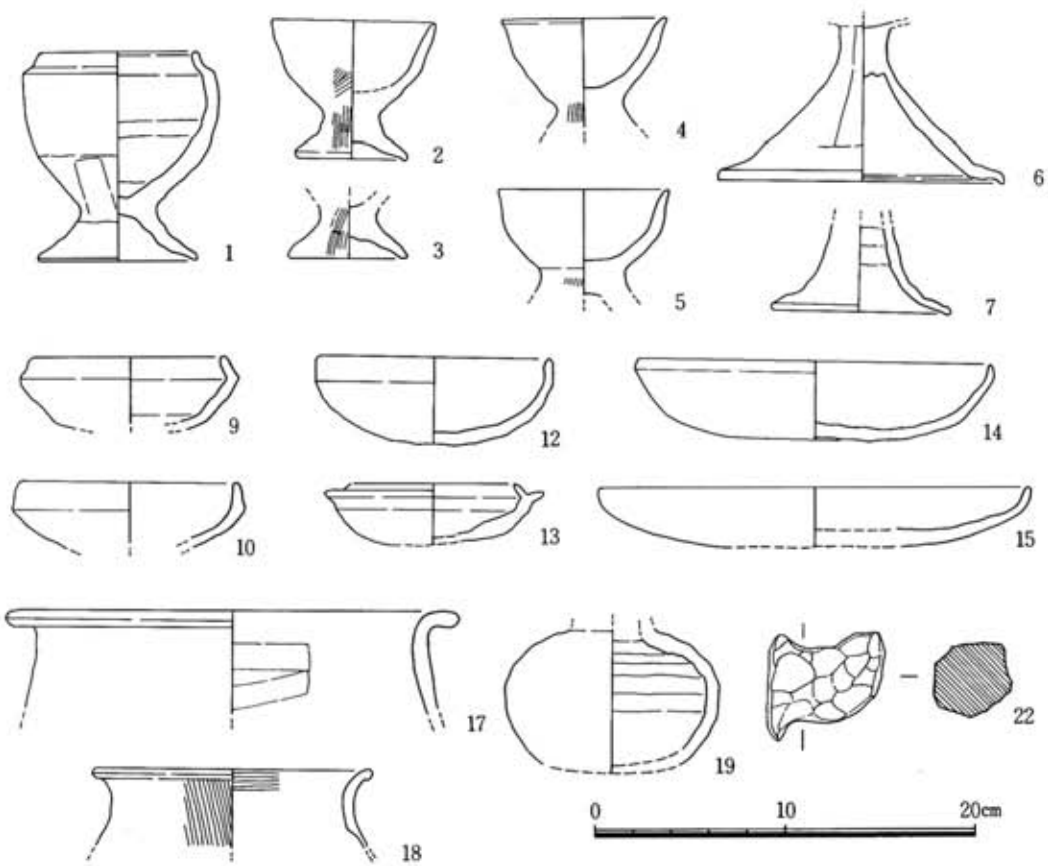


Fig. 107　藤附A遺跡出土土師器実測図

高杯B（7）　脚部が長く，裾部がラッパ状に開く。内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施し，内面に粘土積み上げの痕跡が残る。

杯（Fig.107－9・10・12・13，PL.101－5～7）

5個体出土した。形態によりA・B・Cに大別する。

杯A（9・10）　須恵器杯に類似するものである。内湾する体部は口縁部との境で稜をなし内傾または内湾する口縁部へと続く。9・10は内外面ともヘラミガキ調整を施す。11は底部外面ヘラケズリ調整，他はヨコナデ調整を施し，部分的に黒漆し痕が残る。

杯B（12）　全体的に厚手で椀形をなす。口縁部はほぼ直立する。内外面ともヘラミガキ調整を施す。

杯C（13）　立ちあがりをもつもので1個体出土した。色調は赤褐色で，形態と手法は須恵器と大略同様である。しかし全体的にシャープさに欠ける。いわゆる「赤焼き」の土器と呼ばれる類であるが，ここでは他に類例がなく，色調や胎土から土師器に入れた。

皿（Fig.109－14・15，PL.101－8・9）

3個体出土した。いずれも底部と体部の境が不明瞭である。口縁部の形態によりA・B・Cに大別する。

皿A（14）　口縁端部付近がわずかに直立するものである。口縁端部は薄くて丸い。内外面ともにナデ調整を施し，内面に暗文が残る。

皿B（15）　口縁部がゆるやかに屈曲し外上方へのびる。端部は丸い。剝離が激しい。

皿C（16）　体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら外上方へのびるものである。端部上面は平坦である。

甕（Fig.107－17）

1個体出土した。頸部は内湾し，口縁部で外反する。端部は丸い。頸部内面ヘラケズリ調整他はヨコナデ調整を施す。

壺（Fig.107－18）

図示できるものは1個体のみであった。口縁部は外反し，端部でわずかに肥厚して丸くおさまる。頸部外面は縦と斜め，口縁部内面は横方向のハケ目調整，また肩部内面はヘラケズリ調整を施す。

甑（Fig.107－19）

胴部は扁球状となる。外面は丹塗磨研で仕上げ，内面に粘土の輪積み痕が顕著である。

甑把手（Fig.107－22）

1個体出土した。指圧痕が明瞭に確認できる。

鉄器（Fig.108，PL.102－1～5）

藤附A遺跡の鉄器はすべてST008古墳石室出土である。器種としては鉄鏃・鉄矛・刀子・鉄刀などの武器である。個々の特徴については，Tab.14藤附A遺跡鉄器一覧表を参照されたい。

鉄鏃（Fig.108－1～12・18・19，PL.102－1・2）

細片も多く総数は不明であるが，図示できたのは19本である。形態によりA・Bに大別する。

鉄鏃A（1～6）

広根式鉄鏃に属するものである。更に鋒部の形態によりa・b・c・dに細分する。

鉄鏃Aa（1） 方頭斧箭式鉄鏃に属するもので茎部が欠損する。

鉄鏃Ab（2） 圭頭斧箭式鉄鏃に属するもので茎部が欠損する。

鉄鏃Ac（3・5） 両丸造腹抉柳葉式鉄鏃に属するものである。3はほぼ完形で，茎部に木質が残存する。5は鋒部のみ残存する。

鉄鏃Ad（4・6） 両丸造柳葉式鉄鏃に属するものである。4はほぼ完形，6は鋒部と篦被部の一部が残存する。

鉄鏃B（7～12・18・19）

尖根式鉄鏃に属するものである。更に鋒部の形態によりa・bに細分する。

鉄鏃Ba（7～12） 篦被片刃箭式鉄鏃に属するもので図示可能なものが11本出土し，総出土数の半数以上を占めた。7がほぼ完形で，8～12が茎部の一部を欠損する。身長2.1～3.4cm，身幅0.55～0.85cm，篦被長8.0～9.05cmを測る。7・8・10・11・12の茎部に木質が残る。また8・11の茎部の基部に木皮が残存する。

鉄鏃Bb（18・19） 片丸造篦被柳葉式に属すものでほぼ完形に近い。18が19に比し多少大型である。茎部に木質が残存し，更に木皮も確認できる。

鉄矛（Fig.108－20，PL.102－3）

袋部の基部がわずかに欠損する。残存全長28.5cm，身長14.1cmを測る。鎬が明瞭である。袋部断面は円形である。

刀子（Fig.108－21～23，PL.102－5）

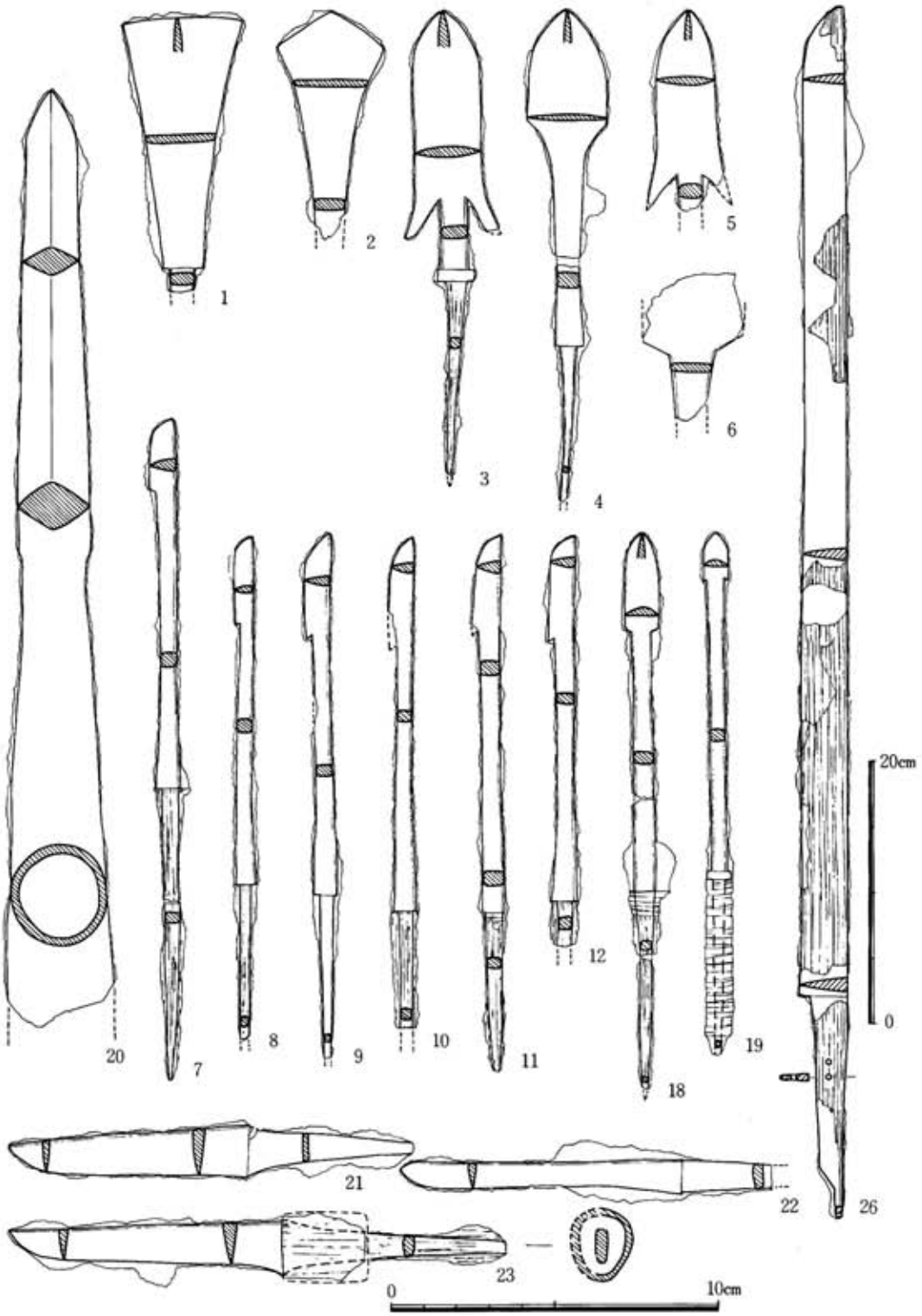


Fig. 108　藤附A遺跡出土鉄器実測図

21～23は茎部の先端を欠損するのみで，ほぼ完形である。22は細身で茎部に木質が残る。23は関部に幅2.6cm，断面長径2.2cm，短径1.9cmの環を着装しており，また木質も残る。

鉄刀（Fig.108－26，PL.102－4）

直刀で全長92.9cm，茎長17.1cm，身幅3.65～3.7cmを測る。目釘は関部寄りに2カ所付す。刃渡は75.8cmで，全面に鞘と思われる木質の痕跡が認められる。

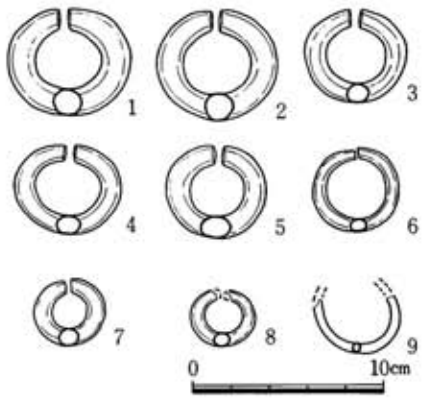


Fig. 109　藤附A遺跡出土耳環実測図

Tab. 14　藤附A遺跡出土鉄器一覧表

（）は残存

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 cm					特徴及び遺存状況
					全長	身長	茎長	身幅	篦被長	
1	鏃	Fig108 PL101	Aa	ST008古墳玄室	(7.9)	7.65		3.65		平根方頭斧箭式，鋒部のみ残存。
2	〃	Fig108 PL101	Ab	〃	(6.9)			3.2		平根圭頭斧箭式，鋒部のみ残存。
3	〃	Fig108 PL101	Ac	〃	(14.25)	6.25	(5.95)	2.9	2.55	平根両丸造腹抉柳葉式，茎部先端欠損，茎部に木質残存。
4	〃	Fig108 PL101	Ad	〃	(15.0)	4.45	(4.75)	2.4	(5.8)	平根両丸造柳葉式，篦被中央及び茎部先端欠損，篦被が長い。
5	〃	Fig108 PL101	Ac	〃	(6.1)	(6.1)		1.8		平根両丸造腹抉柳葉式，鋒部及び篦被一部残存，腹抉の先端欠損。
6	〃	Fig108 PL101	Ad	〃	(4.5)					平根両丸造柳葉式，鋒部と篦被の境一部残存。
7	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	20.1	2.2	8.95	0.8	9.05	尖根式篦被片刃箭式，茎部木質残存。
8	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	(15.4)	2.7	(4.7)	0.55	8.0	尖根式篦被片刃箭式，茎部の先端欠損，茎部の基部に木皮残存。
9	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	(16.1)	3.4	(5.0)	0.85	8.0	尖根式篦被片刃箭式，茎部の先端欠損。
10	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	(15.0)	(3.4)	(3.6)	0.8	8.15	尖根式篦被片刃箭式，茎部下半及び鋒部一部欠損。茎部に木質残存。
11	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	(16.4)	(3.0)	(4.9)	0.85	8.5	尖根式篦被片刃箭式，茎部先端及び鋒部一部欠損。茎部の基部に木皮残存。
12	〃	Fig108 PL101	Ba	〃	(12.5)	3.2	(1.4)	0.85	8.05	尖根式篦被片刃箭式，茎部基部のみ残存。茎部に木質残存。
13	〃		Ba	〃	(13.2)	2.1	(3.2)	0.85	(8.1)	尖根式篦被片刃箭式，篦被中央部及び茎部先端欠損。
14	〃		Ba	〃	(10.9)	(2.9)	(0.85)	0.65	(6.8)	尖根式篦被片刃箭式，篦被中央部欠損。茎部基部残すのみ。
15	〃		Ba	〃	(10.0)	(2.5)		0.75	(7.5)	尖根式篦被片刃箭式，鋒部一部篦被最下端及び茎部欠損。
16	〃		Ba	〃	(5.5)	2.75		0.75	(2.8)	尖根式篦被片刃箭式，鋒部及び篦被上半残存。
17	〃		Ba	〃	(13.9)		(7.7)		(6.2)	鋒部欠損。
18	〃	Fig108 PL101	Bb	〃	(16.9)	2.95	(6.0)	1.15	7.95	尖根片丸造篦被柳葉式，茎部先端欠損。茎部基部に木皮残存。
19	〃	Fig108 PL101	Bb	〃	15.95	1.5	5.3	0.8	9.1	尖根片丸造篦被柳葉式，茎部先端欠損。茎部に木皮残存。
20	矛	Fig108 PL101		〃	(28.5)	14.1				鋒は明瞭。袋部の基部欠損。袋部断面は円形。
21	刀子	Fig108 PL101		〃	(12.3)	7.25	(5.05)			茎部先端欠損。
22	〃	Fig108 PL101		〃	(11.3)	8.55	(2.75)			茎部下半欠損，木質残存。
23	〃	Fig108 PL101		〃	(15.0)	8.35	(6.65)			茎部先端欠損。木質残存，関部に環を着装。
24	〃			〃	(10.3)	4.7	(5.6)			鋒部先端欠損。
25	〃			〃	(6.5)	5.1	(1.4)			鋒部及び茎部先端欠損。
26	刀	Fig108 PL101		〃	92.9	75.8	17.1			関部に近く目釘穴2個有る。全面に鞘の木質残存。

Tab. 15　藤附A遺跡出土耳環一覧表

番号	挿図・図版番号	出土地点	法量 (cm) 環部径	法量 (cm) 断面径	備考
1	Fig109　PL101	ST008古墳	2.9×3.2	0.7	
2	Fig109　PL101	ST008　〃	2.9×3.2	0.7	
3	Fig109　PL101	ST008　〃	2.5×2.6	0.52	金箔が内側に残る。
4	Fig109　PL101	ST008　〃	2.3×2.8	0.45	
5	Fig109　PL101	ST008　〃	2.45×2.6	0.55×0.75	
6	Fig109　PL101	ST008　〃	2.25×2.25	0.35	
7	Fig109　PL101	ST002　〃	1.75×1.9	0.48	
8	Fig109　PL101	ST002　〃	1.45×1.65	0.35	金箔の残り良い。一部欠損。
9	Fig109　PL101	ST008　〃	2.1	0.15×0.2	約3分の1欠損。
10		ST002　〃	1.7×1.8	0.5	金箔が内側に残る。

装身具（Fig.109，PL.102－6）

藤附A遺跡からは耳環が出土した。ST002古墳石室から3個，ST008古墳石室から7個である。

耳環（Fig.109－1～9，PL.102－6）

10個のうち**1～7**が完形で，**8**が突合わせ部，**9**が全体の約3分の1を欠損する。**3**・**8**は金箔が残存する。

以上が古墳時代の遺物である。時期の決定にあたっては，最も研究が進んでいる須恵器蓋・杯を中心に，北部九州に於ける編年と陶邑古窯址群に於ける編年を参考にして行った。

藤附A遺跡出土の須恵器蓋・杯(注①②)はともに各26個体であった。(注③)当遺跡の時期が蓋・杯の混乱期にあたり，区別のつけがたいものがあったが，法量及び形態の特徴から，次の関係を想定した。

	〈蓋〉	〈杯〉
1段階	AⅠa ……	(　　)
2段階	AⅠb，AⅡa・b・c ……	AⅠa
3段階	AⅢ ……	AⅡa・b，AⅢ，AⅣb，AⅤa・b
4段階	BⅠa・b，BⅡ，BⅢa・b ……	BⅠ，BⅡ，BⅢ
5段階	Ca・b ……	(　　)

1段階の蓋AⅠaは大型の類で口径14.6cm，器高4.3cmを測る。これに対応する杯は出土しなかった。2段階の蓋・杯ともに口径11cm前後のもので，天井部・底部はいずれも平坦面をなしており，調整はヘラケズリである。3段階の天井部及び底部の調整は杯AⅡa（30），AⅢa（37），AⅤa（38）のヘラケズリをのぞいてすべて直線的なヘラ切り離しである。蓋AⅢは口径9cm前後

で器壁が薄くいびつで製作上の技術的粗雑さが目立つ。3段階の杯には口径9cm前後のものと口径8cm前後のものがあり，器形の小型化とともに立ちあがりが極端に低くなる。なお蓋AⅢ（12～14）と杯AⅣb（39・40）のヘラ記号は同一である。4段階は，杯が蓋受けの立ちあがりをもたず，逆に蓋が内面にかえりをもつ杯・蓋逆転の時期である。杯・蓋にはともに口径11cm前後のものと，口径9cm前後のものとがある。調整は杯底部BⅠ・BⅡがヘラケズリ，BⅢが直線的なヘラ切り離しを行う。蓋天井部はBⅠa・BⅠb・BⅡ・BⅢa・BⅢbのすべてが直線的なヘラ切り離しで，そのあとBⅠa・BⅠbが静止ヘラケズリとカキ目調整をそれぞれ行う。蓋BⅢbがヘラケズリで天井部が狭く，小山状となり，かえりは下方に突出する。この段階に一般的に見られるつまみは当遺跡では出土しなかった。5段階は蓋Ca・Cbのみで，これに対応する杯の出土は見ることができなかった。

次いで，当遺跡の各段階を北部九州編年と陶邑編年に対応させた。

〈藤附A遺跡〉	〈北部九州〉	〈陶邑〉
第1段階……		
第2段階……	Ⅳ型式……Ⅱ型式	5～6段階
第3段階……		
第4段階……Ⅴ型式……Ⅲ型式		1段階
第5段階……Ⅵ型式……Ⅲ型式		2～3段階

このことから第1～第3段階が6世紀後半，第4段階が7世紀前半，第5段階が7世紀後半に比定できよう。

須恵器蓋・杯以外の器種については，これらと共伴するものであり，時期的に大差ないものと考える。

（註）

(1) 「野添・大浦窯跡群」 福岡県文化財調査報告書第43集 福岡県教育委員会 1970

(2) 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」ⅩⅦ 福岡県教育委員会 1977

(3) 「陶邑古窯址群1」 1966

Tab. 16　藤附A遺跡出土須恵器一覧表

法量　①口　径　②器　高　③受部最大径　④立ちあがり高　⑤かえり径　⑥かえり高　⑦頸　部　径　⑧胴　部　径　⑨つまみ径　⑩脚　部　径　※○′は復元法量，残存高

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法　量（cm）	ロクロ回転	ヘラ記号	色　調
1	蓋	Fig102	AIa	ST007 古墳	①14.6 ②4.3	右		内面灰色，外面灰褐色。
2	蓋	Fig102 PL98	AIb	A 地区 表土	①12.4 ②2.9	右		暗灰褐色。
3	蓋	Fig102 PL98	AIIa	ST007 古墳	①11.8 ②4.2	右	有	灰色，外面一部暗灰褐色。
4	蓋	Fig102	AIIa	ST007 古墳	①11.8 ②3.5	右		内面灰褐色，外面暗灰色。
5	蓋	Fig102 PL98	AIIb	ST007 古墳	①11.6 ②3.3	右	有	内面暗褐色，外面褐色。
6	蓋	Fig102	AIIb	ST007 古墳	①′11.0 ②′2.45	左	有	暗褐色。
7	蓋	Fig102	AIIc	ST007 古墳	①10.45 ②3.65	左		灰　色。
8	蓋	Fig102	AIIc	ST007 古墳	①11.3 ②3.6	左		黒褐色。
9	蓋	Fig102 PL98	AIIc	ST007 古墳	①11.0 ②3.1	左	有	灰白色，外面一部黒色。
10	蓋	Fig102	AIIc	ST007 古墳	①10.8 ②3.6	左	有	暗褐色。
11	蓋	Fig102 PL98	AIIc	ST007 古墳	①11.2 ②3.9	左	有	灰白色。
12	蓋	Fig102	AIIIa	ST002 古墳	①9.4 ②2.9	左	有	内面暗灰色，外面青黒色。
13	蓋	Fig102	AIIIb	ST002 古墳	①10.0 ②3.3	左	有	黒色，外面一部灰かぶり。
14	蓋	Fig102 PL98	AIIIc	ST002 古墳	①10.0 ②3.0	左	有	内面暗褐色，外面青灰色 外面一部灰かぶり。
15	蓋	Fig102 PL98	BIa	ST002 古墳	①11.7 ②2.2 ⑤9.6 ⑥0.2	右		内面黒灰色，外面黄灰色。
16	蓋	Fig102	BIb	ST002 古墳	①11.2 ②2.2 ⑤9.2 ⑥0.18	左	有	内面黒青色，外面灰白色。
17	蓋	Fig102 PL98	BII	ST007 古墳	①10.4 ②2.1 ⑤8.4 ⑥0.2	左	有	暗褐色。
18	蓋	Fig102	BIIIa	ST007 古墳	①9.6 ②2.6 ⑤7.9 ⑥0.18	右	有	黒灰色，一部赤褐色。
19	蓋	Fig102	BIIIb	ST002 古墳	①9.7 ②2.0 ⑤8.2 ⑥0.4	右		黒灰色，一部赤褐色。
20	蓋	Fig102 PL98	BIIIb	ST002 古墳	①9.1 ②2.25 ⑤7.7 ⑥0.3	右		黒灰色，一部赤褐色。
21	蓋	Fig102 PL98	Ca	ST002 古墳	①14.9 ②3.3 ⑤12.7 ⑨2.0	右		黄灰色。
22	蓋	Fig102	Cb	G 地区 表土	①′14.95 ②′1.95 ⑤′12.8			青灰色。
23	杯	Fig102 PL98	AIa	ST007 古墳	①11.0 ②4.2 ③13.1 ④0.55	右	有	灰　色。
24	杯	Fig102	AIa	D 地区 表土	①11.5 ②4.1 ③13.6 ④0.9	右	有	灰褐色。
25	杯	Fig102	AIa	D 地区 表土	①11.5 ②4.35 ③13.9 ④0.8	右		青灰色。
26	杯	Fig102 PL98	AIa	ST007 古墳	①12.0 ②4.5 ③14.5 ④1.1	左		黒褐色。
27	杯		AI	ST008 古墳	①′11.4 ③′13.5 ④′1.0			暗青灰色。
28	杯	Fig102	AIIb	ST007 古墳	①9.5 ②3.0 ③12.3 ④0.8	左	有	内面暗灰色，外面灰褐色。
29	杯	Fig102 PL99	AIIb	ST007 古墳	①9.6 ②3.4 ③11.1 ④0.8	左	有	黒青色，外面灰かぶり。
30	杯	Fig102	AIIa	ST007 古墳	①9.7 ②3.55 ③12.1 ④0.65	右	有	灰褐色。
31	杯		AII	ST004 古墳	④′1.0			灰褐色。
32	杯		AII	ST005 古墳	④′0.7			内面灰色，外面灰褐色。
33	杯		AII	ST003 古墳	④′0.75			内面灰褐色，外面暗灰色。
34	杯	Fig102	AIIb	ST007 古墳	①9.3 ②3.9 ③11.65 ④0.5	右		灰　色。
35	杯	Fig102	AIIb	ST007 古墳	①10.3 ②2.6 ③12.3 ④0.5	左	有	内面灰色，外面青灰色。
36	杯	Fig102 PL99	AIIb	ST007 古墳	①9.8 ②3.1 ③12.2 ④0.6	左	有	暗灰色。
37	杯	Fig102 PL99	AIIIa	ST007 古墳	①8.9 ②3.9 ③11.2 ④0.7	左		内面褐色，外面暗褐色。
38	杯	Fig102	AVa	ST007 古墳	①8.4 ②2.8 ③11.4 ④0.5	左		灰白色。
39	杯	Fig103 PL99	AIVa	ST002 古墳	①9.0 ②2.9 ③10.8 ④0.4	左	有	赤褐色，外面一部黒色
40	杯	Fig103	AIVb	ST002 古墳	①9.0 ②2.7 ③10.9 ④0.22	左	有	暗灰色，外面一部黒色。

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法　　量（cm）	ロクロ回転	ヘラ記号	色　　調
41	杯	Fig103	AⅣb	ST007 古墳	①8.9 ②2.3 ③11.0 ④0.31	左	有	黒青灰色。
42	杯	Fig103	AⅣb	ST007 古墳	①9.1 ②2.6 ③11.2 ④0.4	右	有	暗赤褐色。
43	杯	Fig103 PL99	AVb	ST007 古墳	①8.6 ②3.2 ③10.7 ④0.55	左		内面暗灰色，外面灰色，外面一部灰かぶり。
44	杯	Fig103 PL99	AVb	ST007 古墳	①8.4 ②3.0 ③10.9 ④0.4	右		褐色。
45	杯	Fig103	AVb	ST007 古墳	①8.0 ②2.9 ③10.5 ④0.6	右		灰　色。
46	杯	Fig103 PL99	BⅠ	ST007 古墳	①9.4 ②4.1	左		青灰色，外面一部黒色。
47	杯	Fig103 PL99	BⅠ	ST007 古墳	①10.6 ②4.2	左		灰白色。
48	杯	Fig103	BⅠ	ST007 古墳	①10.2 ②4.1	左		乳白色。
49	杯	Fig103	BⅠ	ST007 古墳	①11.0 ②4.0	左		灰色，外面一部黒色。
50	杯	Fig103 PL99	BⅡ	ST002 古墳	①10.8 ②3.4	左		青灰色，外面一部灰かぶり。
51	杯	Fig103	BⅡ	ST002 古墳	①10.8 ②3.35	左		内面暗灰色，外面灰色，外面一部灰かぶり。
52	杯	Fig103 PL99	BⅢ	ST007 古墳	①12.4 ②3.0	右		内面青灰色，外面黒灰色。
53	蓋	Fig102 PL98	DⅠ	ST007 古墳	①14.7 ②3.75		有	黒灰色。
54	蓋	Fig102 PL98	DⅡ	ST007 古墳	①9.5 ②3.4	左		灰　色。
55	高杯	Fig103 PL100	Aa	ST007 古墳	①13.3 ②17.0 ⑩14.7			灰　色。
56	高杯	Fig103 PL100	Ab	ST007 古墳	①12.2 ②15.2 ⑩13.2			黒灰色。
57	高杯	Fig103	Ac	ST007 古墳	①11.9 ②′6.6			灰白色。
58	高杯	Fig103	Ca	ST007 古墳	②7.5 ⑩11.8			内面灰白色，外面黒灰色。
59	高杯	Fig103 PL100	Ca	ST007 古墳	②′12.5 ⑩10.2			灰褐色。
60	高杯	Fig103	Ba	ST007 古墳	①11.6 ②′9.5			内面暗灰色，外面黒灰色と灰白色
61	高杯	Fig103	Ca	ST007 古墳	②′3.5			灰　色。
62	高杯	Fig103	Bb	ST007 古墳	①9.8 ②′9.8			暗灰色と灰白色の混。
63	高杯	Fig103 PL100	Bb	ST007 古墳	①12.2 ②13.1 ⑩9.8			黒灰色。
64	高杯	Fig103	Bc	ST007 古墳	①12.0 ②′4.9			灰褐色。
65	高杯	Fig103 PL100	Bc	ST002 古墳	①8.4 ②′3.55	右		黒灰色。
66	高杯	Fig103 PL100	Bc	ST002 古墳	①9.6 ②′3.65	右		内面黒灰色，外面青灰色。
67	甕	Fig104 PL100		ST007 古墳	①24.4 ②′34.0 ⑦17.6 ⑧49.7			黒灰色。
68	甕	Fig104		ST007 古墳	②′35.6 ⑧41.1			黒灰色。
69	甕	Fig104		J 地区 表土	①17.4 ②′5.0 ⑦13.2			青灰色。
70	壺	Fig104 PL100		ST007 古墳	②′13.2 ⑦3.1 ⑧13.0	左		暗褐色。
71	壺	Fig104		D 地区 表土	①9.4 ②′4.3	右		暗灰色。
72	壺			ST007 古墳	②′8.2 ⑦8.8 ⑧16.4	右		灰　色。
73	甑	Fig105		ST007 古墳	②′11.5 ⑦2.7 ⑧8.6			暗灰色，外面一部黒色，外面灰かぶり。
74	甑	Fig105		ST007 古墳	②′4.6 ⑧′8.6	左		暗灰色。
75	甑	Fig105		ST003 古墳	②′5.0 ⑧′9.5	右		灰白色。
76	甑	Fig105		D 地区 表土	②′4.9 ⑧′11.3	左		暗灰色。
77	甑	Fig105		ST004 古墳	①12.5 ②′5.0			青灰色。
78	平瓶	Fig105	A	D 地区 表土	②′8.0 ⑧′19.0	左		灰褐色。
79	平瓶	Fig105 PL100	B	ST007 古墳	①7.7 ②16.5 ⑦5.7 ⑧20.4	右		青灰色，一部黒色
80	平瓶	Fig105 PL100	B	ST007 古墳	①9.8 ②17.7 ⑦8.6 ⑧25.2	左	有	灰白色
81	横瓶	Fig105		ST007 古墳	②′8.8 ⑦7.9 ⑧34.0		有	内面灰色，外面灰白色，一部黒色。

Tab. 17　藤附A遺跡出土土師器一覧表

法量{①口　径　②器　高　③高台径　④胴部最大径　⑤台部径　⑥受部最大径　⑦立ちあがり高　※　〇′は復元法量，残存高}

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	色調
1	台付壺	Fig 107　PL 101		ST007 古墳	①8.3 ②10.9 ③8.4 ④10.4	淡乳白色。
2	台付鉢	Fig 107　PL 101		ST007 古墳	①8.6 ②7.25 ⑤5.6	赤褐色。
3	台付鉢	Fig 107		ST007 古墳	②′2.9 ⑤6.2	赤褐色。
4	台付鉢	Fig 107		ST007 古墳	①8.75 ②′5.8	赤褐色。
5	台付鉢	Fig 107		ST007 古墳	①9.0 ②′5.5	赤褐色。
6	高杯	Fig 107　PL 101	A	ST007 古墳	②′8.4 ⑤15.2	赤褐色。
7	高杯	Fig 107　PL 101	B	ST007 古墳	②′4.6 ⑤9.2	淡褐色。
8	高杯		B	ST004 古墳	②′2.3 ⑤′9.6	黄褐色。
9	杯	Fig 107	A	ST007 古墳	①′9.9 ②′3.8	赤橙色。
10	杯	Fig 107　PL 101	A	ST007 古墳	①′11.4 ②′3.5	赤橙色。
11	杯		A	ST008 古墳		淡褐色。
12	杯	Fig 107　PL 101	B	ST007 古墳	①12.6 ②4.6	淡褐色。
13	杯	Fig 107　PL 101	C	ST007 古墳	①8.8 ②3.3 ⑥11.7 ⑦0.6	赤褐色。
14	皿	Fig 107　PL 101		ST007 古墳	①′18.8 ②5.1	淡橙色。
15	皿	Fig 107　PL 101		ST002 古墳	①′22.5 ②′3.15	淡橙色。
16	皿			ST002 古墳		赤橙色。
17	甕	Fig 107		G地区 表土	①′23.9 ②5.0	内面淡橙色，外面淡褐色。
18	壺	Fig 107		ST008 古墳	①′14.8 ②′4.15	淡褐色。
19	甑	Fig 107		ST007 古墳	②′6.3　③′11.3	赤橙色。
20	提瓶	PL 101		ST007 古墳	①′12.3 ③′12.2	褐色。
21	提瓶			ST007 古墳	①′13.5 ③′13.6	赤橙色。
22	甑	Fig 107		A地区 表土	長さ6.2　中央幅4.0	赤褐色。

(4) 歴史時代

藤附A遺跡における歴史時代の遺構は掘立柱建物跡6棟，溝13条，土壙41基，近世甕棺墓2基であった。遺物はこれらの遺構に伴い，あるいは表土から出土したものである。ここでは当遺跡出土の遺物を一括して杯・椀・鉢・擂鉢・土鍋・羽釜・壺・甕棺に分けその特徴を述べることにする。個々の土器の出土地などは，Tab. 18藤附A遺跡出土歴史時代土器一覧表を参照されたい（Fig. 110・111）

杯（Fig. 110－1～4・7～9）

土師器杯で総出土数は40個体以上にのぼるが，そのうちで残りの良いもの16個体について図示を試みた。更に復元可能なものについて分類を行い，法量によりⅠ・Ⅱ・Ⅲに区分した。

杯Ⅰ（1）　器高が口径の2分の1以上になるもので，復元口径7.1cm，器高4.25cm，底径4.0cmを測る。体部が内湾して丸味をもち，口縁部はわずかに外上方へのびる。底部外面には糸切り離し痕と棒状圧痕が残る。他は内外面ヨコナデ調整を施す。

杯Ⅱ（2～4）　器高が口径の3分の1以下になるもので，復元口径9.9～11.2cm，器高2.65～3.25cmを測る。外上方へ大きくのびる体部から口縁部で外反するものと，まっすぐのびるものがある。底部外面に糸切り離し痕が残る。他は内外面ヨコナデ調整を施す。

杯Ⅲ（7～9）　器高が口径の3分の1以下になり，Ⅱより小型のものである。復元口径5.6～6.3cm，器高1.5～1.9cmを測る。体部から口縁部にかけゆるやかに内湾しながら外上方へのびる。底部外面に糸切り離し痕が残る。他は内外面ヨコナデ調整を施す。

椀（Fig. 110－17）

瓦器の椀で1個体出土した。底部はゆるやかな丸味をもち，低い貼り付け高台を有す。底部外面はヘラケズリ調整，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。

鉢（Fig. 110－18～22）

土師質土器で，総出土数は不明だが図示可能なものが16個体あった。そのうちで残りの良いものについて分類を行い，口縁部の形態によりA・Bに大別する。

鉢A（18・21）　口縁部がわずかに内湾するもので，復元口径30.0～43.34cmを測る。底部と体部の境は「く」字に屈曲し，体部は内湾またはわずかに外反する。18の体部外面及び内面，21の内面にハケ目調整，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。体部外面に煤が付着する。

鉢B（19・20・22）　口縁部が外反するもので，復元口径23.2～36.8cmを測る。底部と体部の境は「く」字に屈曲し，体部はわずかに内湾する。19の内外面，21と22の内面にハケ目調整，他はナデ調整を施す。体部外面に煤が付着する。

擂鉢（Fig. 111－33～36）

4個体出土した。33と34は瓦質土器，35と36は土師質土器である。33は復元口径30.8cm，器高13.15cmを測る。体部から口縁部にかけて内湾気味に外上方へのび端部に近づくに従い肥厚する。内面ハケ目調整のあと櫛描する。体部外面に指圧痕，底部外面に板目圧痕が残る。34は復元口径25.2cm，器高12.8cmを測る。形態は33と同じで，内面ハケ目調整のあと櫛描する。外面ハケ目調整を施し，指圧痕も残る。35は底部のみ残存する。内面ナデ調整のあと同心円文タタキ，外面ハケ目調整を施す。36は体部下半のみ残存する。内面ハケ目調整のあと櫛描，外面ハケ目調整を施し，指圧痕も残る。外面に煤が付着する。

土鍋（Fig. 111－37）

形態を同じくする土師質土器の2個体が出土した。残りの良い37について図示を試みた。復元口径27.7cmを測る。底部と体部の境は屈曲気味に内湾し，口縁部までまっすぐのびる。口縁

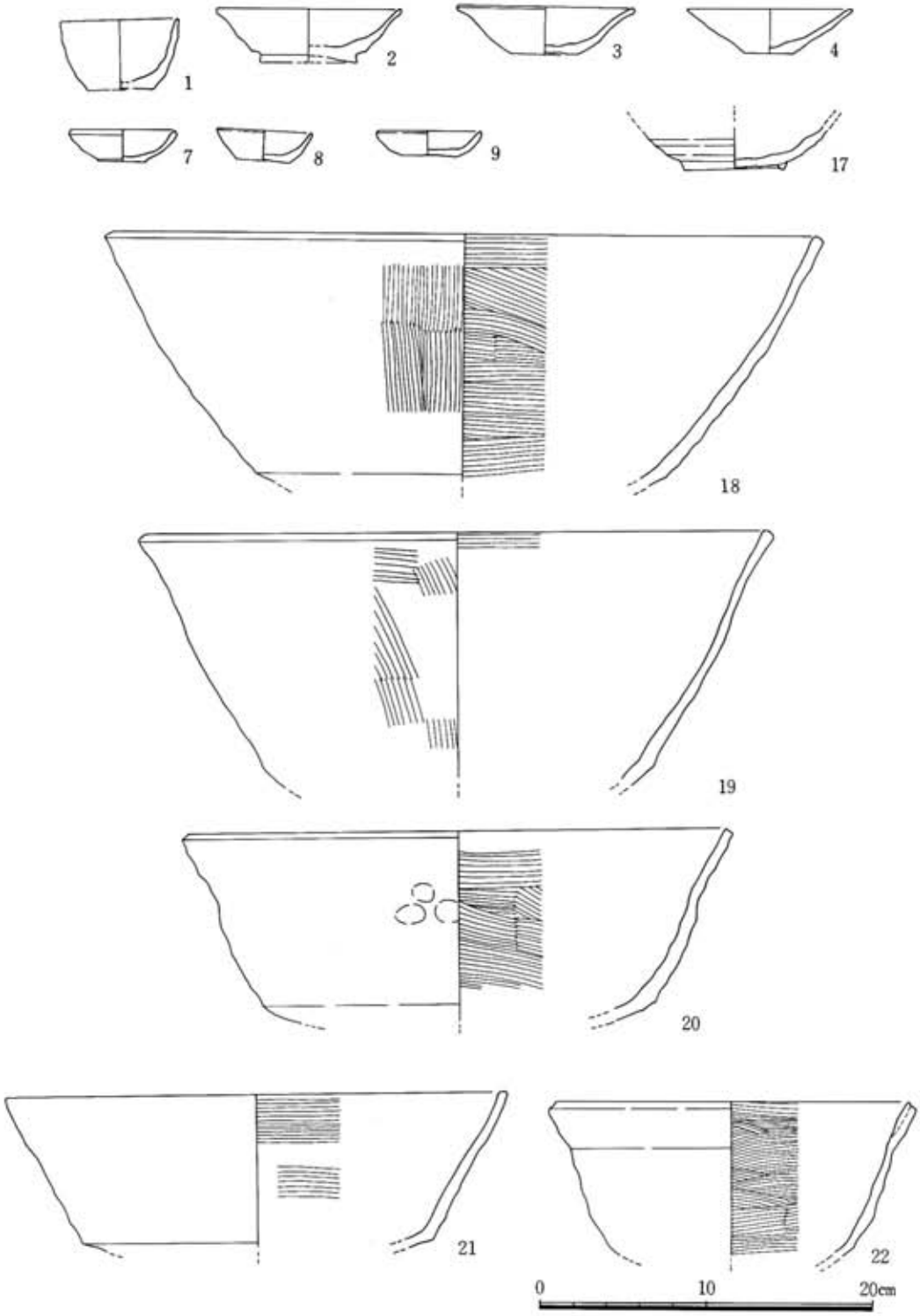


Fig. 110　藤附A遺跡出土歴史時代土器実測図　(1)

部外面に耳状把手を貼り付けその直上２カ所に穿孔する。把手端部は上向きとなる。内外面にハケ目調整を施す。把手下方基部に瓜痕，外面に指圧痕が残る。外面に煤が付着する。

羽釜（Fig. 111－39・40）

瓦質土器の２個体が出土した。**39**は水平にのびる鍔をもつもので復元口径13.8cmを測る。内面ハケ目調整を施し鍔部内面に指圧痕が残る。外面肩部にケズリ調整，口縁部と鍔上面にハケ目調整を施す。鍔下面に煤が付着する。**40**は**39**と形態を同じくするもので，内面ハケ目調整，肩部に指圧痕が残る。外面口縁部ハケ目調整，肩部に指圧痕が残る。

壺（Fig. 111－41）

土師質土器で1個体出土した。頸部はほぼ垂直に立ち，口縁部で短く外反する。復元口径17.6cmを測る。内外面ハケ目調整を施し，頸部と口縁部との境に指圧痕が残る。

甕棺（Fig. 111－42）

２個体出土した。いずれも剝離が激しい。**42**の体部内外面にハケ目調整を施す。

歴史時代遺物の時期については，土師器杯などから判断して大半のものが室町時代後半に比定できよう。甕棺は近世の所産である。

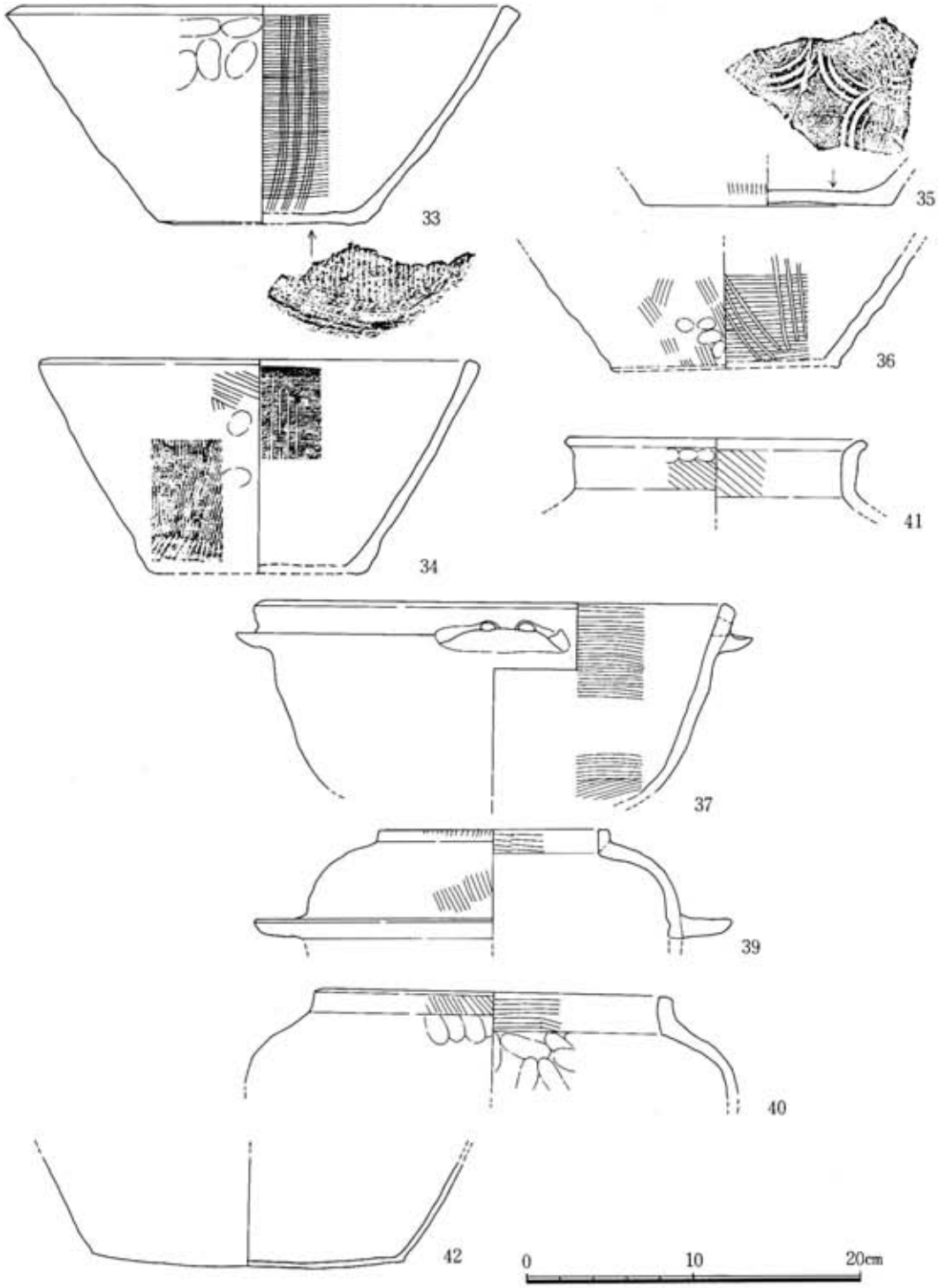


Fig. 111　藤附A遺跡出土歴史時代土器実測図　(2)

Tab. 18　藤附A遺跡出土歴史時代土器一覧表

法量｛①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ※ ○′は復元法量，残存高｝

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量 (cm)	色調
1	杯	Fig 110	Ⅰ	SK048 土壙	①′7.1 ②4.25 ③′4.0	乳白色
2	杯	Fig 110	Ⅱ	SK065 土壙	①′11.2 ②3.25 ③′5.8	灰　色
3	杯	Fig 110	Ⅱ	SD023 溝	①′10.6 ②2.8 ③4.0	黄褐色
4	杯	Fig 110	Ⅱ	SK065 土壙	①′9.9 ②2.65 ③3.0	乳白色
5	杯			SK058 土壙	②′2.9 ③4.5	黄褐色
6	杯			SK058 土壙	②′1.95 ③3.7	乳白色
7	杯	Fig 110	Ⅲ	SK065 土壙	①′6.3 ②1.9 ③2.8	青灰色
8	杯	Fig 110	Ⅲ	SK039 土壙	①5.6 ②1.8 ③3.2	黄褐色
9	杯	Fig 110	Ⅲ	SK038 土壙	①′6.2 ②1.5 ③′3.3	黄褐色
10	杯			A地区 表土	①′7.8 ②′3.5	乳白色
11	杯			A地区 表土	①′9.8 ②′2.0	黄褐色
12	杯			SK048 土壙	②′2.1 ③4.5	乳白色
13	杯			A地区 表土	②′1.5 ③5.9	乳白色
14	杯			A地区 表土	②′1.0 ③5.1	乳白色
15	杯			A地区 表土	②′1.0 ③5.7	乳白色
16	杯			A地区 表土	②′1.5 ③5.1	黄褐色
17	椀	Fig 110		A地区 表土	②′2.8 ④5.9	内面淡灰色，外面灰黒色
18	鉢	Fig 110	A	SK050 土壙	①′43.34 ②′15.0	褐色，外面煤
19	鉢	Fig 110	B	SK065 土壙	①′36.8 ②′15.2	淡褐色，外面煤
20	鉢	Fig 110	B	D地区 表土	①′32.4 ②′11.4	淡褐色，外面煤
21	鉢	Fig 110	A	SK060 土壙	①′30.0 ②′9.35	褐色，外面煤
22	鉢	Fig 110	B	SK035 土壙	①′23.2 ②′11.2	褐色，外面煤
23	鉢			SK038 土壙	①′37.8 ②′8.55	褐色，内外面黒変
24	鉢			A地区 表土	②′10.1	淡褐色，外面煤
25	鉢			SK035 土壙	①′45.0 ②′11.8	暗褐色，外面煤
26	鉢			SK048 土壙	①′37.4 ②′6.2	暗灰色，外面煤
27	鉢			SK055 土壙	①′34.3 ②′8.25	灰褐色，外面煤
28	鉢			Ⅰ地区現代溝	①′33.2 ②′7.05	灰褐色，外面煤
29	鉢			SK036 土壙	①′33.6 ②′3.5	黄灰色，外面煤
30	鉢			SK065 土壙	①′20.4 ②′9.45	灰褐色，外面煤
31	鉢			SK058 土壙	②′7.0	灰褐色，外面煤
32	鉢			Ⅰ地区現代溝	②′3.5	黒灰色
33	擂鉢	Fig 111		SK048 土壙	①′30.8 ②13.15 ③′12.4	灰　色
34	擂鉢	Fig 111		D地区 表土	①′25.2 ②12.8 ③′12.0	灰　色
35	擂鉢	Fig 111		SK050 土壙	②′2.25 ③′15.0	淡褐色
36	擂鉢	Fig 111		A地区 表土	②′7.0 ③′13.5	淡褐色，外面煤
37	土鍋	Fig 111		SK046 土壙	①′27.7 ②′11.75	淡褐色，外面煤
38	土鍋			D地区 表土	②′4.0	淡褐色，外面煤
39	羽釜	Fig 111		D地区 表土	①′13.8 ②′6.5	黒灰色，鍔下煤
40	羽釜	Fig 111		SK050 土壙	①′21.4 ②′6.15	灰　色
41	壺			A地区 表土	①′17.6 ②′3.3	褐　色
42	甕	Fig 111		SJ070甕棺墓	②′13.2 ③′37.1	淡褐黒色
43	甕	Fig 111		SJ690甕棺墓		褐　色

4．小　　結

藤附A遺跡は脊振山系南麓より派生する舌状丘陵上に位置する。

当遺跡からは縄文時代の土壙1基，古墳時代の古墳7基，中世（室町時代）の掘立柱建物跡6棟，土壙41基，溝13条，近世（江戸時代）の甕棺墓2基が出土した。

縄文時代の土壙はA地区中央やや西寄りに位置する。平面は楕円形をなし，土壙内より後期の浅鉢と甕を出土した。当遺跡に近接する遺跡でも縄文時代の土壙が検出されている。例えば当遺跡の西方に隣接する金立開拓遺跡からは後期の注口土器・鉢・浅鉢・甕・十字形石製品などをもつ土壙5基，西約800mの六本黒木遺跡(註①)からは前期より晩期にかけての土器片をもつ土壙21基，西約1,300mの大門西遺跡(註②)からは後期の鉢・甕をもつ土壙1基などが出土している。その他県内では西有田町の坂の下縄文遺跡(註③)，鳥栖市の本川原遺跡(註④)などの土壙が知られる。両遺跡の土壙は貯蔵穴に比定されているが，本遺跡及び近接する遺跡の土壙については，形態などからいって前の2遺跡とは相違することから，その性格は明らかでない。しかし近年，脊振山系南麓の発掘調査が多くなるに従い縄文土壙の発見が相次いでおり，これから類例資料の増加に伴いその性格が次第に明確になることを期待したい。

古墳は7基検出されJ地区1基，H地区2基，G地区2基，D地区1基，I地区1基と丘陵全域に散在している。その中で内部主体が残存するのは3基である。ST002古墳（J地区）とST008古墳（I地区）が横穴式石室，ST005古墳（G地区）が箱式石棺をもつ。その他ST007古墳（D地区）の内部主体は湮滅して存在しないが，石室前面と予想される部分に多くの遺物が分布することから横穴式石室をもつことがわかる。築造時期については編年が進んでいる須恵器から判断できる。しかし当遺跡では古墳の破壊が激しく，追葬の年代幅を考えた場合に全時期の遺物が残存しているとは思えないが，少量の遺物から年代決定の一指標は得られる。ST003・ST004・ST005・ST008古墳からは6世紀後半，ST002古墳からは6世紀末から7世紀後半，ST007古墳からは6世紀後半から7世紀中頃の須恵器が出土しており，いずれも6世紀後半の築造になることが推定できる。ST006古墳については内部主体も不明で，かつ遺物も皆無なため時期の決定が困難である。

当遺跡周辺からは横断自動車道建設に伴う発掘調査の結果，4世紀末からの古墳が数多く出土している(註①②⑤)。4世紀末のものとしては藤附C遺跡のST001古墳とST002古墳，藤附E遺跡のST001古墳がある。いずれも方形の周溝をもち，藤附C遺跡のものは内部主体に箱式石棺をもつ。5世紀前半のものとしては藤附B遺跡のST001古墳，藤附C遺跡のST007古墳，藤附E遺跡のST001古墳とST006古墳がある。いずれも円墳で，内部主体に竪穴式石室か箱式石棺をもつ。藤附B遺跡のST001古墳は両形式の内部主体を並列させている。また同じく5世紀前半のもので丘山遺跡(註⑥)の1号墳は竪穴式石室，2号墳は横穴式石室，3号墳は舟形石棺をも

ち，いずれも円墳で周溝及び葺石をもつ。この丸山遺跡の古墳は，同遺跡内に所在する支石墓などとともに移築の計画がなされ，現在その実施が具体化している。5世紀中頃より後半のものとしては，金立開拓遺跡の9基があり，いずれも周溝をもつ円墳で，中には葺石をもったり周溝に陸橋の存在も確認できるものがある。内部主体に箱式石棺，竪穴式石室，横穴式石室をもつ。6世紀以後の古墳は金立開拓遺跡・藤附B遺跡・藤附C遺跡・藤附K遺跡・藤附E遺跡・丸山遺跡などに存在し，その数は前代に比べ倍増する。内部主体は一部の例外を除きほとんどが横穴式石室である。これらの古墳は一般的な傾向として，4～5世紀代の古墳が丘陵のほぼ中央を占地し，6世紀以降になると丘陵基部から後背地の斜面へと移るようである。

歴史時代の掘立柱建物跡6棟，土壙41基，溝13条は室町時代後半の遺構である。A地区に3棟，D地区に3棟存在する。SB009・SB010・SB012掘立柱建物跡の主軸方向は同じでほぼ東西となる。またSB013・SB014掘立柱建物跡の残存行を桁行と考えるならば，SB011掘立柱建物跡の主軸方向と同じでほぼ南北となる。これら建物は室町時代後半の一時期，この地に村落が形成されたことを示すものである。またこれを裏付けるものとして，同時期の煤付着の鉢・羽釜など日常用器が土壙及び溝より出土している。

土壙はA地区2基，G地区2基，D地区6基，I地区31基と分布している。平面が長方形と正方形で大型のもの，不整方形のもの，長方形のもの，不整形のものと種々である。これらの土壙の性格については掘立柱建物跡との関連を想定しえるが，確信を得るまでにはいかなかった。

溝はA地区6条，G地区2条，D地区5条が存在する。溝の性格については土壙と同様，建物との関連が考えられるが，断定することはできなかった。

近世甕棺墓2基はI地区南東隅に存在する。当遺跡の西に隣接する金立開拓遺跡からも火葬壺と一緒に数基出土していることから，江戸時代の一時期，金立開拓遺跡の墓地が当遺跡に移ったと考えても良いだろう。

藤附A遺跡の遺構は以上である。しかし縄文時代の土壙及び中世の各遺構については不明な点が多く，今後の発掘調査に期待することが大きい。

(註)

(1) 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報2」佐賀県教育委員会　1980

(2) 「大門西遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　佐賀県文化財調査報告書第51集　佐賀県教育委員会　1980

(3) 「坂の下縄文遺跡」(第二次発掘調査) 佐賀県文化財調査報告書第19集　佐賀県教育委員会　1971

(4) 「本川原遺跡」(第3次調査) 佐賀県文化財調査報告書第49集　佐賀県教育委員会　1979

(5) 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報1」佐賀県教育委員会　1978

(6) 「丸山遺跡」(発掘調査概報) 佐賀県教育委員会　1979

藤附（とうつけ）K 遺跡

遺　跡　名：藤附K（略号ＴＴＫ・K）
遺跡所在地：佐賀市久保泉町大字川久保字藤附

藤附K遺跡

1．遺跡の概要

藤附K遺跡は佐賀県佐賀市久保泉町大字川久保字藤附に所在する。

天山・脊振山系の南に連なる小山群が佐賀平野と接する場所に，南流する大小の河川に沿って舌状の丘陵地が発達する。これらの丘陵地は古来からの生活の場であり，各時代の遺跡が密集する。藤附K遺跡もその一つに属するものである。

藤附K遺跡は，長さ約170m，幅約30～40mの南にのびる低丘陵の基部に位置する。東約50mには谷を挟んで方墳1基を含む古墳4基を出土した藤附E遺跡，更に東に隣接して平安時代末～鎌倉時代の所産である地下式横穴を出土した藤附F遺跡，その東方谷を挟んで縄文時代の支石墓や5世紀前半の古墳群などを出土した丸山遺跡が存在する。また西約50mには丘陵との比高差約1mの浅い谷を挟んで内部主体に箱式石棺と竪穴式石室を並列してもつ古墳を出土した藤附B遺跡，更に西約20mに小谷を挟んで縄文時代の土壙1基や方墳2基を出土した藤附C遺跡，その西方に近接して藤附A遺跡・金立開拓遺跡が帯状に存在する。

（PLAN. 4，PL. 56～58）

当遺跡から検出された遺構は古墳3基である。ST001古墳は側壁の石材2個と棺底の朱，ST002古墳は遺物と墓道状の遺構，ST

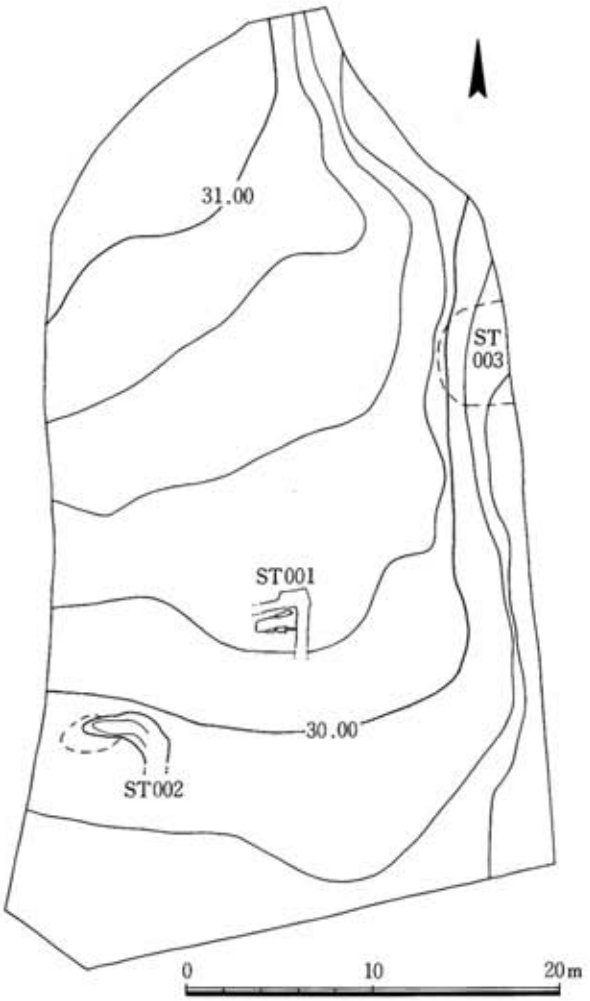


Fig. 112　藤附K遺跡遺構配置図

003古墳は遺物のみを認めるだけで，いずれも削平が激しく古墳の全貌を知ることができない。遺物は，遺構の破壊が著しいのに反し，須恵器・土師器・鉄器・耳環など多量に出土した(Fig. 112)。

2．遺　　構

藤附K遺跡からは古墳3基が出土した。本遺跡は丘陵基部の標高29.5～31.0mのなだらかな傾斜地に位置しており，古墳は標高29.5～30.25mの場所に存在する。調査前は畑地として利用されていたため削平が著しい。ST001古墳は側壁に腰石2個，棺底に朱と鉄刀及び鉄鏃を残すのみである。ST002古墳は墓道状の遺構と遺物，ST003古墳は遺物の分布のみで正確な古墳の形態を知ることができない（Fig. 112)。

遺物は3基の古墳より須恵器及び土師器，それにST001古墳より鉄器，ST001古墳とST003古墳より耳環が出土している。

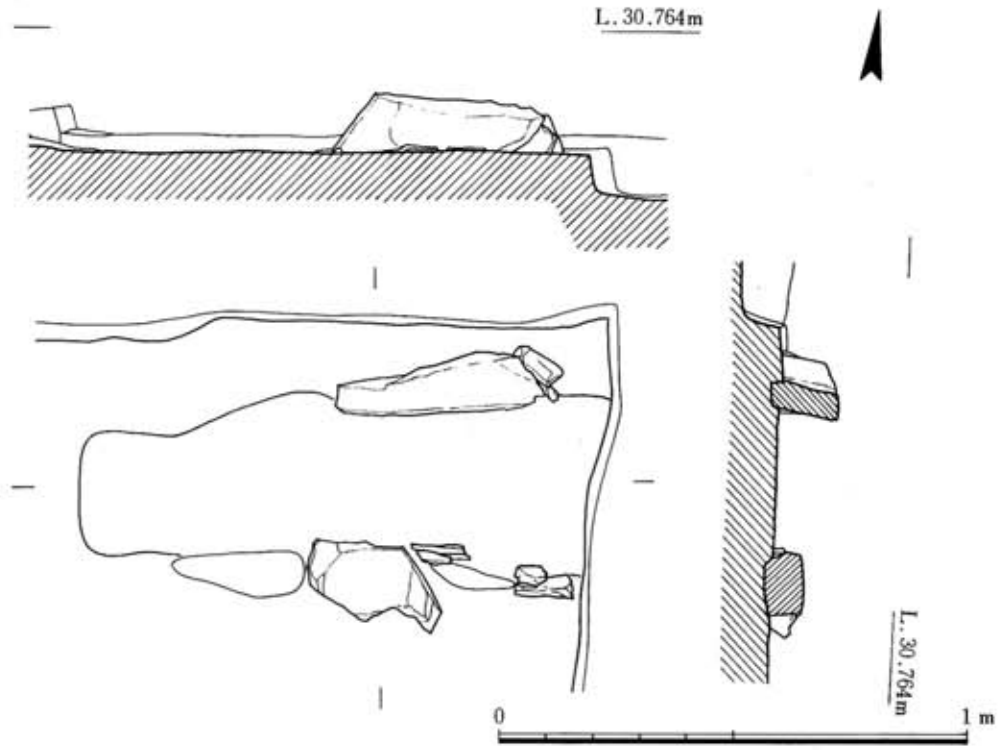


Fig. 113　藤附K遺跡ST001古墳石室実測図

ST001古墳（Fig. 113, PL. 59）

ST001古墳は竪穴式石室を有する。削平が激しく側壁の石材2個を残すのみである。標高30.25mの調査区の中央やや南寄りに位置する。南西約9mにST002古墳，北東約13mにST003古墳が存在する。遺物は棺底の北側壁に沿って鉄刀と鉄鏃が出土した。また石室周辺の撹乱層より須恵器，土師器，それに耳環も出土している。

墳丘　削平が著しいため湮滅をきたしており形態不明である。周溝は確認できなかった。

内部主体　内部主体は竪穴式石室で，主軸をN－E82°方向にとる。墓壙の掘り形は不明である。石室の東小口部分が現代の塵芥用溝のため湮滅している。石室は残存長2.15m，幅西小口で0.52m，東端で0.75mを測り，やや西小口が狭まる長方形である。棺底の全域に朱が残る。

遺物は棺底の北側壁に沿って鉄刀と鉄刀関部の上に重なって鉄鏃が出土している。また石室内及び周辺の撹乱層より須恵器蓋・杯・高杯・土師器高杯・耳環が出土している。

ST002古墳（Fig. 112）

ST002古墳は削平を受け湮滅をきたした古墳であるが，わずかに墓道状の遺構と遺物を残している。

ST002古墳は調査区の南西端標高30mのなだらかな傾斜地に位置する。遺物は東西3m，南北2mの範囲で須恵器蓋・杯・提瓶・高杯・甕が出土している。墓道状の溝は，土器群より発して東方向にのびたあと屈曲して南へ走る。南端は現代塵芥用溝のため消滅している。このようなことから判断して東に開口した横穴式石室をもつ古墳であることが予想できる。北東約9mにST001古墳が存在する。

ST003古墳（Fig. 112）

ST003古墳は湮滅をきたした古墳で，墳丘及び内部主体の形態は不明である。わずかに遺物の分布で古墳の存在を予想できるにすぎない。

ST003古墳は調査区の中央東端標高29.50～30.25mのかなりの急傾斜地に位置する。遺物は東西3.5m，南北5mの範囲に分布する。須恵器蓋・杯・土師器高杯・耳環が出土している。南西約13mにST001古墳が位置する。

3．遺　　物

(1) 縄文時代

藤附K遺跡出土の縄文土器はすべて表土から出土した。器種は後期から晩期の鉢・甕・浅鉢・円盤型土製品である（Fig. 114－1～17, PL. 104－1）。

1～4は後期の鉢で，大きく内湾する頸部から屈曲して立ちあがる口縁部をもつものである。1は波状口縁となる。口縁部は2条の沈線をもち，上段の沈線は波頂部で山形となる。全面ナデ調整，色調は褐色で一部黒色となる。2は1と同型の鉢で，波頂部山形になる1条の沈線が走る。磨耗が激しく調整不明，色調は褐色である。3の口縁部はやや内湾して立ちあがり波状口縁となる。全面ナデ調整，色調は黄褐色である。4は3と同型の鉢で口縁部が直線的に立ちあがる。これらはいずれも多量の砂粒を含む。

5～8は後期から晩期の甕の口縁部である。5の口縁端部の内面は外反する。外面条痕調整，内面ヨコナデ調整，色調は淡褐色である。6は口縁端部に行くに従い器壁が薄くなる。全面ヨコナデ調整を施し，色調は内面褐色，外面暗褐色である。7の口縁端部はやや丸味をもって平坦となる。外面条痕調整，内面ヨコナデ調整を施す。色調は内面黒褐色，外面褐色である。8の口縁端部内面はやや外反する。外面条痕調整，内面ヨコナデ調整を施す。色調は内面暗褐色，外面褐色である。これらはいずれも多量の砂粒を含む。

9は晩期の浅鉢である。胴部から口縁部にかけ，ゆるく「S」状に曲がるもので，全面ナデ調整を施す。色調は黄褐色で，胎土に砂粒を含む。

10～14は後期から晩期にかけての甕または鉢の底部である。10の底部内面には櫛描文，他はすべてナデ調整を施す。色調は黄及び褐色で，胎土には多量の砂粒を含む。

15は円盤型土製品で，側面を一部欠損する。全面ナデ調整を施す。色調は黄褐色で，両面に黒変部分が残る。

(2) 弥生時代

藤附K遺跡出土の弥生土器は表土より出土の3点である。器種は甕及び壺で，いずれも細片である（Fig. 114－18）。

16は甕の口縁部で，口縁端部外側に刻み目を有す。外面ヨコナデ調整，内面ナデ調整を施す。色調は黄褐色で，胎土に細砂粒を含む。17は甕の胴部で刻み目をもつ突帯を貼り付ける。磨耗が激しく調整不明，色調は黄褐色，胎土に細砂粒を多く含む。18は壺の底部である。胴部下半のわずかな残存部に縦方向のハケ目調整を施す。他はナデ調整である。色調は底部外面が暗黄

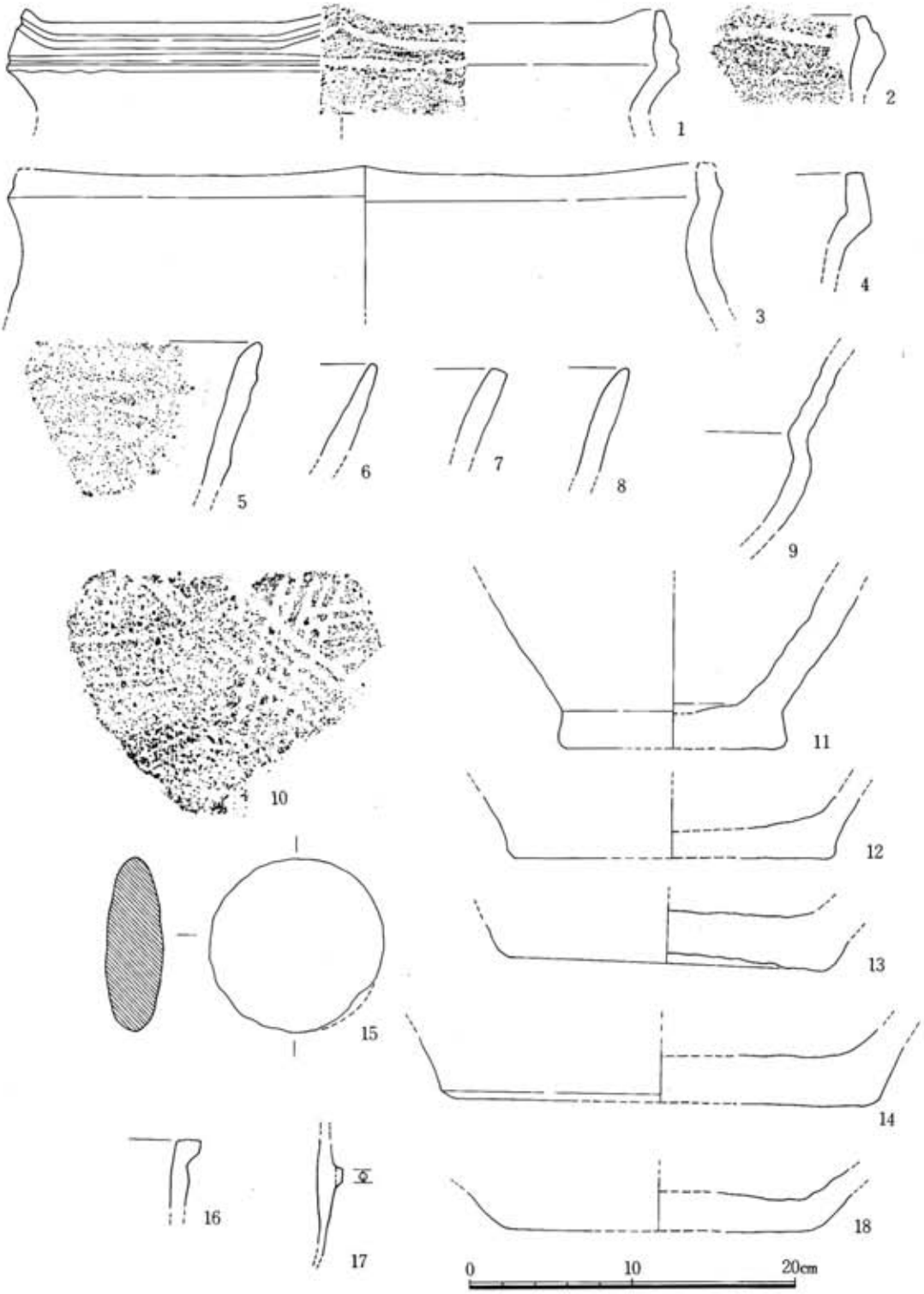


Fig. 114　藤附K遺跡出土縄文・弥生土器実測図

灰色，他は黄灰色，胎土に多くの砂粒を含む。

(3) 古墳時代

藤附K遺跡における古墳時代の遺構は古墳3基である。しかしそのほとんどは湮滅の状態で，遺物の分布によって古墳の存在を確認することができるものである。ここでは本遺跡出土の遺物を一括して，須恵器・土師器・鉄器・装身具に分け各々の特徴を述べることにする。

須恵器（Fig. 115·116, PL. 103 －3～13）

須恵器はST001古墳，ST002古墳，ST003古墳から出土した。図示可能なものが26個体出土したが，その内15個体がST002古墳からのものである。器種は蓋・杯・提瓶・高杯・甕であるが，その大半が蓋及び杯である。時期は6世紀末から7世紀後半のものである。個々の土器の出土地などについては，Tab. 20藤附K遺跡出土須恵器一覧表を参照されたい。ここでは各器種毎の分類を行い，その特徴を簡単に述べることにする。

蓋（Fig. 115－1～9，PL. 103－3～5）

9個体出土した。形態によりA・B・Cに大別できる。

蓋A（Fig. 115－1，PL. 103－3）

口縁部内面にかえりがなく，天井部中央につまみを付さないものである。復元口径10.4cm，器高2.65cmを測る。天井部は平坦で，口縁部は肥厚しわずかに外反する。端部は丸い。天井部外面は直線的なヘラ切り離し，内面はナデ調整，他はヨコナデ調整を施す。天井部外面にヘラ記号を有す。

蓋B（Fig. 115－2～8，PL. 103－4・5）

口縁部内面にかえりを有し，天井部中央につまみを付すものである。法量によりⅠ・Ⅱに分類できる。

蓋BⅠ（2～4） 口径8.4～8.5cm，器高2.9～3.1cm，受部最大径8.4～8.5cmを測り，天井部中央に乳頭状のつまみを有す。天井部は全体にゆるやかな丸味をもち，口縁部へと続く。2の口縁部は嘴状に下がる。3・4は天井端部に1条の凹線がめぐる。いずれもかえりは内傾したのち垂直に下がり，端部は細くて丸い。天井部外面ヘラケズリ調整，内面ナデ調整，他はヨコナデ調整を施す。

蓋BⅡ（5～8） 口径12.9～15.9cm，器高3.35cmを測る。宝珠つまみが残存するのは5のみであるが，この形態に属するものである。天井部は平坦でわずかに丸味をもつ。口縁部はわずかに段をもち外下方へのびる。端部は丸い。内面のかえりは衰退し，短く内傾する。天井部外面ヘラケズリ調整，内面ナデ調整，他はヨコナデ調整を施す。

蓋C（Fig. 115－9）

口縁部内面のかえりが消滅し，天井部につまみを付すものであるが，つまみ部分は欠損している。復元口径12.4cm，残存高1.7cmを測る。天井部は扁平で，天井部から口縁部までわずかに外反しながら外下方へのびる。口縁端部は肥厚し下がる。天井部外面ヘラケズリ調整，内面ナデ調査，他はヨコナデ調整を施す。なお**9**は出土地を異にするもので，西側水田からのものである。近接しているのでここにあげた。

杯（Fig. 115－10～20，PL. 103－6～10）

11個体出土した。形態によりA・B・Cに大別できる。

杯A（Fig. 115－10・11，PL. 103－6）

立ちあがりを有すものである。口径9.4～9.6cm，器高3.0～3.15cmを測る。天井部は平坦である。体部から受部にかけ外反したのち受部端部でわずかに内湾する。受部端部は丸い。立ちあがりは内傾したのち垂直に立ち，端部は丸い。底部外面直線的なヘラ切り離し，内面ナデ調整，他はヨコナデ調整を施す。底部外面にヘラ記号を有す。

杯B（Fig. 115－12～16，PL. 103－7・8）

立ちあがりを有さないものである。沈線の有無でa・bに細分する。

杯Ba（**12・13**）　底部は平坦で，体部に1条の沈線が走る。口径8.0～8.3cm，器高3.0～3.5cmを測る。底部と体部の境は明瞭で，体部から口縁部にかけてまっすぐ外上方へのびる。口縁端部は丸い。底部外面は，不定方向のヘラケズリ，他はヨコナデ調整を施す。

杯Bb（**14・16**）　体部に沈線をもたないものである。口径7.1～8.5cm，器高2.75～3.0cmを測る。底部は平坦で，体部との境がBaと比し丸味をもつ。口縁部は**14**が直立，**15**が外反，**16**が外上方へのびる。端部はいずれも丸い。**14・15**の底部外面はヘラ切り離しのあと不定方向のヘラケズリ，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。

杯C（Fig. 115－17～20，PL. 103－9・10）

高台を付すものである。沈線の有無でa・bに細分する。

杯Ca（**17**）　外上方へ強く張り出す短く厚い高台を付すもので，底部と体部の境及び口縁端部外面に各1条の沈線が走る。口径13.0cm，器高4.5cm，高台径8.2cmを測る。底部外面ヘラケズリ調整のあとナデ調整，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。

杯Cb（**18～20**）　Caと同じ形態を示すが，沈線をもたないものである。口径13.6～15.4cm，器高4.7～5.0cm，高台径7.8cmを測る。底部外面はヘラケズリ調整のあとナデ，ヨコナデ調整，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。

提瓶（Fig. 115－21，PL. 103－11）

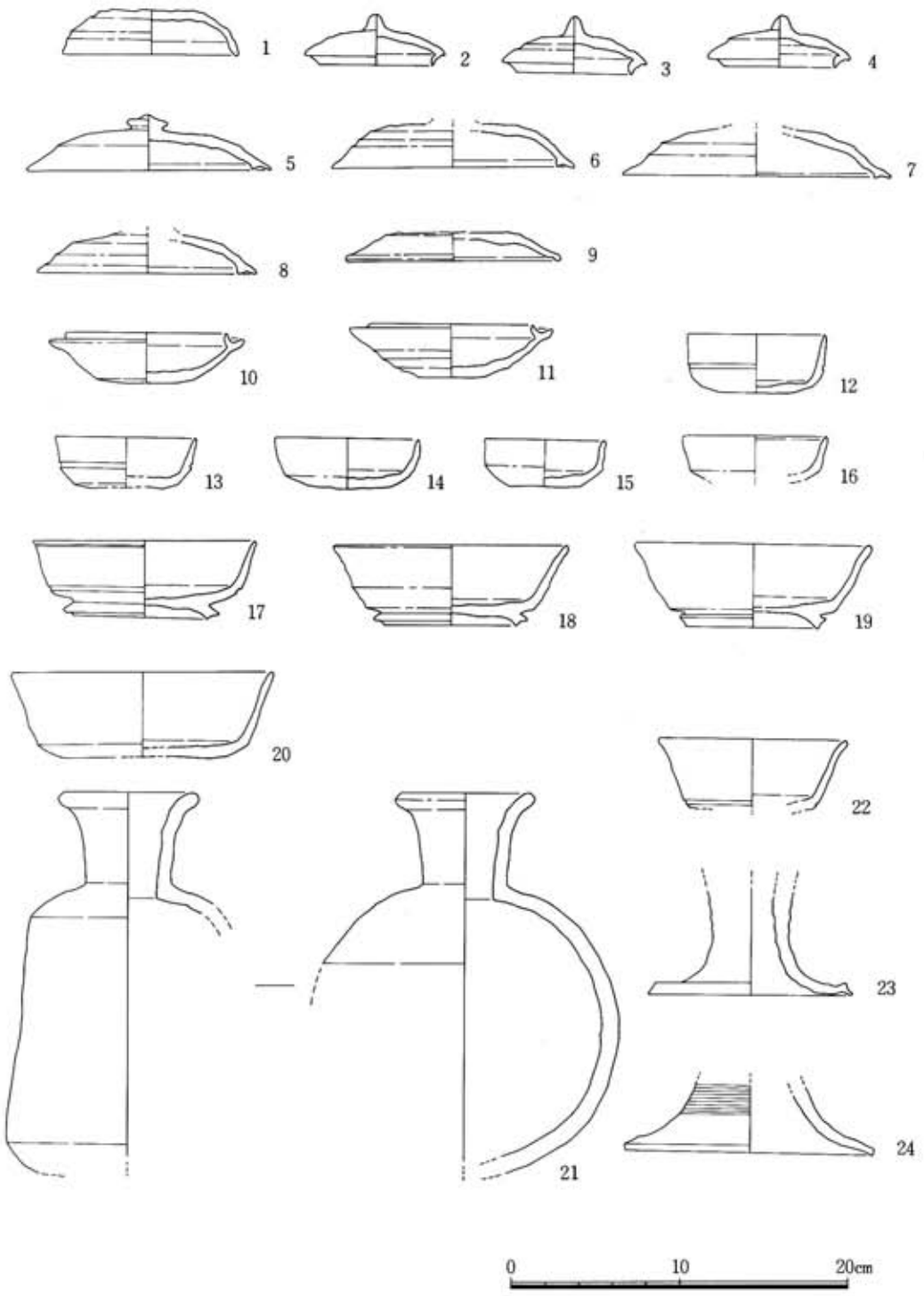


Fig. 115　藤附K遺跡出土須恵器実測図　(1)

1個体出土した。頸部はやや開き気味で，口縁部は外反する。前面は中央部がやや窪みを持ち扁平となる。背面は欠損するが残部からみて膨みをもつものである。外面頸部から肩部にかけヘラケズリ調整，胴部カキ目調整のあとナデ調整を施す。内面体部はタタキ調整のあとナデ調整，頸部下半に指圧痕を残す。

高杯（Fig. 115－22～24，PL. 103－13）

3個体出土した。**22**は杯部の一部で，体部が開き口縁部で外反する。底部と体部の境及び口縁端部外側に各1条の沈線が走る。ヨコナデ調整を施す。**23**は脚裾部で下半がしまる形態をとる。端部は嘴状に尖がる。ヨコナデ調整を施し，内外面にシボリ痕を認めることができる。**24**は脚裾部でラッパ状に開く。裾部上半カキ目調整，他はヨコナデ調整を施す。内面にシボリ痕を認めることができる。

甕（Fig. 116－25・26，PL. 103－12）

2個体出土した。**25**は口頸部が短く外反し，口縁端部は細くて丸い。肩部は張り，胴部で大きく膨らむ。胴部に4条の沈線が間隔を置いて走り，その間に平行文タタキ調整を施す。内面肩部から胴部にかけてハケ目調整を施す。**26**は肩部の張りがやや弱く，口頸部で短く外反する。口縁端部外側の直下に小突帯が走る。肩部内面に同心円文タタキ調整を施す。

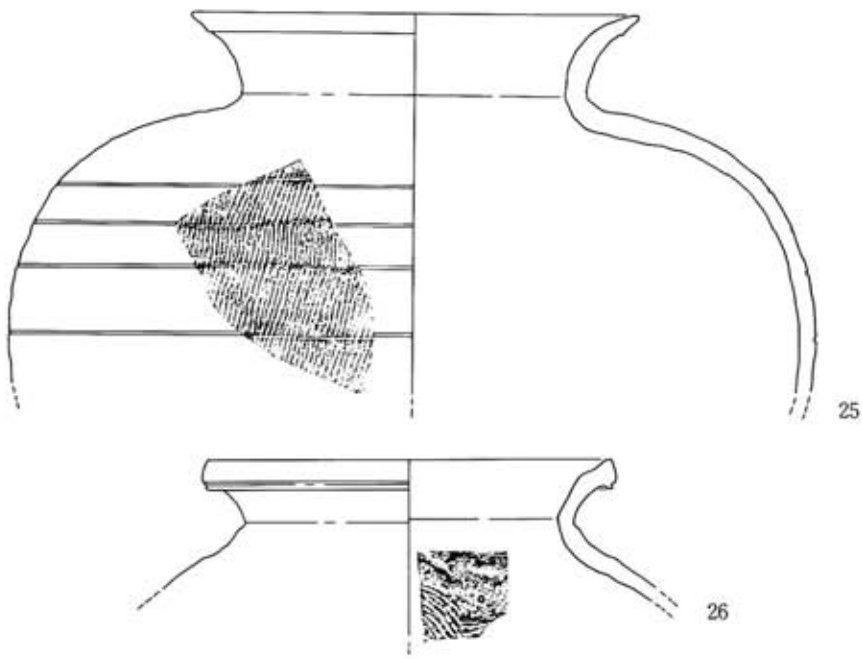


Fig. 116　藤附K遺跡出土須恵器実測図　(2)　0　10cm

土師器（Fig. 117, PL. 103－1・2）

土師器はST001古墳，ST003古墳及び遺跡西側水田部，それに表土より出土した。細片が多く図示できたのが5個体のみである。個々の土器の出土地については，Tab. 19 藤附K遺跡出土土師器一覧表を参照されたい。

甕（1） 頸部は形成せず口縁部で短く外反する。把手は貼り付けである。把手は指圧のあとナデ調整，胴部外面はハケ目のあとナデ調整，胴部内面へラケズリ調整を施す。

甕（2） 肩部の張りが弱く口縁部で短く外反する。頸部から胴部にかけての外面ハケ目調整，内面へラケズリ調整を施す。

高杯（3～5） 3個体出土した。3は杯底部と体部の一部で，底部と体部の境に稜をもち，体部は外反しながら開く。剝離が激しく調整不明である。4・5はラッパ状に開く脚部をもつ。4の調整はナデとヨコナデ，5は剝離が激しく調整不明である。

鉄器（Fig. 118・119, PL. 104－7・8）

藤附K遺跡出土の鉄器はST001古墳出土の鉄鏃と鉄刀である。

鉄鏃（Fig. 119－1, PL. 104－8）

広根式に属するもので，両丸造腹抉柳葉式鉄鏃である。身部が2段となるもので，残存長13.4cm，身長10.0cm，茎部残存3.45cmを測る。また身部中央幅が鋒先1.95 cm，下段1.65cmと，鋒先部に行くに従い広くなる。他に数本の鉄鏃が固まりとなり出土したが図示が不可能であった。

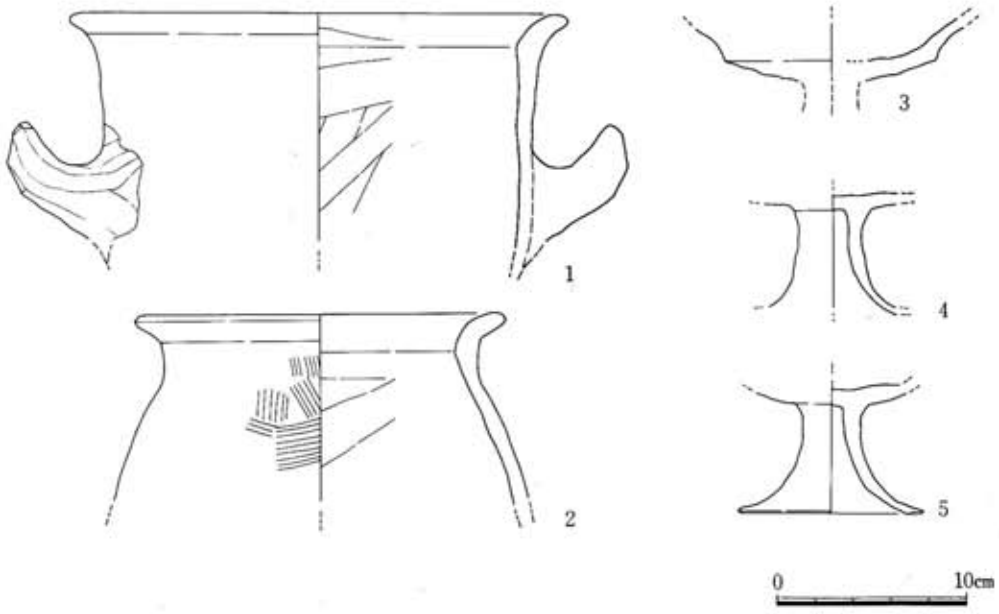


Fig. 117 藤附K遺跡出土土師器実測図

Fig. 118　藤附K遺跡出土
鉄刀実測図

鉄刀（Fig. 118, PL. 104－7）

直刀で身部が内湾気味に屈曲する。残存長91.5cm，刃渡り残存75.7cm，茎残存15.8cmを測る。また身幅は鋒先近く2.9cm，関部3.6cm，茎幅は関部近く2.5cm，目釘穴部分1.7cmを測る。関部より12.5cmの位置に目釘穴をつくる。

装身具（Fig. 119－2～5, PL. 104－6）

藤附K遺跡出土の装身具は，ST001古墳周辺表土，ST003古墳出土の耳環のみである。

耳環（2～5）　2・4・5がST003古墳，3がST001古墳周辺表土より出土した。2は環部径2.8～3.15cm，断面径0.6cmを測る。3は環部径2.4～2.6cm，断面径0.55～0.9cmを測り，突合わせ部が一部欠損する。金箔が残る。4は環部径2.4～2.7cm，断面径0.55～0.9cmを測り，金箔が残る。5は全体の3分の1が欠損する。環部径2.4cm，断面径0.25cmを測る。

以上が古墳時代の遺物である。各遺物の時期については，最も編年が進んでいる須恵器蓋・杯を中心に，前述の藤附A遺跡との対応を試み検討したい。

法量及び形態の特徴から，次の関係を想定できた。

〈蓋〉		〈杯〉
第1段階	A ……	A
第2段階	BⅠ ……	Ba・Bb
第3段階	BⅡ ……	Ca・Cb

1段階の蓋Aは口径10.4cm，杯Aは口径9.4～9.6cmを測る。この段階の天井部・底部外面いずれも直線的なヘラ切り離しである。2段階はいわゆる蓋・杯逆転の時期で，ともに口径が8cm前後で器形が極端に小型化する。蓋BⅠの天井部外面に乳頭状のつまみ，それに内面にやや長目のかえりをもつ。3段階は器形が大型化し，蓋に扁平な宝珠状のつまみ，そして杯に外上方へ強く張り出す短くて厚い高台をもつものである。

次いで藤附A遺跡，北部九州編年(註①)，陶邑編年(註②)に対応させると，

〈藤附K〉　〈藤附A〉　〈北部九州〉　〈陶　邑〉
第1段階……第3段階……ⅣB型式……Ⅱ型式6段階
第2段階……第4段階……Ⅴ　型式……Ⅲ型式1段階
第3段階……第5段階……Ⅵ　型式……Ⅲ型式3段階

このことから第1段階が6世紀末，第2段階が7世紀前半，第3段階が7世紀後半に比定できよう。藤附A遺跡との対応を試みたが，同一段階で形態及び手法に違いが見られる。このことは，単なる工人の製作上の違いからきているものか，それとも若干の時期的な差からきているものかは究明できなかった。

その他の古墳時代の遺物については，須恵器蓋・杯と時期的に大差ない所産と考える。

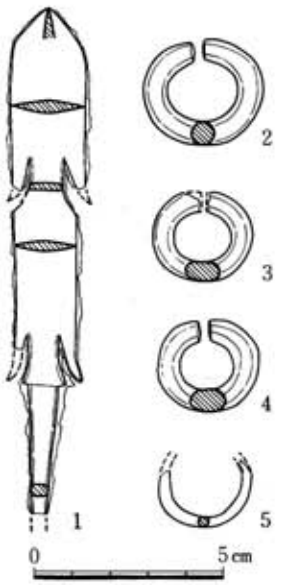


Fig. 119　藤附K遺跡出土鉄鏃・耳環実測図

(註)

(1)　「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書第43集　福岡県教育委員会　1970

(2)　「陶邑古窯址群1」研究論集第10号，平安学園考古学クラブ　1966

Tab. 19　藤附K遺跡出土土師器一覧表

法量{①口径　②器高　③杯部底径　④脚裾部径　※　○′は復元法量，残存高}

番号	器　種	挿図・図版番号	分　類	出土地点	法　量（cm）	色　調
1	甕	Fig 117		西側水田	①′25.0　②′12.7	乳白色，外面一部黒変。
2	甕	Fig 117		西側水田	①′18.2　②′9.2	淡黄褐色，外面一部黒変。
3	高　杯	Fig 117		ST003 古墳	②′3.0　③′11.1	黄褐色，外面一部黒変。
4	高　杯	Fig 117　PL.103		表　土	②′6.3	淡赤橙色。
5	高　杯	Fig 117　PL.103		ST001 古墳	②′6.5　④9.4	

Tab. 20　藤附K遺跡出土須恵器一覧表

法量｛①口　径　②器　高　③受部最大径　④かえり径　⑤高台径　⑥裾部最大径　⑦胴部最大径　※　○′は復元法量，残存高｝

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法　量（cm）	ロクロ回転	ヘラ記号	色　調
1	蓋	Fig115　PL103	A	ST002古墳	①′10.4 ②2.65	右	有	灰黒色。
2	蓋	Fig115	BⅠ	ST002古墳	①8.4 ②3.05 ④6.7	右		灰色一部黄色。
3	蓋	Fig115　PL103	BⅠ	ST002古墳	①8.5 ②2.9 ④6.9	右		灰　色。
4	蓋	Fig115	BⅠ	ST001古墳	①8.5 ②3.1 ④6.7	右		灰　色。
5	蓋	Fig115　PL103	BⅡ	ST003古墳	①14.3 ②3.35 ④12.3	右		暗灰色。
6	蓋	Fig115	BⅡ	ST002古墳	①′14.41 ②′2.6 ④′12.2	右		暗灰色，外面灰かぶり。
7	蓋	Fig115	BⅡ	ST002古墳	①′15.9 ②′2.8 ④′14.0	右		青灰色，外面灰かぶり。
8	蓋	Fig115	BⅡ	ST002古墳	①′12.9 ②′2.3 ④′10.8	右		青灰色。
9	蓋	Fig115	C	西側水田	①′12.4 ②′1.7	右		灰白色。
10	杯	Fig115　PL103	A	ST001古墳	①′9.4 ②3.0 ③11.3	右	有	黒灰色。
11	杯	Fig115	A	ST001古墳	①9.6 ②3.15 ③11.9	右	有	灰　色。
12	杯	Fig115　PL103	Ba	ST003古墳	①8.0 ②3.5	右		灰　色。
13	杯	Fig115	Ba	ST003古墳	①′8.3 ②3.0	左		暗灰色。
14	杯	Fig115　PL103	Bb	ST003古墳	①8.5 ②3.0	右		灰　色。
15	杯	Fig115	Bb	ST003古墳	①7.1 ②2.75	右		灰　色。
16	杯	Fig115	Bb	ST001古墳	①′8.4 ②′2.6			黒灰色，外面灰かぶり。
17	杯	Fig115　PL103	Ca	西側水田	①13.0 ②4.5 ⑤8.2	右		内面黄灰色，外面黒灰色。
18	杯	Fig115	Cb	ST002古墳	①13.6 ②4.7 ⑤7.8	右		黒灰色。
19	杯	Fig115　PL103	Cb	ST003古墳	①′13.8 ②5.0 ⑤′7.8			内面黄灰色，外面黒灰色。
20	杯	Fig115	Cb	ST003古墳	①′15.4 ②′5.0	右		黒灰色。
21	提瓶	Fig115　PL103		ST003古墳	①′7.6 ②′22.7			灰　色。
22	高杯	Fig115		ST001古墳	①′11.0 ②′4.15			内面灰色，外面黒灰色。
23	高杯	Fig115　PL103		ST001古墳	②′6.2 ⑥12.0	右		外面灰色，外面灰褐色。
24	高杯	Fig115		ST001古墳	②3.95 ⑥′14.3	右		灰白色。
25	甕	Fig116　PL103		ST001古墳	①′23.4 ②′19.5 ⑦42.6			黒褐色，内外面灰かぶり。
26	甕	Fig116		ST001古墳	①′21.2 ②′7.0			黒褐色。

(4)　歴史時代

藤附K遺跡では歴史時代の遺構は確認できなかったが，調査区東端のST003古墳周辺の流れ込み土中などから多くの遺物を出土した。器種は杯・鉢・擂鉢・羽釜・壺・皿，それに石鍋である。個々の遺物の出土地などは，Tab. 21藤附K遺跡出土歴史時代遺物一覧表を参照されたい。

杯（Fig. 120－1～9，PL. 104－2～5）

土師器杯で総出土数は50個体を越すが，細片が多くここでは完形に近く復元可能なものについて分類を試みた。法量によりⅠ・Ⅱに大別し，更に体部の内湾の大きさによりa・bに細分した。

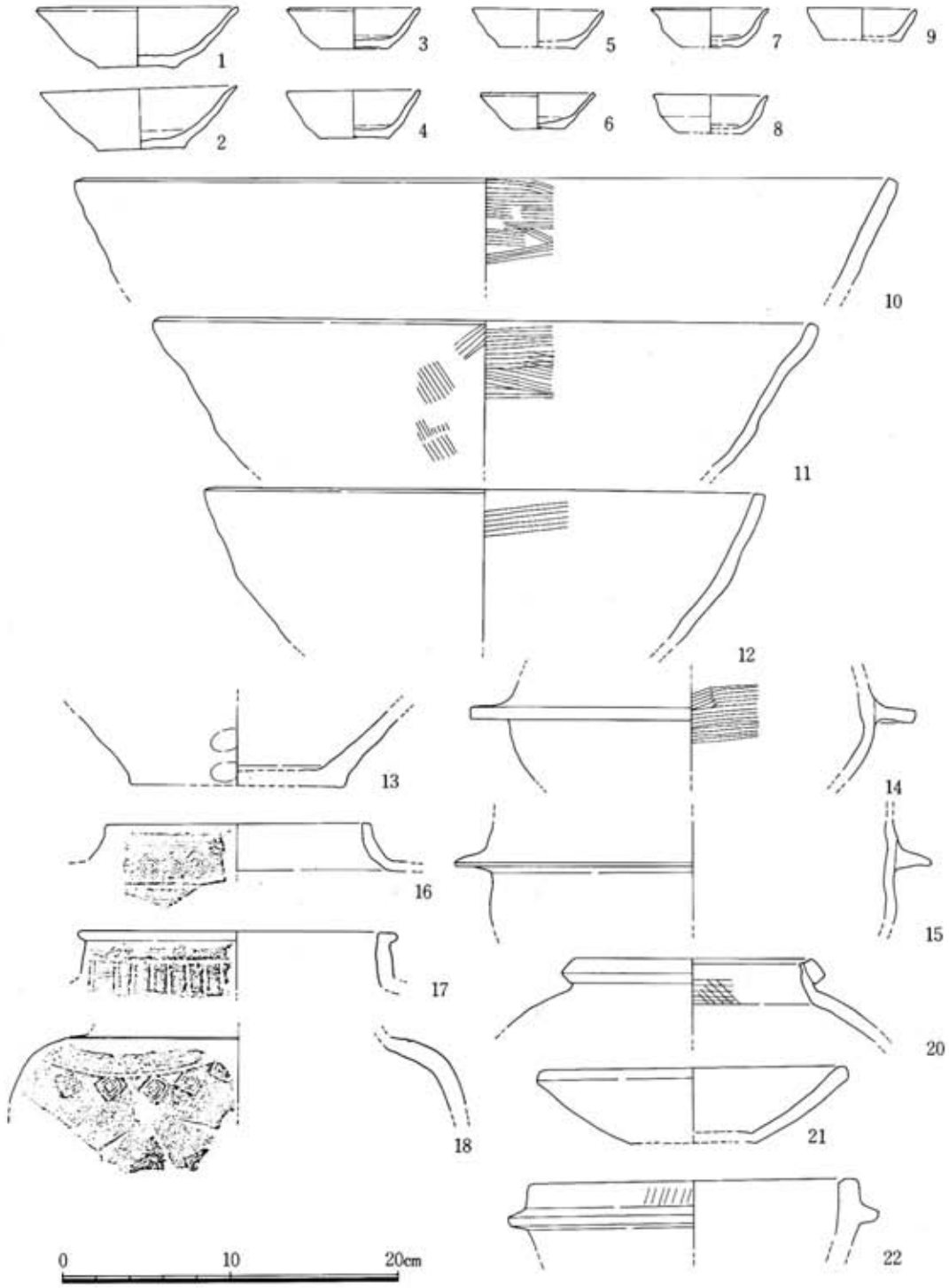


Fig. 120　藤附K遺跡出土歴史時代遺物実測図

杯Ⅰ（1・2）　中型の部類に属する。体部の内湾が小さく，口縁部が外上方へ開くものである。復元口径11.8cm，器高3.6cmを測る。底部外面は糸切り離し痕が残り，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。いずれも外面に黒変が残る。

杯Ⅱa（3～6・9）　小型の部類に属する。体部の内湾が小さく，口縁部が外上方へ開くものである。復元口径6.4～7.8cm，器高1.9～2.85cmを測る。外面底部は糸切り離し痕が残り，他はヨコナデ調整を施す。3の内面に黒変が残る。

杯Ⅱb（7・8）　小型の部類に属する。体部の内湾が大きく，口縁部が外反するものである。復元口径6.8～6.9cm，器高2.3cmを測る。外面底部は糸切り離し痕が残り，他はヨコナデ調整を施す。いずれも内外面に黒変が残る。

鉢（Fig. 120－10～12）

3個体出土した。土師質土器で，口縁部が「S」字状に曲がるもの(11)，まっすぐのびるもの(10)，ゆるやかに内湾するもの(12)がある。復元口径33.4～47.8cmを測る。内面（11は外面にも）にハケ目調整，他は指圧及びナデ調整を施す。外面に煤が付着する。

擂鉢（Fig. 120－13）

1個体出土した。土師質土器である。ナデ調整のあと内面に櫛描文を施す。外面に指圧痕が残る。

羽釜（Fig. 120－14・15）

2個体出土した。土師質土器で，いずれも鍔部である。鍔は横にのび，端部は14が平坦，15が細くて丸い。14の内面及び鍔下面基部より下にハケ目調整を施す。14の内面，15の鍔部より下は黒変が残る。

壺（Fig. 120－16～20）

5個体出土した。土師質土器で，いずれも口頸部及び肩部の一部である。16～19は文様をもつ。20の頸部内面にハケ目調整を施す。16の内外面に黒変が残り，17の外面に煤が付着する。

Ⅲ（Fig. 120－21）

1個体出土した。体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら外上方へ開く。胎土は精選され緻密で，内外面ともにていねいなヘラミガキを施す。内外面に一部黒変を残す。

石鍋（Fig. 120－22）

滑石製で，突帯状の鍔がつく。全面にケズリの痕跡が残る。

4．小　　結

藤附K遺跡は丘陵基部に位置しており，遺構は古墳３基である。いずれも破壊が著しいものである。ST001古墳は竪穴式石室をもつが，腰石２個及び棺底に朱と鉄器を残すのみである。ST002古墳は墓道状の遺構と遺物の分布によって，横穴式石室を想起できるものである。ST003古墳は遺物の分布によって古墳の存在を確認できるのみである。３基の古墳ともに墳丘の形態は不明で，またST003古墳の内部主体も消滅し想像の域を出ない。遺物は，古墳から須恵器・土師器・鉄器・耳環が出土した。時期は，編年が進んでいる須恵器から判断して６世紀末から７世紀後半に比定できよう。

その他，縄文・弥生・中世の各時代の遺物が出土しているが，いずれも遺構に伴うものはなく詳細な時期決定に大きな決め手を欠くものである。

Tab. 21　藤附K遺跡出土歴史時代遺物一覧表　　法量｛①口径 ②器高 ③底径 ④胴部径 ※ ○′は復元法量，残存高｝

番号	器種	挿図・図版番号	分類	出土地点	法量（cm）	色調
1	杯	Fig120 PL104	I	調査区東端	①′11.8 ②3.6 ③4.6	黄褐色，外面黒変。
2	杯	Fig120	I	調査区東端	①′11.8 ②3.6 ③5.2	黄褐色，外面黒変。
3	杯	Fig120	IIa	調査区東端	①′7.8 ②2.4 ③4.1	乳白色，内面黒変。
4	杯	Fig120 PL104	IIa	調査区東端	①′7.8 ②2.85 ③4.8	乳白色。
5	杯	Fig120	IIa	調査区東端	①′7.8 ②2.25 ③4.5	乳白色。
6	杯	Fig120 PL104	IIa	調査区東端	①′6.6 ②2.15 ③3.2	黄白色。
7	杯	Fig120 PL104	IIb	調査区東端	①′6.9 ②2.3 ③′3.2	黄褐色，内面黒変。
8	杯	Fig120	IIb	調査区東端	①′6.8 ②2.3 ③′3.8	黄褐色，内外面黒変。
9	杯	Fig120	IIa	調査区東端	①′6.4 ②1.9 ③′4.6	黄白色。
10	鉢	Fig120		調査区東端	①′47.8	黄褐色，外面煤。
11	鉢	Fig120		調査区東端	①′38.0	黄褐色，外面煤。
12	鉢	Fig120		表採	①′33.4	黄褐色，外面煤。
13	擂鉢	Fig120		調査区東端	③′12.4	黄褐色。
14	羽釜	Fig120		調査区東端	④′21.6	黄褐色，内面黒変。
15	羽釜	Fig120		調査区東端	④′24.0	黄褐色，外面鍔下黒変。
16	壺	Fig120		調査区東端	①′16.8	黄褐色，内外面黒変。
17	壺	Fig120		調査区東端	①′19.0	黄灰色，外面煤。
18	壺	Fig120		調査区東端		黄灰色。
19	壺	Fig120		調査区東端		黄灰色。
20	壺	Fig120		調査区東端	①′7.0	黄褐色。
21	皿	Fig120		表採	①′18.2 ②4.45	淡褐色，内外面黒変。
22	石鍋	Fig120		西方水田	①′19.4	灰白色。

藤附（とうつけ）E 遺跡

遺　跡　名：藤附E（略号ＴＴＫ・E）
遺跡所在地：佐賀市久保泉町大字川久保字藤附

藤附E遺跡

1．遺跡の概要

藤附E遺跡は佐賀県佐賀市久保泉町大字川久保字藤附に所在する。

佐賀平野北部には，天山・脊振山系の南に連なる小山群から派生する数条の舌状丘陵地が南方向に走る。この丘陵地は古来より人々の生活の場であり，各時代にわたっての遺跡が数多く存在する。藤附E遺跡もこれら丘陵の一つに位置する。

藤附E遺跡は長さ約100m，西側水田との比高差約5mの小丘陵地に存在する。東に小さな谷を挟んで平安時代末～鎌倉時代の所産である地下式横穴が出土した藤附F遺跡，更に谷を挟んだ小舌状丘陵地には縄文時代の支石墓や5世紀前半の古墳群が出土した丸山遺跡が位置する。西には古墳3基が確認できた藤附K遺跡が存在する（PLAN.4，PL.56・57）。

藤附E遺跡は諸々の事情から2回に分けて調査を実施した。前回の調査は丘陵基部標高約32～35mのなだらかな傾斜地を対象とした。遺構は5世紀前半～中頃の所産である石棺系石室をもつ円墳（ST001古墳），4世紀末～5世紀初めの所産である方墳（ST002古墳），それに中世の溝2条（SD003溝・SD004溝）と土壙1基（SK005土壙）が出土している。今回の調査は，前回調査地の南西に隣接した丘陵中央部の尾根から西側斜面にかけての約200㎡(註(1))を対象とした。遺構は標高29.75～31mのところから古墳2基を出土した。ST006古墳は箱式石棺をもつ円墳である。またST007古墳は円墳で，内部主体が調査区外にあり形態不明である。この2基の古墳はいずれも内部主体を尾根上にもつ（Fig.121・122，PL.60・61－1・63－1）。

遺物は，遺構に伴うものは皆無で表土から縄文時代の甕底部や中世の鉢口縁が各1点ずつ出土したのみである。

今回出土の2基の古墳について時期を判断する遺物に欠くが，同丘陵上に位置する前回出土の2基の古墳と時期的に大差ないと考えられる。

（註）

(1) 「大門西遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 佐賀県文化財調査報告書第51集 佐賀県教育委員会 1980

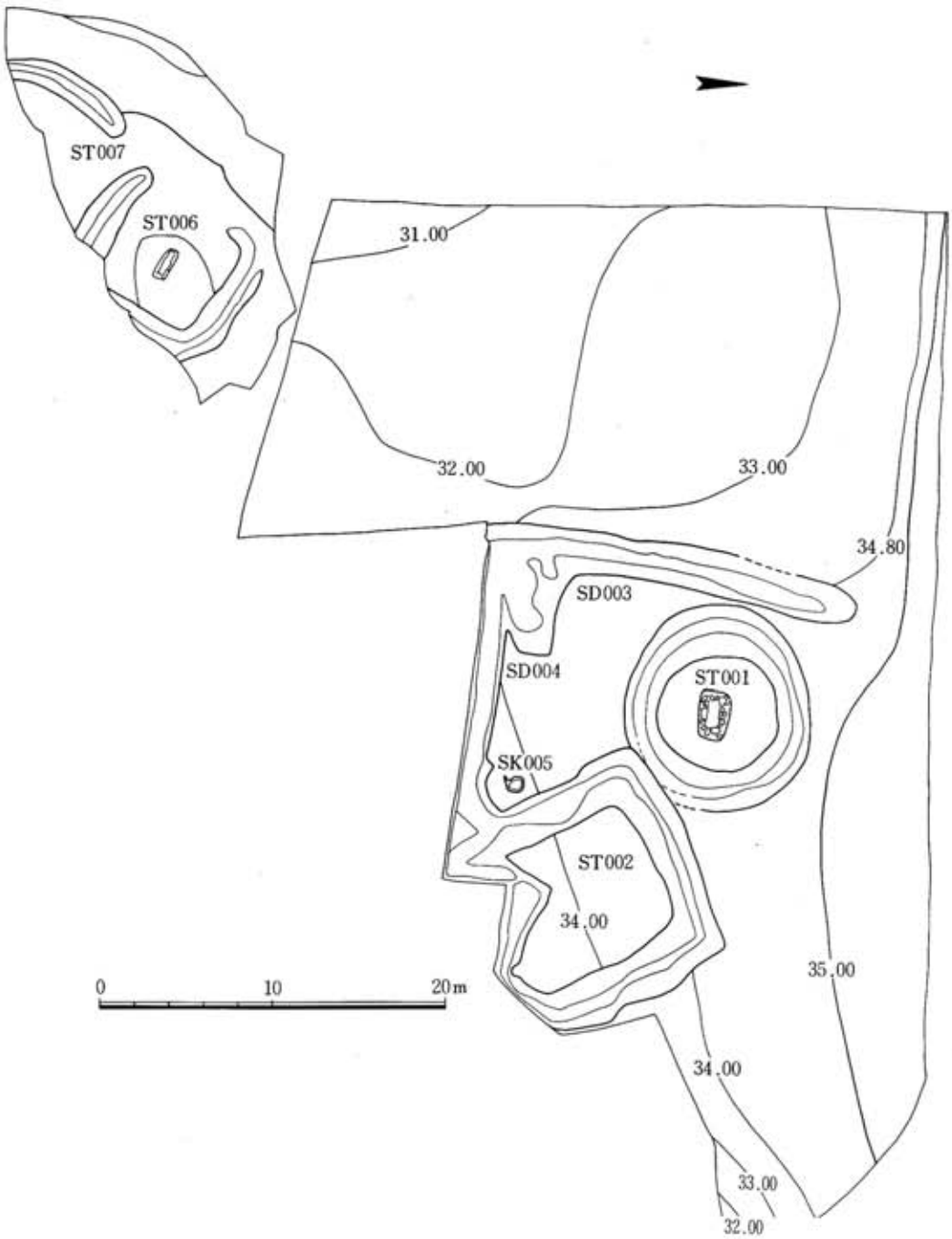


Fig. 121　藤附E遺跡遺構配置図

2．遺　　構

藤附E遺跡からは今回の調査で古墳２基が出土した。ST006古墳は丘陵中央の尾根上に位置し，墳丘径7.0mの内部主体に箱式石棺を有す円墳である。ST007古墳は円墳で尾根上に位置する。内部主体は調査区外のため不明で，周溝が一部出土する。いずれも遺物は皆無である。

ST006古墳（Fig.122～124，PL.61・62）

ST006古墳は箱式石棺を有する円墳である。丘陵中央部の尾根上標高30.25～31ｍに位置する。古墳東南部が崖のため湮滅している。北東及び南西に周溝がみられる。南西方向に接してST007古墳，北東方向約30ｍにST001古墳，ST002古墳が存在する。

墳丘　周溝は幅2.45～2.56ｍ，深さ0.38～0.42ｍで，断面浅いU字形である。南東部が崖のため湮滅している。北西側周溝が存在しないが，北東側周溝底の高さからみて始めから存在しなかったか，また有ったとしても浅いものだったと考えられる。周溝が幾分屈曲する感じをもつことから，方形の周溝を想起させるものであるが確実な断定が得られずここでは円墳として取り扱った。墳丘は直径７ｍで，墳丘のほぼ中央に箱式石棺をもつ。盛土は見られず，地山の上に黒色の表土が堆積する。

内部主体　内部主体は箱式石棺で，墳丘のほぼ中心に長軸をＳ－Ｅ59°にとって築かれてい

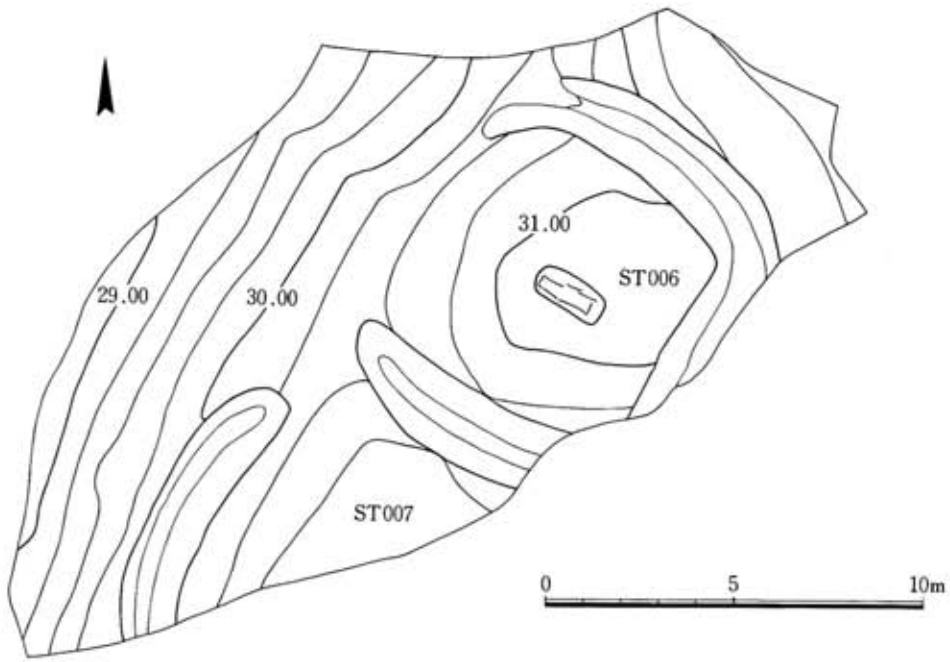


Fig.122　藤附E遺跡ＳＴ006・007古墳墳丘実測図

る。墓壙は長さ1.87m，幅0.6～0.73m，深さ0.25mで，平面東がやや広い隅丸長方形となり，地山に掘り込まれている。石室は長さ1.47m，幅0.35m，深さ0.3mの長方形である。東西小口に各1枚の板石を用い腰石とする。北側壁は3枚の板石を用いるが，中央の板石がやや小型で両板石の長さの不足分を補う形で裏側に立てる。また南側壁は2枚の板石を用いるが，長さが不足するため東端に小型の板石で補う。腰石の板石はすべて小溝を掘って補強している。板石の厚さは4～8cmである。両側壁はやや内傾し，両小口はほぼ直立する。裏込めの石は利用し

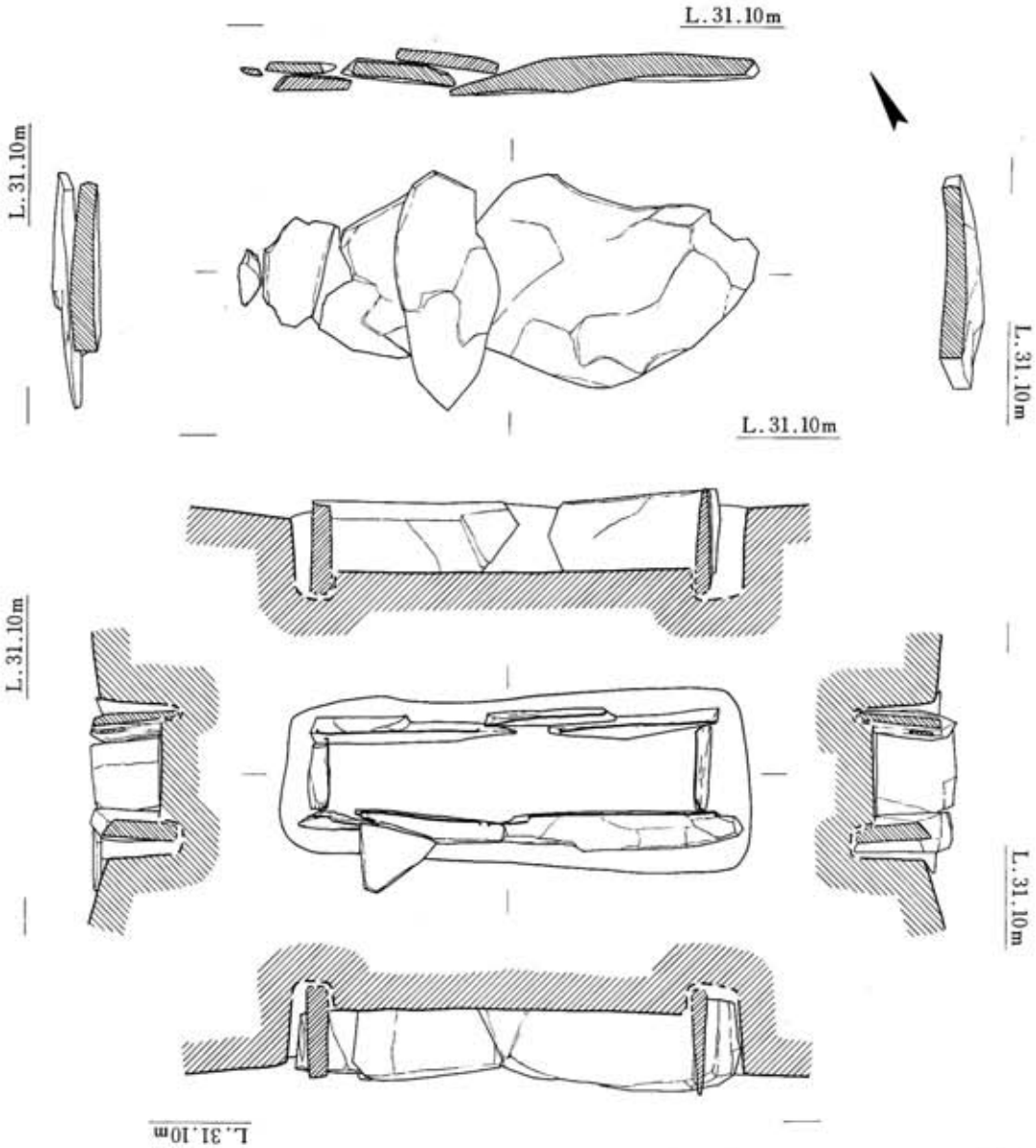


Fig. 123　藤附E遺跡ST006古墳石室実測図

ない。蓋石は東小口の方から，長さ1.23m，幅0.75mの大き目の板石，残り不足分を5枚の中，小型の板石を利用している。石材はすべて緑泥片岩である。遺物は皆無である。

ST007古墳（Fig.122・124，PL.61－1）

ST007古墳は円墳であるが，主体部は調査区外のため不明である。標高約29.75mのところに北西部分の周溝が残存する。幅2m，深さ0.4mで断面浅いU字形となる。北東方向に接してST006古墳が存在する。主体部は周溝の形態からみて丘陵尾根上に築かれている。調査区内では盛土は見られず，遺物も皆無である。

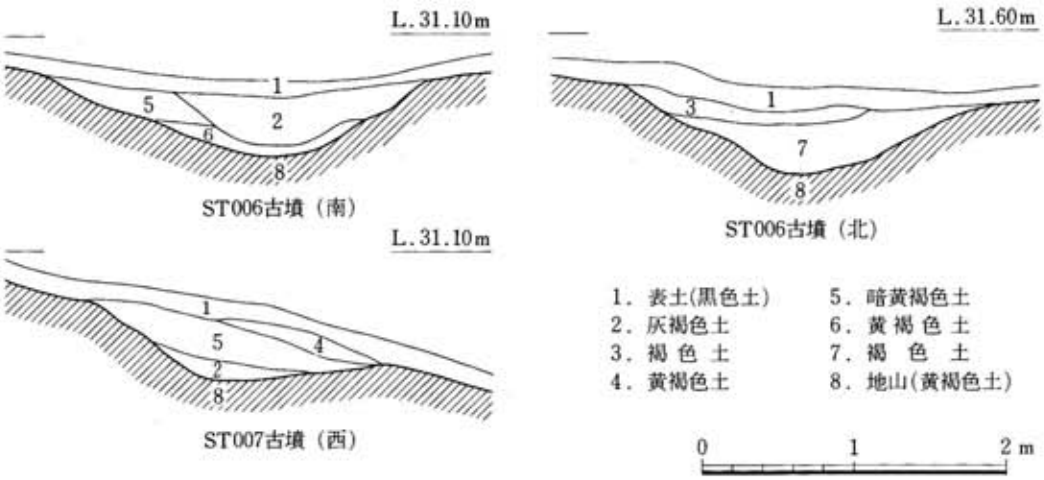


Fig.124　藤附E遺跡ST006・007古墳周溝土層図

3．小　　結

佐賀平野に面する脊振山系南麓の舌状丘陵上に位置する藤附E遺跡からは，２回の調査によって旧石器時代から中世の時期にわたる遺物及び遺構が出土した。

旧石器時代の台形石器，縄文時代の鉢口縁部，甕底部及び石鏃，石匙が出土しているが，いずれも遺構に伴わずすべて表土下層からのものである。

古墳時代としては古墳４基出土している。丘陵基部にST001古墳とST002古墳，それに南東約30ｍの丘陵中央部尾根上にST006古墳とST007古墳がそれぞれ隣接して存在する。ST001古墳は墳丘径6.7mの円墳で，内部主体に石棺系石室をもつもので周溝より土師器の小型丸底壺が出土している。ST002古墳は一辺約10ｍの隅丸方形の墳丘をもつ方墳で，主体部は大きく削平を受けて消滅し不明である。北西側周溝から二重口縁を有する土師器の壺が出土している。ST006古墳は墳丘径７mの円墳で，内部主体に箱式石棺をもつものである。周溝がやや屈曲し隅丸方形の形状に類似していることから，ST002古墳と同じく方墳の可能性も考えられるが断定をするまでにはいかなかった。ST007古墳は主体部が調査区外のため，内部主体の形態が不明の円墳である。この４基の古墳の時期は遺物ならびに立地等から判断し，４世紀末から５世紀中頃に比定できよう。

中世の所産として２カ所の古墳立地点を画するようにSD003溝・SD004溝，及びSK005土壙が存在するが，その性格は不明である。遺物として外底部に糸切り痕をもつ土師器杯が出土している。

以上のように藤附E遺跡では旧石器時代，縄文時代，古墳時代，中世の足跡をたどることができる。特に注目すべきはST002古墳の検出である。

三郎山（さぶろうやま）遺跡

遺　跡　名：三郎山（略号ＳＲＹ）
遺跡所在地：佐賀市金立町大字金立字十一本杉

三 郎 山 遺 跡

1．遺跡の概要

三郎山遺跡は佐賀市金立町大字金立字十一本杉に所在する。

佐賀市の北部山麓は脊振山系から佐賀平野に高度を下げながらいくつもの山々が南に伸びているが，そのうちの一つ，金立山（標高501.8m）から派生する丘陵の基部に遺跡はあり，九州横断道関係の遺跡では佐賀市の最西端に位置する。標高は40～50ｍで，佐賀平野を一望のもとに見渡すことができる。

周辺には各時代の多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は，当遺跡の東方200ｍの大

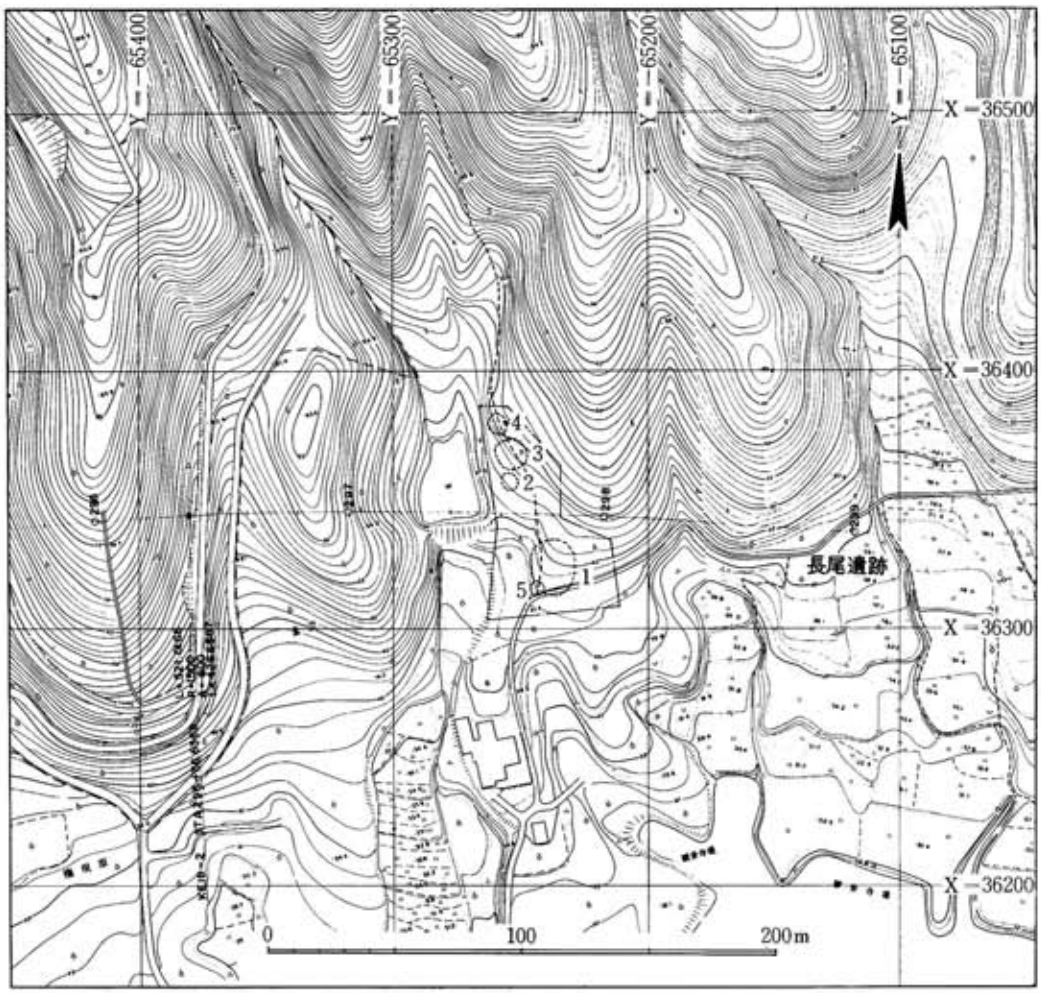


Fig. 125　三郎山遺跡付近地形図

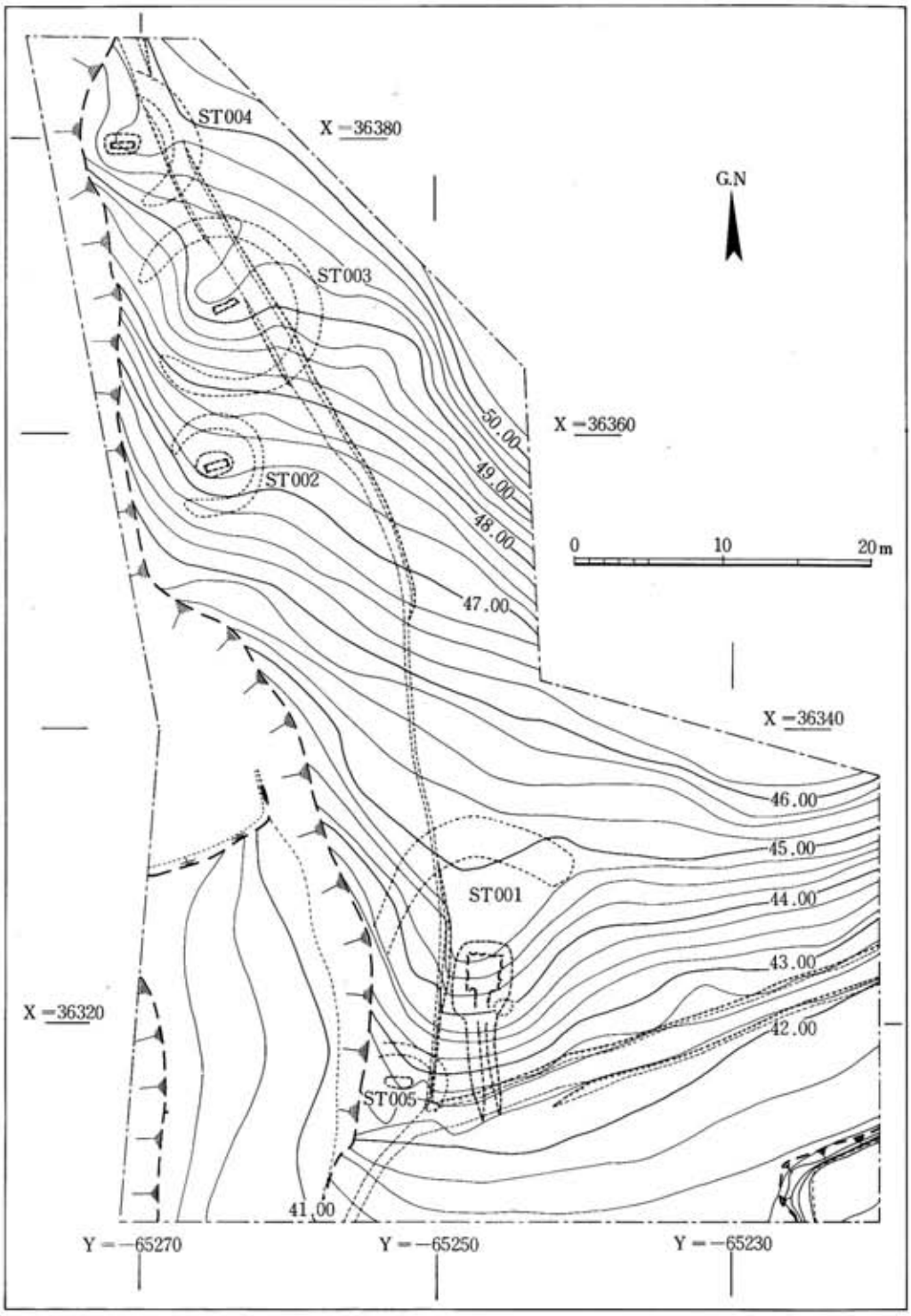


Fig. 126　三郎山遺跡発掘調査前地形測量図

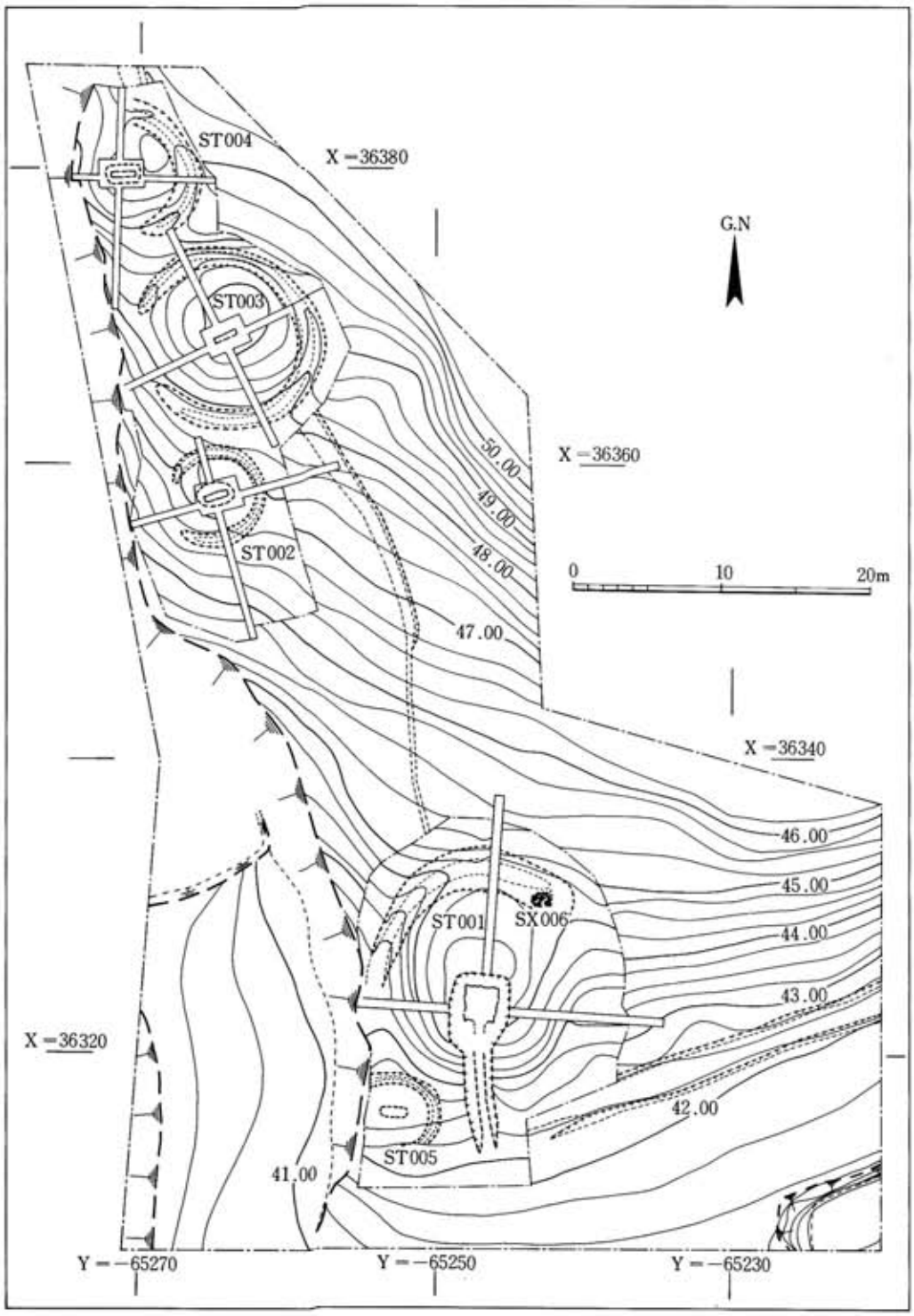


Fig. 127　三郎山遺跡遺構配置図

門西遺跡，東１kmに丸山遺跡(註①)，西原遺跡(註②)がある。弥生時代の遺跡は，大門遺跡，六本黒木遺跡(註③)，金立開拓甕棺遺跡(註④)，惣座遺跡(註⑤)などがある。古墳時代の遺跡は西隈古墳，銚子塚，築山古墳，船塚(註⑥)などの前方後円墳や，黒土原古墳群，乱闘山古墳群，大門古墳群，金立古墳群，西原古墳群などの後期群集墳の存在が知られている。また古墳時代の住居跡は西原遺跡で５基報告されている。

歴史時代の遺跡は，丘陵一つ隔てた東方の長尾遺跡の建物跡，大門遺跡の平安期の住居跡，南方の肥前国府跡，国分寺跡，国分尼寺跡，大願寺廃寺(註⑦)などがあり，古くは佐賀平野北部一帯が政治の中心(註⑧)であったことがうかがえる。また遺跡北東300ｍには創建が平安時代とみられる金立神社がある。この神社は佐賀平野を見おろす金立山にあって，本宮には保食神である罔象女命と秦の始皇帝の命で渡来したという伝説の徐福が祀られている。山頂には奥の宮があり，保食神の祖とされている若御魂の神を祭神としている。中宮は東側山腹にあり，猿田彦大神，白鬚大明神を祀っている。また山麓に下宮があるが祭神は本宮と同じである。この神社の名は「三代実録」にも登場し，貞観二年（860）二月八日の条に「正六位から従五位下に昇叙された」と記されている。しかしながら「延喜式」には登場せず式内社とはなっていない。社格は旧郷社であった（Fig.125，PL.64)。

佐賀市北部山麓一帯は，ミカン園などの造成時に機械力が導入され，六本黒木，金立開拓，藤附，西原の各遺跡等に見られるように遺構の大半が削平されているが，丸山遺跡などのように山林のため原状に近い状態で調査できたところもあり，当遺跡も以前は林野であったためか人為的な破壊を受けたものはST001・ST003・ST005古墳の三基だけで幸いであった。

三郎山遺跡では，古墳時代の遺構を検出した。遺構は石棺系の竪穴式の古墳３基，石蓋土壙墓が１基，横穴式の古墳１基，集石遺構１基である。遺跡は西側の崖と東側の急勾配の丘陵とに挟まれた，比較的なだらかで南北に長い地形に存在する。遺跡の北端部にST002・ST003・ST004の各古墳，南端部にST001・ST005古墳とSX006集石遺構がある(Fig.126・127，PL.65・66)。

遺物はST001古墳出土のものだけで，他は検出できなかった。

2．遺　　構

ST001古墳（Fig.128・129・136，PL.67～70）

ST001古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳で調査区の南端に位置し，床面標高は約43m，すぐ西にST005古墳がある。天井石は石室内に落ち込んでいた。墳丘西端は崖と林道でやや墳丘が削られている。

墳丘　周溝は，幅2.8m，深さ0.3mで，墳丘の西から北東に延びているが，原形は墳丘を一周していなかったと考える。墳丘は，南北に15.5m，東西に13mの楕円形である。盛土下部に

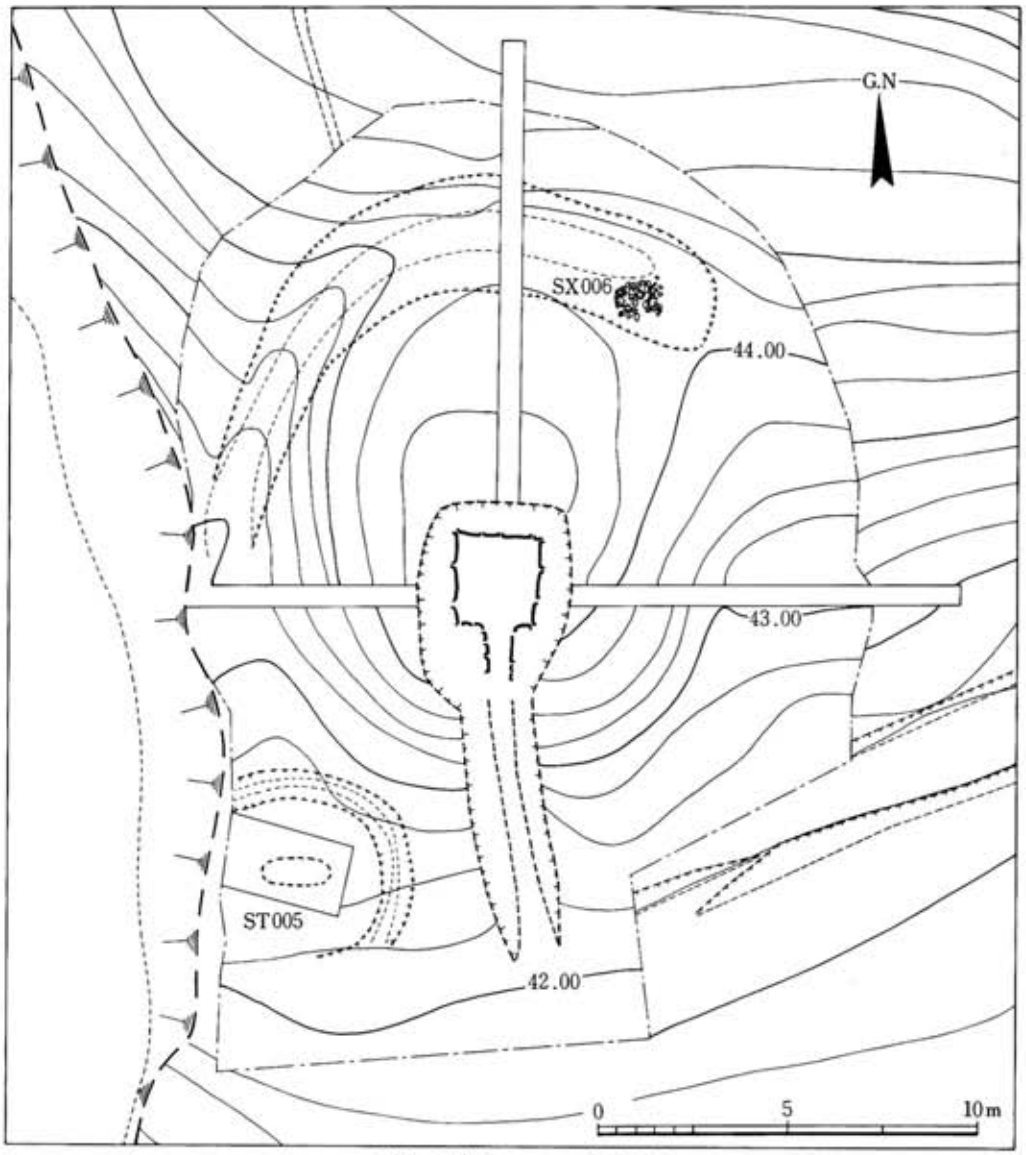


Fig. 128　三郎山遺跡ST001古墳墳丘実測図

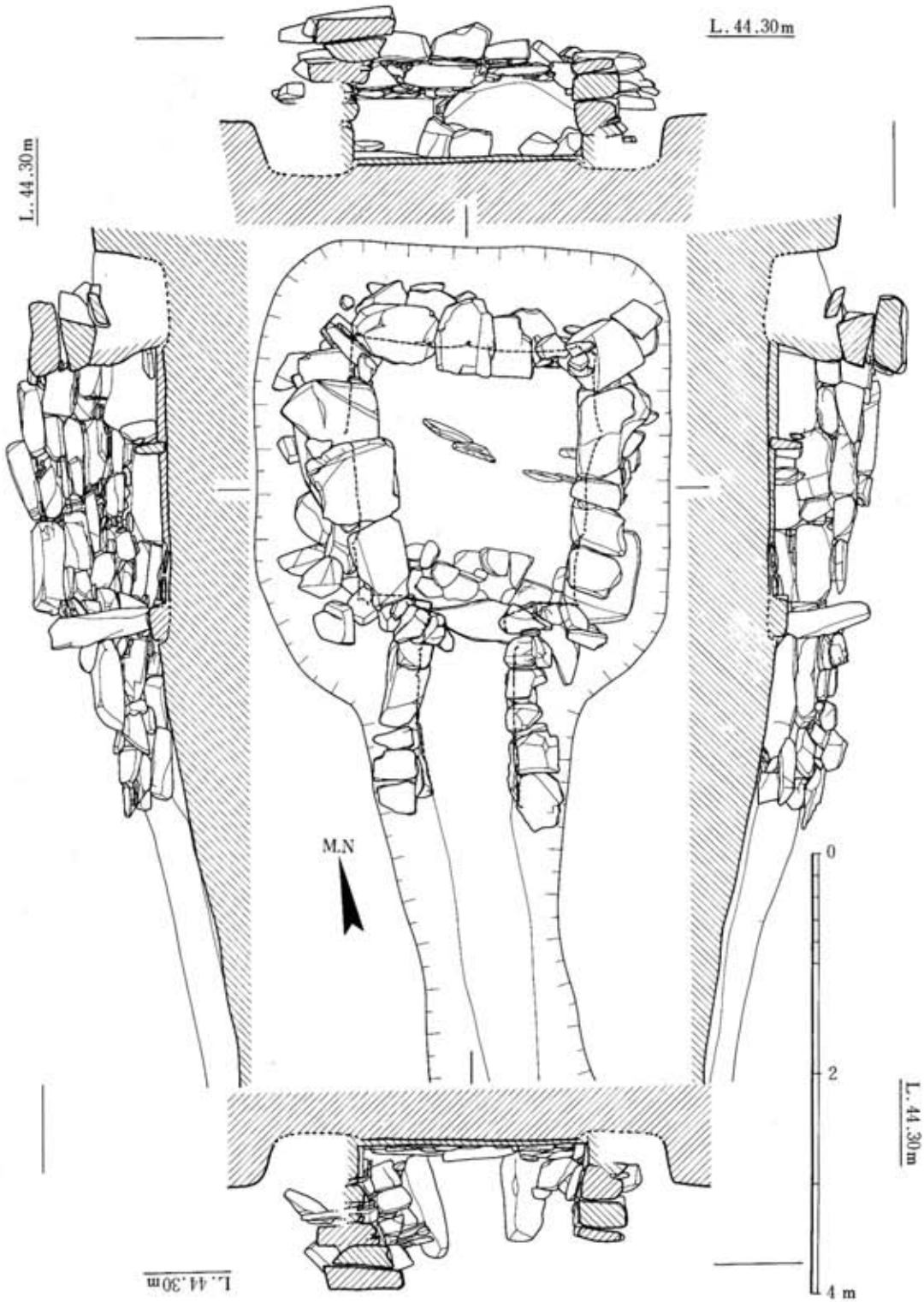


Fig. 129　三郎山遺跡ST001古墳石室実測図

は，すべて黒褐色の旧表土が見うけられ，そこから石室の掘り込みがなされている。掘り形の排土は腰石の裏込め土として使用している。盛土は，旧地表から1.1m残っている。

内部主体　単室の横穴式石室であり，南北方向に主軸を置き南に開口している。石室の掘り込みは均整のとれた羽子板状で，旧地表面から約0.7～0.8m程度の深さである。玄室は両袖式のもので，平面は南北にやや長い。奥行2.5m・横幅2.0m・玄門の幅0.7mである。腰石は幅0.7～1.0mのものが，奥壁に2個・両壁に各々3個据えてある。各壁の石は腰石より小さめの扁平なものを用い，順次持送り，奥壁3段・西壁5段・東壁4段が残存している。石材は花崗岩が8割，片岩系が2割で，西側壁に多く片岩系の石材を使用している。玄室床面は5cm程度の貼り床で平坦である。敷石は玄室南端に扁平な石が十数個，東西に幅0.5mに渡って残存している。また玄室東部中央から中心部に，4個の石が障石のような配列で立てられているが，玄室プランと平行でない。玄門は幅0.7mの仕切石を間に置き，高さ0.9mの左右同じくらいの袖石を配置している。羨道は幅0.8m・長さ2.2m・残存高0.6mで扁平な石を基本的には3段積み上げている。墓道は上面幅1.5m・底面幅0.6m・最深部0.4m・長さ7mで南部に下るにつれて浅くなる。断面はゆるやかなU字形である。墓道南端の平面形は林道に削平されていて不明である。

遺物は墓道と墳丘下の旧地表面上から須恵器・土師器・紡錘車，玄室床面からは土師器皿と鉄鏃・刀子・馬具・耳環を検出した。

ST002古墳（Fig.130～132，PL.71～73）

ST002古墳は石棺系石室を内部主体とする円墳で，調査区西端に位置する。標高は約47mで主軸を東西にとっている。

墳丘　墳丘径は4.8mで，地山面から0.5m程の盛土を有する。盛土は旧表土と地山の土を使用している。周溝は馬蹄形で上面幅1m・底面幅0.4m・深さ0.2mでゆるやかなU字形をした掘り込みである。周溝の埋土は全体に黒色土である。

内部主体　内部主体は墳丘のほぼ中央に有り，旧地表を整形して地山に長軸2.7m・短

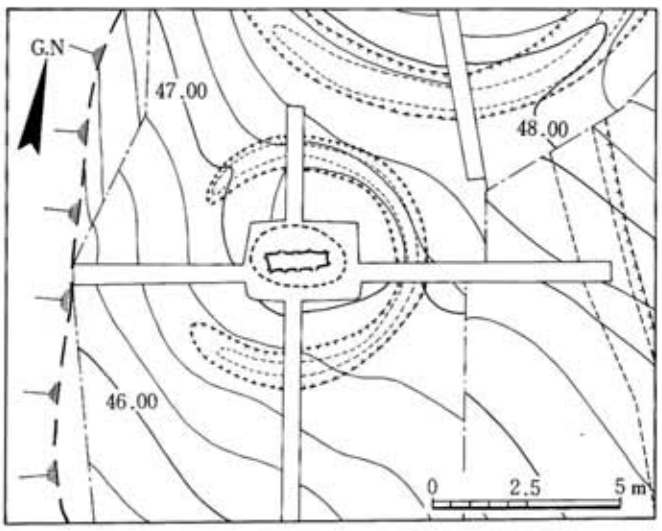


Fig.130　三郎山遺跡ST002古墳墳丘実測図

軸1.6mの楕円形状に掘り込まれた竪穴に石室が造られている。蓋石は完全な状態で検出し，長さ0.7～0.8mの扁平な花崗岩を基本的には5個使用している。またそのまわりには20cm程度の小石を，目貼りとして補強している。側壁や小口は0.4～0.5mの石を腰石に用い，両側壁に各々4個，小口に各々1個使用している。その上に厚さ10cm程度の石を3段～4段積んでおり，その石間には小石材を用いている。石材は花崗岩と片岩系で，上の方の石ほど片岩系の石材を多く用いているが，不揃いでつくりは粗い。石室の規模は内法で長さ1.73m・幅0.45～0.52m・深さ0.53mをはかる。石室床面には西壁と東壁寄りに十数枚の幅10cm・厚さ2cm程度の平石を敷石として使用しており，敷石の数は西壁に集中している。これは，東小口部が西小口部より5cm程度広く，調査区東部から西部にかけて傾斜していることから，頭部を東にしていたと思われる。

遺物は主に墳丘盛土と堆積土中より検出したが，そのほとんどが縄文式土器片である。石室内からは何も検出されなかった。

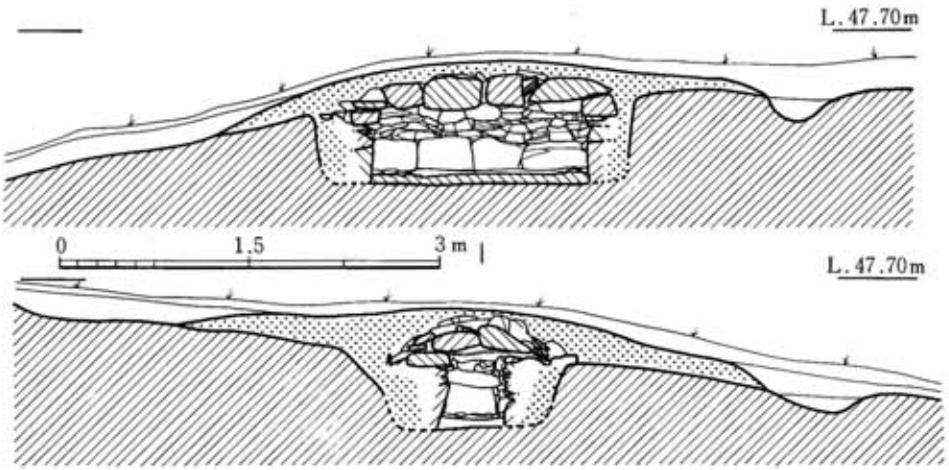


Fig.131　三郎山遺跡ST002古墳墳丘土層断面図

ST003古墳（Fig.133・134・137，PL.74～76）

ST003古墳は石棺系石室を有する円墳で，調査区の西端にあり，ST002古墳のすぐ北側に位置する。標高は49mで主軸を東西にとる。蓋石はすでになく盗掘を受けていたが石室内は全面赤色顔料が付着している。

墳丘　南北径11m，東西径約9mで南北に長く，盛土は地山の黄褐色土を積み上げており，旧地表から約0.6mほどである。盛土は下層がこまめに積み上げられ，上層は単一土の様相を示す。周溝は馬蹄形で，上面幅1.5m・底面幅0.5m・深さ0.25～0.5mでなだらかなU字形の断面をなす。

内部主体　内部主体は墳丘のほぼ中央にあり，旧表土からU字形の竪穴を掘って造られてい

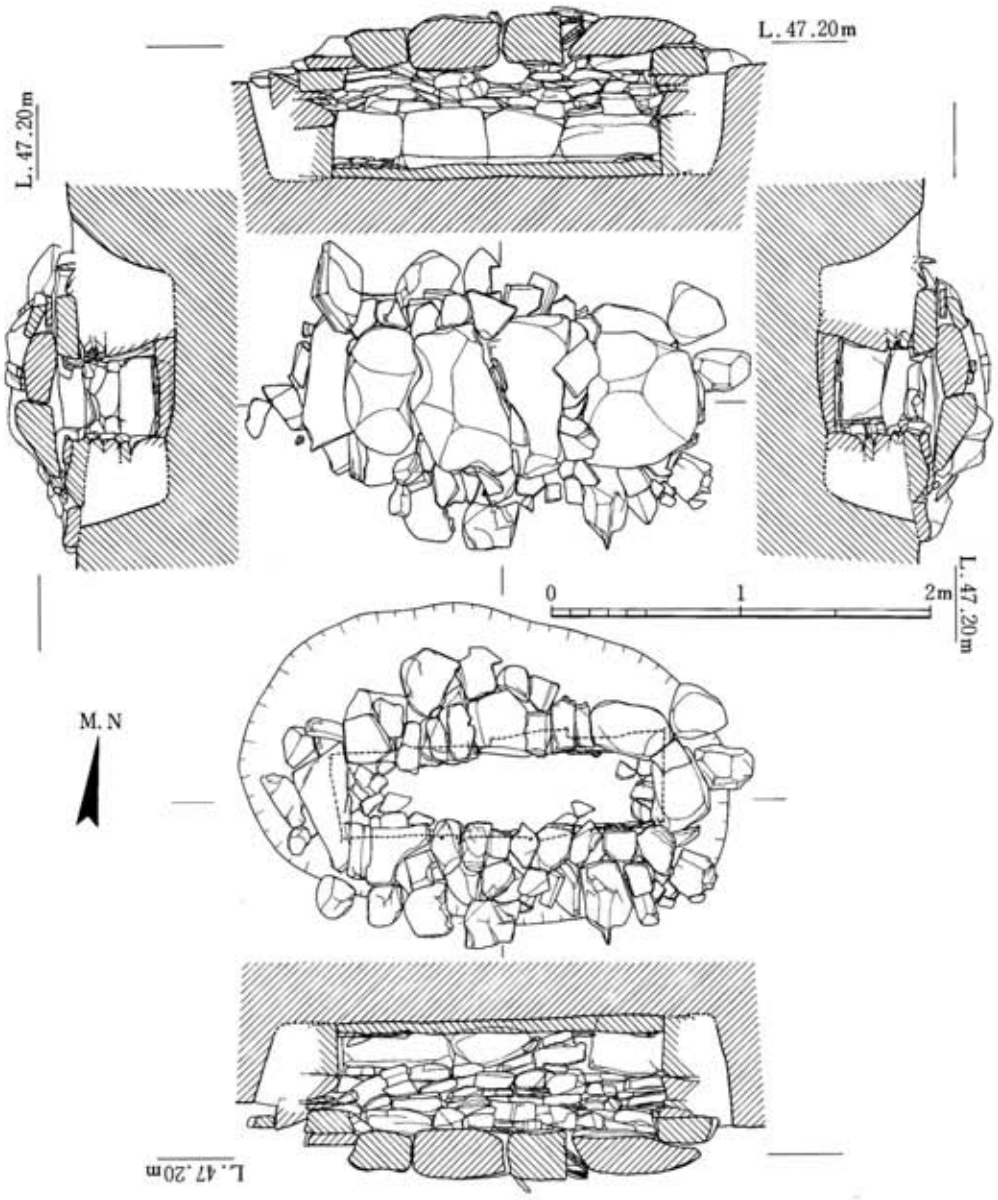


Fig. 132　三郎山遺跡ST002古墳石室実測図

る。蓋石は破壊され付近にはない。石室は旧表土から地山まで30cmほど浅く掘り下げてその中に造られている。両側壁の腰石は0.4～0.6mの片岩系の石材を北壁に4個，南壁に3個，両小口は花崗岩の板石を1個使用している。その上に片岩系の板石を3，4段小口積みにし，その隙間には小石を用いている。両側壁の中央付近がややせりでて壊れかけている。規模は内法で長さ1.65m・幅0.37m・深さ0.5mを測る。床面は地山面に0.15mほどの土を貼って，その上に径5～20cmの敷石を貼っているが，盗掘されて一部に原位置ではないものもある。東壁部に他の敷石と較べると大きい石が3個置かれているが，これは石枕であろう。ただし植物の根により原位置は留めていない。床面は東壁部が西壁部に較べてわずかに広い。

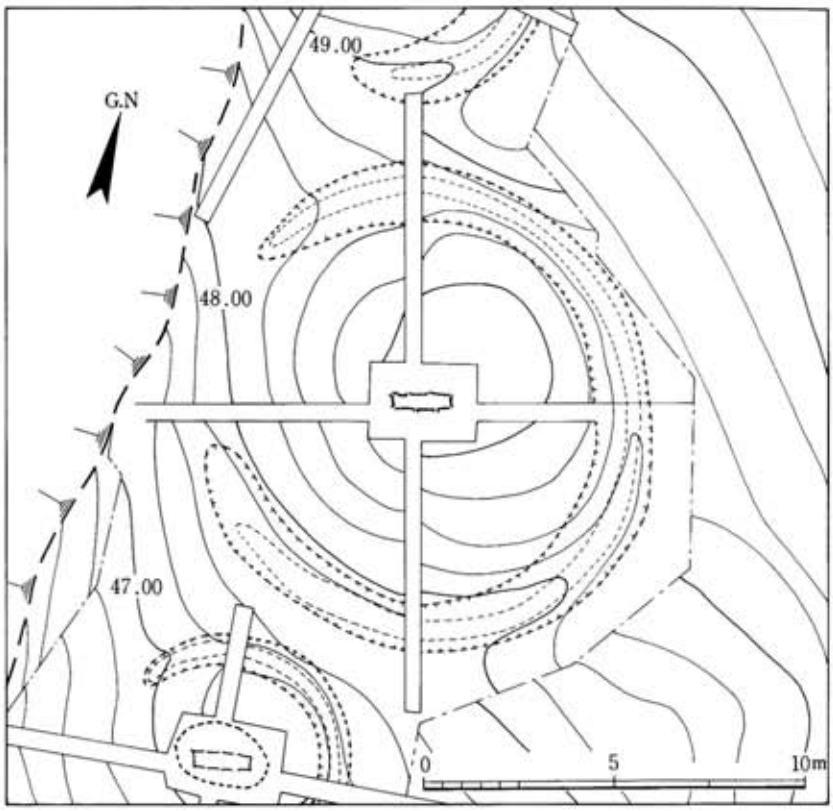


Fig. 133　三郎山遺跡ST003古墳墳丘実測図

遺物は，そのほとんどが縄文式土器片で，周溝の埋土や墳丘北部の堆積土中より検出した。

ST004古墳（Fig.135・138・139，PL.77～79）

ST004古墳は竪穴式石室を有する円墳で調査区の最北端にあり，ST003古墳の北に位置する。標高は50mで主軸を東西にとる。破壊は受けていない。

墳丘　南北径7.8m・東西6mで南北に長く，墳丘東側を林道が通っているため少し削平を受けている。墳丘は旧地表を整形して，その上に約30cmほど褐色と黒褐色系の土が盛られているがこまめな積み上げはなされていない。周溝は馬蹄形と思われるが西側が削平を受け原状は不明である。上面幅1.5～2.0m・底面幅0.5m・深さ0.2mである。

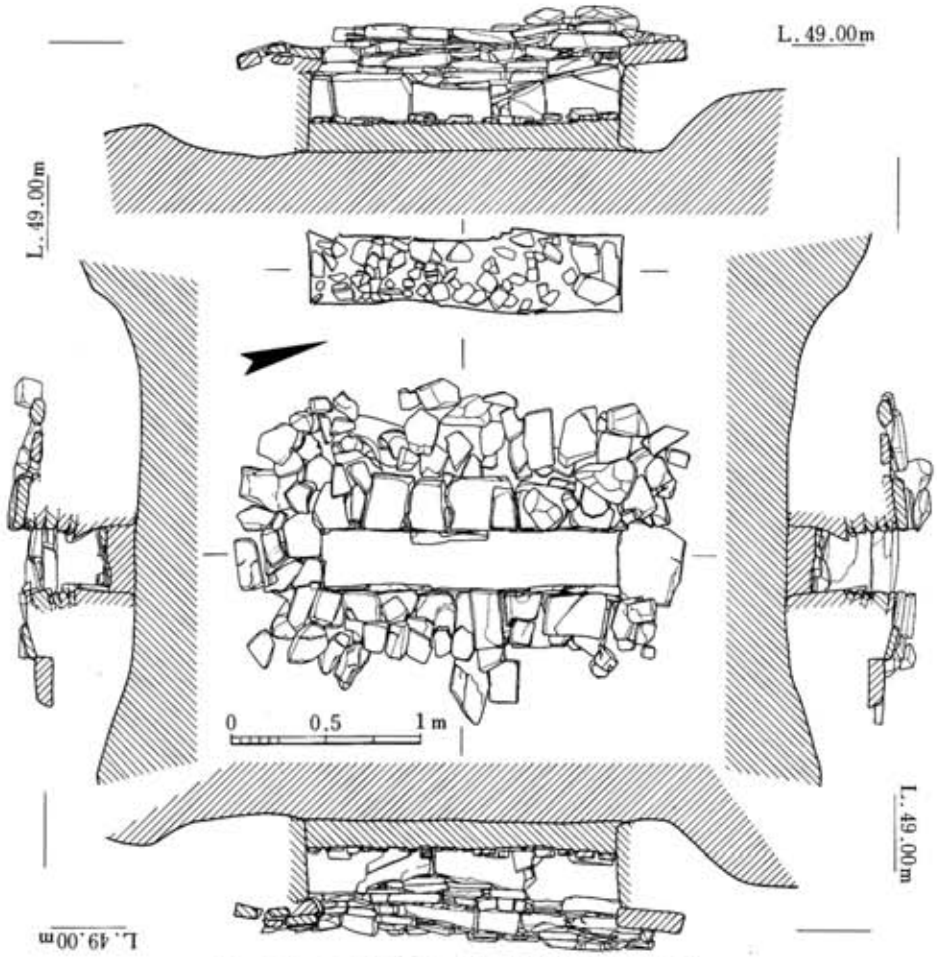


Fig. 134　三郎山遺跡ST003古墳石室実測図

内部主体　内部主体は地山整形後，深さ0.5m・東西2.4m・南北1.4mの隅丸長方形の竪穴を二段掘りに掘り込み，その中に造られている。蓋石は盛土下0.45mにあり，0.6～0.8mの扁平な石が4個使用され，蓋石の間に目貼りの粘土を検出した。蓋石は西の方から順に重ねられたと考える。両側壁は片岩系の割石を小口積みにしており，両小口は花崗岩の板石を1枚用いている。つくりはよく丁寧である。石室の規模は，長さ1.7m・幅0.3～0.4m・深さ0.6mである。床面は腰石の底面より4～6cm低く，貼り床の存在も考えたが差異は認められな

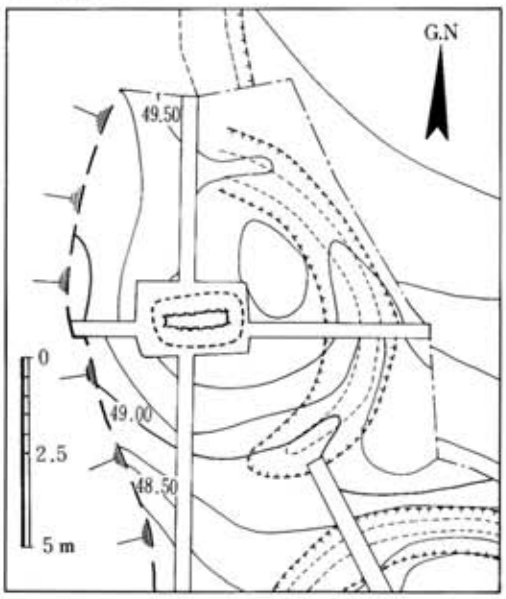


Fig. 135　三郎山遺跡ST004古墳墳丘実測図

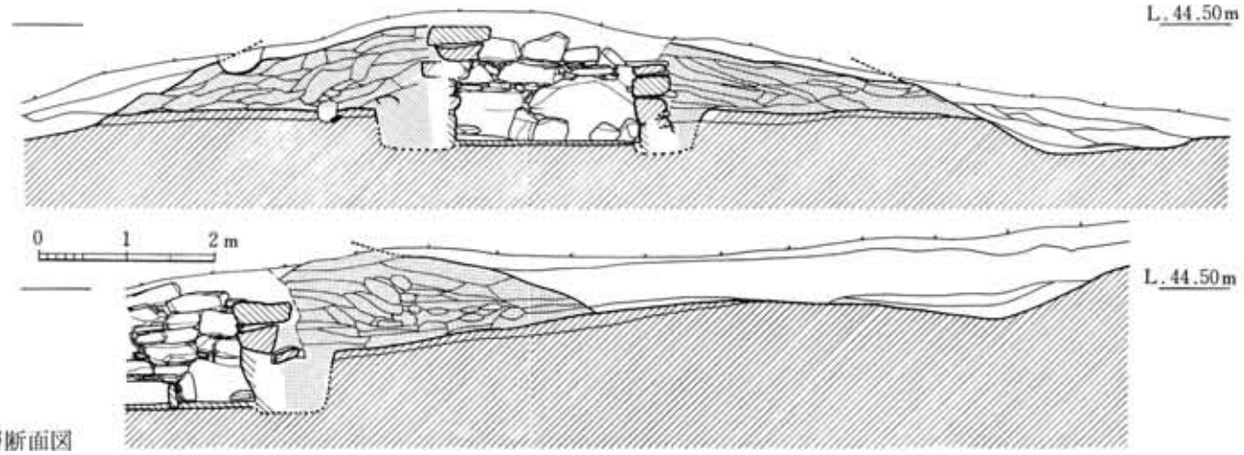
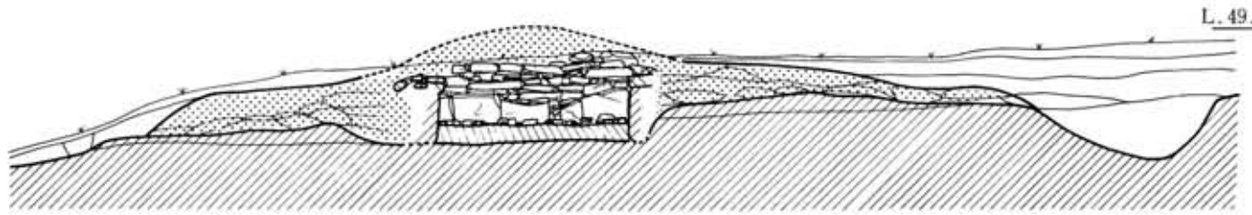


Fig. 136　三郎山遺跡ST001古墳墳丘土層断面図



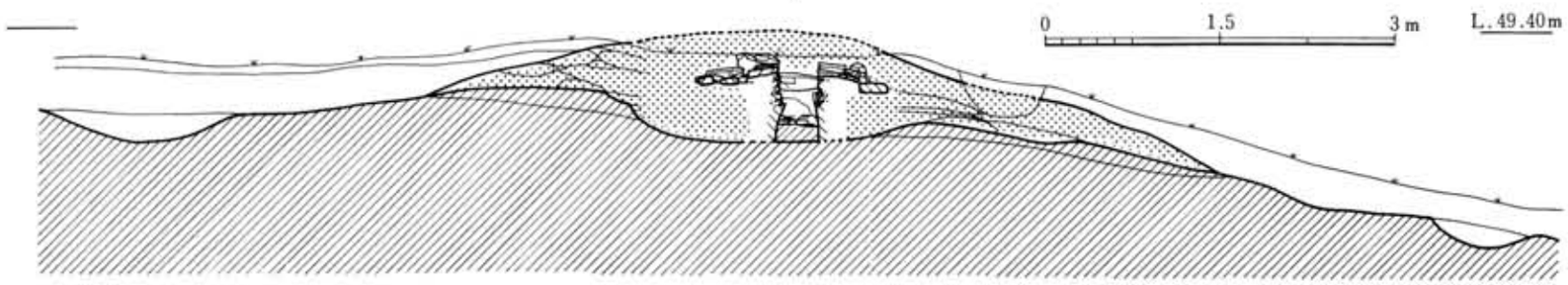


Fig. 137　三郎山遺跡ST003古墳墳丘土層断面図

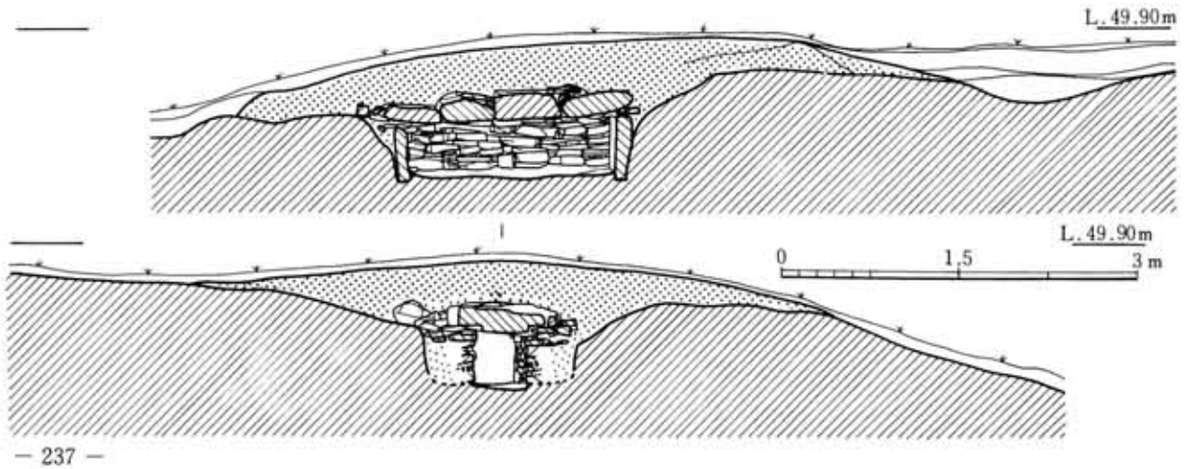


Fig. 138　三郎山遺跡ST004古墳墳丘土層断面図

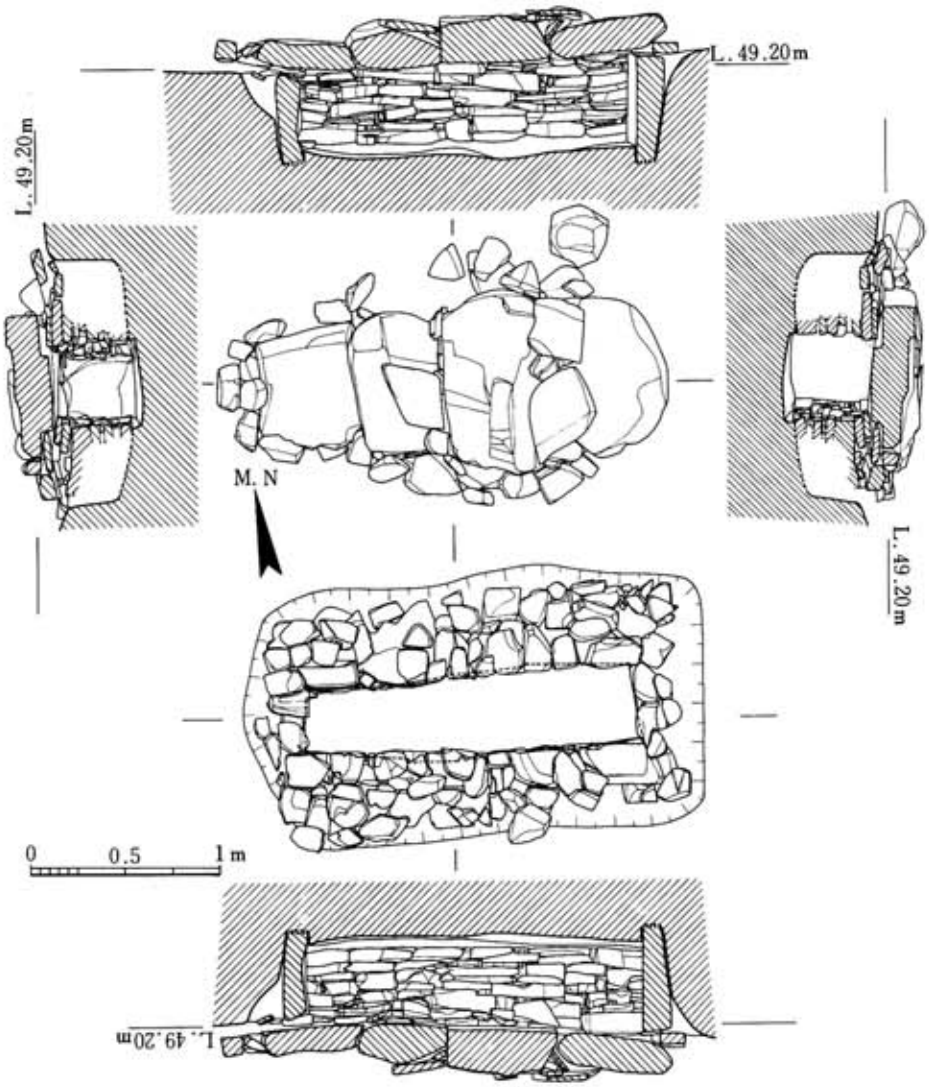


Fig. 139　三郎山遺跡ST004古墳石室実測図

かった。床面はやや起伏があり北から南へ傾斜している。幅は東端が広く遺体は頭部を東に向け安置されていたと考える。

遺物は石室内からは検出されなかったが，堆積土・盛土中より数点の縄文式土器片を検出した。

ST005古墳（Fig.140・141，PL.80・81）

ST005古墳は石蓋土壙墓を内部主体とする円墳で調査区西南端にあり，ST001古墳の南西墳丘に周溝の一部が覆われていた。西側の一段低い所は柿畑であり，この畑の造成時に周溝の一部が削平されたのであろう。石蓋は半壊して原位置をとどめていない。

墳丘　原状は，盛土はある程度存在していたと考えるが現状はまったくない。ST001古墳造築時にも意識されずその墳丘下部になっていることから，さほど際だった墳丘ではなかったと思われる。周溝は主体部の北西から南東部にかけて存在し，上面幅0.4～0.6m・床面幅0.2m・深さ0.2mで，ゆるやかなU字形の掘り込みである。北西部と南東部は崖と山道によってそれぞれ削平を受け平面形は明らかでない。

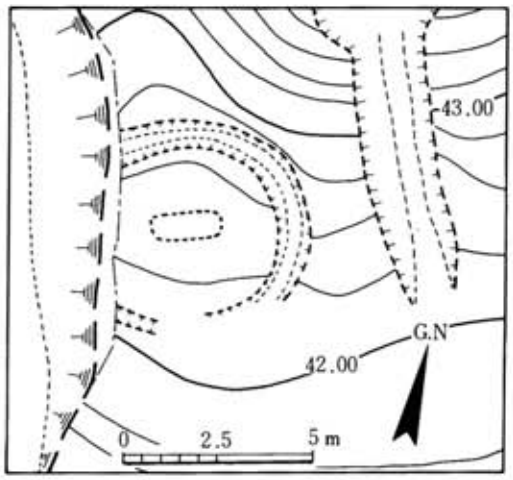


Fig. 140　三郎山遺跡ST005古墳墳丘実測図

内部主体　内部主体は，地山に掘り込まれた石蓋土壙墓で主軸を東西にとっている。蓋石は内部主体東半部に存在し，西半部は樹木の根により破壊されていた。存在している蓋石は長さ0.4～0.6m程度のものが5個ある。竪穴の土壙は長さ1.68m・幅0.75m・深さ0.32mで，平面形は隅丸方形である。床面はゆるやかな起伏があり，貼床，敷石の類は存在しない。この土壙の掘り込み面には0.2～0.3m程度の小石がめぐり，その上に蓋石を乗せている。これは蓋石の重みで土壙が崩れないための配慮と考える。

遺物はST001古墳の墳丘にあった須恵器が周溝堆積土中に混入していたのみで，この遺構に伴うと考えられるものは何も検出されなかった。

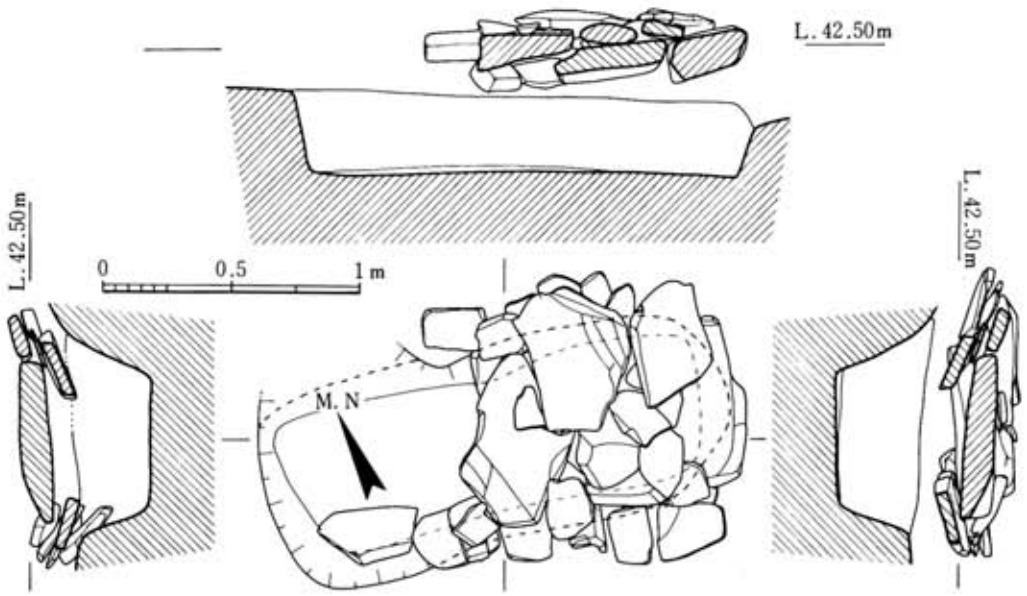


Fig. 141　三郎山遺跡ST005古墳石蓋土壙墓実測図

(2) 歴史時代

SX006集石遺構（Fig.142, PL.82－2）

SX006集石遺構はST001古墳の北部周溝内に位置し，標高は44ｍである。

遺構は周溝堆積土上層から検出し，ST001古墳に伴うものではない。集石の広がりは東西に1.7ｍ・南北に1.1ｍで東西に長い楕円形である。石は0.05～0.2ｍ程度の扁平なものを用い幅0.2ｍ・厚さ0.05ｍ程度の石が集石の主流をなす。掘り形はない。石材は花崗岩と緑泥片岩を用いている。これらの石のほぼ中央に土師器の高台付椀が１個体置かれていた。

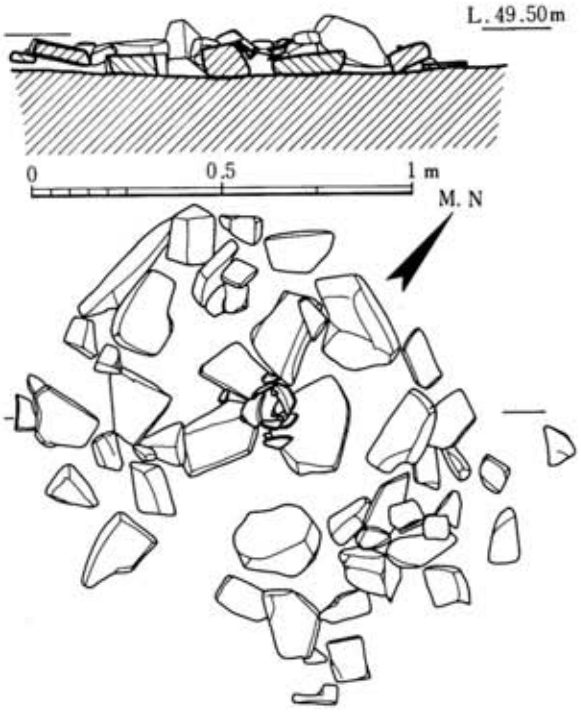


Fig.142　三郎山遺跡SX006集石遺構実測図

3．遺　　物

(1) 縄文時代

土器

三郎山遺跡から縄文時代の土器としては,先述したように各古墳の墳丘盛土内や周溝埋土，表土剝ぎ中に出土したものばかりで遺構に伴うものではない。またその量も極少ないので,簡単な記述だけにとどめる。

出土した縄文土器は甕や鉢の小片で実測できるものはなかった。ただ浅鉢の口縁部片が1点あり，「く」の字状に屈曲する胴部に外反する短い口縁部がつく。縄文時代晩期前半のものであろう。他の小片も同時期と考える。

石器（Fig.143，PL.108－2）

いずれも表面採集や古墳の盛土，周溝から採集されたものである。また,時期が明らかなものは1点もないが，一応ここに記述する。

スクレイパー（Fig.143－1・2，PL.108－2）

黒曜石の剝片は少量検出されたがスクレイパーとして2点ある。**1**は縦長剝片の両側縁に細かい調整剝離を施し刃部をつくっており，基部に自然面を残す。完形品で器長4.8cm，器幅2.2cmを測る。**2**も**1**と同様で，器長5.3cm・器幅2.5cmである。

石鏃（Fig.143－3～7，PL.108－2）

3はST003古墳周溝埋土から検出されたもので，サヌカイト製。基部に抉りがなく2等辺3角形である。裏面の縁辺をよく調整剝離している。器長4.9cm・器幅2.5cmである。**4**は先端部が欠損しているサヌカイトの石鏃で，全面に調整剝離をしているが両面とも磨滅が著しい。基部に抉りがみられる。現存器長2.3cm・器幅2.0cmである。**5**も**4**と同じ出土地点で検出したもので，基部に抉りがある。サヌカイト製で先端部が欠損している。現存器長1.9cm・器幅1.5cmで磨滅している。**6**・**7**は黒曜石製で各々欠損している。**6**は非常に細かく調整剝離を表面にしているが，裏面は剝片のフラット面のままで，現存器長2.5cm・器幅2.1cmである。**7**は全体に粗い調整剝離をしており，現存器長2.6cm・現存器幅2.0cmである。**6**は基部の抉りが深く脚部の先端が平坦になっており，**7**は抉りが浅く先端部が尖る。

磨製石斧（Fig.143－8・9，PL.108－2）

2点出土した。**8**はST001古墳の墳丘盛土から採集した頭部片で，頁岩質の石材でつくられよく研磨されている。断面楕円形で最大厚2.9cmである。**9**は表面採集である。粘板岩質で全体が磨滅して風化が著しく，裏面が1部欠損している。全長16.2cm・刃部幅5.2cmで，断面は

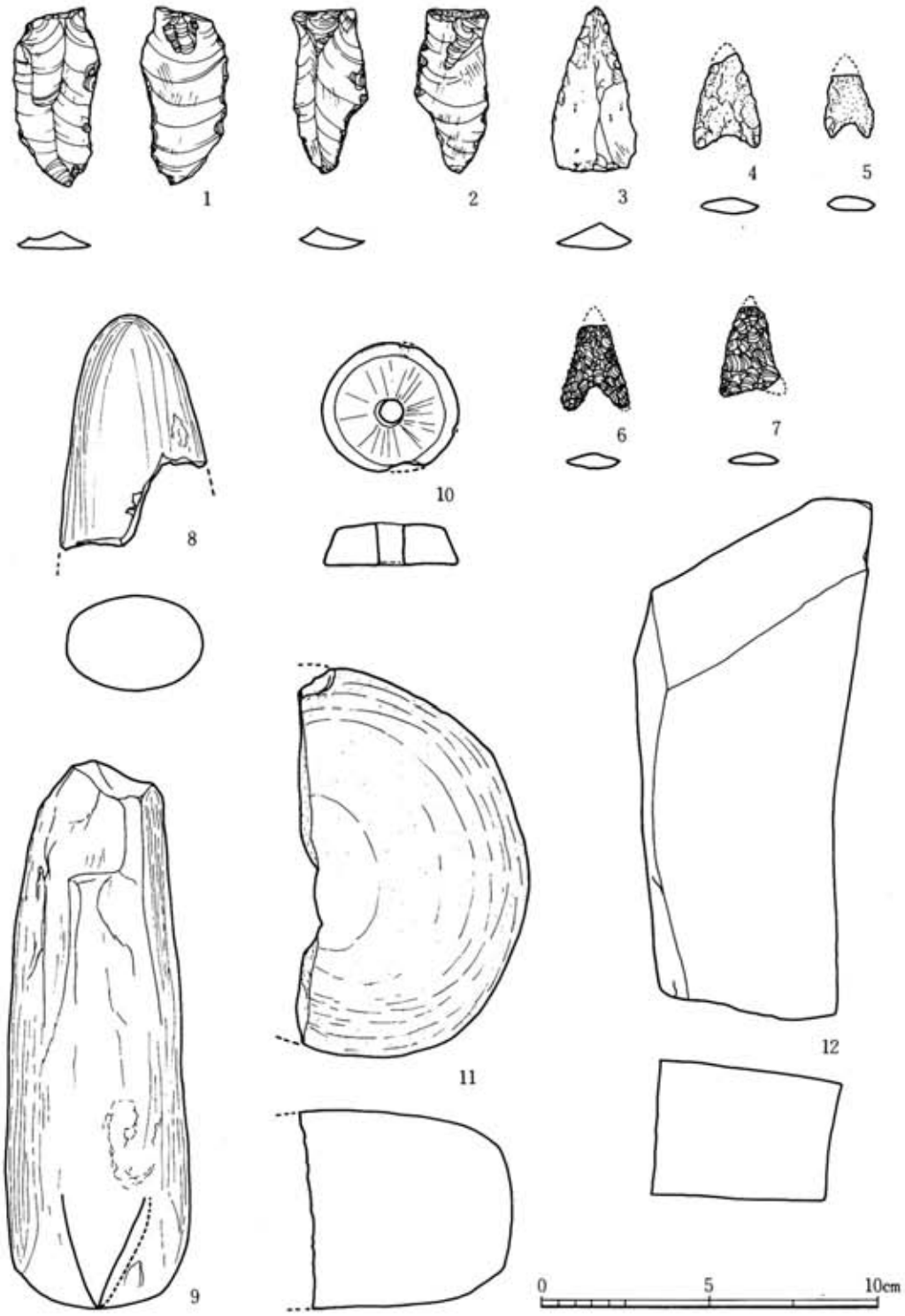


Fig. 143　三郎山遺跡出土石器実測図

楕円形をなす。

磨石（Fig.143－11，PL.108－2）

11は表採品で，凝灰岩質でつくられているが半分欠損している。全体によく磨れている。断面隅丸長方形をなし，長径11.5cm・最大厚4.9cmを測る。

砥石（Fig.143－12，PL.108－2）

12は1部折損している砂岩製の中砥で，三面よく使用されている。断面杭状で，現存長15.3cm，厚さ5.4cm×3.5cmである。

(2) 古墳時代

石器（Fig.143－10，PL.108－2）

紡錘車（10）

10はST001古墳墓道の埋土下層から出土した。滑石製で上径3.3cm・下径4.0cm・厚さ1.25cmの断面台形をなす。上面には線刻文様が円孔を中心にして放射状に細く刻まれている。側面は0.3cmほどの削り痕が縦にあり，表裏面に1部欠損がみられる。

土器（Fig.144～146，PL.105～107）

須恵器（Fig.144・145，PL.105～107）

須恵器は全てST001古墳の墓道と西南墳丘下の旧地表面からかなりの量の土器が出土したが代表的なものだけをとりあげた。器種は，杯（身・蓋），高杯，甕，提瓶，平瓶，横瓶，短頸壺，高杯形器台でバラエティに富んでいる。

杯・蓋（Fig.144－1～18，PL.106－1～8）

杯1は墓道下層出土で，立ち上りが短くやや内傾して直に立ち，端部が尖る。**4・5**は墓道と墳丘出土で，立ち上りがやや長く，まっすぐ内傾し端部が尖る。**6・7・8**は墳丘出土で立ち上りが長くやや内傾し，端部内面に沈線を有し，器壁も厚い。**9・10**は墳丘と墓道出土で立ち上りが長くやや内傾し，少し反り気味で端部を丸く仕上げる。**杯蓋11・12**は墳丘と墓道出土で，口縁部に段を有し，天井部と口縁部との境に沈線を有する。**13・14**は墳丘出土で，口縁部は直立気味にやや外反し，端部は内傾する凹面を有する。**15・16・17**は墳丘・墓道・墳丘出土で，口縁部がやや内湾しながら端部は丸くなり，器壁が厚い。**18**は墳丘出土で，口縁部がやや内湾しながら直に立ち，端部は丸くなる。体部に段を有し天井部にボタン状のつまみを有する。

短頸壺（Fig.144－19～23，PL.106－9～11）

短頸壺のセットと考えられる**19・20**は墳丘出土で，**19**は全体的にシャープで丁寧なつくりで

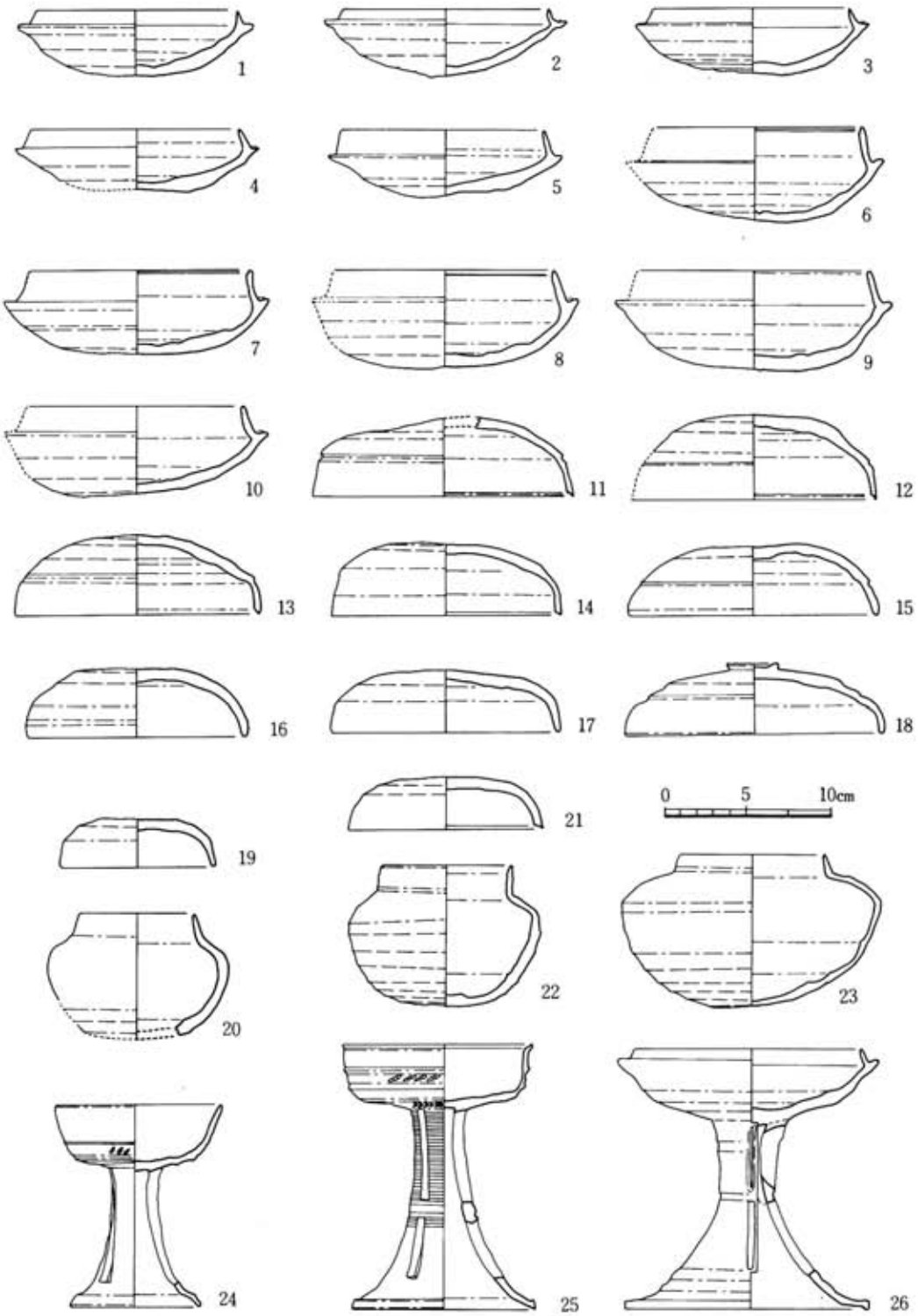


Fig. 144　三郎山遺跡ST001古墳出土須恵器実測図 (1)

ある。20は胴部が中央にあり，口縁部は内傾して直線的になり，カキ目調整をしている。21は短頸壺の蓋で墳丘出土である。口縁端部に凹みがみられ全体的に丸く仕上げている。22・23は墳丘出土で，23はやや内傾・内湾気味の口縁をもち，胴部が上位になり，全体的に扁平でうす手造りである。底部内面に×印のヘラ記号をもつ。

高杯（Fig.144－24～26，PL.107－1・2）

24・25・26はいずれも墳丘出土で，24・25は無蓋高杯，26は有蓋高杯である。24は3個の長方形の透孔をもち肩部に刺突文を有する。25は脚に上下2段の長方形の透孔が3個所に入り，脚部中央に2条の沈線，透孔はこの沈線部で区分される。杯部の中央に1段と，底部に向きの異なる2段の刺突文が入る。26は脚部上段と下段に各々2個長方形の透孔があり，杯部の立ち上りは短く内傾している。

壺（Fig.145－28・29，PL.107－5）

28は墓道出土で，口縁は外反し端部は丸く，口縁部から頸部にかけて沈線で5区分している。肩部には刺突文と1条の沈線が入り底部は丁寧なヘラ削りを施す。29は頸部が大きく櫛描状文を丁寧に施し，口縁はラッパ状に開く。肩部はシャープで角がつき，その下に刺突文を施す。全体的にがっしりした感じである。

提瓶（Fig.145－27，PL.107－3）

27は口縁部と片方のつまみを欠くが，全面にカキ目を施し全体に自然釉が薄くかかる。側面からみて1方が球形，背面が丸味をもって平坦に近く，鈎状のつまみがつく。

横瓶（Fig.145－30，PL.107－4）

30は墳丘と墓道から出土した。頸部は短く外反し，口端は厚くやや凹み，外面に稜線が入る。側面の1方は平坦で他は楕円形の球状をなし，全面にカキ目調整を施す。器面上半部に自然釉がかかる。

高杯形器台（Fig.145－31，PL.105）

31は墳丘出土。ほぼ完形で杯部口径38cm・器高50.9cm・裾部径32.4cmである。文様は杯部外面に櫛描波状文2条とタタキ目，内面に青海波文を施している。脚部は7段に区分され，上段は櫛状の刺突文，他の5段は2条の櫛描波状文が施されている。透窓は縦方向に長方形3個，三角形2個が四つにめぐらされ，脚部上端に4個の円孔がある。杯部は深い。

土師器（Fig.146，PL.107－1～7）

土師器の1・2・3・4・5・6・7・8はST001古墳から，9はSX006集石遺構から出土したものである。

杯（Fig.146－1・2，PL.107－1）

1・2は墳丘から検出した。1は底部から口縁部にかけて丸く立ち上り，口縁部内面は直立し

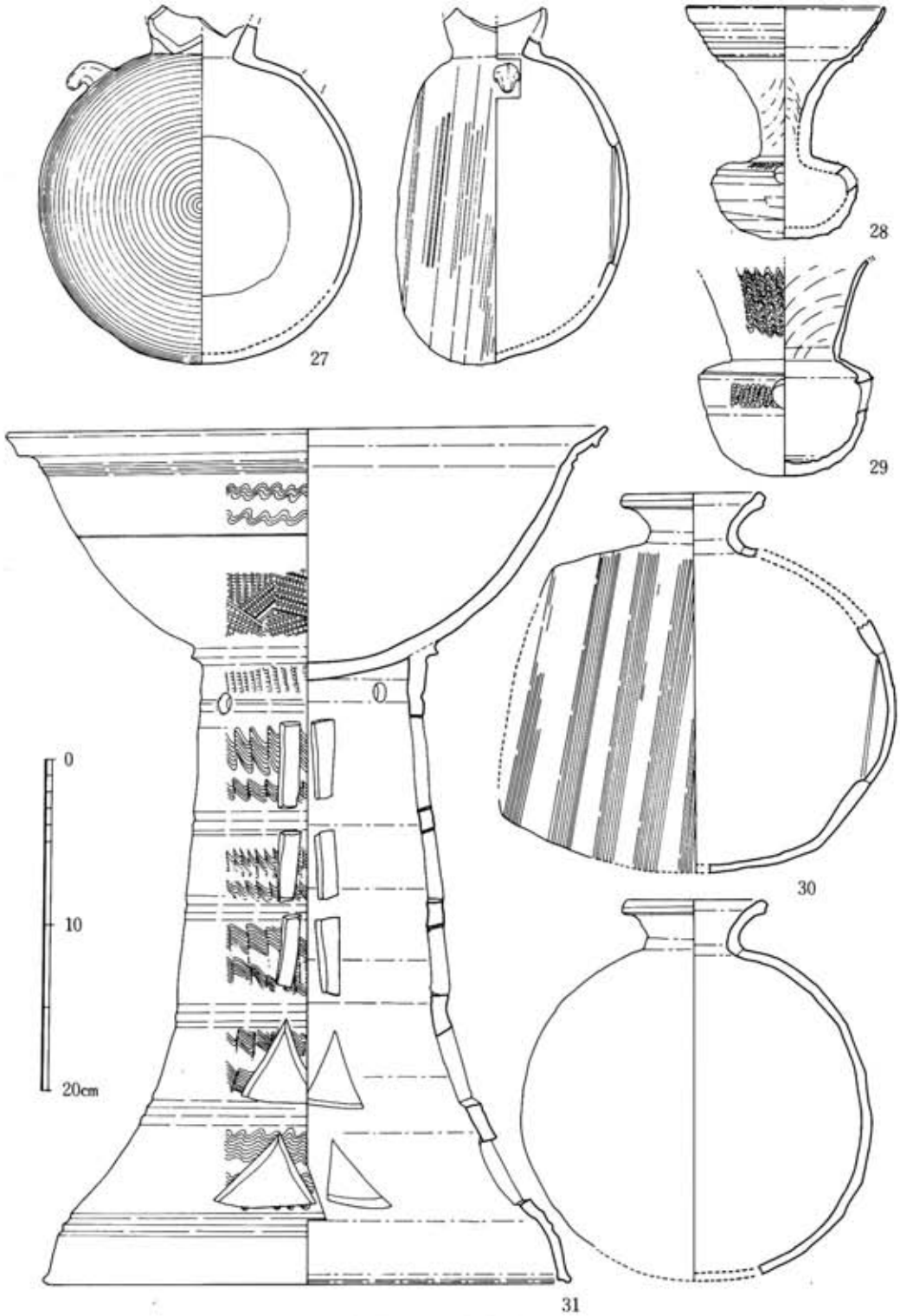


Fig. 145　三郎山遺跡ST001古墳出土須恵器実測図　(2)

外面はやや内湾気味で，ヘラ磨きと丹塗が内外面にある。2は底部から丸く仕上り，口縁部で直に立ち，口端内面に凹みがある。外面にヘラ削り痕，内面は不定方向にナデ調整している。

皿（Fig.146－3～5，PL.107－3・5）

3・4はST001古墳の玄室内埋土から，5はST001古墳の周溝埋土から出土した。3は底面が平らでヘラ削りがみられ，口縁はやや内湾気味に外反し，丸く納めている。4は底部から丸味をもって内湾気味に口縁部をつくり，端部は丸い。5は全体に磨滅と凹凸が多い。底部面が長く，直に外反する口縁をもち端部は丸い。

深鉢（Fig.146－6，PL.107－6）

6は口縁部と体部のみであったが深鉢とした。直に外反した体部上半に逆L字形の口縁がつき，端部は更に直に立ち上り丸い。体部に3条のつくりだし凸帯がわずかにあるが，器壁全体が磨滅している。

高杯（Fig.146－7，PL.107－7）

7は墳丘出土のもので，杯底部から大きく外反し，口縁部は丸くつくり，脚部裾は短く外反している。全体的につくりが太く厚い。杯部内面と脚部の一部に黒色のヘラ磨き痕がある。

高台付椀（Fig.146－9）

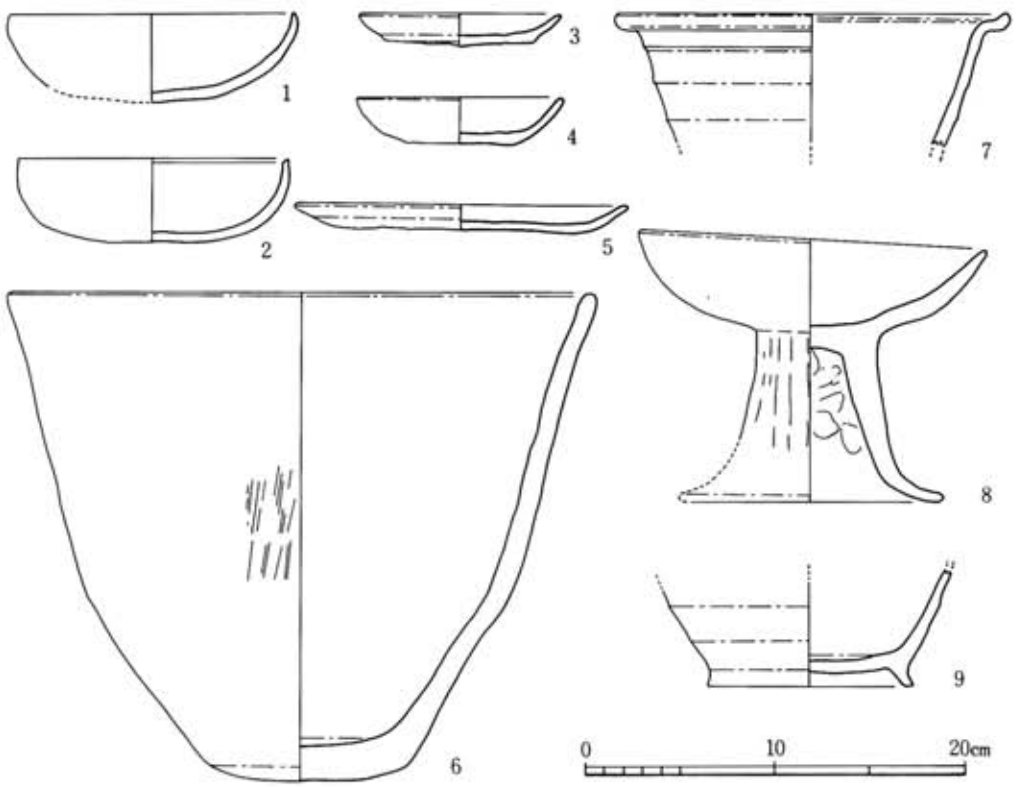


Fig. 146　三郎山遺跡ST001古墳，SX006集石遺構出土土師器実測図

9はSX006集石遺構の中央の石と石の間から検出された。高台は短くやや外反し，胴部は直に外反するようである。底部中央付近に径0.6cmの穿孔がある。

武具（Fig.147－1～11，PL.108－1）

鉄鏃（1～11）

ST001古墳から出土した。破片にして170片以上を数えるが，図化し得たものは以下の11本である。

平根式（1～6）　1は圭頭斧箭式に属する。現存長8.4cm・最大幅3.6cm・厚0.27cmである。2も同型式であるが，やや小ぶりで，先端部は丸味を帯びる。茎には木質が遺存する。現存長7.3cm・最大幅3.5cm・厚0.25cmである。3は斧箭広根式である。茎に木質が遺存する。4は3と同型式であるが，斜刃をなす。現存長4.7cm・最大幅2.3cm・厚0.25cmである。5は斧箭長根式で，現存長7.7cm・最大幅1.0cm・厚0.3cmである。6は鋒部を欠損するが，三角形広鋒長茎篦被式と思われる。現存長6.4cm・最大幅1.7cm・厚0.28cmである。

尖根式（7～11）　7は端刃鏃箭式に属する。無関の片丸造りで，現存長5.3cm・最大幅0.85cm・厚0.2cmである。8は篦被から茎にかけての破片である。篦被は断面方形，茎は断面円形で，茎には木質が遺存する。現存長7.7cmである。9は切刃片丸鏃箭式である。篦被は基部に行くにしたがい幅広となる。現存長10.1cm・最大幅1.0cm・厚0.23cmである。10は9と同型式であるが，篦被の幅は一定のようである。現存長7.15cm・最大幅1.0cm・厚0.2cmである。11は片方鏃箭式で，現存長4.5cm・最大幅0.92cm・厚0.3cmである。

工具（Fig.147－12～17，PL.108－1）

刀子（12～17）

すべてST001古墳から出土した。12はやや小ぶりで，現存長6.65cm・復元身長6.2cm・身幅1.2cm・棟幅0.25cmである。柄木端部を明瞭に知る事ができる。他はいずれもほぼ同形・同大であるが，遺存度のよい16について見ると復元全長12.9cm・身幅1.5cm・棟幅0.3cm・茎幅0.35cmである。平棟平造りで関部には柄木の縁金具がはめられている。この鉄製縁金具は断面倒卵形で，長径1.7cm・短径1.3cmである。縁金具内部から茎のほぼ全面にわたっては柄木の木質が遺存しており，その遺存度から見て刀身に木質が認められない事はこれらの刀子が抜身で埋納された事を示していると言えよう。

馬具（Fig.147－18，PL.108－1）

轡（18）

鏡板・引手の一部を欠損するが，轡のセットを知り得る好資料である。銜は断面隅丸方形の

2連式で，最大長約19cmである。それぞれ約20°と約90°のねじれを有している。鏡板はともに径6.6～6.9cmの素環式で銜先に取り付く。断面は0.7×0.8cmの隅丸方形である。立聞部は0.3×0.4cmの断面長方形である。引手は全長19.8cmでやはり直接銜先に取り付く。中央部の断面は一辺0.8cmの隅丸方形であり，両端環状部の断面は径0.8cmの円形である。全体に銹化が著しい。

装身具（Fig.147－19～22，PL.108－1）

耳環（19～22）

すべてST001古墳から出土した。**19**は腐蝕が著しい。長径2.50cm・短径2.35cmのやや楕円形で，断面径は0.15～0.3cm。鉄身にメッキしており金環か銀環か不明。**20**はやや腐蝕が進んでいる。長径2.1cm・短径1.95cm・断面径0.35～0.30cm。金環か銀環か不明である。**21**は金環であるが腐蝕著しく凹凸がみられる。長径2.60cm・短径2.40cm・断面径0.32～0.50cm。**22**は金環で，腐蝕がかなり進んでいる。長径3.2cm・短径2.95cm・断面径0.75～0.80cmである。

4．小　　結

古墳のまとめ

立地（Fig.125・126，PL.64～67）

三郎山古墳群の位置するこの丘陵は，緩斜面の舌状丘陵で，南方へ標高51mから30m下へ200mほど延びており，丘陵基部西側の細長い範囲に5基の古墳が縦に位置する。西側は谷間を挟んですぐ丘陵があり，東側も続きの丘陵で，基部から南は緩やかに下って平坦地となり，途中左右に分れて水田面に至る。古墳群の配列は南から，ST005古墳とST001古墳で一部が重なり，30m北へST002古墳，すぐ北東側に近接してST003古墳，また北西側に近接してST004古墳の順で並んでいる。古墳の立地として，この狭長でしかも東西の両側と後背地が山で見とおしが悪くあまり好条件とはいえない。立地的に順位を求めるならば，ST001古墳からST003古墳→ST002古墳→ST004古墳になろうか。なお，北のST004古墳から南のST005古墳までは，比高差が約10mほどある。

墳丘・周溝（Fig.129・132・134・138，PL.68・71・74・77）

墳丘盛土を有する古墳は4基（ＳＴ001古墳～ＳＴ004古墳）で，ST005古墳は削平されており盛土は検出出来なかった。ST001古墳は石室が半分ほど破壊され盛土も削平されているが，現状の盛土から推定して当時の盛土は0.7～1.0mほど高く，旧地表からは2.5mほど盛っていたであろう。ST002古墳は処女墳であったので流土を考慮してもほぼ現墳丘と大差なく，地山面から0.7mあったと考える。ST003古墳は盗掘されていたが現状より0.3～0.5m程度高くなっていたと考えられ旧地表面から0.9mほどあったであろう。ST004古墳は処女墳で，ST002

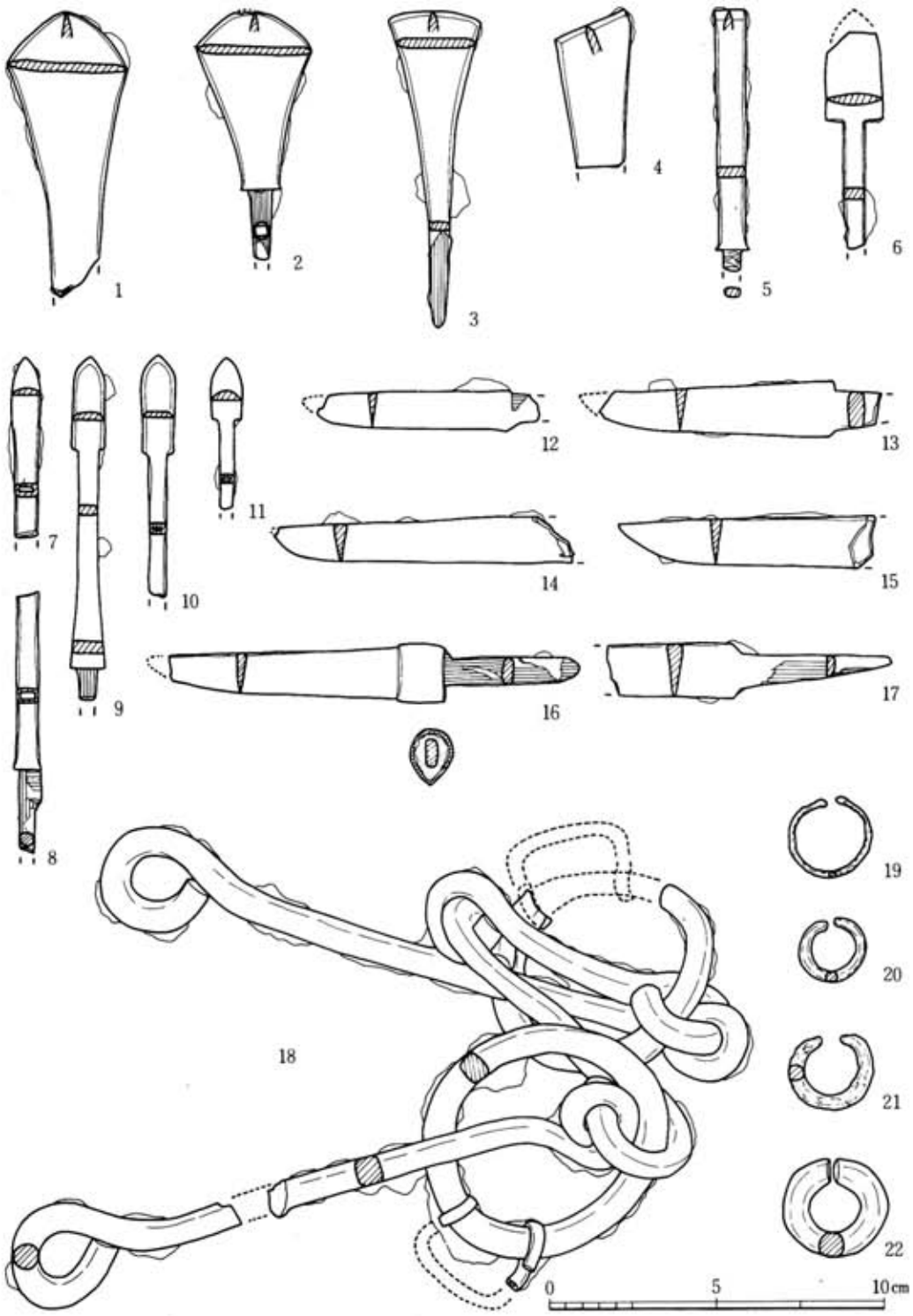


Fig. 147　三郎山遺跡ST001古墳出土鉄器・装身具実測図

古墳と同様現状とさほど相違なく，地山面から0.5m盛土をしたと考える。以上のことから竪穴式石室の3基は構築時に0.5～0.9mほどの上に土を積み上げたと考える。墳丘の径はST001古墳が約20m，ST002古墳が約7m，ST003古墳が約12m，ST004古墳が約9m程度である。周溝は全ての古墳から検出された。斜面上に立地するため馬蹄形状の周溝をもっている。周溝は断面U字形で，ST002古墳は深さ0.2m，ST003古墳は0.5m，ST004古墳は0.2mほどの深さで，周溝の深さに盛土をプラスすればST002古墳は0.9m，ST003古墳は1.4m，ST004古墳は0.7mになり，墳墓の景観はやや顕著になる。

内部主体（Fig.130・133・136・139・141，PL.69・70・72・73・75・76・78・79・81）

ST001古墳は横穴式石室，ST002古墳からST004古墳まで竪穴式石室，ST005古墳は石蓋土壙墓と石室構造の差があり興味深い。ST001古墳で問題になるのは玄室内床面に立てられた4個の板石で（花崗岩2，片岩系2）玄室プランと合わないが，石材の大きさは幅0.5～0.3m，厚さ0.2～0.1m程度で大差なく，貼り床面に埋めこまれている。全体のプランとしては不自然ではあるが障石と思わざるを得ない。ただし，旧状の原位置からは多少ずれていると考える。石室の上半壁は破壊を受けていたが，構築時は3枚程度の石材が積まれてその上に，蓋石が置かれていたであろう。当古墳で注視されるのは3基の石棺系竪穴式石室で，この古墳群の中では一つのまとまりをみせている。

近年大型開発により，本県はもとより他県でも竪穴式石室に関する資料が増加し，「七夕池遺跡群」，「東宮ノ尾古墳群」，「大門西遺跡」等の報告がなされている。その中で竪穴式石室について三つの形態に区分されている。(註⑨)(註⑩)

Ⅰ　京都苅田町の石塚山古墳(註⑪)の長大な扁平割石積み竪穴式石室で，出土遺物は鏡，石釧などがみられる所謂畿内型古墳で4世紀後半代に主にみられるものである。

Ⅱ　福岡市東区の持田ケ浦2号古墳のように箱式石棺と畿内型古墳にみられる長大な竪穴式石室を折衷した塊石積みの竪穴式石室で，出土遺物は鉄製品を中心としたもので5世紀代にみられ，箱式石棺が竪穴式石室の影響を受け，九州型竪穴式石室とでもいうべきものである。

Ⅲ　竪穴式石室とは呼び難いが上記の二つより，より箱式石棺に近いもので，これは四つに細分できる。朝倉郡朝倉町の妙見26号墳にみられる。長側壁は竪穴式石室と同様に塊石積みであるが，短側壁は最下石に箱式石棺のような立板石を用い，その上に2，3の塊石積みをしたもの（Ⅲ－1）。次に大牟田市の石亀城古墳の長側壁はⅢ－1と同様であるが短側壁が箱式石棺と同様の立板石1枚を用いたもの（Ⅲ－2）。また筑紫郡那珂川町炭焼5号古墳の長側壁の最下石は箱式石棺のような立板石を連ね，その上に2，3段の塊石積みをし短側壁も長側壁と同様のもの（Ⅲ－3）。さらに飯塚市の栗崎山4号古墳の長側壁はⅢ－3と同じく，短側壁はⅢ－2と同様なもの，の4種である。このⅢ型の出土遺物は少量で貧弱であり5世紀後半から6世紀に主にみられる。この形態区分に本遺跡の古墳を照らしてみると，Ⅲ－1にST004古墳があては

まる。またⅢ－3にST002・ST003古墳が適合する。石棺系石室の構築法は，隅丸長方形の土壙をU字形に掘り，その内部に板石を箱式石棺状に頭部を幅広くして立て，石室の腰石とし，その上に石材を横積みする。土壙壁と石室側壁との間隔は共通して，一般に控え積みはしない。ただし当古墳は3基とも控え積みをしており，中でもST003古墳とST004古墳はそれが顕著である。(注12) 次に床面は各々異なり，ST002古墳は両小口のところに敷石が少量あり貼り床で，ST003古墳は貼り床の上に敷石が全面にあり，ST004古墳は直接地山面が床面となっている。なおST003古墳は東側小口の方に石枕的に大きい石材を敷石にしている。

年代

九州の箱式石棺墓を祖系としながらも，畿内地方の竪穴式石室の技法を取り入れたと考えられているこの石棺系の竪穴式石室は，5世紀初頭頃から出現し，次第に箱式石棺墓の様相を失って石室化し，5世紀代から6世紀代の初頭頃に，竪穴系横口式石室へ発展することは諸先学の説かれているところである。当古墳3基の石棺系竪穴式石室は，出土遺物や関連した土器もないので年代の決めてに欠ける。(注13) 従って，今回九州横断道発掘で知り得た資料（Tab.22）をもとにしてその位置づけを試みてみる。

当古墳のすぐ東側に大門西遺跡があり，5基の石棺系竪穴式石室が調査されている。さらに東の金立開拓遺跡に大型の竪穴式石室が3基，次の藤附B・C・E遺跡に石棺系4基と箱式石棺6基，石蓋土壙2基，近接して東に丸山遺跡があり，竪穴式1基，石棺系が3基ある。これらの遺跡はもちろん竪穴系横口式石室や横穴式石室も混在しており，5世紀代～7世紀代の古墳が顕著になってきている。

以上挙げた石棺系竪穴式石室の年代が出土土器により判明しているものが，大門西の2基（ST035・038），藤附Bの1基（ST001），藤附Eの1基（ST001）の計4基だけで，これらの年代は4世紀末～5世紀中頃に比定されている。上記4基の石室に当遺跡の3基を比較してみると，藤附BのST001古墳に類似している。次に表記してないが，竪穴系横口式石室の古墳が5基（丸山遺跡1，西原遺跡1，鈴熊遺跡3基）検出されており，丸山のST010古墳は出土土師器から5世紀中頃，鈴熊のST002古墳からは出土土師器・須恵器により5世紀後半代に位置づけられている。(注13)

こうしてみると，佐賀市北部山麓一帯の古墳群は，4世紀末から7世紀代に築造されたものが多く，石室の構造も箱式石棺・石蓋土壙・竪穴式石室・石棺系石室・竪穴系横口式石室・横穴式石室とバラエティに富んでおり，その変遷と併存した様相が資料として求められつつある。また箱式石棺の年代は出土土師器により，4世紀末～5世紀中葉に比定されている（金立開拓ST028・029古墳，藤附C ST001古墳）。

石蓋土壙墓については年代が明確ではないが藤附CのST003古墳は4世紀末に設定してある。従って，箱式石棺墓や石蓋土壙墓は4世紀末～5世紀中葉，石棺系竪穴式石室は5世紀前半～5

世紀中葉，竪穴系横口式石室は５世紀の後半代になる。このような近接した地域の類例から，三郎山遺跡の石棺系竪穴式石室の相対的な成立年代をあえて求めるならば，５世紀の初頭から後半代にその時期を限定できるのではなかろうか。

従って，石棺系の竪穴式石室を主流とする本古墳群は，当遺跡周辺の平野部にあたる農業共同体との係わり合いを持った首長的な性格を含み大門西遺跡のそれらと深い関係をもった在地的要素の強い被葬者らではなかろうか。

なお，３基の構築順序であるが，ST003古墳が古式の様相を帯び（構造面・石材・赤色顔料・規模・立地等），また，ST003よりST004の周溝上端が近接しているのにもかかわらず絶対高が0.6m高く，ST003がかなり埋まった段階で築造されたと考えST004古墳→ST002古墳の順と考える。石蓋土壙墓を内部主体とするST005古墳は，3基の古墳とグループを異にしているが，北九州地方に主に分布をもつ石蓋土壙墓は，大方は弥生時代から古墳時代の前期まで使用されており，上記３基の竪穴から関連させてみると，時期的には大差ないと思われる。ただ，この内部主体を石蓋土壙墓と称したが，見方を変えるならば，墓壙の掘り方の周囲に，扁平な石を並べ，その上に蓋石を重ねており，１～２段積みの竪穴式ともいえないこともなく，竪穴式との関連性も考えられる。

ST001古墳は出土須恵器から６世紀中頃に築造され，その後1度か2度の追葬が行われたであろう。

遺物のまとめ

当遺跡の古墳出土の遺物で遺構に伴うものは残念ながらST001古墳と他は集石遺構出土の土師器椀だけである。他の遺物は全て流れ込みか表採である。ST001古墳での出土地点は，玄室と盛土下の旧地表面(向かって左墳丘裾)，それに墓道がほとんどある。玄室と墓道出土のものは原位置とは考えられないが，盛土内の旧地表面に破砕して埋置されていた一括土器群については，墳丘築造当時の墓前祭が行われたもので原位置のままの状態と思われる。一部に墓道とか東墳丘内に少片が散在しているが流れ込みであろう。盛土下の一括土器の中でも，完形の高杯形器台は出色である。県内出土例も数例で完形品はない。当被葬者の性格を知るうえで好資料といえる。また，墓道最下層出土の滑石製紡錘車は，時期を知るうえで注目される。その他鉄鏃も多く，形態も豊富である。ST001古墳出土の須恵器はかなり多く，器種も豊富である。須恵器の杯蓋からみると，２形式ほど分類でき，小田富士雄氏編年によるとⅢA～ⅢB（６世紀中頃～６世紀後半）に比定される。高杯形器台（Fig.145－31，PL.105）と甕（Fig.145－29，PL.107－29）等はその指標となる土器である。その他，玄室内埋土の土師器皿（２・４・５）は当古墳とは直接関係なく，全てヘラ切り底である。大宰府出土の土師器と比較して10世紀中頃～終末頃のものであろう。

集石遺構は出土土師器から，10世紀後半から終末頃の所産であろうが，その性格は不明である。土師器の底部に穿孔があり祭祀的な遺構かも知れない。

(註)

(1) 「大門西遺跡」『九州横断道関係埋蔵文化財調査報告書第1集』佐賀県教育委員会　1980
(2) 「丸山遺跡発掘調査概報」『九州横断道関係』佐賀県教育委員会　1979
(3) 「西原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報2，1978年度』　1980
(4) 「六本黒本遺跡」註3と同じ
(5) 「金立開拓甕棺遺跡」佐賀市教育委員会　1974
(6) 「惣座遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報1976・1977年度』佐賀県教育委員会　1979
(7) 「長尾遺跡」註3と同じ
(8) 「肥前国府跡Ⅰ」佐賀県教育委員会　1978
(9) 上野精志編「七夕池遺跡群」『志免町文化財調査報告書第1集』志免町教育委員会　1974
(10) 山中英彦編「東宮ノ尾古墳群」『北九州市文化財調査報告書第14集』北九州教育委員会　1974
(11) 註9に同じ
(12) 註10に同じ
(13) 石山勲氏・柳沢一男氏・佐田茂氏
(14) 九州横断道関係の調査による。1980年蒲原宏行・中牟田賢治調査による。

Tab.22　九州横断道発掘関係佐賀市北部山麓所在古墳一覧表

（1981年2月現在）

遺跡名	古墳番号	墳円	内部主体	分類	墳丘径	法量（内法）			遺物	備考	年代
						長さ	幅	高さ			
						(m)	(m)	(m)			
三郎山	ST002	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－3	4.80	1.73	0.52	0.53		馬蹄型周溝	
〃	ST003	円	〃	Ⅲ－3	10.10	1.65	0.37	0.50		赤色顔料	
〃	ST004	円	〃	Ⅲ－1	7.80	1.76	0.40	0.50		馬蹄型周溝	
〃	ST005	円	石蓋土壙		4.00	1.68（基壙）	0.75	0.32		馬蹄型周溝	
大門西	ST034	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－3	13.50	1.93	0.80	0.79	鉄刀・鉄鎌	二段築成	5世紀前半
〃	ST035	円	〃	Ⅲ－4	10.00	1.55	0.51	?	土師器壺・高杯	敷石，赤色顔料	〃
〃	ST036	?	〃	Ⅲ－3		1.86	0.45	0.62	刀子	東小口に敷石	〃
〃	ST038	円	〃	Ⅲ－3	7.50	1.62	0.55	?	土師器壺・高杯		〃
〃	ST042	?	〃	Ⅲ－3		0.84	0.35	0.45			
金立開拓	ST003	円	竪穴式石室		14.0	4.0	2.8	0.3	土師器高杯・須恵器甕		5世紀後半
〃	ST004	円	竪穴式石室？		14.0	3.70	2.00	0.2	土師器椀・壺・高杯・刀子		5世紀中頃
〃	ST028	円	箱式石棺		10.65	1.50	0.45	?	土師器・刀子	葺石	〃
〃	ST029	?	箱式石棺？		10.50	?	?	?	土師器壺		〃
〃	ST300	?	竪穴式石室？		15.0	3.8	3.0	?	土師器壺・高杯	葺石2例	〃
藤附B	ST001	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－2	11.00	1.90	0.40	0.60	土師器甕・坩	二つの内部主体，赤色顔料	4世紀末～5世紀初頭
〃			箱式石棺			2.45（基壙）	0.70	0.50		赤色顔料	
藤附C	ST001	方	箱式石棺		8.10	1.70	0.30	0.30	土師器甕・刀子ガラス小玉	二つの内部主体	4世紀末
〃			箱式石棺			0.65	0.16	0.16	刀子		
〃	ST002	方	箱式石棺		3.50	1.20	0.50	0.30			4世紀末
〃	ST003	?	石蓋土壙			1.80（基壙）	0.80	0.40	刀子		〃
〃	ST004	?	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－3		1.80	0.50	0.20	刀子		4世紀末より新しい
〃	ST005	?	石蓋土壙			1.45（基壙）	0.45	0.10			〃
〃	ST006	?	箱式石棺			1.40	0.30	0.20			〃
〃	ST007	?	竪穴式石室？								5世紀初頭
藤附E	ST001	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－3	6.70	1.80	0.70	0.80	土師器壺・高杯		5世紀前～中頃
〃	ST003	方	箱式石棺		6.50	1.49	0.41	0.28			
丸山	ST001	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－2	14.3	1.78	0.73	1.0	鉄鏃・鍬・鉄剣・刀子	二段築成，葺石	5世紀前半
〃	ST006	円	竪穴式石室		7.6	1.81	0.39	0.82	刀子・人骨		5世紀末～6世紀
〃	ST007	円	石棺系竪穴式石室	Ⅲ－2	5.8	1.55	0.45	0.85	歯		〃
〃	ST009	円	〃	Ⅲ－4	4.7	1.69	0.71	0.80	鉄刀		〃

長尾（ながお）遺跡

遺　跡　名：長尾（略号ＮＧＯ）
遺跡所在地：佐賀市金立町大字金立字十一本杉

長　尾　遺　跡

1．遺跡の概要

長尾遺跡は佐賀市金立町大字金立字十一本杉に所在する。

佐賀市北麓には脊振山地の南に連なる小山群から派生した多くの舌状丘陵地が南にのびてい

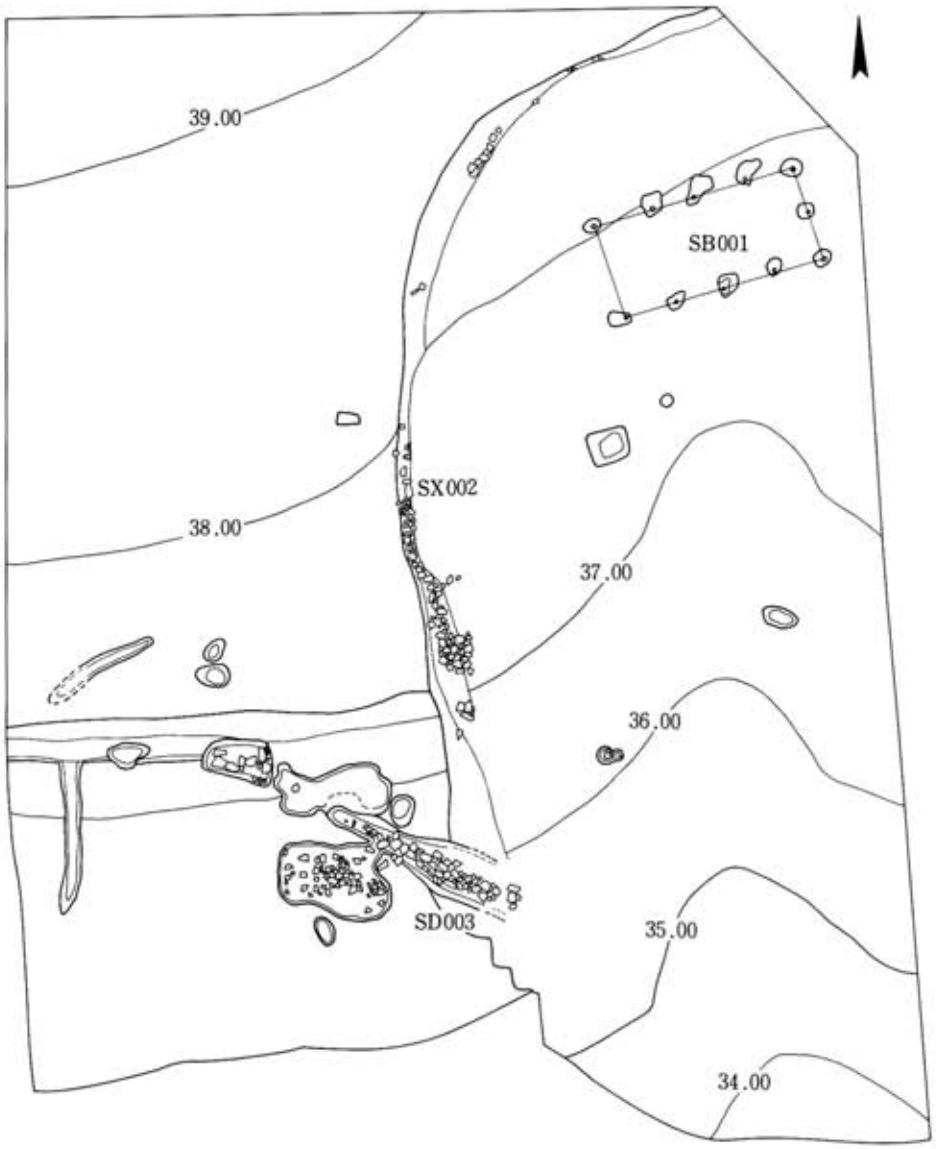


Fig. 148　長尾遺跡遺構配置図

る。当遺跡はこれらの一つ，金立山から派生する舌状丘陵地の基部標高35～40mに位置する。

遺跡周辺には各時代の遺跡が数多く存在する。東方に隣接して，縄文時代の土壙，弥生時代の住居跡・貯蔵穴，そして古墳などを検出した大門西遺跡，また西方には高杯形器台などをもつ古墳を検出した三郎山遺跡が位置する。その他，西隈古墳，大門・乱闘山・西隈古墳群，大門遺跡などがあり，遺跡の密度の濃さとともに，内容豊かなものが存在し，注目を集めている地域である。

調査区は，SX002石垣状遺構によって東西に分断された形になっている。西半部は，ほぼ平坦だがはっきりとした遺構はなく，一段下がった南側に，こぶし大の石を伴ったSD003溝状遺構がある。また東半部は，小谷状の地形をなし，北から南へかけ急傾斜である。小谷の北には小谷に堆積した黒褐色土を切り込んだSB001掘立柱建物跡が検出された(Fig.148，PL.85－1)。

遺物は，江戸時代の陶磁器・土師器小皿が大半を占め，なかでもSX002石垣状遺構の裏込めから多量に出土している。他の時代のものは小谷の黒褐色土堆積層から縄文時代の石器，弥生時代の土器・石器，奈良時代の布目瓦等がある。

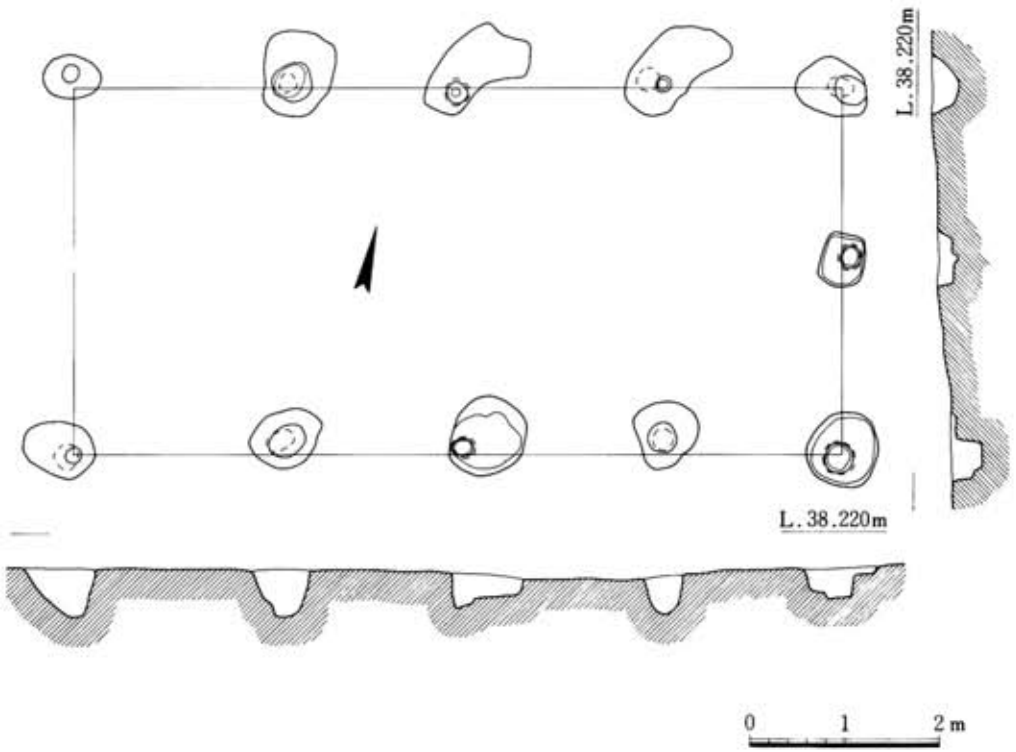


Fig. 149　長尾遺跡ＳＢ001掘立柱建物跡実測図

2．遺　　構

SB001掘立柱建物跡（Fig.149，PL.84）

調査区の北西隅に位置し，主軸をS－W76°方向にとる4×2間の建物である。桁行8.1m，梁行3.8mを測る。柱間は桁行の場合南が西から2.2・1.9・2.1・1.9m，北が2.25・1.75・2.0・2.1mで相対する柱位置はわずかに誤差が生じる。梁行は西の妻柱が検出できなかったが，東は南から2.1・1.7mでやや長短がある。柱穴の掘形は不整円形で上端径0.5～1.0m，深さ0.25～0.7mを測る。柱根の径は0.2～0.3mである。

遺物は柱穴掘り形内より土師器皿が出土しているが，数が少なく時期を決定できない。近世もしくは少しさかのぼるものであろう。

SX002石垣状遺構（Fig.148）

掘立柱建物跡の北及び西方向に存在する。石垣は部分的に残存しており，その長さは約30mである。西側平坦部との関連が考えられるが，平坦部にはっきりとした遺構を検出できなかったため，確証を得ない。

遺物は，構築する際に埋めた石垣の裏込めから多量の近世陶磁器・土師器が出土している。

SD003溝状遺構（Fig.148，PL.85－2）

調査区の南西部に位置し，北西から東南へ続くもので東南側は削平されている。溝内には礫が堆積している。性格は不明である。

3．遺　　物

石器（Fig.150）

石器は調査区東側の小谷に堆積された黒褐色土層中から出土したもので，石鏃・スクレイパー・石斧などがある。これらの石器は弥生時代のものが中心であるが，遺構に伴わないため，その正確な時期は不明である。

石錐（Fig.150－1）

黒曜石製で，片面にのみ剝離を施している。先端部を欠損する。

石鏃（Fig.150－2・3）

石鏃は2点出土し，材質は黒曜石である。3は先端と脚の一部を欠損する。

スクレイパー（Fig.150－4）

4は不定形の剝片を素材としたスクレイパーである。片面より細かい剝離を施し，刃部を形成している。石材はサヌカイトである。

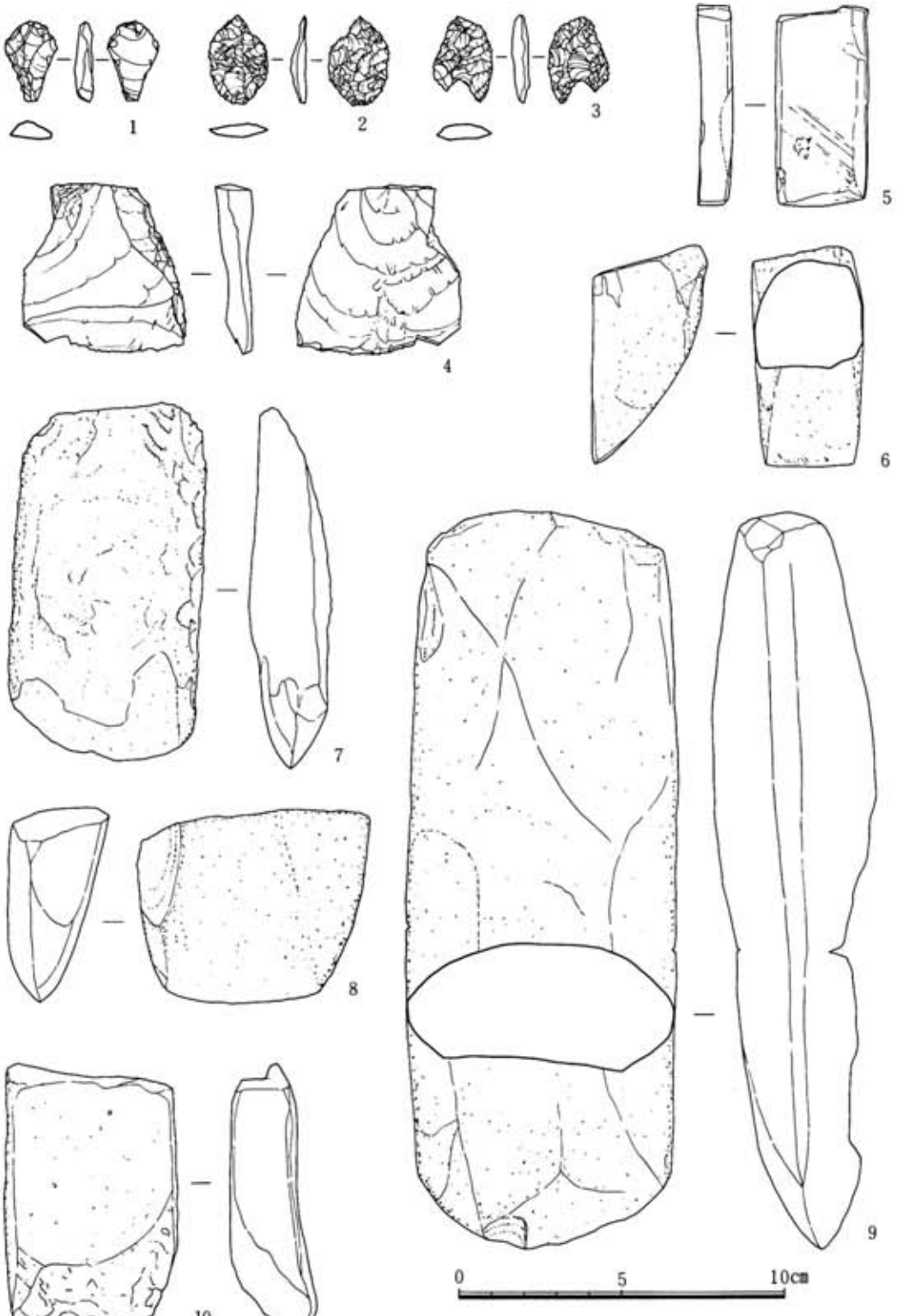


Fig. 150　長尾遺跡出土石器実測図

石斧（Fig.150－6～9）

6は柱状片刃石斧の刃部である。断面台形で刃部は丁寧に磨いている。7は刃部だけ磨いた石斧である。体部から基部にかけて欠損する。8は太形蛤刃石斧の刃部と思われる。9は長さ22cm，幅8.3cmの太形蛤刃石斧である。体部の中央近くで折れ，片面が一部欠損する。材質は福岡市今山産の玄武岩と思われる。

砥石（Fig.150－5・10）

5は幅2.7cmの砥石である。10は幅5.0cmの目の荒い砥石である。5は頁岩製，6は凝灰岩質である。いずれも両面共使用痕が残る。

弥生土器（Fig.151）

1は甕の口縁部である。復元口径26.7cmで口縁端部に刻み目をもつ。2は壺の底部である。復元底径7cmで胎土に0.5～2mmの砂粒を多く含む。3は甕の底部で上底である。復元底径7cmで器壁は厚く，砂粒を多く含む。4は甕の底部で若干上底である。復元底径7cmで器壁は厚い。5は甕の底部で平底である。復元底径7.3cmで砂粒を多く含む。

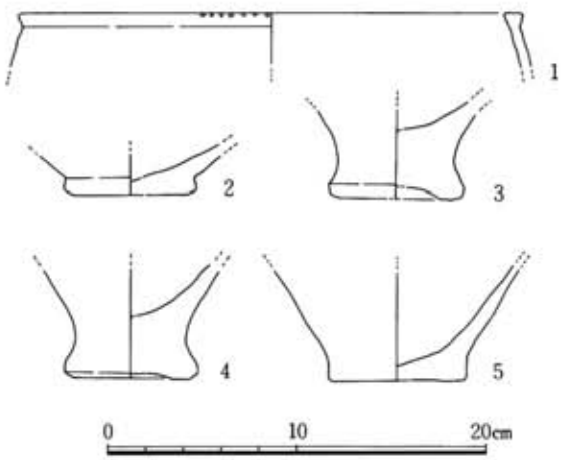


Fig.151　長尾遺跡出土弥生土器実測図

陶器（Fig.152，PL.109－3～10）

器種は碗・鉢・壺・瓶・擂鉢などで，いずれも「唐津」系の陶器である。技法的には，朝鮮唐津，刷毛目，献上唐津手などがみられる。量的に最も多い器種は碗であり，そのなかでも献上唐津手のものが多数を占めている。

碗（Fig.152－1～15，PL.109－3～6）

碗は形態的にA・B・C・Dの4種類に大別され，A・B・C類は献上唐津手と思われる。

碗A（1・2・5・6・9・10・12・13・14）　高台に半月形の体部が付くもので，器壁は体部に比べ底部が厚く安定した作りである。黄白色のきめ細やかな胎土は，淡黄色に発色した上釉と調和している。釉薬は見込みに鉄釉で簡略な山水画を描いたものと，上釉として淡黄色に発色したものの2種類がある。高台は薄くて底いものや，厚くて高いものがある。

碗B（3・7・11）　体部に稜がつき，直立して口縁部へつづくものである。釉薬は碗Aと同様であるが，鉄釉の使用が体部外面にある。

碗C（4・8）　体部は直立し，いわゆる筒形をなす。淡黄色の釉を施す。胎土は黄白色のきめ細かいものである。4の底部外面に「乳山」の銘款がある。

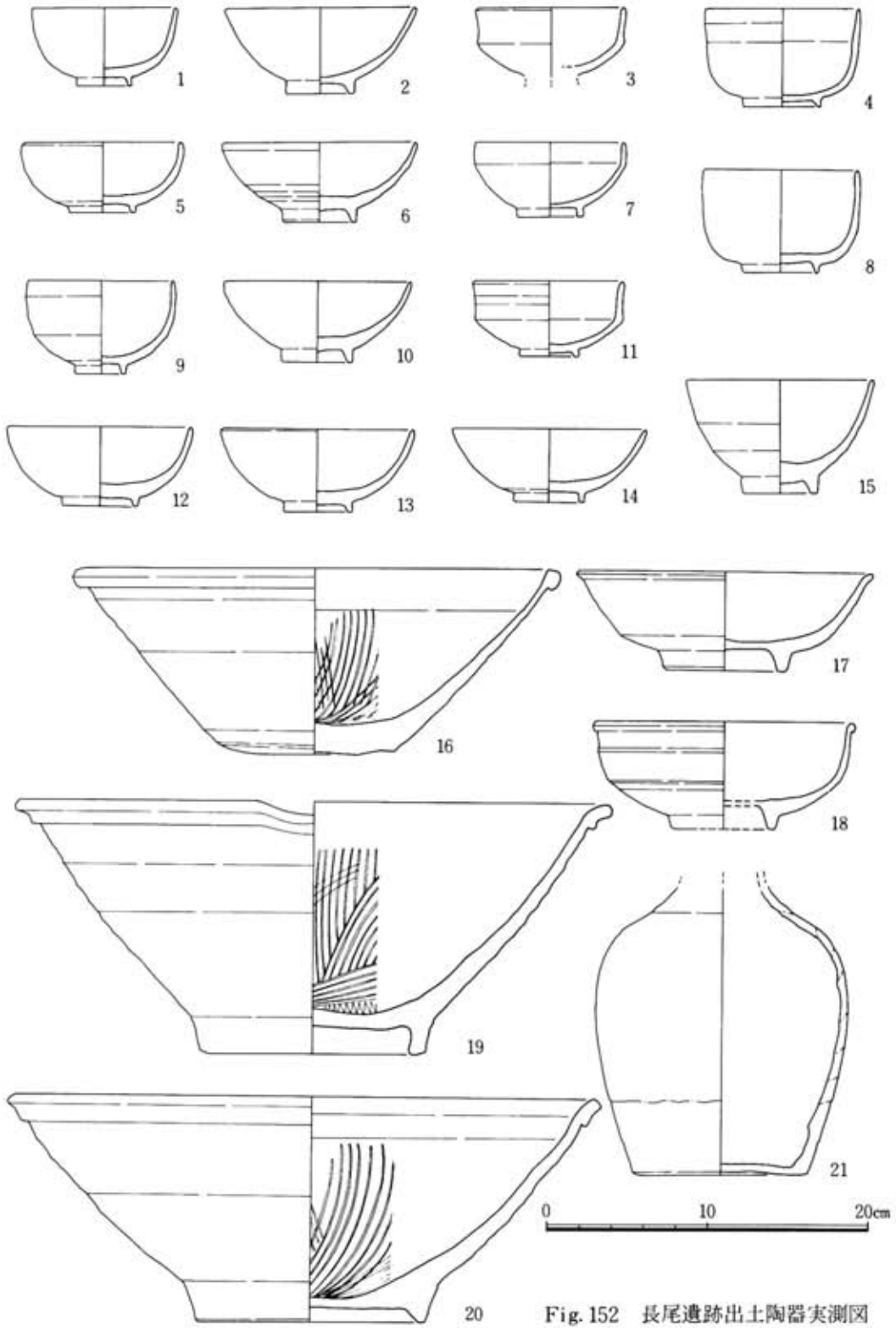


Fig. 152　長尾遺跡出土陶器実測図

碗D（15）　厚くてしっかりした高台に，体部が若干外へ開くものである。胎土は暗灰色で石英粒が見られる。茶褐色の鉄釉は器体内面と外面の胴下半までみられ，内面に比べ外面が薄く施されている。

鉢（Fig. 152－17・18, PL. 109－8）

17は高台が高くて広く安定した鉢である。白土を用いた刷毛目技法で暗褐色の胎土を化粧し，見込みは環状に釉が剝ぎとられている。内面体部には二方に鉄で簡略な絵付がなされている。18は口縁部が折りかえされて丸味をもつ。17と同様に刷毛目技法で，見込みは釉が環状に剝ぎとられている。

壺（Fig. 152－21, PL. 109－7）

細口の壺で白濁色の藁灰釉と黒飴釉をかけわけた朝鮮唐津と呼ばれるものである。叩き技法で成形されているため，内面には粘土紐の積み上げ痕及び青海波文がみられる。

擂鉢（Fig. 152－16・19・20, PL. 109－9・10）

16は高台がない擂鉢で，口縁端部は肥厚し丸味を帯びる。擂目は8～10条の単位であるが，1条ずつ左方向に刻まれている。19・20は高台がつけられ，口縁部が折りかえされて成形されている。19には片口がつけられている。擂目は19条単位で下から上へ施されている。20の擂目も19条単位である。

磁器（Fig. 153・154, PL. 110・111）

白磁・青磁・色絵・染付の製品がみられる。量的には染付が最も多い。なかには外面青磁・内面染付の製品もある。

白磁（Fig. 153－1～9・12～14・19, PL. 110－1～6）

器種は碗・脚付杯・皿・蓋・瓶の5種類がある。1は口縁部が外反する小型の碗で，薄手のシャープな作行きである。2も同様の器形であるが胴下半から底部にかけて厚く作られ，外面に鎬文と思われる陰刻線文が施されている。5は体部が直線的に開く碗で全体的に器壁は薄い。6・12は半月形の体部に低い高台をもつ碗である。薄手のシャープな作行きである。7は腰部に強い稜を有し，体部が直線的に開く碗である。3は脚付杯で，脚が太くて短いため全体に安定感をもつ。上釉はわずかに青味を帯びる。8も3と同様の器形であるが，大型で杯部が深い。4は口縁端部が内湾ぎみの輪花形皿である。9も輪花形皿であるが，口縁部は外反する。見込みは花文の陽刻が施されている。酸化炎を受けたせいか，全体的に黄色味を帯びる。内外面に細かい貫入がみられる。13は胴下半から底部にかけ残存する瓶である。胴部最大径が上部にある。14は胴部が球状を呈する薄手の瓶である。19はつまみ及び身受けのある蓋である。内面身受けの部分は釉が施されていない。

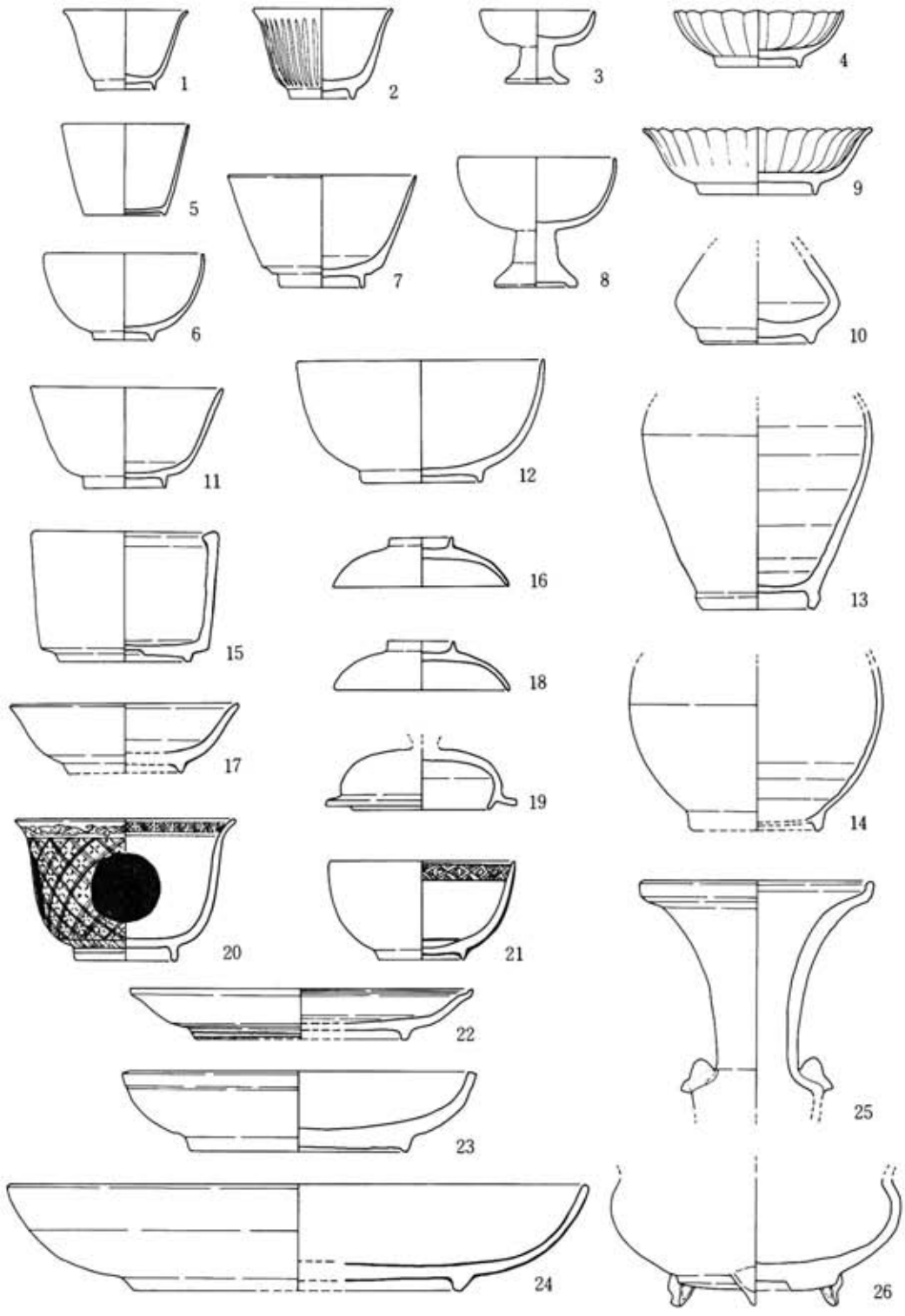


Fig. 153　長尾遺跡出土磁器実測図 (1)

青磁（Fig. 153－11・15～18・21・23～26, PL. 110－8・10）

器種は碗・皿・火入れ・蓋・瓶・香炉の6種類である。青磁釉は厚く，発色も良好なものが多くみられるが，磁胎が白色のため青磁の色調も淡緑色と白っぽいものも少なくない。また内面に染付を施した製品もみられる。

11は外面青磁で内面染付の碗である。青磁釉は厚く施され淡緑色を呈する。内面体部には簡略な草花文が呉須で二方に描かれている。底部外面には「二重角福」の銘款がある。15は口縁部が内側に肥厚する筒形の火入れである。青磁釉は口縁部内面の一部と体部外面及び底部外面の一部に施され，淡緑色に発色している。17は口縁部が若干外へ開く皿である。青磁釉は畳付をのぞき全面に厚く施されている。16と18は若干大きさに違いがあるが，いずれも外面青磁・内面染付の蓋である。内面の染付の文様，青磁の発色の具合など，11と極似するため，これらは対になるものと考えられる。21は外面青磁，内面染付の碗である。青磁釉は畳付をのぞき外面全体に厚く施され，発色も良好である。呉須で口縁下に幾何学連続文，見込みに草花文が描かれている。23は器壁が厚く安定した皿である。青磁釉は比較的薄く施され，暗青色に発色している。底部外面は鉄足を意識して環状に釉が剝ぎとられている。露胎部には鉄錆で化粧塗りが施されている。内面には草花文が陰刻されている。胎土は他の製品が白色であるのに比べて本例のみ暗灰色である。24は復元口径36.2cmの大型皿である。釉は畳付をのぞき全面に厚く施され，青白色の美しい色に発色している。25は広口の瓶で体部以下は欠損する。肩部に稜を有し，二方に貼文が施されている。口縁部は紫口を意識している。全体に貫入がみられる。26は低い三脚が付く香炉と思われる。釉は内面と底部外面をのぞく全面に厚く施されている。底部外面の露胎部には鉄錆で化粧塗りが施されている。

色絵磁器（Fig. 153－20・22, PL. 110－7・9）

20は口縁端部が外へ開く碗である。染付は口縁部内面に幾何学連続文と各部の圏線として施されている。赤絵で体部外面に直径4cmの円文が推定4個配され，その間は幾何学文でうめられ，口縁下外面には唐草文が，見込みには染付の二重圏線の中に変形花文が描かれる。赤絵の発色は若干黒ずんでいる。底部外面には「富貴長春」の銘款がある。22は染錦手であるが，八角の型もの皿である。上絵は赤・緑・群青で描かれている。

染付磁器（Fig. 153－10, 154, PL. 111）

染付磁器は量的に一番豊富であった。器種は碗・皿・瓶の3種類がある。

碗（1～15）　碗は体部の形態が半月形・筒形・口縁端部が外へ開くものの3種類がある。文様は網目文・草花文・割文がある。1・5・9・13は網目文の碗で，1・5・9はともに見込みに菊文が描かれている。1・5は焼成温度が低いためか上釉の発色が悪く黄色味を帯びる。外面の網目は二重，内面は一重である。底部外面に銘款があるが判読できない。9は網目文の呉須が流れている。網目は内外面ともに二重である。底部外面の銘款は判読できない。13は大

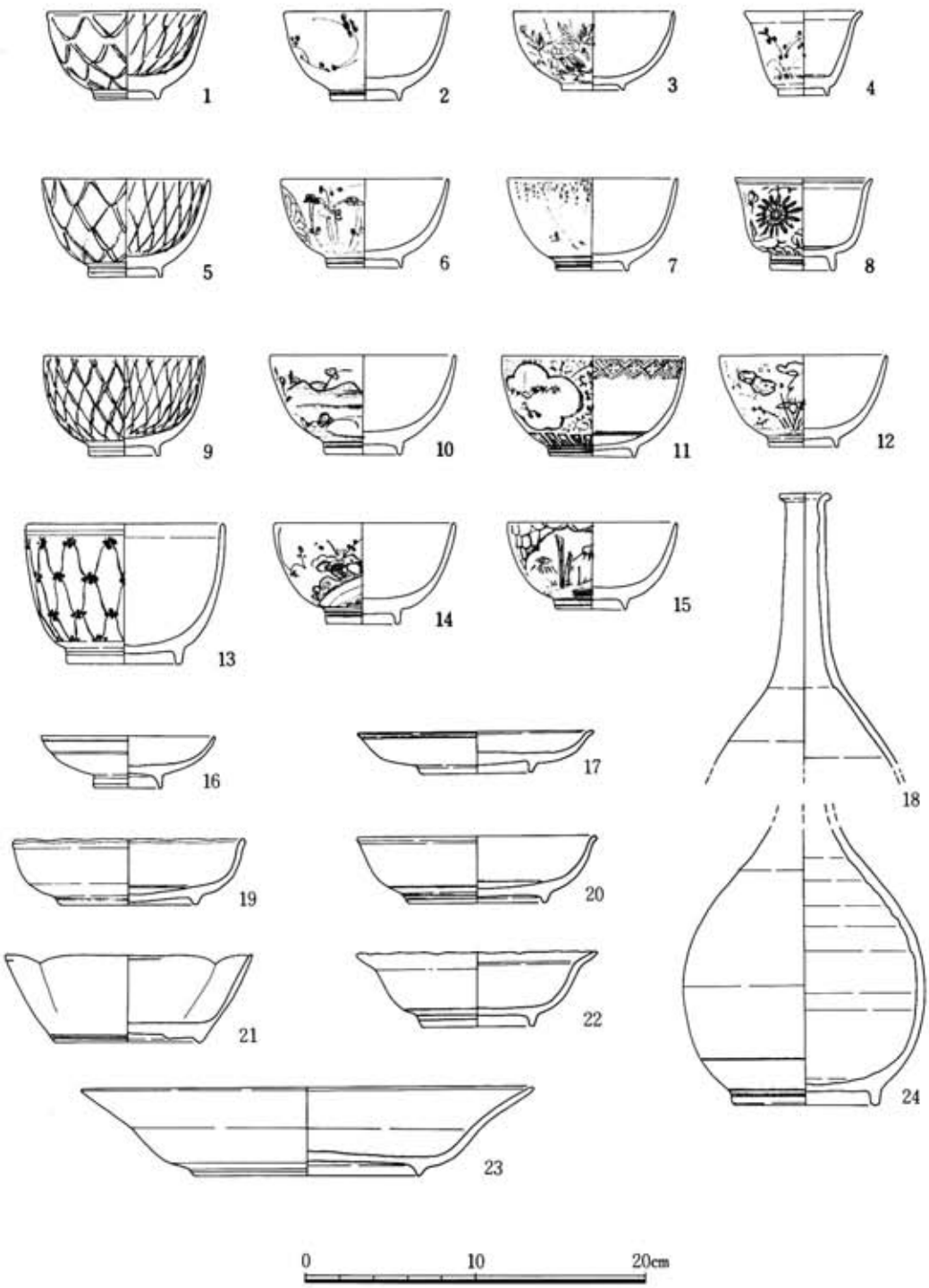


Fig. 154　長尾遺跡出土磁器実測図　(2)

型で深みのある碗である。体部外面の網目文は特徴である。器面には貫入がみられる。2・3・4・6・7・8・10・12・14には，草花文が描かれている。4・8は口縁部が外反する小型の碗である。その他は体部が丸味を帯びる半月形のものである。2は½欠損するため全体の文様構成は不明である。底部外面の銘款は判読できない。3は牡丹文が二方に描かれている。上釉・呉須ともに発色良好である。6は上釉・呉須の発色がともに悪い焼成不良の製品である。三方に菊花文が配され，その間が草花文でうめられている。底部外面の銘款は簡略に書かれた「角福」である。7は口縁端部に鉄釉が施されている。10も焼成不良で上釉は青灰色である。岩に草花文が外面全体に描かれている。14は呉須の色が黒く発色して上釉も青味が強い。11と15は窓絵で文様が構成される。11は窓が三方に配され，その中に松・竹・梅，周囲に蛸唐草が描かれている。口縁下内面には幾何学連続文，見込みには草花文が描かれている。上釉・呉須ともに発色は良好である。15は窓絵が対称的な位置に配され，その中には松・竹文が描かれている。

皿（16・17・19～23）　19は輪花形皿である。体部内面には蛸唐草がめぐらされ，見込みには五弁花文が描かれている。外面には簡略な唐草文と底部外面には「二重角福」の銘款がある。上釉・呉須ともに発色は良好である。20は口縁端部が若干外へ開く皿である。体部内面には波間に扇が漂っている模様と見込みには五弁花文が描かれている。外面には簡略な唐草文と底部外面には「大明年製」の銘款がある。上釉・呉須とも発色は良好である。21は四方割の深みのある皿である。内面唐花唐草文，外面唐草文で，底部外面には「奇玉宝鼎之珍」の銘款がある。底部外面は環状に釉が剝ぎとられる。22は口縁部が外反する深みのある輪花形皿である。体部内面に窓の陽刻が四方に配され，見込みには草花文が描かれる。体部外面と底部外面には木の葉文が描かれる。上釉・呉須とも若干黒ずむ。23は芙蓉手の大皿である。見込みには岩に草花文，外面には二方に簡略な草花文が描かれている。薄手でシャープな作行きの製品である。

瓶（18・24）　18は頸の細い長頸瓶である。胴部以下は欠損しているが，外面に呉須で書かれた文字の一部がみられる。24は下膨らみの瓶である。外面に山水文が描かれている。胎土，上釉ともに青味を帯びており，外面全体に貫入がみられる。薄手の製品である。

土師器（Fig. 155－1～15，PL. 109－1・2）

土師器は石垣状遺構の裏込め埋土から陶磁器類に混じって66個体が，また掘立柱建物跡柱穴内からは2個体が出土した。出土した土師器はすべて皿である。皿は，体部が直線的に開くものと，やや内湾するものがあり，口径の大きさで5種類に大別される。時期は陶磁器同様江戸時代のものであろう。

皿Ⅰ（1～4）　口径5.6～6.7cmのもので29個体出土した。1は器壁が厚く，2は薄く，3は底部が厚くなる。4は器高が若干高い。いずれも底部は糸切り離しである。10個体ほどの口縁部内面には煤が1～3カ所付着している。2はSB001掘立柱建物跡柱穴内出土。

皿Ⅱ（5・6・7）　口径7.0～7.8cmのもので30個体出土した。5は器壁が薄く，6・7は

厚く体部が若干内湾ぎみである。皿Ⅰと同様に糸切り離し痕と煤が観察される。7はSB001掘立柱建物跡柱穴内出土。

皿Ⅲ（9・10）　口径8.0～8.3cmのもので3個体出土した。8は全体的に器壁が薄く，9は底部が厚い。底部は糸切り離しである。

皿Ⅳ（11・12・13）　口径8.5～8.8cmのもので4個体出土した。11はゆるい上底の底部で，体部が外に開く。底部は糸切り離しである。

皿Ⅴ（14・15）　口径9.5～9.6cmのもので2個体出土した。平底で体部が外へ開く。器壁は若干薄い。底部は糸切り離しである。

その他の遺物

硯（Fig. 155－16）

残存長5.7cm，幅4.3cm，厚さ1.1cmである。一部欠損するが，平面は長方形と思われる。材質は粘板岩である。

瓦（Fig. 155－17）

平瓦である。1枚作りで表は布目を，裏はタタキ調整を施したあと，それぞれケズリ調整をしている。焼成は普通で胎土には1～2mmの砂粒を含む。

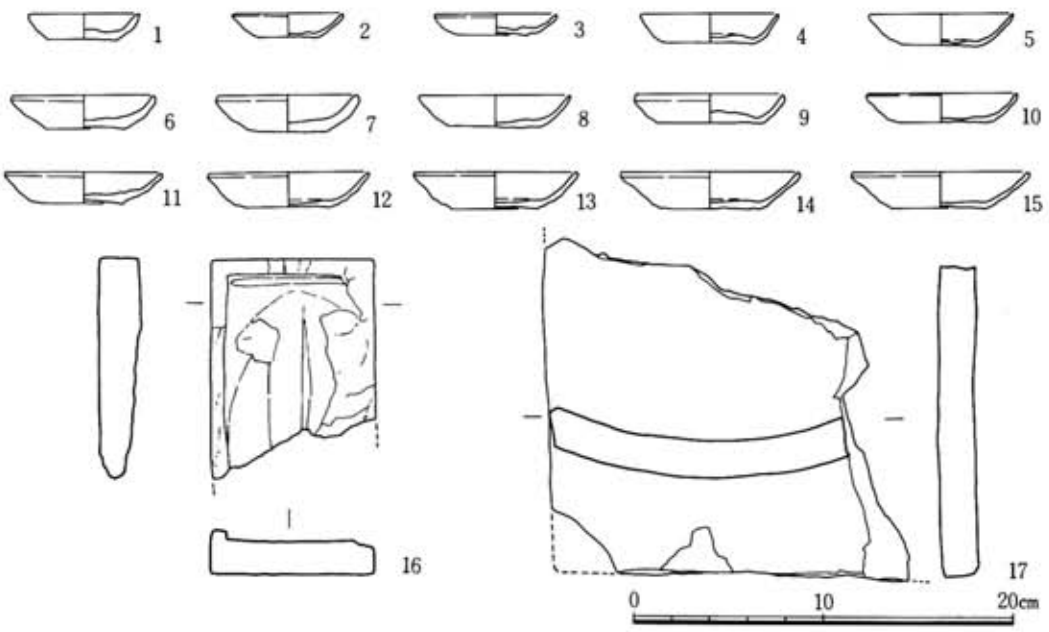
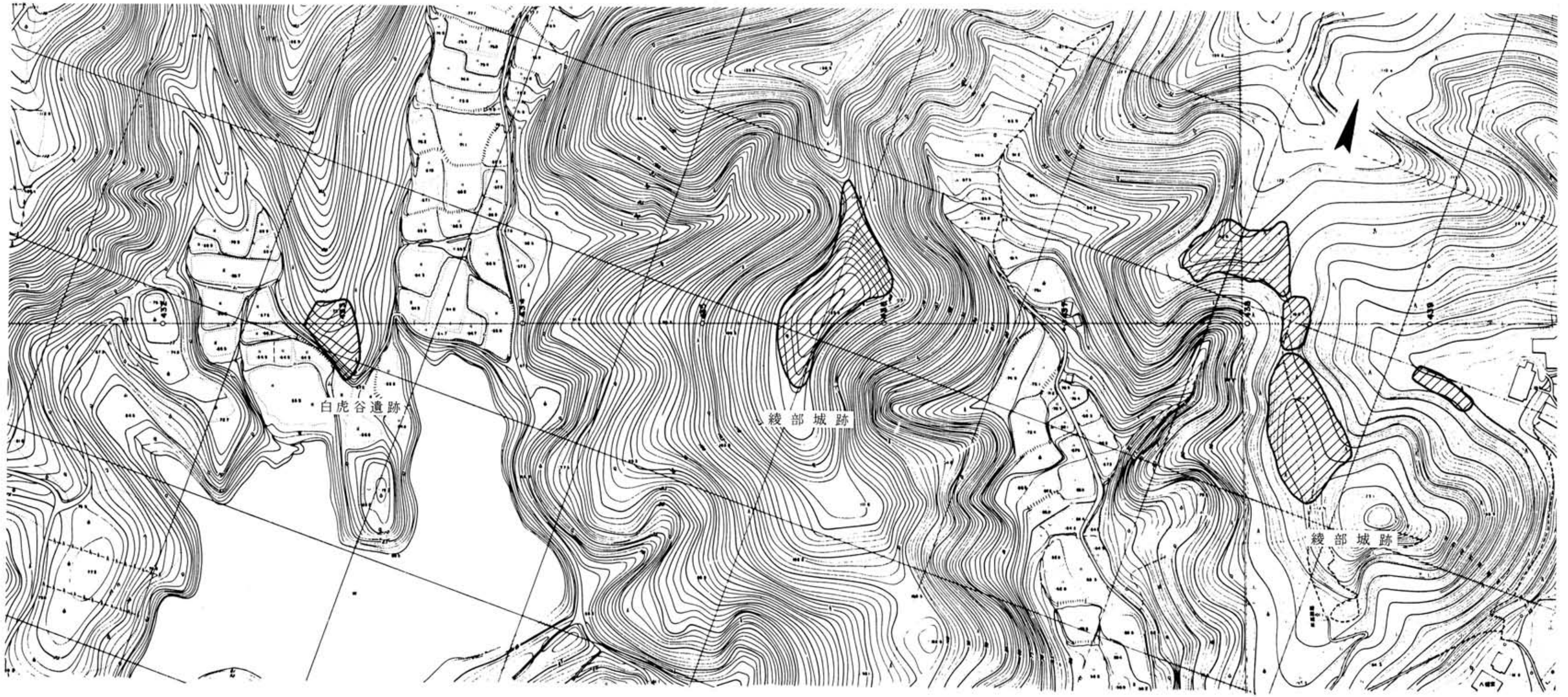


Fig. 155　長尾遺跡出土土師器，その他遺物実測図

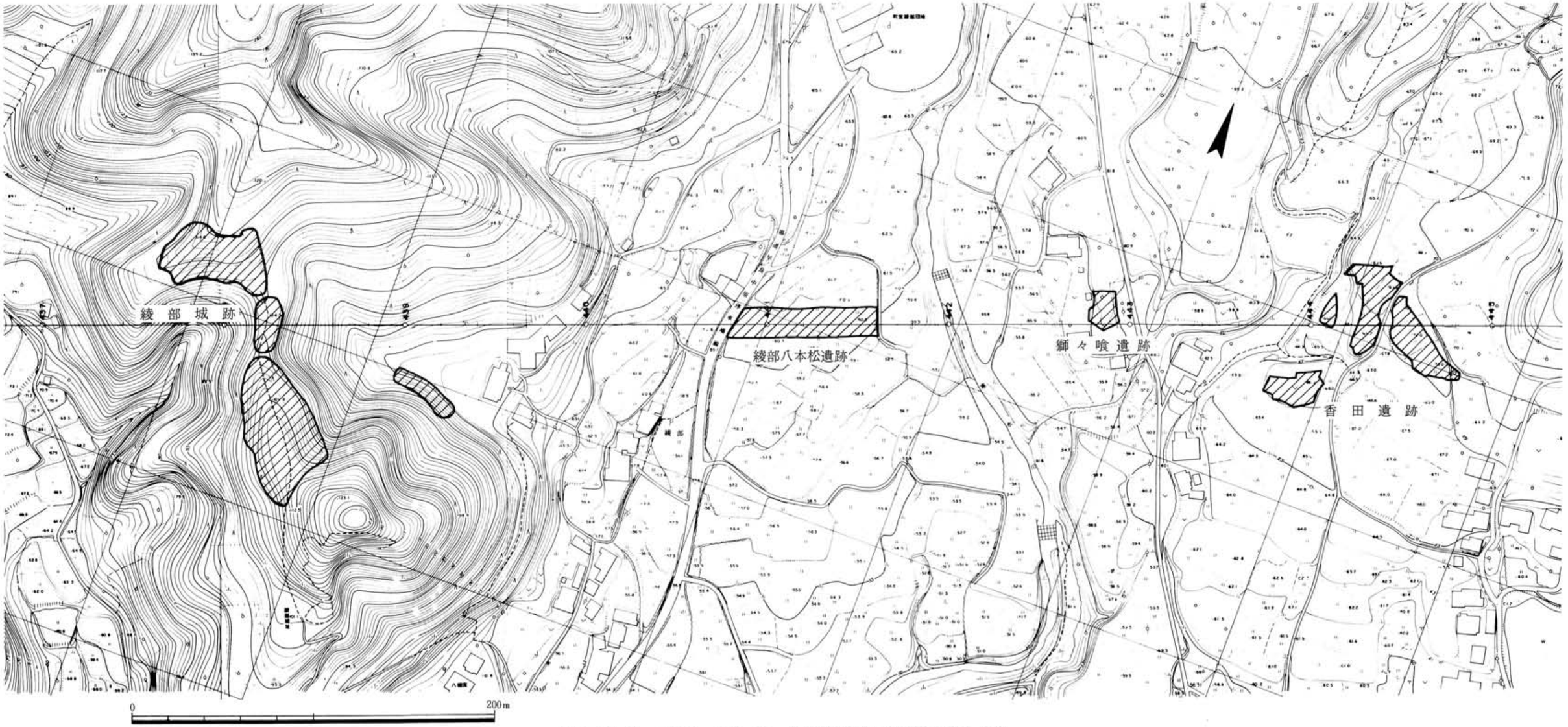
4．小　　結

長尾遺跡は，以前より多くの遺跡が存在することが知られていた佐賀市金立町の大門地区に位置する。当遺跡は今回の調査で，隣接する大門西遺跡・三郎山遺跡とともに新しい知見を得ることができた。

遺構は，SB001掘立柱建物跡，SX002石垣状遺構，SD003溝状遺構と数少ないが，SX002石垣状遺構の裏込めから出土した多量の近世陶磁器類は，県下での近世窯跡以外ではその量・種類とも豊富であり，注目される。SX002石垣状遺構そのものは，西側平坦部との関連が考えられる。ただ遺構を検出できなかったので推測の域を出ないが，出土した陶磁器類からみて，建物の敷地を区画する石垣ではなかったろうか。



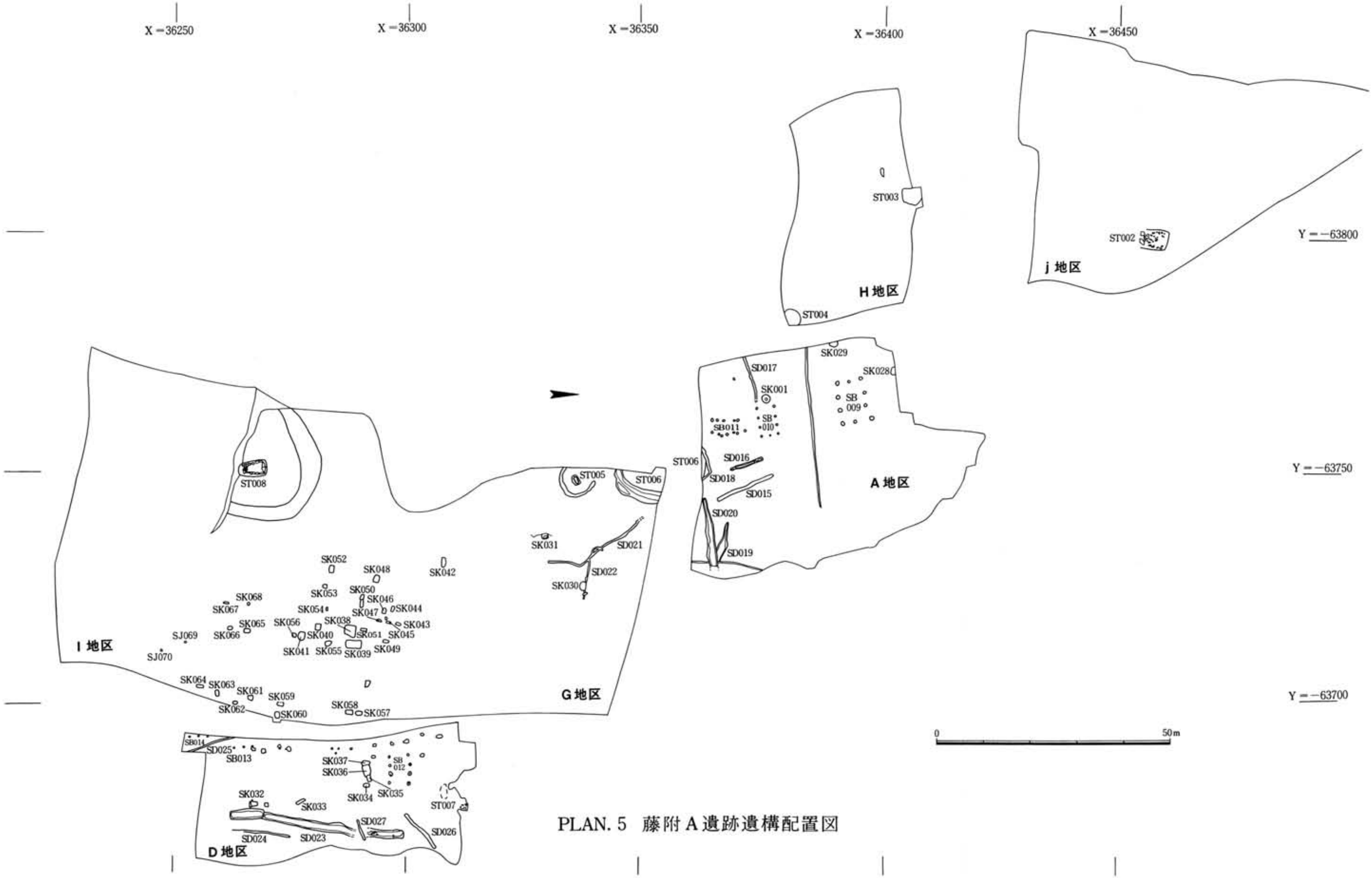
PLAN. 1　香田・獅々喰・白虎谷遺跡周辺地形図 (1)



PLAN. 2　香田・獅々喰・白虎谷遺跡周辺地形図 (2)

PLAN. 3　寺ケ里・戦場遺跡周辺地形図

PLAN. 4　藤附遺跡周辺地形図



PLAN. 5　藤附 A 遺跡遺構配置図

図版Ⅰ　遺構

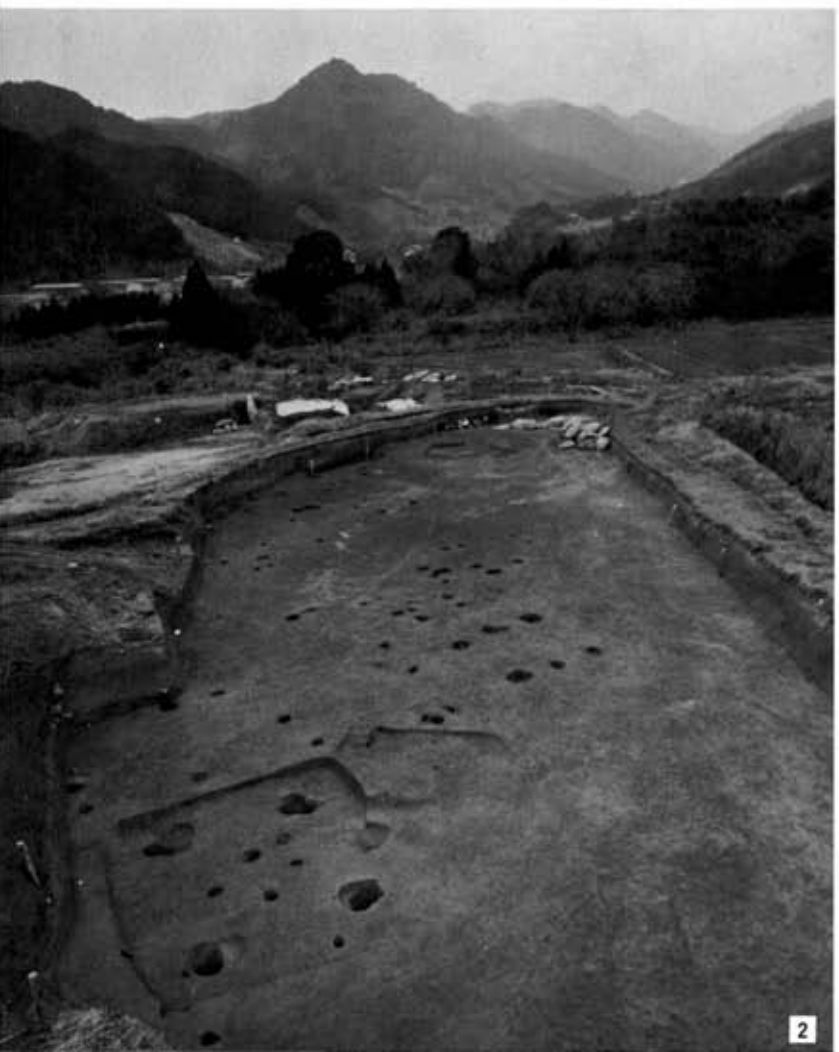
香田遺跡

香田・獅々喰〈航空写真〉

PL. 2

1．香田遠景（航空写真）〈東から〉　2．香田　同　〈南から〉

1．香田A地区2区〈東から〉　2．香田A地区3区〈南から〉

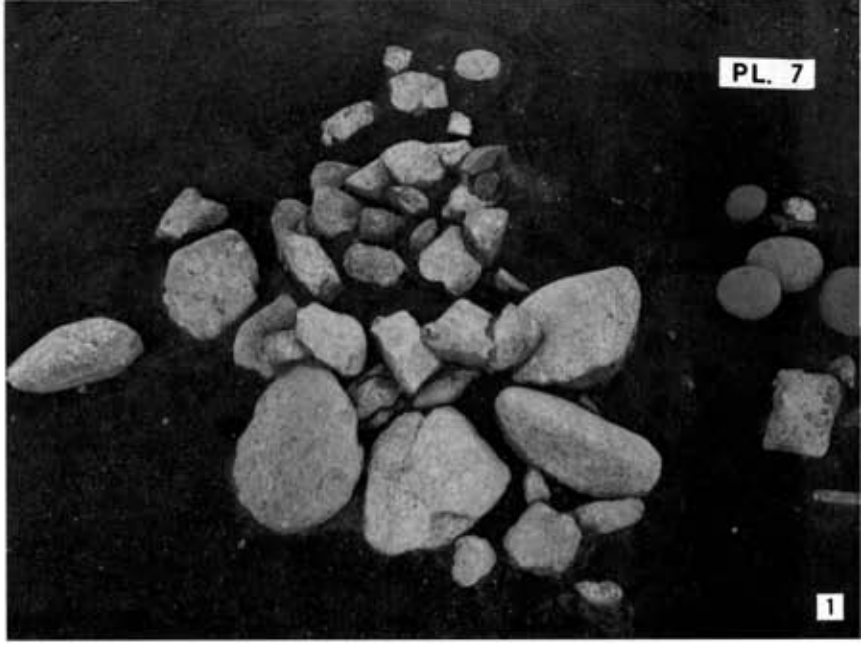


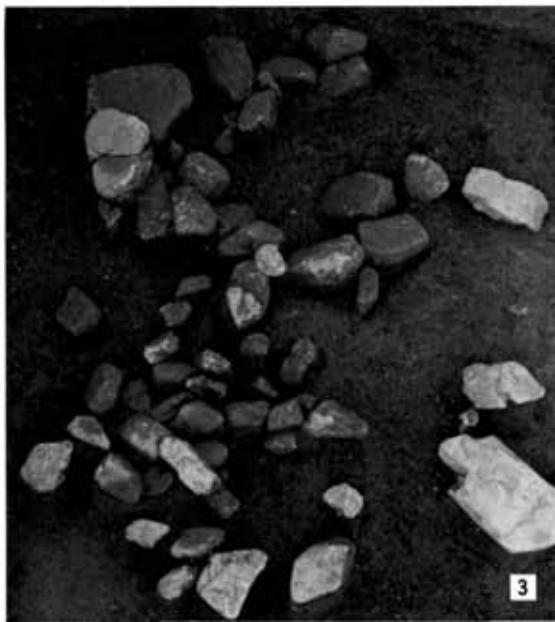
1．香田B地区1区〈南から〉
2．香田　　同　　〈東から〉

1．香田A地区4区〈西から〉　2．香田　同　〈北から〉

PL. 6

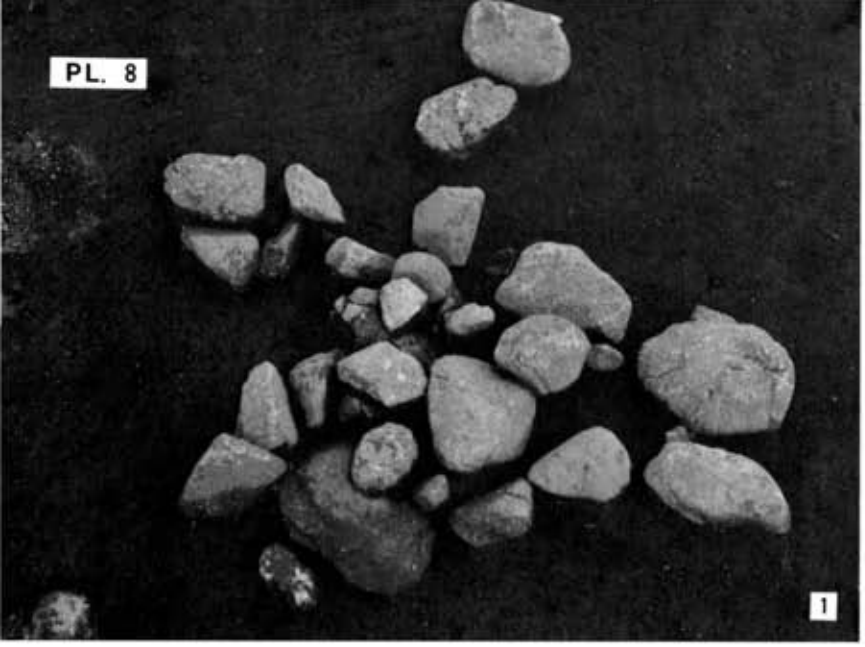
1．香田SX001～005·008·009集石〈北西から〉　2．香田SX005～009集石〈東から〉

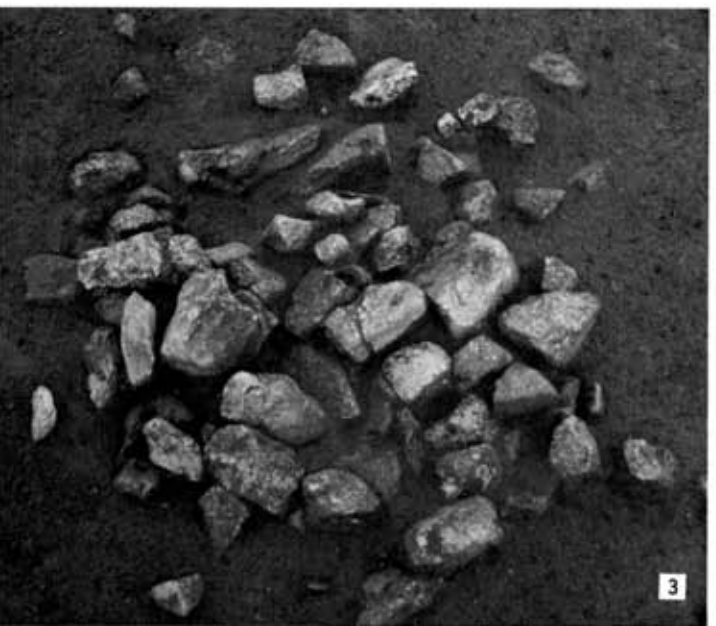




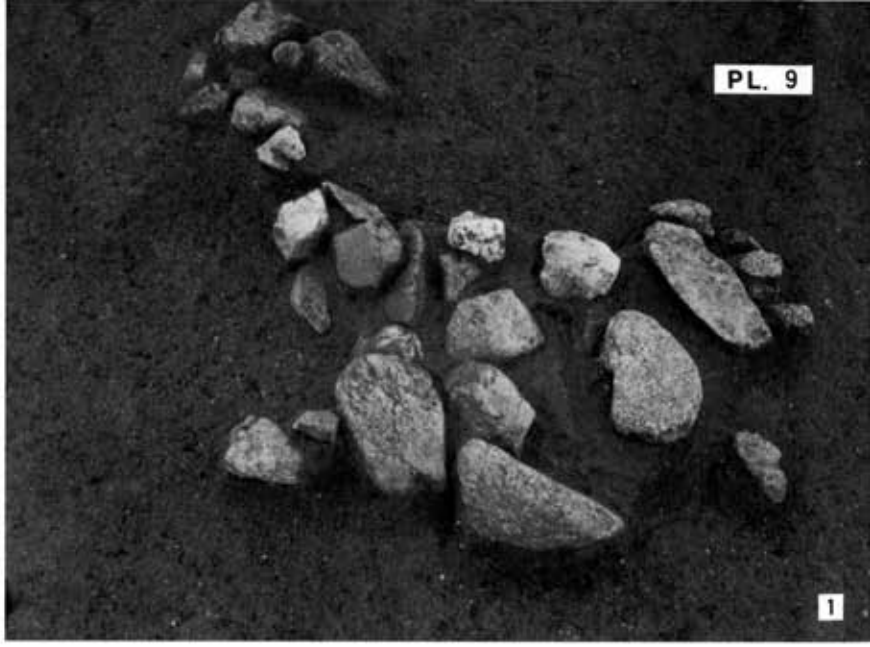
1．香田SX001集石
2．香田SX003集石
3．香田SX002集石

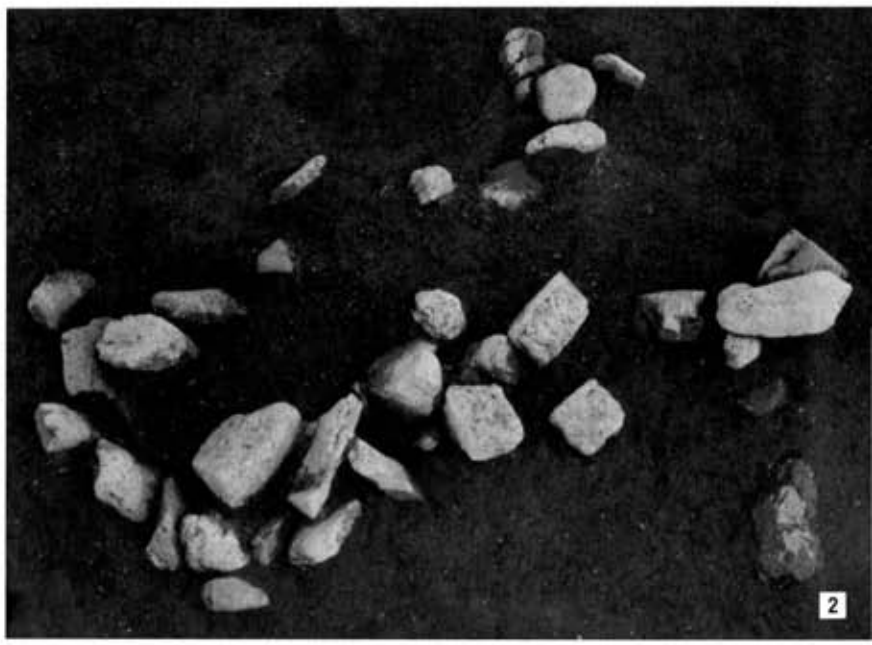
PL. 8





1．香田SX004集石
2．香田SX006集石
3．香田SX005集石





1．香田SX007集石
2．香田SX008集石
3．香田SX009集石

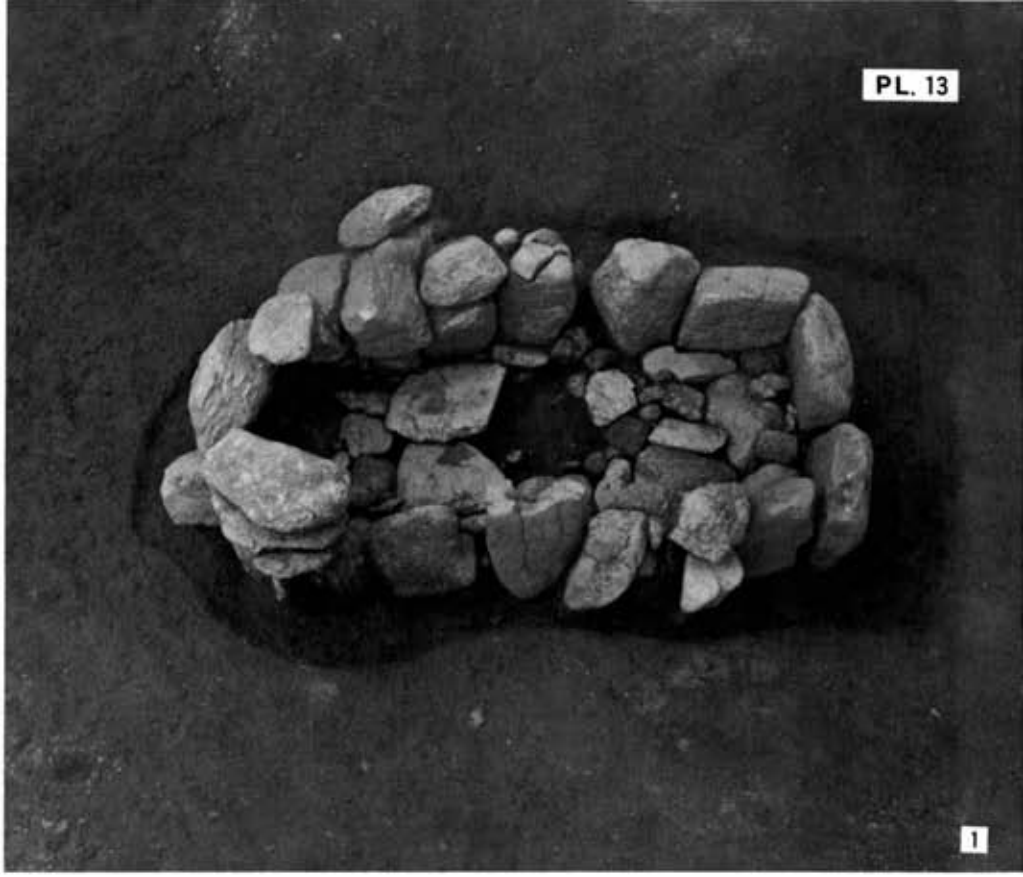
PL. 10

1．香田 SX010支石墓〈南から〉　2．香田　同　〈西から〉

1．香田SX010支石墓支石除去後〈西から〉　2．香田　同　土壙〈西から〉

PL. 12

1．香田SX010支石墓，SJ011壺棺墓全景〈西から〉
2．香田SJ011壺棺墓〈西から〉
3．香田SJ011壺棺墓供献土器〈西から〉



1

2

1．香田 SC013石棺墓〈北から〉　2．香田　同　〈西から〉

PL. 14

1

2

1．香田SP014土壙墓〈南から〉　2．香田　同　遺物取上げ後〈南から〉

1．香田ST015古墳全景〈南西から〉
2．香田ST017古墳全景〈東 か ら〉
3．香田ST018古墳全景〈北東から〉

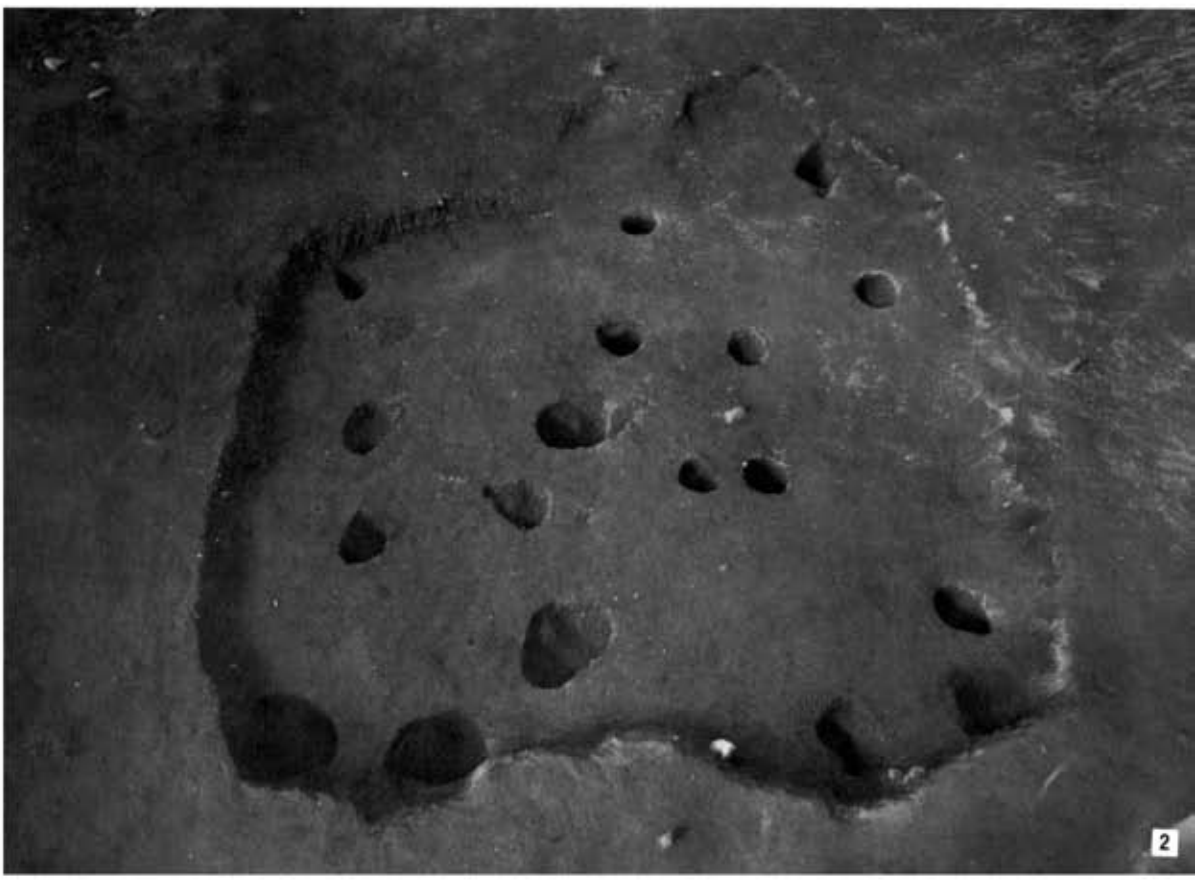
PL. 16

1．香田ST016古墳横穴式石室〈南から〉　2．香田　同　〈西から〉

1．香田ST016古墳遺物出土状況〈南から〉　2．香田　同　〈西から〉

1．香田ST019古墳横穴式石室〈南東から〉　2．香田　同　〈南西から〉

1

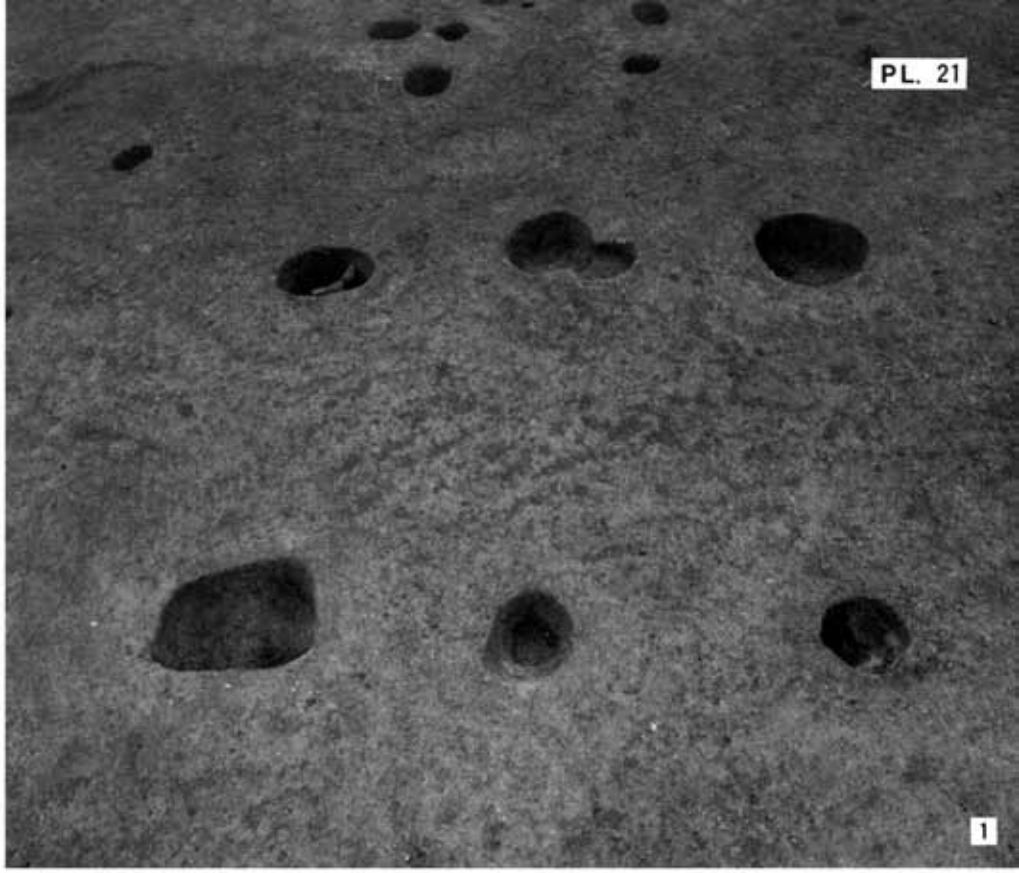


2

1．香田SB020住居跡〈北から〉　2．香田　同　〈東から〉

PL. 20

1．香田 SB021・022住居跡〈西から〉　2．香田　同　〈北から〉



1

2

1．香田SB023掘立柱建物跡〈東から〉　2．香田SB020住居跡遺物出土状況

1．香田SK024土壙（南から）　2．香田SK025土壙（東から）

獅々喰遺跡

獅々喰ST001古墳全景〈南から〉

PL. 24

1．獅々喰ST001古墳横穴式石室〈東から〉　2．獅々喰　同　閉塞石除去後〈東から〉

1．獅々喰ST001古墳〈北から〉
2．獅々喰　同　〈南東から〉
3．獅々喰　同　奥壁

白　虎　谷　遺　跡

白 虎 谷 〈航空写真〉

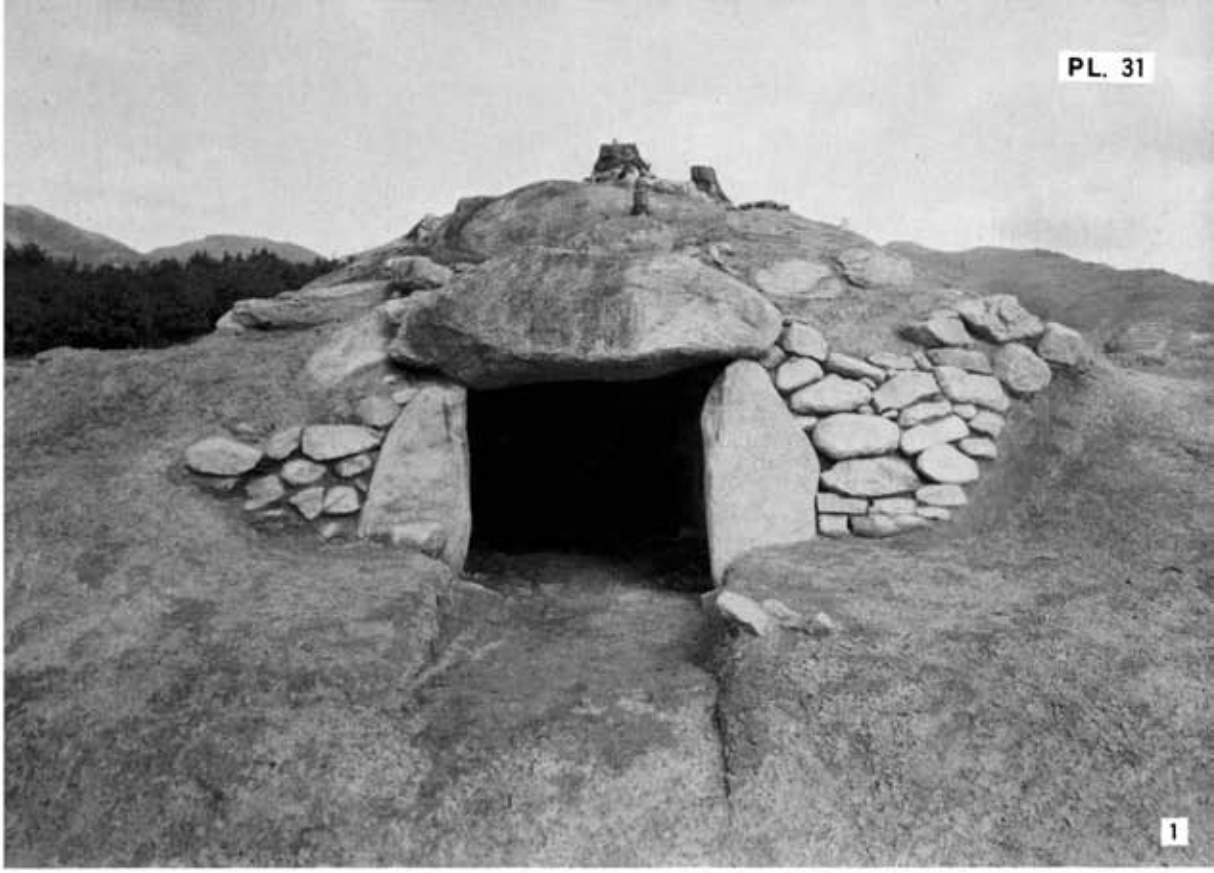
1．白虎谷（航空写真）〈東から〉　2．白虎谷遠景〈西から〉

1．白虎谷 ST001古墳横穴式石室〈南から〉
2．白虎谷　　同　　〈北から〉
3．白虎谷　　同　　〈西から〉

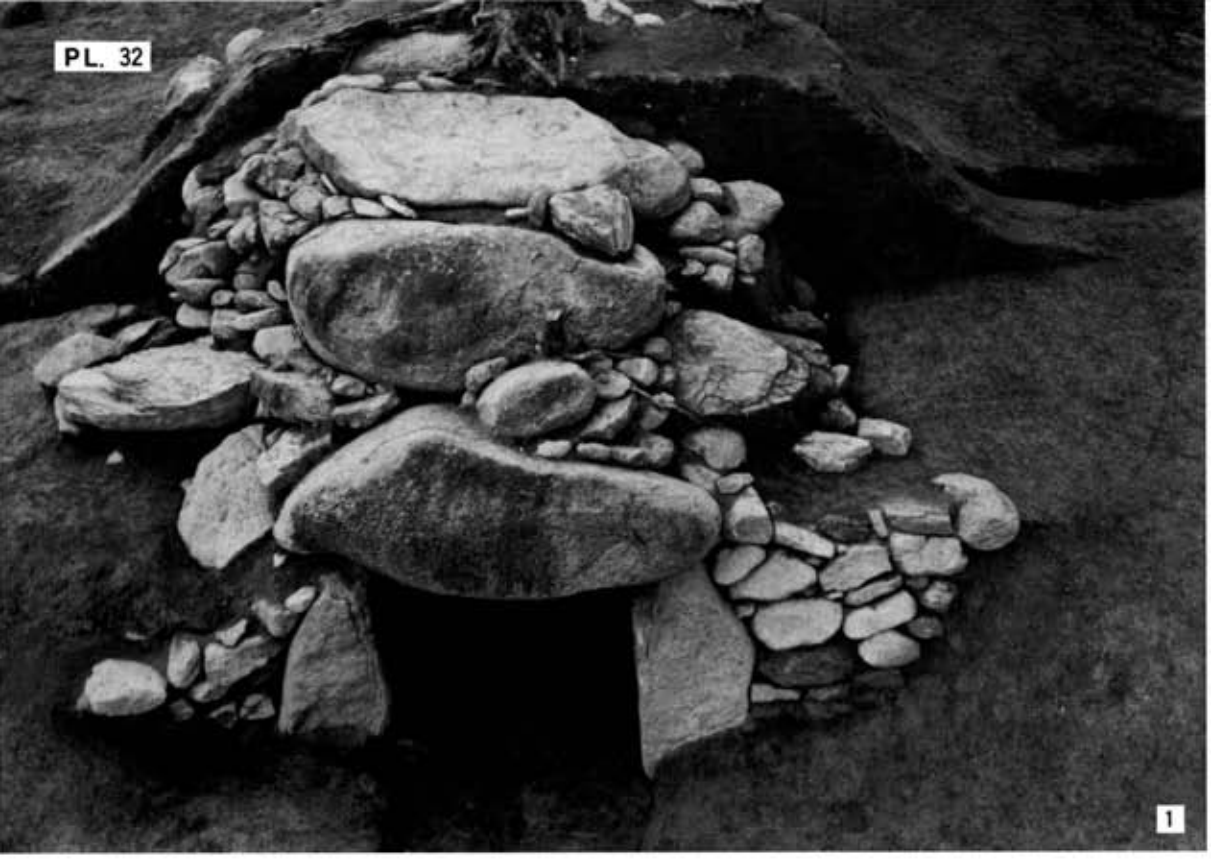
寺　ケ　里　遺　跡

寺ケ里ST001古墳全景〈南から〉

1．寺ケ里ST001古墳伐採後〈南から〉　2．寺ケ里　同　〈北から〉



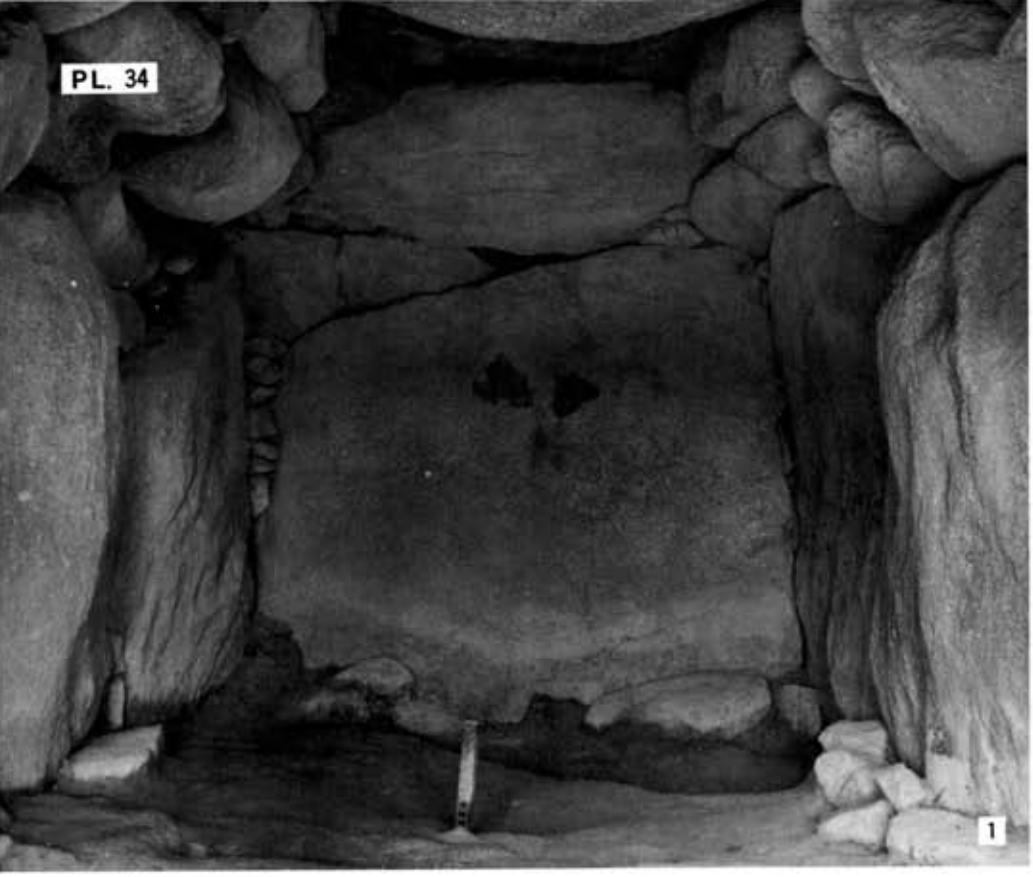
1．寺ケ里ST001古墳〈南から〉　2．寺ケ里　同　〈西から〉

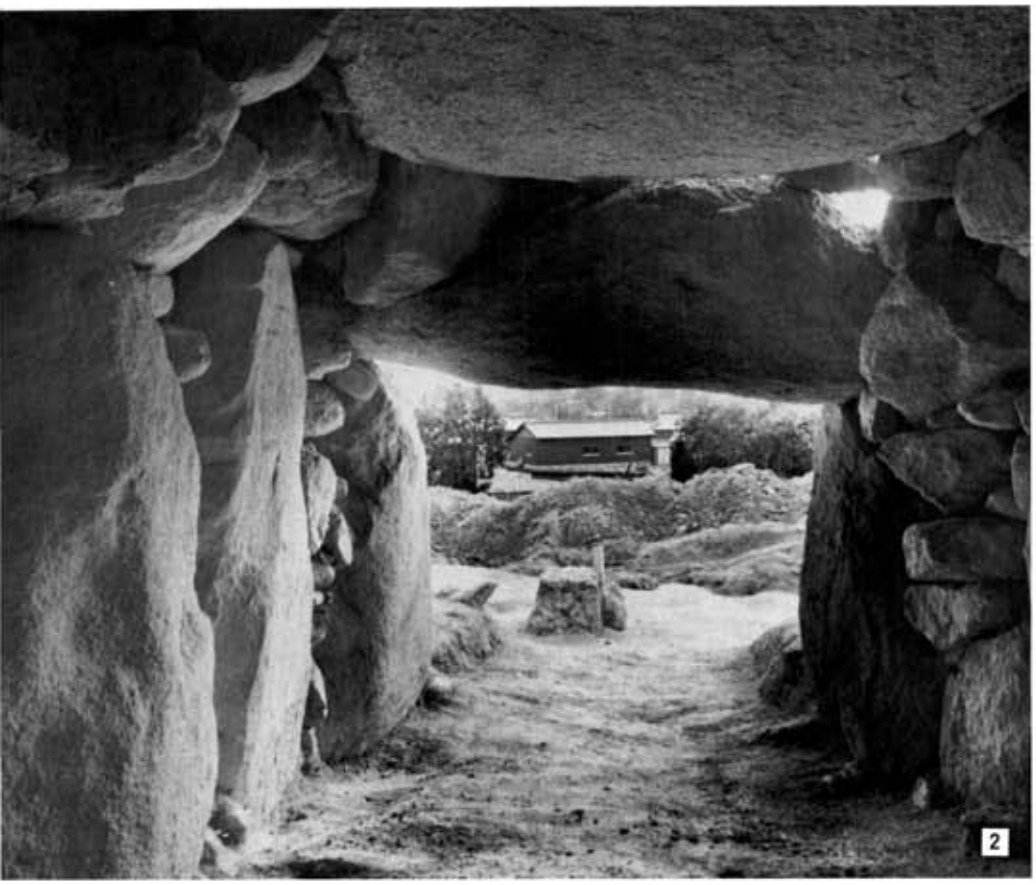


1．寺ケ里ST001古墳墳丘除去後〈南から〉　2．寺ケ里　同　〈北から〉

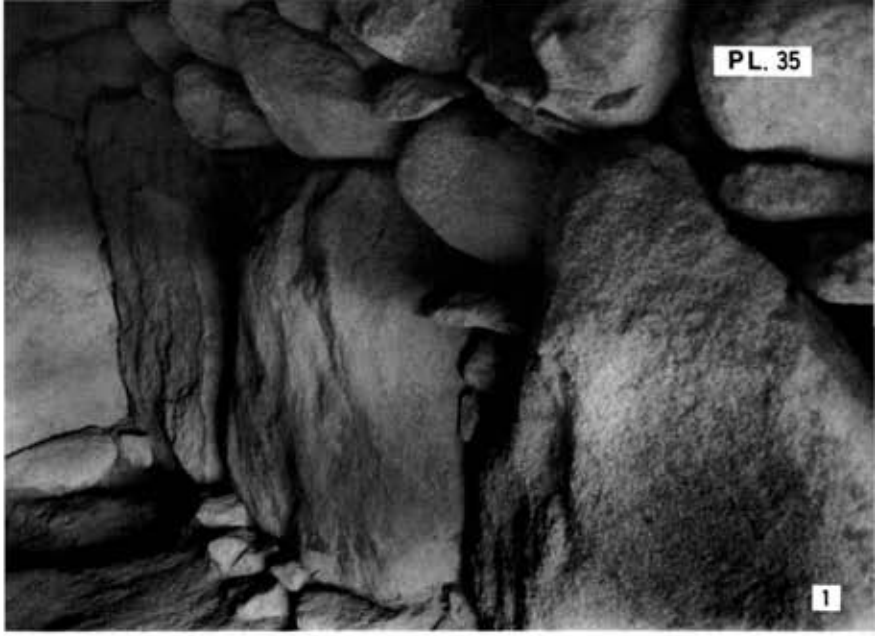
1．寺ケ里 ST001古墳墳丘土層〈西〉
2．寺ケ里　　同　　〈東〉
3．寺ケ里　　同　　〈北〉

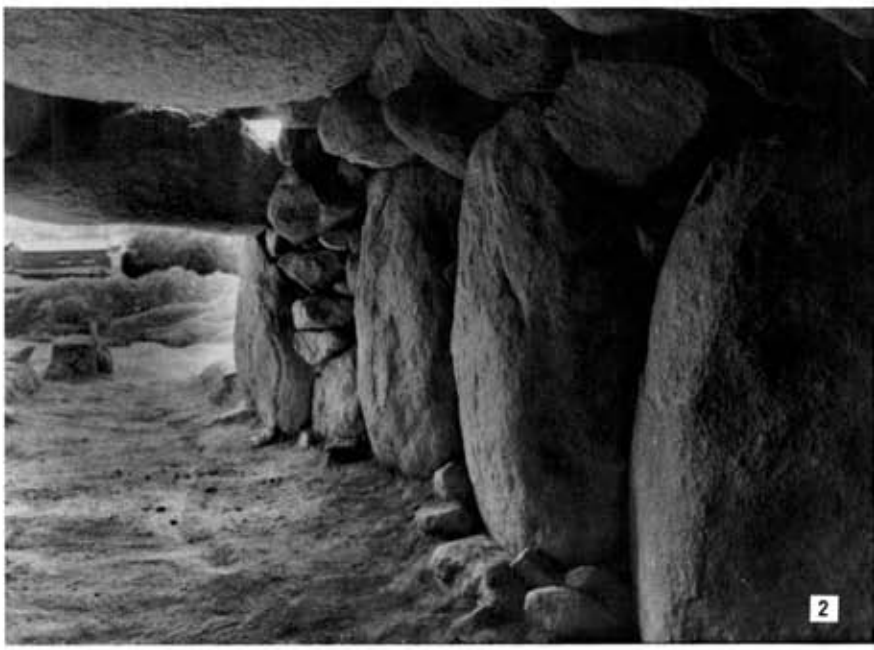
PL. 34





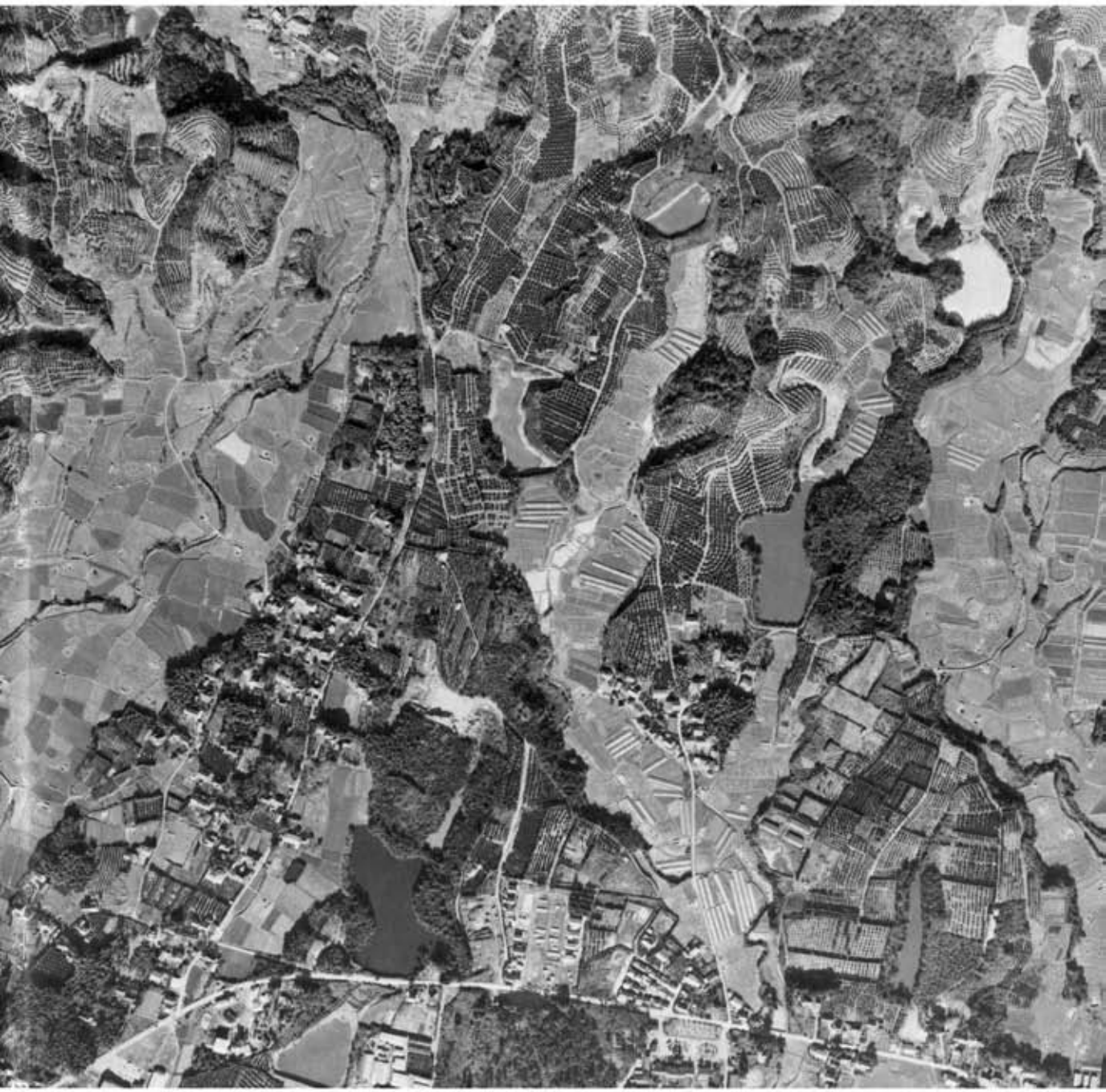
1．寺ケ里ST001古墳奥壁　2．寺ケ里　同　石室入口〈石室から〉





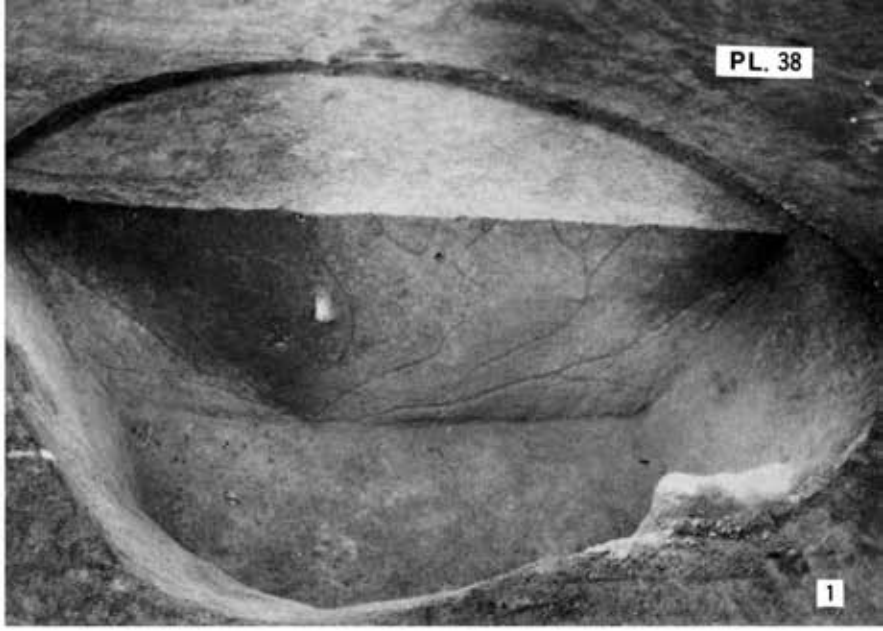
1．寺ケ里ST001古墳東側壁
2．寺ケ里　同　　西側壁
3．寺ケ里　同　　石室床面

戦　場　遺　跡



戦場・寺ケ里 〈航空写真〉

1．戦場全景〈南西から〉
2．戦場全景〈北東から〉
3．戦場全景〈北西から〉



1

2

3

1．戦場SK001土壙
2．戦場SD004溝
3．戦場三津地区全景〈西から〉

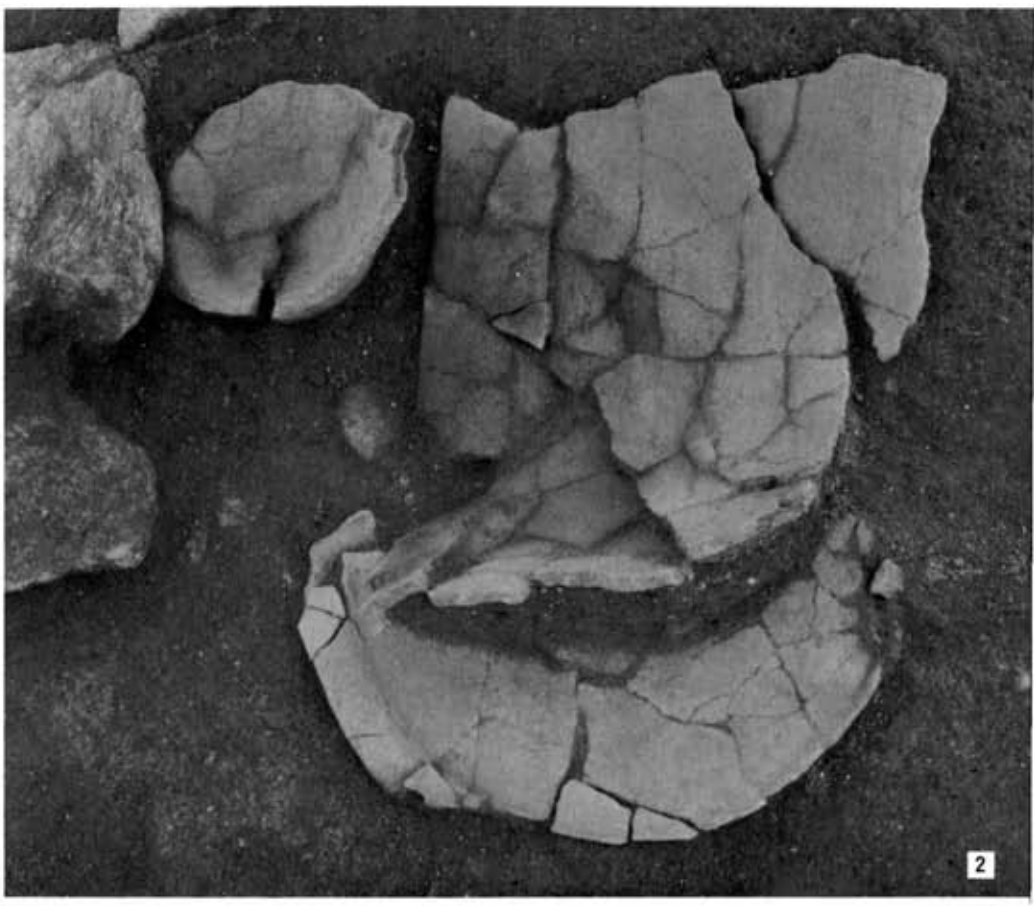
藤　附　A　遺　跡

藤　　附　〈航空写真〉

藤　附　A　〈航空写真〉

1．藤附A（航空写真）〈南から〉　2．藤附A　同　〈北から〉

1．藤附A　A地区〈東から〉　2．藤附A　I地区〈南東から〉

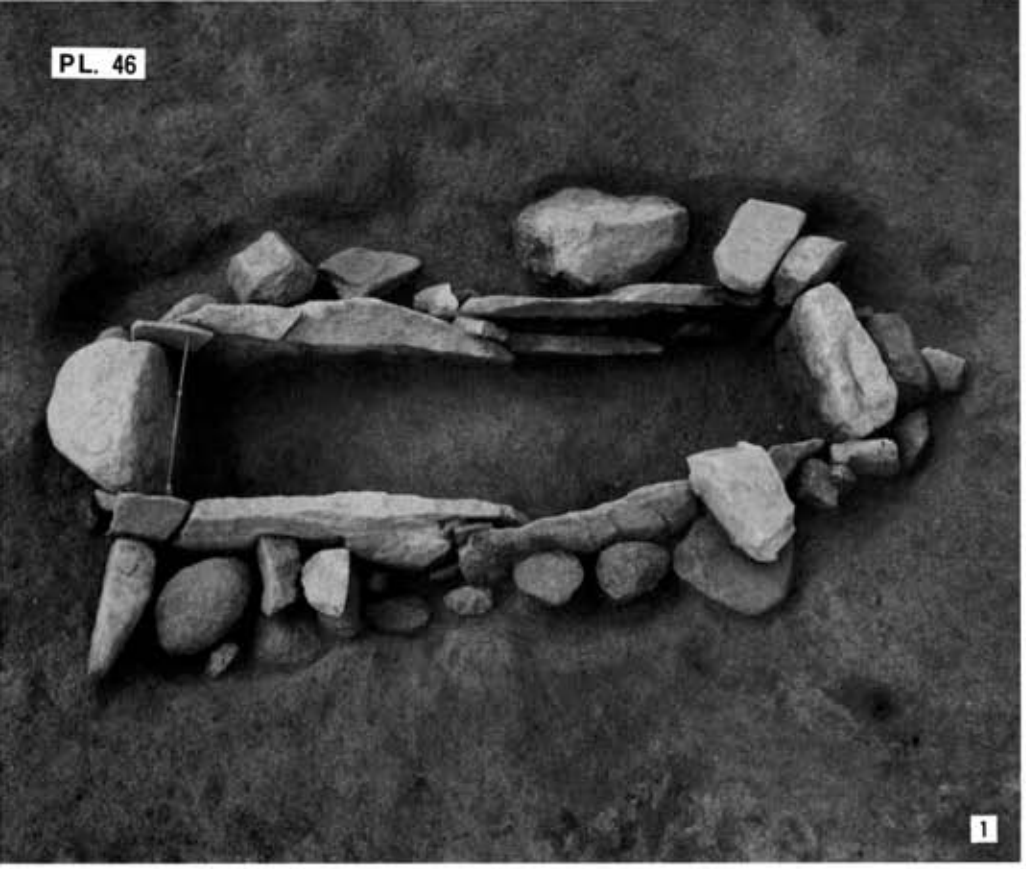


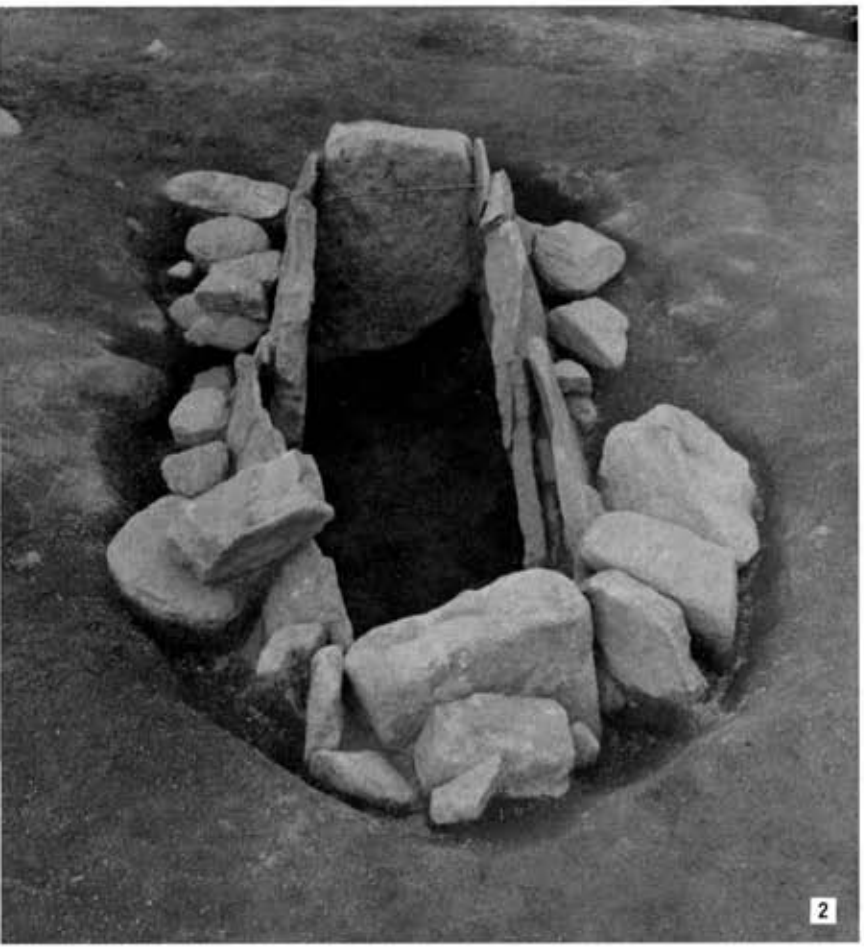
1．藤附A　SK001土壙　2．藤附A　同　遺物出土状況

PL. 44

1．藤附A　ST006古墳検出状況〈南東から〉　2．藤附A　ST002古墳横穴式石室〈南から〉

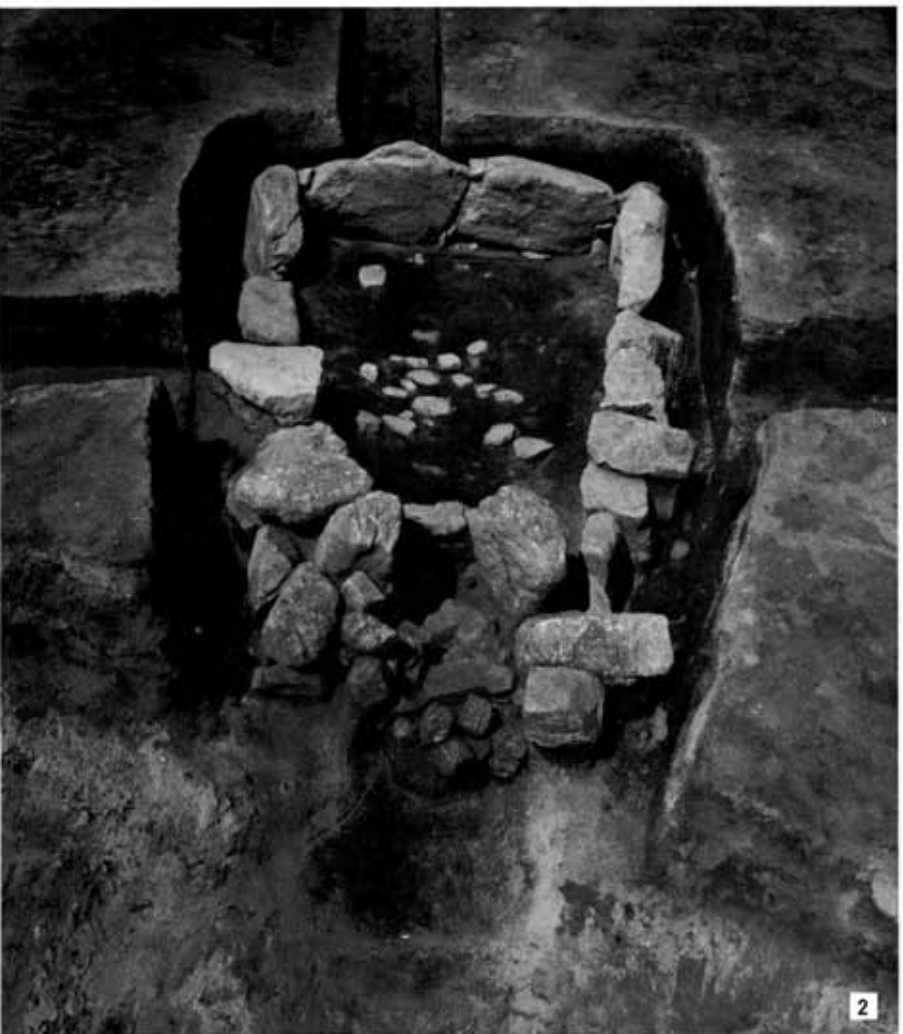
1．藤附A　ST005古墳検出状況〈北東から〉　2．藤附A　同　全景〈北東から〉





1．藤附A　ST005古墳箱式石棺〈北西から〉
2．藤附A　　同　　〈南西から〉

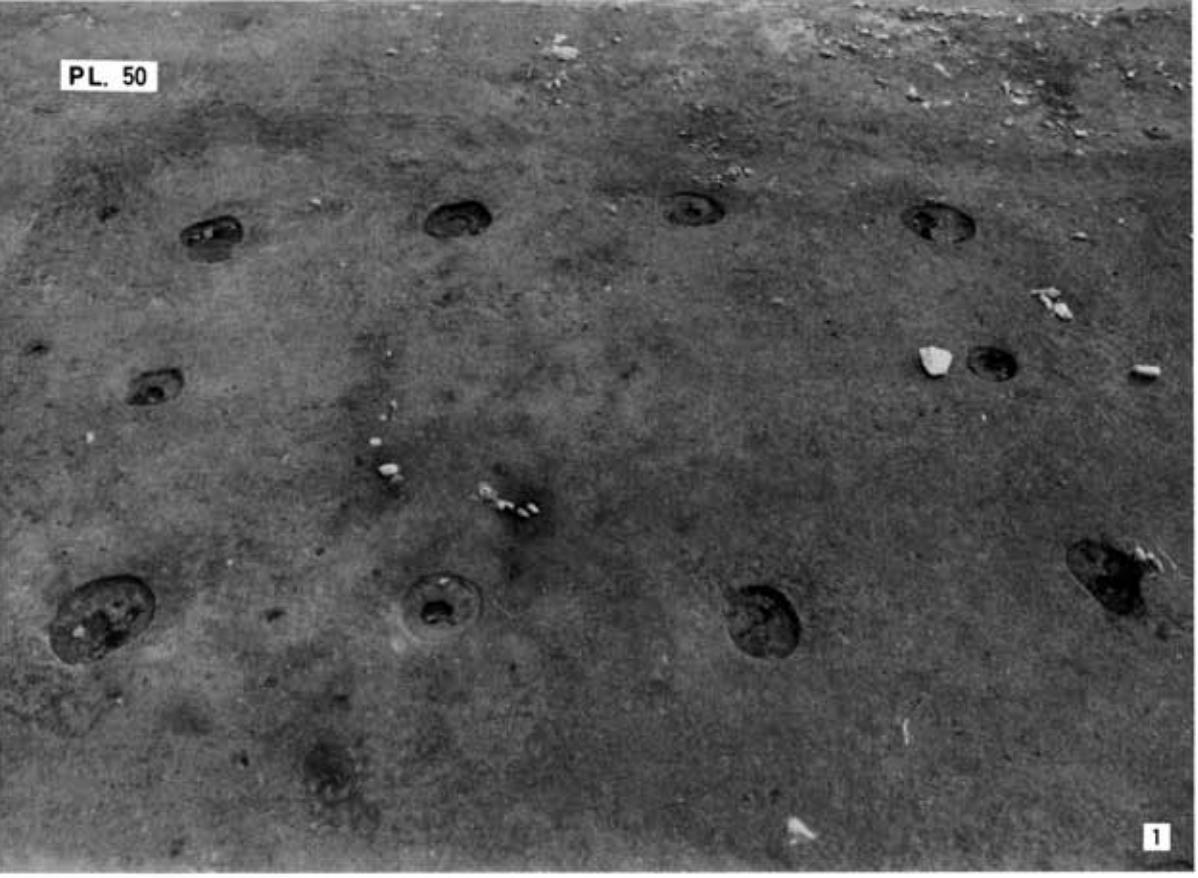
1．藤附A　ST007古墳遺物出土状況〈北から〉　2．藤附A　同

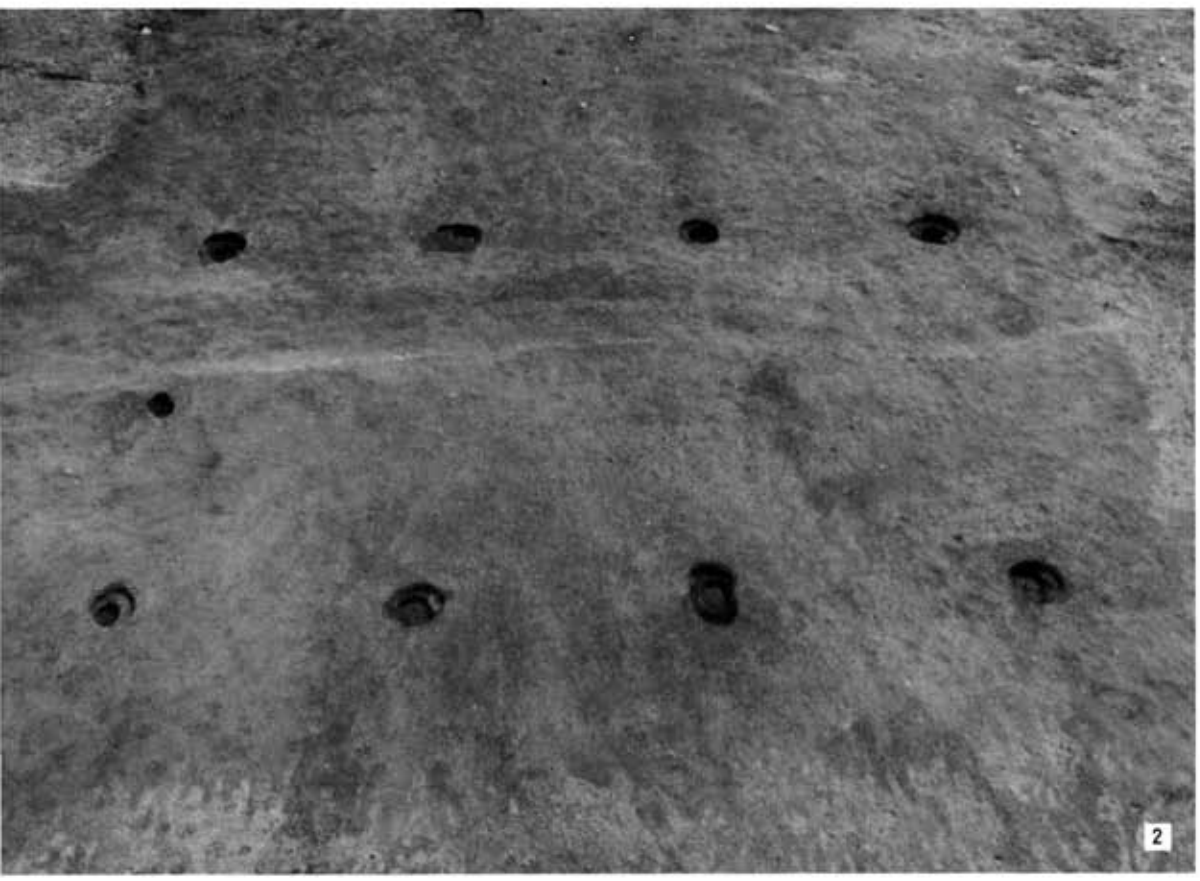


1．藤附A　ST008古墳全景〈南から〉
2．藤附A　同　横穴式石室〈南から〉

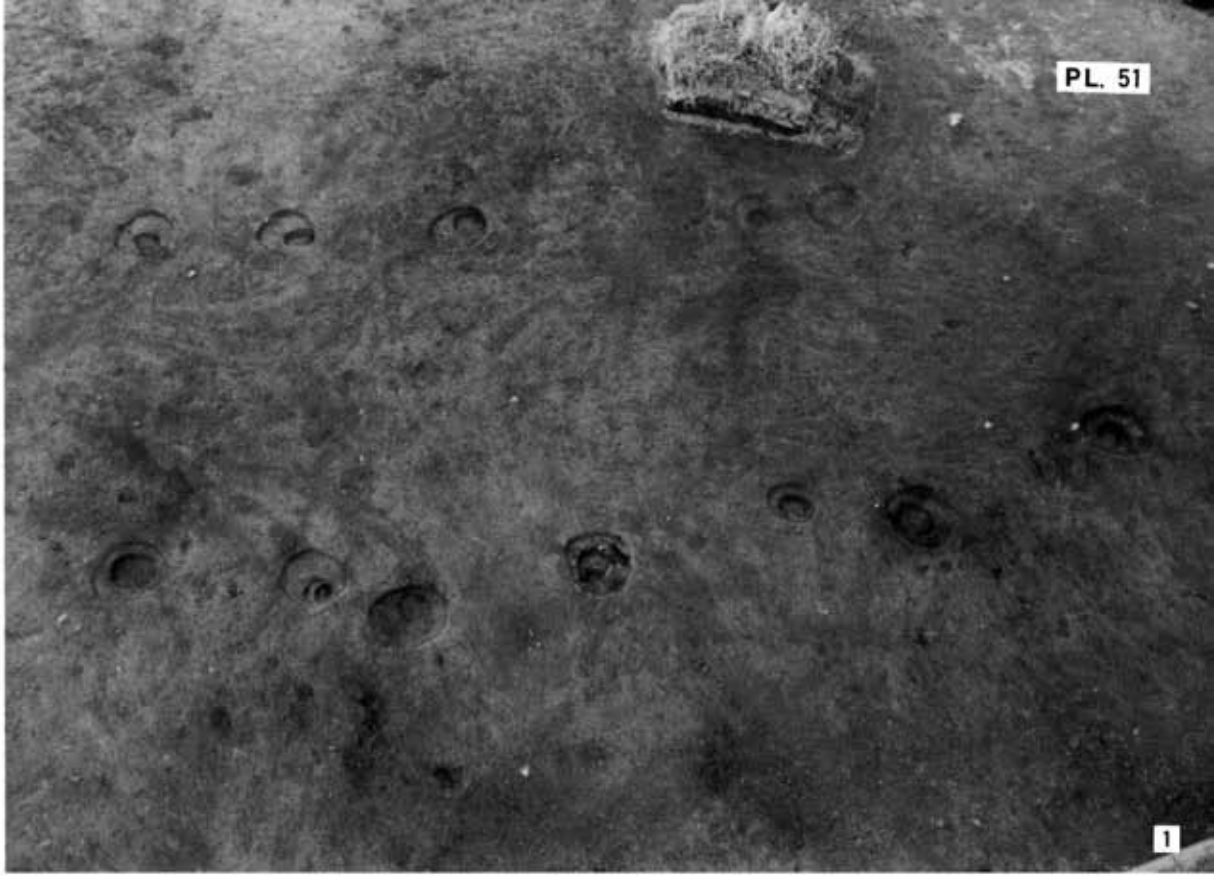
1．藤附A　ST008古墳石室内遺物出土状況
2．藤附A　同
3．藤附A　同

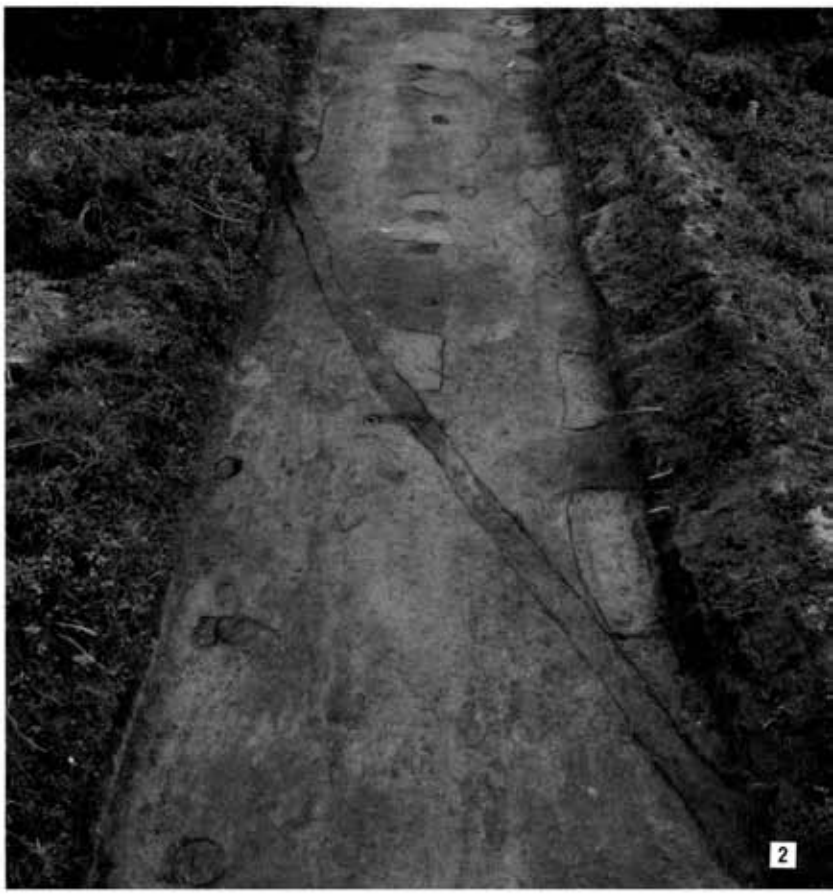
PL. 50



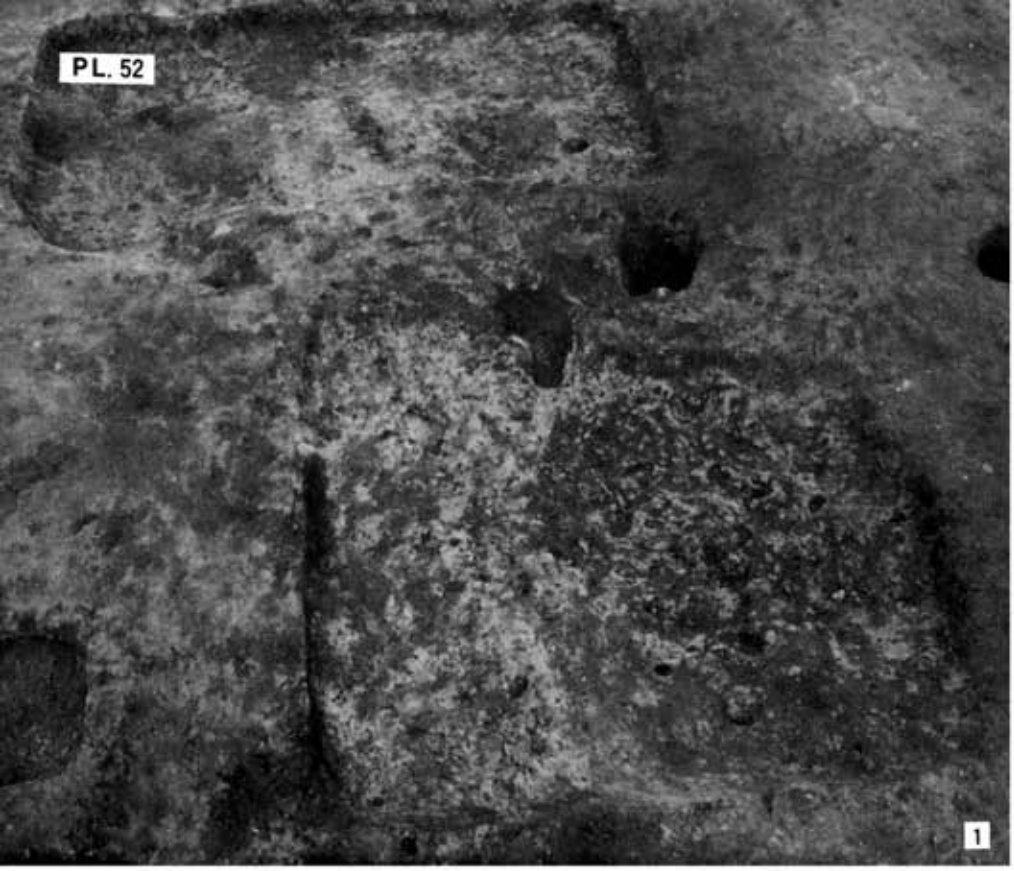


1．藤附A　SB009掘立柱建物跡〈南から〉　2．藤附A　SB010掘立柱建物跡〈南から〉



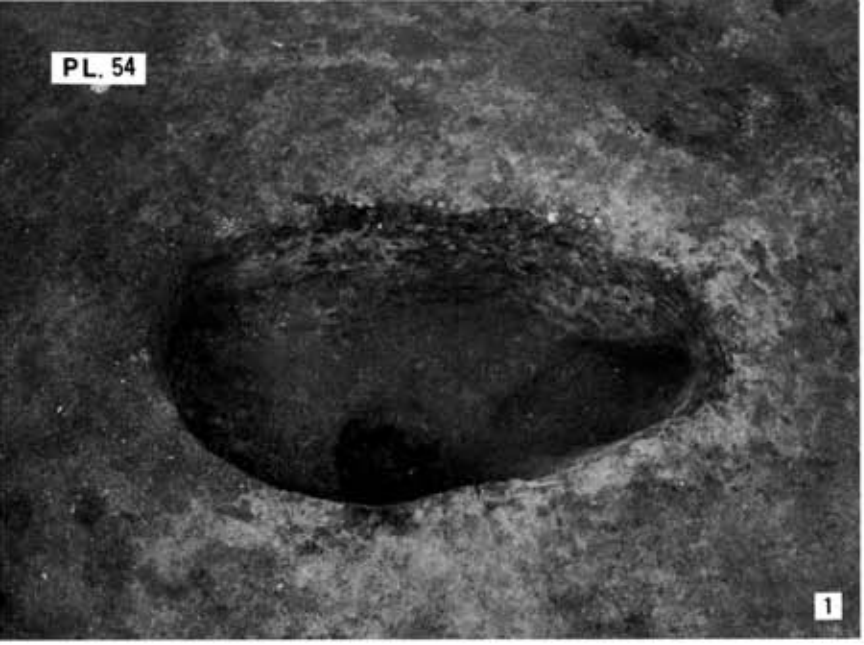


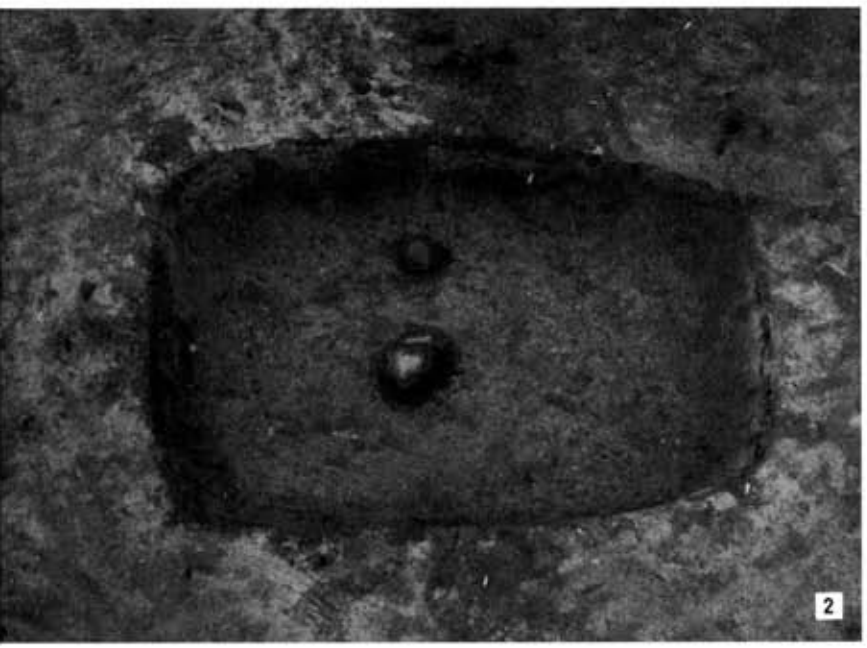
1．藤附A　SB011掘立柱建物跡〈東から〉　2．藤附A　SB013・SB014掘立柱建物跡 SD025溝〈南から〉

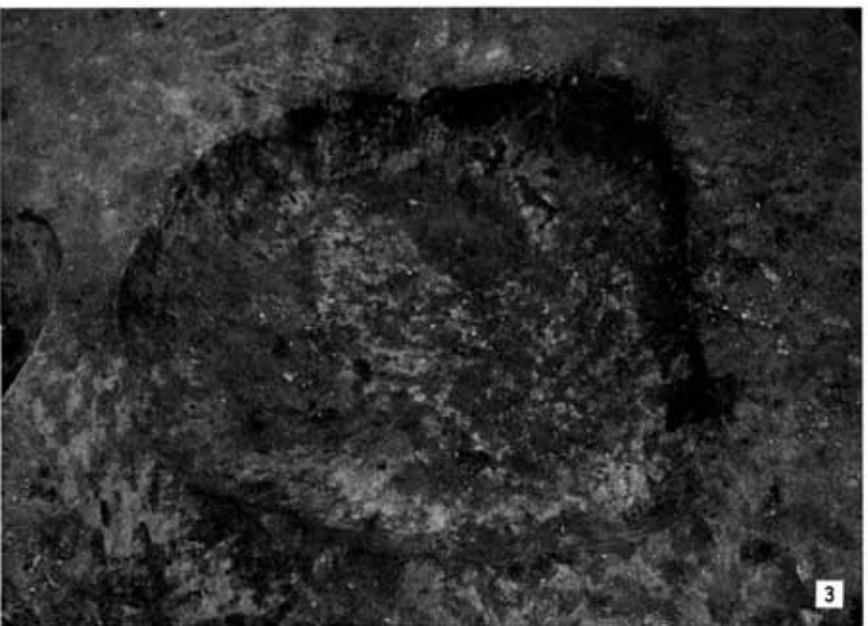


1．藤附A　SK038·SK039土壙〈西から〉　2．藤附A　SK043·SK045·SK047土壙〈南から〉

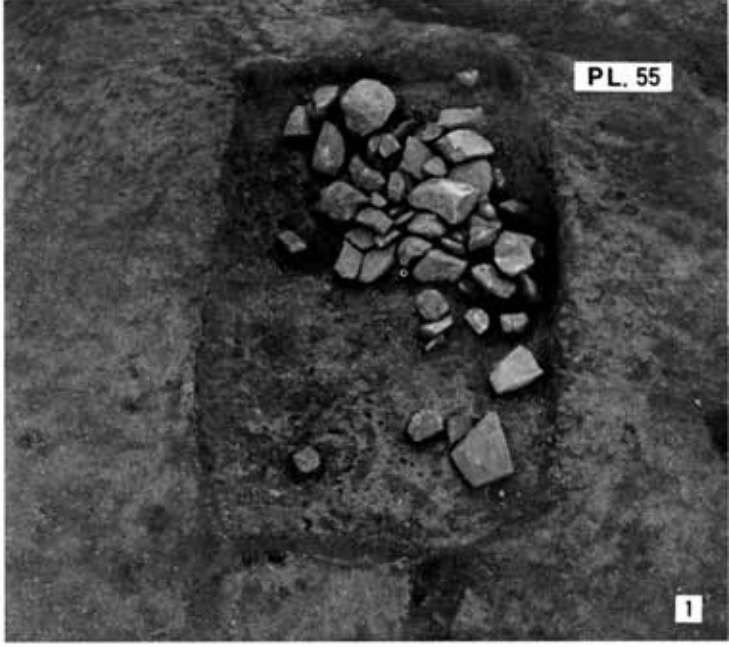
1．藤附A　SK030土壙
2．藤附A　SK047土壙
3．藤附A　SK048土壙

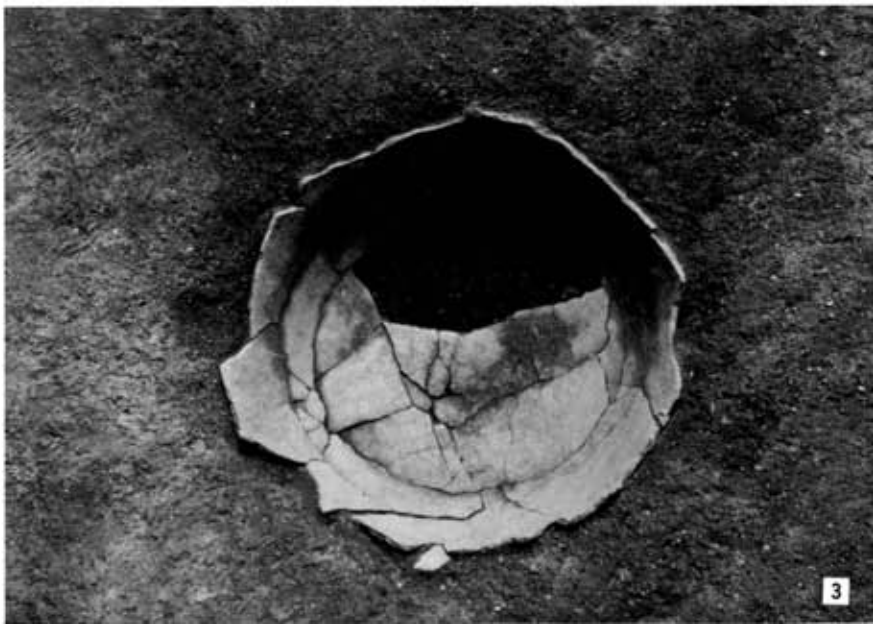






1．藤附A　SK049土壙
2．藤附A　SK052土壙
3．藤附A　SK053土壙





1．藤附A　SK058土壙
2．藤附A　SK064土壙
3．藤附A　SJ070甕棺墓

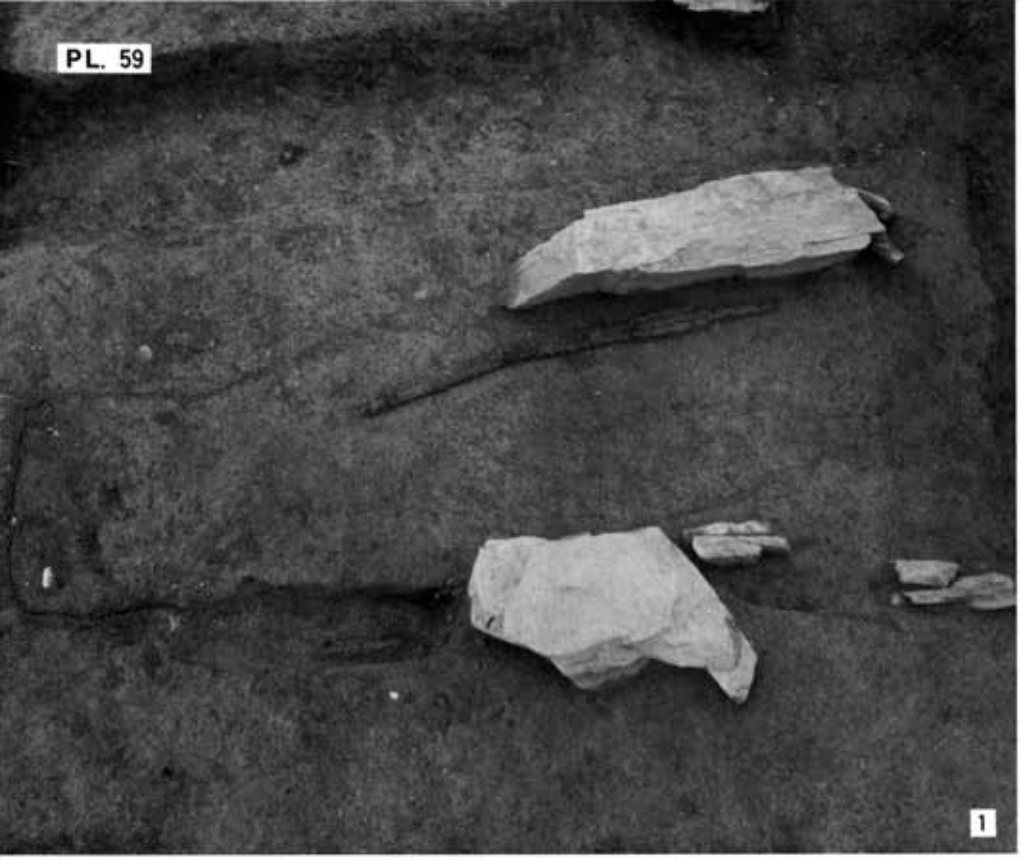
藤　附　K　遺　跡

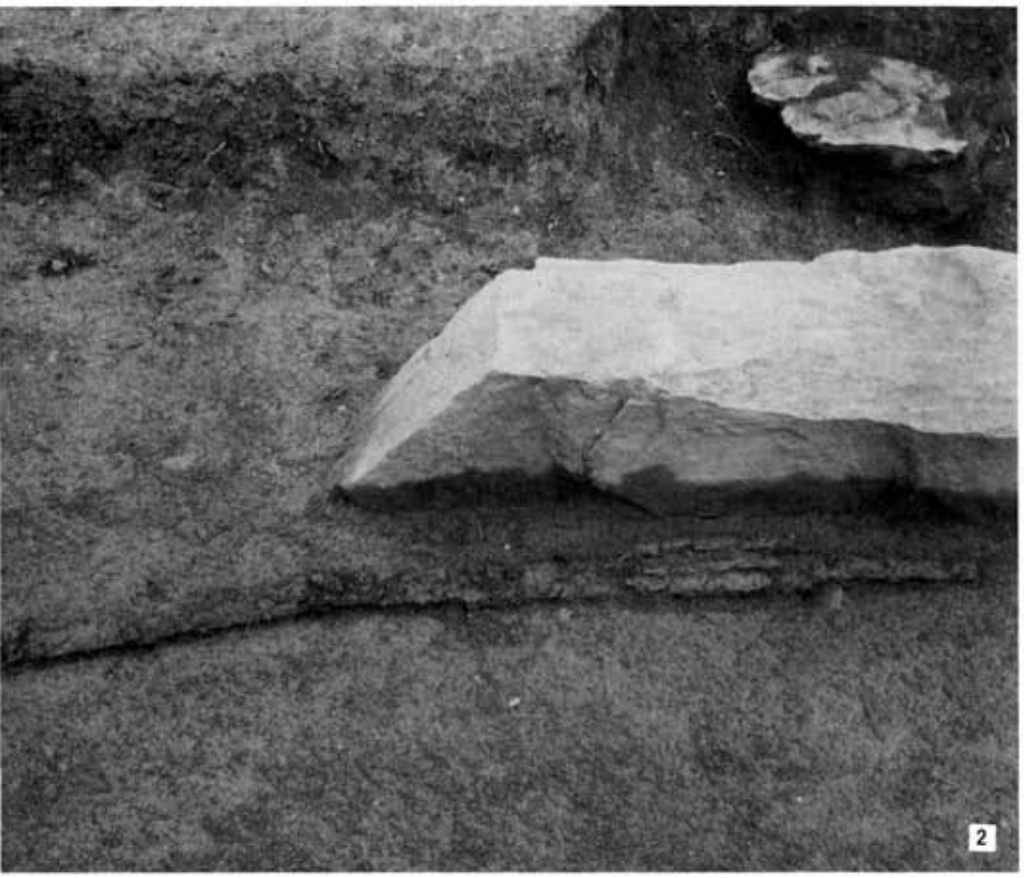
藤 附 K ・ E 〈航空写真〉

PL. 57

藤附K（藤附E・F・丸山・西原）〈西から〉

1．藤附K（航空写真）〈東から〉　2．藤附K　同　〈北から〉

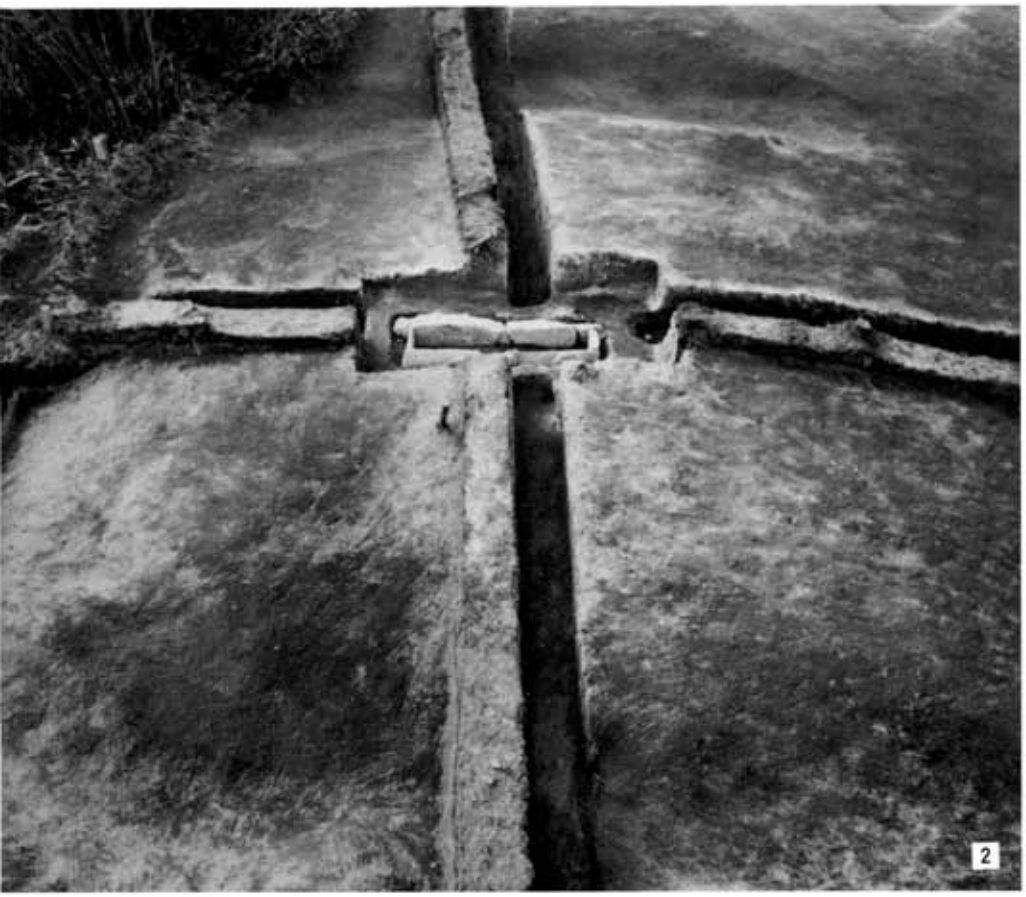




1．藤附K　ST001古墳竪穴式石室〈南から〉　2．藤附K　同　石室内遺物出土状況

藤　附　E　遺　跡

1．藤附E伐採後〈西から〉　2．藤附E調査後〈西から〉



1．藤附E全景〈北から〉　2．藤附EST006古墳全景〈北から〉

1．藤附ＥＳＴ006古墳石蓋〈北から〉　2．藤附ＥＳＴ006古墳箱式石棺〈北から〉

1．藤附E〈北から〉(52年度調査)　2．藤附EST002古墳周溝遺物出土状況

三　郎　山　遺　跡

三郎山・長尾〈航空写真〉

PL. 65

1．三郎山遠景〈南から〉　2．三郎山全景〈南から〉

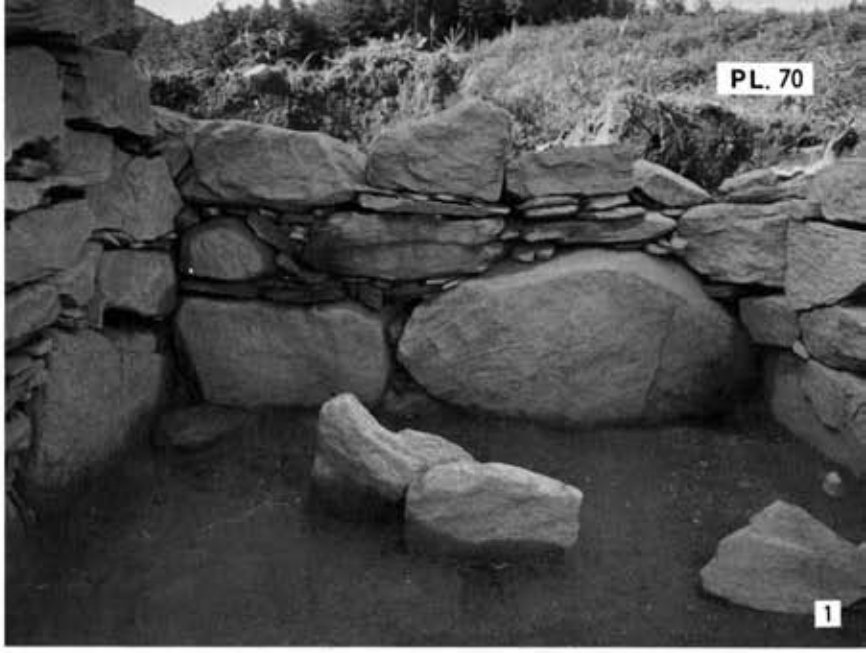
三 郎 山 全 景 〈航空写真〉

PL. 67

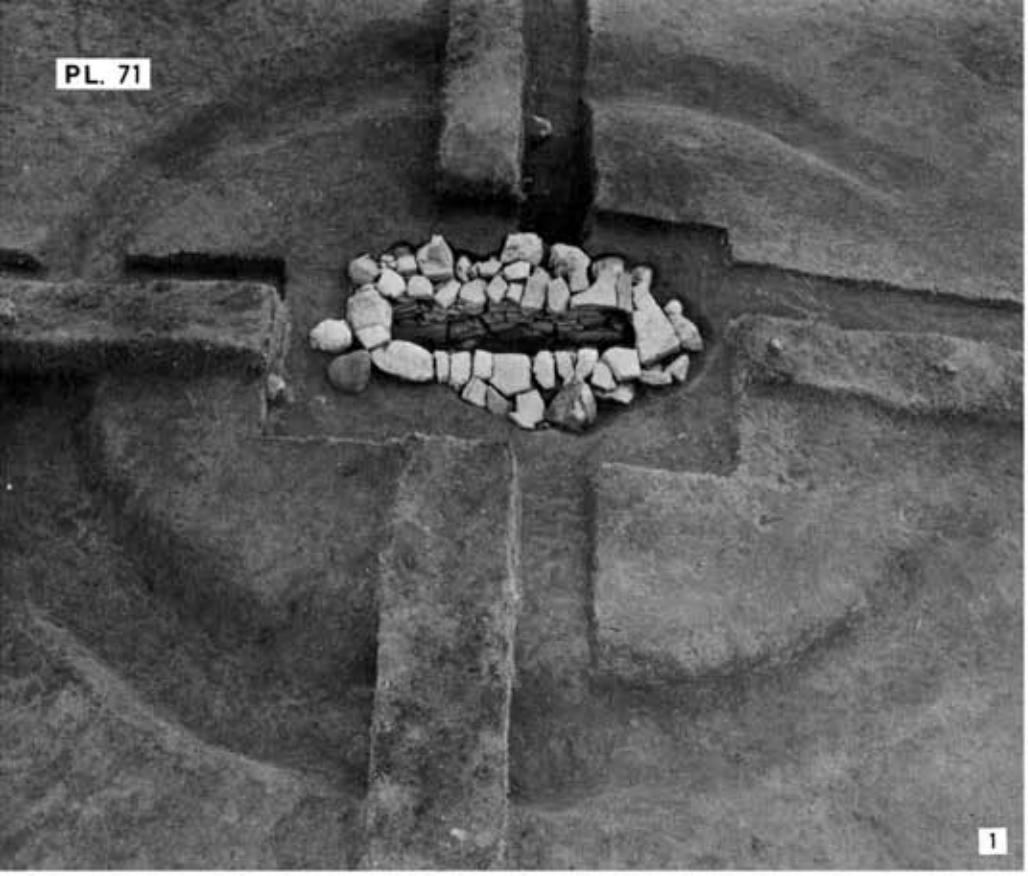
1．三郎山ST001古墳調査前〈南から〉　2．三郎山　同　全景〈南から〉

1．三郎山ＳＴ001古墳墳丘除去後の地山整形状態〈南から〉　2．三郎山 同 〈東から〉

1．三郎山ST001古墳
閉塞石〈南から〉
2．三郎山　同
閉塞石除去後〈南から〉
3．三郎山　同
玄門部〈北から〉



1．三郎山ST001古墳奥壁〈南から〉
2．三郎山　同　東側壁〈西から〉
3．三郎山　同　遺物出土状況〈西から〉



1．三郎山ST002古墳全景〈北から〉　2．三郎山　同　〈南から〉

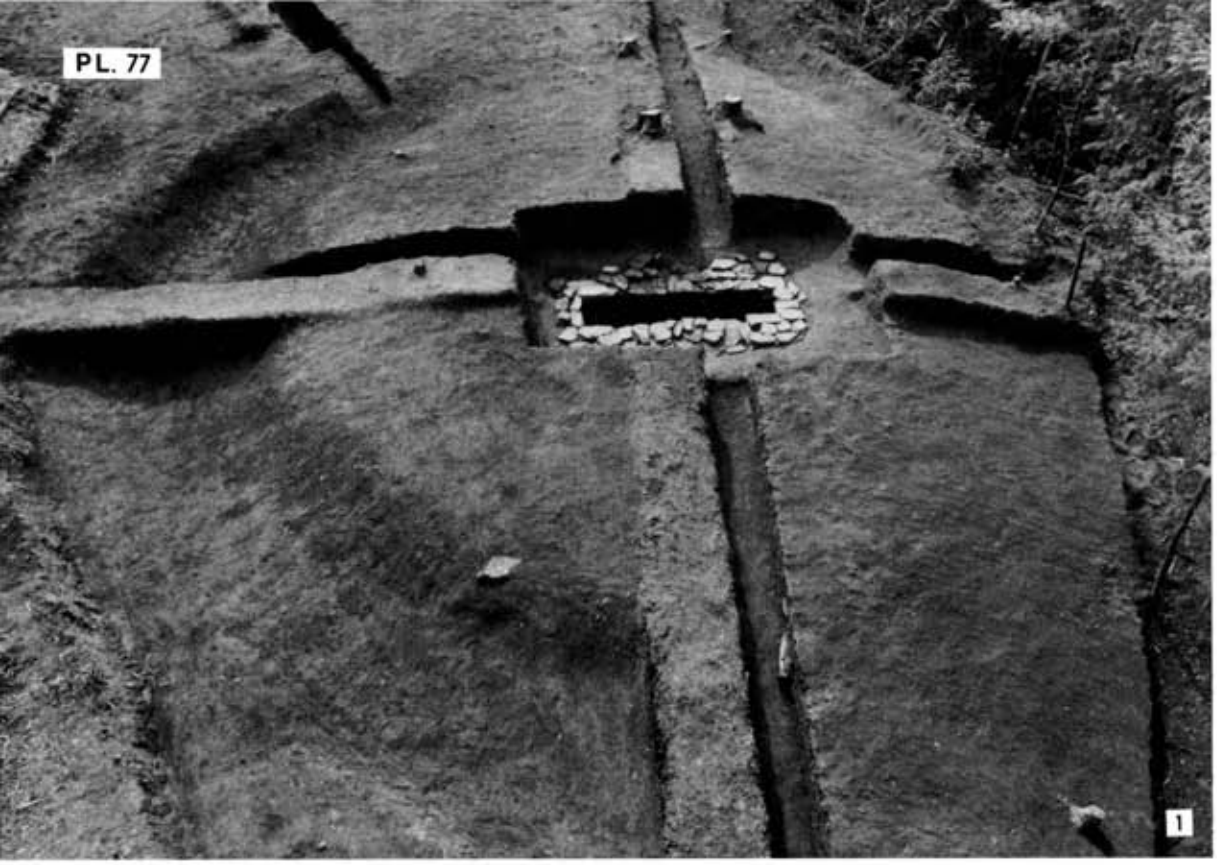
1．三郎山ST002古墳石蓋〈南から〉　2．三郎山　同　石棺系石室〈南から〉

1．三郎山ST002古墳東小口〈西から〉　2．三郎山 同 西小口〈東から〉

1．三郎山ST003古墳調査前〈南から〉　2．三郎山 同 全景〈東から〉

1．三郎山ST003古墳全景(中央)〈南から〉　2．三郎山 同 石棺系石室〈東から〉

1．三郎山ＳＴ003古墳北側壁〈南から〉　2．三郎山 同 南側壁〈北から〉



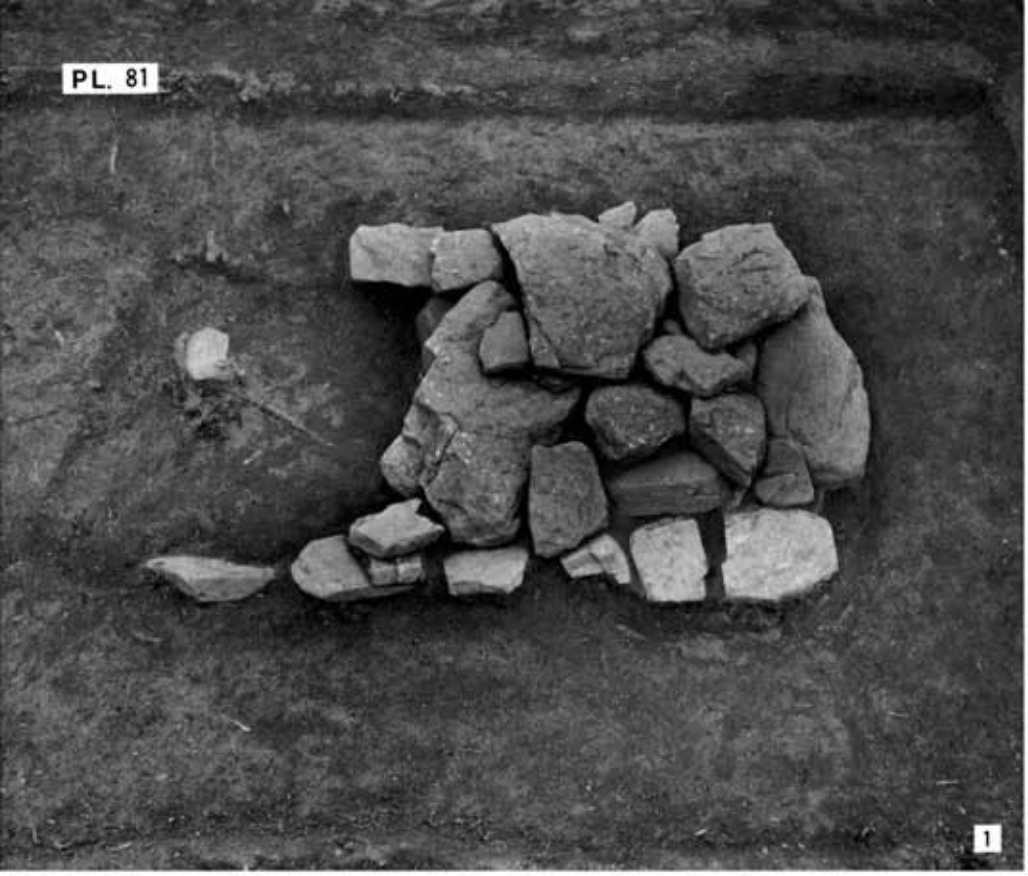
1．三郎山ST004古墳全景〈北から〉　2．三郎山　同　〈南から〉

1．三郎山ST004古墳石蓋〈北から〉　2．三郎山 同 竪穴式石室〈北から〉

1．三郎山ＳＴ004古墳北側壁〈南から〉
2．三郎山　同　南側壁〈北から〉
3．三郎山　同　西小口〈東から〉

1．三郎山ＳＴ005古墳全景〈南から〉　2．三郎山　同　〈南から〉

PL. 81



1．三郎山ST005古墳石蓋〈南から〉　2．三郎山 同 土壙〈南から〉

1．三郎山ST002·003·004古墳全景　2．三郎山SX006集石遺構〈南から〉

長　尾　遺　跡

長 尾 遠 景 〈航空写真〉 〈南から〉

1．長尾ＳＢ001掘立柱建物跡〈南から〉　2．長尾　同　〈北から〉

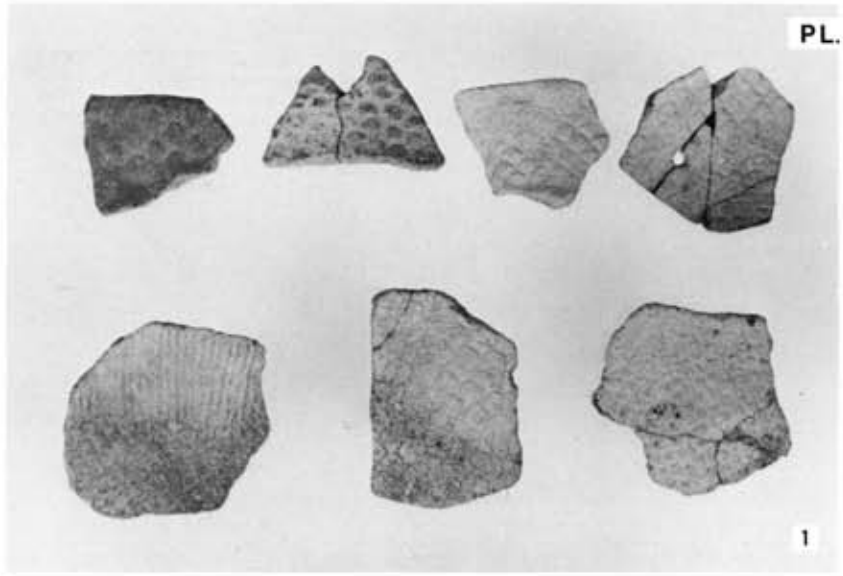
1

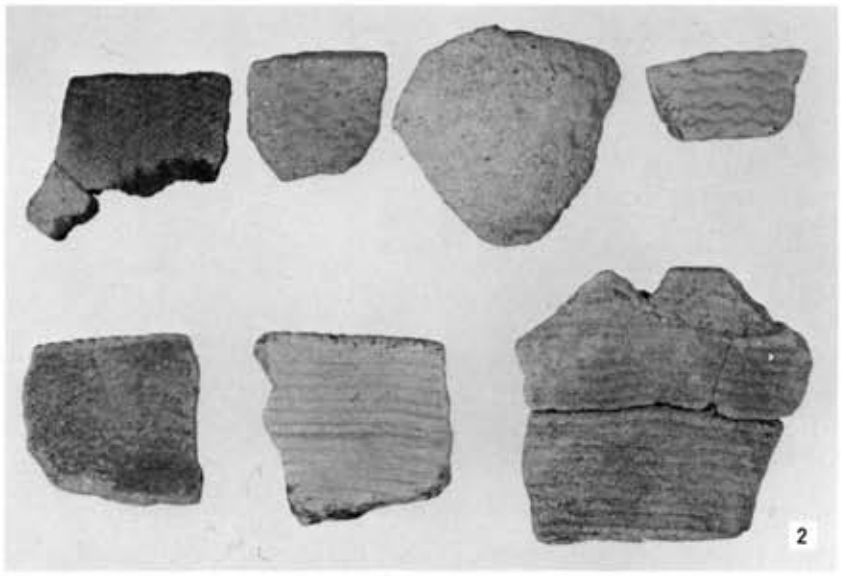
2

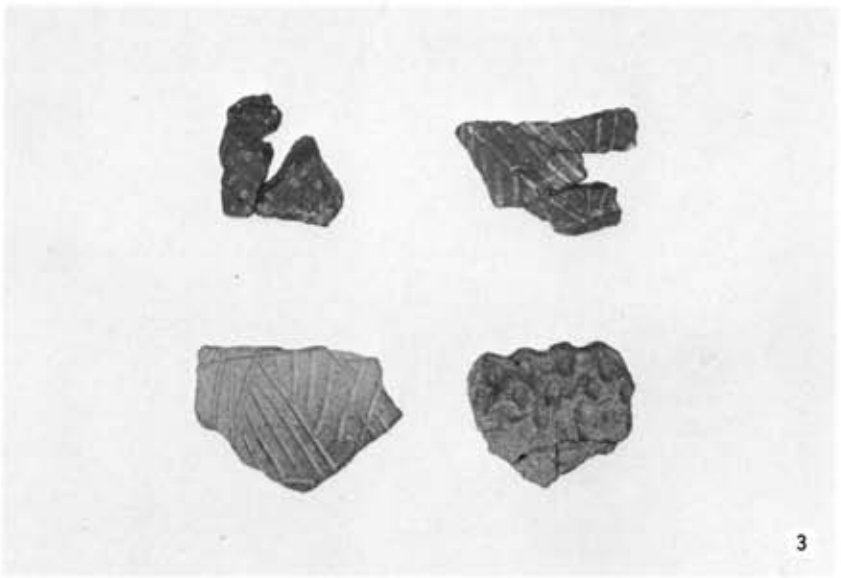
1．長尾全景〈西から〉　2．長尾SD003溝状遺構〈東から〉

図版Ⅱ　遺物

香　田　遺　跡

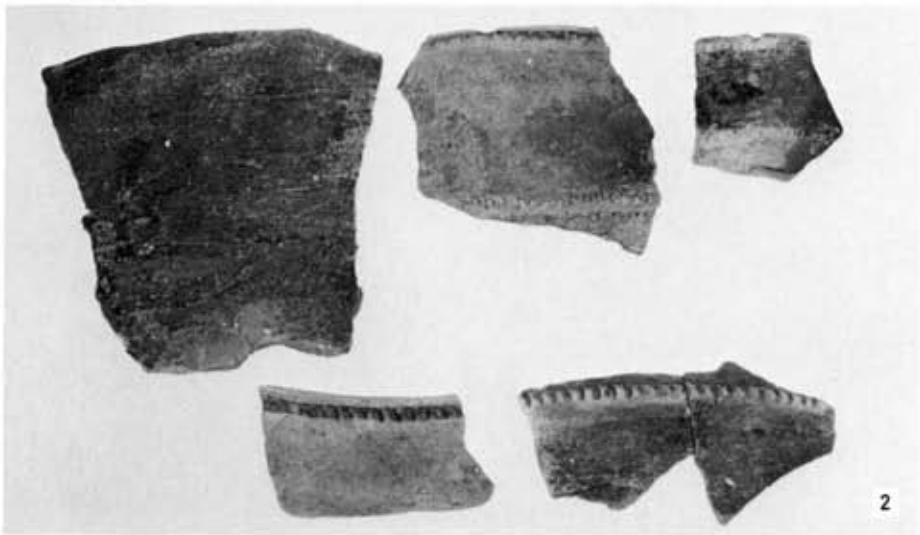


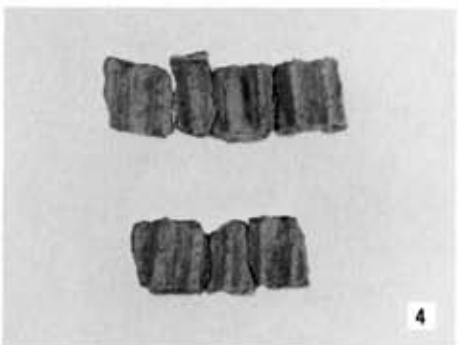




1～3　香田出土縄文土器

PL. 87





1～3　香田出土縄文土器　　5　香田出土土製品
4　　香田SX010支石墓出土土製品

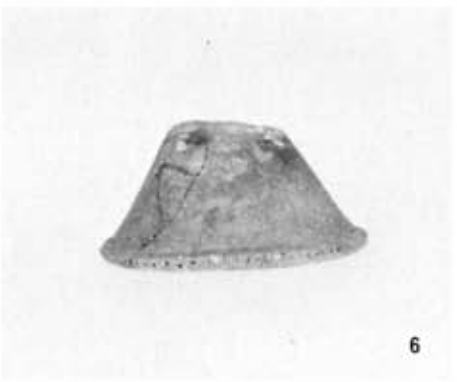
1

2

3

4

5

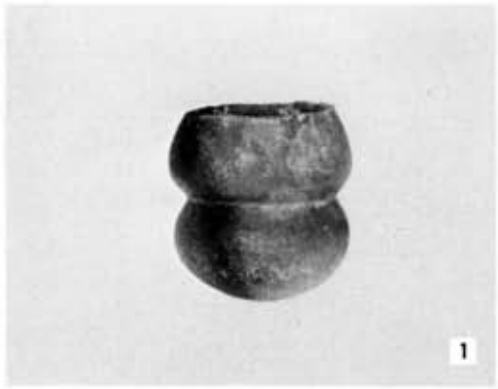

6

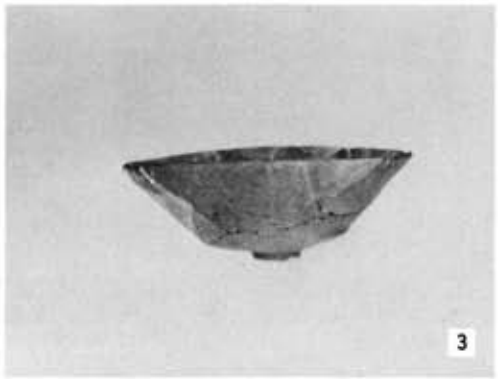
7

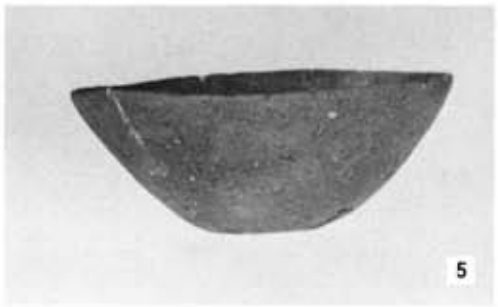
1・2　香田SX010支石墓出土縄文土器　3・6　香田出土縄文土器
4・5・7　香田SJ011壺棺墓出土縄文土器

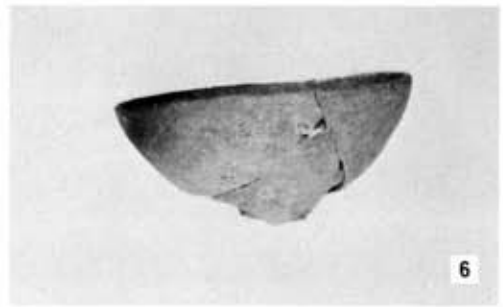
PL. 89

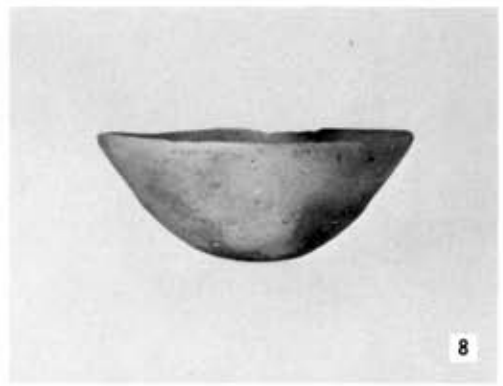
1～6　香田SB020住居跡出土土師器
7・8　香田SP014土壙墓出土土師器





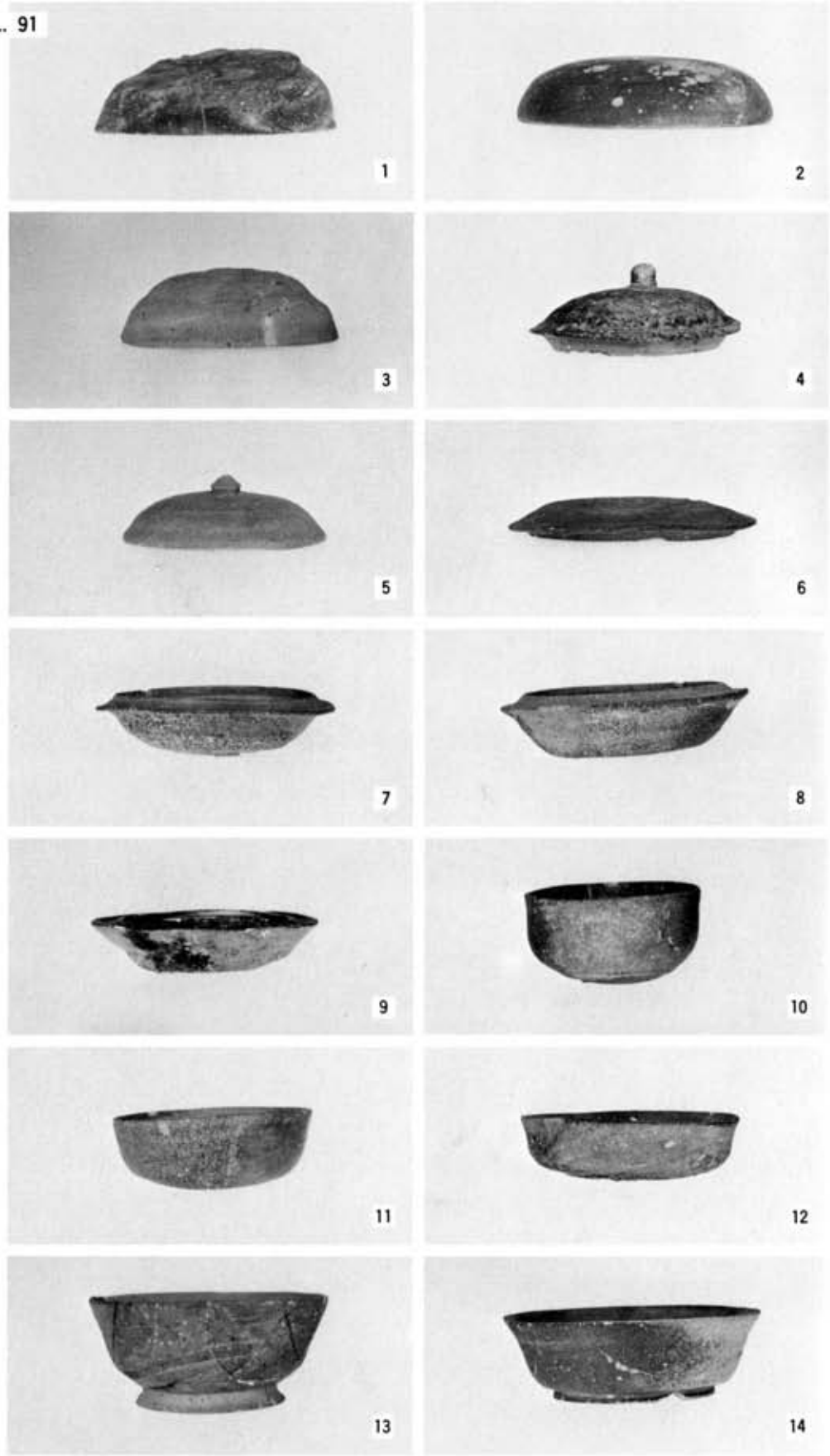






6 香田 SB022住居跡出土土師器
9 香田出土黒色土器
10 香田 SK024土壙出土土師器
その他 香田 SB020住居跡出土土師器

PL. 91



2・8　香田ST019古墳出土須恵器
14　　香田ST018古墳出土須恵器
9～11　香田出土須恵器
その他　香田ST016古墳出土須恵器

1

2

3

4

5

6

7

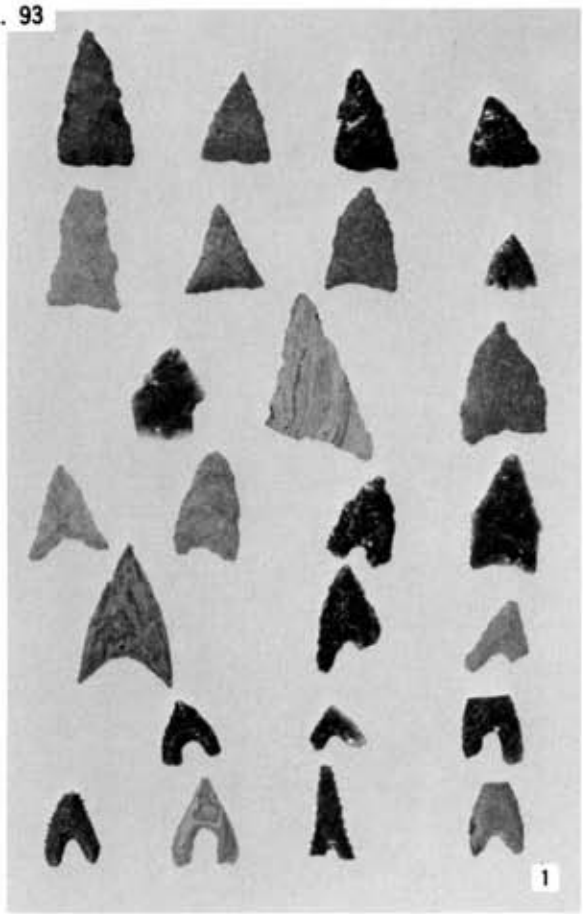
8

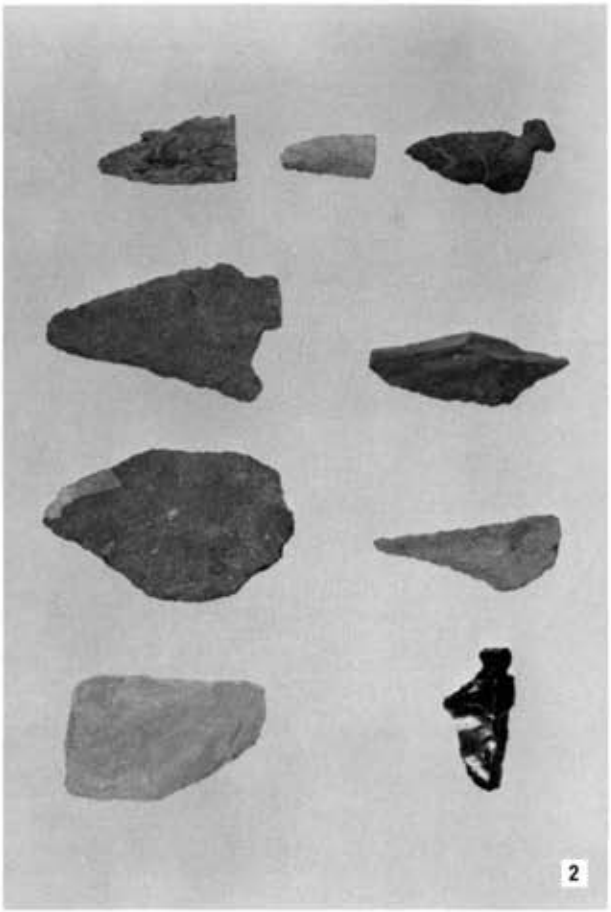
9

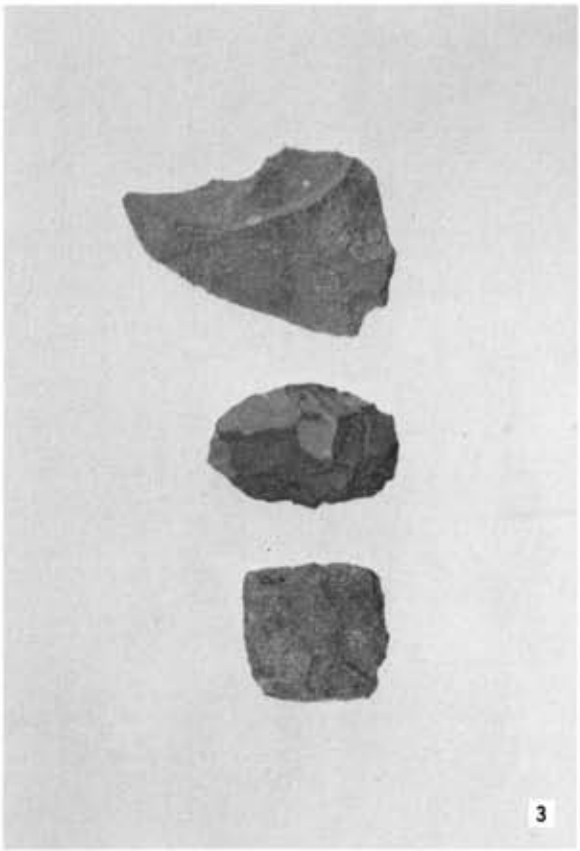
10

1～3・6～8・10　香田ST016古墳出土須恵器
4・5　香田ST019古墳出土須恵器

PL. 93

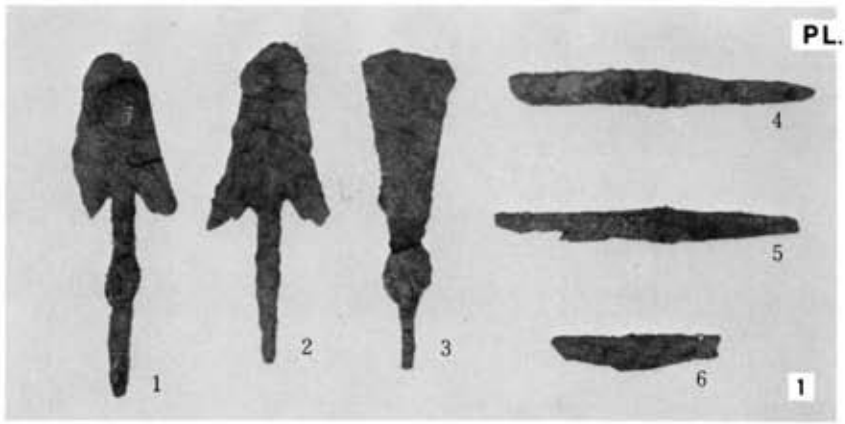

1

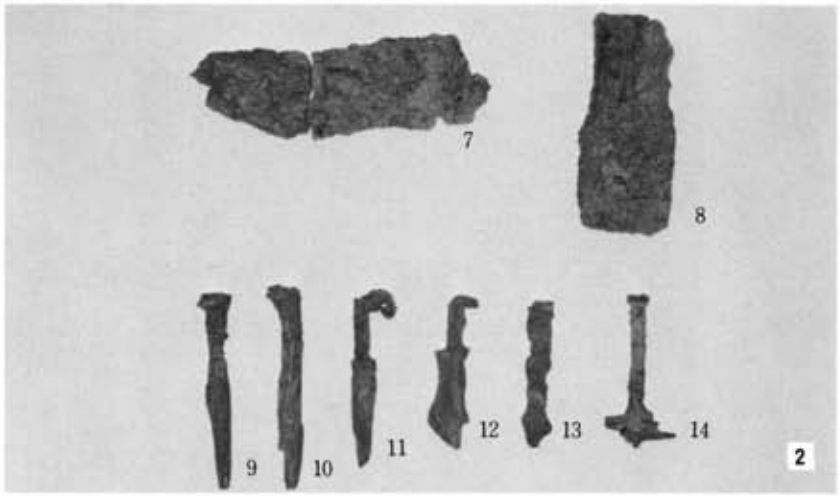

2

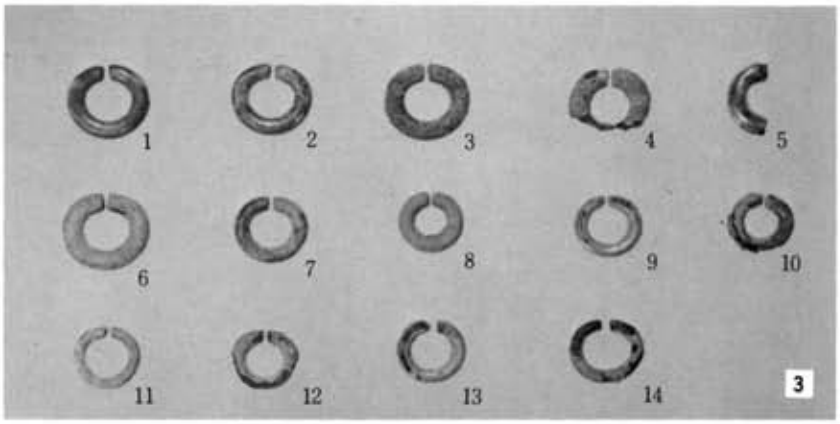

3

4

香 田 出 土 石 器



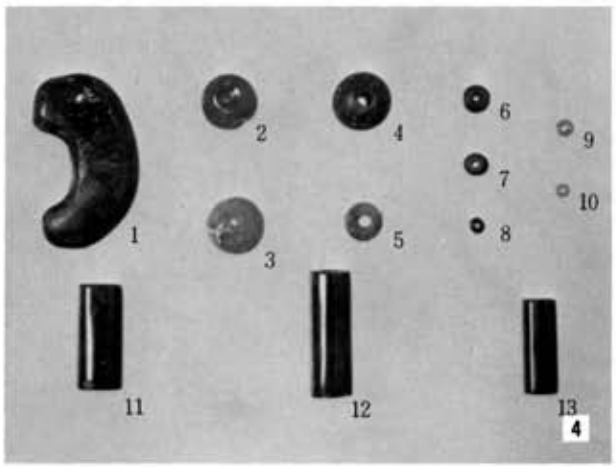




1・2 香田出土鉄器
ST016〈1～3・5〉
ST019〈4〉
SB020〈7〉
SP014〈9～14〉
埋土〈6・8〉

3 香田出土耳環
ST016〈4・8・9・10・13・14〉
ST019〈1・2・3・5・6・7・11・12〉

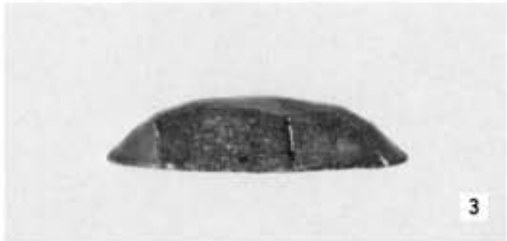
4 香田出土玉類
ST016〈1・3・4・6～12〉
ST019〈2・13〉
埋土〈5〉



獅々喰遺跡

1

2

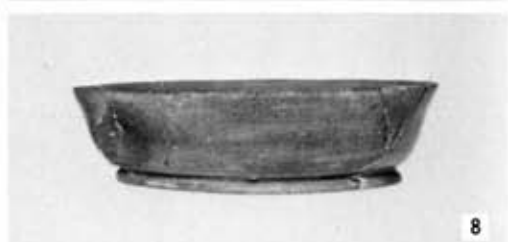

3

4

5

6

7


8

9

10

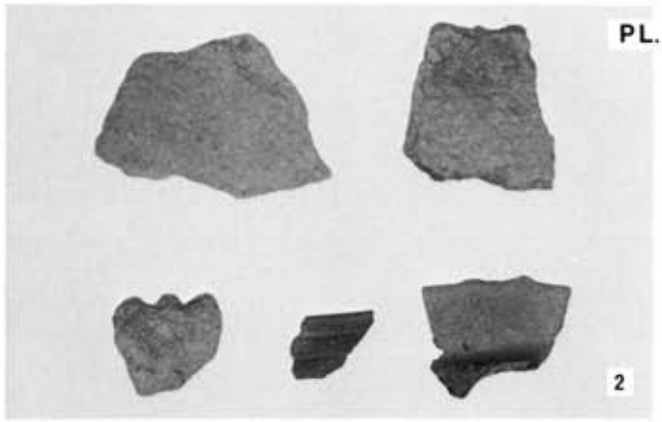
11

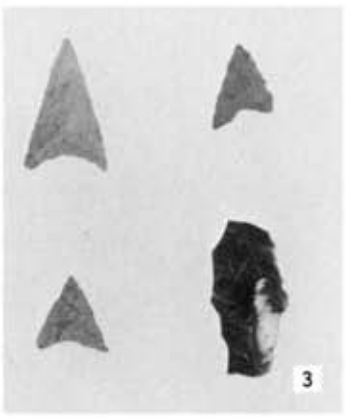
12

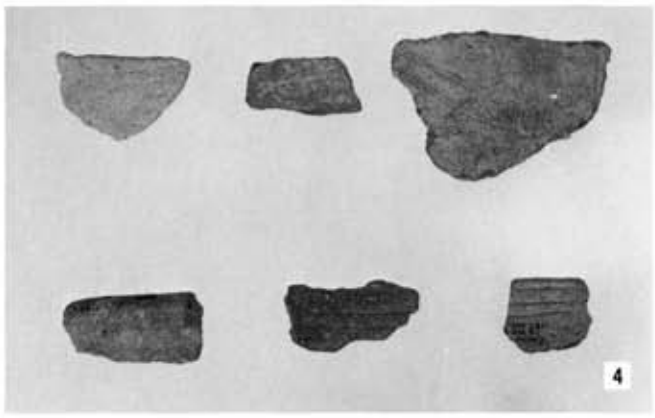
1・6 獅々喰出土須恵器（表土）
10・12 獅々喰ＳＴ001古墳出土土師器
その他 獅々喰ＳＴ001古墳出土須恵器

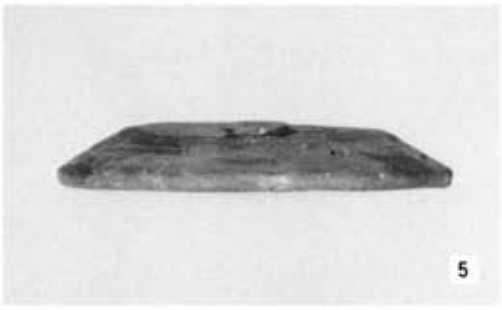
戦場遺跡
寺ケ里遺跡
白虎谷遺跡

1


2

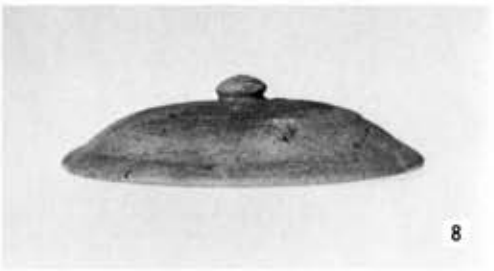

3


4


5

6

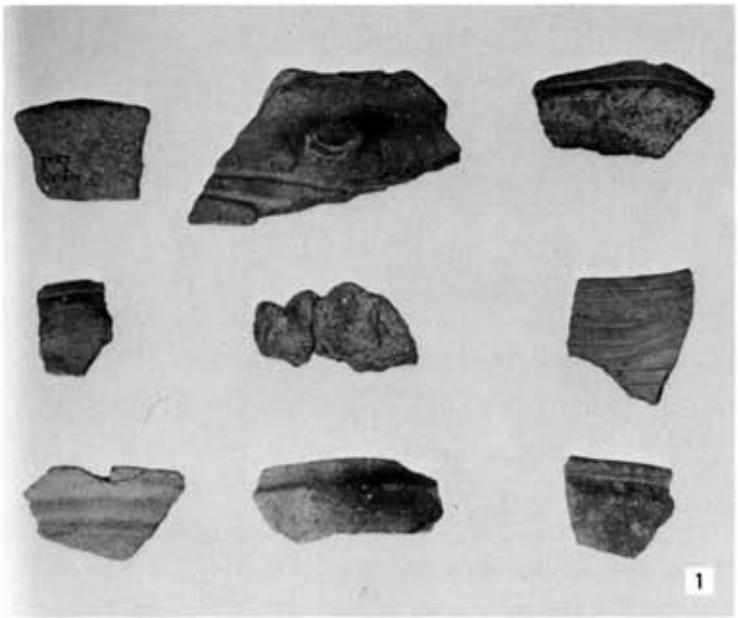
7

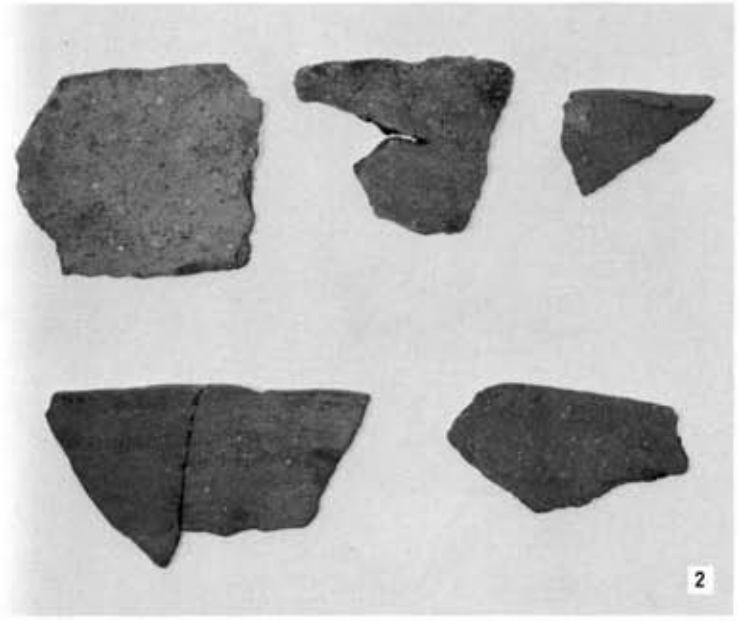

8

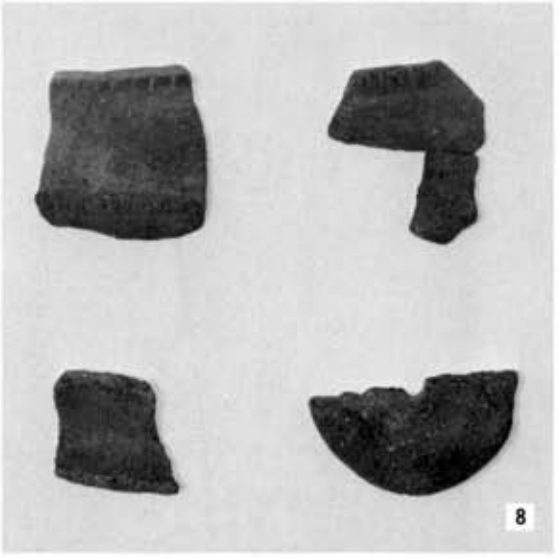
9

1　　戦場出土石器
2　　戦場出土縄文土器
3　　寺ケ里出土石器
4　　寺ケ里出土縄文土器
5・6　寺ケ里出土須恵器
7～9　白虎谷出土土器

藤　附　A　遺　跡



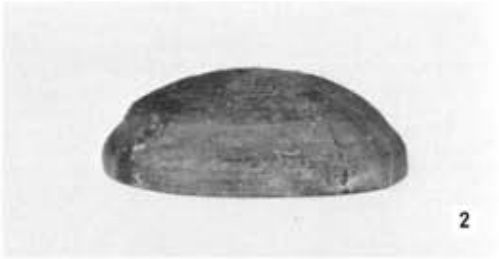




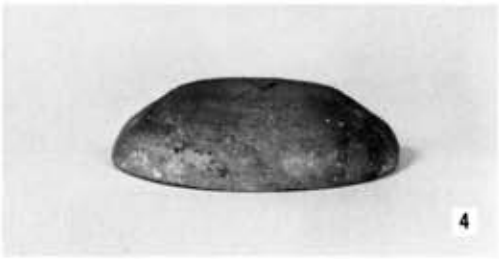
3・4 藤附A　SK001土壙出土縄文土器
その他 藤附A出土縄文土器

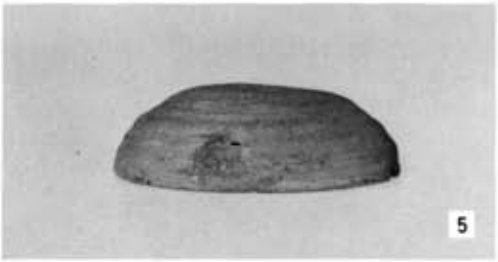
PL. 98

1


2

3


4


5

6

7

8

9

10

11

12

1　　藤附A　A地区表土須恵器
6・7・9・10　藤附A　ST002古墳出土須恵器
その他　　藤附A　ST007古墳出土須恵器

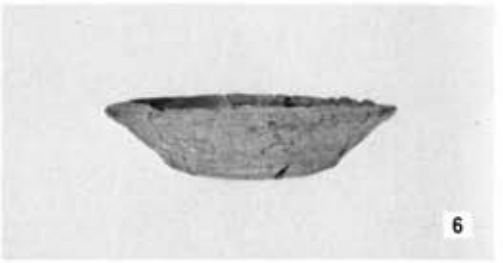
1

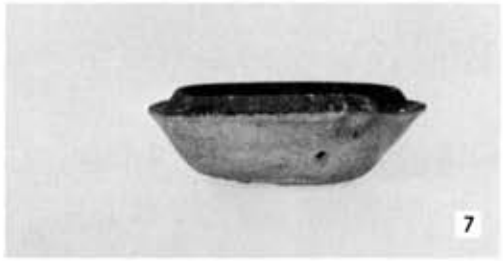
2

3

4

5


6


7

8

9

10

11

12

6・11 藤附A　ST002古墳出土須恵器
その他 藤附A　ST007古墳出土須恵器

PL. 100

1

2

3

4

5

6

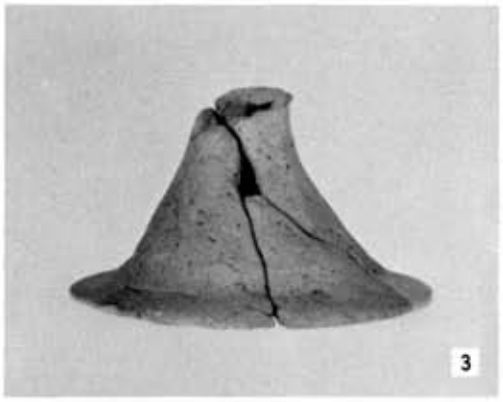
7

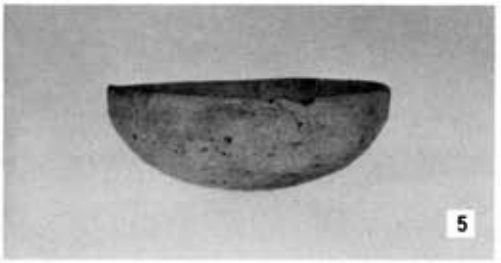
8

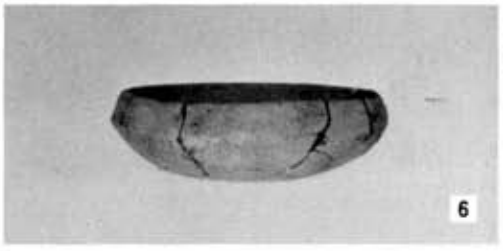
9

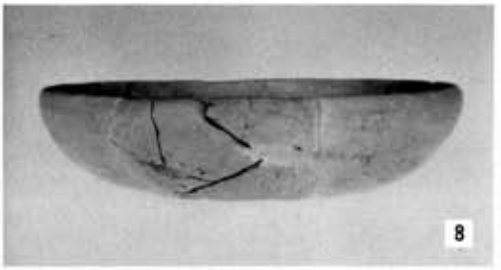
10

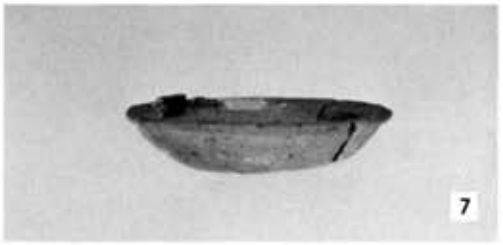
5・6 藤附A ST002古墳出土須恵器
その他 藤附A ST007古墳出土須恵器

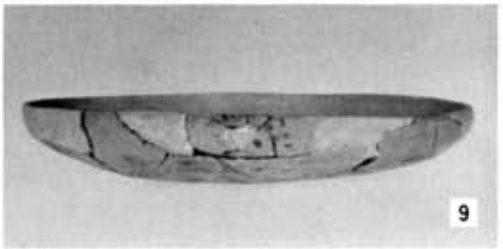






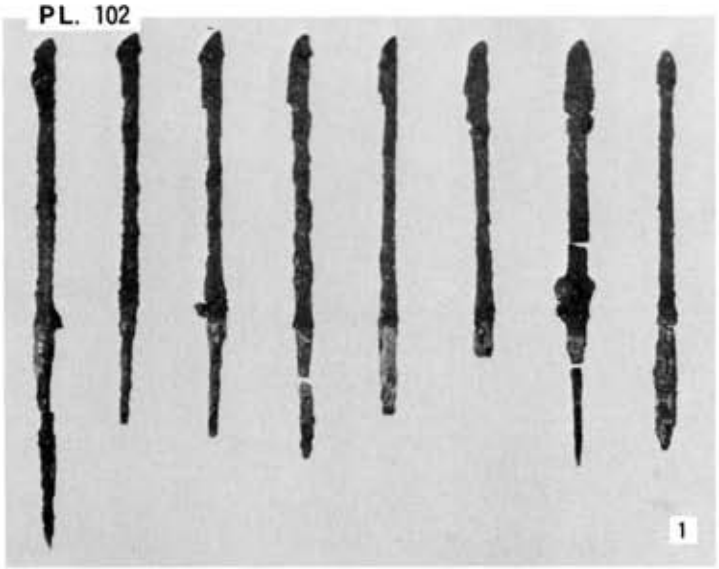


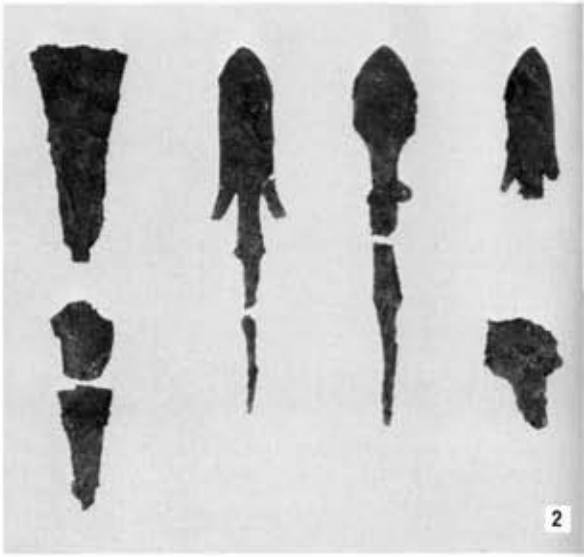


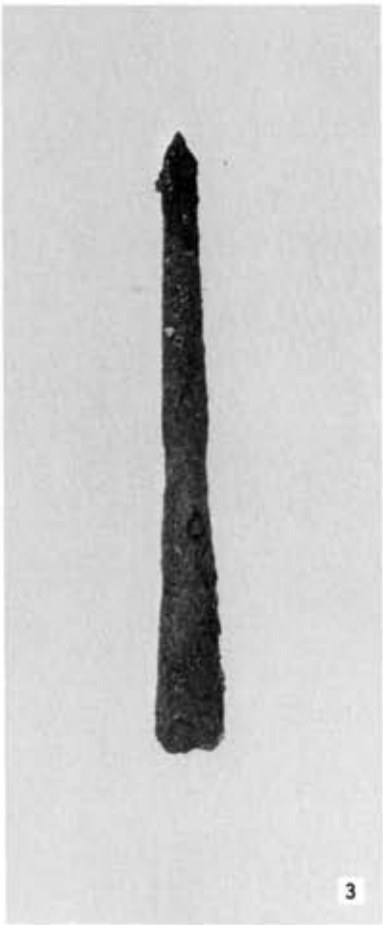


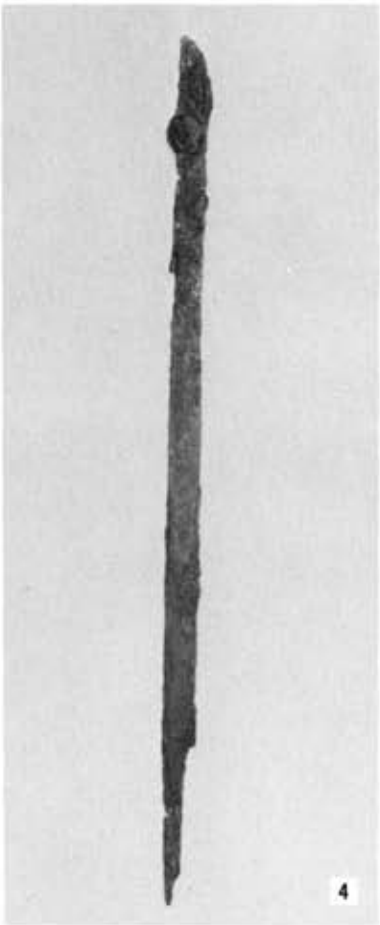
9　　藤附A　ST002古墳出土土師器
その他 藤附A　ST007古墳出土土師器

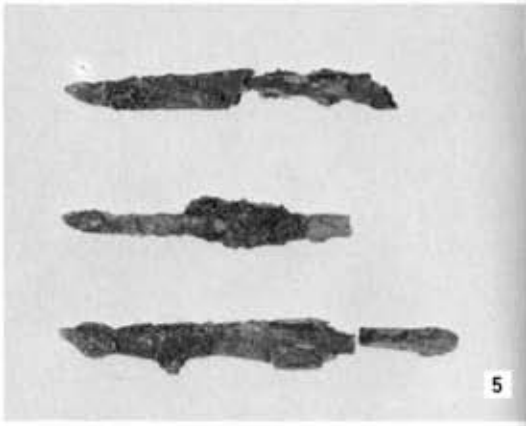
PL. 102

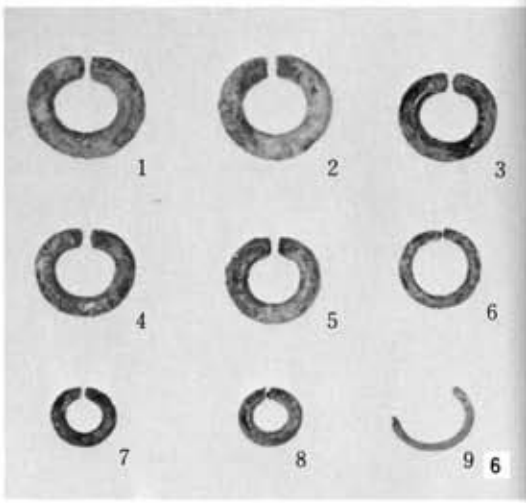




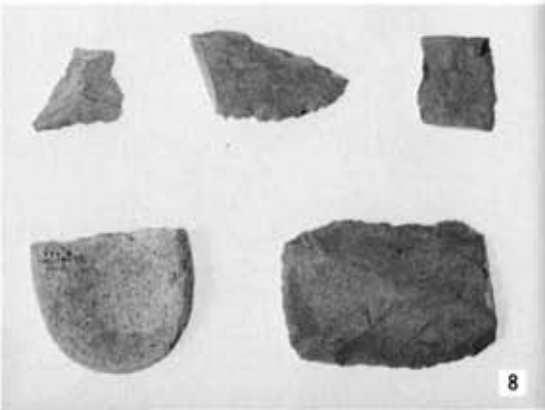








1～5 藤附A ST008古墳出土鉄器
6 藤附A出土耳環
ST002〈7・8・10〉
ST008〈そ の 他〉
7・8 藤附A出土石器



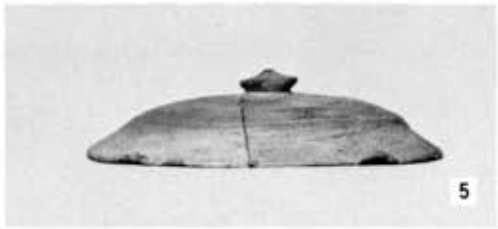
藤　附　K　遺　跡

1

2

3

4


5

6

7

8

9

10

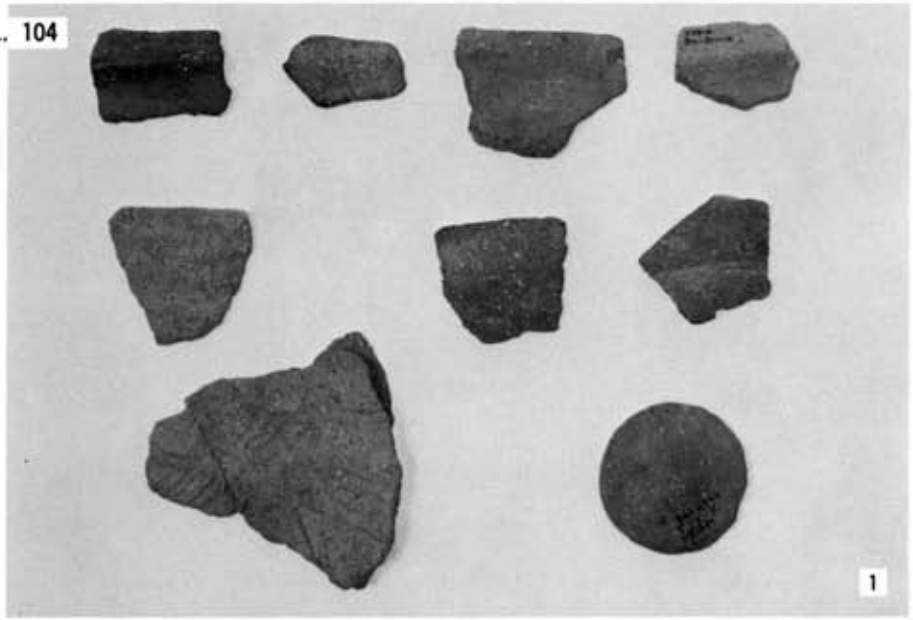
11

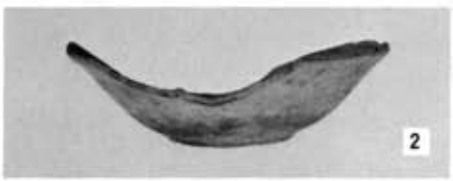
12

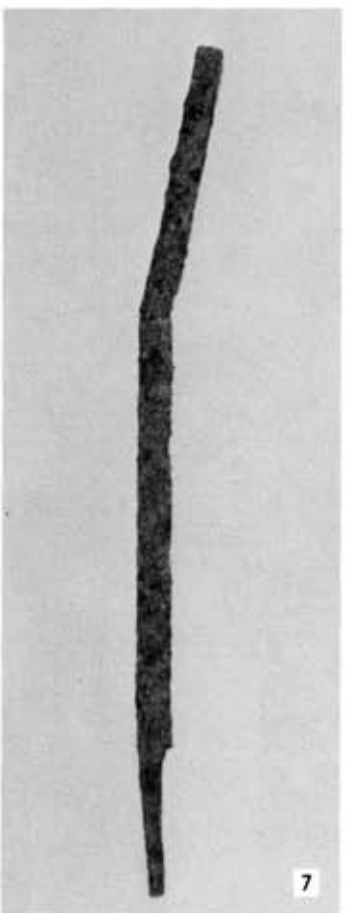
13

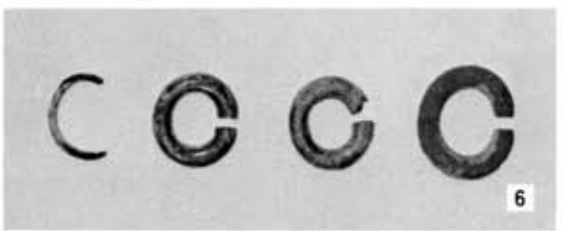
6・12・13 藤附K　ST001古墳出土須恵器
3・4　藤附K　ST002古墳出土須恵器
5・7・8・10・11 藤附K　ST003古墳出土須恵器
1　藤附K　ST001古墳出土土師器
2　藤附K出土土師器
9　藤附K西側水田出土須恵器

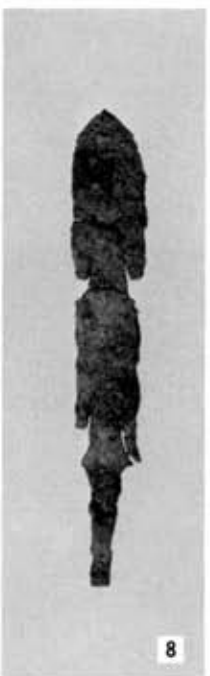
PL. 104











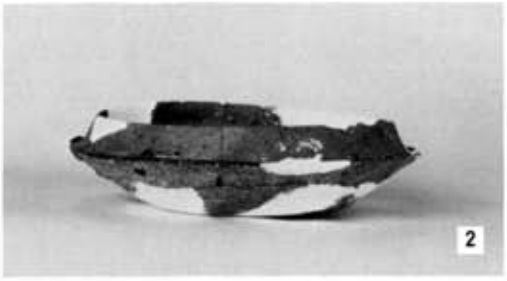
1　藤附K出土縄文土器
2～5　藤附K出土土師器
7・8　藤附K　ST001古墳出土鉄器
6　藤附K出土耳環

三　郎　山　遺　跡

三郎山ST001古墳出土須恵器

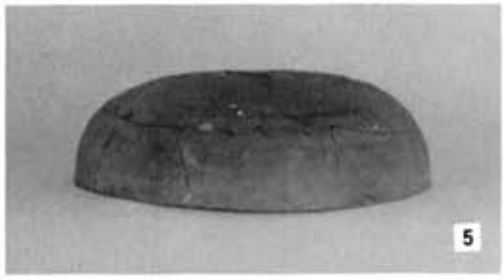
PL. 106

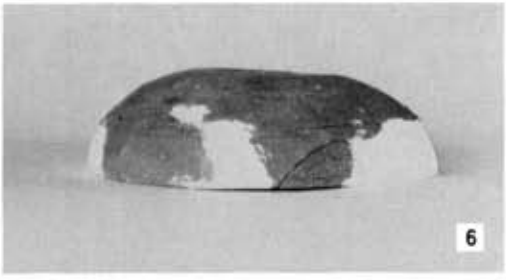
1


2

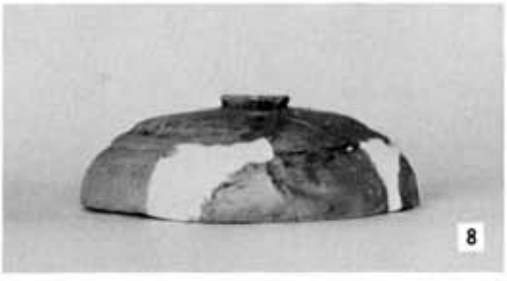
3

4


5


6

7

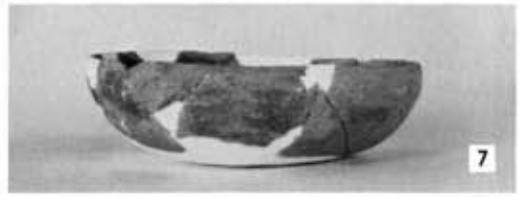

8

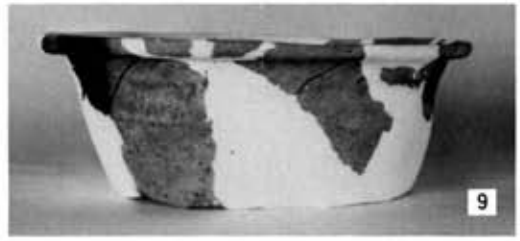
9

10

三郎山ＳＴ001古墳出土須恵器

11





1～5　三郎山ＳＴ001古墳出土須恵器
7～11　三郎山ＳＴ001古墳出土土師器

1 三郎山ＳＴ001古墳出土鉄器
2 三郎山出土石器

長　尾　遺　跡

1

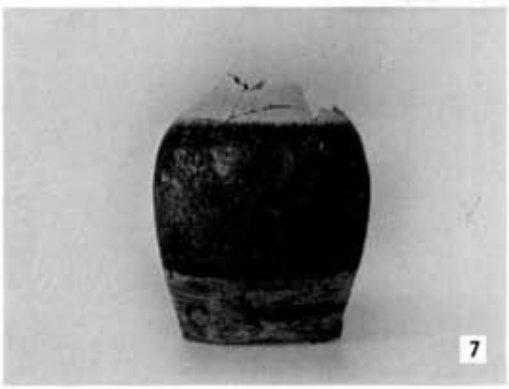
2

3

4

5

6


7

8

9

10

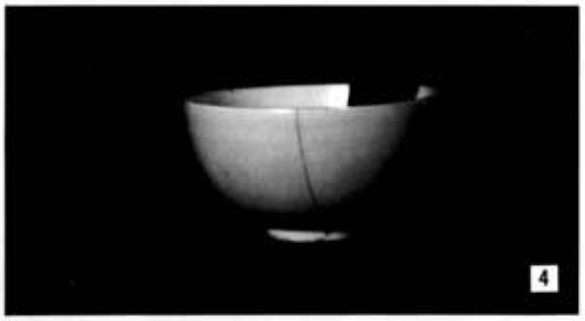
1・2 長尾出土土師器
その他 長尾出土陶器

PL. 110

1

2

3


4

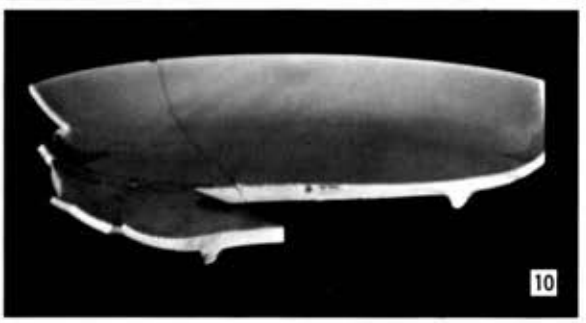
5

6

7

8

9


10

長 尾 出 土 磁 器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

長 尾 出 土 磁 器

佐賀県文化財調査報告書第57集

香　田　遺　跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告 2

昭和56年 3 月30日 印刷
昭和56年 3 月31日 発行

編集　佐賀県教育庁文化課
発行　佐賀市城内 1 丁目

印刷　(有) 弘 文 社 印 刷
佐賀市天神 2 丁目